

SZ121 (遺構：図 125、遺物：図 126)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、SZ116 とほぼ平面形が重複し、SZ116 の周溝底面で北溝と西溝を検出した。北溝と西溝の間は陸橋部を形成し、北溝東端はSZ118によって切られている。なお、南半分は攪乱のため滅失している。

方台部 攪乱や周辺遺構の削平によって、全形は不明である。墳丘は確認できなかったが、主体部の可能性がある土坑2基を確認した (SK03972、SK03973)。いずれも長軸約1.1mの不整楕円形を呈する。深さは約0.2mで壁面の傾斜は緩やかであり、底面は丸みを帯びる。いずれも主軸方向を東西方向に揃えるが、供献とみられる遺物は認められなかった。また、埋土は4層に分層でき、層界の凹凸が顕著で、下層にブロック土の混入が目立つことから、人為堆積といえる。

周溝 北溝は幅約1.6mで、断面形は底面が方台部側に偏ったV字形である。そのため、方台部側の壁面傾斜が急傾斜である。埋土は6層に分層でき、周溝外側から流入が著しい。西溝は幅約1.5m、深さ約0.5mで、壁面傾斜は緩やかだが、断面形はV字形を呈す。

遺物出土状況 北溝上層から摩滅した土器56点、西溝から土器73点が出土したが、いずれも細片である。また、北溝から縄文時代晩期後半の土器が出土した。

出土遺物 深鉢 (495～497) は、いずれも縄文時代晩期後半から末葉の土器と考えられる。495は口縁端部が肥厚し、肉厚な突帯の上を二枚貝により横長の押圧を加える。496は低い突帯上をユビにより押圧を加える。497は口縁端部に強い平坦面が認められる。

時期 出土遺物から時期の言及は困難だが、IV期のSZ118より先行するのでIV期以前と考えられる。

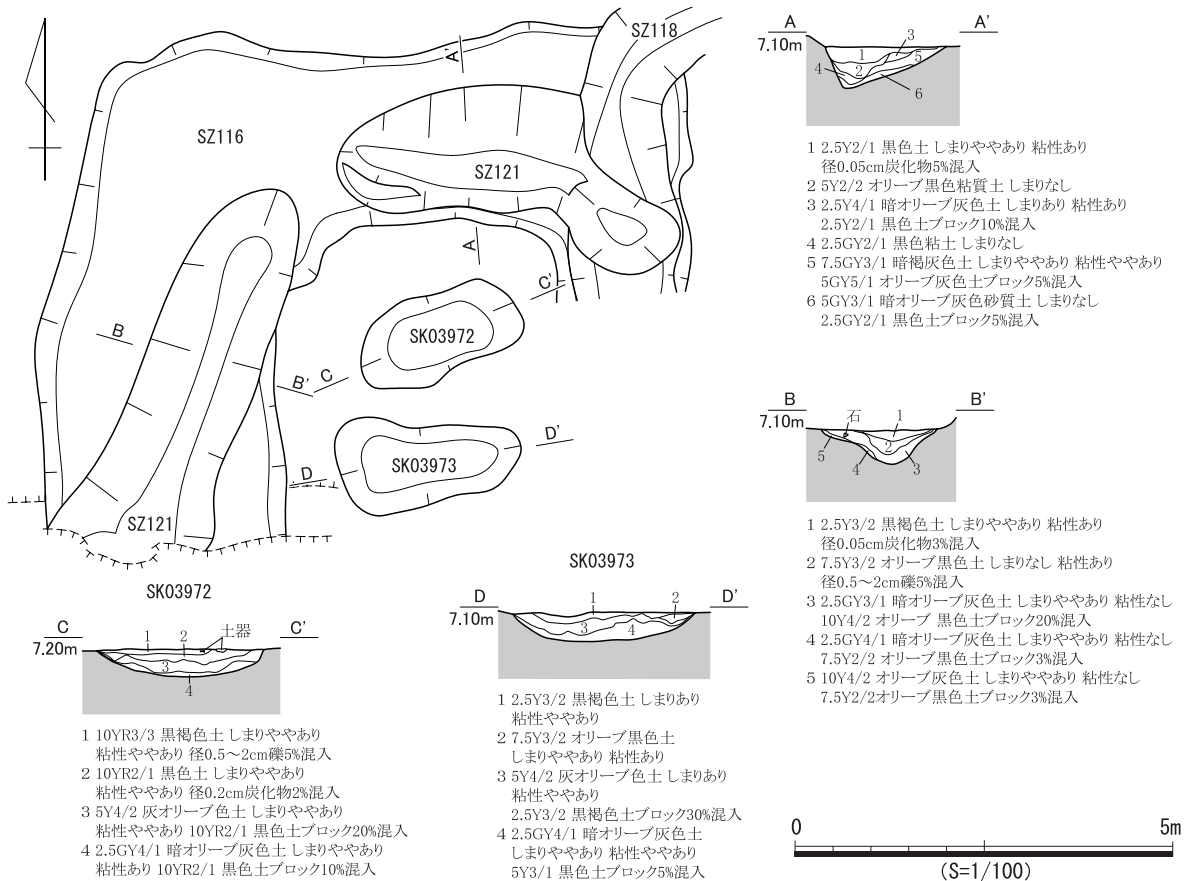


図 125 SZ121 遺構図

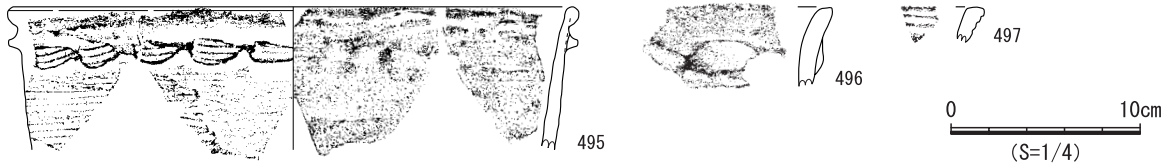


図 126 SZ121 遺物実測図

SZ122 (遺構：図 128、遺物：図 127)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西溝はSB230、東溝はSK03984掘削後にそれぞれ検出した。東西溝が平行するので周溝墓と判断し、SB232掘形底面北溝の深い部分は本遺構の北溝の痕跡かもしれない。

方台部 東西の各辺とも直線的だが、南北辺は不明である。規模は東西長約5.0mである。墳丘・主体部はSB232による削平のため確認できなかった。

周溝 東溝は北端を攪乱によって滅失しているが、東西溝ともに北端、南端が途切れ四隅切れの周溝墓の可能性がある。東溝は幅約1.3m、深さ約0.4mで壁面傾斜が緩やかである。4層の埋土が認められる。西溝は幅約0.7m、深さ約0.3mである。東溝と比べると幅が狭く、単層であった。

遺物出土状況 東溝上層から土器73点、西溝から土器5点が出土した。大半がVI期～VII期の土器であり、周辺の竪穴住居等の構築・整地時に混入した可能性がある。なお、縄文時代晩期の土器片もわずかに出土した(498、499)。

出土遺物 498、499ともに縄文時代晩期後半の土器である。498は変容壺、499は深鉢であろう。498は胴部片で突帯上に貝による押し引きが認められる。499には沈線が認められる。

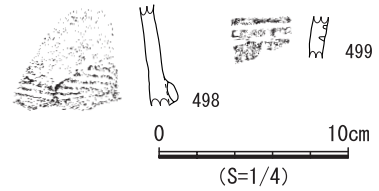


図 127 SZ122 遺物実測図

時期 遺構の重複関係からV期以前といえるが、四隅切れの方形周溝墓の可能性があるため、IV期以前と考える。

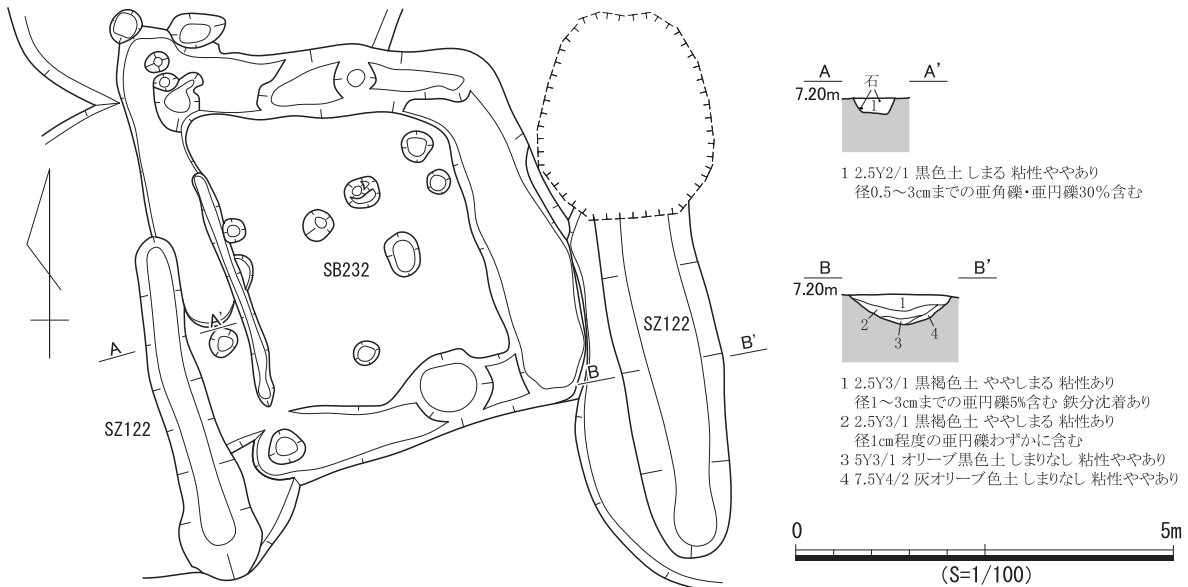


図 128 SZ122 遺構図

SZ123 (遺構：図130、遺物：図129)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、SB200とSK03683に切られ、SZ119を切る。SB200の床面で、コの字形にめぐる溝の西半分を検出し、溝の平断面形から方形周溝墓と判断した。

方台部 各辺とも不整形で、残存する東西長は約3.3mを測る。墳丘・主体部は確認できなかった。

周溝 南西隅部は比較的整っている。南東隅部は不整形で、東溝が北東方向に伸びる。東溝は幅約1.5m、深さ約0.3mで断面形は逆台形を呈す。底面は平坦で、その幅が約1.2mと広い。5層の堆積が認められ、ブロック土の混入や層界の凹凸が顕著であることから人為堆積の可能性が高い。南溝は幅約1.2m、深さ約0.3mで3層の堆積が認められる。断面形は逆台形である。

遺物出土状況 周溝埋土上層を中心に土器519点が出土した。土器の時期は多くがVI期～VII期にあたり、埋土の状況から周辺の竪穴住居等の構築・整地時に混入した可能性が高い。

出土遺物 500はVI期～VII期の鉢A4b類。口縁部がかかるく外反し、頸部直下に刺突文が認められる。501はV期～VI期壺K類胴部片。丁寧なミガキがあり、細い沈線による複合鋸歯文が認められる。

時期 出土遺物からの言及は困難であるが、IV期のSZ119より後出し、V期のSB200に先行することから、IV期～V期の可能性がある。

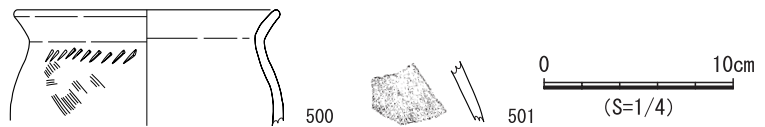


図129 SZ123 遺物実測図

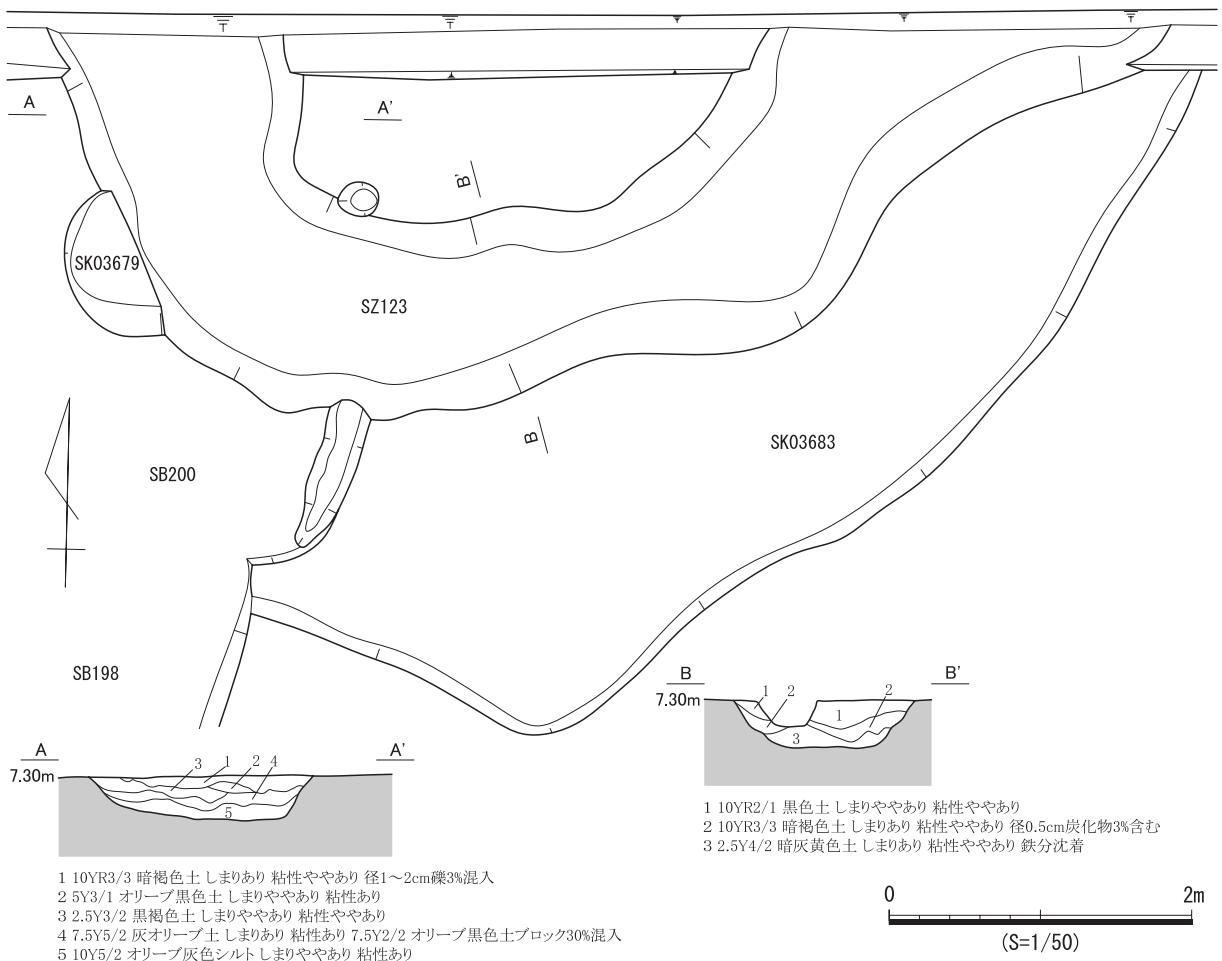


図130 SZ123 遺構図

SZ124 (遺構：図132、遺物：図131)

検出状況 西部東側北寄り、攪乱によって寸断された3辺の周溝を検出した。北溝は予想される範囲が攪乱範囲内にあり、不明である。南溝はVI期～VII期のSK03946より先行する。

方台部 攪乱によって不明な部分が多いが、東西辺は比較的直線的である。東西長は約4.2m、南北長は推定約5.2mで南北に長い長方形を呈す。墳丘・主体部は認められなかった。

周溝 各周溝とも攪乱によって寸断され、全形は不明だが、残存部位の底面が標高6.8m程度にそろい、断面形も逆台形である。西溝は幅約0.8m、深さ約0.4mで、南北両端が途切れる。南溝は西端が途切れ、東端は攪乱のため不明である。東溝は幅約0.6m、深さ約0.3mで、南端が途切れ、北端は攪乱のため不明である。残存部位からみて、四隅切れと考えられる。

遺物出土状況 北西溝から土器109点、石器類2点、南西溝から土器20点、南東溝から土器56点、石器類2点が出土した。いずれも上層出土で、その多くがVI期～VII期の土器にあたる。供献土器や特徴的な出土状況を示す遺物は認められなかった。

出土遺物 502はVI期～VII期の土器小片。突帯の形状からVI期～VII期と判断し、壺A類の胴部突帯と類似する。小片は壺胴部ではなく、口縁部片であるため、全形は不明である。

時期 出土遺物の多くが上層出土であるため時期の言及が困難である。しかし、四隅切れであることからIV期以前と考える。

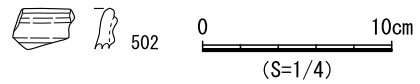


図131 SZ124 遺物実測図

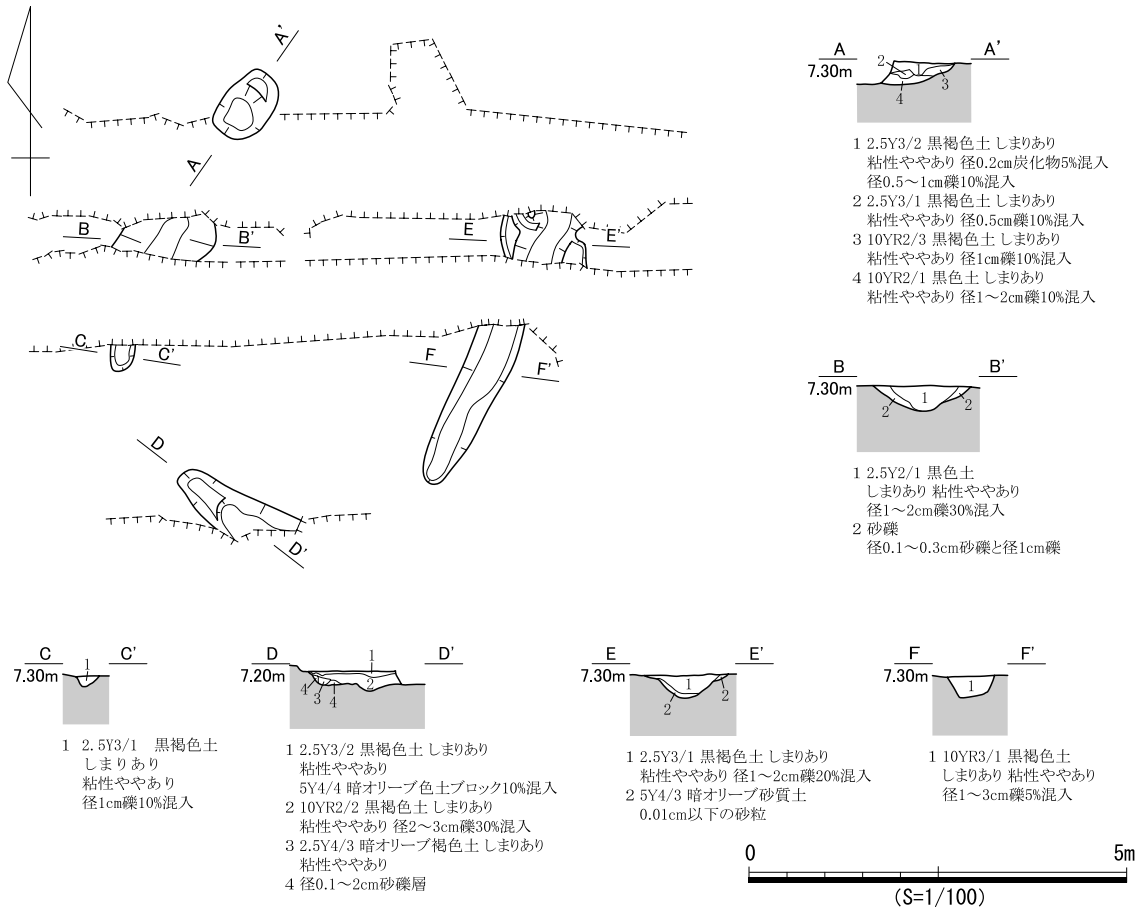


図132 SZ124 遺構図

SZ125 (遺構：図133)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SK04195などの周辺土坑を完掘した後に検出した。西溝は単独、北溝は逆L字に屈曲する溝として検出した。また、南溝はSZ126北溝に切られ、北・東溝はSZ127の周溝と共有する。

方台部 東西辺は平行するものの、北辺はやや北西から南東に傾き、南辺は逆に北東から南西へ傾きやや湾曲する。東西約3.3m、南北約4.5mの規模である。北東角部のみ連続し、その他は陸橋状となる。墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝 北溝及び東溝は逆L字状に北東部で連続するが、各辺中央部の深さが0.44mと0.18mであるのに対し、連結部は浅い。西溝と南溝は連続しない。それぞれ中央部付近で西溝幅1.2m、深さ0.22m、南溝が幅1.4m、深さ0.34mとなる。壁面は東溝の傾斜がやや急であるが、その他はいずれも極めて緩

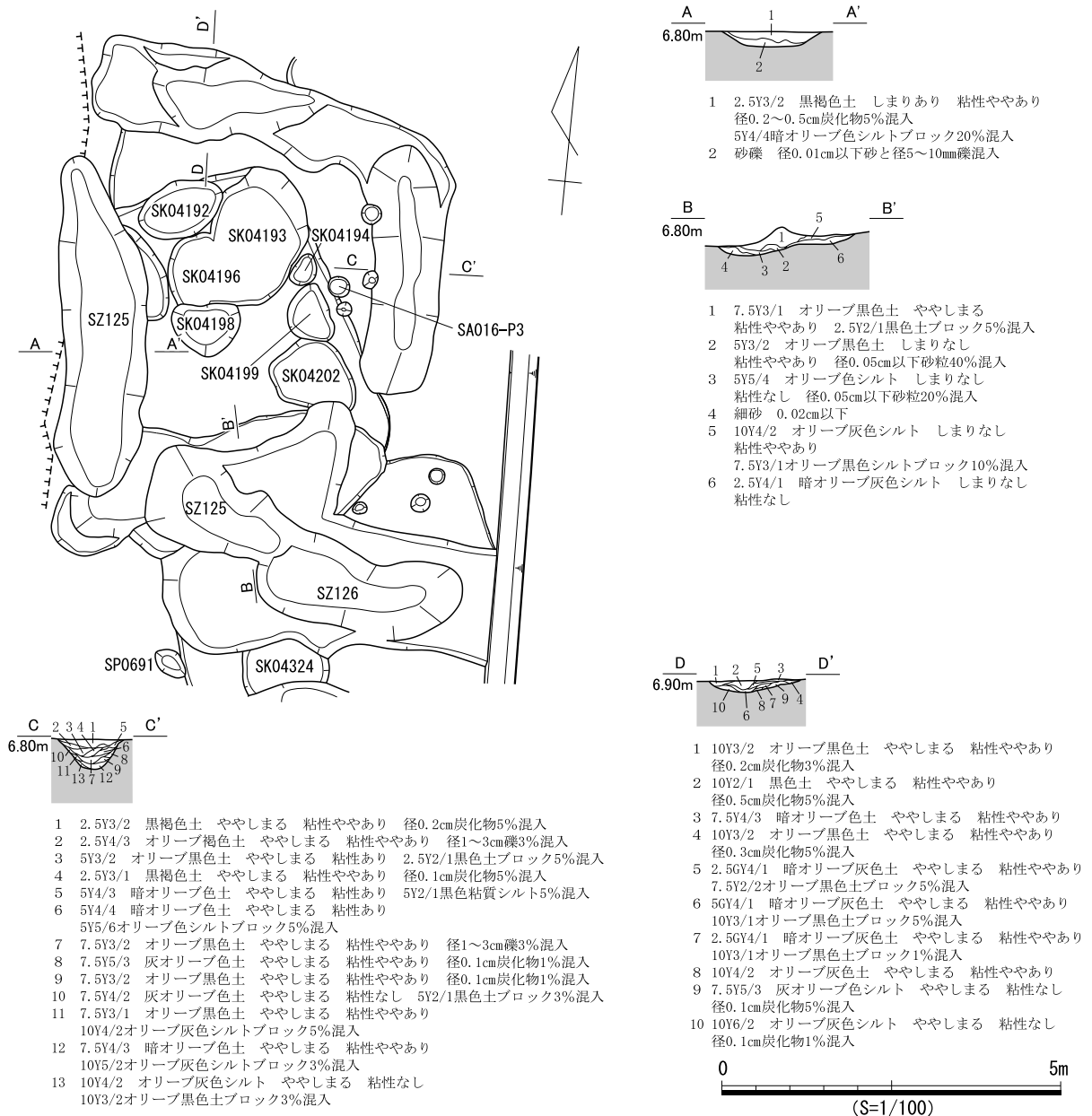


図133 SZ125 遺構図

やかな傾斜であり、底面は平坦である。埋土中にブロック土の混入が散在して認められ、上層を中心にⅥ期～Ⅶ期の土器が出土している。本遺構の上部には竪穴住居跡が密集していることから、その構築時に溝を埋め戻している可能性がある。

遺物出土状況 北溝と東溝から土器66点、石器類1点、西溝から土器32点、南溝から土器18点が出土した。ただし、北、東溝の遺物はSZ127の遺物も含む。埋土中からⅥ期～Ⅶ期を主体とした土器小片が出土しているが、供献土器と考えられるものは確認できなかった。なお、東溝埋土中よりⅠ期土器片が出土している。

時期 Ⅳ期のSZ126に先行するので、Ⅳ期以前と考えられる。

SZ126（遺構：図134、遺物：図135）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB275～SB277底面にて検出したが、平面形は不明瞭であった。北溝と西溝を検出したが、東側は調査区域外となり、全容は不明である。なお、北溝がSZ125の南溝を切る。

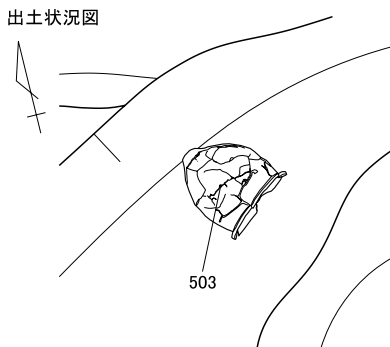
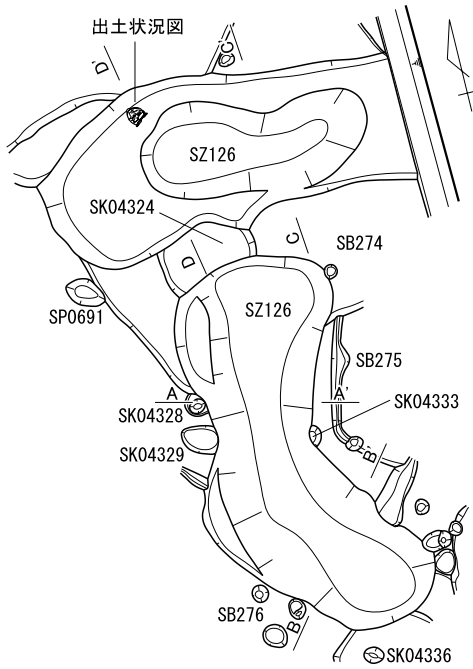
方台部 確認した部分は方台部西端である。遺存状況から南北約5.0mの規模と考えられ、墳丘及び主体部が確認できなかった。

周溝 検出した北溝と西溝は連結せず、北西隅は陸橋状となる。各溝の幅は中央部付近で北溝約1.8m、西溝約1.5mである。北溝は検出時において西溝北端からさらに西側へのびていたが、掘り下げると西肩部はテラス状に浅く広がり、西端部から約1.4m東側において壁面の傾斜がきつくなる。西溝は緩やかに屈曲する。深さは北溝0.44m、西溝0.30mで、いずれも壁面は極めて緩やかに傾斜し、底面は丸い。埋土は崩落土と考えられる堆積があるが、上層にブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

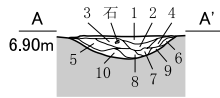
遺物出土状況 北溝から土器176点、西溝から土器173点が出土し、その多くがⅥ期～Ⅶ期のものである。本遺構の上部には竪穴住居跡が密集していることから、住居構築時に埋め戻している可能性がある。北溝北西部では、Ⅳ期の甕が口縁部を南東に向けて出土した（503）。溝の底面より一段高い平坦面の底面にて出土し、土器の時期は掘削時期に近いと考えられる。また、出土位置からは方台部からの転落の可能性は低いが、周溝内に供献した土器である可能性が高い。

出土遺物 503は口縁部がくの字に屈折するⅣ期甕A2類。端部にはタタキが認められる。胴部はなだらかに膨らみ、倒卵形を呈す。504、505はⅤ期～Ⅵ期壺B1類。口縁部が短く外反して、端部は平坦である。506はⅣ期甕B1類。口縁部が短く直立し、端部は内傾面を形成する。頸部直下には刺突文、直線文を施文する。507はⅠ期深鉢。口縁部は緩やかに内湾し、全形は砲弾形を呈すると考えられる。端部には顕著な内傾面を形成する。

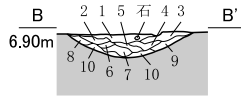
時期 供献土器（503）の時期から、Ⅳ期と考えられる。



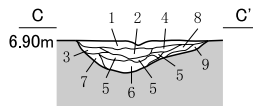
0 50cm
(S=1/20)



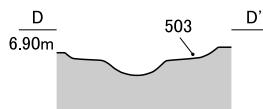
- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.2cm炭化物5%混入
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y2/1黒色土ブロック5%混入
- 3 5Y4/3 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm礫1%混入
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり 2.5Y2/1黒色土ブロック5%混入
- 5 5Y4/4 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性なし
- 5Y2/2オリーブ黒色土ブロック5%混入
- 6 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.1cm炭化物2%混入
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 径0.2cm炭化物5%混入
- 8 5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性なし
- 9 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり
- 10 7.5Y4/3 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.3cm炭化物5%混入



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.3cm炭化物5%混入
- 2 5Y4/3 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm炭化物1%混入
- 3 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物5%混入
- 4 10Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物3%混入
- 5 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性なし 径0.2~0.5cm炭化物5%混入
- 6 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性なし 径0.5cm炭化物3%混入
- 7 10Y4/2 オリーブ灰色シルト しまりなし 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物5%混入
- 8 7.5Y5/3 灰オリーブ色シルト ややしまる 粘性ややあり 径1cm炭化物5%混入
- 9 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物10%混入
- 10 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト しまりなし 粘性なし
- 7.5GY2/1黒色土ブロック5%混入



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm礫5%混入
- 2 7.5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性なし 径0.1~0.5cm炭化物10%混入
- 3 7.5Y4/3 暗オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり
- 7.5Y2/1黒褐色土ブロック5%混入
- 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物5%混入
- 5 10Y3/1 黒色土 ややしまる 粘性なし 径0.3cm炭化物5%混入
- 6 10Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 7.5Y2/1黒色土ブロック5%混入
- 7 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 7.5Y2/1黒色土ブロック3%混入
- 8 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.2cm炭化物5%混入
- 9 10Y4/2 オリーブ灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 7.5Y2/1黒色土ブロック10%混入



0 5m
(S=1/100)

図134 SZ126 遺構図

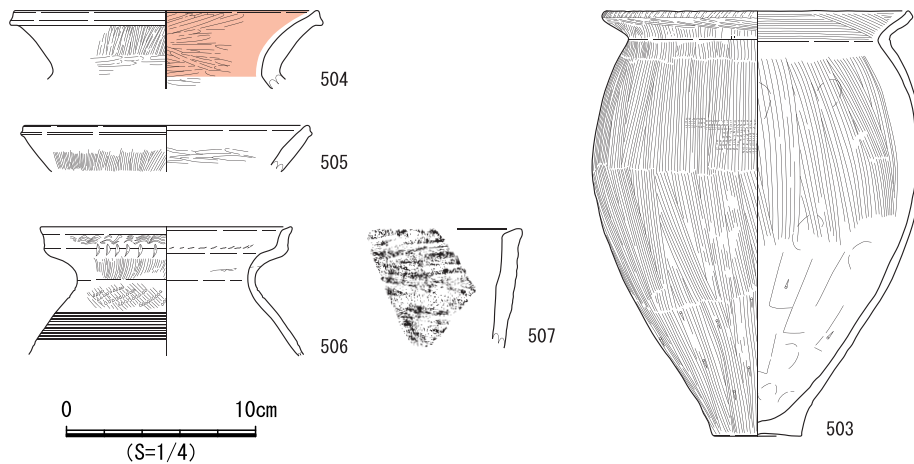


図135 SZ126 遺物実測図

SZ127 (遺構：図136)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB270床面にて検出した。東溝の輪郭は比較的明瞭であったが、北溝は不明瞭であった。北溝と東溝は、下層で検出したSZ125と大半が重複し、特に東溝の一段深い部分はSZ125の東溝と判断し、その上層部分が本遺構の東溝に相当すると判断した。

方台部 平面形は南北辺がやや西に開く状況であることから、西辺が東辺に比べてやや長くなると推測できる。南北長約4.5mの規模であり、東西規模は南北溝の両端より推定すると約4.5～5.0mと考えられる。方台部のほとんどは竪穴住居構築時に削平されていると考えられ、墳丘は確認できなかった。なお、主体部は確認できなかった。

周溝 北溝、東溝は連結しているが、南溝は単独で南東隅部が陸橋状となる。各溝幅はそれぞれ中央部付近で北溝が1.3m、南溝が1.5m、東溝が1.0mである。深さはいずれの箇所でも浅く、0.08m～0.16mである。壁面は極めて緩やかに傾斜し、平坦な底面に連続する。南溝の平面形状は、中央部がややくびれることに特徴がある。

遺物出土状況 北、東溝から土器66点、石器類1点、南溝から土器46点が出土した。ただし、北、東溝の遺物はSZ125の遺物も含む。土器の多くがVI期～VII期のものであり、本遺構の上部には竪穴住居跡が密集していることから、竪穴住居等の構築・整地時に埋め戻している可能性がある。なお、出土遺物はいずれも小片であるため、図示しなかった。

時期 出土遺物から遺構の時期を言及できず、遺構の重複関係からはVI期～VII期以前としかいえない。

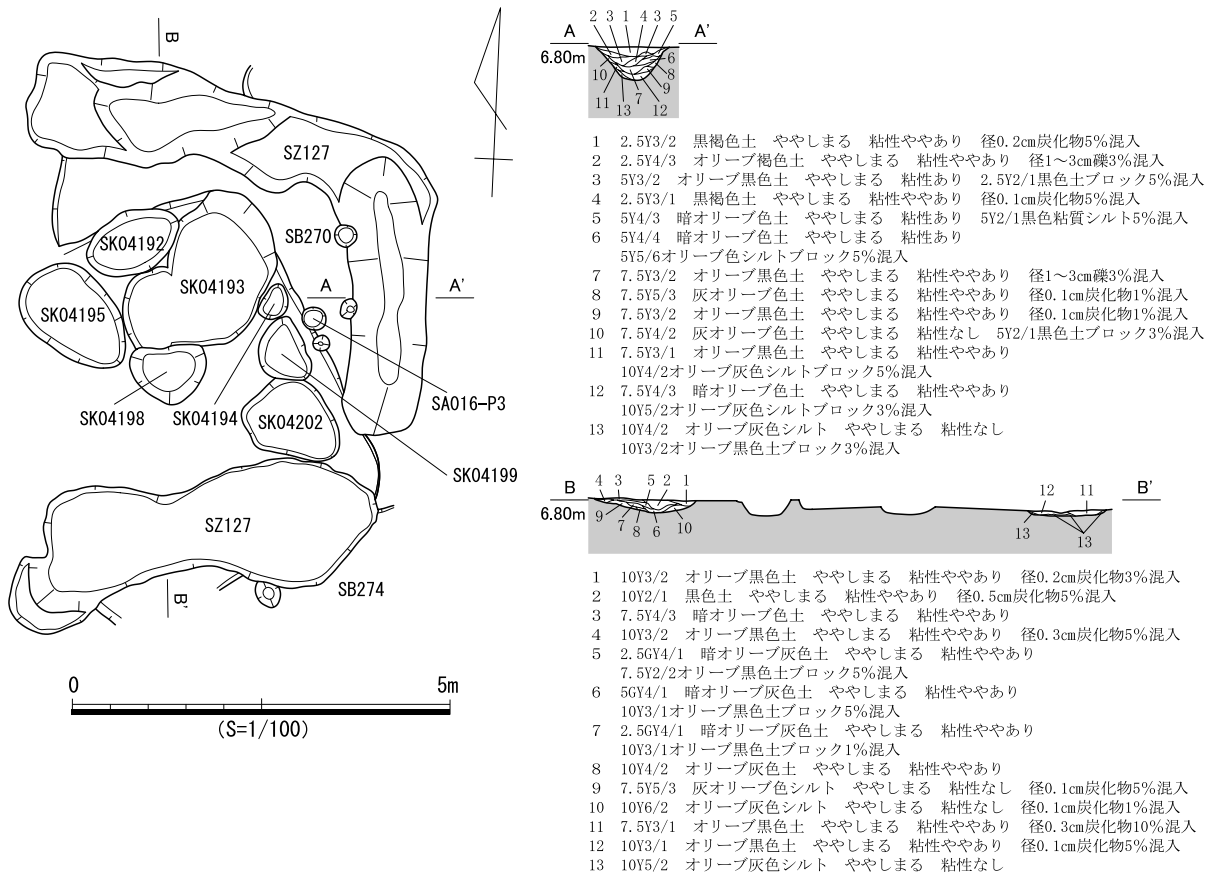


図136 SZ127 遺構図

SZ128 (遺構：図 137、遺物：図 138)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。V層上面にて検出した。SB299、SB300、SB303、SB304の掘形底面で検出し、南西側でSZ129とSZ130を切る。なお、東部は調査区域外となり、全容は不明である。

方台部 西端のみ確認できたため全体の規模は不明であるが、西辺は直線部分が短く、隅部は丸みを帯びている。なお、墳丘及び主体部は確認できなかった。

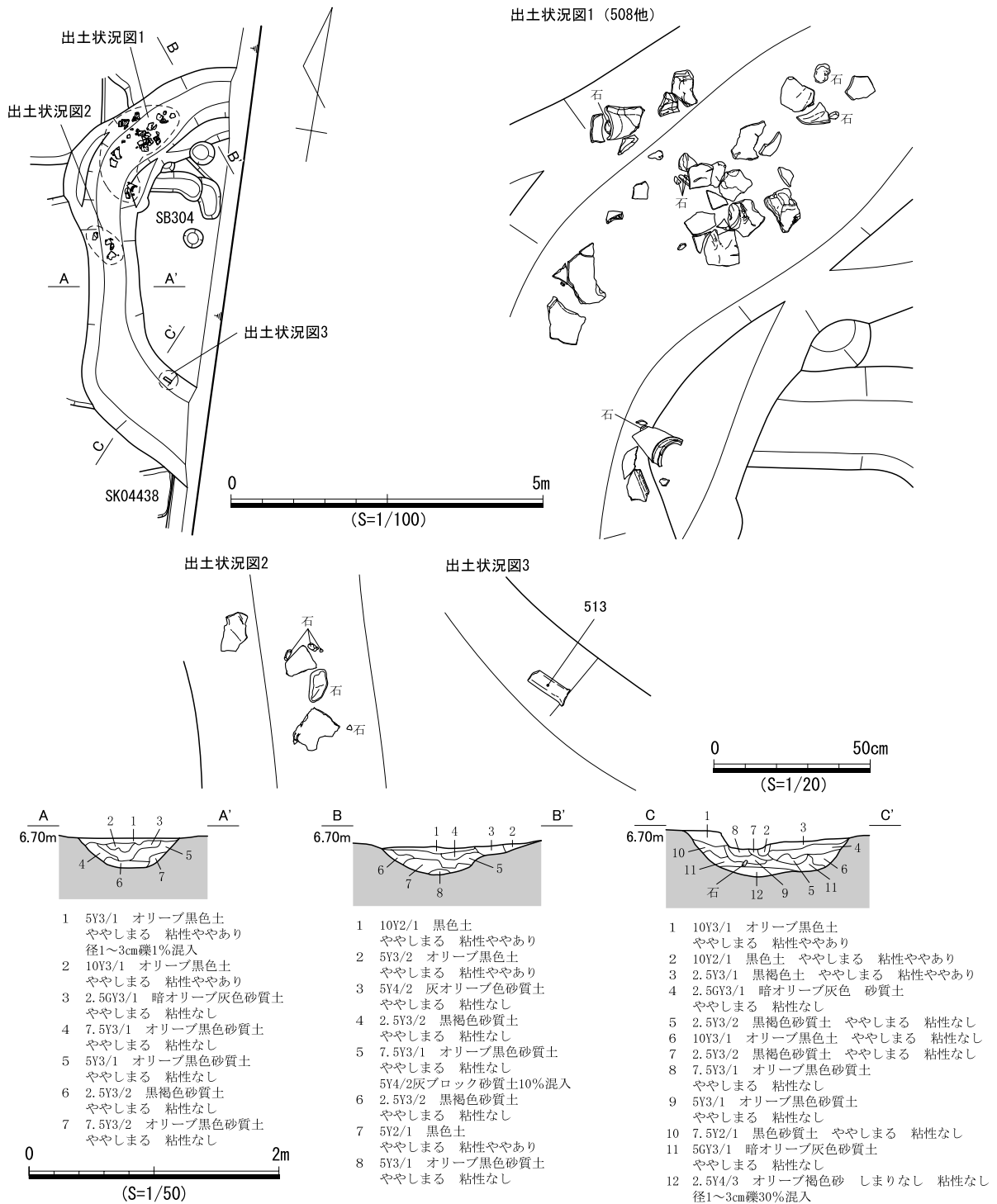


図 137 SZ128 遺構図

周溝 西溝中央部付近で幅約0.8m、北西、南西の各隅部で幅約1.3mであり、隅部がやや幅広となる。深さは0.24mで、ほぼ全域にわたり同様の深さとなる。壁面は緩やかに傾斜し、溝底は丸みを帯び、北西部にテラス状の平坦部がある。埋土は細かい分層が可能であり、上層にはブロック土やVI期～VII期の土器が混入することから、竪穴住居跡構築時に埋め戻している可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器267点、石器類2点が出土した。土器のうち、周溝北西隅にてIV期壺508が横位でまとまって出土した。溝底面からやや上位で出土し、破片間にやや距離があるものの、供献土器と考えられる。

出土遺物 508はIV期壺B類の大型品。口頸部が直立気味で、口縁部が屈折して内傾する。端部は平坦で、3条の凹線文が認められる。胴部は肩部が張り、倒卵形を呈する。胴部は無文で、胴部上半に打ち欠きが認められる。509はV期～VI期壺K類。口頸部が直立し、端部を外上方へ屈曲させる。510はIV期甕B類。口縁部が直立する。511はIV期壺B類頸部。大ぶりの刺突文が認められる。512はVII期甕C2類。口縁部がわずかに内湾する。513はV期高坏B類脚部。長脚で柱状を呈する。514は叩石で、表裏面中央及び側縁の一部に敲打痕が観察できる。

時期 供献土器の時期から、IV期と考えられる。

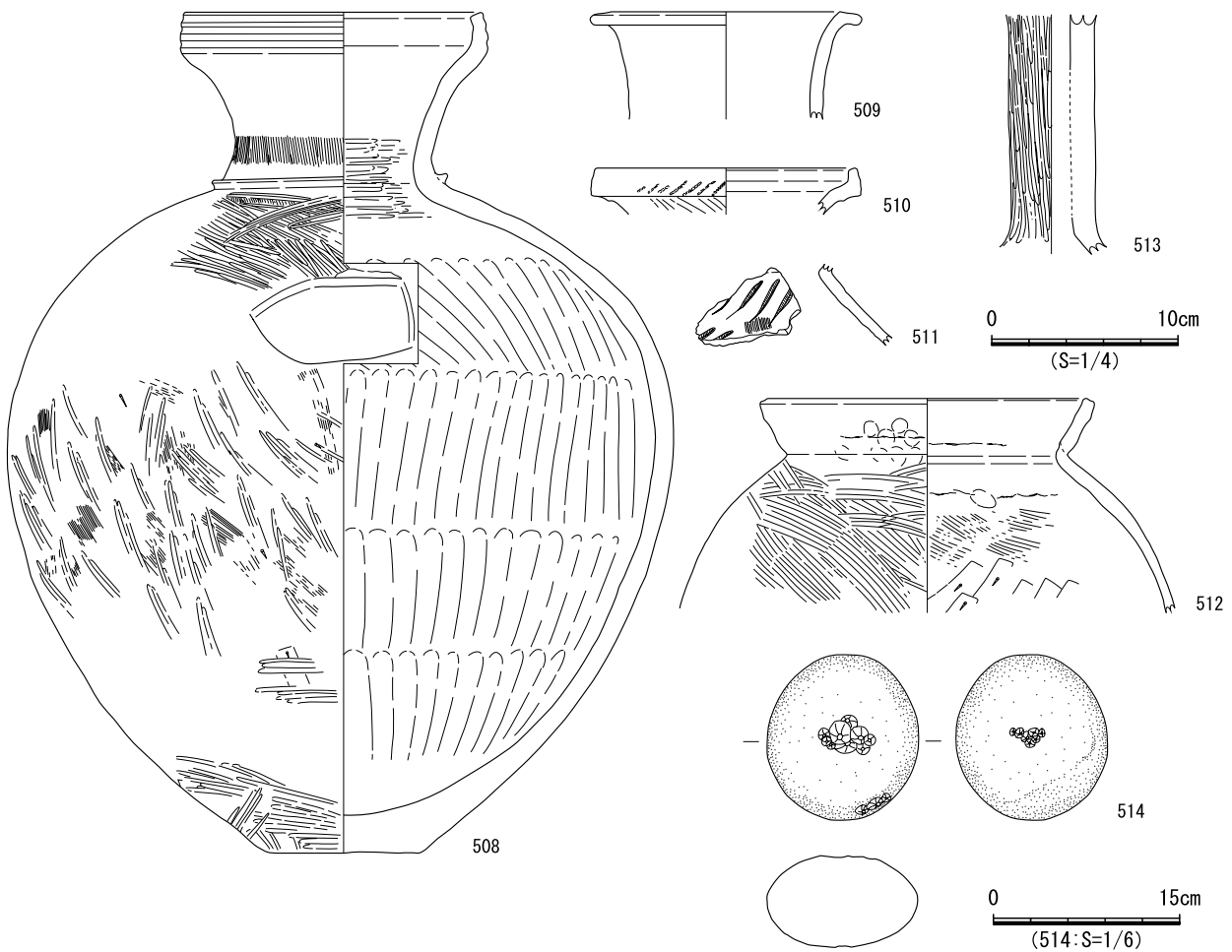


図 138 SZ128 遺物実測図

SZ129 (遺構：図 139、遺物：図 140)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の北部に位置する。SB280、SB301、SB305～SB308の底面にて検出し、SZ130を切る。

方台部 東側は調査区域外となり全形は不明であるが、検出した規模は南北長約8.0mである。平面形はやや北東へ傾く平行四辺形状であり、西辺は南北両端でやや湾曲する。なお、墳丘及び主体部は

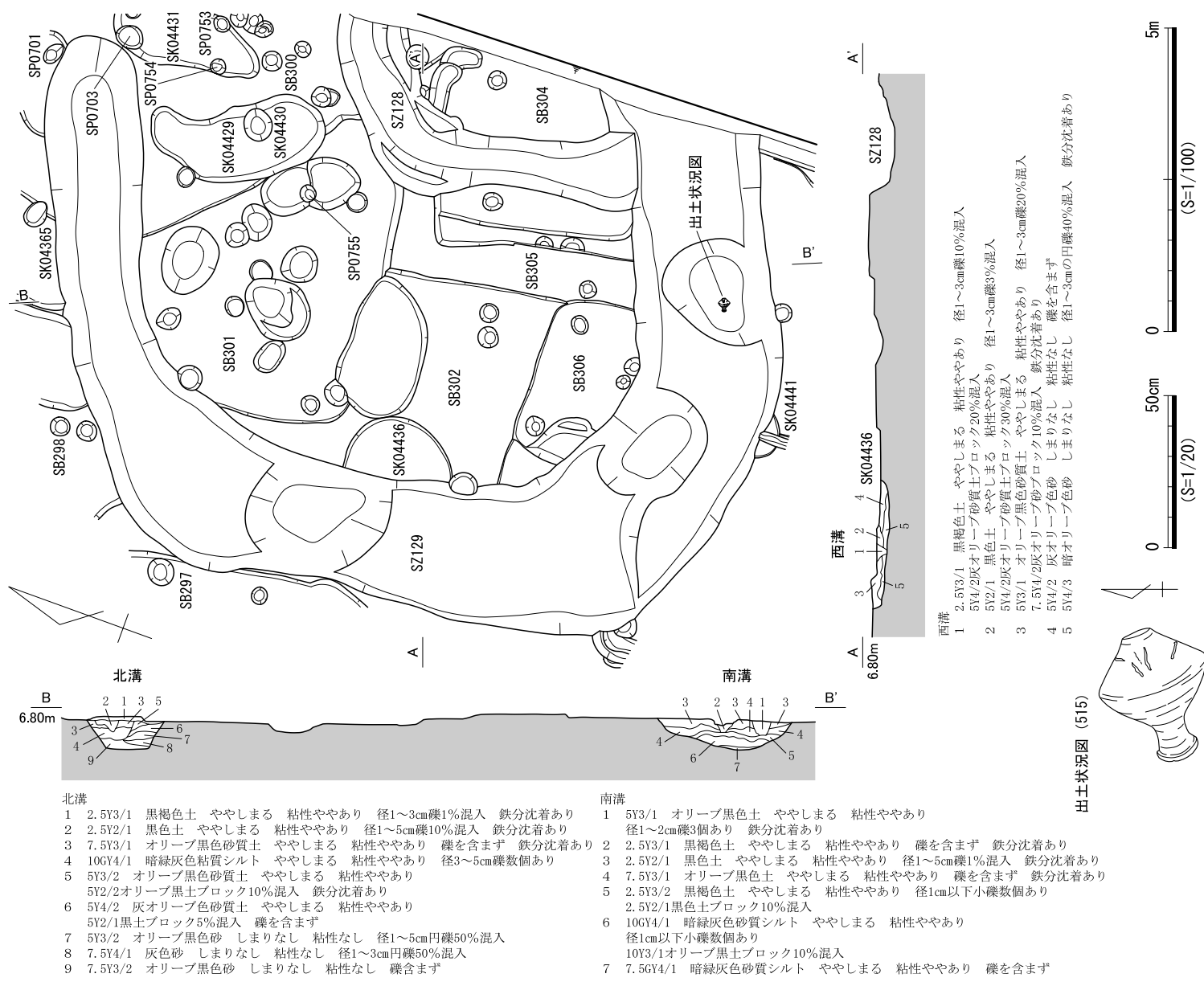


図 139 SZ129 遺構図

確認できなかった。

周溝 西溝、南溝が中央部付近で幅約2.0mであるのに比べ、北溝は約1.5mとやや幅が狭い。各溝は連続するものの、北溝東端部で収束する。このことから北東隅部は陸橋状となると推定できる。壁面の傾斜は北溝がやや急で、約0.5mの深さをもって平坦な底面に続くのに対し、南溝は緩やかな傾斜で、底面もやや丸みを帯びる。東溝は、壁面は直線的に短く立ち上がり、約0.2mの深さで平坦な底面につながる。埋土はほぼ水平堆積を示すが、北溝断面2～4層までは5層以下の堆積を切る状況がみられ、掘り返しあるいは埋め戻し行為の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,329点、石器類5点が出土した。南溝中央部において、溝底面からやや上位で壺515が出土した。横位で口縁部は西を向いていた。完形品であり、供献土器と考える。その他は埋土中からV～VII期を主体とした土器片が多量に出土したが、埋土の状況から竪穴住居跡構築時に伴う混入の可能性はある。

出土土器 515はⅢ期壺A類の完形品である。口頸部が直立気味で、端部をわずかに直立させる。口縁部に波状文、頸部には6帯（4本1組）の直線文が施文される。胴部は肩部がやや屈折する算盤玉形で、上半に直線文、その上下端に付加沈線を施文する。516は叩石で、表面下方及び下端に敲打痕が観察できる。

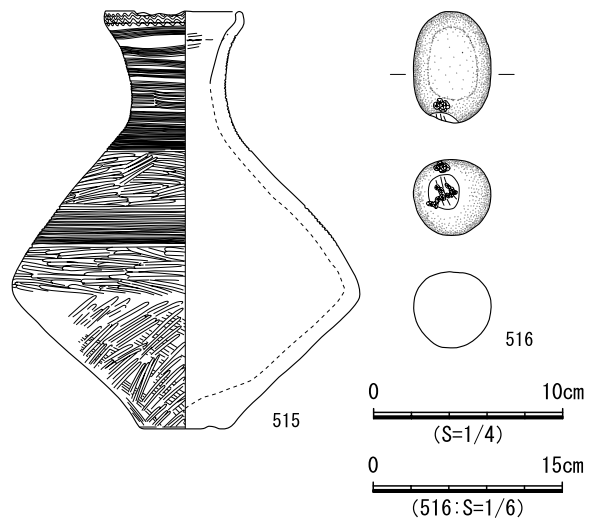


図140 SZ129 遺物実測図

時期 供献土器の時期から、Ⅲ期と考えられる。

SZ130（遺構：図141、遺物：図142）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。V層上面にて検出した。SB305、SB307、SB308の掘形底面で検出し、東西溝がSZ129南西溝に切られる。

方台部 平面形は南北5.0m、東西4.8mの方形であるが、隅部の形状は角張らず丸みを帯び、特に北東隅部は大きく湾曲する。東辺と南辺はいずれもほぼ直線的である。中央部をSZ129の南西溝に大きく削平されていることも影響し、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝、西溝は削平されているものの、方台部をほぼ全周する。外縁ラインは方台部各辺に比べて直線的である。各溝幅は中央付近で西溝約1.3m、南溝約1.4m、北溝約1.3mである。深さは0.15～0.30mで、壁面は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は2～5層に分層した。礫やブロック土の混入が目立ち、いずれの溝も下層に砂質土が堆積する。埋土中にVI期～IX期の土器片を多く含むことから、上層を中心に竪穴住居跡構築時に埋め戻している可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,051点、石器類1点が出土した。埋土中からVI期～IX期の土器片が多く出土したが、供献土器と判断できる遺物は出土しなかった。

出土遺物 517はⅧ期～Ⅸ期の二重口縁壺。端部に1条の沈線と重複して、刺突文が認められる。518はⅦ期高坏G3c類。多条沈線間に山形文、対向山形文を施文する。519はⅦ期壺A5類。口縁端部

上下に拡張する。口縁部外面には直線文と重複して羽状文を施文し、内面には2帯の羽状文を施文する。

時期 出土遺物から構築時期の言及は困難であるが、先行するSZ129がⅢ期であることからⅢ期以前と考えられる。

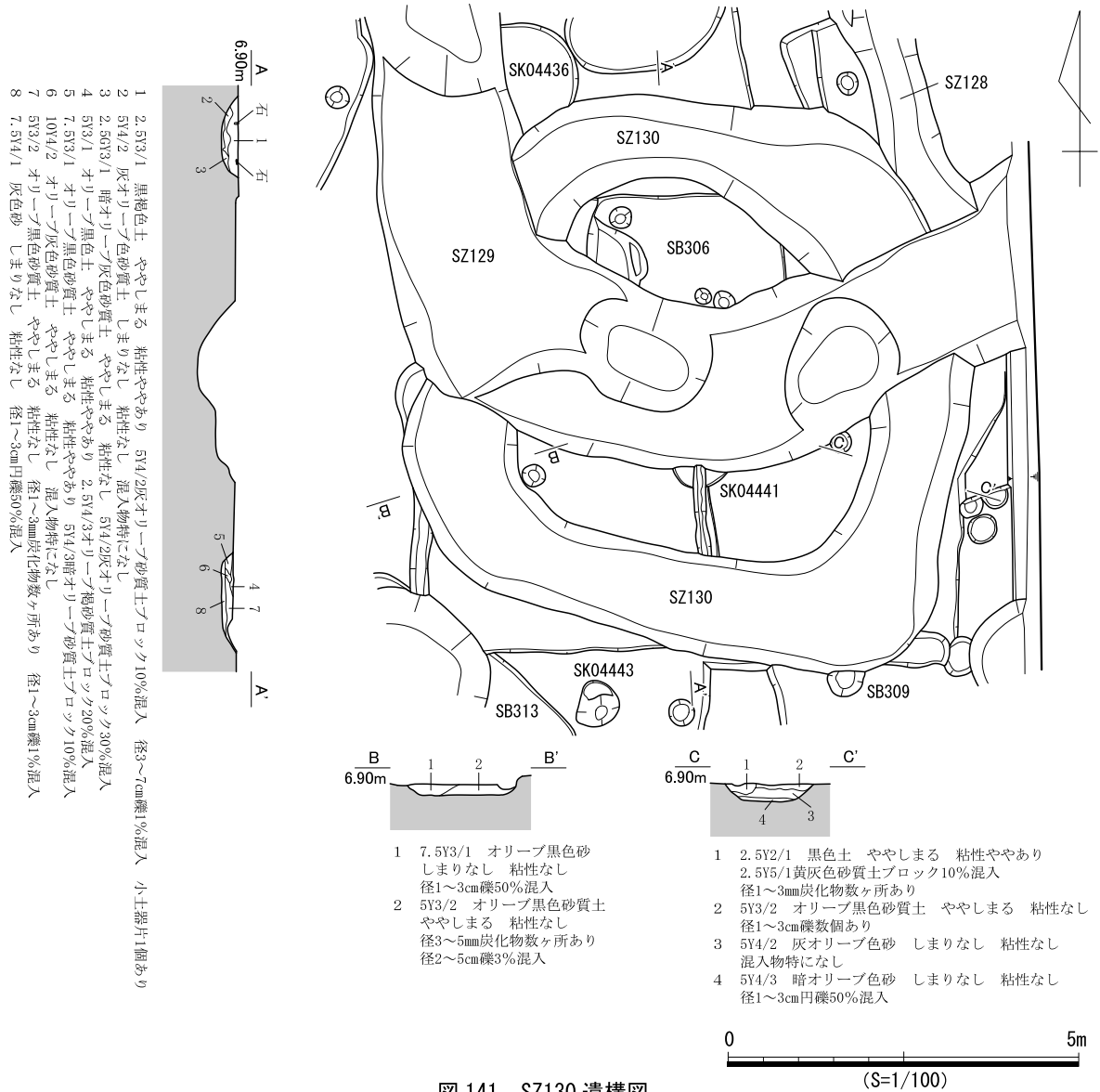


図 141 SZ130 遺構図

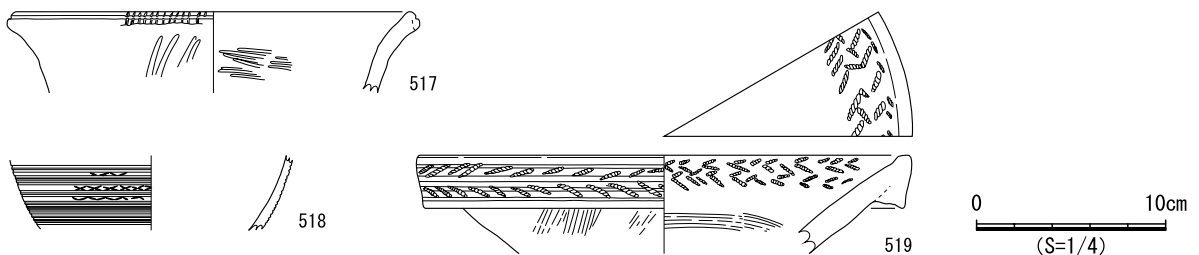


図 142 SZ130 遺物実測図

SZ131 (遺構：図 143、遺物：図 144)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SZ129、SZ130に切られる。東側はV層上面にて検出したが、中央から西部はVI層が表出する面での検出であった。

方台部 方台部の平面形は、やや軸を東にふる正方形をなす。東西長約5.5m、南北長約5.2mの規模で、各辺とも直線的であるが、南西側がやや湾曲している。墳丘盛土と主体部は確認できなかった。

周溝 南東隅が陸橋状となる可能性があり、他は連続する。幅は各溝の中央付近で東溝約1.4m、西溝約1.5m、南溝約1.2m、北溝約1.7mで、南溝が全体的にやや狭い。深さはいずれの断面においても0.25mで、壁面は緩やかに傾斜し溝底は平坦面が多い。なお、南東部が一段深くなっている。

遺物出土状況 埋土中から土器510点が出土した。土器の多くはV期～VII期の土器片であり、上層を中心に竪穴住居跡構築時に改変している可能性がある。

出土遺物 520はV期壺A1b類。内面には扇形文と赤彩が認められる。521はV期～VI期壺A1b類。端部がやや外傾する。522はV期～VI期高坏B3b類。口縁部が強く外反し、端部を丸くおさめる。

時期 出土遺物から構築時期の言及は困難であるが、Ⅲ期のSZ129より先行するので、Ⅲ期以前と考えられる。

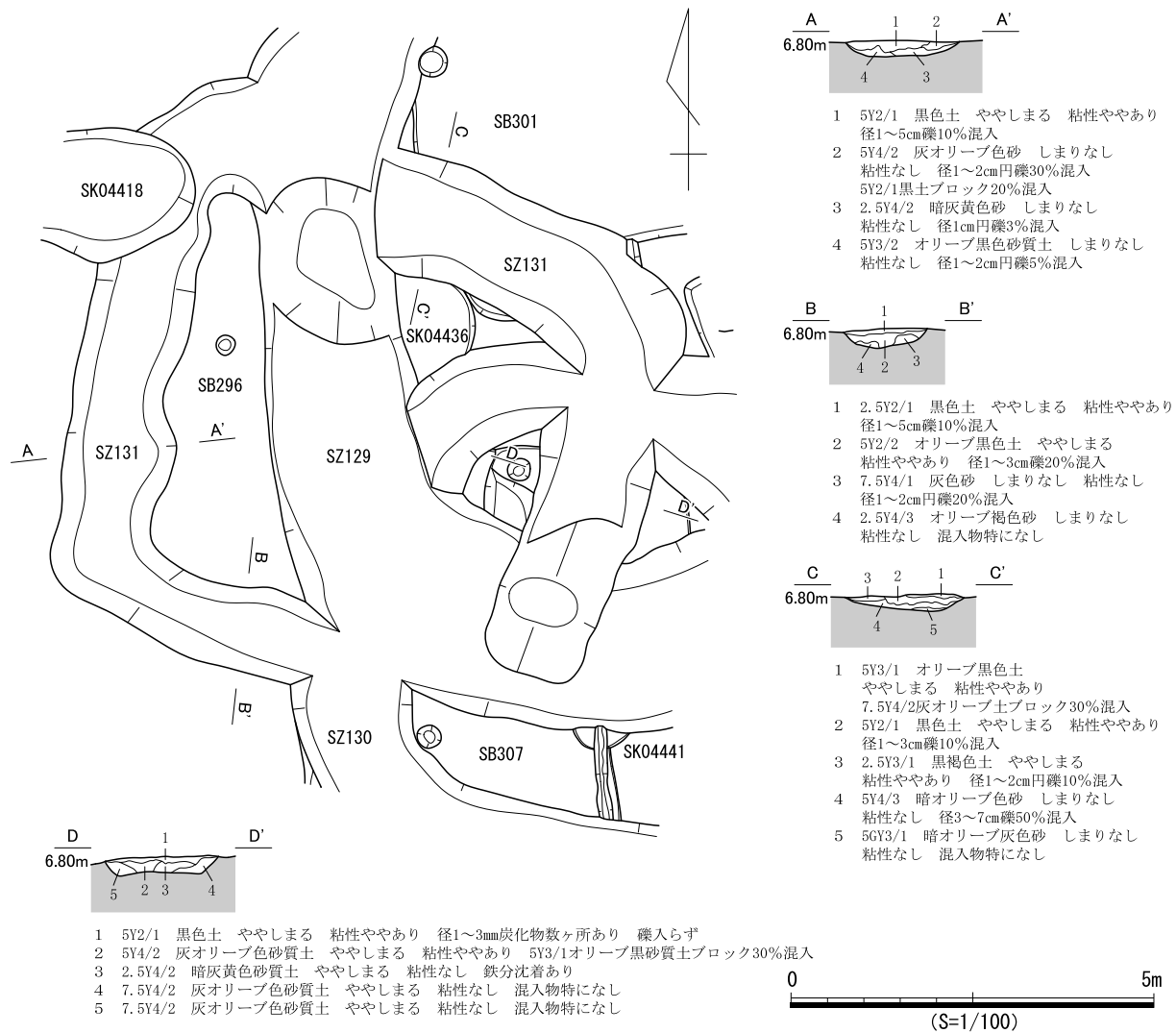


図 143 SZ131 遺構図

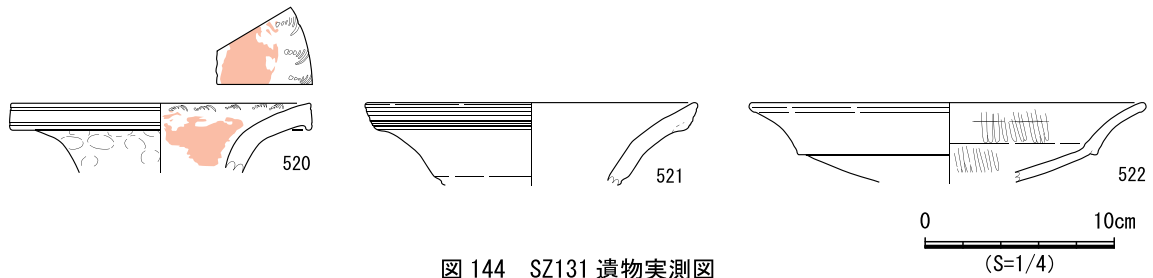


図 144 SZ131 遺物実測図

SZ132 (遺構：図 146、遺物：図 145)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。軸を北東方向にもつ方形周溝墓と想定したが、溝はコ字状となり南溝は確認できなかった。

方台部 平面形は北西-南東約9.0mの方形で、南西辺は確認できない。北東辺及び北西辺がやや膨らむが南東辺は直線的である。なお、墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝 北西辺と南東辺の幅は約1.8~2.0mであるのに対し、北東溝は約1.2mとやや狭い。また、北西溝が深さ約0.5mなのに対し、北東溝と南東溝は約0.1~0.2mと浅い。北隅はSK04424に切られて形状が不明だが、東隅は角がある。底面は隅部も含めてほぼ平坦であるが、北東溝の中央東よりに深い箇所がある。なお、壁面は緩やかに傾斜する。

遺物出土状況 埋土中から土器365点、石器類5点が出土した。磨製石斧(525)は北西溝南端の傾斜面から出土した。また、埋土中からV期~VI期を主体とした土器片が出土しているが、埋土中に散在することから本遺構の時期を示す資料とは考えにくい。

出土遺物 523はV期~VI期壺D類底部。524はV期高坏B3b類。口縁部が短く外反する。525は磨製石斧で、表面の剥落が著しく使用痕が観察できない。526は叩石で、下端及び側円に敲打痕が残り、煤が付着している。527は磨石で、表裏面に擦痕が残る。

時期 出土遺物から遺構の時期を推定することは困難であるが、本遺構を切る複数の竪穴住居跡のうち、遺構の重複関係で最も先行するSB313がVI期であるため、VI期以前といえる。

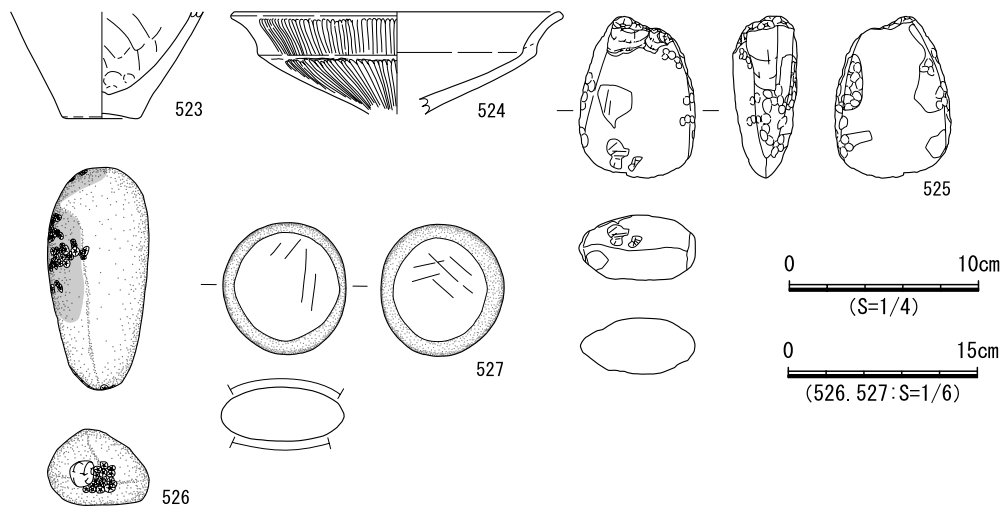
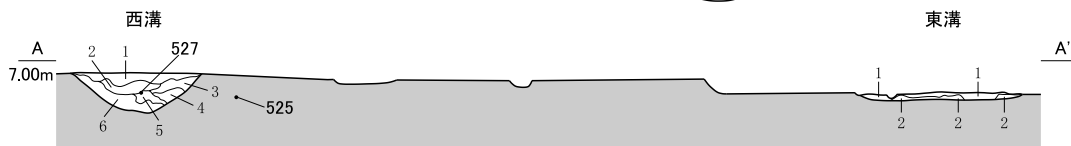
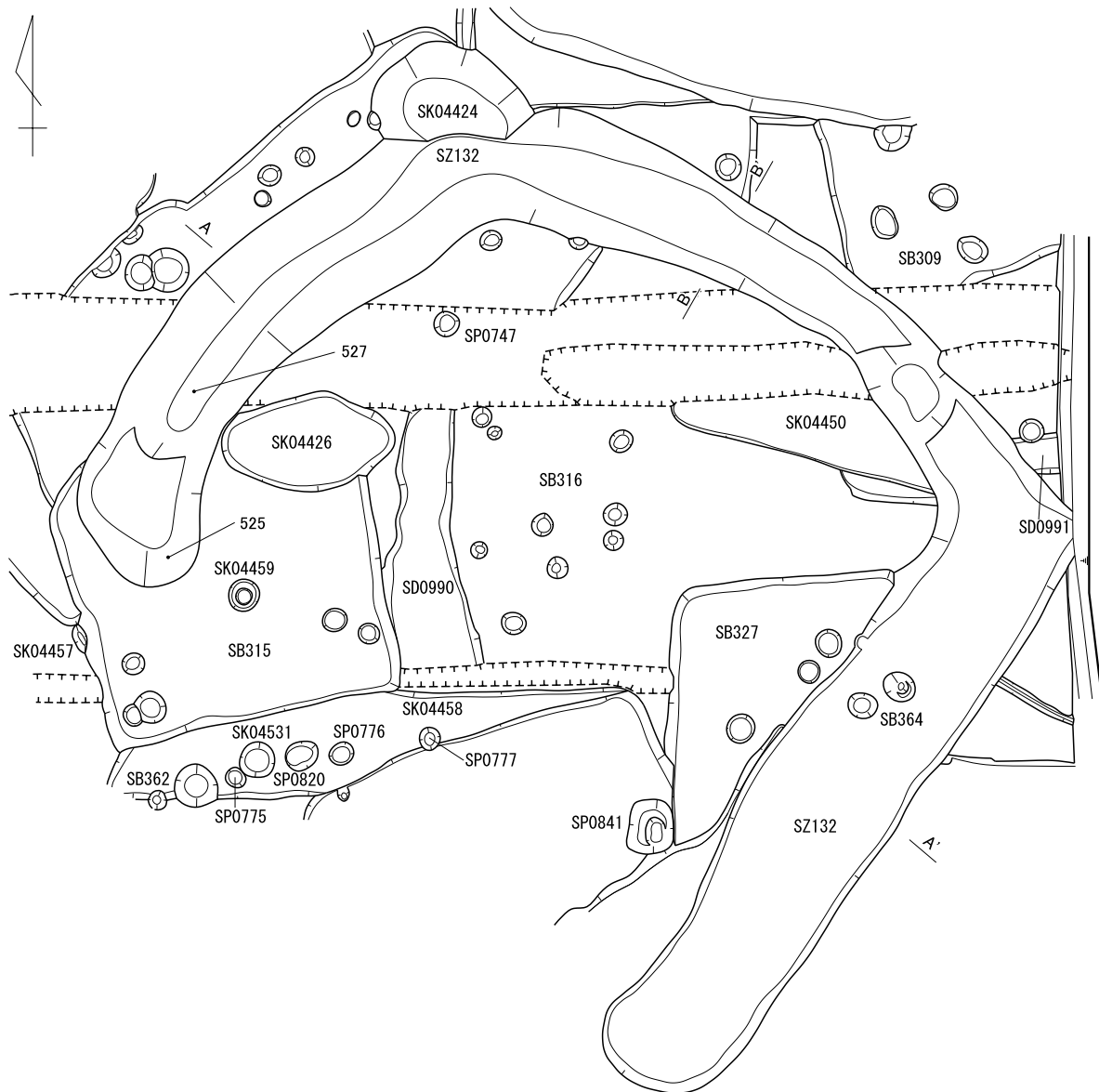


図 145 SZ132 遺物実測図

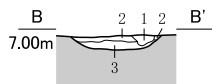


西溝

- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径1~5cm礫1%混入 径1~3mm炭化物数ヶ所あり
- 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 ややしまる 粘性なし
5Y4/3暗オリーブ砂ブロック10%混入
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm礫1個あり
- 4 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm炭化物数ヶ所あり
- 5 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂質土 ややしまる 粘性なし
7.5Y4/2灰オリーブ砂ブロック20%混入
- 6 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂 しまりなし 粘性なし 混入物特になし

東溝

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
径1~3mm炭化物数ヶ所あり 径1~3cm円礫1%混入
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂 しまりなし 粘性なし
径1~3cm円礫50%混入



北溝

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3mm炭化物数ヶ所あり
- 2 7.5Y4/1 灰色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 径3~5mm炭化物数ヶ所あり
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 ややしまる 粘性ややあり 径1~2cm円礫5%混入

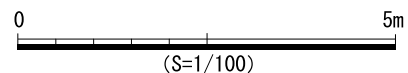


図 146 SZ132 遺構図

SZ134 (遺構：図148、遺物：図147)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB328、SB343床面で検出した。西側を平成20年度、東側を平成22年度に確認したが、北溝の西半と西溝は確認できなかった。

方台部 南北長約6.0mで、東西長は不明である。確認できた南東隅部はやや丸みをもつ。墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 確認できたのは北溝の一部、東溝、南溝である。幅約1.3m、深さは約0.2～0.3mと浅い。断面形状は皿形で、遺存状況はよくない。周溝外縁は不整形である。南溝は西端で途切れているため、陸橋を形成する可能性がある。埋土は中央が窪む堆積であり、2層～4層に分層した。

遺物出土状況 埋土中から土器125点が出土した。上層からIV期～VII期の土器片が少量出土し、東溝南側から遺存状況のよいIV期甕(528)が出土した。供献土器の可能性が高いと考えられる。

出土遺物 528はIV期甕B2類。口縁部を一部欠損する。胴部は頸部からなだらかな肩部まで膨らみ、最大径は胴部中央やや上位にある。頸部から肩部までは刺突文3帯、直線文、波状文によって施文する。底部は小さな平底である。

時期 供献土器の時期から、IV期と考えられる。

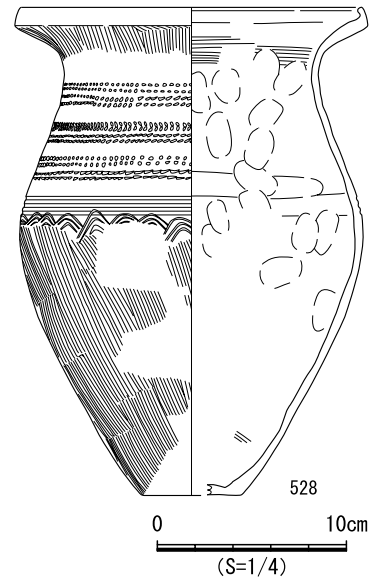


図147 SZ134 遺物実測図

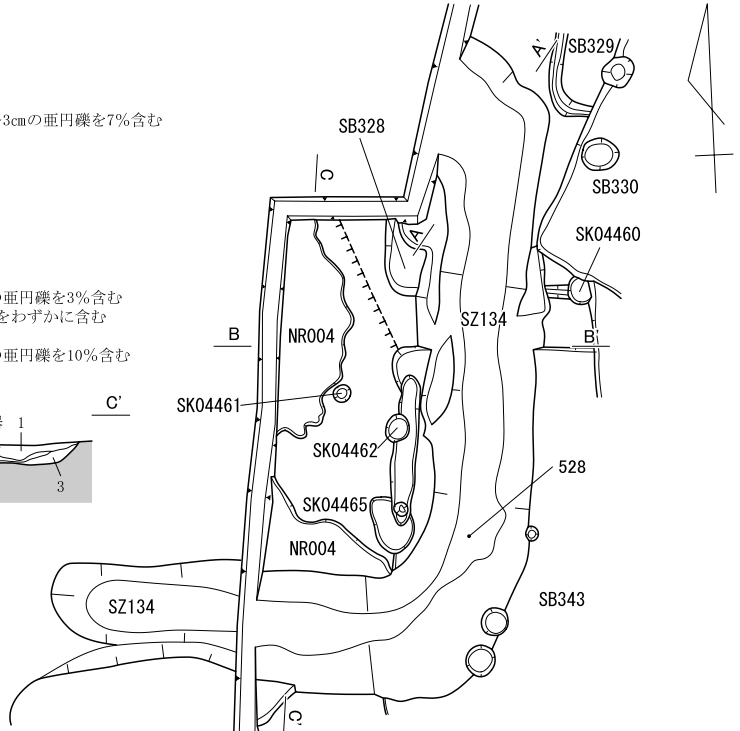
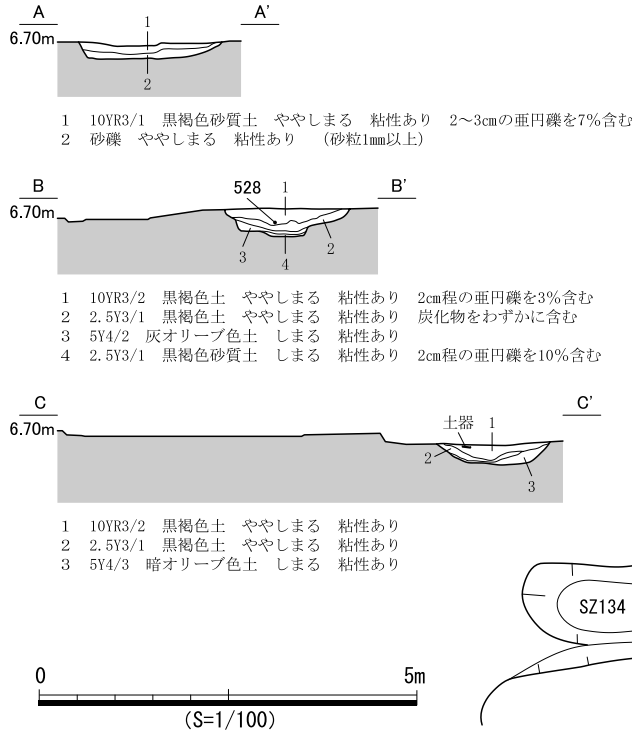


図148 SZ134 遺構図

SZ135 (遺構：図149、遺物：図150)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB341とSB343床面で検出した。不整形な

コの字状となる溝を確認し、IV期の供献土器と考えられる遺物が出土したため、方形周溝墓とした。平面形は不明瞭であり、東溝は確認できず、SZ136に切られている。

方台部 不整形な周溝の一部を確認したのみであるため、規模は不明である。墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 確認できたのは北溝と西溝、南溝の西端である。西溝と南溝は幅約1.0m、深さ約0.3mで断面形状はV字形である。東溝は幅約1.5mと広く、深さは約0.2mで断面形状は皿形である。埋土のうち、壁面沿いの堆積はブロック土が含まれるため壁面崩落土の可能性がある。また、上層のブロック土の混入は、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器260点が出土した。各周溝の上層からVI期～VII期の土器片が少量出土した。上層から出土した遺存状況のよいIV期壺(529、530)が供献土器の可能性はある。

出土遺物 529、530はIV期壺A1類。頸部が外反気味に立ち上がり、口縁部が直立する外面には2条の凹線文が認められる。胴部は算盤玉状で細かなハケ目が認められるが、その下にはタタキも認められる。531はIV期甕A2類。口縁部が短くくの字に屈折する。532はIV期高坏A類。口縁部が内湾して、凹線文が認められる。533はI期鉢口縁部。大型品で口縁部が短く外反して、端部は平坦である。

時期 供献土器の可能性のある遺物の時期から、IV期と考えられる。

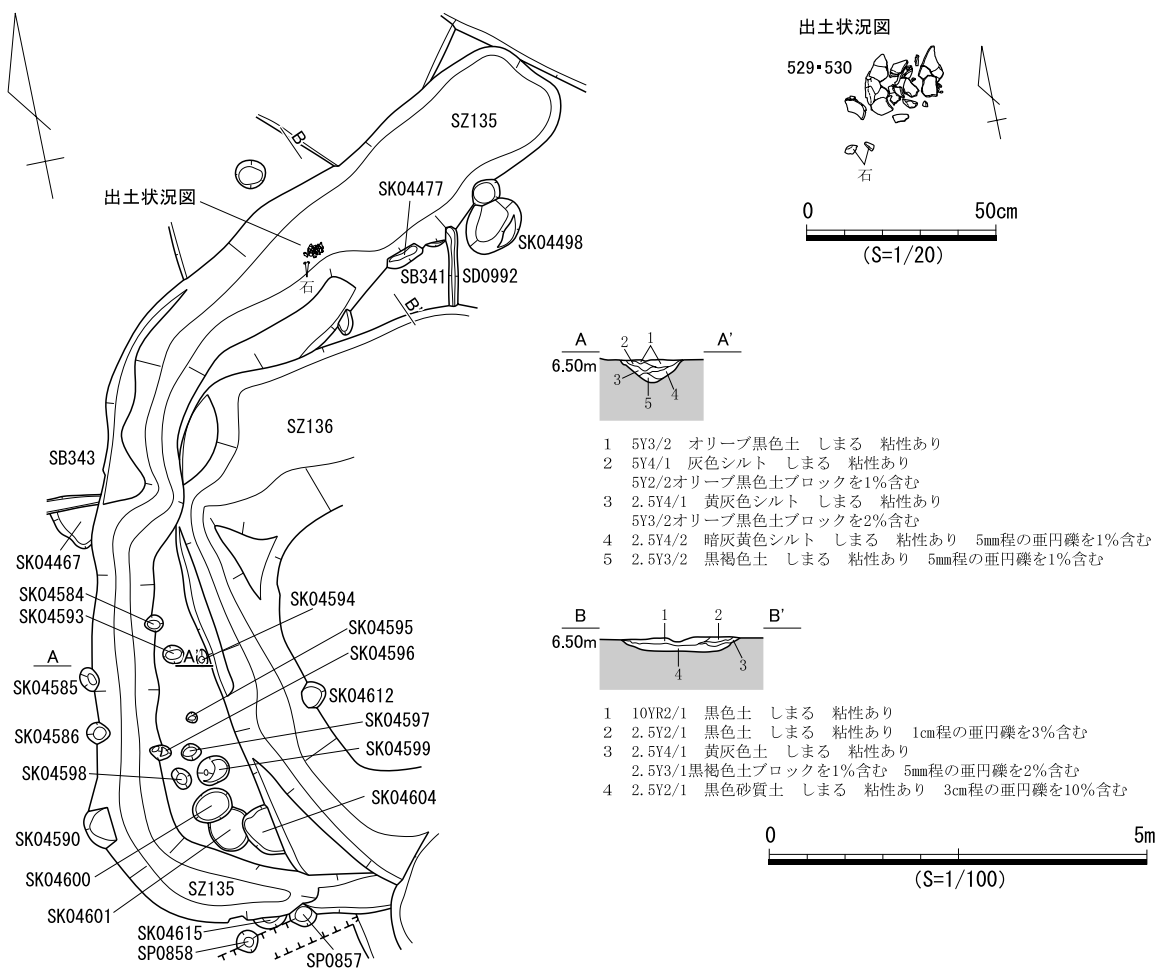


図149 SZ135 遺構図

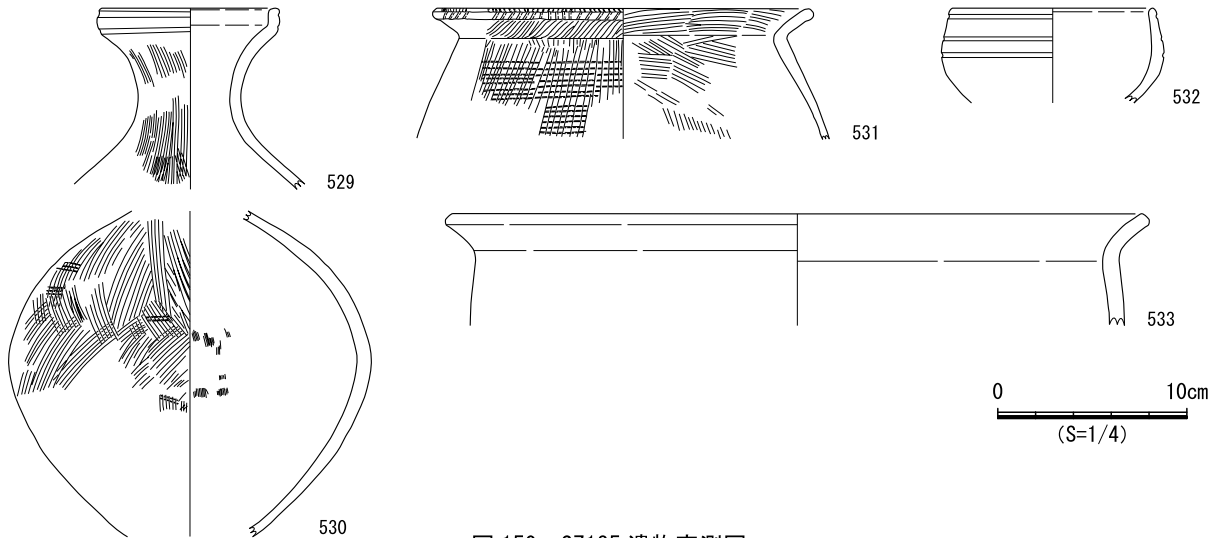


図 150 SZ135 遺物実測図

SZ136 (遺構：図 152、遺物：図 151)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB339とSB347床面で検出した。南溝はSK04617により滅失するが、周溝内縁が方形にめぐむ状況を確認した。

方台部 南北長約4.1m、東西長約4.2mで、平面形は方形である。各辺とも直線的だが、各隅部は丸く、全体として不整な円形にちかい形状である。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝外縁はいずれも不整形で、各隅部とも丸みをもつ。北溝、東溝は幅約1.3m、西溝は幅約1.0mとやや狭い。北溝と西溝は深さ約0.2～0.3mと浅く、断面形状は皿形である。西溝は深さ約0.5mと深く、断面形状はV字形である。埋土は5～9層に分層でき、上層から下層までブロック土の混入が著しいことから、壁面崩落土の堆積とともに人為堆積も想定される。

遺物出土状況 埋土中から土器307点、石器類4点が出土した。各周溝の上層からVI期～VII期の土器片が少量出土し、IV期の土器(534)が中層から出土した。しかし、供献土器は認められなかった。

出土遺物 534はIV甕A類底部。胴部が直線的に立ち上がり、底部外面にはハケ目が認められる。535はV期～VI期鉢A1類。口縁部が直立し、頸部直下に直線文と刺突文が認められる。胴部は頸部から強く膨らみ、被熱による剥落が著しい。

時期 供献土器が認められなかったため、時期の特定は困難である。しかし、周辺の方形周溝墓の大半がIV期以前であることや、

出土遺物に比較的残りのよいIV期の甕があることなどから、IV期の可能性がある。

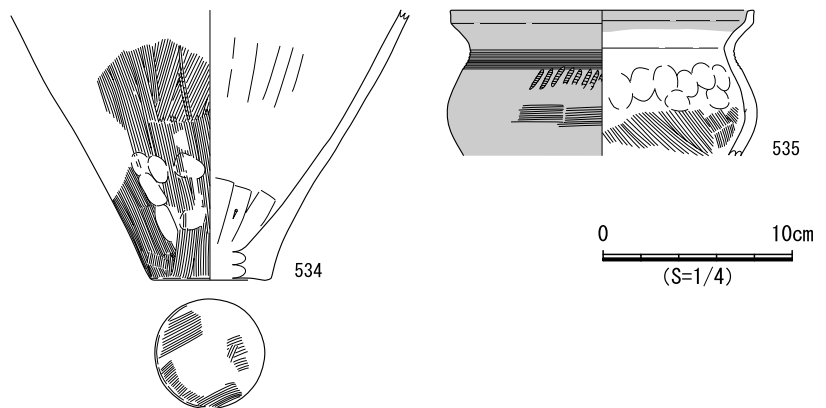


図 151 SZ136 遺物実測図

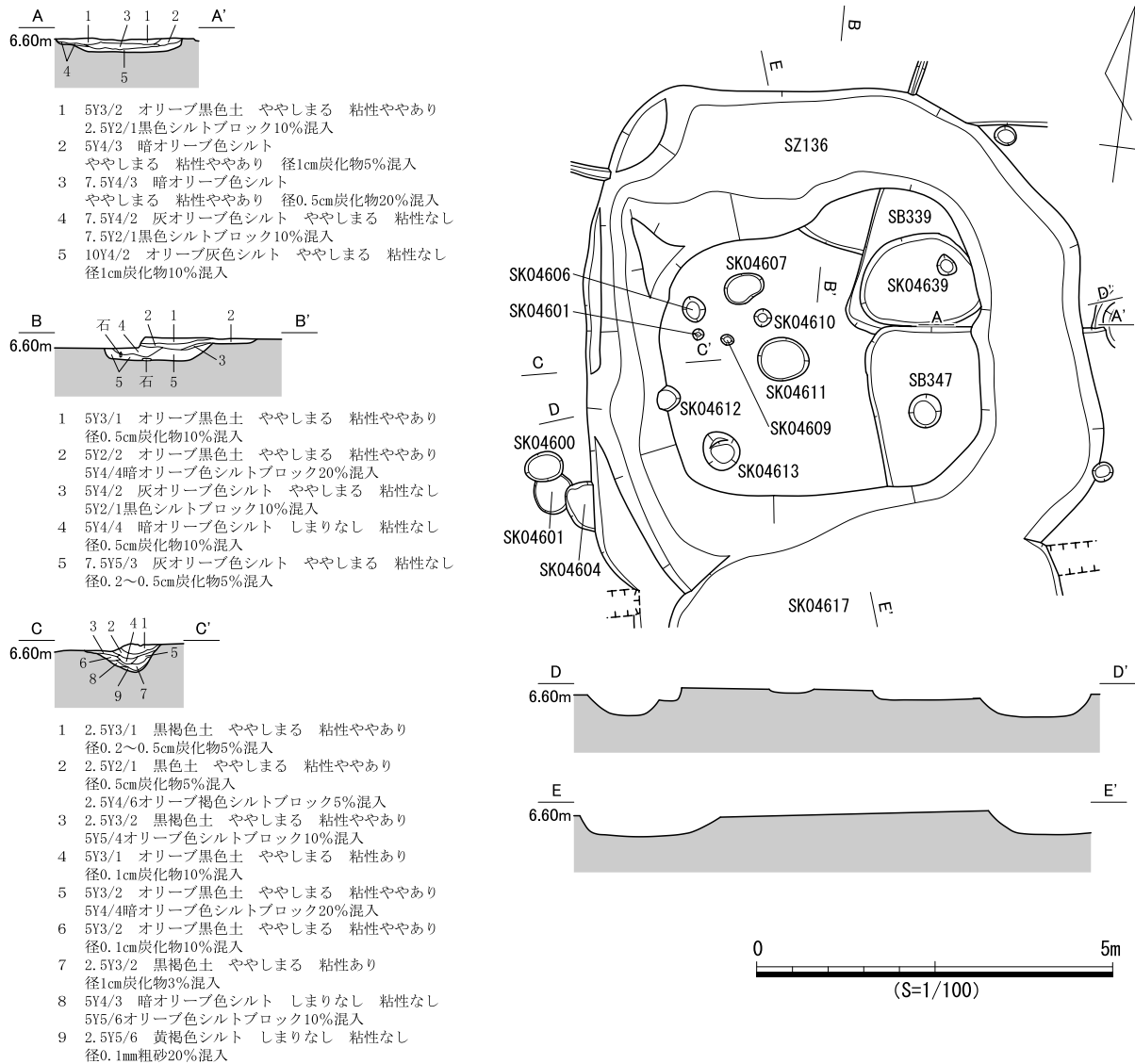


図 152 SZ136 遺構図

SZ139 (遺構：図 154、遺物：図 153)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB327、SB363～365、SB370、SB373、SB376の床面で検出した。西溝はSZ138を切り、北溝から方台部にかけてSZ132に、方台部はSZ140に、南西隅部はSZ143にそれぞれ切られる。

方台部 後出するSZ140により中央が大きく削平されているが、およその全形を確認した。その規模は南北長約7.5m、東西長約8.3mで、平面形は東西に長い長方形である。各辺とも直線的だが、東辺がわずかに弧状となる。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 南西隅部をSZ143によって削平されているが、南溝西端が途切れているのを確認した。周溝の幅は約1.0mで、東溝のみ約0.5mでやや狭い。断面形はいずれも皿形で、深さは約0.2mである。埋土は北溝が方台部からの流入が認められ、他は水平堆積か中央が窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土器285点が出土した。各周溝の上層からV期～VI期の土器片が出土したが、その多くは小片で摩耗が進んでいる。供献

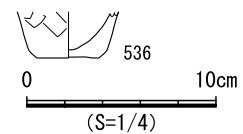
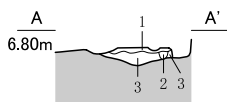
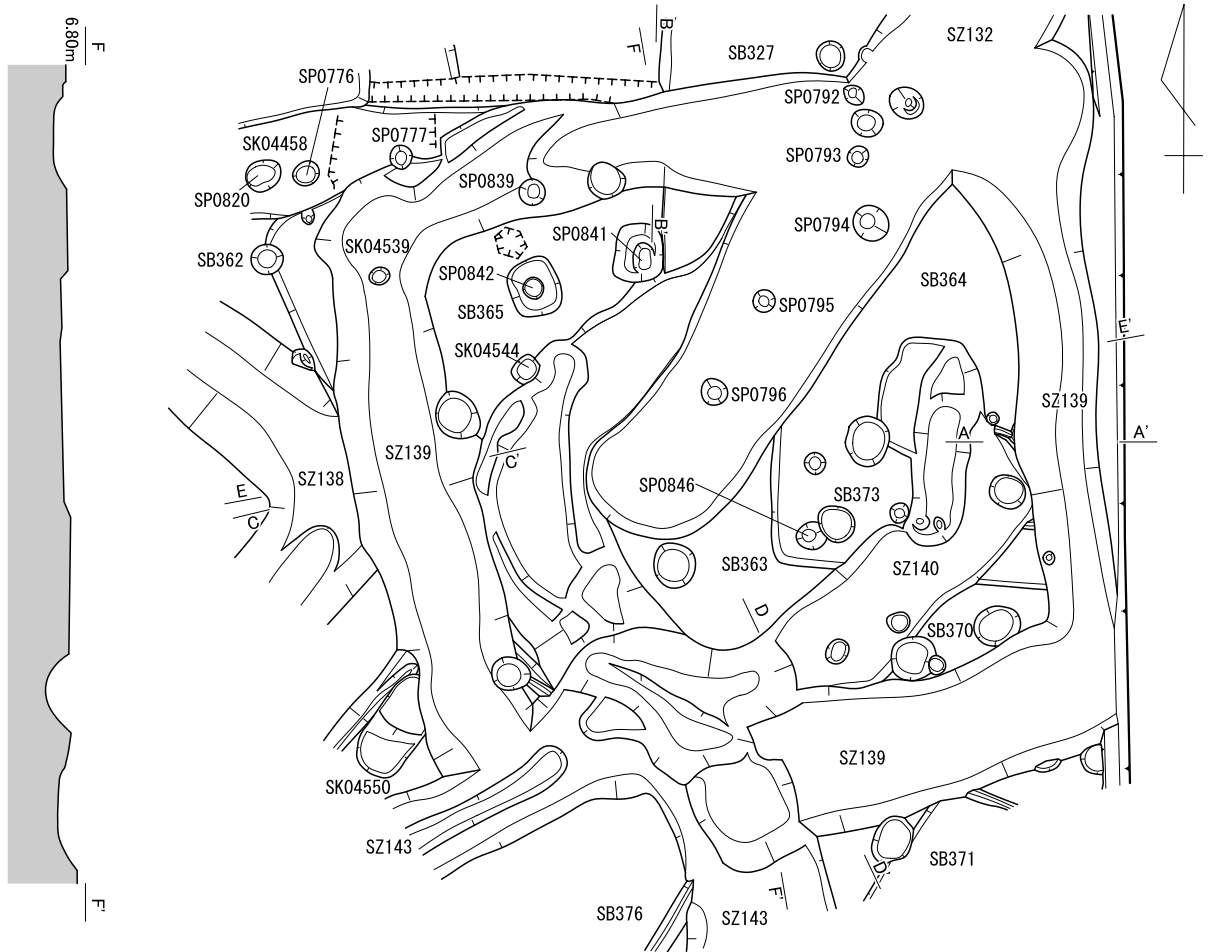
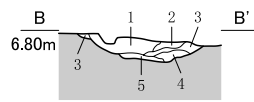


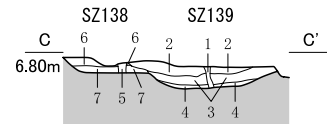
図 153 SZ139 遺物実測



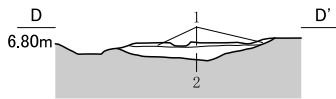
- 1 2.5Y3/2 黒褐色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫を30%程含む



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
径5mm程の垂角礫1%程含む
- 2 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
しまりなし 粘性なし
径0.5~2cm程の垂角礫を30%程含む



- 1 7.5Y2/2 オリーブ黒色土
しまる 粘性あり 礫含まず
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色土
しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂角礫2%程含む
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y2/2オリーブ黒色土を15%程含む
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや暗色
ややしまる 粘性ややあり
5Y2/2オリーブ黒色土を10%程含む
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色
しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂角礫1%程含む
- 6 7.5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 7 5Y4/2 灰オリーブ色土 やや淡色
しまる 粘性あり 礫含まず



- 1 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 しまりなし 粘性なし
径0.5~3cm程の垂角礫を30%程含む

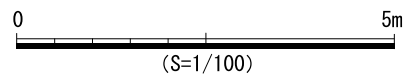


図 154 SZ139 遺構図

土器は認められなかった。

出土遺物 536はⅦ期手捏ねC類。外面に指圧痕が残る。

時期 供献土器が出土しなかったため、出土遺物から時期の推定は困難である。しかし、Ⅰ期のSZ138を切り、Ⅳ期のSZ141に切られることから、Ⅳ期以前の可能性がある。

SZ140 (遺構：図155、遺物：図156)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB363～SB365、SB373、SB376の床面で検出し、SZ139の方台部内にあつて、やや軸を違えて位置し、SZ139を切る。また、北東隅部はSZ132を、南西隅部ではSZ143をそれぞれ切り、重複する方形周溝墓のなかでは最も後出する。

方台部 南北長約4.3m、東西長約3.9mで、平面形は南北に長い長方形である。東西両辺は直線的だが、南辺は弧状を呈し、北辺は不整形である。墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 北溝の中央付近で途切れる。周溝の深さは南溝で約0.2mが認められる以外は、約0.1mと遺存状況が悪い。そのため、陸橋部として断定するのが難しい。幅は各周溝とも約1.5mと均一である。断面形は皿形である。埋土1層から7層に分層でき、南溝では中央が窪む堆積を確認した。

遺物出土状況 埋土中から土器824点が出土した。土器はⅤ期～Ⅶ期のものであるが、いずれも小片で摩耗が進んでいる。供献土器は認められなかった。

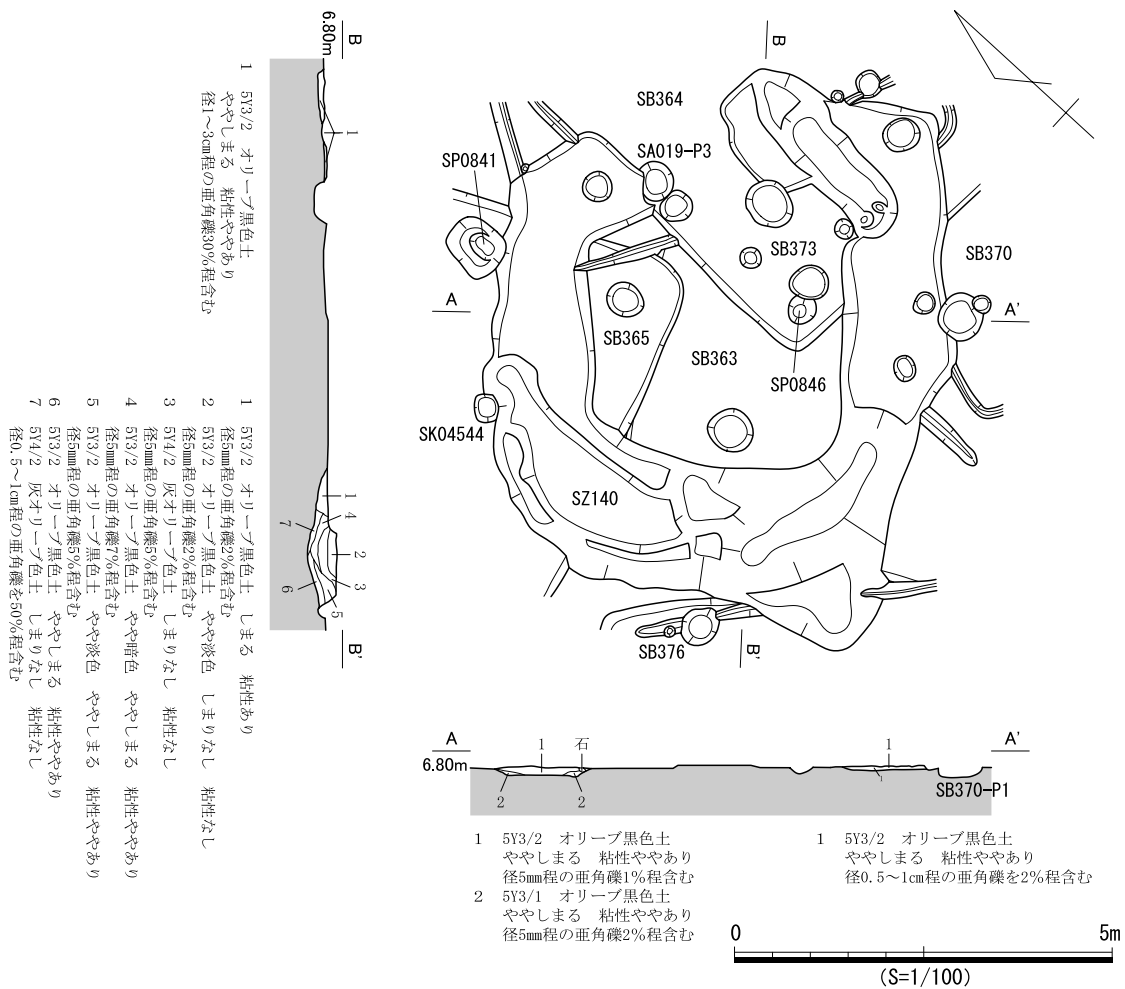


図155 SZ140 遺構図

出土遺物 537はⅦ期甕A4類。口縁端部がわずかに屈折する。538はⅦ期高坏G類。

時期 供献土器が出土しなかったため、出土遺物から時期の推定は困難である。しかし、Ⅰ期のSZ138を切り、Ⅲ～Ⅳ期のSZ143より後出することから、Ⅲ期～Ⅳ期と考えられる。

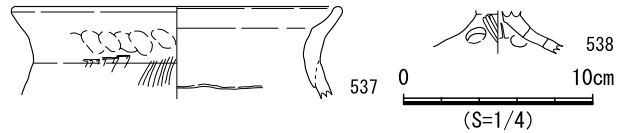


図 156 SZ140 遺物実測図

SZ141 (遺構：図 157・158、遺物：図 159)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB340、SB344、SB367、SB375、SB376の床面で検出した。SZ137、SZ138、SZ142、SZ143、SZ146を切り、重複する方形周溝墓のなかでは最も後出する。

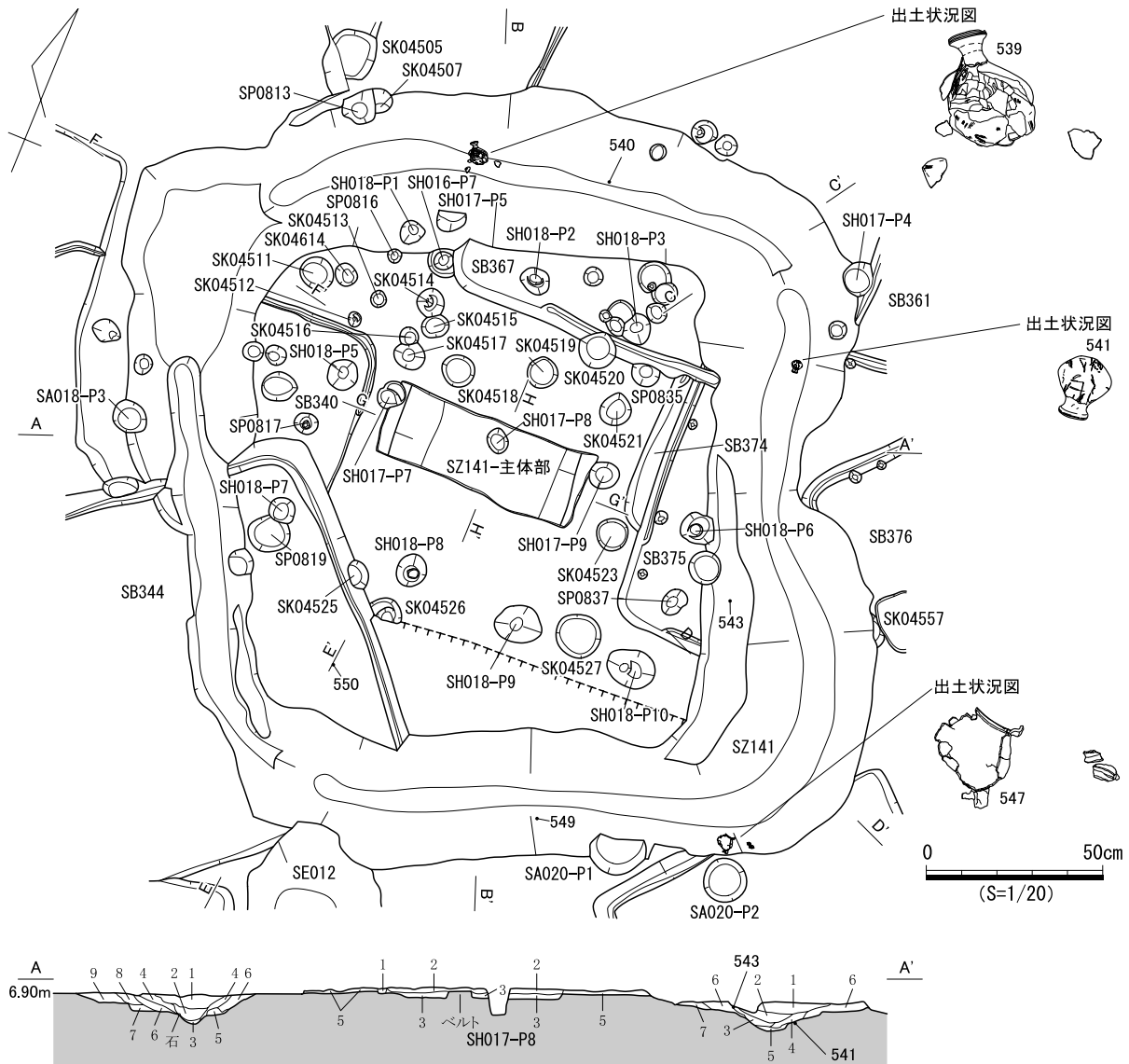
方台部 南北長約8.8m、東西長約8.0mで、平面形は南北に長い長方形である。各辺とも直線的だが、重複する遺構が著しいためか、やや不整形である。また、南西部は周溝の幅が狭くなるため、方台部がやや外側へ突出する。中央部では東西方向に主軸をもつ、長さ2.99m、幅1.06m、深さ0.20mの長方形を呈する大きな土坑を検出した。底面は平坦で、壁面の傾斜は南北側がほぼ垂直であるが、東西側は緩やかである。平面的な位置から主体部である可能性が高い。しかし、検出した土坑が掘形を示すのか棺材の痕跡であるのかは、平面形や埋土から判断できなかった。その埋土からは土器片が2点のみ出土し、1点は時期の特定が困難で、残る1点は縄文時代晩期中葉(546)の土器であった。墳丘埋土はわずかに残存していることを確認でき、主体部は盛土内に構築されている。

周溝 周溝は途切れることなく、全周する。周溝幅は約0.9m～1.5mで、重複する遺構の影響のため、東西両溝の一部のみ検出幅が狭い。断面形はV字形で、壁面傾斜はやや急で、深さは約0.5mである。外縁はやや弧状を呈し、各隅部は丸みを帯びる。埋土は6層～11層に分層した。壁面沿いの分層が細かくできたことから、壁面崩落土が進行した後に埋没したと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,738点、石器類12点が出土した。土器は各周溝から出土し、縄文時代晩期後半、Ⅰ期、Ⅳ期～Ⅴ期に属する。上層では縄文時代晩期後半、Ⅰ期、Ⅴ期の遺物の出土が目立ち、Ⅴ期頃に埋没したと考えられる。また、北溝中央中層からⅣ期壺(539)が口頸部を北側に向けて横位で出土した。床面からやや浮いていることから、周溝掘削後、一定時間が経過後に転落した可能性がある。また、西溝中央やや北側の底面付近から、Ⅳ期壺(541)が周溝の軸に沿うように、口頸部を南側に向けて横位で出土した。いずれも供献土器と考えられる。

出土遺物 539はⅣ期壺A2類。頸部がなだらかに外反して、口縁部が屈折して直立する。外面には凹線3条、その直下の屈折部に刺突文を施文する。頸部にはクシ状工具(2本1組×3単位)による直線文と刺突文が施文されるが、磨耗が著しく、詳細は不明である。胴部はやや縦長の算盤玉にちかい形状である。口頸部同様、磨耗が著しい。頸部から肩部にかけての胴部上半に口頸部と同じ工具で直線文を数帯、その下に直線文と波状文を交互に2帯施文するが、不明瞭で観察が困難である。胴部下半は直線的に底部に向かい、ハケ目が残る。その下には横方向、タタキがわずかに認められる。540はⅤ期壺A類。胴部上半に直線文と振幅の小さい波状文を施文する。541はⅣ期壺A1類。頸部が短く、口縁部までゆるやかに外反し、口縁部が内傾する。端部は平坦で、外面に2条の凹線を施す。胴部は左下がりの細かなハケ目が認められ、その下には右下がりのタタキが認められる。胴部最大径は中央

より下がった位置にあり、肩部の張りは他の同類と比べると弱い。底部外面にもハケ目が認められる。542はV期器台A1a類。口縁部が強く外反し、端部に平坦面を形成する。端部には3個1組の円形浮文が認められる。543、544はI期壺。口縁部が短く外反する。543は口縁端部、頸部に沈線が認めら



SZ141西

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫2%程含む
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫5%程含む
- 3 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり
径1~3cm程の垂角礫7%程含む
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色土 やや暗色 しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫1%程含む
- 5 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫50%程含む
- 6 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性なし
径1~3cm程の垂角礫2%程含む
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 ややしめる 粘性ややあり 礫含まず
- 8 2.5Y5/1 黄灰色土 しまりなし 粘性なし 径0.5~1cm程の垂円礫1%程含む
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりなし 粘性なし 径0.5~1cm程の垂円礫1%程含む

SZ141-主体部・盛土

- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしめる 粘性ややあり 礫含まず
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりなし 粘性なし
径5mm程の垂円礫2%程含む
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土 やや暗色 しまる 粘性あり
5Y3/2オリーブ黒色土を20%程含む
- 4 5Y4/2 灰オリーブ色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしめる 粘性ややあり 礫含まず

SZ141東

- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫3%程含む
- 2 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫3%程と炭化物極小粒5%程含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫3%程と炭化物極小粒5%程含む
- 4 2.5Y3/2 黒褐色土 やや淡色 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫1%程と炭化物極小粒5%程含む
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 6 5Y2/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫1%程と炭化物極小粒1%程含む
- 7 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の垂円礫1%程と炭化物極小粒1%程含む

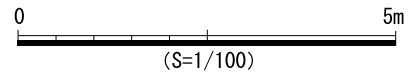
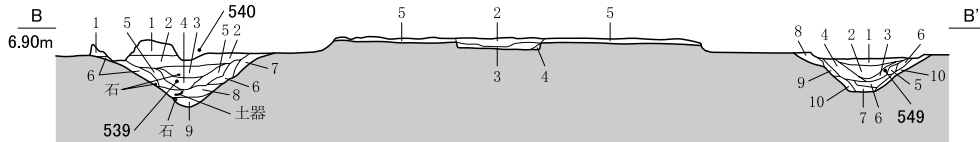


図157 SZ141遺構図(1)

れる。545はI期壺胴部。頸部が内傾し、頸胴部の境に削り出しの段が認められ、その下に沈線を施文する。546は縄文時代晩期中葉の深鉢口縁部。やや外傾して、端部に押圧が認められる。547はIV期甕B1類。口縁部が強く屈曲して直立する。端部は内傾する平坦面を形成する。外面にはやや振幅の小さい波状文を施文する。胴部は頸部からなだらかに膨らみ、肩部が張る。胴部下半は直線的となる。頸部直下から胴部中央まで文様が認められる。頸部直下には直線文2帯の間に刺突文を施文し、下段の直線文からやや離れて胴部中央に振幅の長い、連弧文にもみえる波状文を施文する。548はIV期甕A類の底部。549は叩石。長楕円礫の側縁部上方に多数の敲打痕が観察できる。550は被熱礫。長軸方向



SZ141北

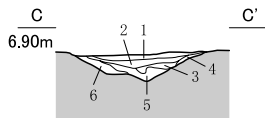
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~5cm程の亜円礫を7%程含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 やや淡色 ややしまる 粘性ややあり 径1cm程の亜円礫を3%程含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm~5cm程の亜角礫を5%程含む
- 4 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 径5mm程の亜角礫1%程含む
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 径2cm程の亜角礫を1%程含む
- 6 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 径3cm程の亜角礫を1%程含む
- 7 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 8 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 径5mm程の亜角礫を1%程含む
- 9 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 径7cm程の亜角礫1%程含む

SZ141-主体部・盛土

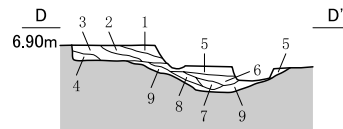
- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりなし 粘性なし 径5mm程の亜円礫2%程含む
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土 やや暗色 しまる 粘性あり
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土を20%程含む 5Y4/2 灰オリーブ色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず

SZ141南

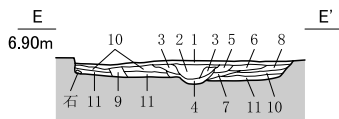
- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm程の亜円礫1%程含む
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 径1cm~3cm程の亜円礫を1%程含む
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 8 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 9 5Y4/2 灰オリーブ色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 10 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず



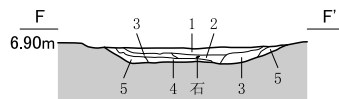
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性なし 礫含まず
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 径0.5~1cm程の亜円礫5%程含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 やや暗色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 径0.5~1cm程の亜円礫5%程含む
- 6 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 径0.5~1cm程の亜円礫50%程含む



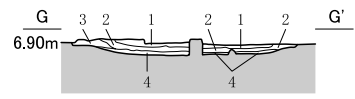
- 1 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5cm程の亜角礫を5%程含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 径0.5cm程の亜角礫を5%程含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 やや淡色 しまる 粘性あり 径0.5cm程の亜角礫を5%程含む
- 4 2.5Y3/2 黒褐色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 5 2.5Y3/1 黒褐色土 やや暗色 しまる 粘性あり 径0.5~3cm程の亜角礫を5%程含む
- 6 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 径0.5cm程の亜角礫を2%程含む
- 7 5Y2/2 オリーブ黒色土 やや淡色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 8 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 9 5Y2/1 黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり 径2~3cm程の亜円礫1%程含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 やや暗色 しまる 粘性あり 炭化物小粒5%程含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色土 やや淡色 しまる 粘性あり 径5mm程の亜円礫3%程含む
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 径5mm程の亜円礫1%程含む
- 6 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 7 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 9 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず
- 10 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 礫含まず
- 11 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり 礫含まず

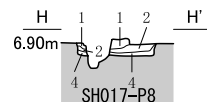


- 1 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~5cm程の亜角礫を7%程含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm程の亜角礫を2%程含む
- 3 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm程の亜角礫を5%程含む
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1~3cm程の亜角礫を30%程含む
- 5 5Y2/2 オリーブ黒色土 やや暗色 しまる 粘性あり 径1~3cm程の亜角礫を1%程含む



G-G' H-H'

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 やや淡色 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 礫含まず



SH017-P8
0 5m
(S=1/100)

図158 SZ141 遺構図(2)

に割れており、表面と割れ面の一部が被熱により赤変している。

時期 供献土器の時期から、IV期後半と考えられる。

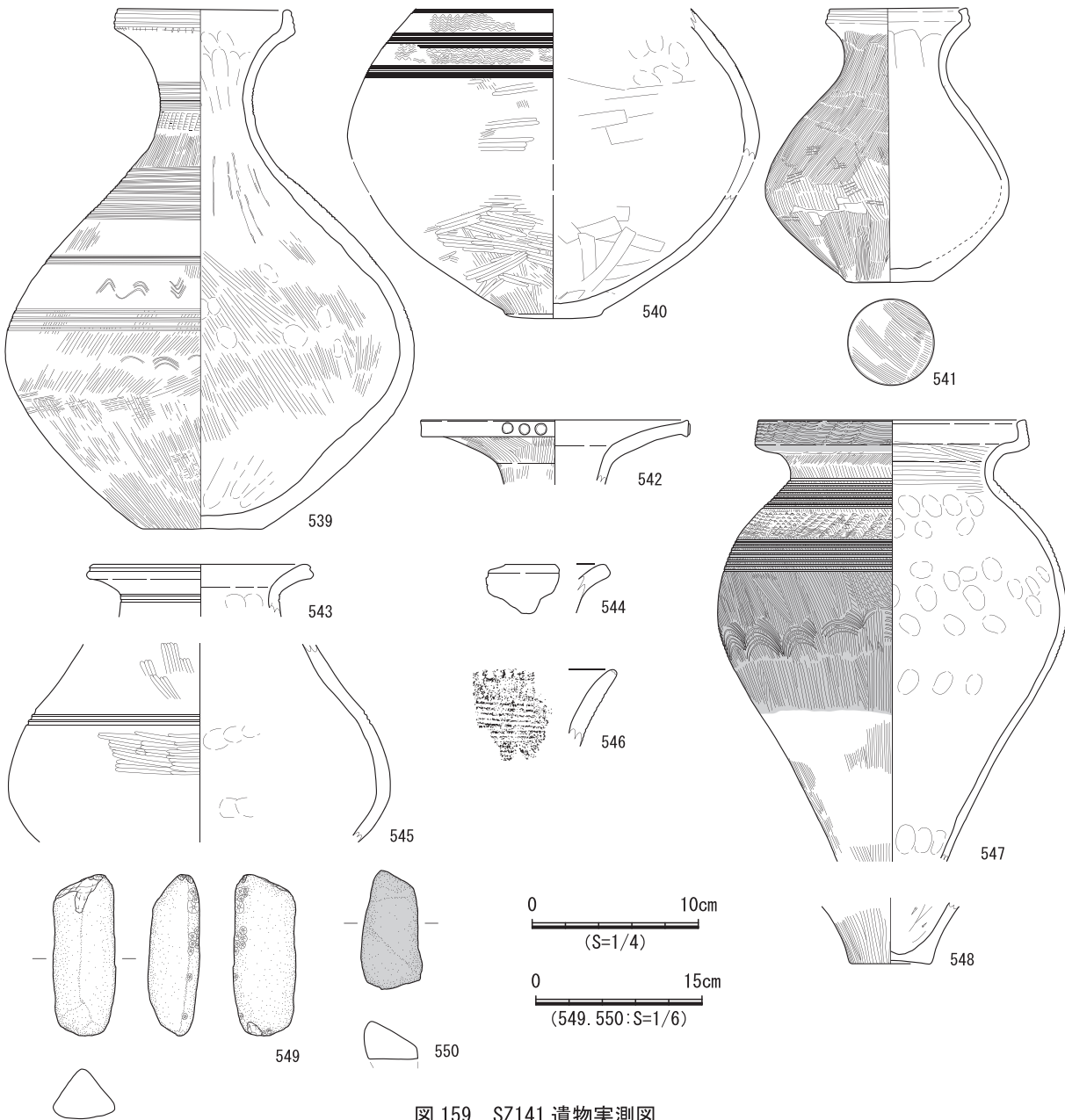


図 159 SZ141 遺物実測図

SZ142 (遺構：図 160)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB332、SB338、SB339、SB344、SB350の床面で検出した。南東溝と北東溝はSZ141に切られる。周囲の遺構との重複が著しく遺存状況が悪いが、周溝が巡ることから周溝墓と考えた。

方台部 南北長は不明で、東西長約5.4mである。確認したいずれの辺も不整形で、北隅部と東隅部は鈍角である。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝外縁の平面形は不整形を呈し、北隅部と東隅部は鈍角である。幅は約1.0m～1.5mで、深さは約0.2mと浅く、底面は平坦な箇所が多く、壁面の傾斜は緩やかである。なお、南隅部に陸橋を

形成する。埋土は3層～5層に分層し、埋土下層を中心にブロック土の混入が認められるため、埋没当初は壁面崩落が進行したと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器49点が出土したが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 供献土器が出土しなかったため出土遺物から時期の推定は困難であるが、IV期のSZ141に切られるためIV期以前と考えられる。

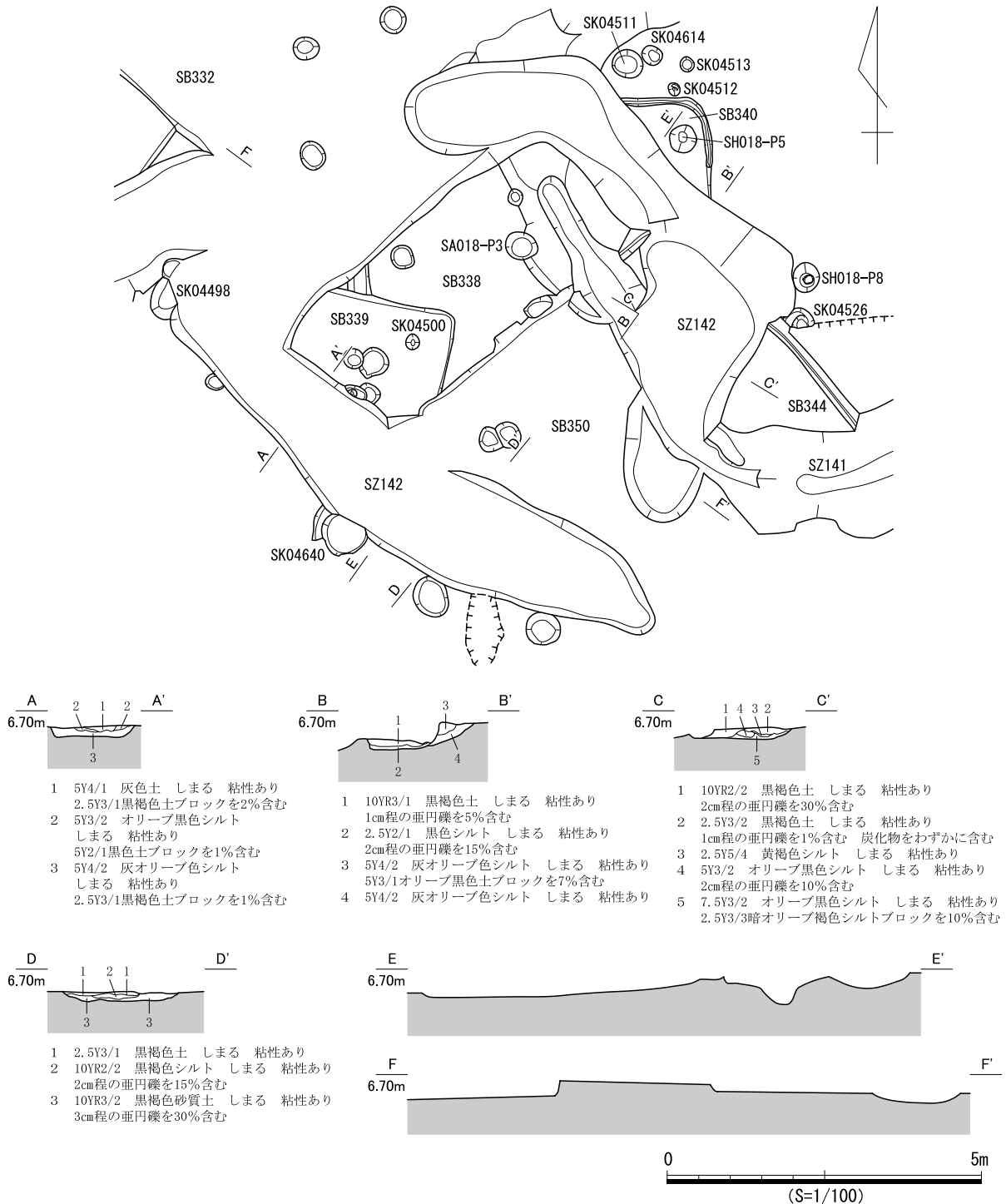


図 160 SZ142 遺構図

SZ143 (遺構：図 161、遺物：図 162)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西溝を後出するSZ141によって滅失するが、残る北溝、東溝、南溝をSB376～SB378の床面で検出した。北東隅でSZ139を切り、西溝をSZ141とSZ146に、北東隅をSZ143に切られる。検出当初は、北溝とそれに続く東溝北半の一部を確認し、東溝南半と南溝が不明であった。その後、周囲の遺構掘削の進行に伴い東溝南半と南溝を確認したが、それぞれの図を個別に作成したため、掘削によって消失した東溝の北半分をハーフトーンで示した。

方台部 北辺がやや直線的で、東辺と南辺は弧状を呈する。東西長は不明で、南北長約は4.0mである。北東隅部、南東隅部とも丸みをもつ。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 西溝以外を確認した。幅は北溝約1.3m、東溝約2.1m、南溝約2.1mで、北溝の幅が狭い。全体的に浅く、底面は平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。埋土は1層～5層に分層した。ブロック土の混入がみられず、その成因は不明である。

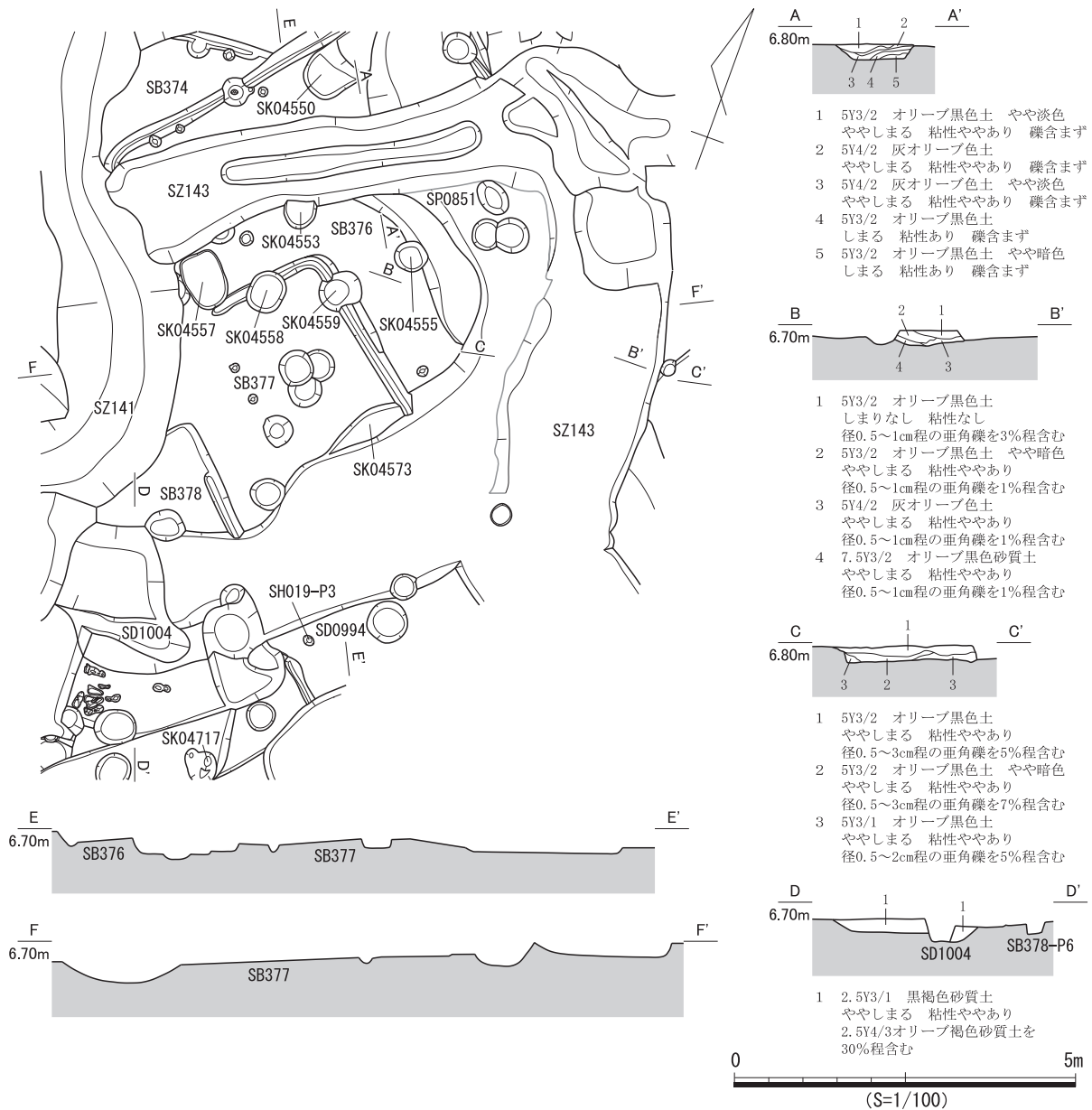


図 161 SZ143 遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器978点、石器類2点が出土した。土器はV期～VII期の小片が大半であり、図示していない。

出土遺物 551は砥石。側面の2面が使用により大きく窪み、上端は折損している。本来の全体形は撥形を呈していた可能性が高い。

時期 供献土器が出土しなかったため出土遺物から時期の推定は困難であるが、II期～IV期のSZ139を切り、IV期後半のSZ141に切られることから、II期～IV期と考えられる。

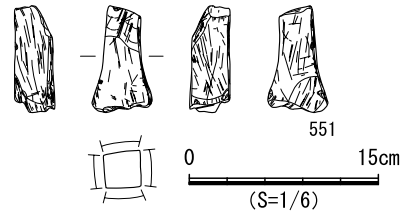


図 162 SZ143 遺物実測図

SZ146 (遺構：図 164、遺物：図 163)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SZ141とSZ147に切られ、南溝は検出できなかった。竪穴住居跡との重複が著しく、SB360、SB378、SB395、SB396の床面で検出した。そのためか、周溝の外縁、内縁ともに不整形である。

方台部 南北長は不明であり、東西長約10.1mである。確認した各辺とも弧状を呈し、隅部は丸い。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝幅は東溝約1.5m、北溝約1.8m、西溝約2.1mと不揃いである。深さは東溝、西溝とも約0.3m～0.4mとほぼ一定だが、北溝は約0.1mと浅い。底面は全体的に平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

遺物出土状況 埋土中から土器975点が出土した。土器は縄文時代晩期～I期、V期～VII期のものが出土したが、供献土器といえる土器は認められなかった。

出土遺物 552はV期甕A類。口頸部を欠損する。小さな底部から胴部が直線的に外傾しながら立ち上がり、肩部が張る。553、554はVI期甕A2a類。口縁部が頸部で屈曲して外方へ伸び、端部でわずかに直立する。端部はやや平坦で、胴部はあまり膨らまず、胴部径は口径を大きく下回る。頸部直下に刺突文が認められる。555はIV期壺H類。古井式の壺の胴部片と考えられる。556は縄文時代晩期後半の深鉢口縁部。端部に強い平坦面が認められ、やや下がった位置に素文突帯を貼付する。内外面に条痕が認められる。

時期 供献土器が出土しなかったため出土遺物から時期の推定は困難であるが、IV期のSZ141とSZ147に先行することから、IV期以前の可能性がある。

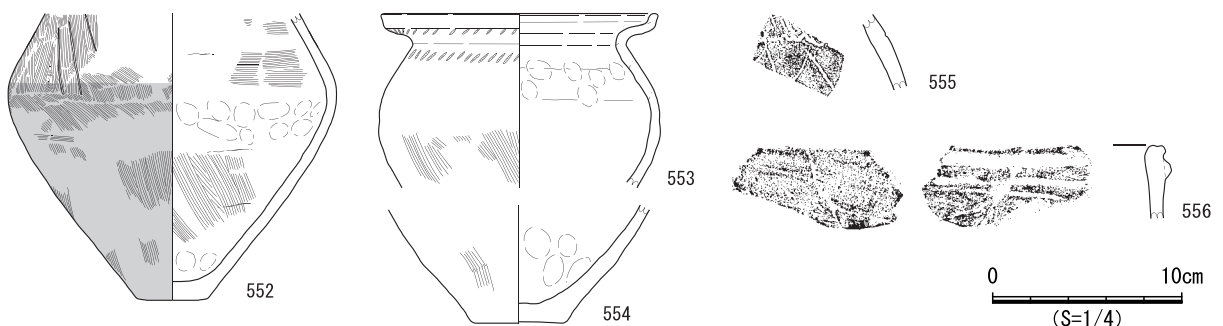


図 163 SZ146 遺物実測図

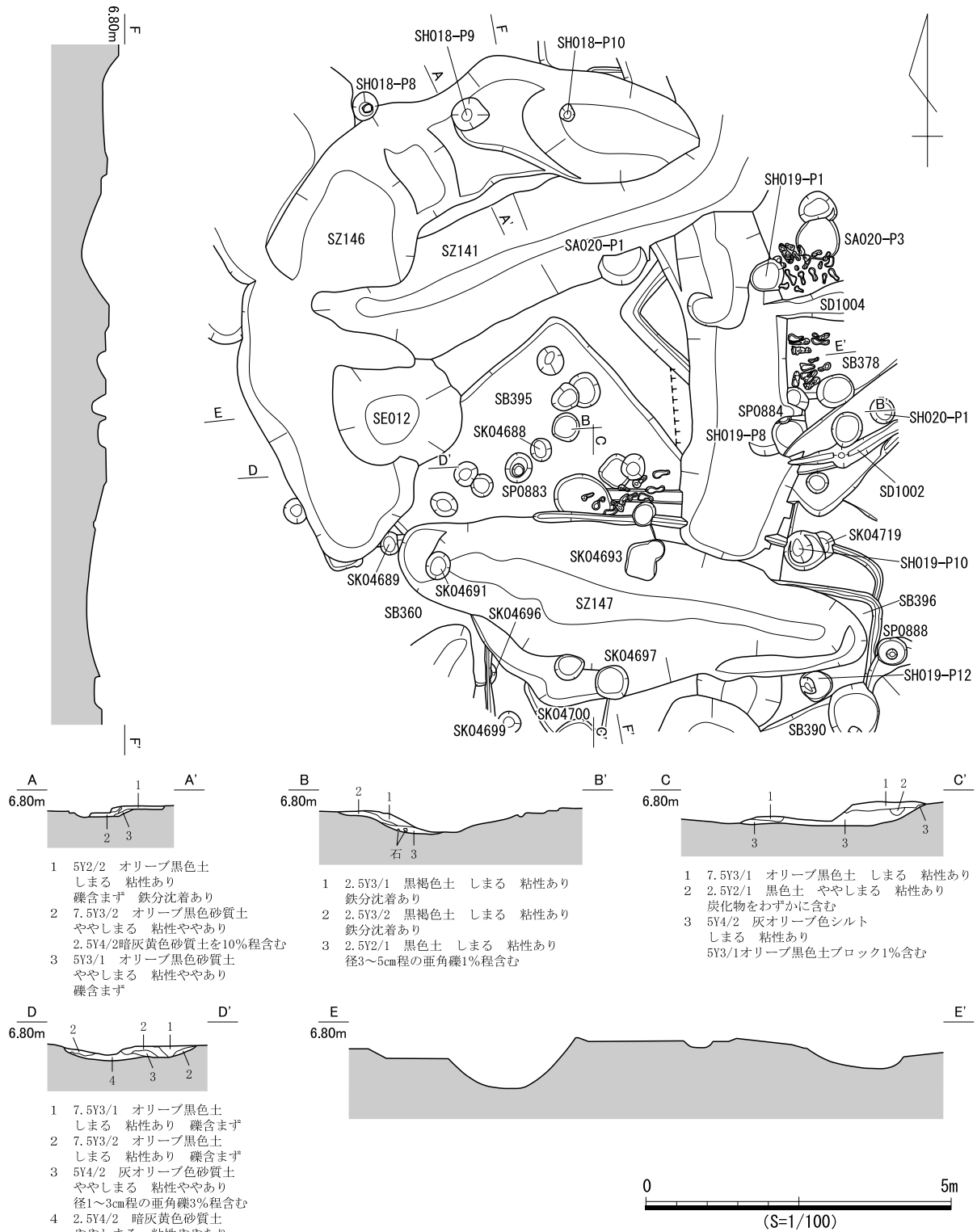


図 164 SZ146 遺構図

SZ147 (遺構：図 165、遺物：図 166)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB390、SB396、SB397、SB399、SB408の床面で検出した。東側はSZ145に、南側はSZ148にそれぞれ近接し、北側でSZ146を切る。なお、周溝の全形を確認できた。

方台部 南北長約7.7 m、東西長約7.6 mでほぼ正方形を呈する。東辺、南辺、西辺は直線的だが、北辺はやや歪んでいる。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝幅は約1.7 m～2.2 mで、西溝のみやや狭い。東溝と西溝は深さ約0.3 mで、壁面の傾斜は緩やかで断面形は皿形である。南溝は深さが約0.5 mあり、断面形がV字形を呈する。周溝は内縁、外縁とも直線的である。北溝は他の周溝と繋がらず、両端に陸橋部を形成する。埋土は4～6層に分層した。埋土中にブロック土はみられないが、南溝では壁面に沿った細かい分層が可能であったので、

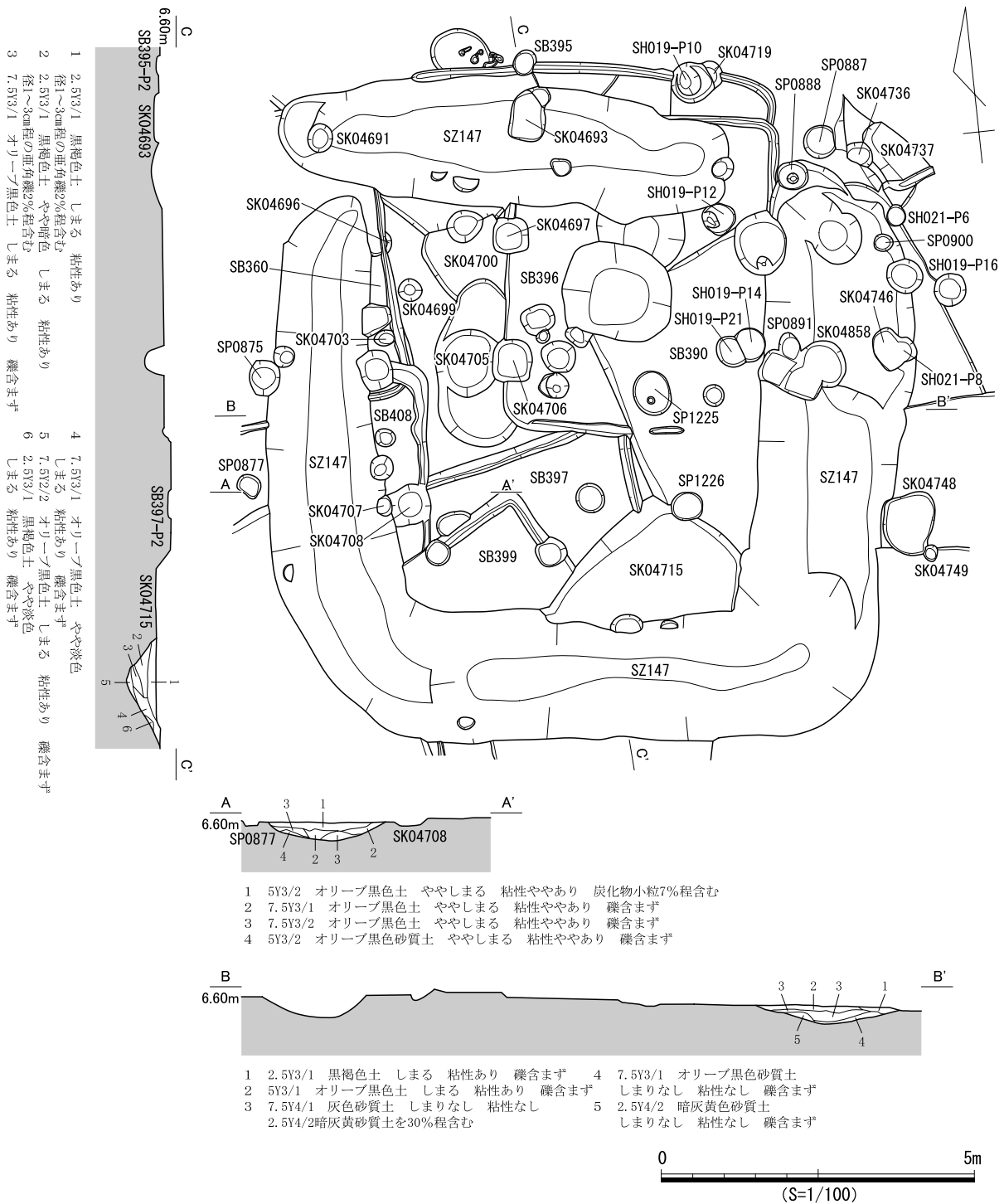


図 165 SZ147 遺構図

埋没当初は壁面崩落により埋没したと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,551点が出土した。土器の多くは埋土上層で出土しており、IV期～VII期に属するが、供献土器といえる土器は認められなかった。

出土遺物 557、558はIV期壺H類。胴部の破片で斜格子状の文様が認められる。559はIV期甕A2類。口縁部がくの字に屈折する。タタキが内外面に認められ、外面はハケ調整の後にタタキが施され、出土資料のなかでは少数例である。560はV期甕B1a類。口縁部が外反する。561はVI期高坏C3a類。口縁部が坏底部で屈曲して、直線的に立ち上がる。脚部は付根からやや外反しながら開き、裾部でやや内湾する。坏底部の段は顕著である。脚裾部内外面に煤が付着する。562はV期高坏脚部。直線文3帯が施文される。563はVI期～VII期の土製品。直径5.0cmの土玉で中央に4mmの孔が認められる。

時期 供献土器が出土しなかったため、出土遺物から時期の推定は困難である。遺構の重複ではⅢ期以前のSZ146を切る。本遺構はIV期のSZ141、SZ148、SZ152と同じ列上に位置しており、出土遺物にもIV期の土器が含まれているため、IV期と考える。

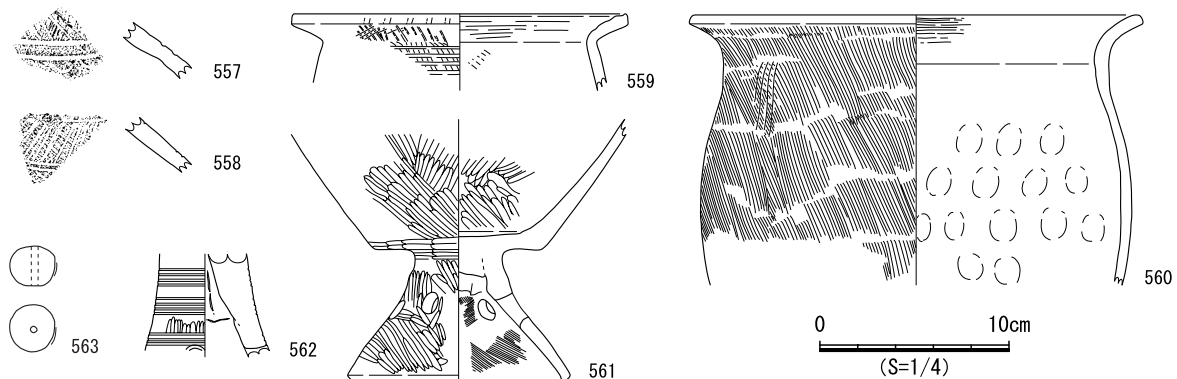


図166 SZ147 遺物実測図

SZ148 (遺構：図167～169、遺物：図170・171)

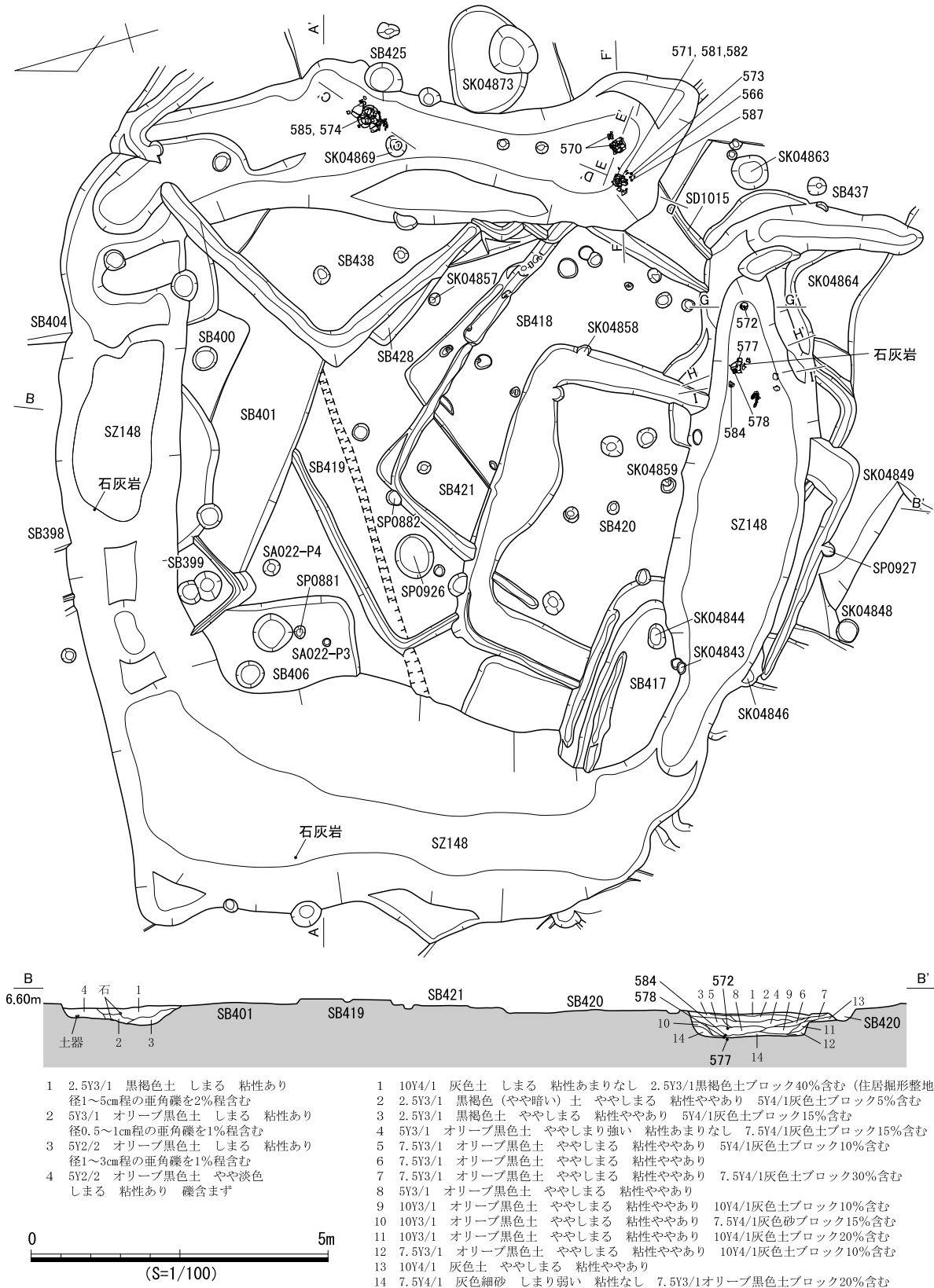
検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB399、SB400、SB404、SB406、SB418～SB421、SB425、SB437の床面で検出した。なお、周溝の全形を確認した。

方台部 南北長約9.4m、東西長約10.9mで、東西に長い長方形を呈する。東辺、北辺は直線的で、西辺、南辺はやや歪む。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝幅は西溝のみが約3.1m～3.8mと広いが、他は約2.1mである。深さは南溝が約0.5mと深く、その他の溝は約0.3mである。底面は南溝がほぼ平坦であるが、他は丸みを帯びる。また、壁面の傾斜も南溝が急であるが、他は比較的緩やかである。各周溝とも外縁は不整形で、西溝から南溝にかけてはやや弧状となる。南東隅部が途切れ、陸橋部を形成する。南西隅部は幅0.7mと幅が狭くなる。埋土は4層～14層に分層した。南溝ではブロック土の堆積が顕著であるが、他の溝ではほとんど確認できず、場所によって堆積状況が異なっていたと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器3,333点、石器類16点が出土した。上層からV期～VII期の土器片、底面付近からIV期の土器が出土した。IV期の土器は陸橋部の両側と東溝中央から出土した。破損した状態のものが認められるが、なかには遺存状況のよいものがあり供献土器と考えられる。陸橋部の北側からはIV期壺(570、571)、甕(581、582)、南側からはIV期壺(572)、甕(577、578、584)が出土し

た。570は口頸部を欠損し横位で、571と581、582は潰れた状況で出土した。南側から出土した572、577、584は破損が目立ち、転落した可能性がある。大型品のIV期壺(574)は横位で東溝中央より出土し



- | | | |
|--|--|---|
| <p>1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり
径1~5cm程の歪角礫を2%程含む</p> <p>2 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり
径0.5~1cm程の歪角礫を1%程含む</p> <p>3 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまる 粘性あり
径1~3cm程の歪角礫を1%程含む</p> <p>4 5Y2/2 オリーブ黒色土 やや淡色
しまる 粘性あり 礫含まず</p> | <p>1 10Y4/1 灰色土 しまる 粘性あまりなし</p> <p>2 2.5Y3/1 黒褐色 (やや暗い) 土 ややしまる 粘性ややあり 5Y4/1灰色土ブロック5%含む</p> <p>3 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y4/1灰色土ブロック15%含む</p> <p>4 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまり強い 粘性あまりなし 7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む</p> <p>5 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y4/1灰色土ブロック10%含む</p> <p>6 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり</p> <p>7 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり</p> <p>8 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり</p> <p>9 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y4/1灰色土ブロック10%含む</p> <p>10 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰色砂ブロック15%含む</p> <p>11 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y4/1灰色土ブロック20%含む</p> <p>12 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y4/1灰色土ブロック10%含む</p> <p>13 10Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり</p> <p>14 7.5Y4/1 灰色細砂 しまり弱い 粘性なし 7.5Y3/1オリーブ黒色土ブロック20%含む</p> | <p>2.5Y3/1黒褐色土ブロック40%含む (住居掘形整地土)</p> <p>7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む</p> <p>7.5Y4/1灰色土ブロック30%含む</p> |
|--|--|---|

図 167 SZ148 遺構図 (1)

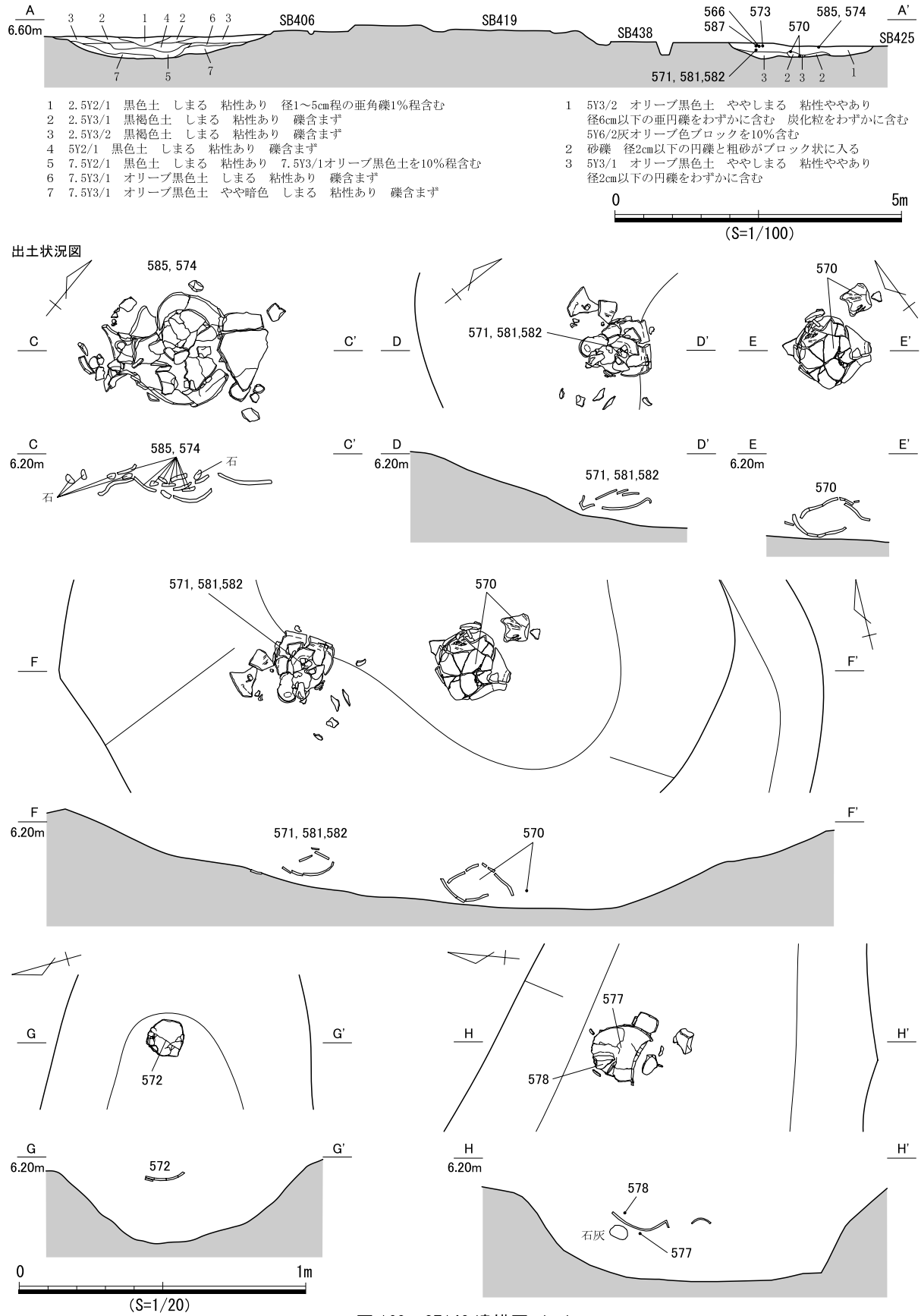


図 168 SZ148 遺構図 (2)

た。供献土器の可能性が高い。また、北溝中央と西溝中央北寄り、南溝東端の3箇所まで石灰岩が出土した。いずれも底面よりはやや上位で出土したが、遺跡内で産出するものではなく、周辺から持ち込まれたものと考えられる。なお、南溝から玉(591)が出土した。

出土遺物 564はⅢ期壺A3類。緩やかな外反する頸部から口縁部が短く内傾する。外面には2個1組の円形浮文が認められる。頸部から胴部上半にかけてクシ状工具(3本1組×3帯)による直線文が3帯~4帯認められる。565、566はⅣ期壺A1類。頸部がやや外反して、口縁部が直立する。2条の凹線文が認められる。567はⅣ期

壺A2類。袋状口縁を呈し、凹線文4条と刺突文が認められる。568はⅣ期壺B2類。強く外反する頸部から口縁部が直立する。端部は内傾面を形成し、凹線文が3条認められる。569はⅢ期壺A類胴部。クシ状工具(2本1組×3帯)による縦位と横位の直線文が認められ、564と文様構成が類似する。570、572、573はⅣ期壺A1類胴部。570は細身の頸部から胴部が強く膨らみ、最大径は中央に位置する。頸部に1条の沈線が認められる。胴部には「×」状の線刻が認められる。573は肩部が強く張る。571は壺A2類胴部。直線文と波状文が交互に施文される。574は大型品のⅣ期壺A1類。口縁部に3条の凹線文が認められる全高46.4cmの大型品。頸部に突帯を貼付して、その上に刺突文を施文する。胴部はなだらかに膨らみ、最大径は中央にある。577~579、581~583はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈曲して、胴部がなだらかに膨らむ。579は小さな底部から胴部がなだらかに膨らみながら立ち上がり、最大径が胴部上半に位置する。581、582は、胴部外面にハケ調整以前のタタキが顕著に認められる。胴部上半はヨコ方向、下半は左下がりである。583は胴部にヨコハケと刺突文が認められる。580、584は甕A類胴部。小さな底部から胴部はなだらかに膨らむ。585はⅣ期甕B2類。口縁部が短く内傾する。586はⅤ期甕A1類。口縁部が頸部から強く屈曲して、直立する。端部には内傾する平坦面を形成する。587はⅣ期高坏A類。口縁部が内湾し、端部は平坦である。凹線文が4条認められる。588はⅥ期甕B2類。口縁部がくの字に屈折して、端部は平坦で刺突文が施文される。頸部直下に大ぶりの刺突文が認められる。589は胎土、焼成などからⅦ期~Ⅷ期と考えられる土製品。外縁の直径10.0cm、内縁の直径が5.4cmの円形を呈するが、外縁と内縁の形状はやや不揃いである。断面は外縁の方へ向かって高さを減ずる台形状である。表面には平行する沈線が施文される。形状や文様から石釧に類似する。590はⅠ期甕底部。粉痕が認められる。591は玉類。灰白色から緑色を呈する石材で製作されており、穿孔の直径は上端が7mm、下端が3mmである。

時期 供献土器の時期から、Ⅳ期と考えられる。

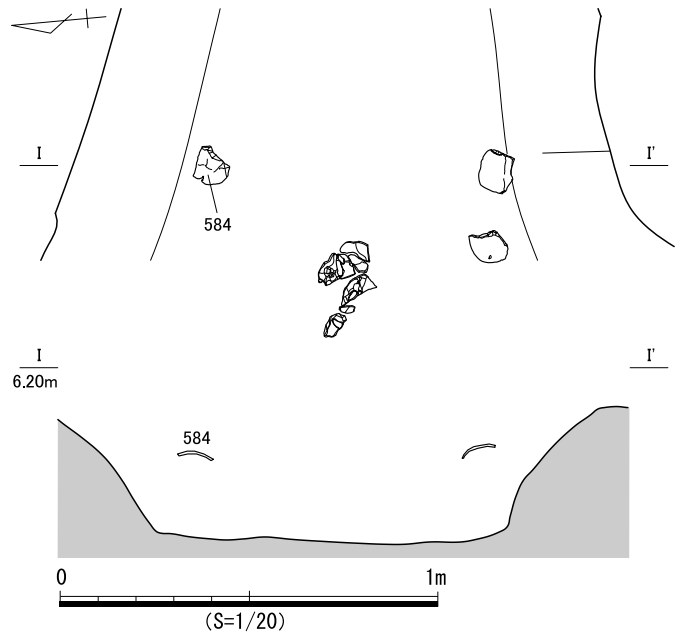


図 169 SZ148 遺構図(3)

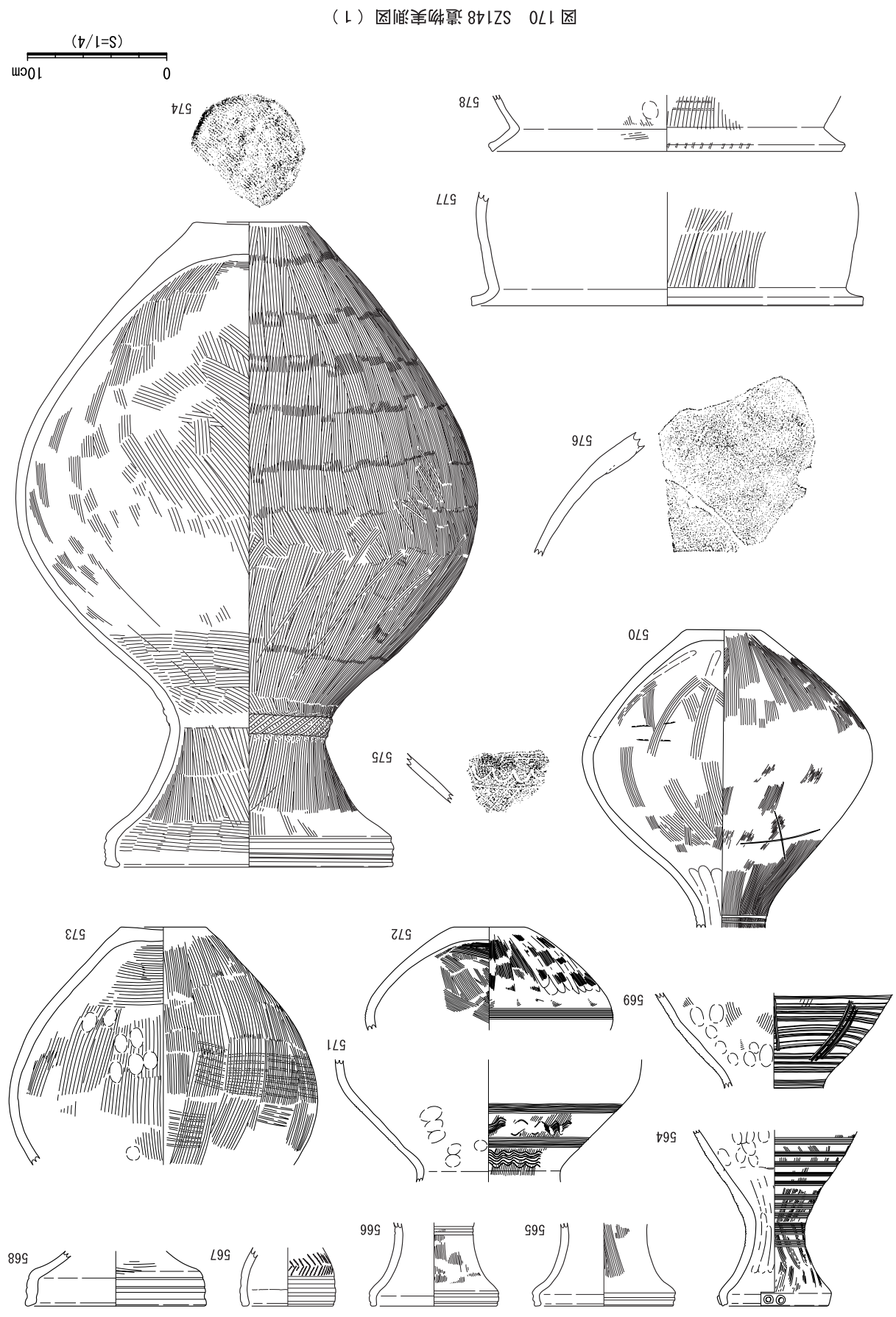


図 170 SZ148 遺物実測図 (1)

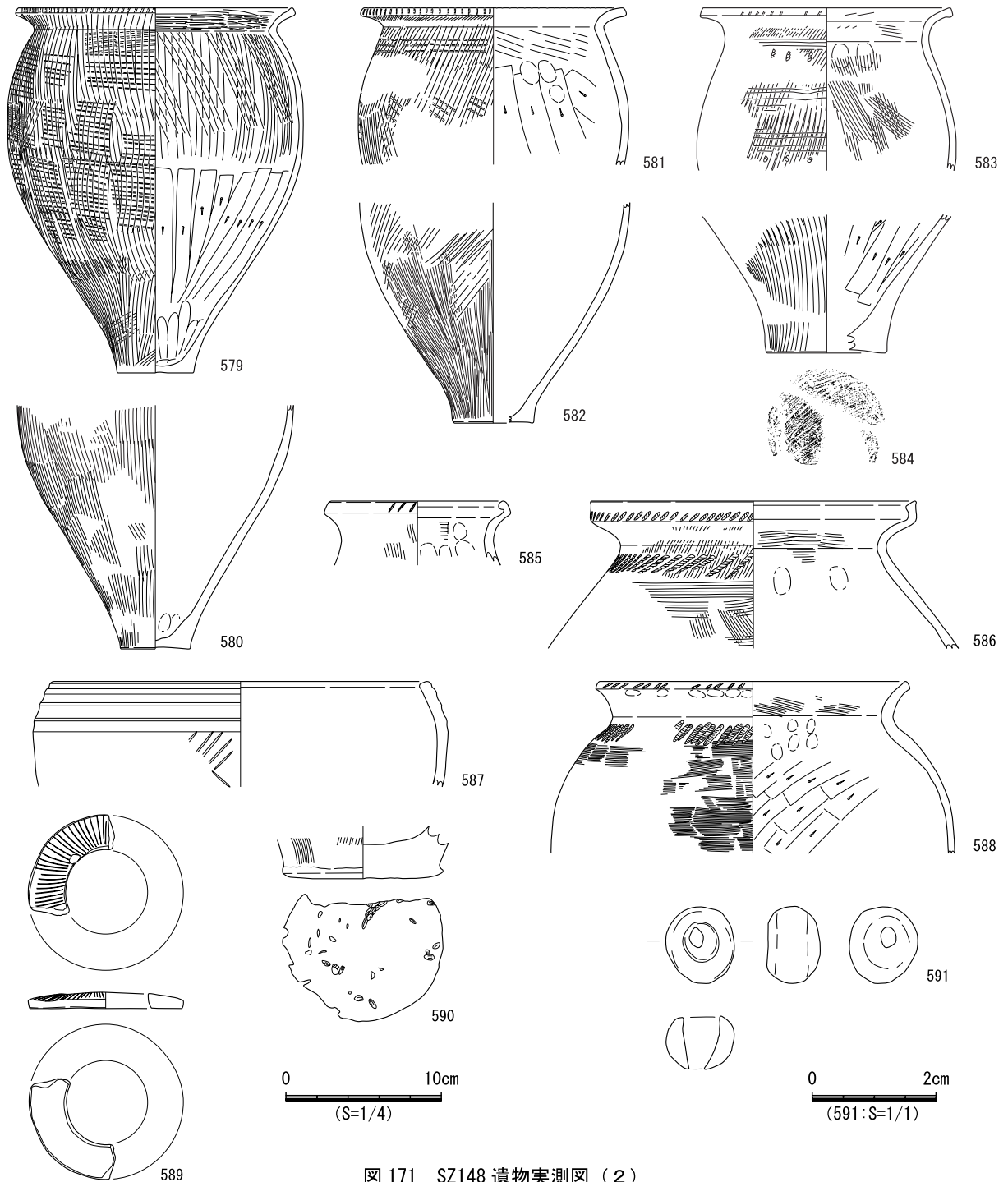


図 171 SZ148 遺物実測図 (2)

SZ149 (遺構：図 172、遺物：図 173・174)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB352、SB405、SB407、SB412の床面で検出した。北溝と東溝を確認したが、西溝、南溝は確認できなかった。北溝と東溝から供献土器が出土したことから溝の断面形状から、方形周溝墓と考えた。なお、東側でSZ148に切られる。

方台部 規模は不明であり、東辺は直線的であるが、北辺はやや蛇行する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 北溝は幅約 1.3 m、深さ約 0.3 m で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、壁面傾斜は急

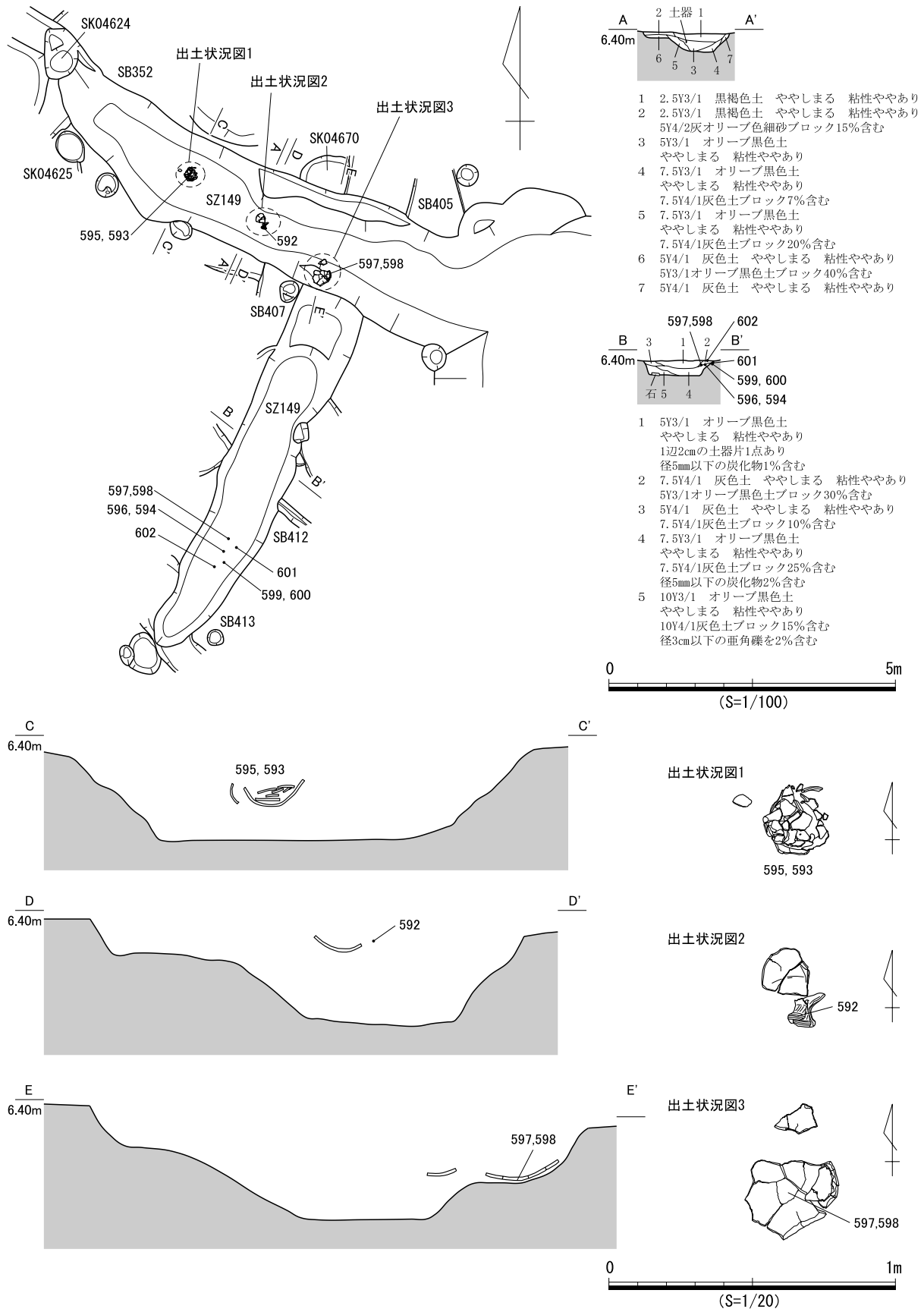


図 172 SZ149 遺構図

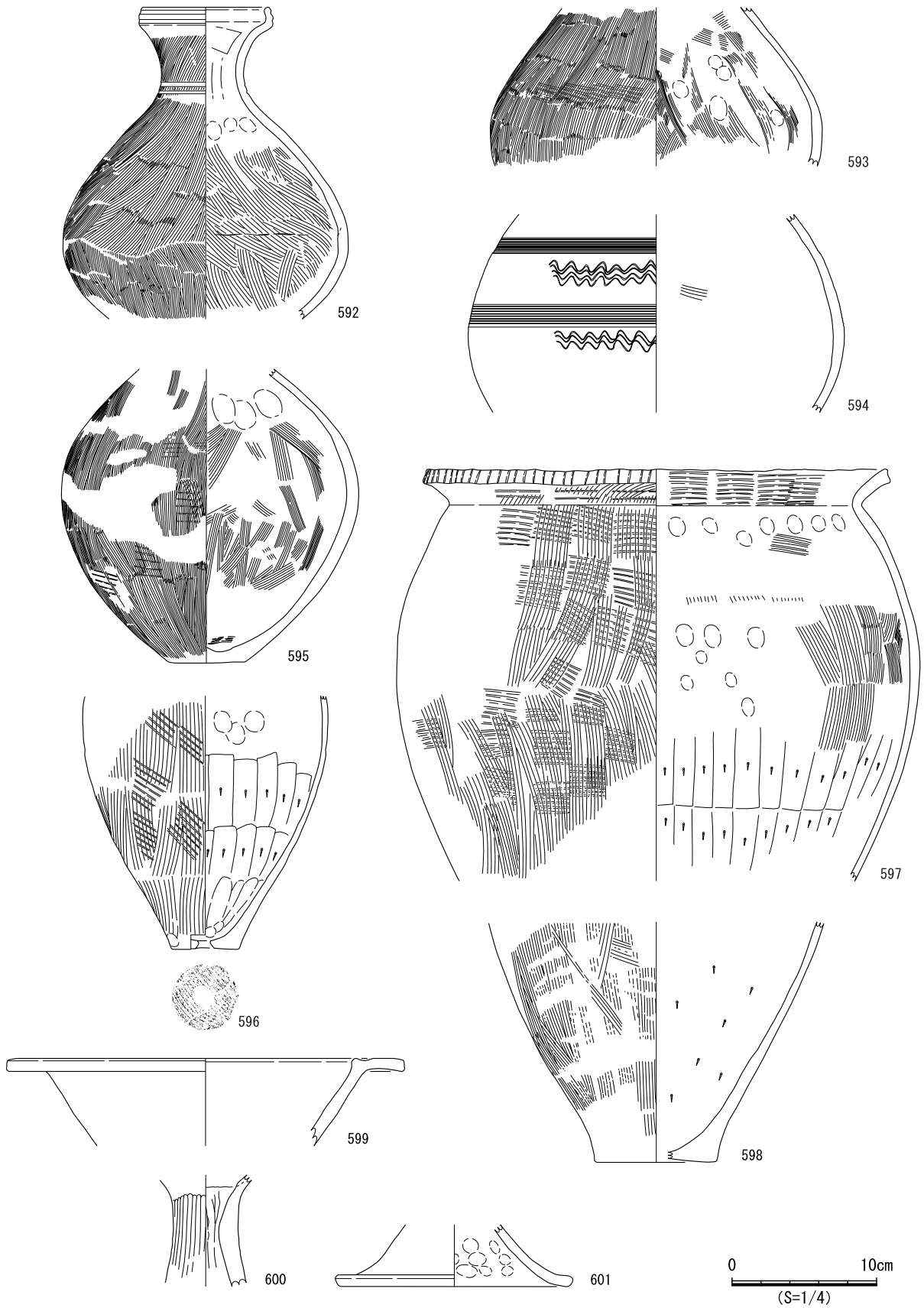


图 173 SZ149 遺物実測図 (1)

である。東溝は幅約1.2m、深さ約0.4mで、断面形は北溝と同じく逆台形である。底面は平坦で、壁面は直立気味である。埋土はいずれも上層から下層までブロック土の混入が多く、壁面崩落土の堆積とともに人為堆積も想定される。

遺物出土状況 埋土中から土器1,109点、石器類11点が出土した。土器の多くがIV期のもので、上層から少量のV期～VII期の破片が出土した。北溝からは3個体の供献土器が出

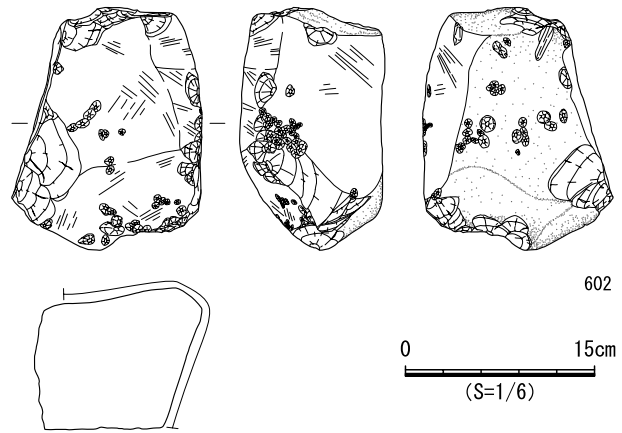


図174 SZ149 遺物実測図(2)

土した。壺は2個体(592、595)出土し、いずれも北溝底面中央付近に位置する。595は口頸部を欠損するが、胴部は完存する。592は口頸部から胴部の一部が現存し、破損した状況で出土した。いずれも底面より上位で出土し、溝埋没過程で周囲から転落した可能性がある。甕A類(597)は北溝の南壁面で破損した状況で出土し、その底部と考えられる破片(598)は東溝から出土した。

出土遺物 592はIV期壺A1類。緩やかに外反する頸部から口縁部が直立する。端部には打ち欠きが認められ、2条の凹線文が認められる。頸部には2条の沈線が認められる。胴部はなだらかに膨らみ、胴部最大径は胴部下半にある。593、595はIV期壺A1類胴部。595は底部から胴部はなだらかに膨らみ、最大径は中央付近にある。594はIV期壺A2類胴部。上半には直線文と波状文が認められる。596はIV期甕A類胴部。小さな底部から胴部が内湾しながら立ち上がる。底部に穿孔が認められる。597、598はIV期甕A2類で大型品。口径は32.4cmで、口縁部がくの字に屈折する。口縁端部の平坦面はタタキによって形成する。底部には摩耗したハケ目が認められ、胴部が緩やかに内湾しながら立ち上がる。右下がりのタタキが認められる。599はIV期高坏B類。口縁部が水平に伸びる。600は599の脚部。柱状を呈する。601はV期器台A類。裾部が強く外反する。602は砥石。垂角礫の扁平な面のうち2面を砥面として使用し、敲打痕も複数観察できる。

時期 供献土器の時期から、IV期と考えられる。

SZ150 (遺構：図175・176、遺物：図177)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB391、SB393、SB402、SB433、SB488の床面で検出した。西側は2010年度、東側は2011年度の調査で検出しており、溝がのびる方向と検出時の埋土が方形周溝墓としては黒色を帯びている点が類似していたため、同一の遺構と判断した。平面形は北西隅を除いて明瞭であり、北東側でSZ179に切られる。

方台部 規模は不明であるが、東西に長い長方形と考えられる。墳丘は確認できなかった。方台部内にあるSK04877、SK04884が主体部の可能性があるが、土坑内から主体部と判断できるような遺物は出土しなかった。いずれの土坑も東側が調査区域外にあり、全形は不明である。検出時の埋土は周溝埋土と類似し、中層から下層にかけてブロック土が混入している。

周溝 幅約1.1～2.3m、深さ約0.2m～0.8mであり、南東側の幅が狭い。溝の北東側と南東側は底面が平坦で、壁面の傾斜は急であるが、西溝は底面が丸みを帯び、壁面の傾斜は東側ほど急ではない。

埋土は2層～10層に分層した。いずれの溝でも底面付近にブロック土の混入があり、当初は壁面崩落により埋没したと考えられる。また、西溝では上層から下層まで炭化粒と炭化材の混入が顕著に確認できた。なお、北西隅部は溝の掘削が浅く、陸橋状を呈する。

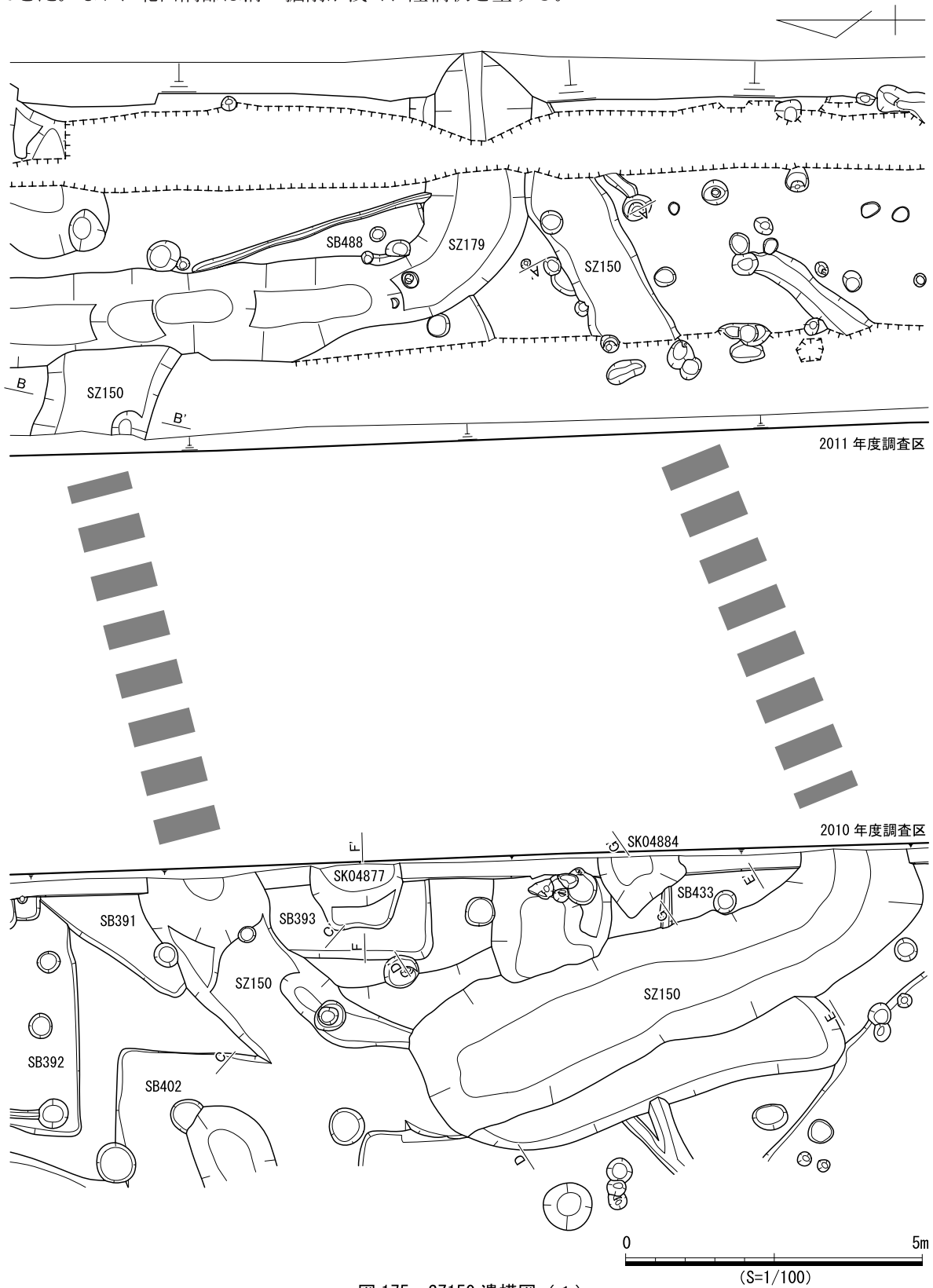


図175 SZ150遺構図(1)

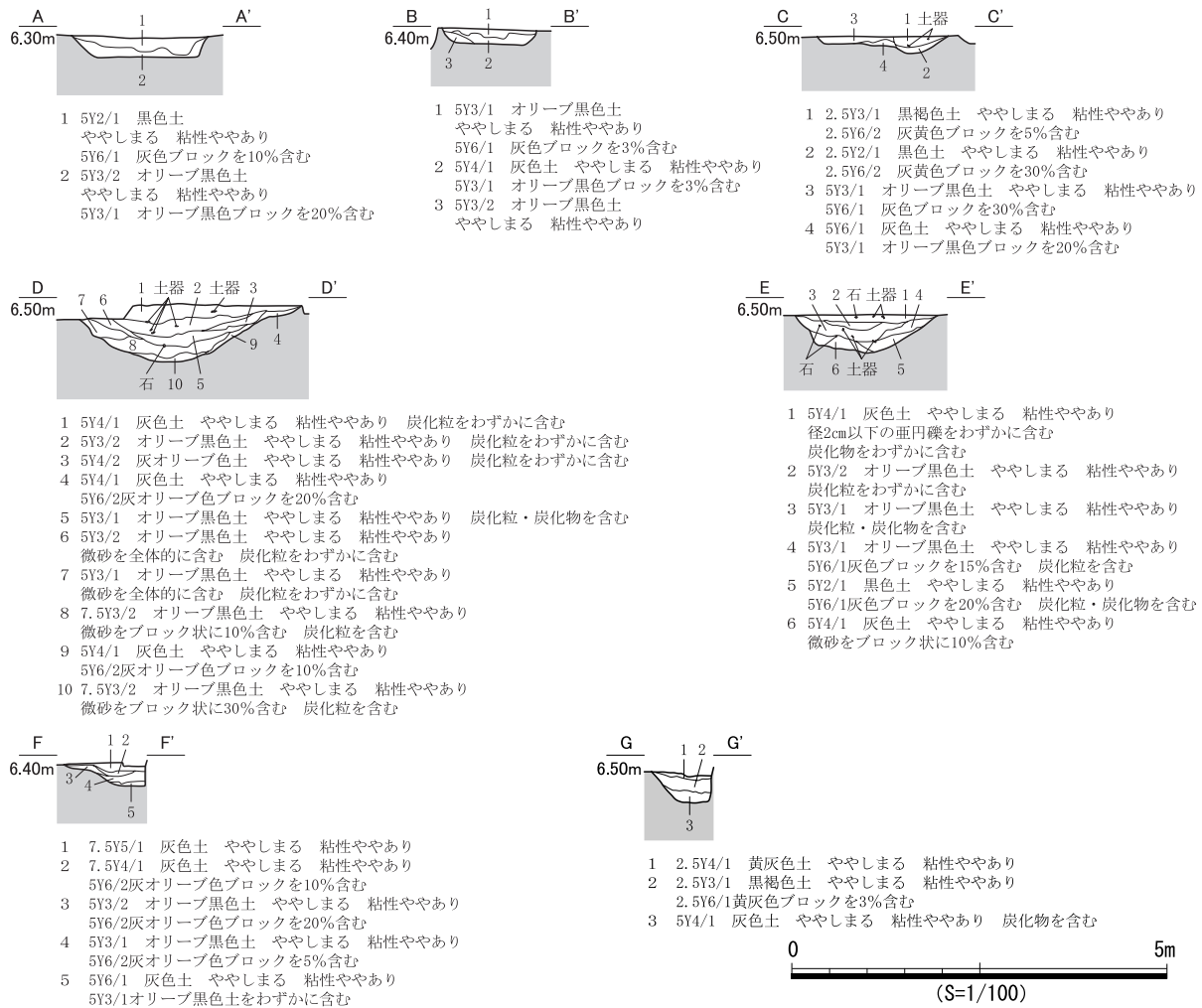


図 176 SZ150 遺構図 (2)

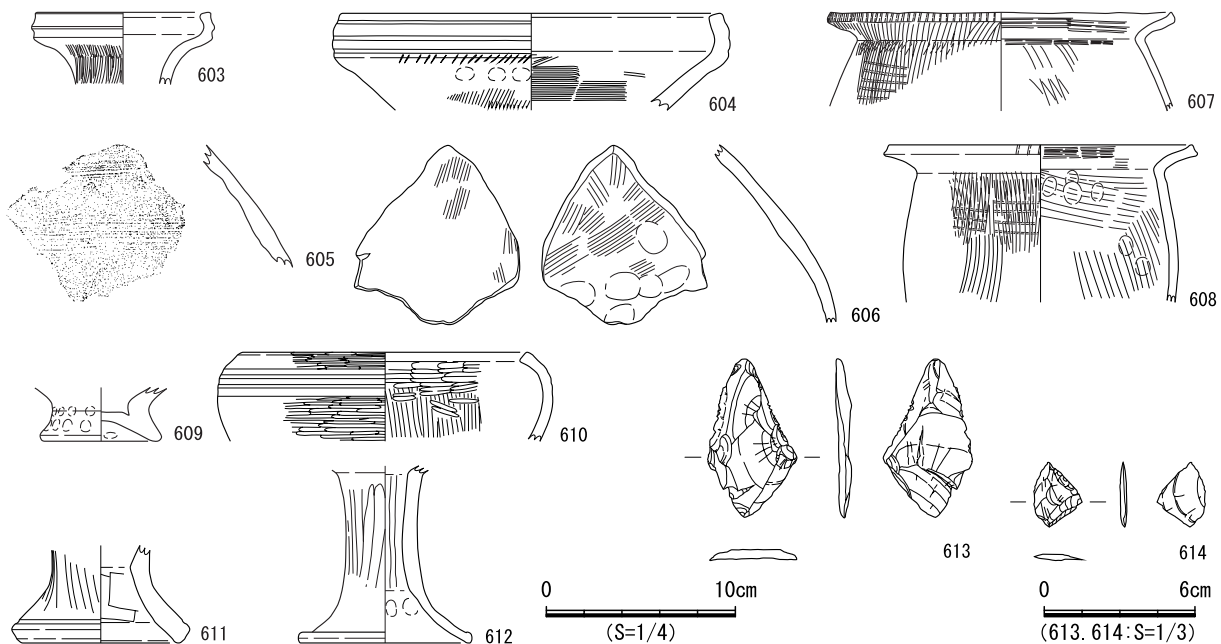


図 177 SZ150 遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土器2,749点、石器類4点が出土した。土器は上層から少量のⅤ期～Ⅶ期のものが出土したが、多くは中層以下から出土したⅣ期の土器である。しかし、明らかに供献土器と判断できる個体は出土しなかった。

出土遺物 603はⅣ期壺A1類。口縁部が短く直立して、2条の凹線文を施文する。604はⅣ期壺B2類。大型の壺で口縁部が直立し、端部が平坦である。3条の凹線文が認められ、端部下端に刺突文がめぐる。605はⅣ期壺H類。クシ状工具による直線文が認められる。606はⅣ期壺。胴部の破片で摩耗が著しい。607、608はⅣ期甕A2類。口縁部がくの字に屈折して、端部にタタキが認められる。609は甕A5類脚部。脚部が短く外反し、端部に打ち欠きが認められる。610はⅣ期鉢A類。口縁部が強く内湾し、3条の凹線文が認められる。611はⅣ期高坏脚部。脚部が短く開き、端部に顕著な平坦面が認められる。612はⅤ期高坏A類脚部。脚部は柱状を呈し、裾部で短く外反する。端部は直立する平坦面を形成する。613はMF。左右の側縁上方に細かい剥離が観察できる。614はUF。縦長薄片を素材とする。

時期 明らかな供献土器は出土していないものの、埋土下層から出土した複数の遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

SZ151 (遺構：図179、遺物：図178)

検出状況 西部東側中央に位置する。後出するSB422によって北部は滅失するが、方形状に巡る溝と供献土器の可能性のある土器が出土したことから、方形周溝墓と判断した。

方台部 南北長約4.4mで、東西長は不明である。確認した各辺とも中央がやや外側へ膨らみ、弧状を呈する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 南東溝外縁は直線的だが、北溝外縁と西溝外縁はやや丸みをもつ。北溝は幅約0.9m、西溝は幅約1.1m、南溝は幅約1.2mである。残りの良い北西溝と南西溝は深さ約0.3m～0.4mで、断面形は逆台形である。北西溝と南西溝の壁面付近にはブロック土を含む壁面崩落土が堆積している。上層からⅤ期の土器片が出土しているため、最上層はⅤ期段階までは窪地状となって残っていた可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器678点、石器類2点が出土した。上層では摩耗したⅤ期の破片が出土した。また、南西溝底面からやや上位で、上半が土圧で潰れたⅣ期壺(615、616)が出土した。転落した可能性が高く、出土状況から供献土器の可能性が高い。

出土遺物 615、616はⅣ期壺A1類。口縁部が短く直立して、凹線文が2条認められる。胴部は肩部が強く膨らみ、底部には打ち欠きが認められる。617はⅣ期壺F1類。口縁部が短く直立し、2個1組の穿孔が認められる。

時期 供献土器の可能性のある遺物の時期から、Ⅳ期と考えられる。

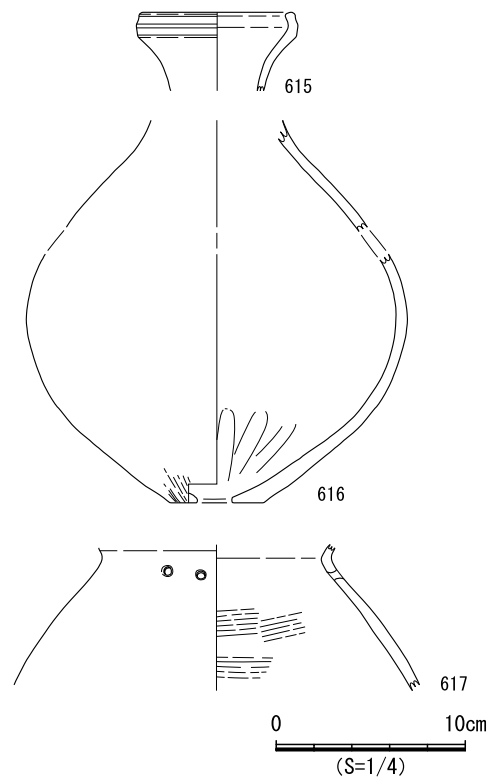


図178 SZ151 遺物実測図

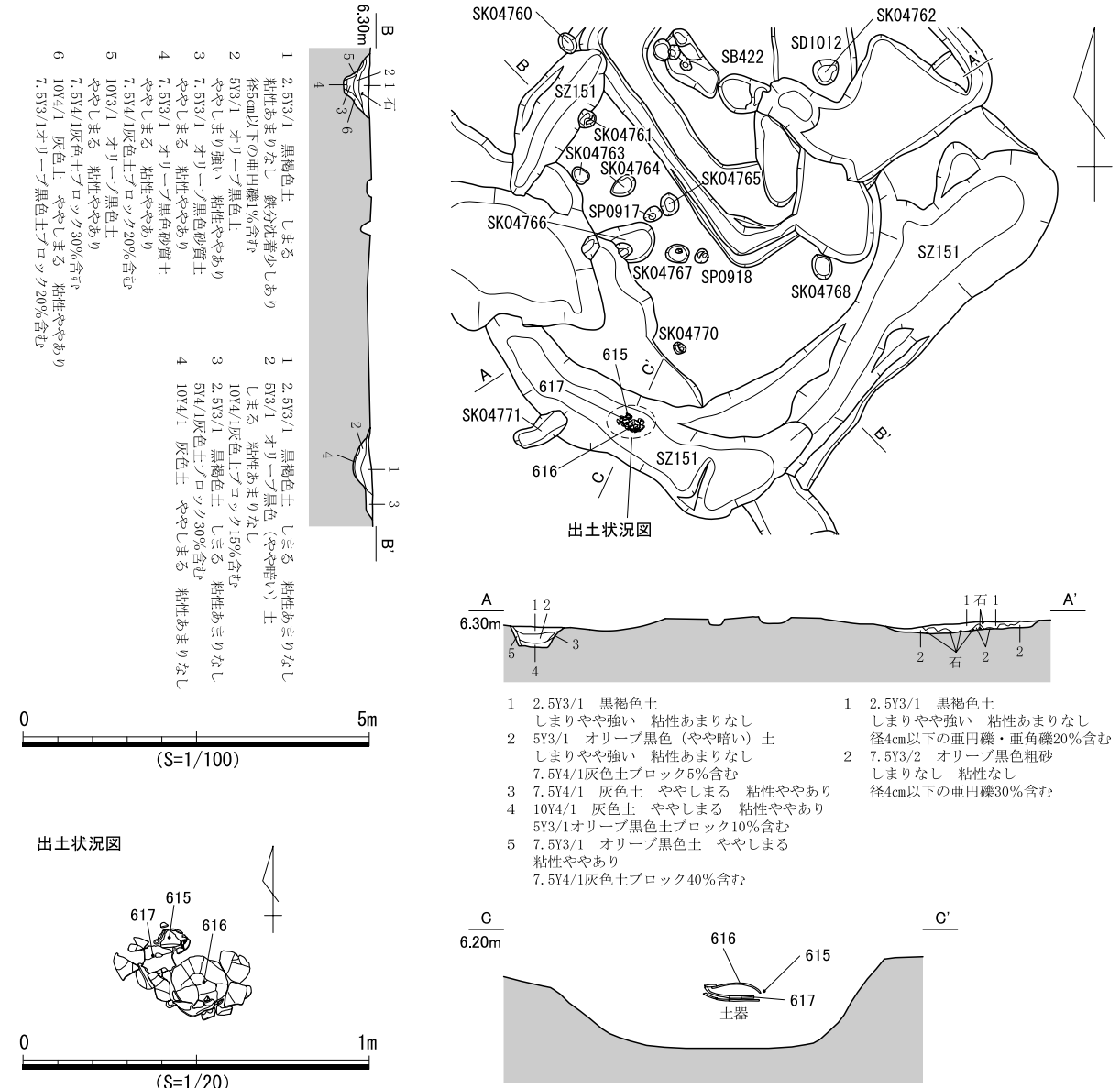


図 179 SZ151 遺構図

SZ152 (遺構：図 180・181、遺物：図 182)

検出状況 西部東側中央に位置し、SB415の床面で検出した。南半分は調査区域外にある。

方台部 南北長は不明で、東西長は約11.5mである。北辺、西辺とも直線的であり、北西隅部は鋭角気味で、北東隅部はやや丸みをもつ。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 周溝外縁の平面形状は方台部と類似し、北溝と西溝の外縁は直線的である。隅部は北西隅部が鋭角気味で、北西隅部は丸みをもつ。北溝は幅約2.3m、深さ約0.8mで、断面形は逆台形である。東溝は幅約2.3m、深さ約0.7mで断面形はV字形である。北溝、東溝ともに壁面沿いにブロック土が混入しており、当初は壁面崩落により埋没したと考えられる。上層からV期の土器片がわずかに出土しており、V期段階までは窪地状となっていた可能性がある。西溝は幅約1.6m、深さ約0.3mであり、他の溝より浅く、断面形は皿形である。西溝の底面は砂礫層が表出していたが、他の溝底面で

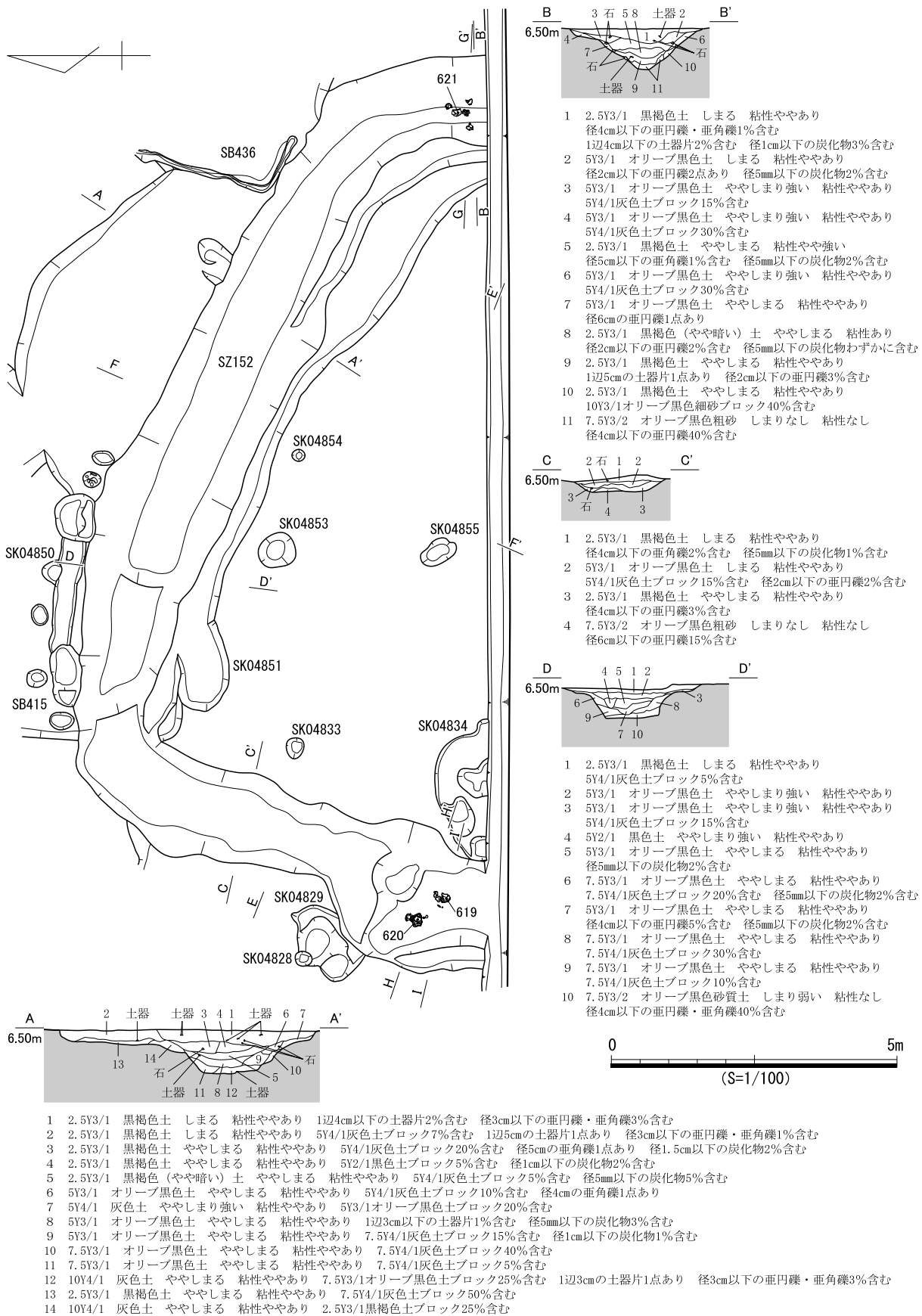


図 180 SZ152 遺構図 (1)

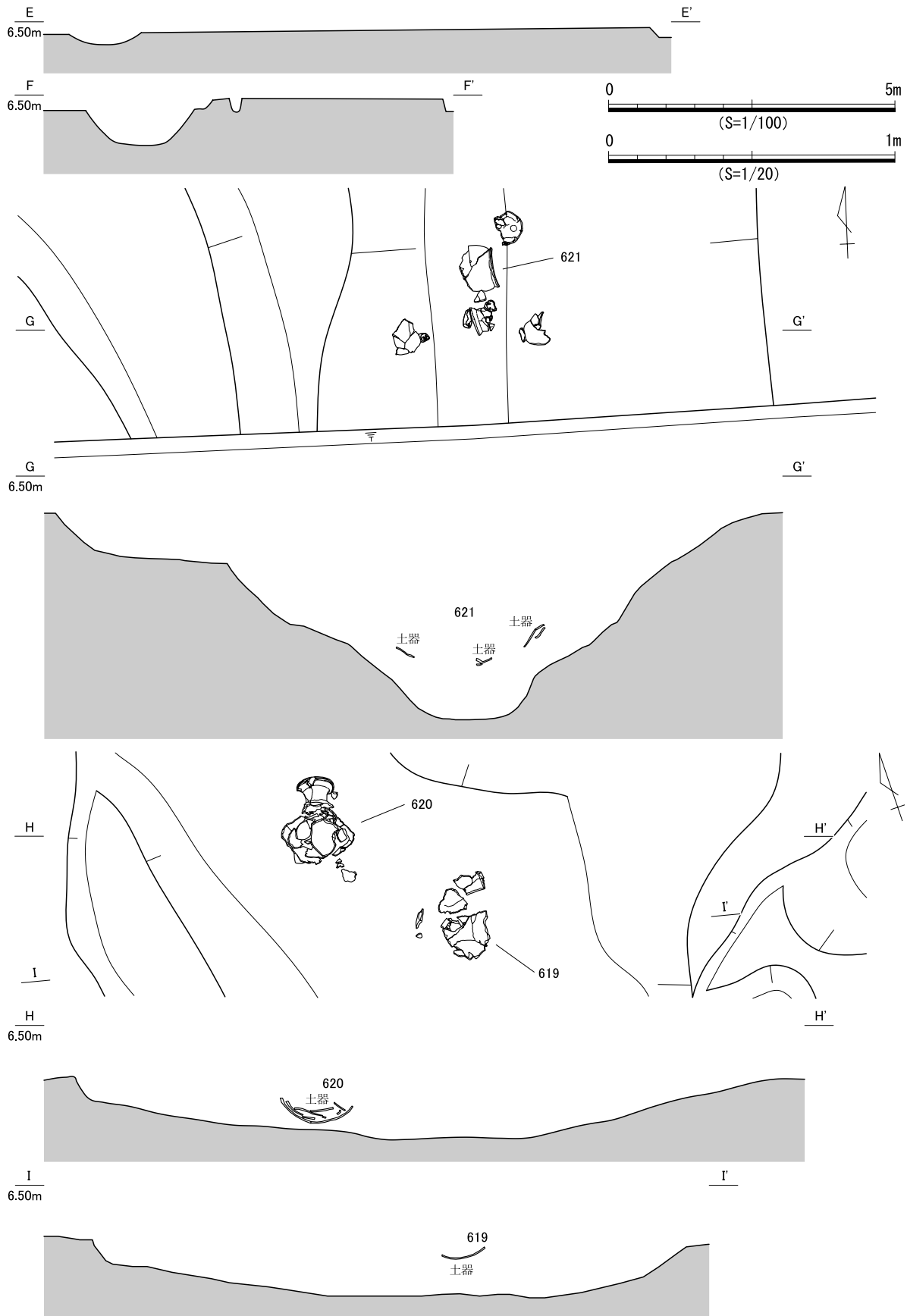


図 181 SZ152 遺構図 (2)

はシルト層であったことから、基盤層の違いが周溝の深さの違いとなる一因と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器4456点、石器類5点が出土した。東溝と西溝の底面付近からIV期の土器がまとめて出土した。西溝の620は脚台付の壺で、横位の状態で出土した。また、619の壺は床面よりやや上位で出土した。東溝からは甕621が底面からやや上位で出土した。破片の状態で出土し、周囲から転落した可能性がある。出土状況や遺存状況から620、621が供献土器と考えられる。

出土遺物 618、619はIV期壺A1類。618は口縁部がやや内傾し、2条の凹線文が巡る。619は磨耗の著しい胴部で、頸部に刺突文が認められる。620はIV期脚付壺A2類。脚部が裾部で強く外反し、端部は平坦である。端部には3条のやや幅の狭い凹線文が認められる。胴部は脚部からなだらかに膨らみ、上半には全面に文様が認められる。直線文間に刺突文を充填し、その下に斜格子文、さらにその下に直線文、刺突文を施文する。斜格子文はクシ状工具(2本1組×3帯)によって施文される。621は甕A2類。口縁部が短くくの字に屈折して、胴部がなだらかに膨らむ。胴部最大径は中央よりやや上位にあり、底部にハケ目と穿孔が認められる。端部や胴部外面にはハケ調整以前のタタキの痕跡が顕著に認められる。622はIV期甕B2類。口縁部が鋭く屈折して直立し、内面は凹面を呈する。端部は内傾する凹面を形成する。外面には刺突文、直線文が認められる。623はIV期甕D類。口縁部が短く屈曲して、端部は下端を拡張する外傾した平坦面が認められる。624はIV期甕A1類。口縁部が短くくの字に屈折して、端部は平坦である。頸部には突帯を貼付して、その上に刺突文を加える。

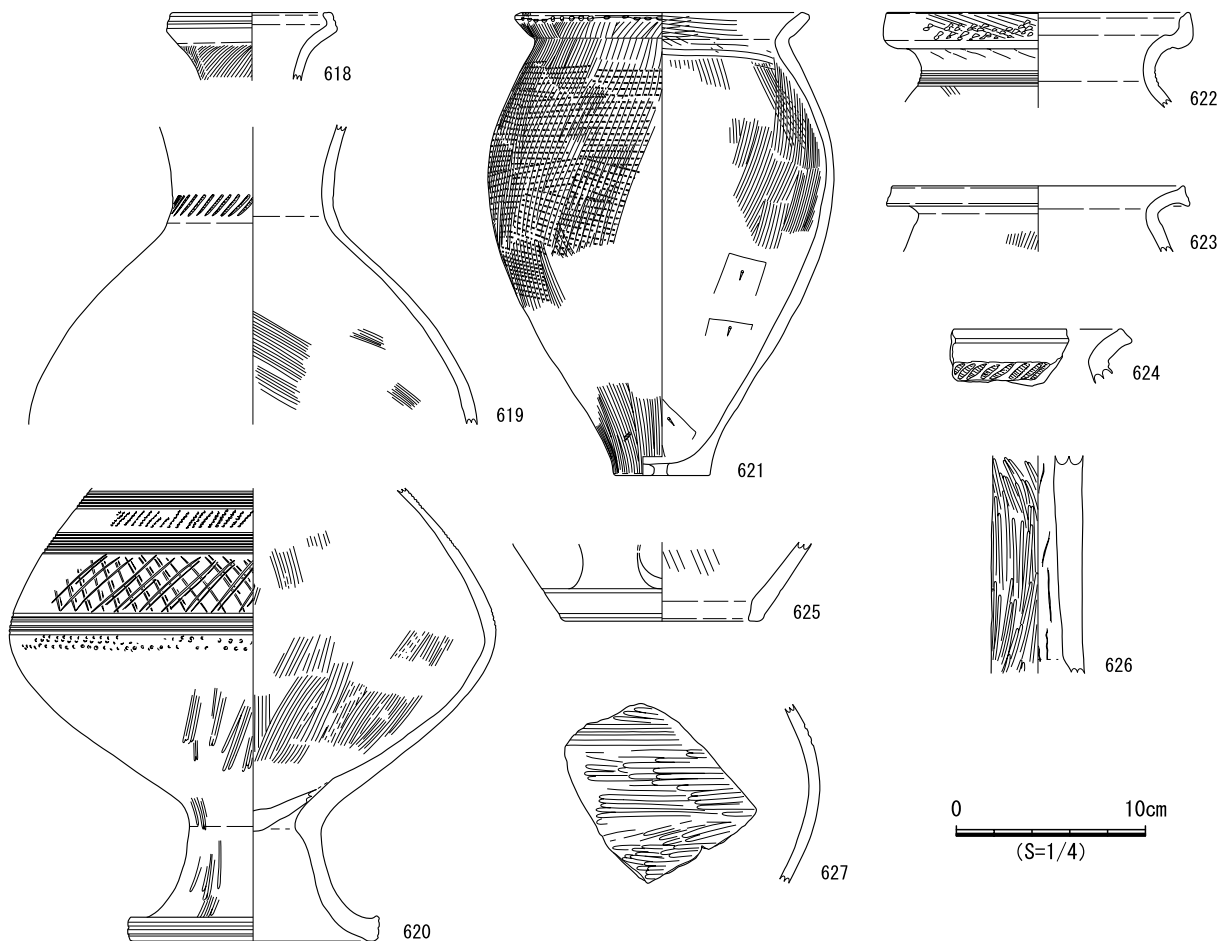


図 182 SZ152 遺物実測図

625はIV期鉢脚部。内傾する脚部に凹線文と透孔が認められる。626はV期高坏A類脚部。脚部が柱状である。627はI期壺胴部。頸胴部の境に削り出しの段と沈線が認められる。

時期 供献土器の時期から、IV期と考えられる。

SZ165 (遺構：図184、遺物：図183)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、中央と東側及び南溝の中央は攪乱により滅失している。周溝は南北溝と西溝の一部を確認したが、大半は調査区域外へのびている。なお、南溝はSZ167に切られており、南北溝ともに平面形は明瞭であった。

方台部 北辺と南辺はおよそ直線的であり、隅部は検出できていない。西辺は南側がやや外側へ開く可能性がある。規模は南北約8.7mであり、墳丘や主体部は確認できなかった。

周溝 幅約0.7～2.3m、深さ約0.3～0.5mであり、南溝東側の幅が広い。断面形は北溝が逆台形状であるが、南溝は底面が丸みを帯びている。底面は北溝がほぼ平坦であるのに対し、南溝は南壁面に沿って幅約0.6～0.8mの範囲が帯状に約0.2m深くなっている。埋土は3～7層に分層でき、北溝下層には壁面崩落土と考えられるブロック土の堆積を確認した。埋土上層には炭化物が散在し、中央が窪む堆積である。

遺物出土状況 北溝から137点、南溝から14点、西溝から2点の土器片が出土した。北溝では底面付近において比較的残りのよい土器片が横位で多く出土した。また、南溝では底面からわずかに高い位置で石灰岩と垂円礫が出土した。埋土中からの出土土器はIV期のものが主体であるが、供献土器と認定できるものは出土していない。

出土遺物 628はIV期壺H類胴部。口頸部と胴部下半が欠損し、クシによる文様のある胴部上半のみが残存する。頸部は直線文で、3帯が認められる。直線文より下には2種類の懸垂文が交互に施文される。1つは2本1組の沈線によって方形に区画されなかに縦位の波状文を充填する。区画された文様の下には、さらに両端に間隔をおいて縦位の短い直線文が付加される。もう1つは頸部の直線文より下に短線状の直線文を断続的に施文する。胎土が黒褐色を呈し、三河地域からの搬入品と考えられる。629はIV期壺H類。小型の壺で口縁部が短く外反する。端部に振幅の短い連弧文的な波状文、内面

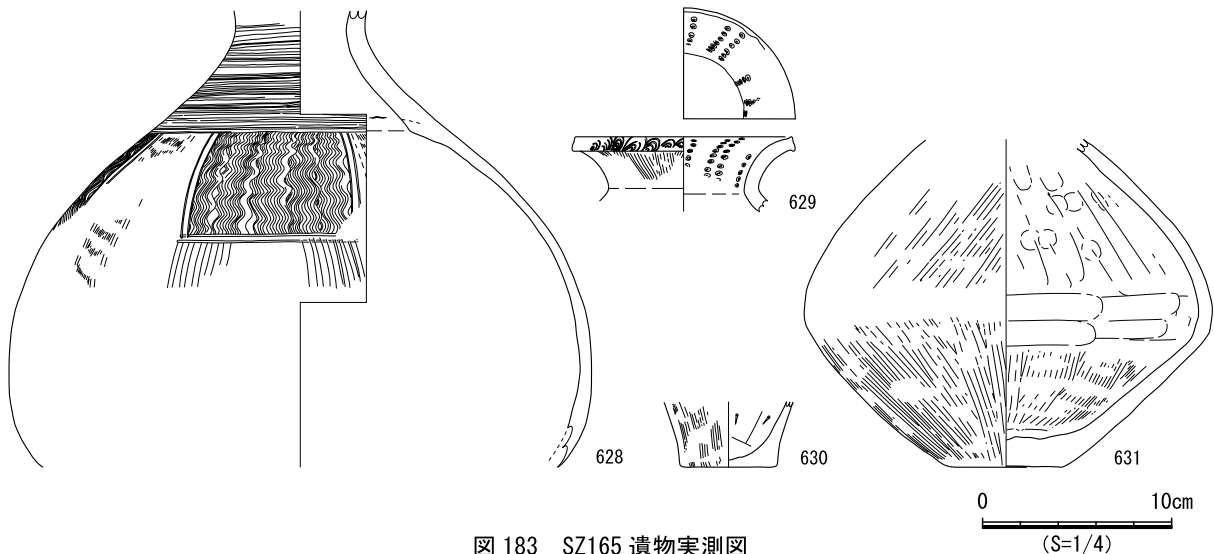


図183 SZ165 遺物実測図

には縦位に並ぶ円形刺突文が認められる。胎土が黒褐色を呈して、在地のものとは異なるため、搬入品の可能性がある。630はIV期甕A類底部。631はIV期壺A1類胴部。口頸部は欠損し、器面の磨耗が顕著である。

時期 出土遺物の時期から、IV期と考えられる。

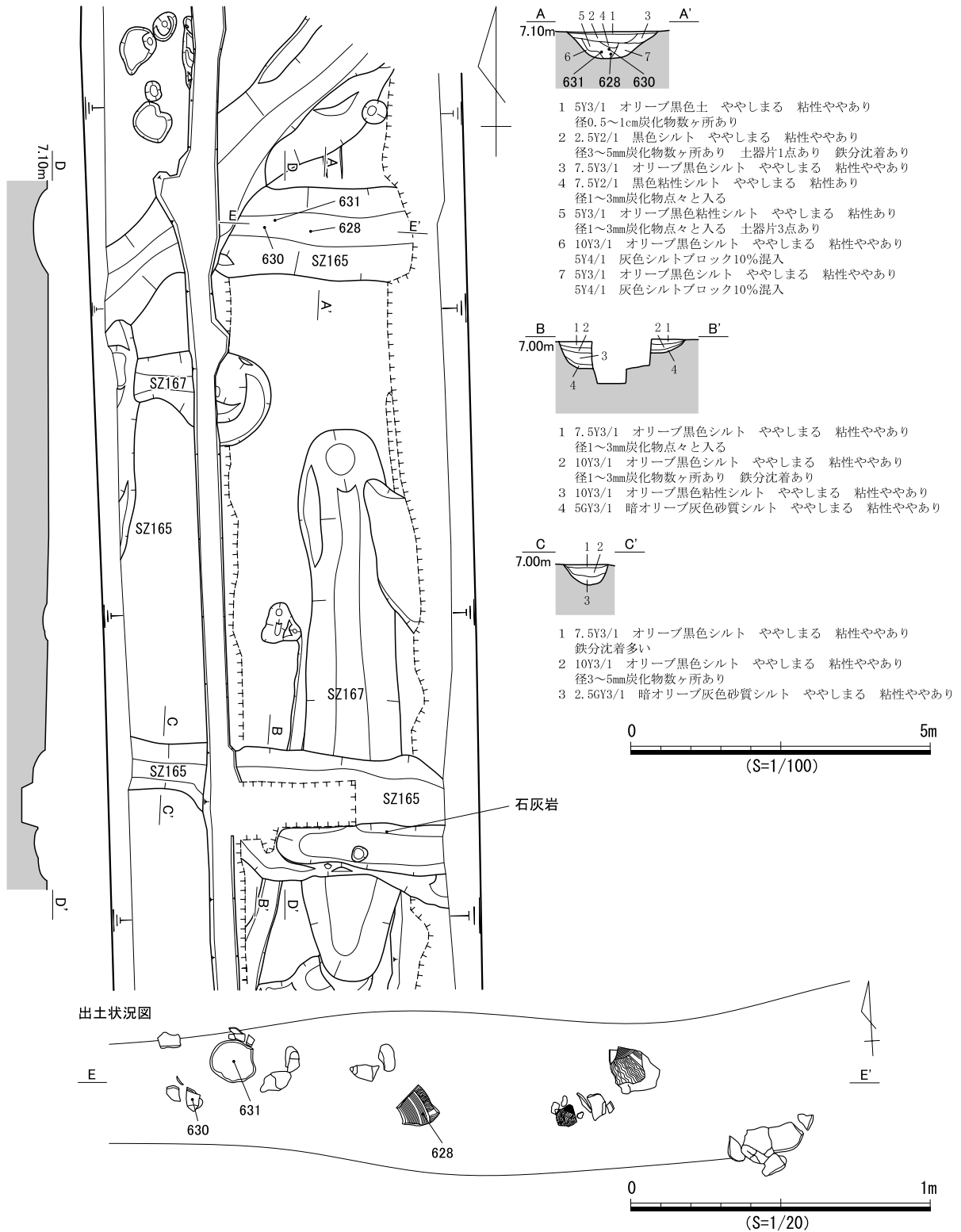


図 184 SZ165 遺構図

SZ166 (遺構：図 185・186、遺物：図 187・188)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、西溝と北溝、南溝の一部を確認した。東側は査区域外にある。SZ117の東側、SZ120の北側にあり、西溝はSK03989底面で、北溝はSB451とSD1067掘削後にそれぞれ検出し、平面形は比較的明瞭であった。

方台部 南北長は約10.0mで、東西長は不明である。また、未調査区及び攪乱が方台部中央にあるため詳細は不明だが、現状では墳丘と主体部は確認できなかった。

周溝 西溝は南北に比較的直線的に伸び、南端が途切れて南溝との間に陸橋部を形成する。北側でやや東側へ方向を変え、端部は攪乱により失われているが、平面形の収束具合から北溝との間にも陸橋部があった可能性が高い。B断面では幅約1.5m、深さ約0.4mで、6層の堆積が認められる。断面は

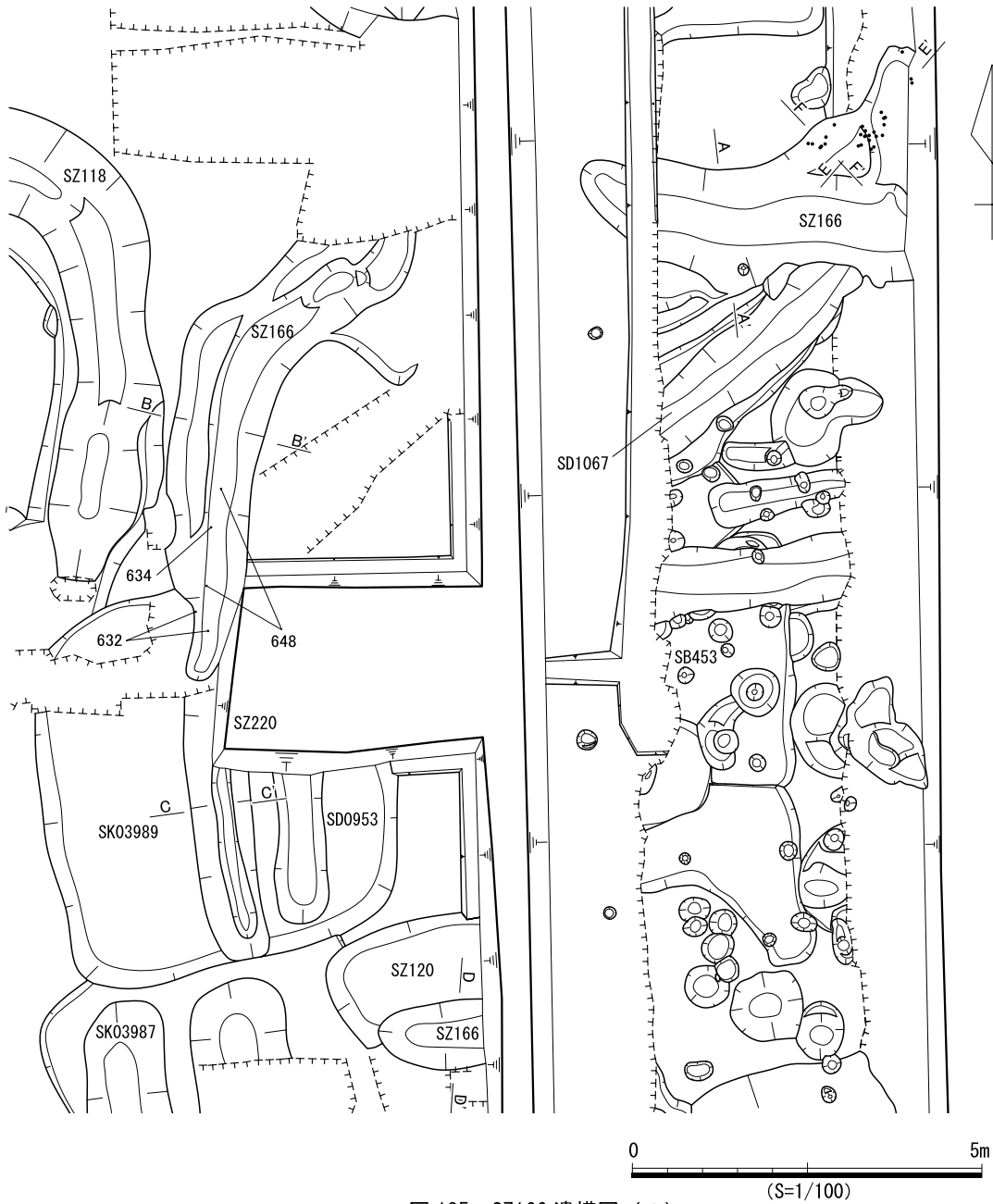


図 185 SZ166 遺構図 (1)

壁面傾斜が緩やかで、壁面崩落が早くから進行して埋没したと考えられる。C断面は幅約0.9m、深さ0.3mと浅いが、底面付近には壁面崩落土の可能性がある灰色土が堆積する。両断面は確認面からの深さに差異は認められるが、底面の標高値は約6.5m前後で大きな違いは認められない。C断面は後出するSK03989と重複しているために、上部を削平されたと考えられる。北溝は幅約1.5m、深さ約1.1mで、5層の堆積が認められる。底面はほぼ平坦で、壁面傾斜は北側が急で、南側がやや緩い。北壁中央付近は上部に広い平坦面を有し、そこから台付甕などがまとまって出土した。南溝は壁面傾斜が緩やかで、底面は丸く、3層の堆積が認められる。

遺物出土状況 北溝から土器1,199点、石器・石製品1点、西溝から土器2,324点、南溝から土器64点が出土した。北溝では北壁面の平坦面から残りの良い土器が多数出土した。そのうち台付甕(642)が

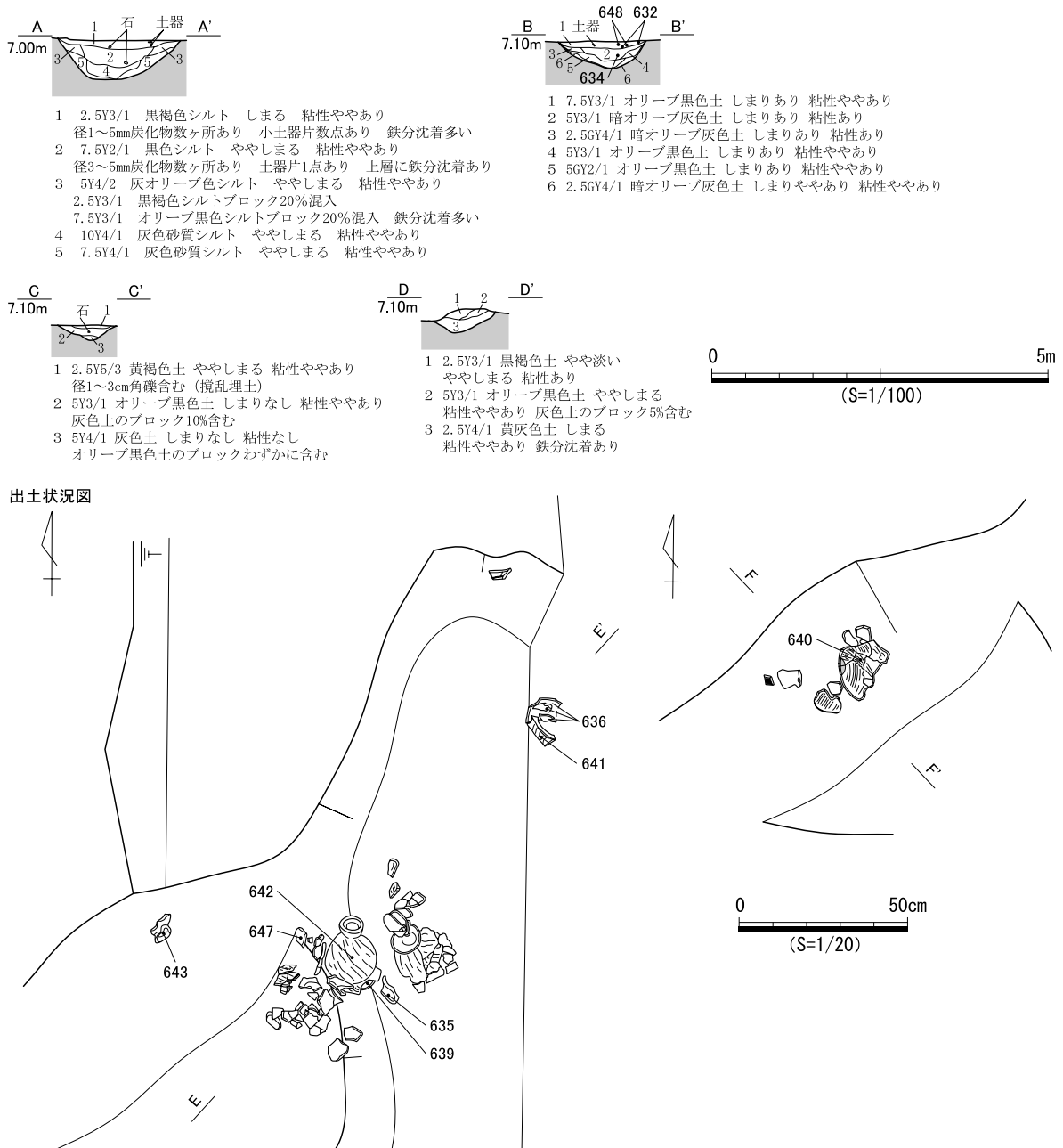


図186 SZ166遺構図(2)

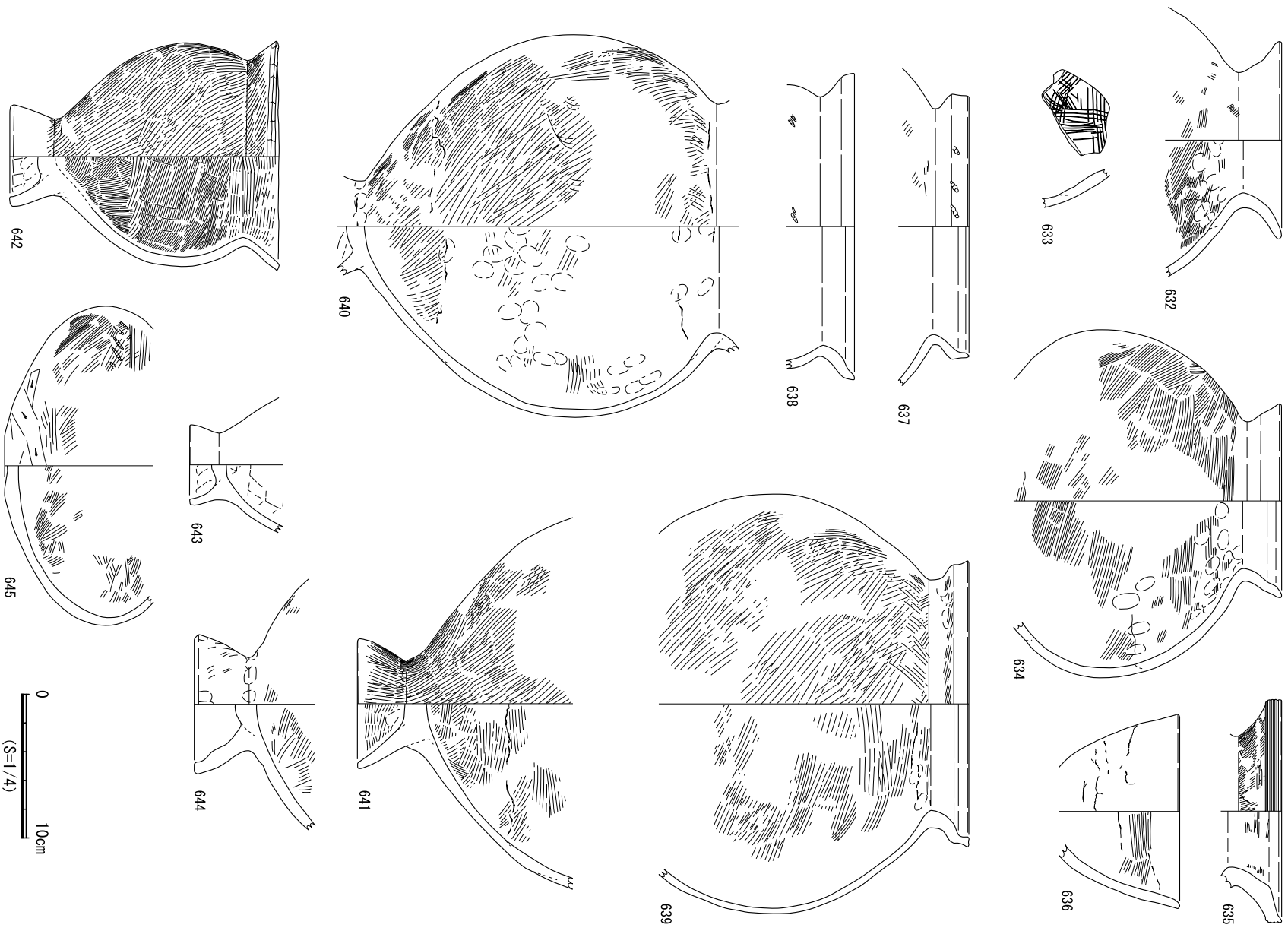


図 187 SZ166 遺物実測図 (1)

ほぼ完形に近い状態で、脚台底面を上にして出土した。しかし、本遺跡の方形周溝墓の周溝において、部分的に平坦面が造成される例はほとんどないことから、この範囲は検出時に平面形を誤認した可能性がある。また、西溝からの多くの土器はVI期～VII期の土器片で、大半が上層出土である。なかでも中央付近から集中して出土した(632、634、648)。634のみが中層から出土したが、供献土器である可能性は低い。これらの土器はVI期後半と考えられ、他の土器片もVI期後半～VII期前半に相当するものが多く認められた。ほぼ同じ時期の土器が重複するSK03989から多く出土しており、上部の遺構群の掘削や整地時に混入した可能性がある。

出土遺物 632はV期～VI期の壺B3類。口縁部が強く外反して、端部を丸くおさめる。633は線刻のVI期～VII期の壺胴部片と考えられる。線刻は4～5本の線による幾何学的な意匠の一部と考えられる。634は口縁部がやや外傾し、胴部が偏平な壺C類。口縁部はわずかに屈曲し、端部には内傾する凹面が認められる。時期はVI期～VII期と考えられる。635はVII期壺A2類。口縁部が頸部でやや屈折して外反する。端部がわずかに直立気味で、外面には直線文が認められる。636はVII期鉢B1類。外面に輪積み痕が顕著に認められる。637はV期後半～VI期の甕A3類。口縁部が短く直立する。外面の屈曲は顕著だが、内面の屈曲は鋭くない。端部は内傾する平坦面が認められる。638はV期～VI期の甕A3類。口縁部端部がわずかに内湾し、端部が若干平坦である。639はVI期～VII期甕A2b類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部には強い凹面を形成する。胴部はなだらかに膨らみ、やや下膨れ気味である。640、641はVII期甕B類。640は口縁部を欠損し、胴部のみが残存する。外面には粗いハケ目が顕著で、脚部が欠損する断面には被熱した痕跡が認められる。641は胴部が下膨れ気味で外面に粗いハケ目が顕著である。脚部は外反気味にハの字に開き、端部は平坦である。642はVII期甕B3類。ほぼ完存する資料で、胴部があまり膨らまず、口径の方が胴径より大きい。脚部を除く部位には粗いハケ目が顕著で、口縁端部には断続的な強いナデが認められる。脚部はやや直立気味である。643はVII期甕E類脚部。脚部は短く直立気味にハの字に伸びる。外面はハケ目ではなくナデ調整が認められる。644は甕A類かB類の脚部。付根径がやや幅広で内湾する脚部をもつ。VI期～VII期の資料であろう。645はVI期の鉢A類胴部。頸部に直線文と刺突文が認められ、底部にはケズリ調整が認められる。646、648、651は高坏G類。いずれもVI期後半～VII期前半の資料である。646は口縁部上半に多条沈線が施文され、脚部が透孔付近から強く屈折して開く。648は口縁端部に内傾面が認められる。647、650はVII期

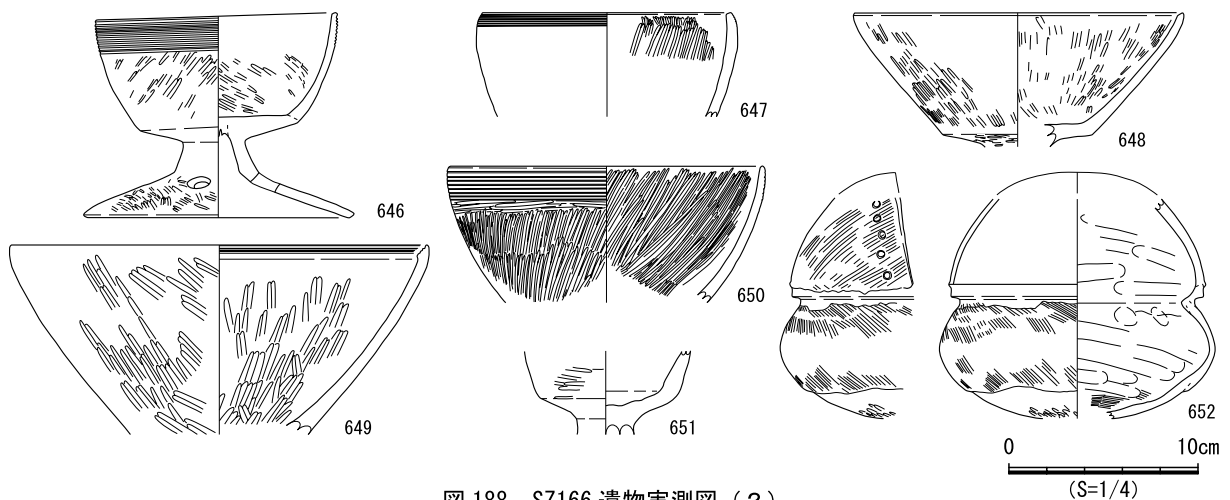


図 188 SZ166 遺物実測図 (2)

高坏 G3b 類。口縁部が内湾し、上半に多条沈線を施文する。649 は VI 期後半～VII 期前半は高坏 C3b 類。口縁端部内面を肥厚させて、その部位に多条沈線を施文する。652 は胴部に施文がないので VI～VII 期の手焙り形土器。覆部には円形刺突文が施文される。

時期 供献土器は出土していないが、方台部に VI 期～VII 期の SB451～SB453 が複数重複して検出されていることから、本遺構の時期は VI～VII 期と想定しがたい。そのため、周囲の IV 期の方形周溝墓と並列する配置状況から、IV 期と考える。

SZ167 (遺構：図 189・190、遺物：図 191)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、SZ169 の東側に隣接する。北溝と西溝は SD0943 に、北溝と東溝は SZ166 にそれぞれ切られる。遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。周溝は北西隅が SD0943 に切られて不明であるが、他は明らかに陸橋部を形成している。

方台部 残りの良い西辺と東辺は中央部分が緩やかに外側に開くようである。規模は東西約 7.1～8.0 m、南北約 11.0 m で、南北に長い長方形を呈する。墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝 北西隅は SD0943 に切られているが、それ以外は陸橋部を形成していることから、四隅切れの方形周溝墓と思われる。溝の幅は約 1.0～2.0 m、深さ約 0.2～0.6 m で北溝の幅がやや狭い。また、南溝は中央に攪乱があるため定かでないが、東側の中央寄り (SK05319 の下方) が深く落ち込み、その東側は浅かったことから、周溝としては SK05319 付近で収束していたかもしれない。断面形は底面が平坦もしくは緩やかな丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的緩やかである。周溝底面には灰オリーブ色のブロック土を含む壁面崩落土が堆積している。なお、南溝東側にある SK05319 と SK05329 は長さ約 0.7～0.8 m、幅約 0.4 m の楕円形を呈する土坑である。いずれも南溝を切るが、主軸を真北に向け、掘形が深く、土坑間の心々距離が約 1.7 m である。

遺物出土状況 北溝から土器 11 点、東溝から土器 67 点、南溝から土器 481 点、石器類 1 点、西溝から土器 591 点、南溝を切る土坑から土器 40 点が出土した。遺物の多くは埋土上層から散在して出土しており、その時期は IV 期～VII 期のものが多い。そのうち 653 は IV 期甕で残存状況がよく、供献土器の可能性はある。

出土遺物 653 は IV 期甕 A1 類。口縁部が強く屈曲し、端部は凹面を形成する。胴部上半には左下がりのタタキ痕がハケ目より先行する調整で認められる。胴部下半の内面にはケズリ調整が残る。底部は低脚の脚台付に見えるが、つくりが粗雑で底部を形成する円盤充填の貼付位置が本来の位置よりずれた可能性があり、判然としない。654 は V 期壺 A1b 類。内面に扇形文が 2 帯施文される。655 は IV 期の壺底部で、外面にハケ目が残る。656 は V 期～VI 期の壺 F2 類。口縁部が短く外反する。657 は V 期～VII 期壺底部。打ち欠きが認められる。658 は VI 期～VII 期の甕 B3 類。口縁部が短く屈折して立ち上がり、端部は断続的な強いナデによって凹凸が著しい。胴部中央に打ち欠きが認められる。659 は V 期～VI 期前半の高坏 B 類脚部。付根の径がやや細身でわずかに外方に開く。660 は V 期～VI 期高坏 I 類。坏部が小さく、脚部の穿孔が大きい。661 は砥石。砥面に不定方向の擦痕が明瞭に残り、裏面はおよそ半分が炭化している。

時期 供献土器の可能性のある遺物 (653) の時期から、IV 期と考えられる。

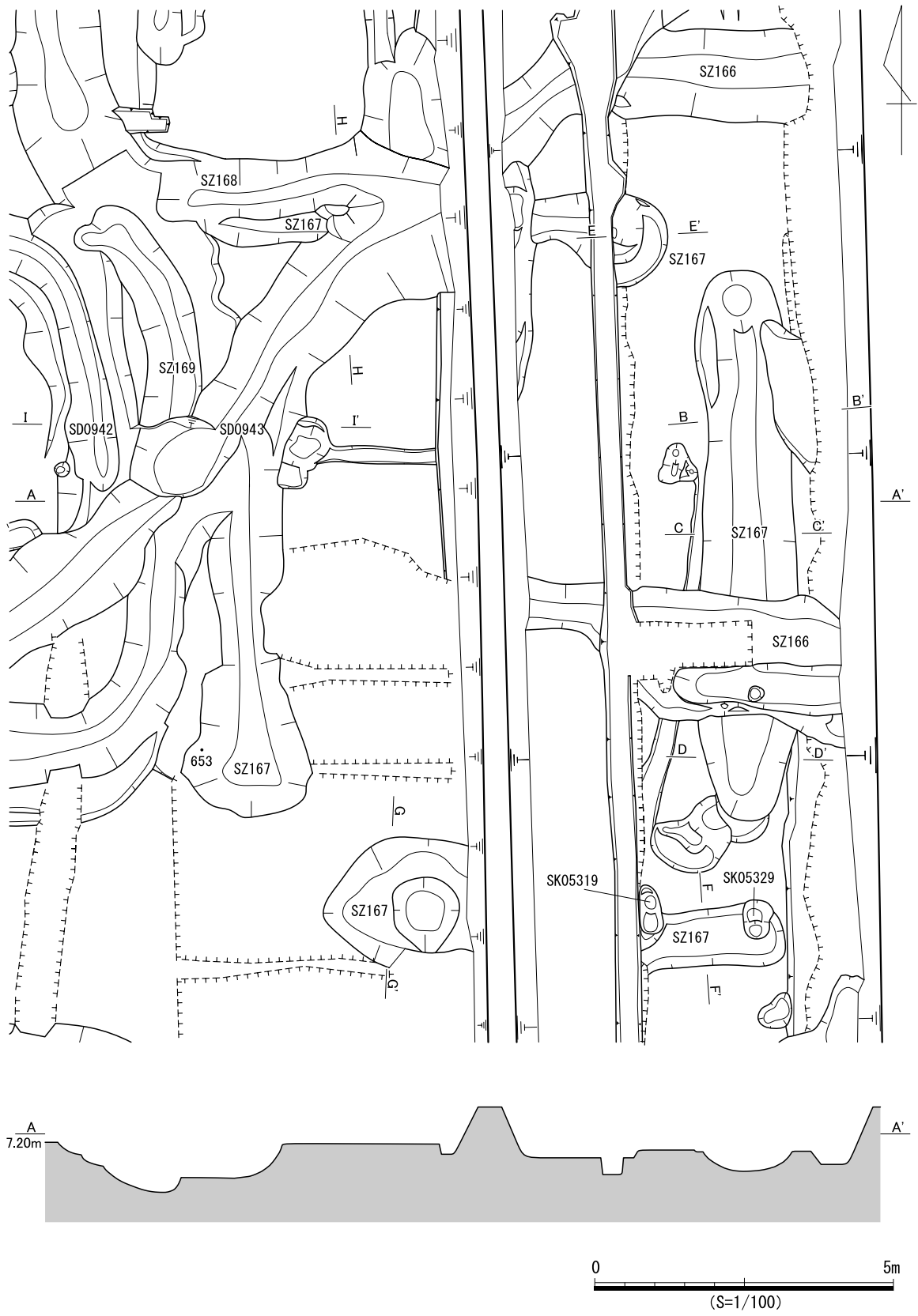


図 189 SZ167 遺構図 (1)

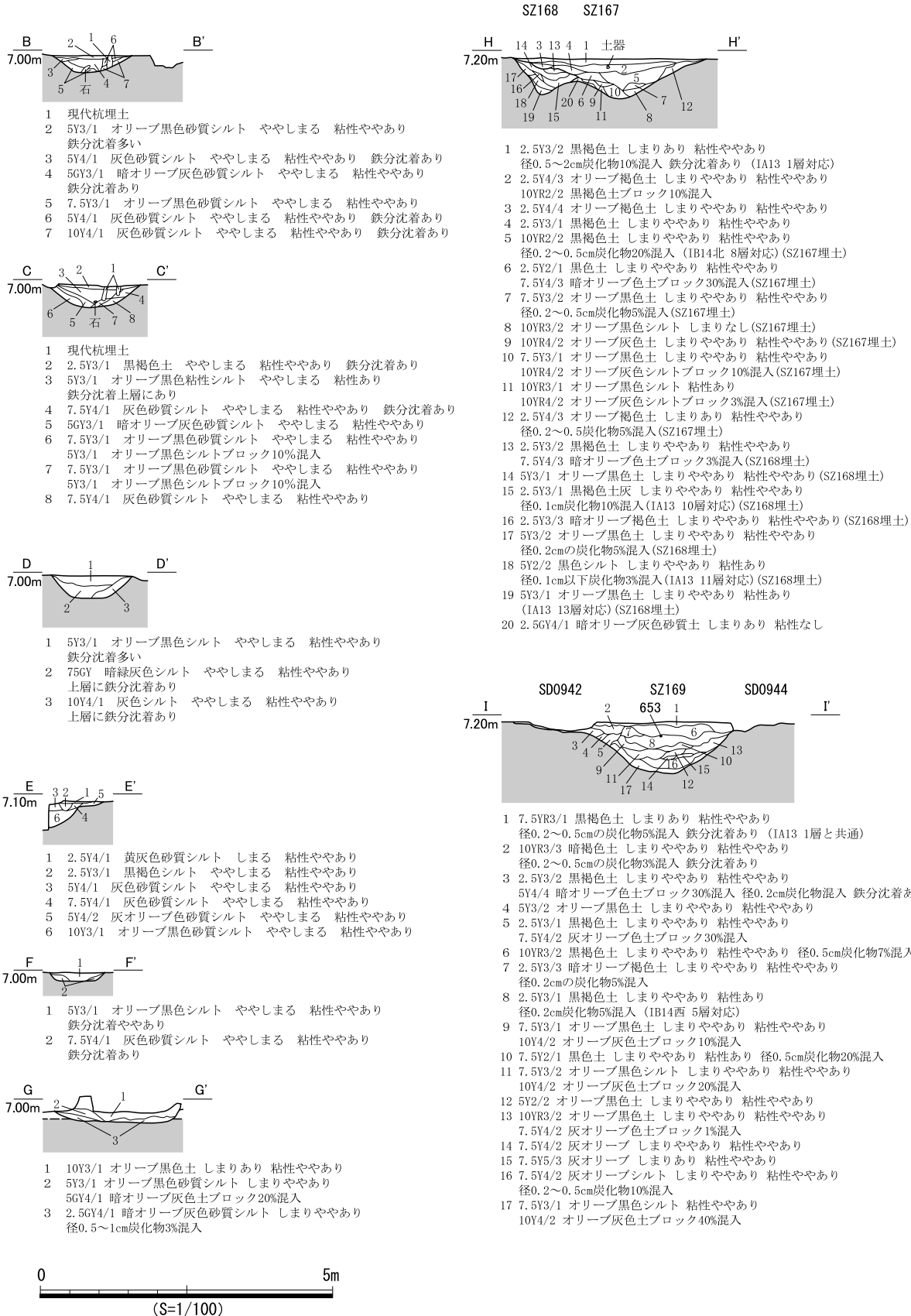


図 190 SZ167 遺構図 (2)

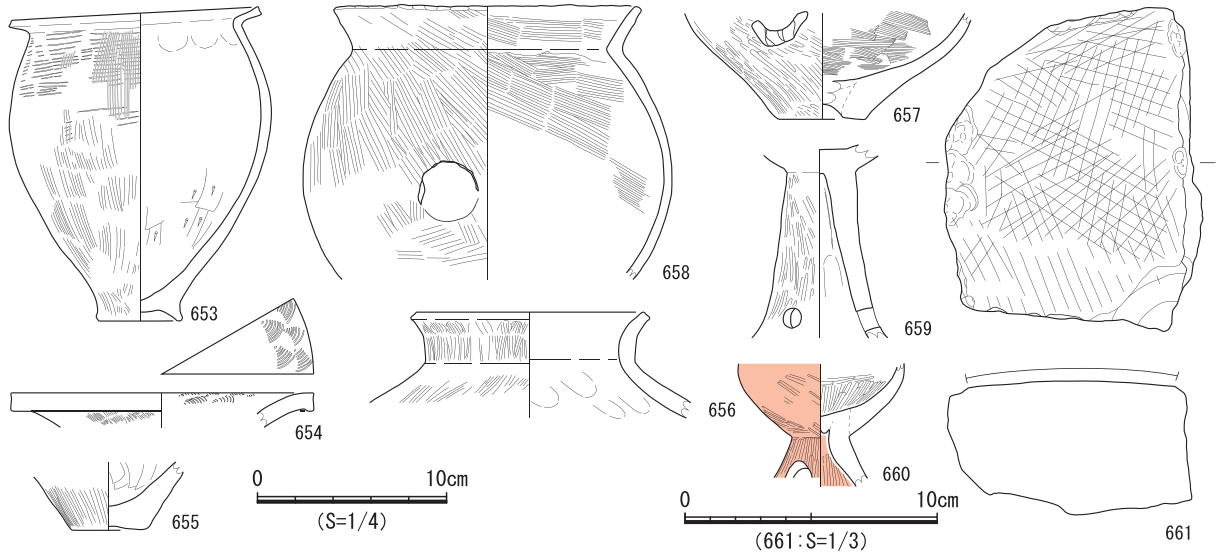


図 191 SZ167 遺物実測図

SZ168 (遺構：図 192・193、遺物：図 194)

検出状況 西部東側北寄りに位置し、北溝、南溝、西溝を確認した。北溝東端と南溝東端、東溝は近代以降の用水により失われており、その平面形を確認できなかった。西溝はSZ115に、南溝西端はSZ169にそれぞれ切られる。

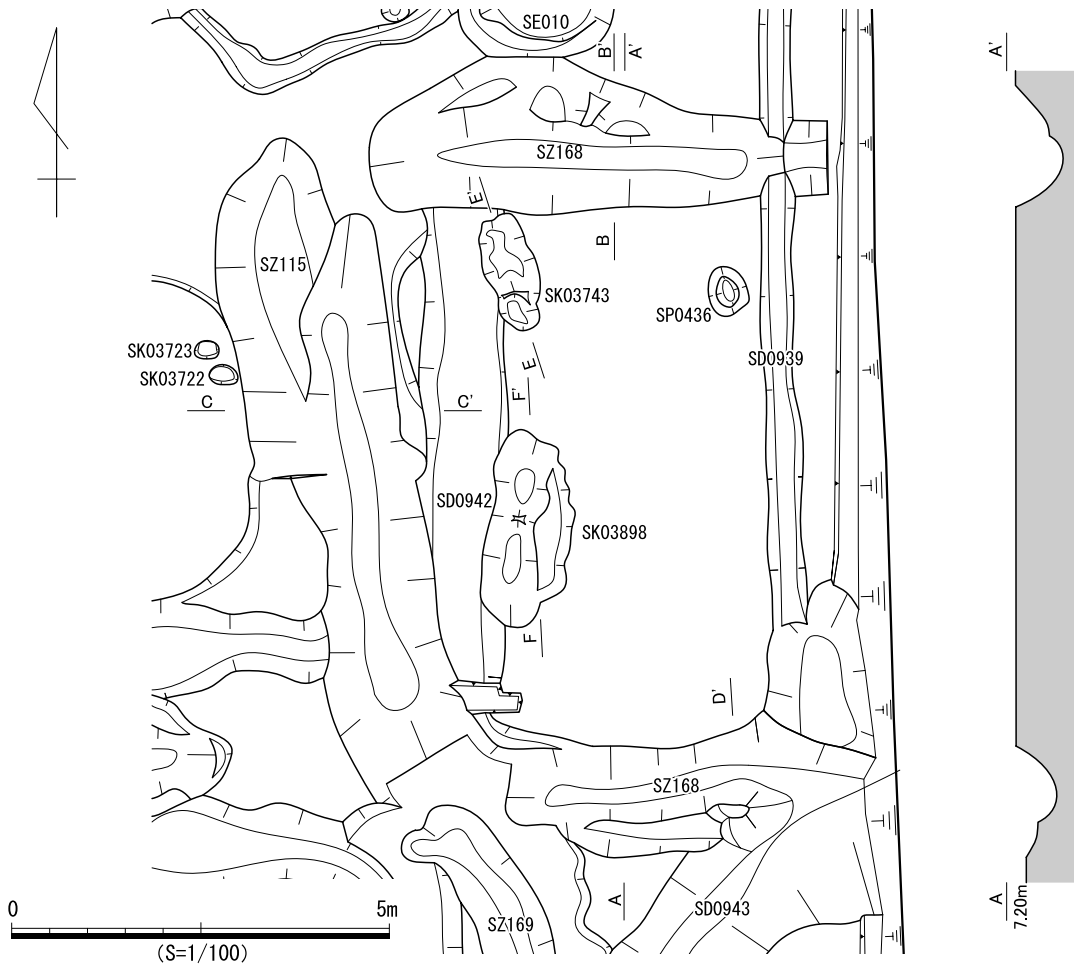


図 192 SZ168 遺構図 (1)

方台部 東側が調査区域外にあり、全形は不明である。確認できる南北長は約8.0mで、南北方向にやや長い長方形となると考えられる。各辺とも直線的で、墳丘は認められなかった。西側では南北方向に主軸をもち、主体部の可能性がある土坑2基（SK03743、SK03898）を検出した。主軸方向はほぼ軸線を揃える。SK03743は長軸約1.5m、深さ約0.2mを測る。平面形は長楕円形だが、底面はやや凹凸が認められる。SK03898は長軸約2.6m、深さ約0.4mで、平面形は長楕円形を呈する。底面は北側が一段深くなり、いずれも遺物の出土は認められなかった。

周溝 各周溝とも残存状況がよく断面形がV字形を呈する。西溝と南溝では方台部側壁面が急傾斜で、方台部側から埋没が進行したと考えられる。平面形は内縁・外縁ともに各周溝とも直線的で、北西隅

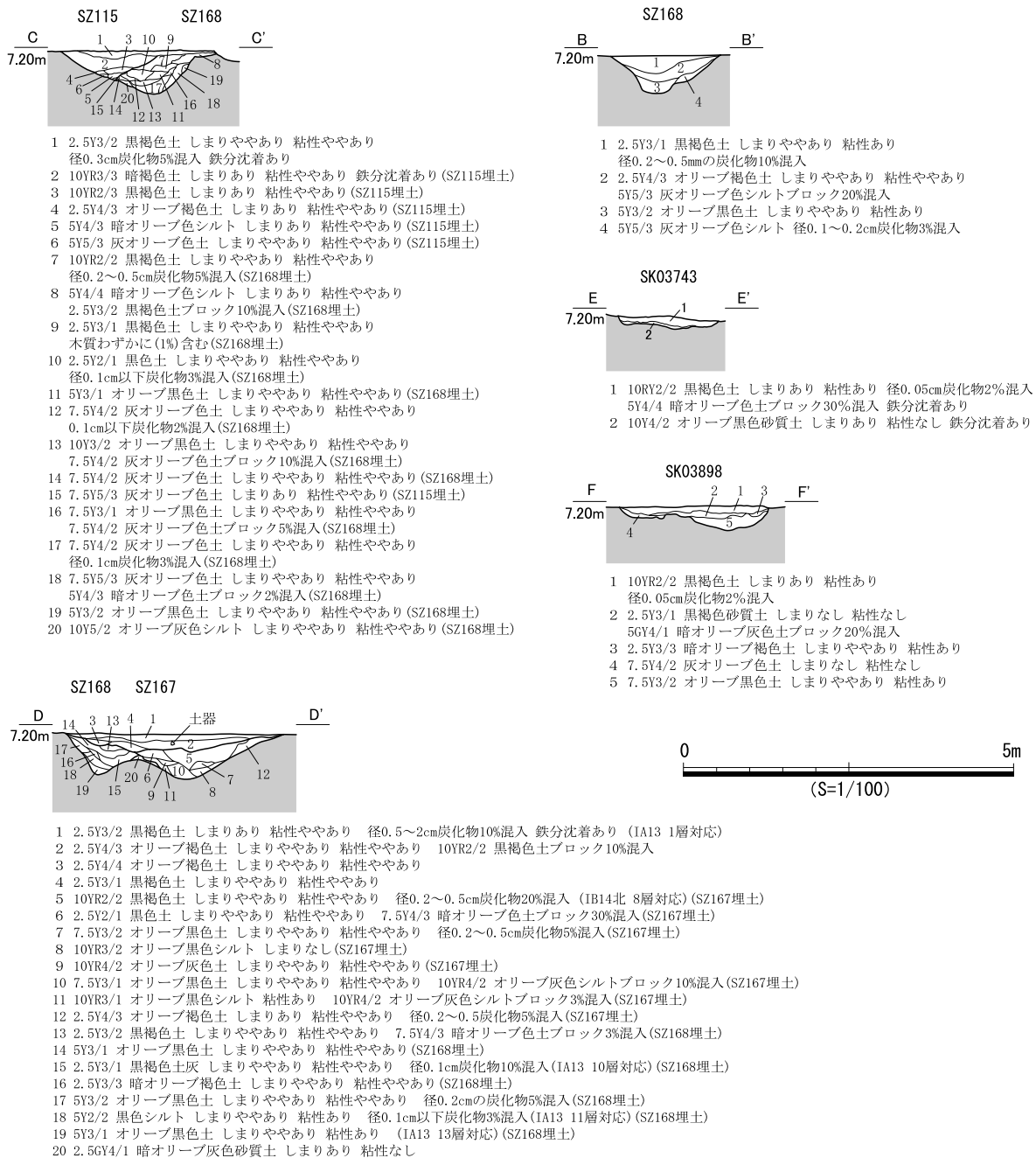


図193 SZ168 遺構図(2)

に陸橋部を形成する。北溝外縁が北側へ膨らむ箇所が認められる。

遺物出土状況 北溝から土器78点、西溝から土器486点、南溝から土器55点が出土した。いずれも埋土上層からの出土が目立ち、その出土量は他の周溝に比べると少ない。662は南溝上層から出土した。重複関係からみて混入資料である。

出土遺物 662はⅣ期の甕C類。口縁部が屈折し、刺突文が認められる。

時期 供献土器は認められなかったが、Ⅱ期のSZ115に先行することからⅡ期以前と考えられる。

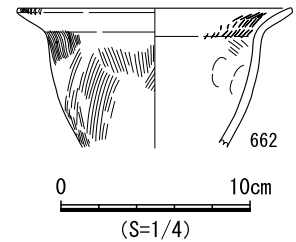


図194 SZ168 遺物実測図

SZ169 (遺構：図195・196、遺物：図197・198)

検出状況 西部東側北寄りに位置する。SZ115の南側にあり、南溝と東溝はSD0943に切られる。なお、周溝は全周し、東溝は外側に再掘削されている。

方台部 東西長約6.5m、南北長約8.0mで南北に長い長方形を呈す。東西両辺は直線的だが、北辺はやや内側へ膨らむ。各隅部はいずれも丸い。再掘削された東溝により東西長が約7.5mに拡張されて、その平面形は南北に長い長方形から正方形に変化したと考えられる。なお、墳丘・主体部は確認できなかった。

周溝 いずれの周溝とも幅は約1.2～1.5m前後と一定である。断面形は壁面傾斜がやや緩やかだが、V字形である。埋土は灰オリーブ色のブロック土が混じる崩落土が方台部側の壁面に沿って堆積する。その後、壁面崩落によって埋没が進行し、上層からはⅤ期～Ⅵ期の土器が多く出土していることから、Ⅵ期に埋没したと考えられるとともに、重複するSD0943から混入した可能性がある。

遺物出土状況 おもにⅤ期～Ⅵ期の土器995点が南溝上層から出土した。北溝上層からⅣ期甕664が横位、Ⅳ期壺666が出土した。供献土器と判断できないが、遺存状況がよいことから構築時期を示す土器とみてよいと考えられる。東溝から土器2,014点、石器類1点が主に上層から出土した。Ⅵ期の土器が多く、遺存状況のよいものが多い。Ⅳ期甕663は拡張した東溝中層から出土し、遺存状況もよい。供献土器の可能性が高い。その他にⅥ期～Ⅶ期の遺存状況のよい資料が多く出土した。

出土遺物 663はⅣ期甕A3類。胴部下半を欠損するが、復元すると器高34.0cmの大型品。甕A類で波状文と直線文の組み合わせのある例はこれまで出土していない。口縁部は屈曲して受口状となり、端部は内傾する平坦面が認められる。胴部はゆるやかに膨らむが、最大径が胴部中位にあり胴部下半は直線的で、甕B類の形状に類似する。外面はハケ目調整のほかに観察が困難だがハケ目に先行するタタキ痕が認められる。内面にはハケ目とケズリが認められ、底部外面にもハケ目が認められる。口縁端部及び胴部上半に打ち欠きが認められる。664はⅣ期甕B2類。口縁部が短く屈曲して内傾する。端部及び内面に強いナデによる凹面を形成する。口縁端部に刺突文を施文する。さらに、胴部上半に刺突文を2帯施文し、その間に直線文を施す。胴部中位よりやや下がった位置に波状文が施文される。底部には穿孔が認められる。胴部外面中程と底面内面から胴部下方内面にかけて煤が帯状に付着する。665はⅣ期壺の胴部で摩耗が著しい。666は665の同一個体の可能性のある底部である。667はⅣ期大型壺C類の頸部で直線文と刺突文がみられる。668は土製の把手。板状で穿孔が認められる。側面に剥離した痕跡があるので、何か別の土器に取り付けられていたものと考えられる。胎土からすると

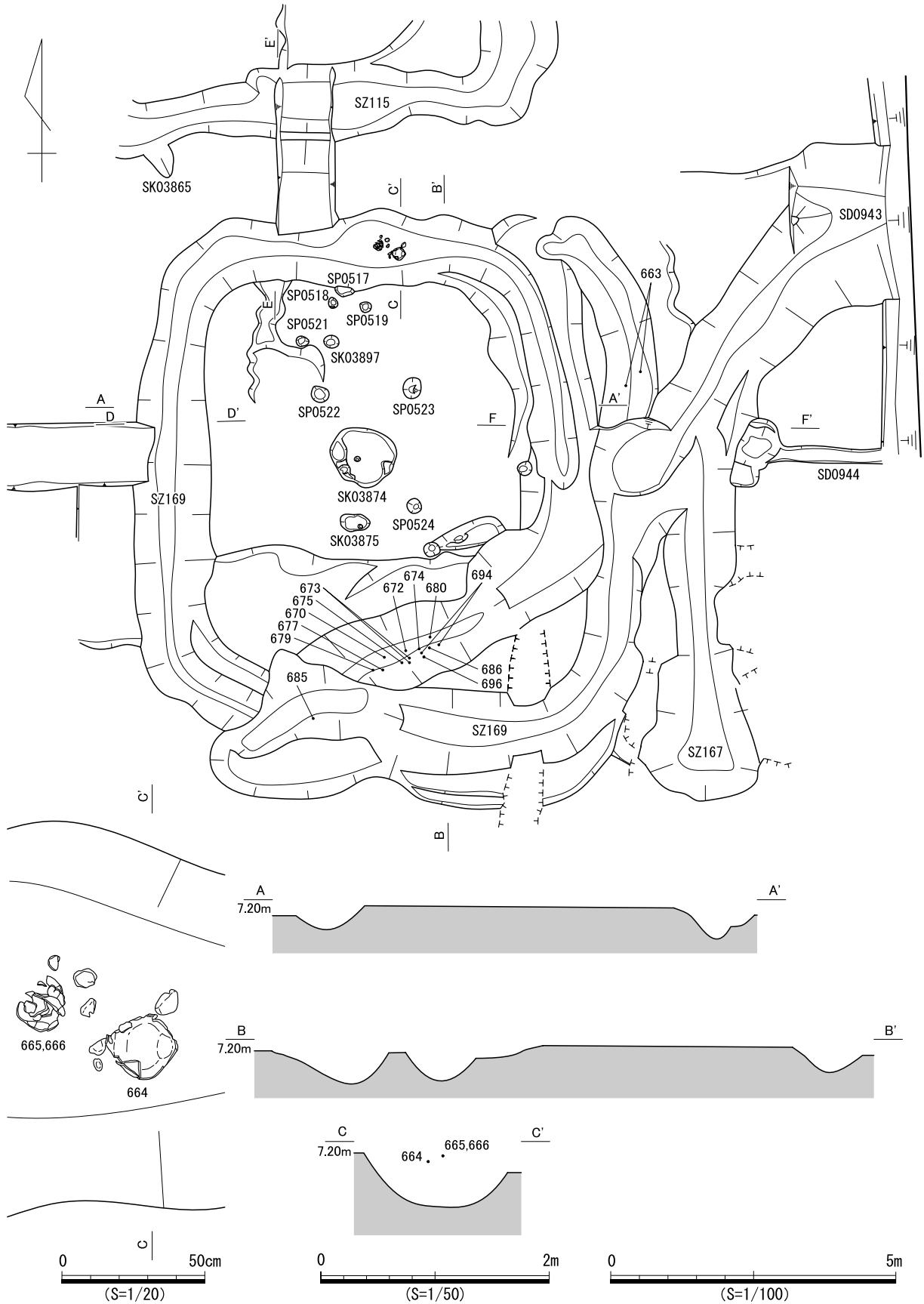
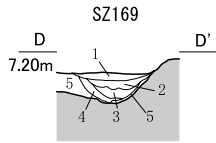
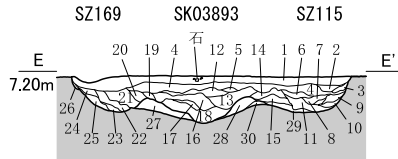


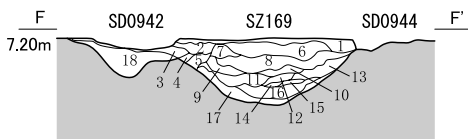
図 195 SZ169 遺構図 (1)



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.03cm炭化物5%混入
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック3%混入
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック10%混入
- 4 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 しまりややあり 粘性なし 7.5Y3/1 オリーブ黒色土ブロック5%混入
- 5 5GY4/1 暗オリーブ灰色土 砂質土 しまりややあり 粘性なし 7.5Y3/1 オリーブ黒色土ブロック3%混入



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.3cm炭化物3%混入 鉄分沈着あり
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 5Y4/4 オリーブ黄色土シルトブロック2%混入 鉄分沈着あり
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cm以下砂粒を30%混入 鉄分沈着あり
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.3cmの炭化物を1%混入 鉄分沈着あり
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 5Y5/3 灰オリーブ色土ブロック20%混入(SK03893埋土)
- 6 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり(SZ115埋土)
- 7 7.5Y2/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性あり(SZ115埋土)
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり(SZ115埋土)
- 9 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.2cm炭化物5%混入(SZ115埋土)
- 10 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色シルトブロック10%混入(SZ115埋土)
- 11 10Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり シルト質 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルトブロック5%混入(SZ115埋土)
- 12 5Y4/2 灰オリーブ色土 10Y4/2 オリーブ灰色シルトブロック3%混入(SK03893埋土)
- 13 7.5Y2/1 黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cm炭化物3%混入(SK03893埋土)
- 14 7.5Y3/2 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cm炭化物10%混入(SZ115埋土)
- 15 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cm炭化物1%混入(SZ115埋土)
- 16 7.5Y2/1 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック3%混入(SK03893埋土)
- 17 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性あり シルト質(SK03893埋土)
- 18 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 粘性あり シルト質 径0.1~0.3cm炭化物3%混入(SK03893埋土)
- 19 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性ややあり(SK03893埋土)
- 20 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cm炭化物3%混入(SK03893埋土)
- 21 10Y2/1 黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.2cm炭化物2%混入(SZ169埋土)
- 22 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック5%混入(SZ169埋土)
- 23 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.05cm炭化物3%混入(SZ169埋土)
- 24 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cm炭化物2%混入(SZ169埋土)
- 25 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物10%混入(SZ169埋土)
- 26 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 粘性ややあり シルト質 しまりあり(SZ169埋土)
- 27 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 28 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 29 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり(SZ115埋土)
- 30 5GY4/1 暗緑灰色シルト しまりあり 粘性あり



- 1 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.2~0.5cmの炭化物5%混入 鉄分沈着あり (IA13 1層と共通) (SZ169埋土)
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.2~0.5cmの炭化物3%混入 鉄分沈着あり (SZ169埋土)
- 3 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 5Y4/4 暗オリーブ色土ブロック30%混入 径0.2cm炭化物混入 鉄分沈着あり (SZ169埋土)
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり (SZ169埋土)
- 5 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y4/2 灰オリーブ色土ブロック30%混入 (SZ169埋土)
- 6 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.5cm炭化物7%混入 (SZ169埋土)
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.2cmの炭化物5%混入 (SZ169埋土)
- 8 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.2cm炭化物5%混入 (IB14西 5層対応) (SZ169埋土)
- 9 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック10%混入 (SZ169埋土)
- 10 7.5Y2/1 黒色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5cm炭化物20%混入 (SZ169埋土)
- 11 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック20%混入 (SZ169埋土)
- 12 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり (SZ169埋土)
- 13 10YR3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y4/2 灰オリーブ色土ブロック1%混入 (SZ169埋土)
- 14 7.5Y4/2 灰オリーブ しまりややあり 粘性ややあり (SZ169埋土)
- 15 7.5Y5/3 灰オリーブ しまりあり 粘性ややあり (SZ169埋土)
- 16 7.5Y4/2 灰オリーブシルト しまりややあり 粘性ややあり 径0.2~0.5cm炭化物10%混入 (SZ169埋土)
- 17 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック40%混入 (SZ169埋土)
- 18 5GY3/1 暗オリーブ灰色砂質土 しまりややあり (SZ169埋土)

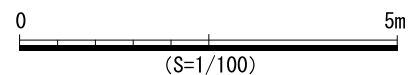


図 196 SZ169 遺構図 (2)

IV期の土器にちかい。669はV期～VI期壺A1a類。口縁端部下端が拡張され、内面には羽状文が施文される。670はVI～VII期の壺A3類。外面には刺突文があり、内面はやや屈折して口縁部が外反する。671、672はV～VI期の壺F類。671は口縁部が短く、端部は平坦である。672はやや口縁部が直立し、胴部は偏平である。673～675はVI期～VII期の壺H類。673は口縁部が内湾するH2a類で打ち欠きが認められる。胴部はやや偏平である。674は頸部径がやや大きく、口頸部がやや短い。675は口頸部を欠損する。676は頸部径が大きくなると考えられるので、V期後半～VI期壺I類の胴部であろう。678～680はV期後半～VI期の甕B類。678は刺突文と直線文のあるB2類で口縁端部がやや平坦である。677はV期～VI期甕A3類。胴部上方に直線文、口縁端部に刺突文が施される。678～680の胴部最大径の位置は胴部中位よりやや上位にあり共通した形状が認められる。677とも類似するので、677～680はそれほど時期差のない資料と考えられる。681、682はVI期甕E3類。口縁部が短く屈曲して、端部がやや平坦である。683はV期～VI期甕AB類の脚部で、直線的に脚部が開く。684はVI期～VII期甕E類の胴部下半から脚部が遺存する資料。短い脚部があり、打ち欠きが認められる。685はVI期の高坏C1a類。坏底部が広く口縁部はやや外反する。脚部は付根から直線的に開く。686は高坏C類の脚部で685より外反傾向が強いので、VII期の可能性が高い。687はV期前半の高坏B1類坏部の破片。屈曲が著しい。688はV期の高坏B3類坏部の破片。波状文が認められる。689はV期高坏I類の脚部で直線文が施文される。690はV期高坏B類の脚部。付根の接合部位が中実である。691はVI期高坏J類。坏部は口縁端部が弱く屈曲して3条の沈線が施文される。脚部は付根から直線的に開き、高坏CD類と類似する。透孔は2穿孔で、透孔から段をもって裾部が外反する。段直下に4本の沈線を施文する。691は東海地方ではあまり例のない資料だが、胎土は搬入品ではない。坏部の形状、脚裾部の形状は北陸地方の資料と類似するが、脚部の付根から段までの形状は高坏CD類と同様なので、本例は北陸地方の影響を受けながらも在地の要素と折衷した資料と考えられる。692はV期後半～VI期の高坏F類の脚部。透孔が2穿孔で、透孔から脚部が強く開く。693、694ともに器台B類。693は器台B1a類であるが、694は脚部が付根からやや外反するのでVI期B2a類と考えられる。695は口縁端部に円形浮文をもつVI期器台B1c類。形状は694に類似する。696は内湾する脚裾部をもつのでVI～VII期の器台B3類であろう。697は高坏C類や器台B類脚部と類似する形状だが、上端には接合部位が認められない。高坏や器台の脚部に類似する特異な土器である。内外面にはミガキは認められず、ハケ目や指頭圧痕が残るので、高坏や器台の製作途中のものではないと考えられる。また、煤の付着も認められるので、形状は高坏・器台に似るが製作技法も含めて、高坏・器台とは別の用途をもって製作され、使用された土器の可能性が高い。形状や胎土からみてVI期と考えられる。698はV～VI期の手捏ね土器。底部がやや突出する。

時期 遺構の構築と考えられる土器（664～666）から、IV期と考えられる。また、これらと拡張した東溝内の供献土器（663）もほぼ同時期のものであることから、構築時期と拡張時期には大きな時期差はないと考える。

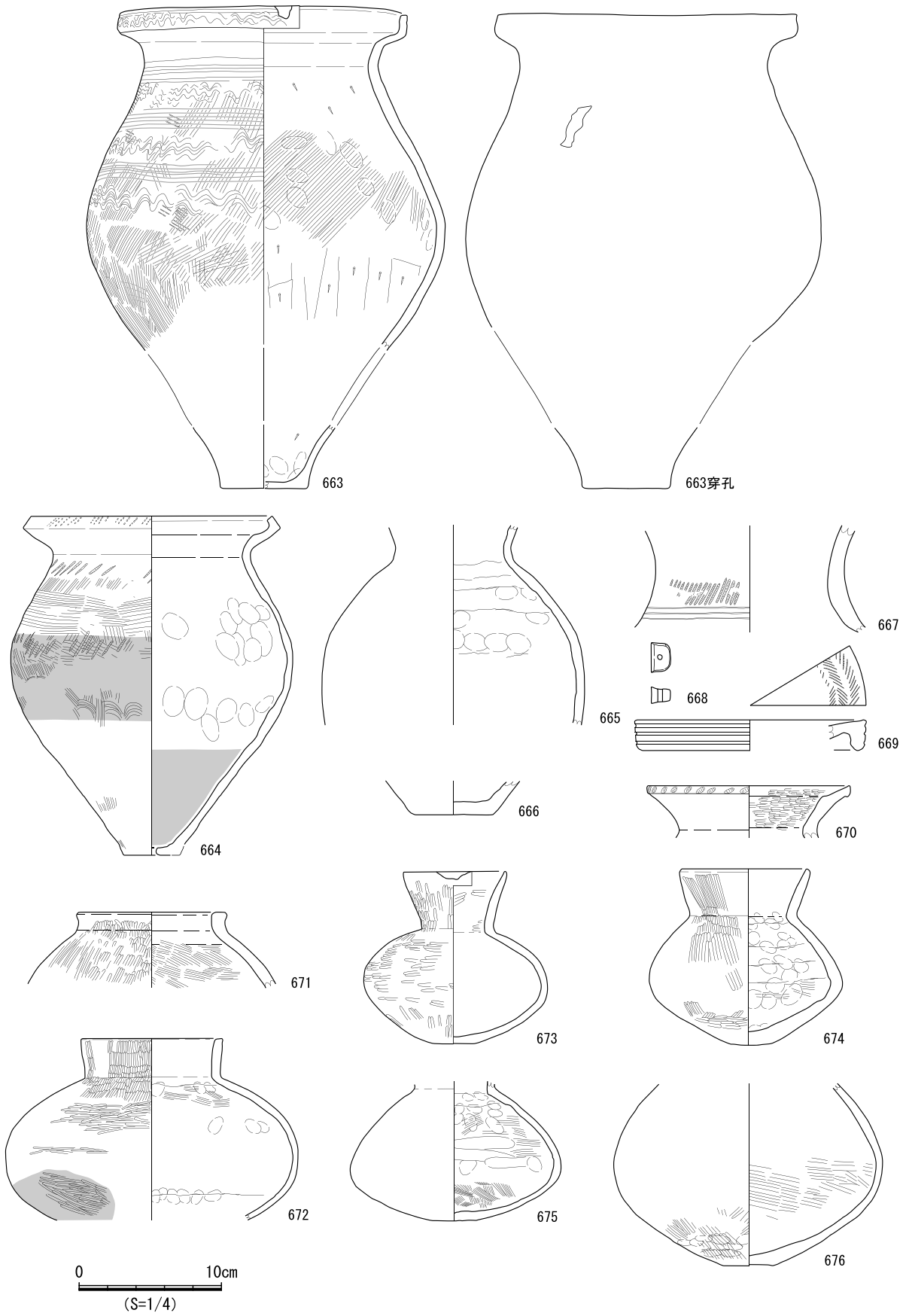


图 197 SZ169 遺物実測図 (1)

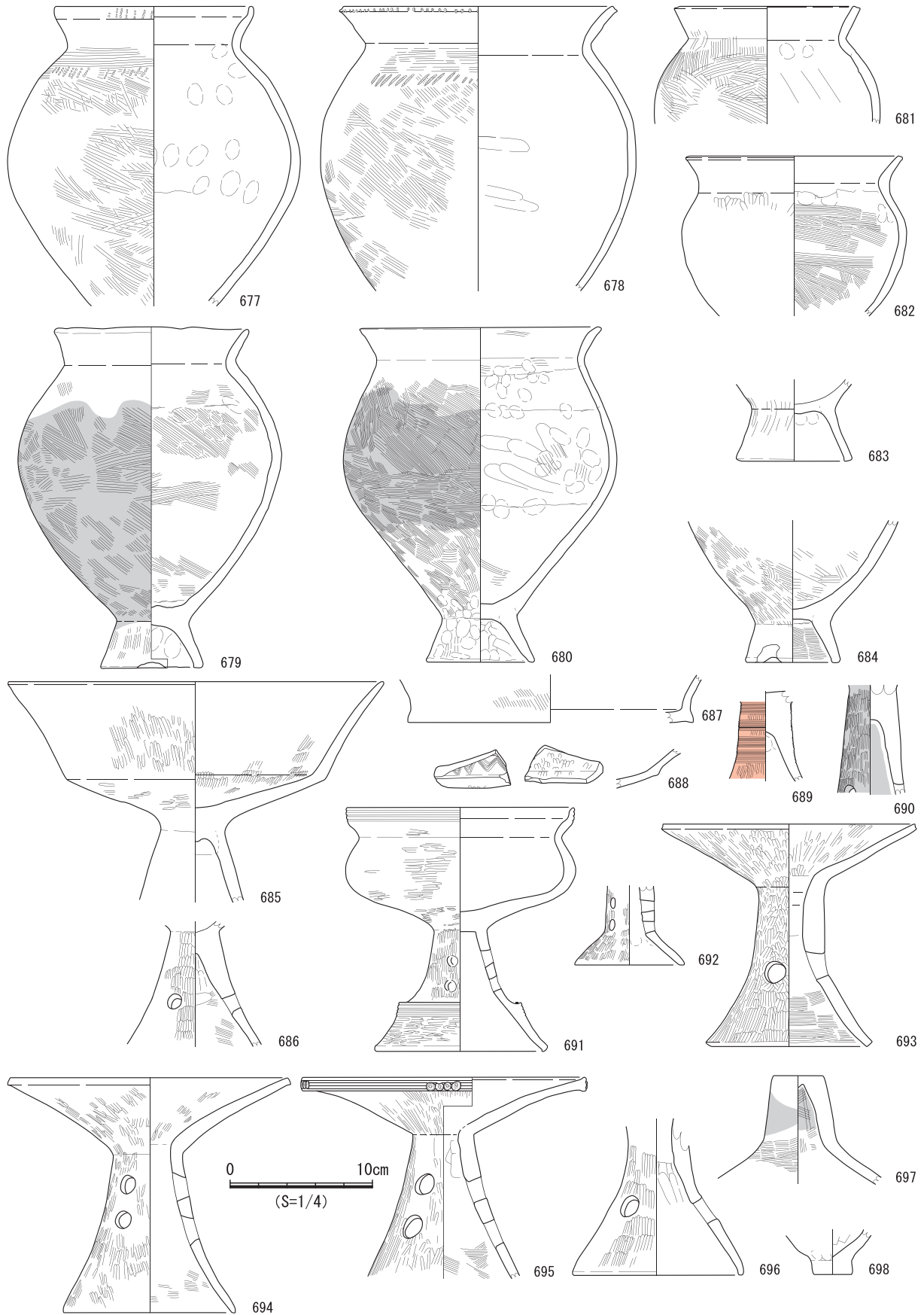


図 198 SZ169 遺物実測図 (2)

2 溝状遺構

SD1009 (遺構：図200、遺物：図199)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西方向に伸びる溝で、SB402床面中央で検出した。検出時の埋土は周辺の方形周溝墓と土色や土質が類似していたが、対応する溝が確認できなかったため、単独の溝と判断した。

形状 長軸約5.4m、幅1.1mを測る。深さは0.4mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層した。最下層に壁面崩落土の可能性のあるブロック土を含み、上層は中央が窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土器136点が出土した。土器は上層から出土した摩耗したVI期～VII期のものが多いものの、比較的残りのよいIII期の土器片も出土した(699)。

出土遺物 699はIII期前半壺A類。口頸部を欠損する。胴部は強く屈曲し、算盤玉状を呈す。底部は突出する。胴部上半には2帯の直線文が認められ、文様帯上下端には太い沈線が付加される。文様帯を上下に縦走する2帯1組の扇形文が認められる。

時期 VII期のSB402に先行することと、比較的残りのよい遺物(699)の時期から、III期と考えられる。

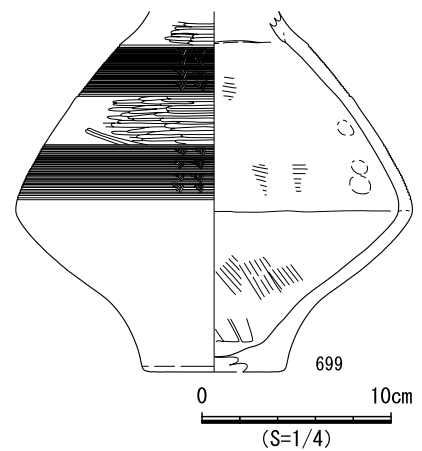


図199 SD1009 遺物実測図

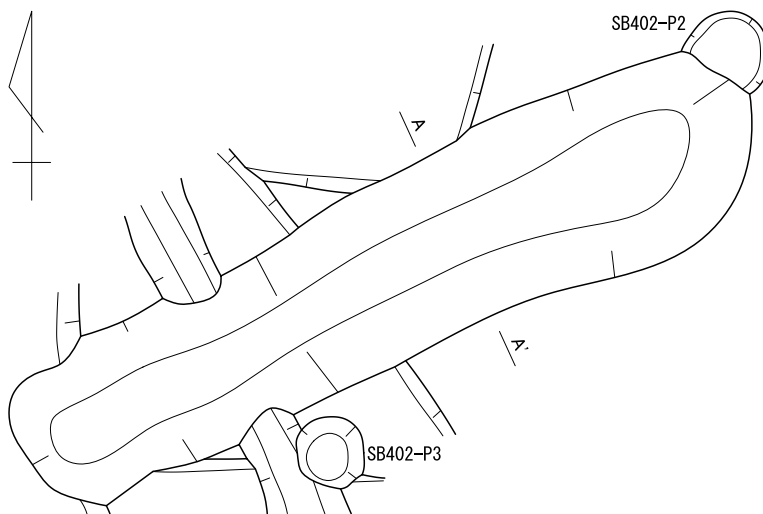
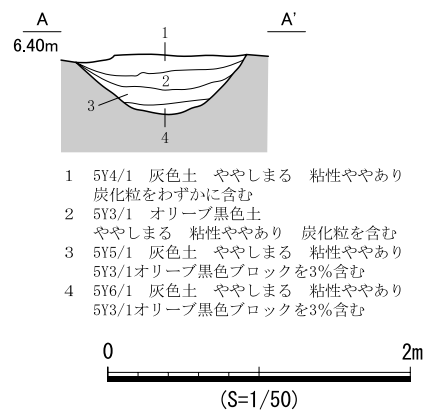


図200 SD1009 遺構図



- 1 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒をわずかに含む
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒を含む
- 3 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色ブロックを3%含む
- 4 5Y6/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色ブロックを3%含む

3 土坑

SK03671 (遺構：図202、遺物：図201)

検出状況 西部西側北端に位置する。SD0050下層除去後に検出し、平面形は漸移的で不明瞭であった。なお、遺構の重複関係はなかった。

形状 平面形は楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁面の北側と西側に平坦面がある。

埋土 3層に分層した。埋土全体に炭化物を含む。1層と2層の層界の凹凸が著しいことやブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器29点、石器2点が出土した。土器はいずれもIV期の小破片である。

出土遺物 700、701はIV期甕A類。700は口縁部が頸部で強く屈折して、短く外反する。701は口縁部が緩やかに外反する。702は胴部中程から底部にかけてが残存するIV期甕A類。

時期 出土遺物の時期から、IV期と考えられる。

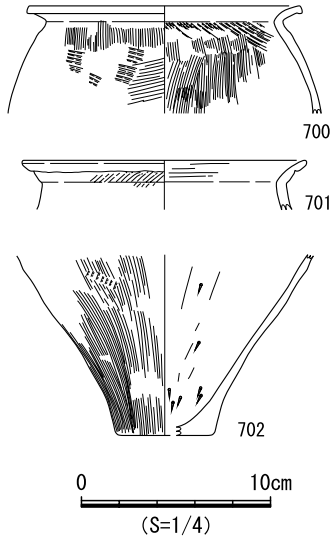


図201 SK03671 遺物実測図

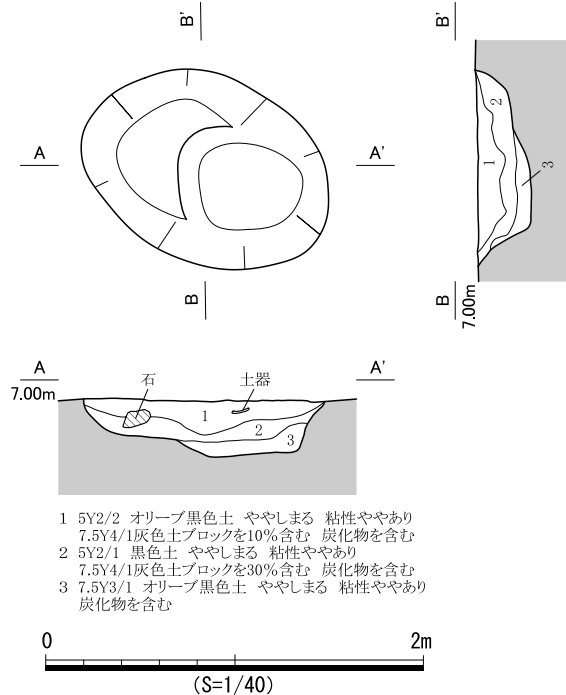


図202 SK03671 遺構図

SK04311 (遺構：図204、遺物：図203)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側は攪乱除去後に検出した。

形状 長軸長約2.6m、深さ約0.5mであり、不整形を呈する。底面は北東側が深く、南壁にむかって緩やかに立ち上がる。北壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。礫の混入が多く、層界の凹凸が顕著であることから、

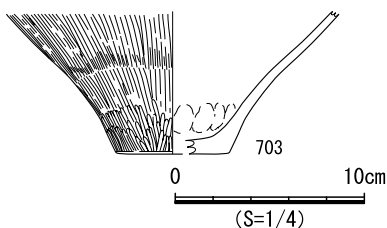


図203 SK04311 遺物実測図

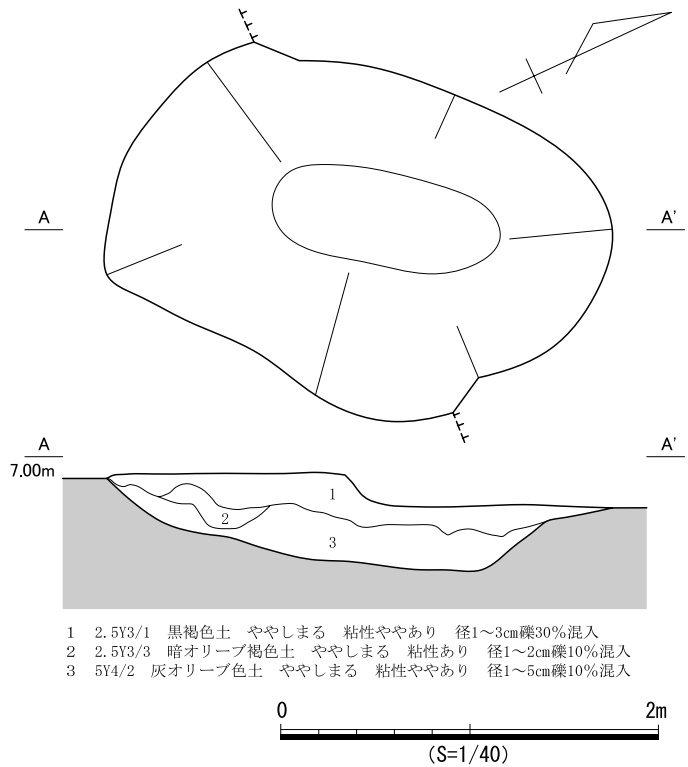


図204 SK04311 遺構図

人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器30点が出土した。その大半は下層から出土した甕の破片である。

出土遺物 703はIV期甕A類。平底で、胴部は大きく開く。

時期 出土遺物の時期から、IV期と考えられる。

SK04888 (遺構：図206、遺物：図205)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置する。IV期のSZ150西溝から西側へ約2m離れた場所にある単独の土坑で、平面形は明瞭であった。

形状 長軸長約0.7m、短軸長約0.5mの不整楕円形を呈する。深さは0.05mと浅く、底面は丸みを帯びる。壁面は北側が緩やかで、南側が比較的急である。

埋土 単層であり、炭化粒をわずかに含む。ブロック土が混入し、ほぼ完形に復元できる2個体の土器が出土したことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器98点が出土した。それらの土器は2個体の土器(704、705)に接合してきた。壺(704)は横位、鉢(705)は正位に並置された状況で出土した。

出土遺物 704はIV期壺A2類。頸部は細身で、口頸部は袋状を呈する。胴部は算盤玉状で肩部が屈曲する。口頸部から胴部上半に文様が施文される。口縁部には凹線文3条、その下に羽状文が認められる。頸部にはクシ状工具(2本1組×3帯)による直線文3帯、胴部上半には同じ工具による直線文と波状文が2帯交互に施文される。705はIV期鉢A類。小さな底部から胴部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が直立する。端部は平坦で、幅広の凹線文が3条認められる。

時期 出土遺物の時期から、IV期と考えられる。

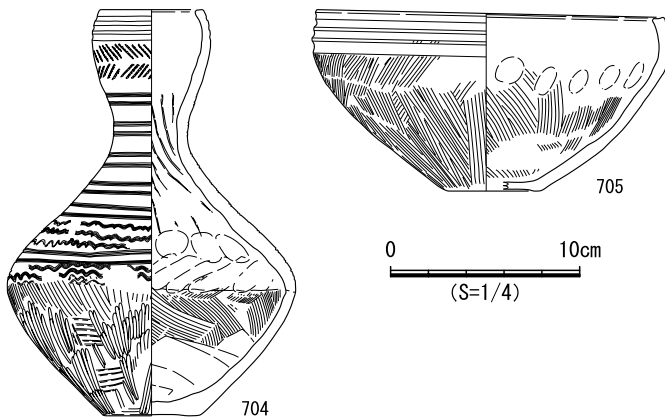


図205 SK04888 遺物実測図

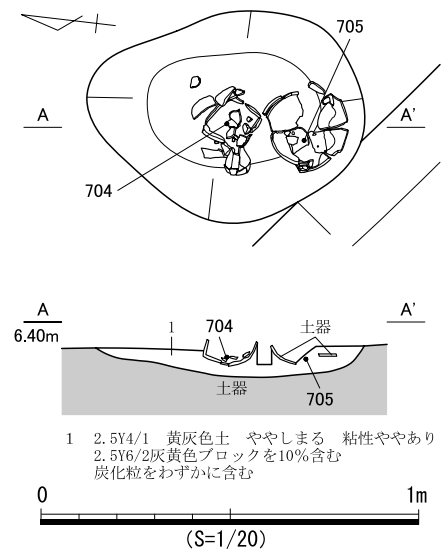


図206 SK04888 遺構図

4 自然流路

弥生時代中期の自然流路は2条(NR005、NR011)検出した(図112)。これらは検出時の様相や埋土の類似性から同一流路の可能性が高い。しかし、両者の検出位置が離れていることや、両者に挟まれる地点で検出できなかったことから、不明な点も多い。

NR005 (遺構：図207、遺物：図208)

検出状況 西部東側中央の南西隅に位置し、本遺構埋土上面からIV期SZ151の周溝が掘り込まれてい

る。西側の様相は不明である。

形状 東側上端は蛇行するが、およそ北西から南東にのびている。深さは約0.5mであり、底面は東側から西側にむかって下降し、壁面の傾斜は緩やかである。検出時の様相や埋土の類似性から、

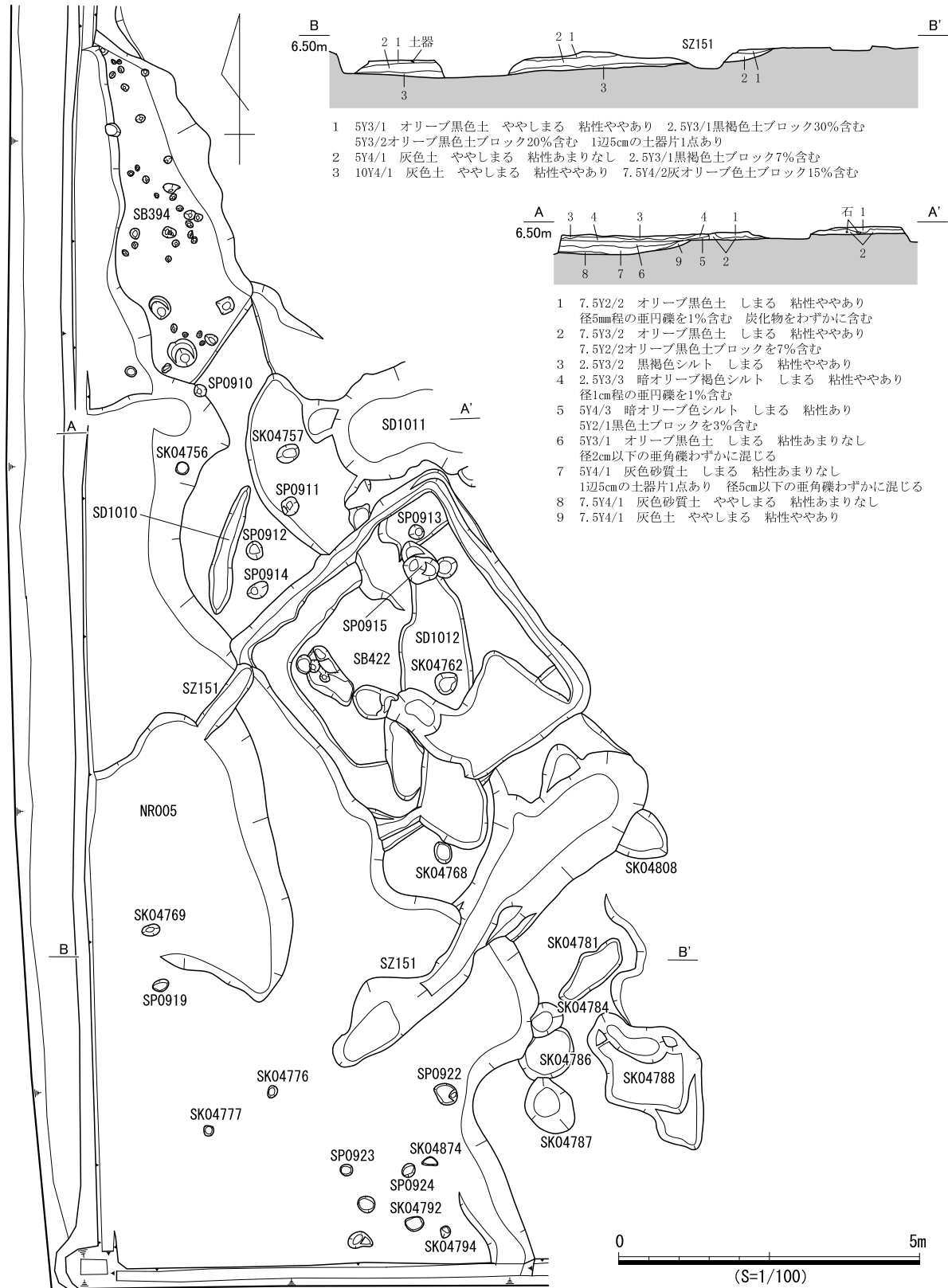


図 207 NR005 遺構図

NR011 と同一流路である可能性が高い。

埋土 A-A' で4層 (6～9層)、B-B' で3層に分層した。いずれも上層はオリーブ黒色土、下層は灰色土が堆積し、いずれもブロック土が混入することから、SZ151などの土地利用の際に整地している可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器373点、石器類1点、木製品1点が出土した。土器はいずれも細片であり図示していない。人工層位c層から、石棒(706)が出土した。

出土遺物 706は緑色片岩を素材とする石棒である。縁辺部を剥離成形してから敲打と研磨を加え、形を整えている。なお、上方は折損している。

時期 IV期SZ151に切られることからIV期以前と考えられる。

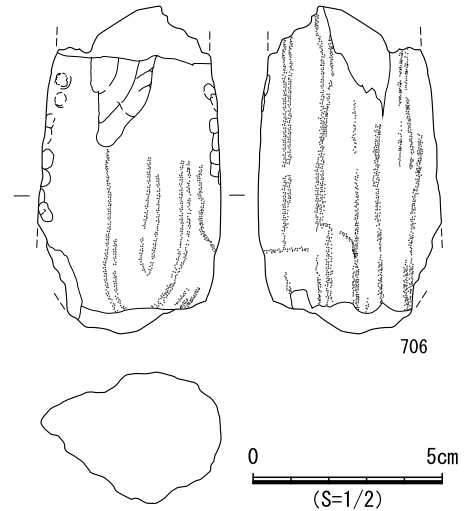


図 208 NR005 遺物実測図

NR011 (遺構：図 209・210、遺物：図 211)

検出状況 西部西側南寄りに位置する。NR012底面で検出し、縄文時代晩期後半～I期の木棺墓群を被覆する。北側と東側は調査区域外にあるが、北東側のNR005と埋土が類似しており、同一流路である可能性が高い。調査区中央に設定した土層観察用畦にて本流路の落ち込みが確認でき、その上端から平面形を決定した。なお、本流路は2010年度に調査し、その南東側を2011年度に調査したが、2011年度の調査区は狭小であったため、安全上の理由で流路の掘削は行わなかった。

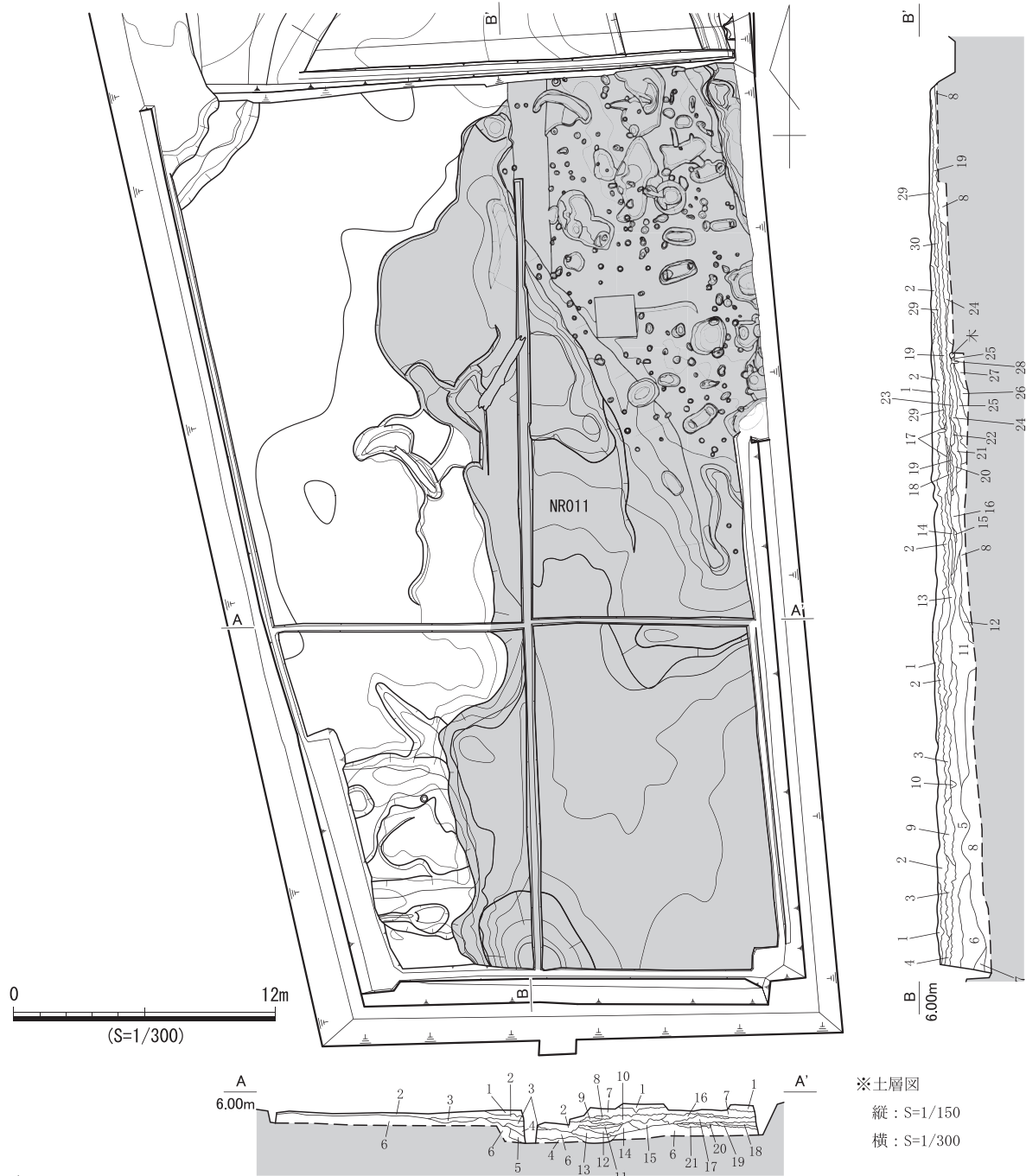
形状 西側上端は蛇行するが、およそ南北方向に主軸をもつ。東側の上端をNR005とすると、流路幅は約20～30mとなる。底面は北東側が高く、調査区中央から南側にかけて緩やかに下降している。

埋土 調査区中央付近では、下層に黒褐色土を筋状に含むシルト層(A-A' 12層)や植物遺体を含むシルト層(A-A' 21層)、直径1cm以下の円礫と粗砂から成る砂礫(A-A' 15層)などが堆積している。一方、調査区南壁沿いになると下層(B-B' 6層)の粒径が3～5cmのやや大きな礫が目立つようになることから、当初は一定量の水量が流れていたと考えられる。また、上層は黒褐色土や黄灰色土がほぼ水平に堆積していることから、流水が少なくなり、ゆっくりと堆積していったと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,923点、石器類20点、木製品13点が出土した。土器は縄文時代晩期～Ⅷ期のものが出土しており、特に多いのは縄文時代晩期～I期の土器である。本遺構の上面にはV期以降のNR012が堆積していることや、本流路と同一埋土の可能性のあるNR006はIV期の方形周溝墓に切られることから、V期以降の遺物は混入と考えられる。遺物は主に調査区中央から南側にかけて散在して出土した。

出土遺物 707、709は口縁部が外反気味で、端部が平坦で押圧のある縄文時代晩期の深鉢。707は端部よりやや下がった位置に貼付突帯があり、ヘラにより狭い間隔でD字状の押圧を施す。胴部は口縁部から屈曲して内湾し、ケズリが認められる。708は口縁部がやや内湾気味となる縄文時代晩期の深鉢。端部は丸く、右下がりの粗い条痕が認められる。710は口縁部がわずかに外反する。711はやや口縁部が内傾する縄文時代晩期後半の深鉢。端部からやや下がった位置に突帯を貼付し、その上にO字状の

貝による押圧が認められる。712は口縁部が尖り気味の縄文時代晩期後半の深鉢。端部よりやや下位に突帯が貼付される。713は口縁部が平坦な縄文時代晩期後半の深鉢。714は縄文時代晩期後半の深鉢胴部。715は口縁部が屈曲して外反する浅鉢。端部に方形の突起が付く。716はI期壺。口縁部が短く



- | | | | | | |
|----|---------|---------------------|----------------|--------|------------------|
| 1 | 2.5Y4/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体をわずかに含む |
| 2 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を含む |
| 3 | 2.5Y5/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 径5~20mmの礫を多く含む |
| 4 | 粗砂 | 径2cm以下の円礫をわずかに含む | | | |
| 5 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を多く含む |
| 6 | 砂礫 | 径3~10cmの円礫が主体で粗砂を含む | | | |
| 7 | 2.5Y3/2 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | |
| 8 | 2.5Y4/1 | 黄灰色シルト | ややしまる | 粘性ややあり | |
| 9 | 微砂 | 径2cm以下の円礫をわずかに含む | | | |
| 10 | 2.5Y5/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 径3cm以下の円礫をわずかに含む |
| 11 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色土 | ややしまる | 粘性あり | 植物遺体を多く含む |
| 12 | 5Y5/1 | 灰色シルト | ややしまる | 粘性ややあり | |
| | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | を筋状に含む | | |
| 13 | 砂礫 | 径1cm以下の円礫と粗砂から成る | | | |
| 14 | 粗砂 | 粗砂が主体で径5mm以下の小礫を含む | | | |
| 15 | 砂礫 | 粗砂と径1cm以下の円礫から成る | | | |
| 16 | 砂礫 | 径2cm以下の円礫と粗砂から成り | 2.5Y4/1黄灰色土を含む | | |
| 17 | 2.5Y6/1 | 黄灰色シルト | ややしまる | 粘性ややあり | |
| 18 | 粗砂 | 粗砂が主体で径5mm以下の小礫を含む | | | |
| 19 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を含む |
| 20 | 粗砂 | | | | |
| 21 | 2.5Y5/1 | 黄灰色シルト | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体をわずかに含む |

図 209 NR011 遺構図 (1)

外反し、胴部は強く膨らむ。口頸部と胴頸部の境には削り出しの突帯と段が形成される。717はI期壺底部。底部が突出し、胴部との接合痕が内傾接合である。718は縄文時代晩期後半の変容壺と考えられる。719、720はI期壺。口縁端部と突帯に円形刺突文が施文される。721は有文の縄文時代晩期後半浅鉢。中央が途切れる4条の沈線が認められるが、眼鏡状文様の一部の可能性もある。722、723はI期甕。722は口縁部が弱く外反し、端部が平坦である。723は口縁部が外反し、端部に押圧が認められる。724はI期～II期の甕。口縁部が短く強く外反する。725はIV期甕A2類。頸部が屈折し、刺突文を施す。端部は凹面を形成し、ナデ以前のタタキ痕跡が認められる。

時期 本流路は縄文時代晩期のNR010の上面に堆積し、V期以降のNR012に覆われている。また、本遺構と同一埋土の可能性のあるNR005はIV期の方形周溝墓に切られている。出土遺物は縄文時代晩期～IV期の遺物が含まれることから、I期～IV期の間に堆積したと考えられる。

- B-B'
- | | | | | | | | | | | | | |
|----|---------|------------------------------------|---------|--------|----------------|----|--------------------|-----------------------------------|-------|--------|--------------------------|------------------|
| 1 | 2.5Y4/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体をわずかに含む | 16 | 砂礫 | 径5mm以下の小礫と粗砂から成る | | | | |
| 2 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を含む | 17 | 砂礫 | 径1cm以下の小礫と粗砂から成り | | | | |
| 3 | 2.5Y3/2 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を含む | 18 | 2.5Y3/1黒褐色土を部分的に含む | | | | | |
| 4 | 微砂 | 2.5Y3/2黒褐色土を多く含む | (踏み込みか) | | | 19 | 2.5Y4/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性あり | | |
| 5 | 砂礫 | 径3cm以下の円礫と粗砂から成り部分的に2.5Y3/2黒褐色土を含む | | | | 20 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性あり | 炭化粒を含む | |
| 6 | 砂礫 | 径3～5cmの円礫が主体で粗砂を含む | | | | 21 | 2.5Y4/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性あり | 調査区北側約5mの範囲は径3cm以下の円礫を含む | |
| 7 | 2.5Y6/1 | 黄灰色粘土 | ややしまる | 粘性高い | | 22 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性あり | 植物遺体を含む | |
| 8 | 砂礫 | 径3～10cmの円礫が主体で粗砂を含む | | | | 23 | 砂礫 | 径1cm以下の円礫と粗砂から成る | | | | |
| 9 | 2.5Y4/1 | 黄灰色シルト | しまりなし | 粘性ややあり | | 24 | 2.5Y3/2 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | |
| 10 | 5Y4/1 | 灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | 25 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | |
| 11 | 粗砂 | 径2cm以下の円礫をわずかに含む | | | | 26 | 5Y3/1 | オリーブ黒色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 粗砂を筋状に含む | |
| 12 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 植物遺体を多く含む | 27 | 砂礫 | 径1cm以下の円礫と粗砂から成り2.5Y3/1黒褐色土を筋状に含む | | | | |
| 13 | 2.5Y5/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 径5～10mmの礫を多く含む | 28 | 粗砂 | 植物遺体を多く含む | | | | |
| 14 | 2.5Y3/2 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | 29 | 砂礫 | 径3～6cmの円礫と粗砂から成る | | | | |
| 15 | 2.5Y6/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | 30 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | | |
| | | | | | | | 29 | 2.5Y3/1 | 黒褐色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 径2cm以下の円礫をわずかに含む |
| | | | | | | | 30 | 2.5Y4/1 | 黄灰色土 | ややしまる | 粘性ややあり | 径2～6cmの円礫をわずかに含む |

図 210 NR011 遺構図 (2)

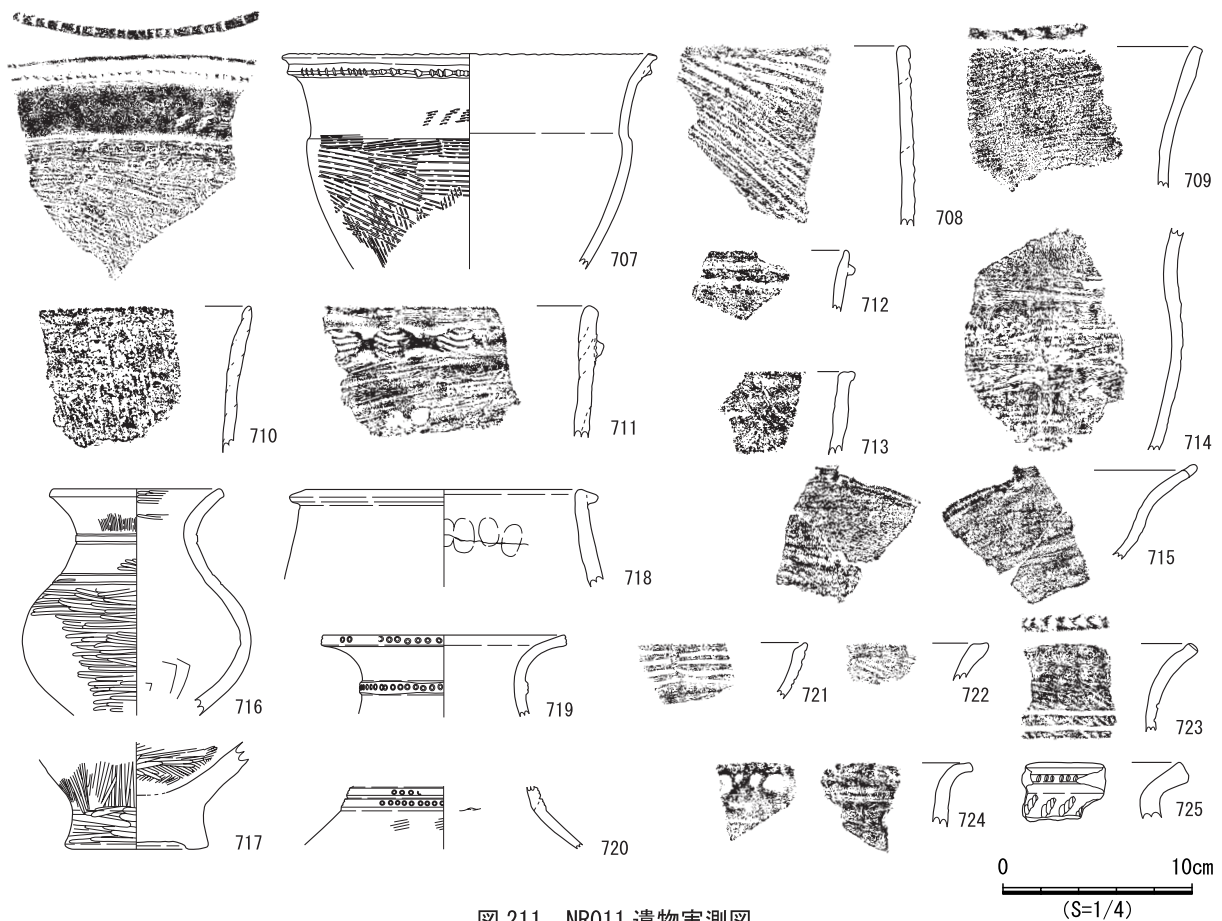


図 211 NR011 遺物実測図

第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

西部域の弥生時代後期から古墳時代前期（Ⅴ期～Ⅸ期）の遺構として、竪穴住居跡272軒、掘立柱建物跡10棟、柵跡11基、単独柱穴17基、墓4基、溝状遺構20条、土坑158基、自然流路4条、水制遺構1基について、以下に報告する。

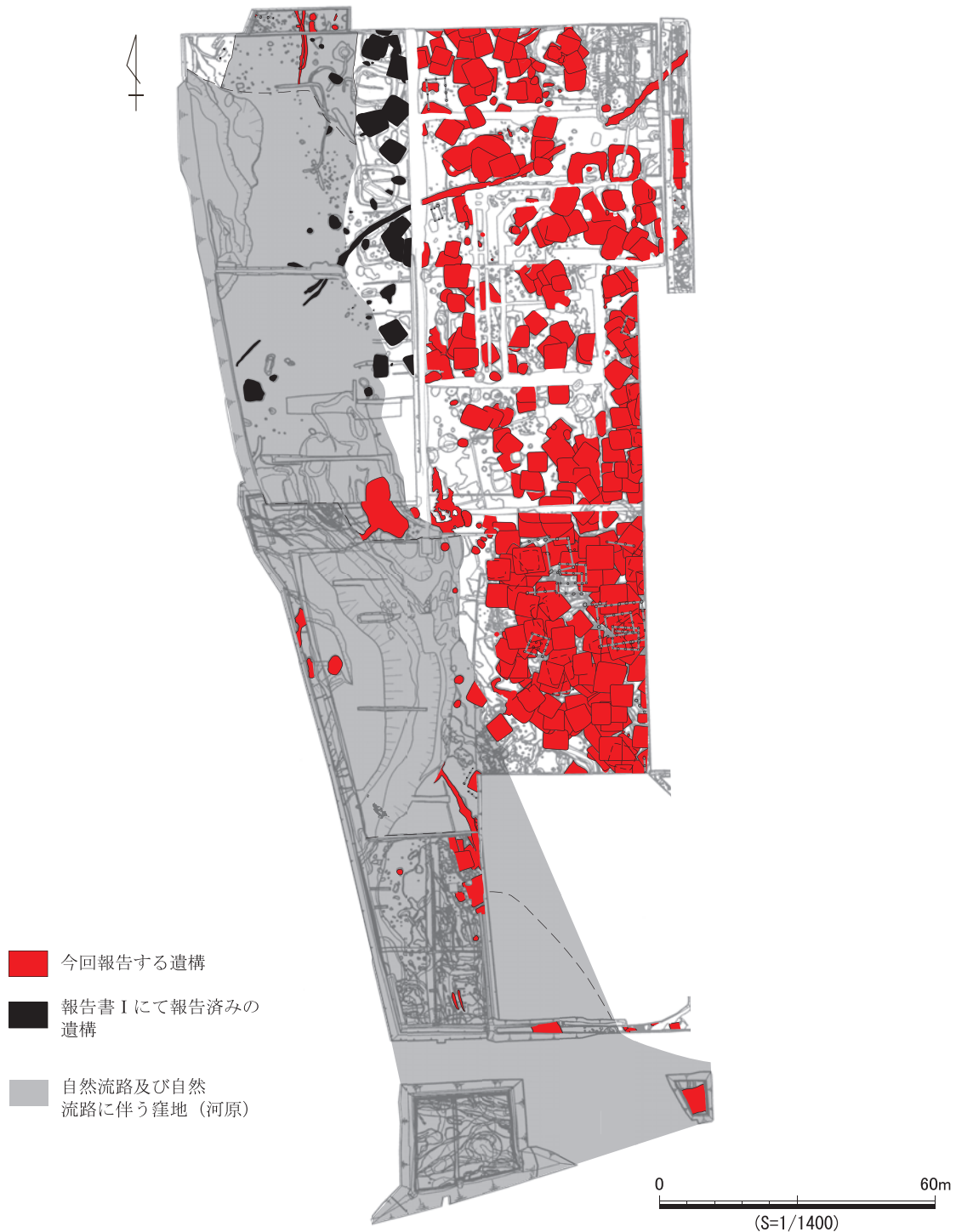


図 212 西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺構分布図

1 建物跡・柵跡

西部域では微高地部分において建物跡が高密度に分布する。特に竪穴住居跡は狭い範囲に密集して分布しており、5軒以上の竪穴住居跡が重複していることが珍しくない。以下、(1)竪穴住居跡、(2)掘立柱建物跡、(3)柵跡の順に記載する。

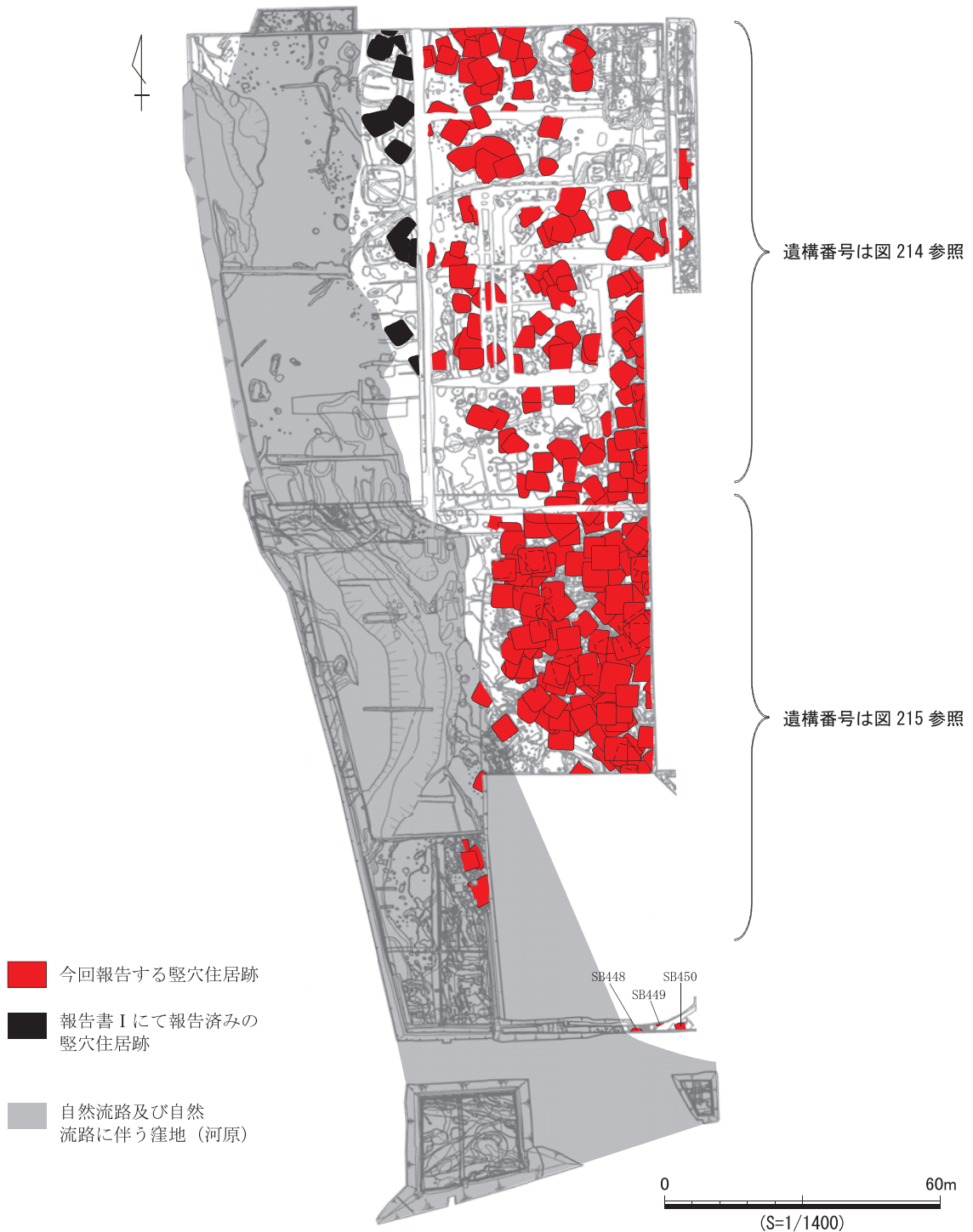


図 213 西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図（1）



図 214 西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図（2）

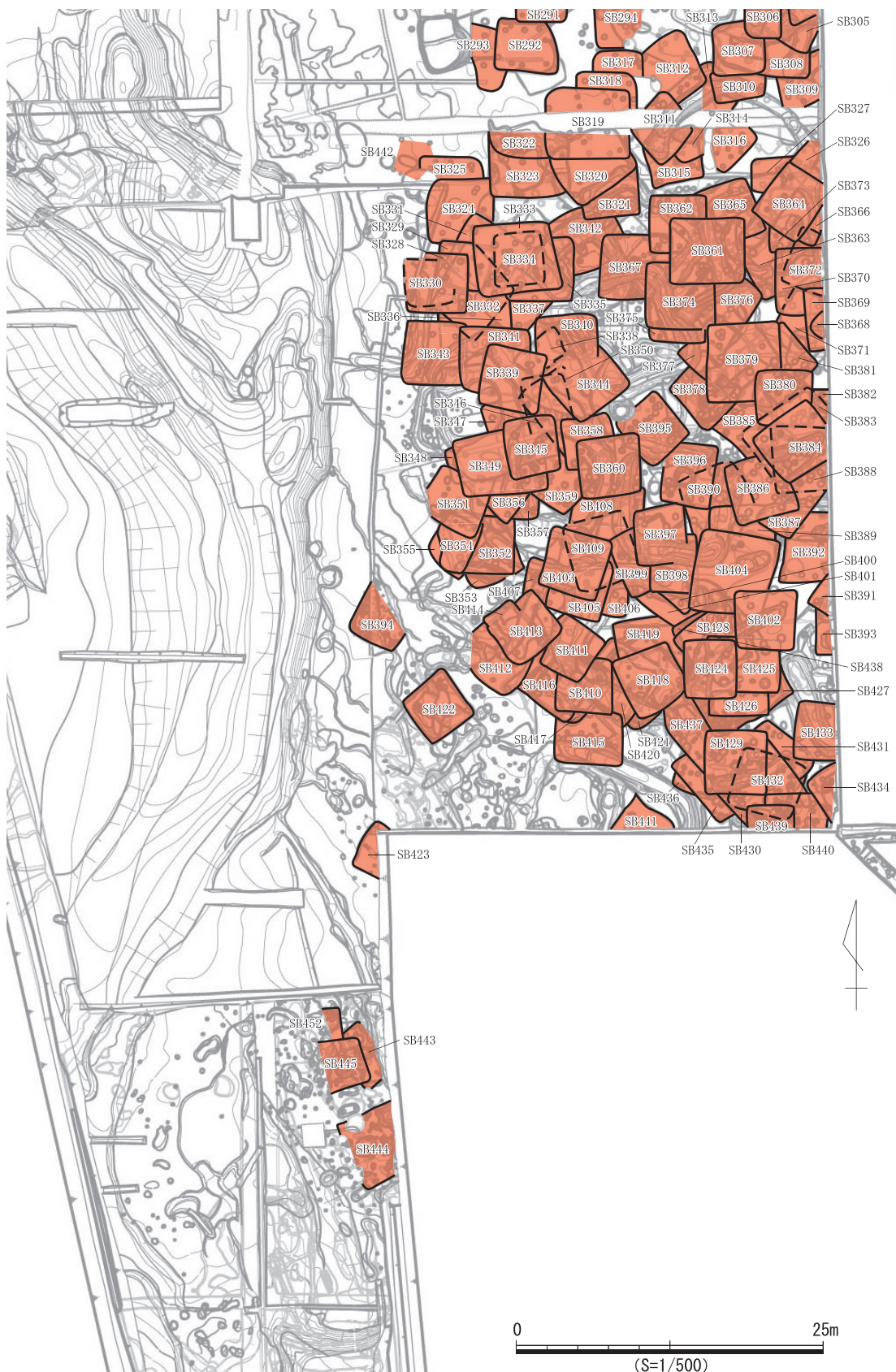


図 215 西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡分布図 (3)

(1) 竪穴住居跡

SB183 (遺構：図218、遺物：図216)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。掘形の西半分は調査区域外にあり、SB184を切る。

形状 西半分が不明だが、南北約3.8mの方形を呈する。壁面は緩やかで、深さは約0.2mである。

埋土 2層に分層した。東壁面沿いにブロック土を含む堆積層がある。

床面 ほぼ平坦で、貼床や硬化面は認められなかった。床面で小穴13基を検出した。P13を除く小穴は壁面付近に位置し、直径0.5m以下ではほぼ円形である。その多くは深さが約0.1mと浅く、底面は丸い。P12はやや深く底面が平坦で、断面形から柱穴の可能性がある。位置関係からP6が対応するものの、形状が異なる。いずれも柱痕跡は確認できなかった。P13は掘形のほぼ中央にあり、現存長1.00mを測る。断面形は浅い窪地状で炉跡の可能性があるが、焼土の堆積や被熱を受けた部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土から土器935点、小穴から土器48点が出土したが、特徴的な出土状況は認められなかった。なお、727はP3から出土した。

出土遺物 726、727はⅧ期の甕D類。728はⅦ期高坏D3類。多条沈線間に山形文を施文する。729はⅤ期後半～Ⅵ期前半の高坏B類脚裾部。

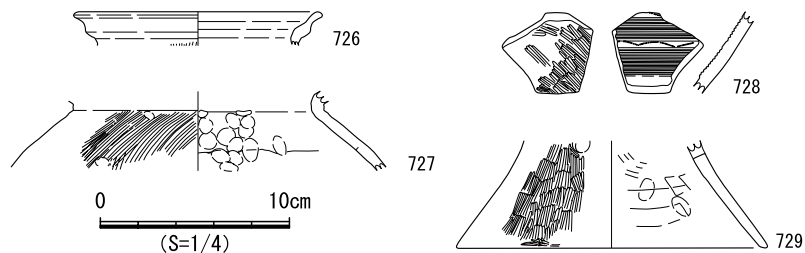


図216 SB183 遺物実測図

時期 Ⅵ期～Ⅶ期のSB184を切ることと出土遺物の時期からⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

SB184 (遺構：図219・220、遺物：図217)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側をSB183に、北側をSK03674に、南東隅をSB185にそれぞれ切られる。

形状 西側をSB183によって削平され、南北長約4.0mの小型の竪穴住居である。残存する壁面はそれぞれ直線的で隅部が鋭く屈曲する。壁面は緩やかに傾斜し、深さ0.1mに満たない。

埋土 2層に分層した。水平堆積で、礫や炭化物の混入が認められる。

床面 床面は平坦で硬化面や貼床は認められなかった。床面上で西壁面沿いに不規則に位置する小穴12基を確認した。大半が直径約0.2mの円形で、深さは約0.1mと浅い。そのうち、P2は長軸0.60mと規模が大きい。なお、柱穴の認定は困難であり、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋

土から土器716点、小穴から土器78点が出土した。多くはⅥ期～Ⅶ期にあ



図217 SB184 遺物実測図

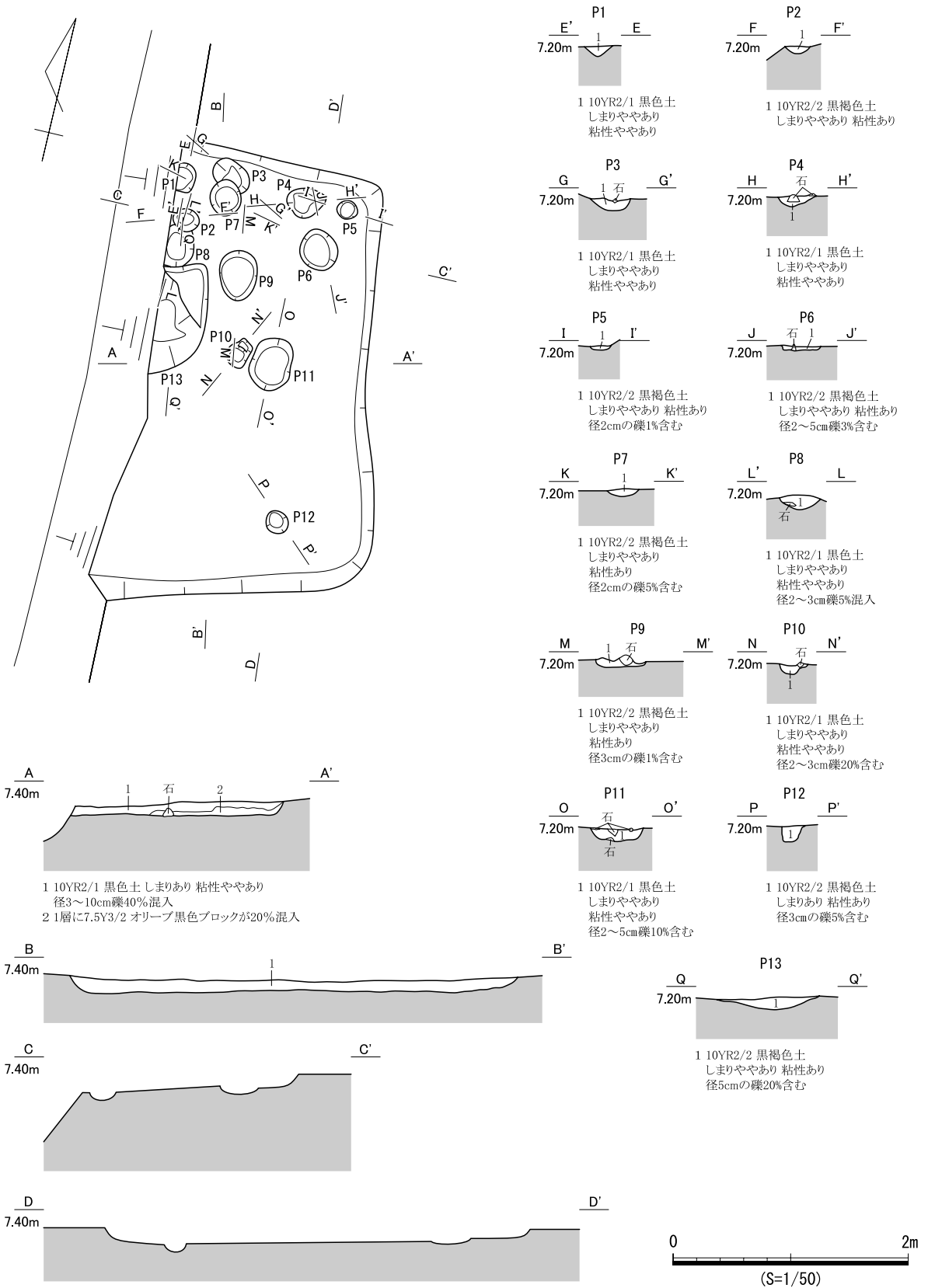


図 218 SB183 遺構図

たる。P2からⅦ期甕（732）が出土した。

出土遺物 730～732は甕D類。730はⅦ期甕D1b類で、口縁端部に刺突文がある。731、732はともに脚部。732は脚裾端部に折り返しが認められる。付根の径が狭く、Ⅶ期と考えられる。733はⅦ期高坏D2類。口縁端部に多条沈線を加える。734はⅥ期後半の高坏C3b類。口縁部内面を一部肥厚して、多条沈線を施文する。

時期 P2出土遺物と他の出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

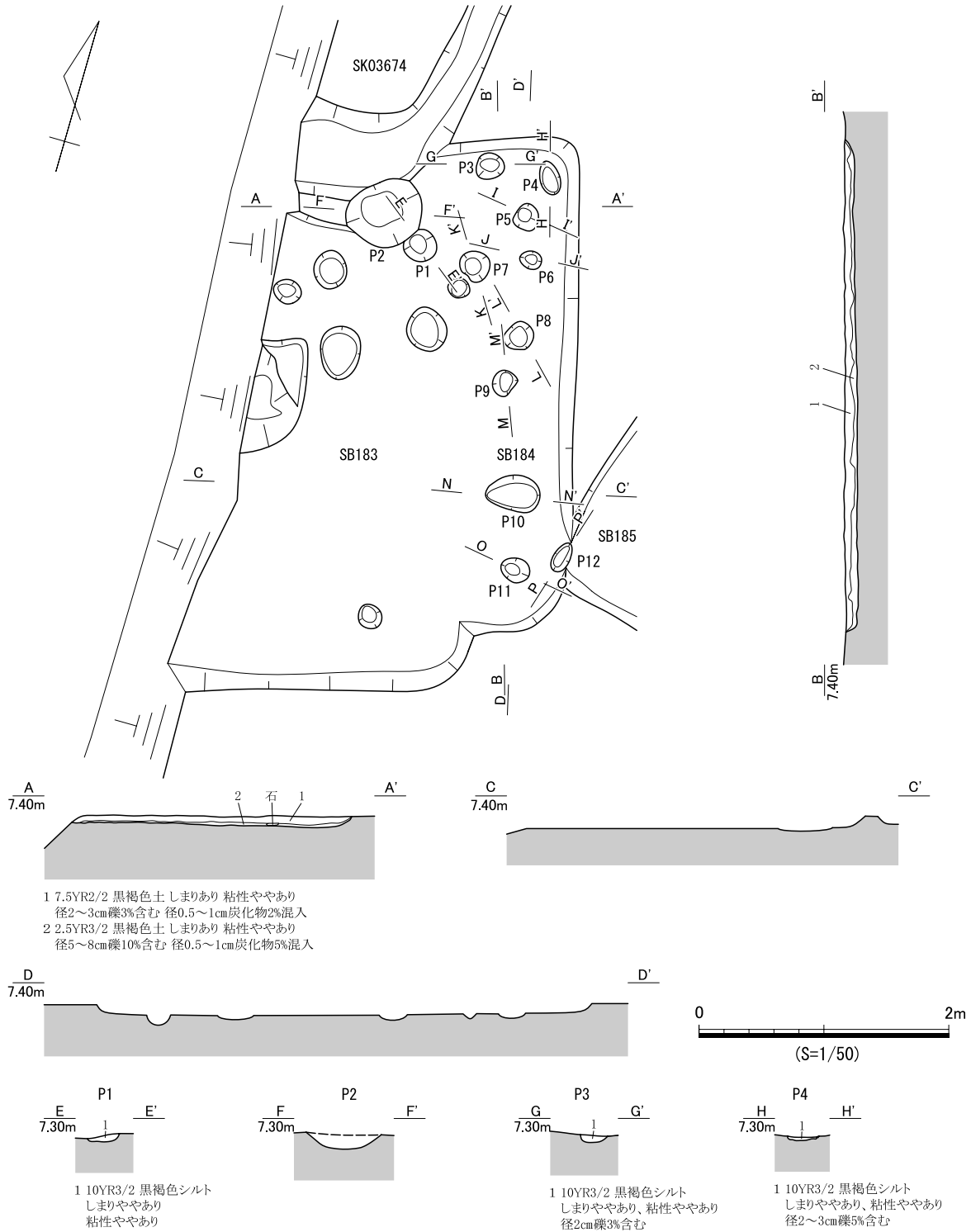


図 219 SB184 遺構図 (1)

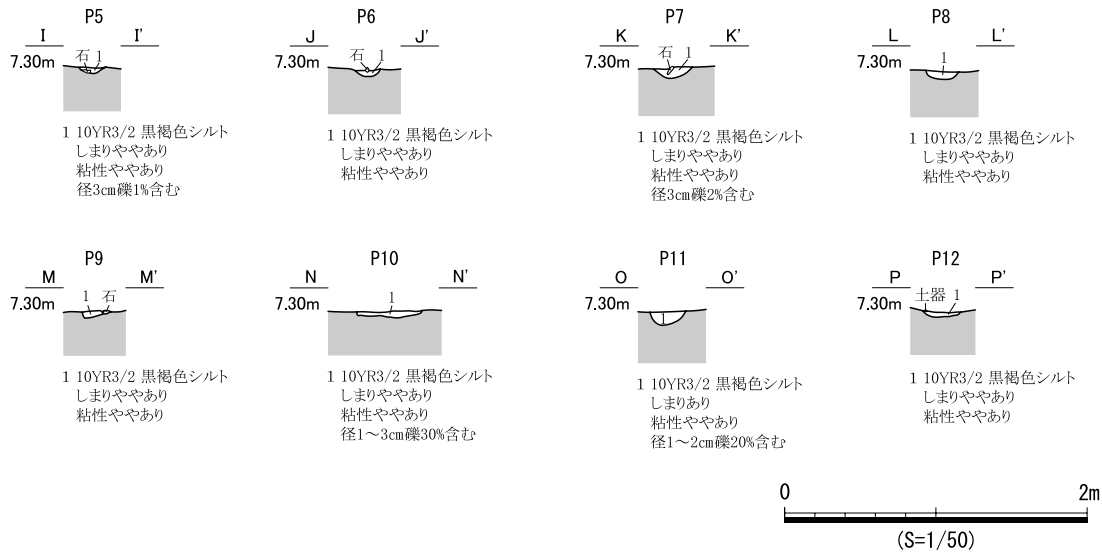


図 220 SB184 遺構図 (2)

SB185 (遺構：図 221、遺物：図 222)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB186とSB187を切る。

形状 南北長約3.5m、東西長約3.9mのやや小型の竪穴住居跡である。住居の各辺は直線的で、隅部は鋭く曲がる。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1mにも満たず浅い。

埋土 礫混じりの黒色土が単層で堆積する。

床面 床面は平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面上で小穴5基を検出した。P2とP5は柱穴に適切な位置にあるが、対応する小穴が西側では確認できなかった。いずれの小穴も深さ0.1m程度と浅く、底面は丸い。柱痕跡が認められる小穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器3,263点、石器類1点、小穴から土器10点が出土した。その一部にVI期の土器が認められるが、大半はVII-2・3期の土器である。

出土遺物 735はVI~VII期の壺A2類。口縁部がわずかに直立して、多条沈線が認められる。736はVII期の壺A3類。口縁端部を上下に拡張し、棒状浮文と擬凹線を施文する。内面は屈折する部位があり、端部までを羽状文で施文する。737、738はVII期後半壺H2b類。737は内湾する口頸部の3分の2程度に精緻な文様を施文する。上半は刺突文と多条沈線を施文し、その下には少条の多条沈線を9帯配し、その間を山形文、単斜状の刺突文、複合刺突文を施文する。山形文は二重の施文でいずれも貝による精緻な文様である。738は多条沈線間を連弧文で充填する。上2帯は二重でやや間隔を空けた連弧文、もっとも下にある連弧文はそれぞれが密に施文され、山形文的である。739はVI期後半~VII期の甕A3類。口縁部をわずかに直立させる。740はVII期甕D2a類。刺突文が認められないが、口縁部の屈曲が著しい。741は付根径が比較的小さく、裾部が内湾するVII期の甕脚部。742~746はVII期後半高坏D類。少条の多条沈線間に742は4帯、743は6帯の連弧文を施文する。744は多条沈線のみが施文される。おそらく口縁部3分の2付近まで施文されると考えられる。745は多条沈線間に山形文と羽状文が施文される。746は脚部。精緻なミガキが残り、坏部が付根から大きく開く。

時期 出土遺物の大半がVII-2・3期であることから、VII-2・3期と考えられる。

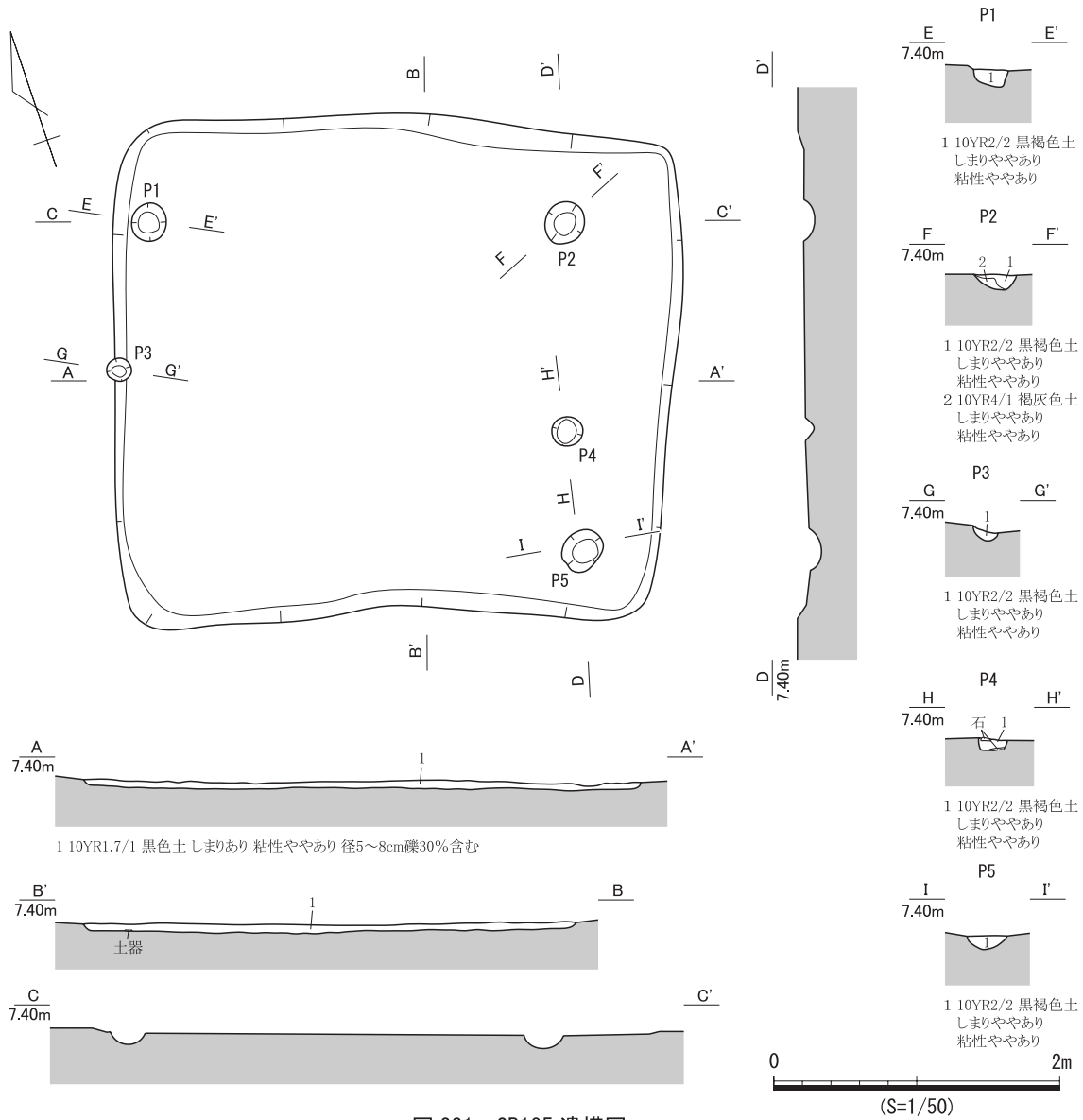


図 221 SB185 遺構図

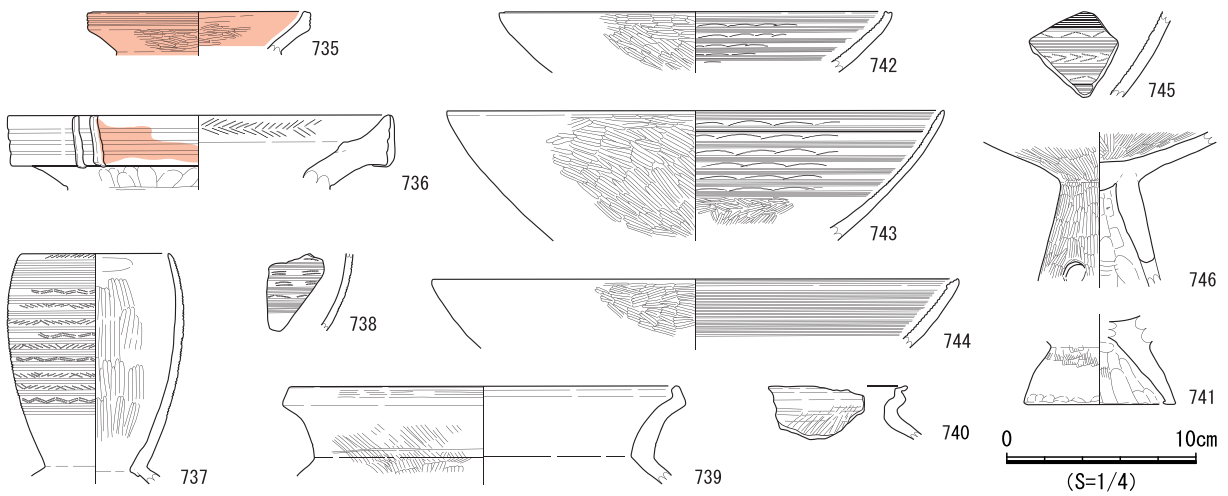


図 222 SB185 遺物実測図

SB186 (遺構：図224～226、遺物：図223)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB185に切られる。VI層上面での検出であり、平面形は不明瞭であった。

形状 南壁の一部を滅失するが、南北長約3.3m、東西長約3.1mのほぼ方形である。北壁が長さ約2.7m、南壁が長さ約3.3mと南壁が長く、南側へ向かってやや広がる形状を示す。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1mにも満たず浅い。

埋土 単層であり、礫とブロック土を含む。埋土の状況と、遺構の重複関係から、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面 床面上で25基の小穴を確認した。その規模は直径0.2～0.6mと様々で、その位置も不規則である。深さは0.1m程度の浅いものが大半を占めるが、P10はやや深い。小穴の埋土は掘形埋土と類似する土層が単層で堆積し、柱痕跡も確認できなかったことから、柱穴の想定は困難である。床面は平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器458点、小穴から土器43点が出土した。個々の小穴出土遺物点数は大半が3点以下であるものの、P10のみ26点とやや多い。これらの土器片の大半はVI期～VII期に属する。また、壺(747)は西壁際のP10検出面で内面を上にしてまとまって出土し、壺(748)はP8底面付近で出土した。

出土遺物 747はVII期前半の壺B2b類。文様は認められず、口縁部が直立する頸部から屈折して外方へ開く。胴部は比較的球形で外面には煤痕が認められる。748はVII期前半の壺A3類。口縁部が強く外反して開き、内面に屈折する部位が認められる。

時期 出土土器747、748は出土位置やその状況から時期決定資料といえる。それぞれVII期前半にあたり、同時期の資料で、後出するSB185がVII-2・3期であるので、VII-1期と考えられる。

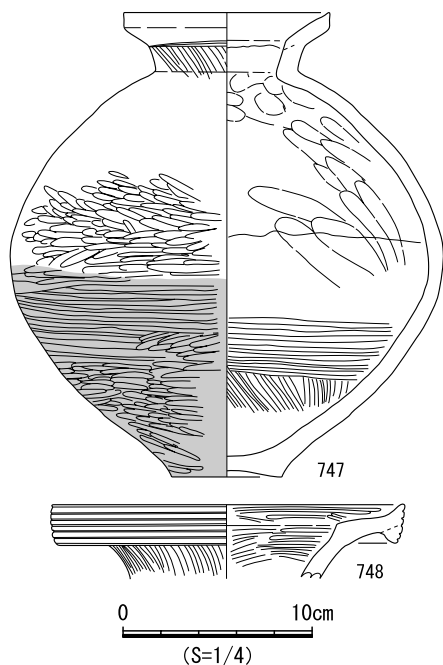


図223 SB186 遺物実測図

遺物(747)出土位置及び出土状況

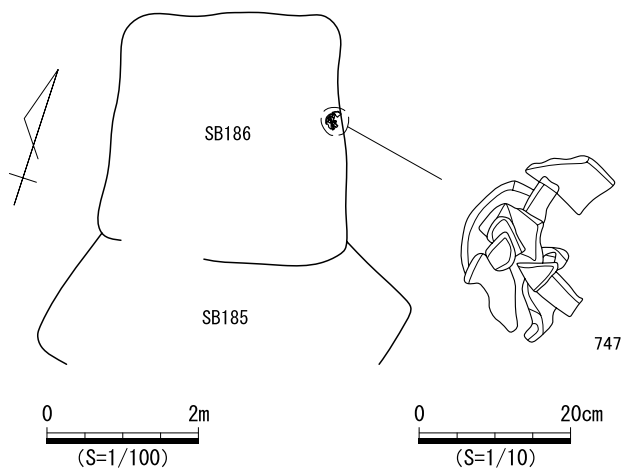


図224 SB186 遺構図(1)

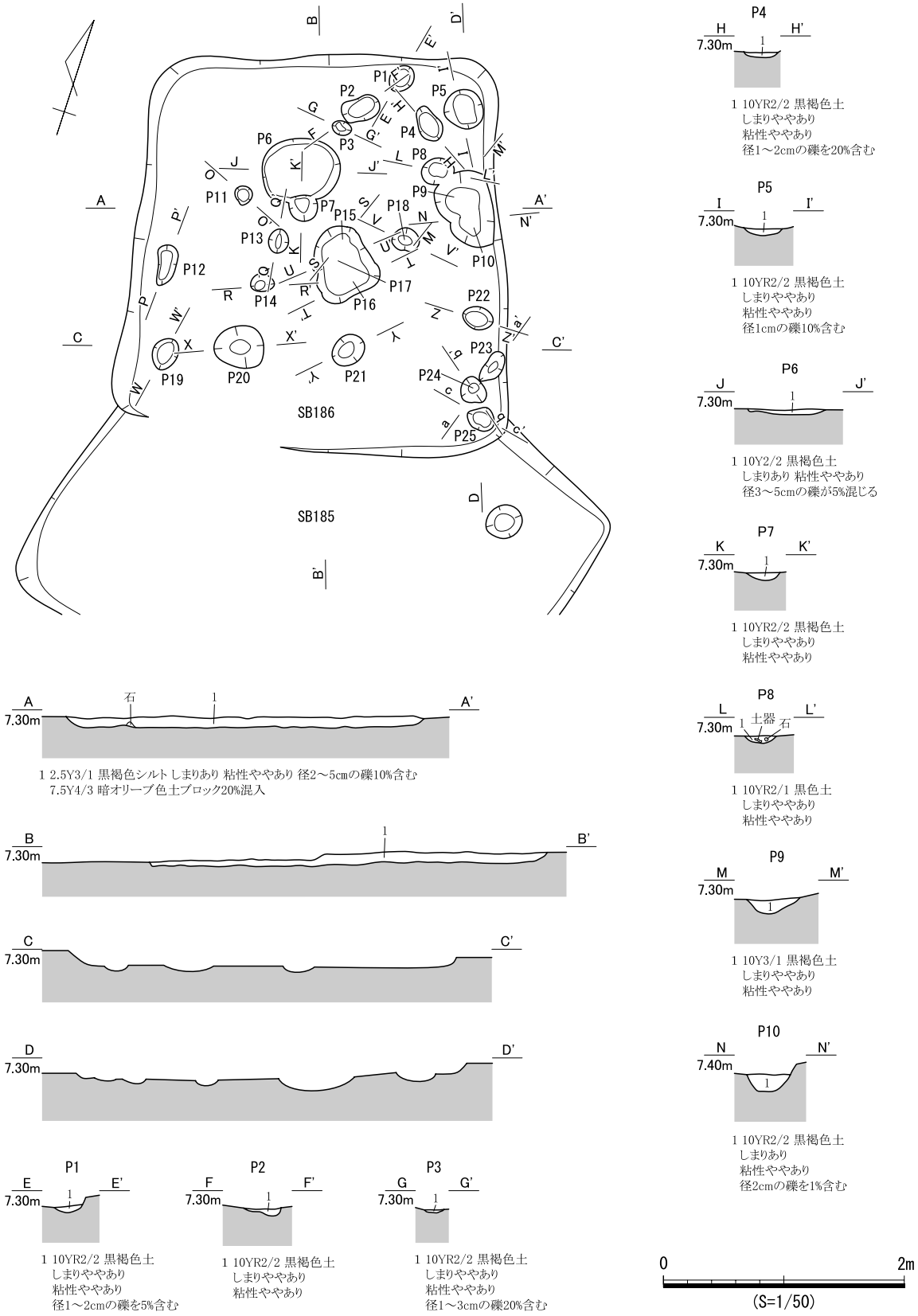


図 225 SB186 遺構図 (2)

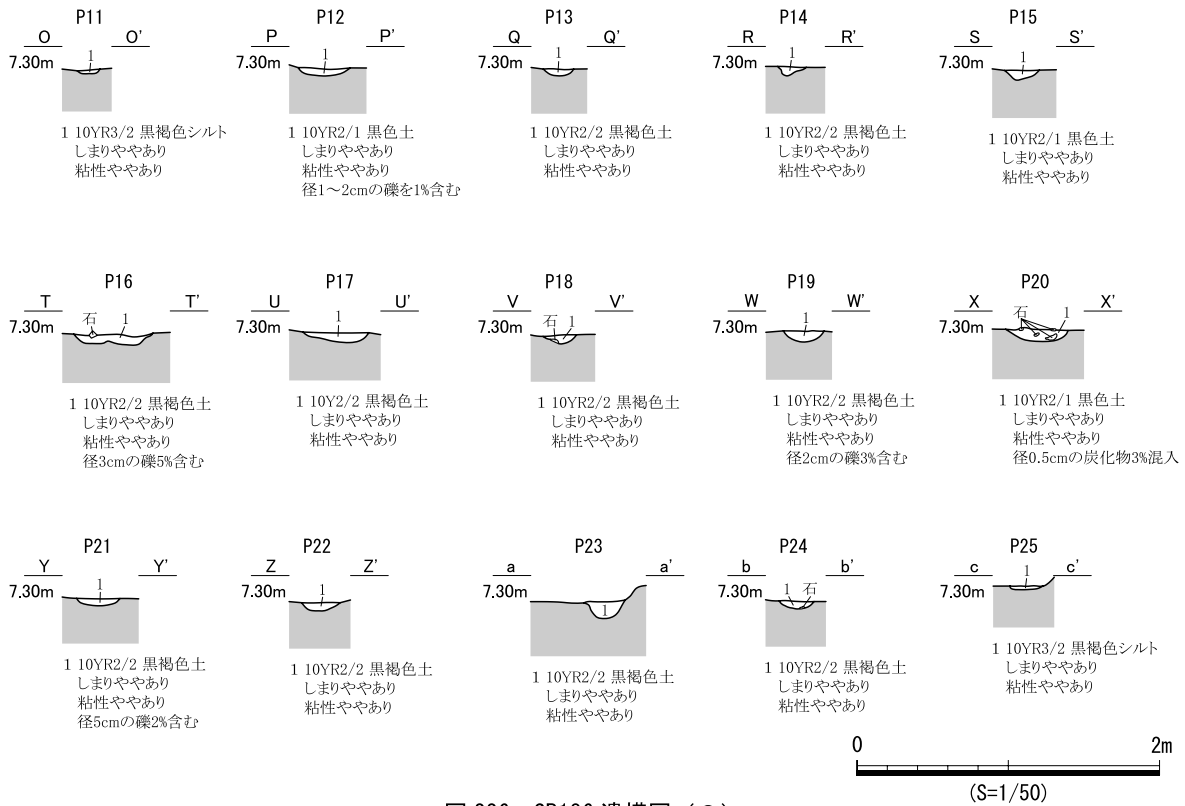


図 226 SB186 遺構図 (3)

SB187 (遺構：図 227・228、遺物：図 229)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、北西部の多くをSB185に切られる。本遺構付近の検出面はVI層が部分的に表出しており、遺構の重複も著しいことから、その平面形は不明瞭であった。

形状 南北、東西ともに残存長約4.5mであり、方形を呈する。床面までが浅く、壁面傾斜は不明である。

埋土 単層であり、礫や炭化物を含む。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上からは深さ0.1m程度の浅い小穴を36基検出した。直径0.2m以下の小規模なものが大半を占め、壁面際に多く分布する。P12は長軸0.75mと規模が大きく、上面で粘土塊を検出したが、焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器284点、小穴から土器24点が出土し、埋土中からは、ほぼ全域にわたって散在して出土した。いずれもVI期～VII期の土器片であるが、特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 749、750はVI期の鉢A類。749は口縁端部をわずかにつまみ上げる。頸部直下には直線文が認められる。750は口縁部が痕跡的に屈曲し、内湾しているように見える。751は小片だがV～VII期の土製品。口縁部に穿孔が2つ認められるので、蓋が組み合わせる可能性があり、合子かもしれない。

時期 出土遺物の時期と、VII-2・3期であるSB185に切られることから、VI期～VII期前半と考えられる。

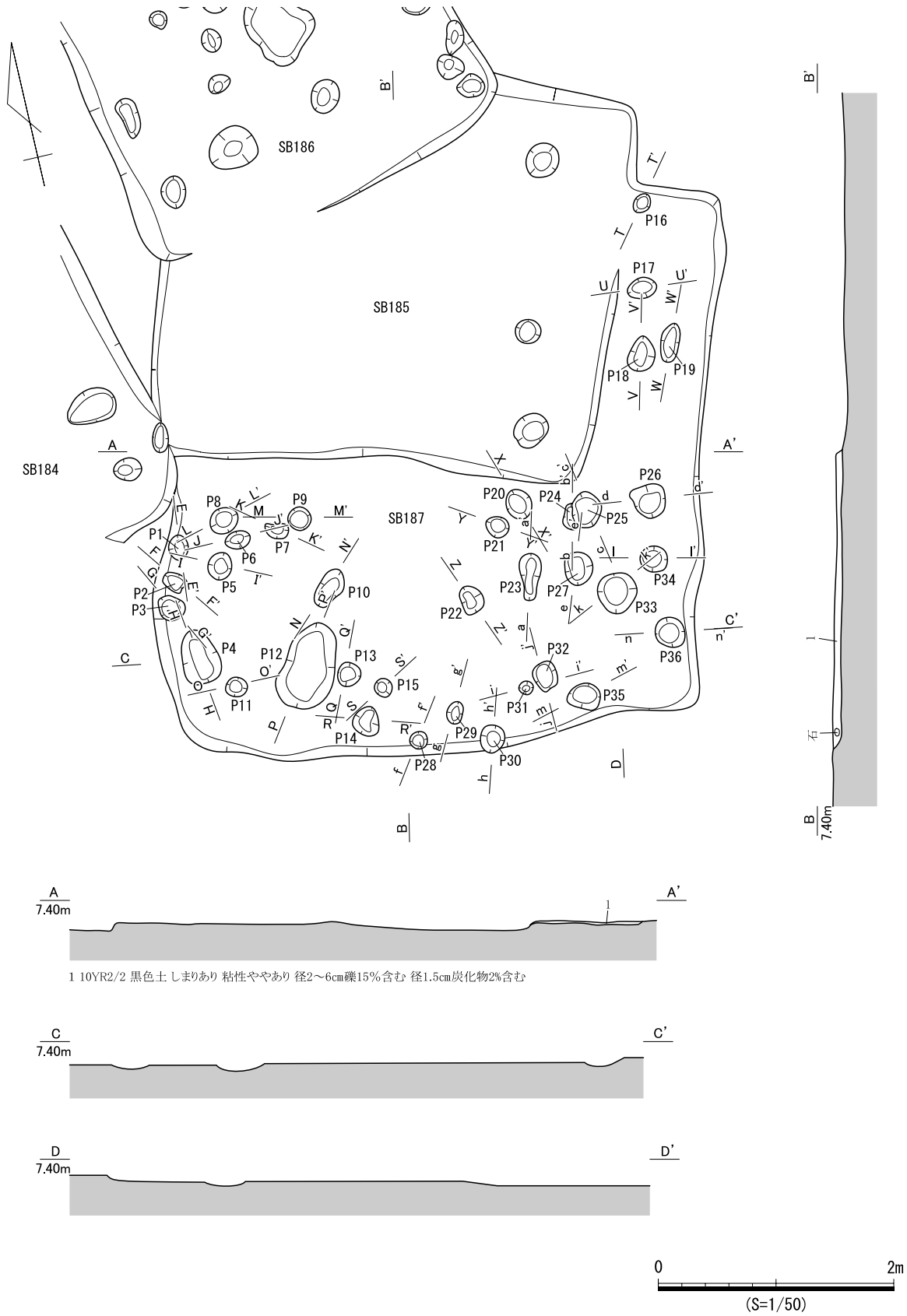


図 227 SB187 遺構図 (1)

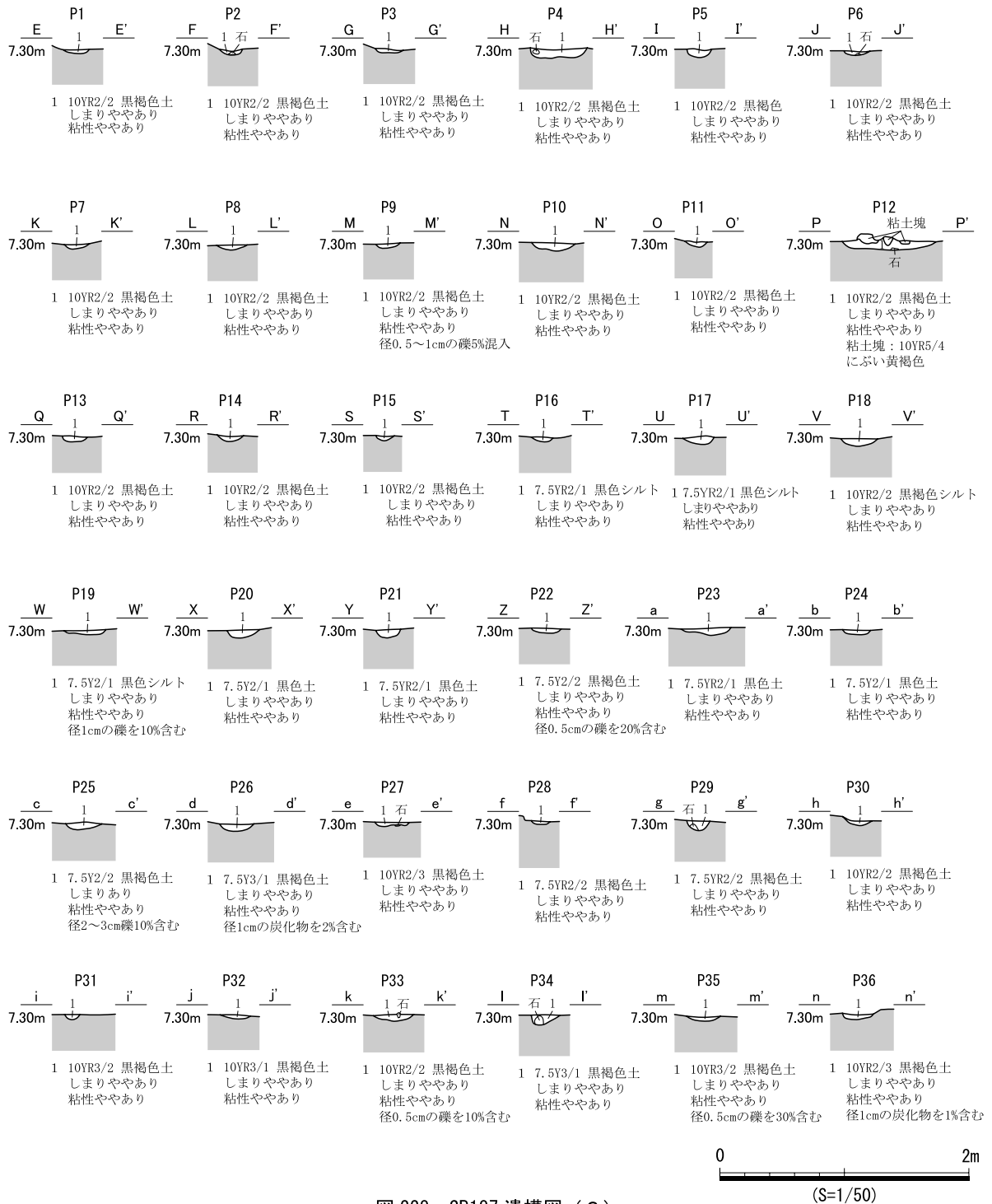


図 228 SB187 遺構図 (2)

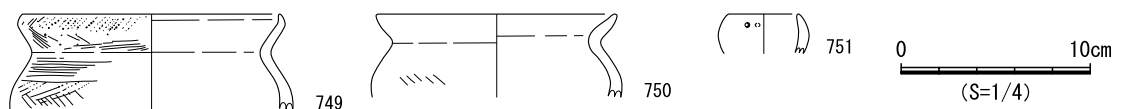


図 229 SB187 遺物実測図

SB188 (遺構：図 230、遺物：図 231)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SK03677に切られる。平面形のうち北半が調査区域外にある。

形状 東西長約4.6mの方形を呈する。竪穴住居跡の各辺は比較的直線的だが、隅部はやや丸みをもつ。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m程度である。

埋土 3層に分層し、床面直上に炭化物が混じる。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。南西隅部では壁溝の一部を確認した。直径0.2m～0.3m、深さ0.1mに満たない小規模な小穴を13基検出した。P3～P7、P9は東西に直線的に並び規則的な配置が認められる。壁面沿いに小穴を配置する例はSB190でも確認できるが、明確な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,088点、小穴から土器35点、壁溝から土器28点が出土した。出土土器の大半はVI期～VII期である。

出土遺物 752はVI期後半～VII期の甕A3類。口縁部が頸部から長く立ち上がり、端部にわずかな平坦面が認められる。753はVII期高坏D5類。多条沈線間に連弧文を施文する。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

SB189 (遺構：図 232、遺物：図 233)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB190・192を切る。

形状 南北長約4.5m、東西長約4.0mで、南北に長い長方形を呈す。竪穴住居跡の各辺は比較的直線的だが、東西壁はやや不整形である。隅部はやや丸みをもつ。壁面の傾斜は緩やかである。深さは約0.2mであり、周辺の竪穴住居跡のなかでは残りがよい。

埋土 単層で、ブロック土をわずかに含むが、人為的堆積の有無は判断できなかった。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面や貼床は認められなかった。床面上で3基の小穴を確認したが、柱痕跡や規則的な配置は認められなかった。また、重複する竪穴住居跡で検出した小穴にも、本遺構の柱穴に該当する穴は確認できなかった。P2の周囲では焼土の広がりを確認したが、その付近に掘り込みや何らかの施設の痕跡は確認できなかった。また、P2内に焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,992点、小穴から土器6点が出土した。わずかにIV期の甕(754)が認められたが、多くはVI期～VII期の土器で占められる。多くの土器が出土したが、特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 754はIV期甕B2類。口縁部が強く屈曲して立ち上がり、刺突文が認められる。755は外面に施文のあるVII期高坏G3c類。多条沈線と山形文が認められる。756はV期後半～VI期前半の高坏B2b類。口縁部が強く外反し、端部がやや平坦である。757はVI期～VII期高坏CD類の脚部。裾部に多条沈線のある少数例である。壺の脚部の可能性もある。

時期 出土遺物の時期はVI期～VII期であるが、VII期のSB190、VI期のSB192より後出することから、VII期と考えられる。

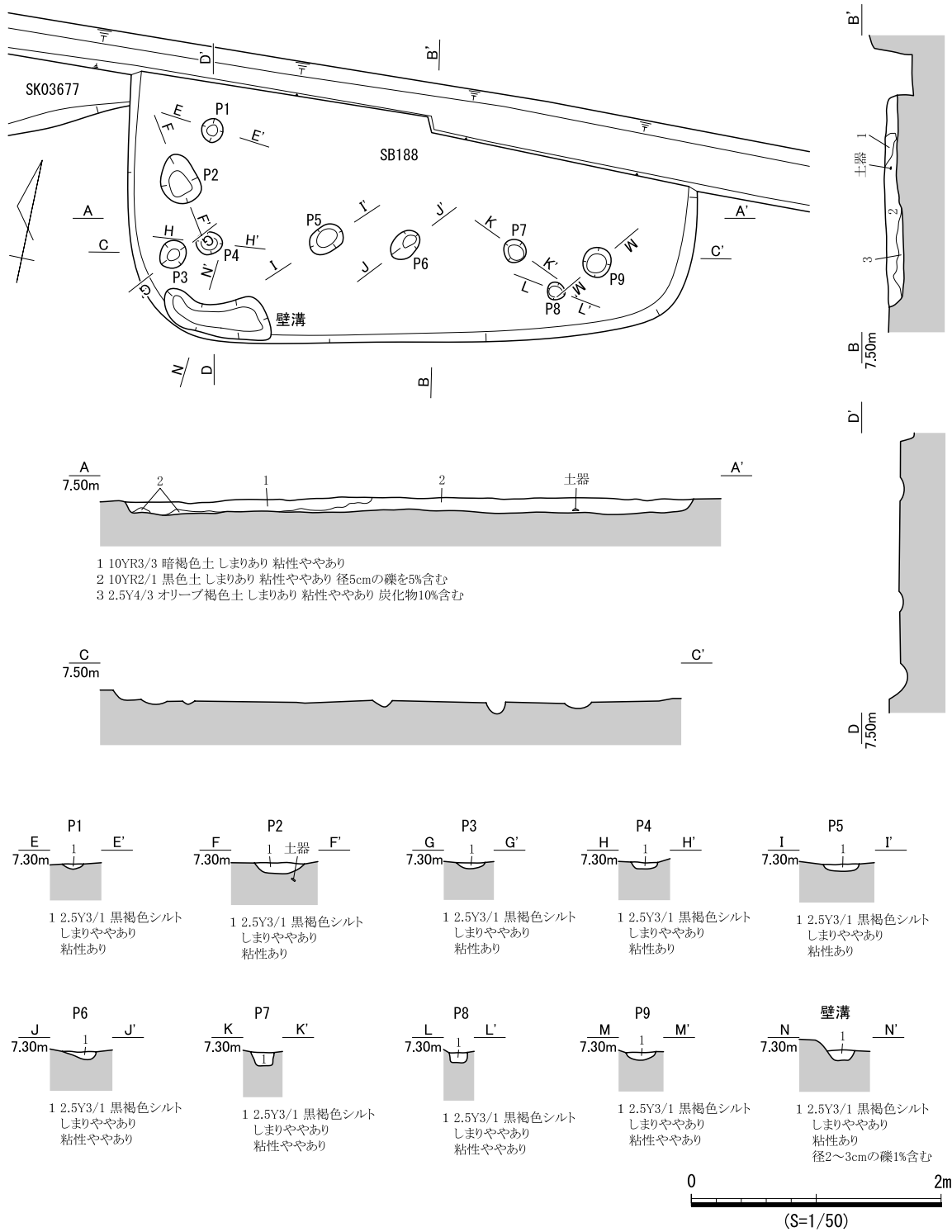


図 230 SB188 遺構図

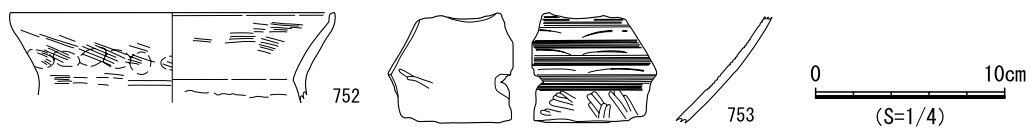


図 231 SB188 遺物実測図

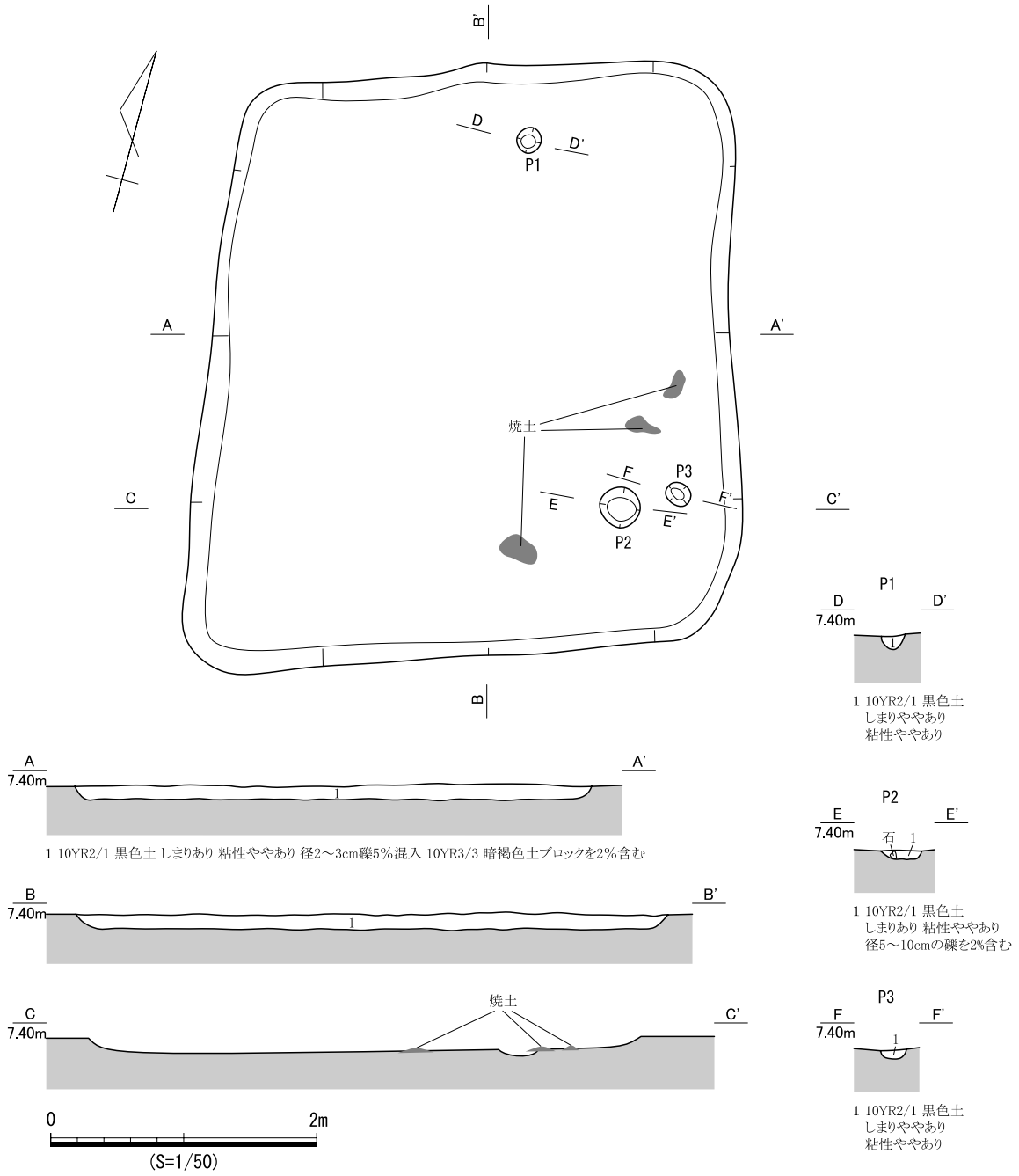


図 232 SB189 遺構図

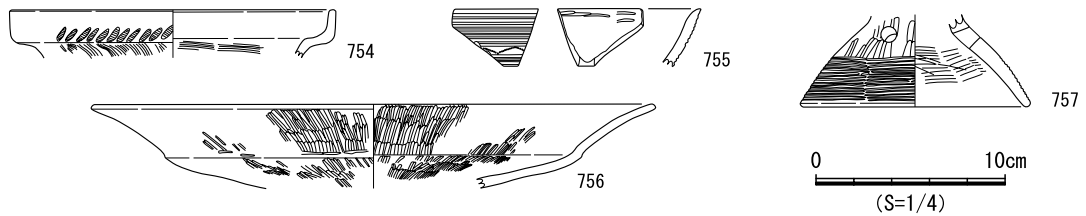


図 233 SB189 遺物実測図

SB190 (遺構：図 235、遺物：図 234)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。隣接する竪穴住居跡と複雑な重複関係があり、新旧関係はSB189とSB194に切られ、SB191とSB192を切る。VI層上面での検出であり、平面形は不明瞭であった。

形状 南北長約3.7m、東西長約4.3mで東西に長い長方形を呈する。北壁・西壁は直線的にのびる。南壁はやや内側に向かって弧状となり、東壁南側は東側に向かって大きく開き、不整形であるが、全体的には隅丸長方形といえる。深さは0.2m程度で、周辺の竪穴住居跡のなかでは残りがよく、壁面は急傾斜である。

埋土 単層で、炭化物、礫を比較的多く含む。遺構の重複が著しいことや、混入物の多さから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を12基確認した。いずれも深さ約0.1mと浅く、柱痕跡は認められなかった。そのうち、P1～P3が北壁に沿って、P9、P11、P12も南壁に沿って直線的に並び、互いに南北方向に対応する位置関係にある可能性がある。また、P5、P6はP1～P3とP9、P11、P12の南北間のほぼ中央に位置し、その軸線を揃えているようにもみえる。これらの小穴は柱痕跡が認められなかったが、配置に規則性のある可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,372点、小穴から土器16点が出土したが、いずれも摩耗の進んだ小片で、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。なお、出土土器の大半はVI期～VII期のものであり、VII期が多い。

出土遺物 758はVI期甕D1b類で、外面に押し刺突が痕跡的に残る。759はVI期～VII期甕A4類。口縁端部がわずかに屈曲する。頸部直下に直線文と刺突文を施文する。760、761は施文のあるVII期高坏G類。760は口縁部上半のみに多条沈線を施文する。761は強く外反する脚部で多条沈線3帯の間に山形文を施文する。762はVII期の壺C類。口縁部が直立する。ミガキが認められず、ハケ目調整がそのまま残る。

時期 出土遺物の時期はVI期～VII期であるが、VII期のSB189に切られVI期後半を切ることから、VII期と考えられる。

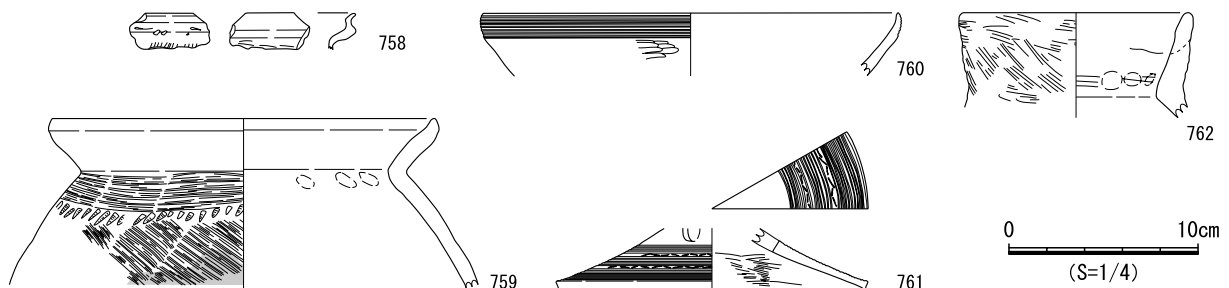


図 234 SB190 遺物実測図

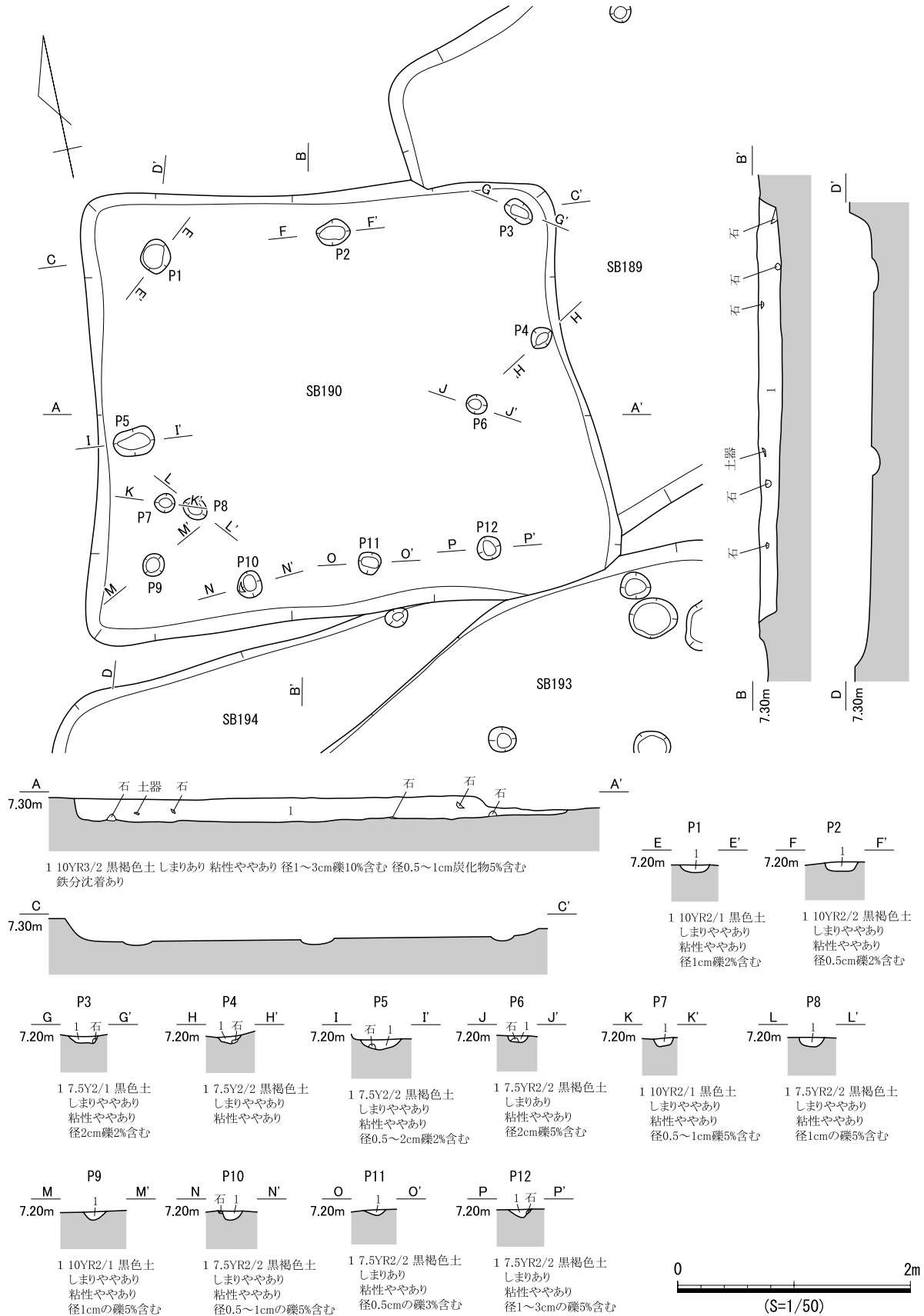


図 235 SB190 遺構図

SB191 (遺構：図 237、遺物：図 236)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。VI層上面で検出し、周辺の竪穴住居跡との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。新旧関係はSK03677>SB188・SB190>SB192>SB191で、周辺の竪穴住居跡のなかでは最も先行する。

形状 北壁及び南壁はSK03677、SB190にそれぞれ削平されるが、北西隅部、南東隅部が残存するので、南北長約4.0m、東西長約3.6mの南北にやや長い長方形を呈すると考えられる。壁面は緩やかに傾斜し、深さは約0.1mである。

埋土 3層に分層した。いずれもわずかに礫が混じり、1層と3層には炭化物が混じる。層界の凹凸が顕著であり、混入物も多いことから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.1m～0.2mの小穴を9基を確認した。明確な柱痕跡、規則的な配置は認められなかった。P9は長軸0.95m、深さ0.19mと他の小穴に比べて規模が大きい。底面は平坦だが、南東隅が楕円形状に一段低くなる。その位置は、中央付近にあることから炉跡の可能性はあるものの、焼土の堆積や壁面・底面の被熱は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,554点、小穴から土器69点が出土したが、いずれも摩耗の著しい小片が大半を占める。その多くはVI期～VII期にあたるが、わずかにIV期の土器片も出土した(763)。また、床面よりやや浮いた位置で他の小片に比べて大きな破片がまとまって出土した(765、766)。VI期後半の高坏で同一時期であることから、埋没時期を示す土器と考えられる。なお、南東隅部付近の埋土中から粘土塊が出土した。

出土遺物 763はIV期甕B2類の口縁部。口縁部が強く屈曲する。764はVII期の甕D類脚部。付根径がやや小さく、端部に折り返しが認められる。765、766はVI期後半期高坏C3b類。765は内傾面のみが多条沈線を施文し、766は口縁部内面を肥厚させて、その部位に多条沈線を施文する。767はV期～VI期の高坏I類の脚部であろう。やや細身で中実である。768はV～VII期の鉢D類脚部。低脚で甕の脚部ではなく、鉢の脚部の可能性がある。769はVII期高坏H類の脚部であろう。裾部へ向かって強く外反する。

時期 埋没時期を示す土器(765、766)がVI期後半で、VI期～VII期のSB188とVII期のSB190より先行することから、埋没時期を示す土器(765、766)とも矛盾しないので、VI期後半と考えられる。

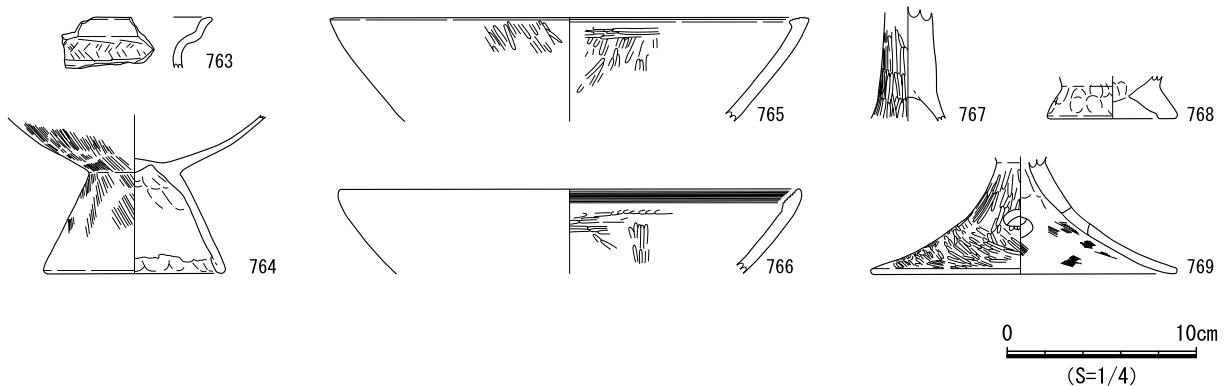


図 236 SB191 遺物実測図

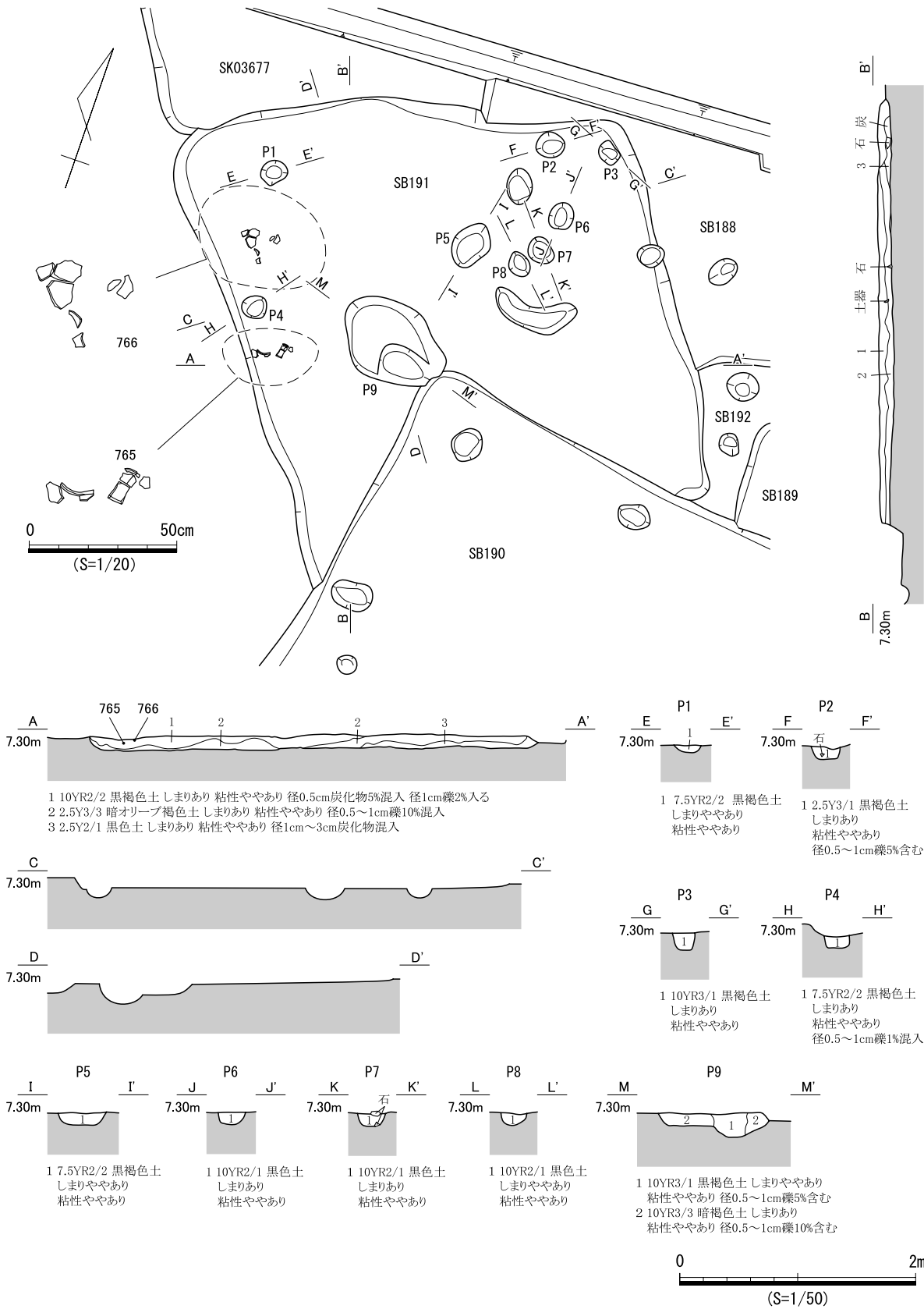


図 237 SB191 遺構図

SB192 (遺構：図 238・239、遺物：図 240)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB188とSB189に切られる。これらの重複により、北壁及び南壁付近の大半を削平され、全形は不明である。

形状 残存する東西長は約3.9mである。深さは0.1m程度が認められ、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 礫や炭化物が混じる黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2m～0.3mの小穴8基を確認した。P1は北壁が調査区域外にあるが、残存長で長軸約0.5mの大きな土坑である。

遺物出土状況 埋土中から土器336点、小穴から土器25点が出土した。VI期～VII期の壺(773)がP2から出土した。遺構の時期を示すような特徴的な遺物出土状況は認められなかった。出土土器の多くはV期～VII期の土器であり、一部にIV期の土器が認められた(770)。

出土遺物 770はIV期甕A2類。口縁部が強く屈曲して内外面にハケ目が認められる。771はV期の甕B1b類。口縁部がくの字状となり、端部は平坦である。772はV期～VI期の鉢B類。773はVI期～VII期の壺B類底部。煤が顕著に付着する。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB188とVII期のSB189に切られることから、V期～VII期と考えられる。

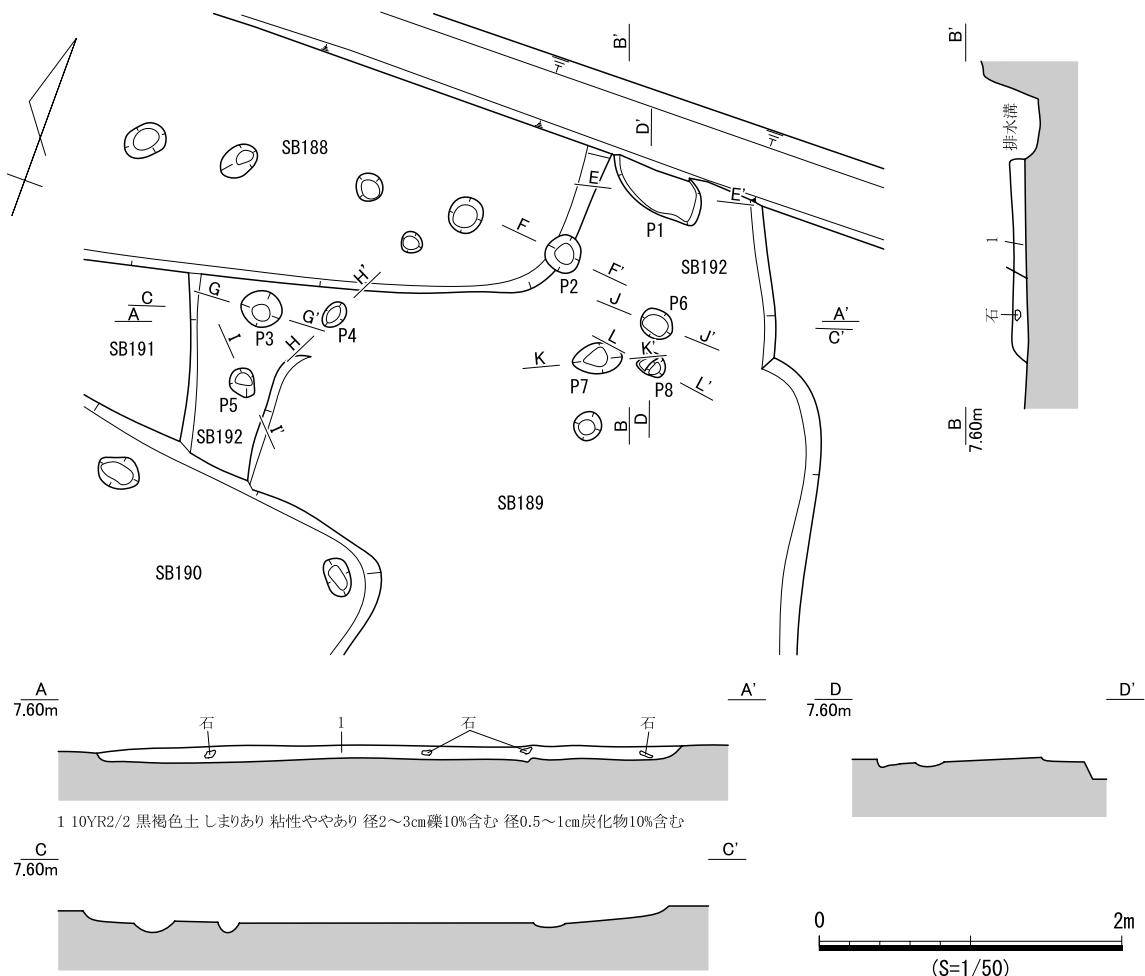


図 238 SB192 遺構図 (1)

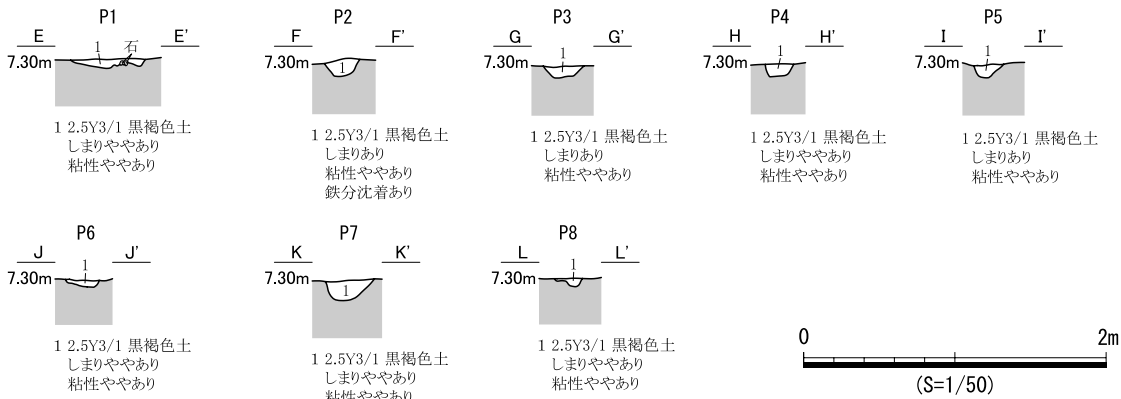


図 239 SB192 遺構図 (2)

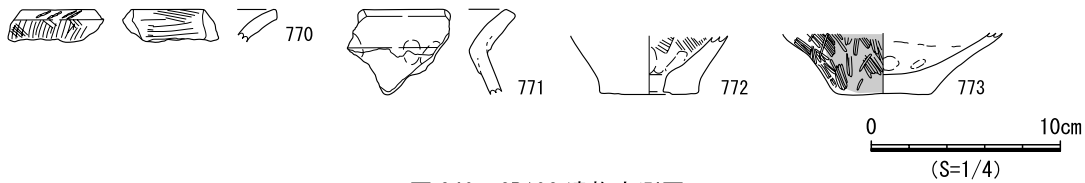


図 240 SB192 遺物実測図

SB193 (遺構：図 241・242、遺物：図 243)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB194を切る。

形状 南北長約6.1m、東西長約4.9mの南北に長い長方形である。西辺のみが直線的だが、残る各辺はいずれも不整形で、隅部も不整形である。規模は周辺の竪穴住居跡より大きい。深さは約0.2mで周辺の竪穴住居跡のなかでも深く、西壁を除く各壁面の傾斜も急である。

埋土 2層に分層した。礫の混入が多く、遺構の重複が著しいことから、人為堆積の可能性もある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径0.3m前後の小穴22基を確認したが、規則的な配置や明確な柱痕跡は認められなかった。しかし、P11とP12のみ底面が平坦であることから、2本柱の建物の可能性もある。なお、南西隅部に位置するP15は長軸1.00mの楕円形を呈し、他の小穴に比べると規模が大きい。埋土に特徴的な状況は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器3,449点、小穴から土器55点が出土した。その多くは摩耗した小片で、時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。出土土器の多くはVI期～VII期である。

出土遺物 774はVI～VII期の壺A3類。内面に羽状文が認められる。775はVI期～VII期の壺H類の底部。丁寧なミガキが認められる。776はVI期後半からVII期の甕A4類。大型品で口縁端部がわずかに直立する。777はVII期の甕D2b類。口縁端部がやや外側へ拡張される。778はVI期～VII期の甕B3類。口縁部が外反するが頸部は粘土の貼付によって直立気味である。端部は断続的なナデによって凹凸が著しい。胴部はやや下膨れで、最大径付近はヨコハケで調整する。779～781はVI～VII期の甕脚部。779は脚部が短く直線的に伸びる。780は裾部がわずかに内湾し、打ち欠きが認められる。781は甕D類。782は多条沈線のみを施文するVII期高坏C4c類で、文様帯下端の段差が顕著である。783～786はVII期高坏D類。783は内傾した口縁端部のみに多条沈線を施文する。784は多条沈線の中に2帯の連弧文を施文する。785は少条の多条沈線を6帯施文し、その間に連弧文を5帯施文する。786も類似する資料である。787は打製石鏃で、凹基で先端部が欠損し、側縁部がわずかに内湾する。788は砥石で、

砥面にやや凹凸があり、縦から斜め方向の線状痕が認められる。

時期 出土遺物はVI期～VII期のものであるが、そのうちVII期後半のものにまとまりがあり、VI期～VII期のSB194を切ることから、VII期後半の可能性が高い。

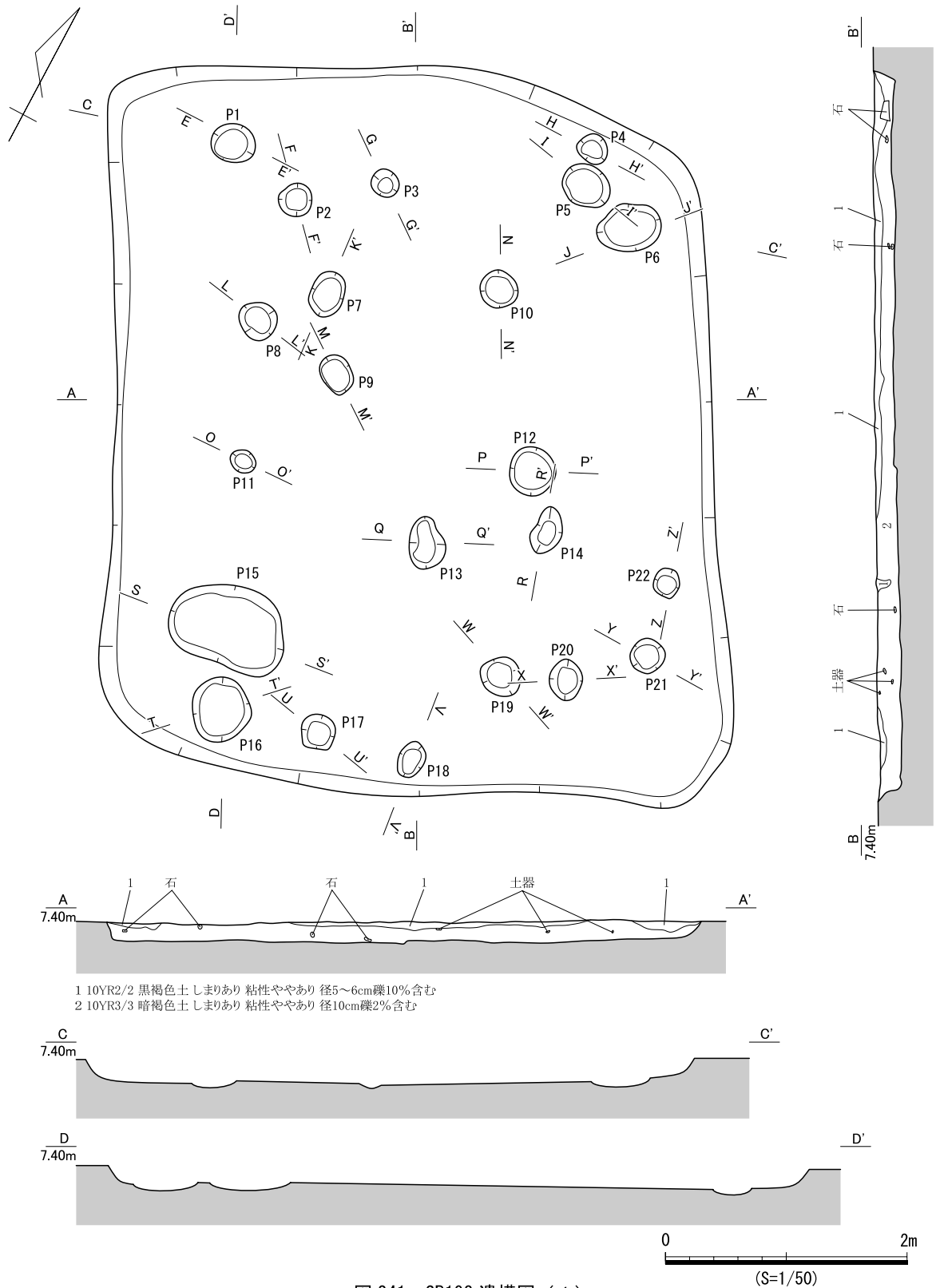


図 241 SB193 遺構図 (1)

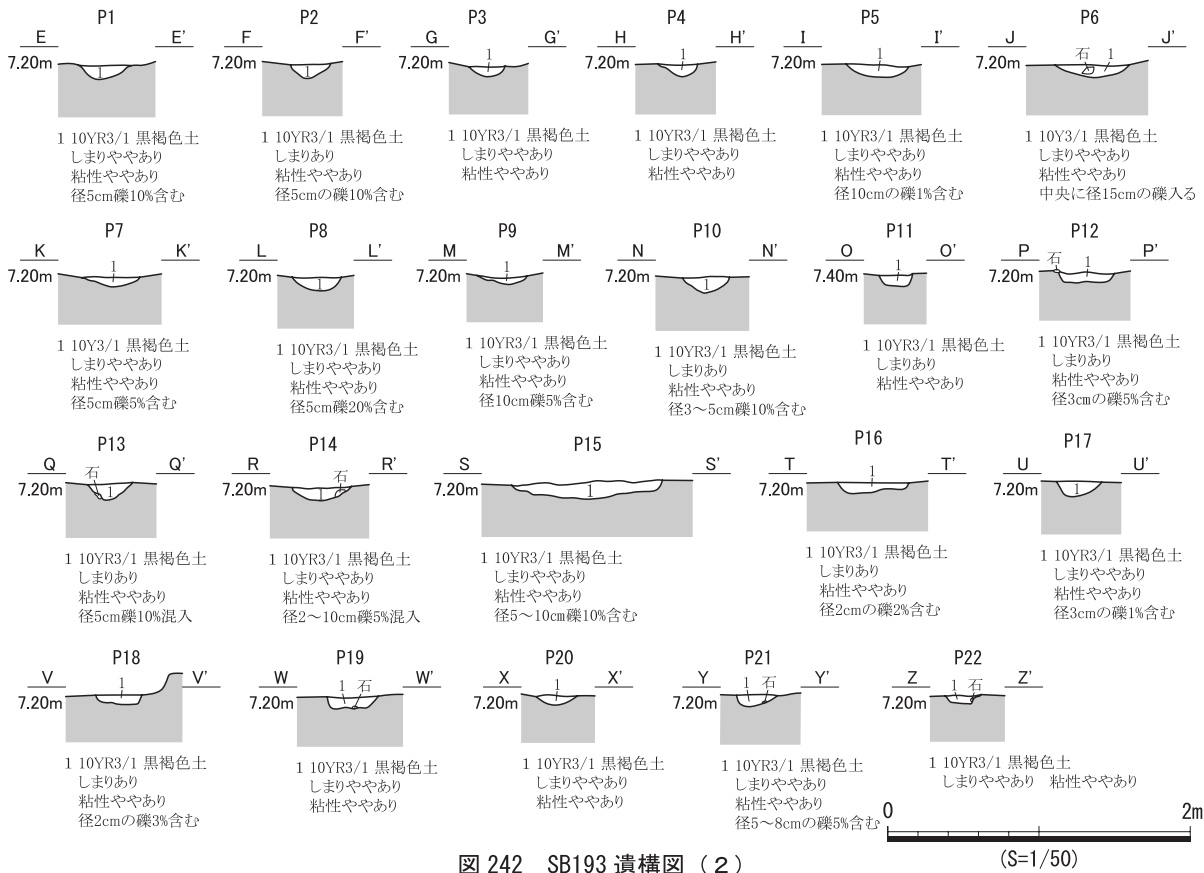


図 242 SB193 遺構図 (2)

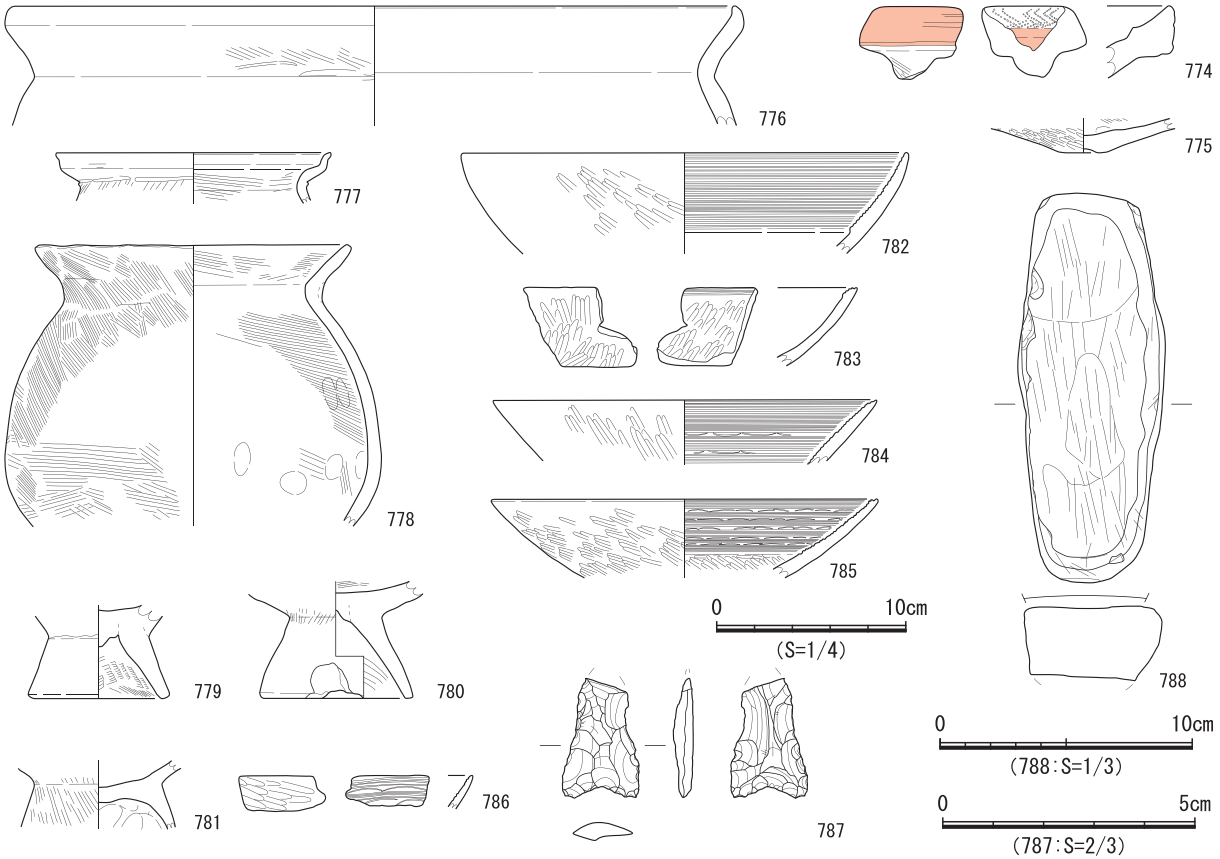


図 243 SB193 遺物実測図

SB194 (遺構：図244・245、遺物：図246)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB193に切られる。

形状 東壁はSB193による削平のため、東西長は不明で、南北長は約5.4mである。残存する各辺はいずれも直線的でなく、壁面傾斜は緩やかである。深さは約0.1mである。

埋土 礫、炭化物混じりの黒色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を12基確



図244 SB194 遺構図(1)

認した。いずれも明瞭な柱痕跡は認められなかったが、そのうちP4とP9は直径約0.3mと周辺の小穴より規模が大きく、位置も柱穴に適当な位置にあることから、柱穴の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,114点、小穴から土器15点が出土し、大半はVI期～VII期の土器片であるが、1点のみIII期の土器片が認められた(789)。なお、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 789はIII期の甕。弱く外反する口縁部をもち、外面には縦方向のクシ条痕、内面には刺突文が認められる。外面の条痕が縦方向のため、IV期の可能性もある。790はV期の甕脚部。円盤充填によって胴部と脚部を接合している。791はVII期高坏D2類。口縁部が大きく開き、端部は内傾する。792はVII期高坏G3類脚部。多条沈線を3帯施文し、その間を山形文で充填する。

時期 出土遺物にはV期以前の遺物が混入するが、多くの遺物はVI期～VII期であり、VII期後半のSB193に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

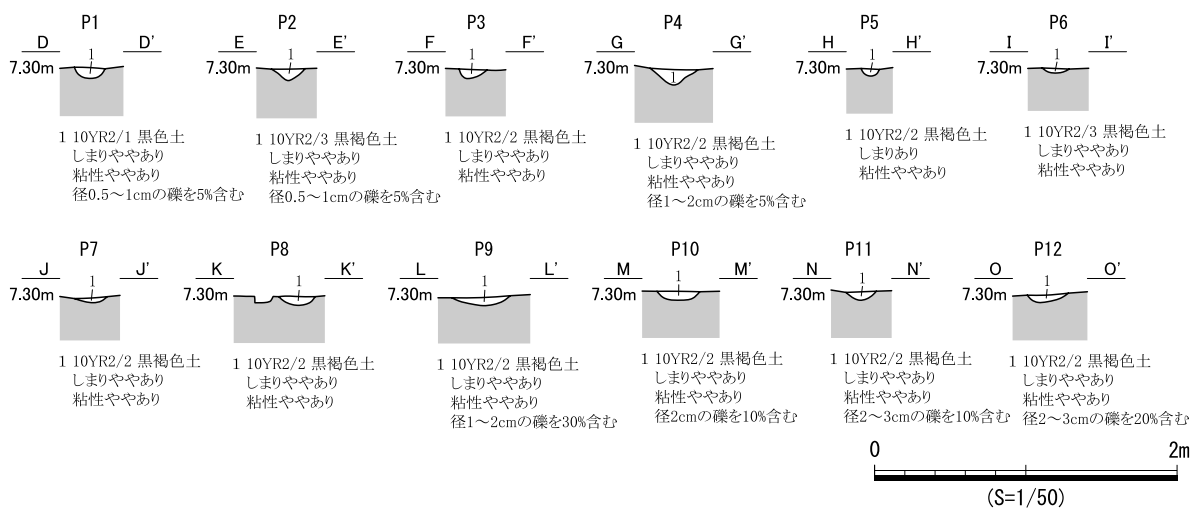


図 245 SB194 遺構図 (2)

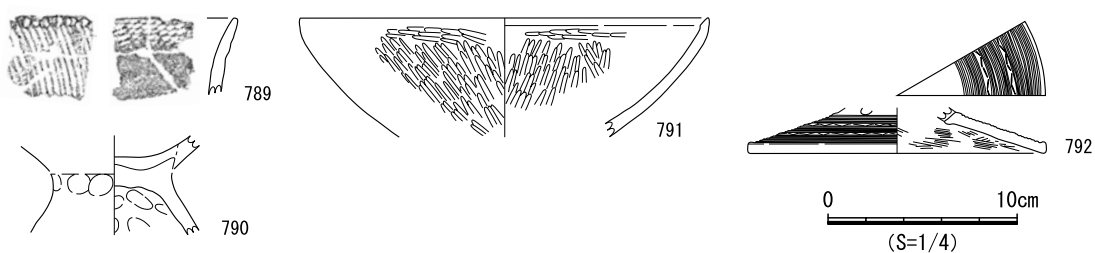


図 246 SB194 遺物実測図

SB195 (遺構：図 247・248、遺物：図 249)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。VI層上面にて検出し、北東隅においてSB193とSB196に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 南北長約4.5m、東西長約5.8mと東西に長い長方形を呈す。南辺は直線的だが、残る三辺はやや弧状となり、隅部が丸みをもつ。深さは北壁側から西壁側で約0.2m、南壁側で約0.1mである。北壁付近が深く、壁面傾斜も急で、周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しいわりには、残りが良い。

埋土 2層に分層した。下層は炭化物が比較的多く混じる。

床面 床面において硬化面、貼床は認められなかった。赤色顔料が直径約0.5mの規模で、円形から馬蹄形状に散在する範囲を検出した。顔料の厚みは約1cmで、内部に掘形は認められなかった。炉跡は認められなかったが、埋土中には被熱した礫が出土したことや、顔料付近に小穴が検出されていないことは、顔料の性格を検討する材料となるかもしれない。床面はA断面では東側へ向かって、B断面では北側へ向かって下がり、傾斜が認められる。床面上で直径約0.2mの小穴を13基確認したが、北半部に偏り、規則性も認められない。しかし、P12は掘形が深く、壁面もほぼ垂直であり、これを柱穴とみなすことが可能であれば、2本柱の建物を想定できるかもしれない。

遺物出土状況 埋土中から土器4,859点、石器類3点、小穴から土器48点が出土した。大半はⅥ期～Ⅶ期の土器片で、上層からの出土である。そのうち遺存状況がよく、ややまとまって出土したものが4点(804、806、810、812)認められた。いずれもⅦ期前半にあたる。構築時期を示す土器とするのは難しいが、埋没時期を示す土器として判断し、構築時期も周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しいことからみて、埋没時期と大差がないと考える。

出土遺物 793、794ともにⅦ期壺B2a類。口縁部下端をやや拡張して、端部に強いナデを加える。795はⅤ期～Ⅵ期の壺A1a類。内面に羽状文が認められる。796はⅥ期～Ⅶ期の壺A3類。口縁部が頸部から大きく開き、内面では屈折してさらに開く。内面には羽状文が認められる。797はⅤ期～Ⅵ期の壺J1類。丁寧なミガキが認められ、口縁部が頸部から直線的にわずかに外傾しながら立ち上がる。798、799は壺H2b類。798は多条沈線、刺突文、山形文によって施文する。Ⅶ期の資料であろう。799は胴部から底部が遺存する。Ⅵ期～Ⅶ期の資料であろう。800はⅦ期壺A類の胴部。山形文の上に赤彩が認められる。801はⅥ期甕D1b類。刺突文が認められる。802、803はⅥ～Ⅶ期の甕A類。口縁部の屈曲は強いが、端部及び頸部直下の文様は認められない。802は端部に平坦面が認められ、803は端部が内傾して、内面にわずかな凹面を形成する。804はⅦ期甕E5類。口縁部の外反が弱く、端部がやや尖り気味である。胴部はあまり膨らまず、口径を超えない。胴部下半は直線的に脚部付根につながる。脚部は端部に打ち欠きが認められる。805、806は甕の脚部。やや低脚で付根径が小さい。Ⅶ期と考えられる。807～809はⅥ期～Ⅶ期の鉢A類。807は口縁端部外側のみをわずかに屈曲させる。808は口縁部が強く屈曲し、端部に凹面を形成する。809は頸部から直線的に立ち上がり、端部をわずかにつまみ上げる。頸部直下には直線文と刺突文を施文する。810～814はⅦ期高坏D類。810、811はⅦ期高坏D類の脚部。811の内面には羽状ミガキが認められる。812は坏部底径が小さく、口縁部が大きく開く。脚部はやや短く付根から開き、透孔付近からわずかに内湾する。口縁部には打ち欠きが認められる。813は多条沈線2帯の間に山形文を施文する。文様帯最下段の段差は認められない。814は現存で、少条の多条沈線4帯認められる。うち1帯はやや肥厚させた内傾する口縁端部に施文する。その他の多条沈線間には複合山形文を施文する。815はⅦ期後半の高坏G3類脚部。少条の多条沈線と連弧文による4帯の施文が認められる。816はⅥ期～Ⅶ期の手捏ね土器。口縁部を欠損する。817はやや潰れた球形に整形されているため投弾としたが、その他の用途を想定すべきかもしれない。細かい擦痕が全面に認められる。

時期 まとまって出土した土器と、Ⅶ期後半のSB193とSB196に切られることから、Ⅶ期前半と考えられる。

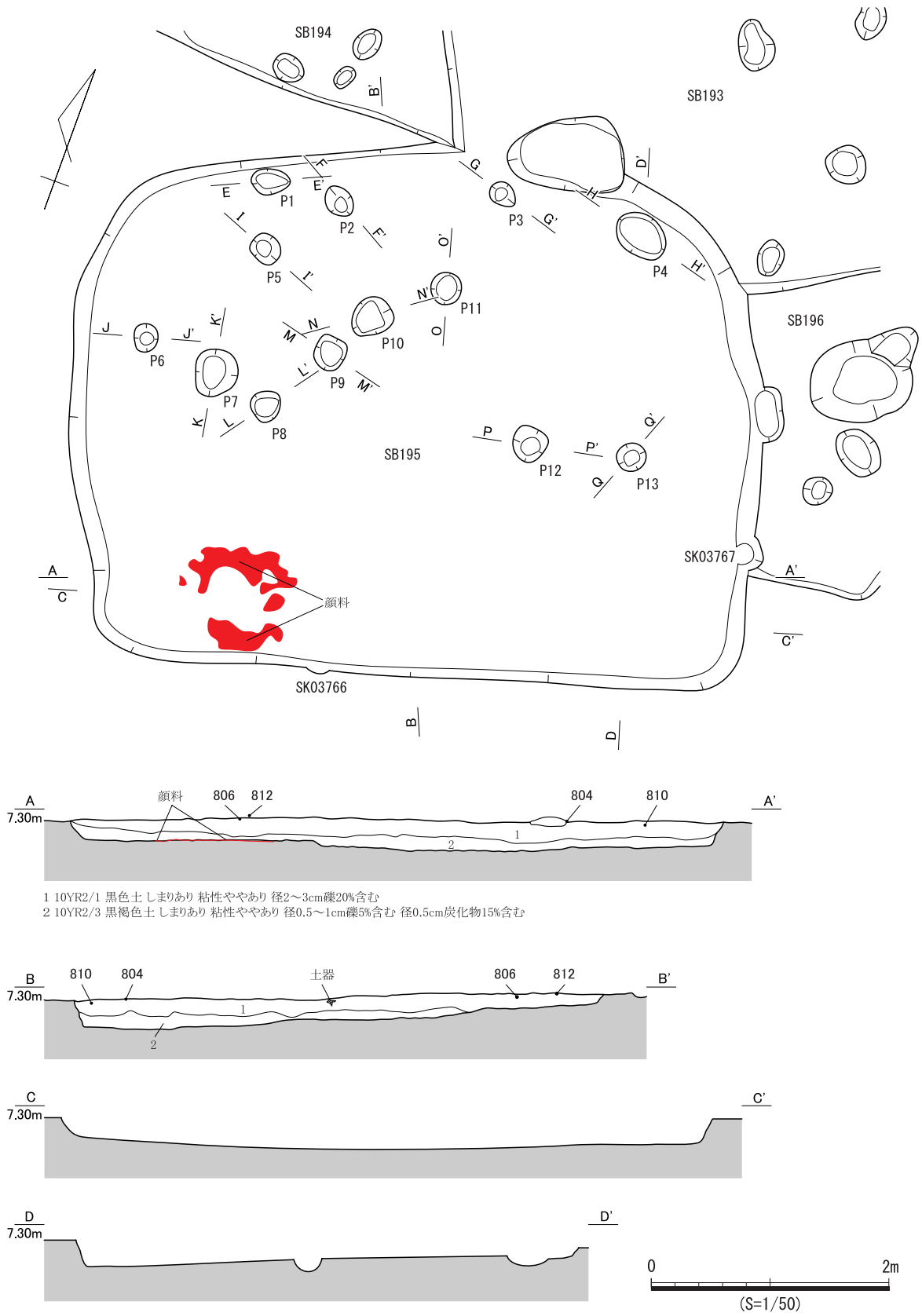


図 247 SB195 遺構図 (1)

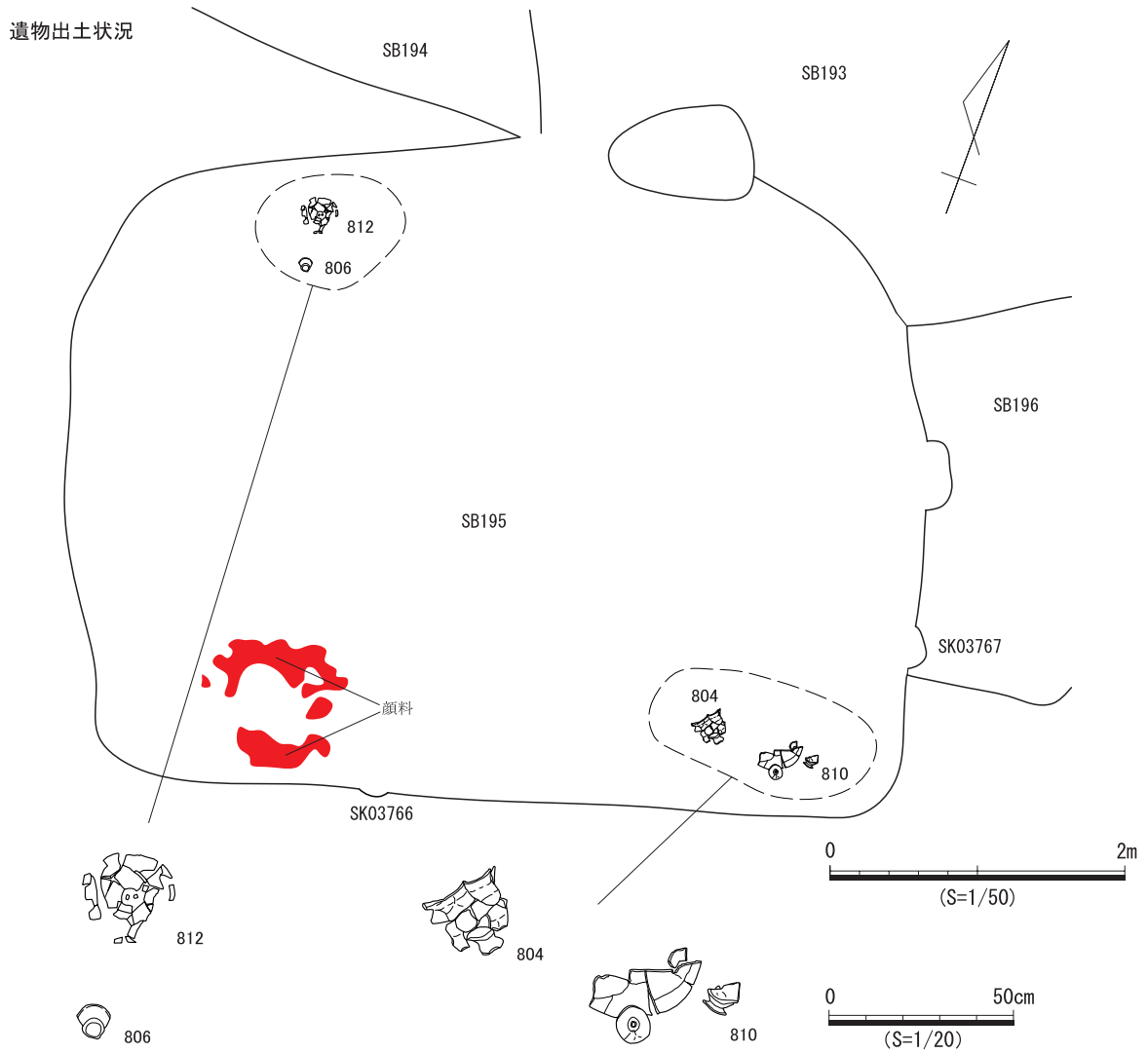
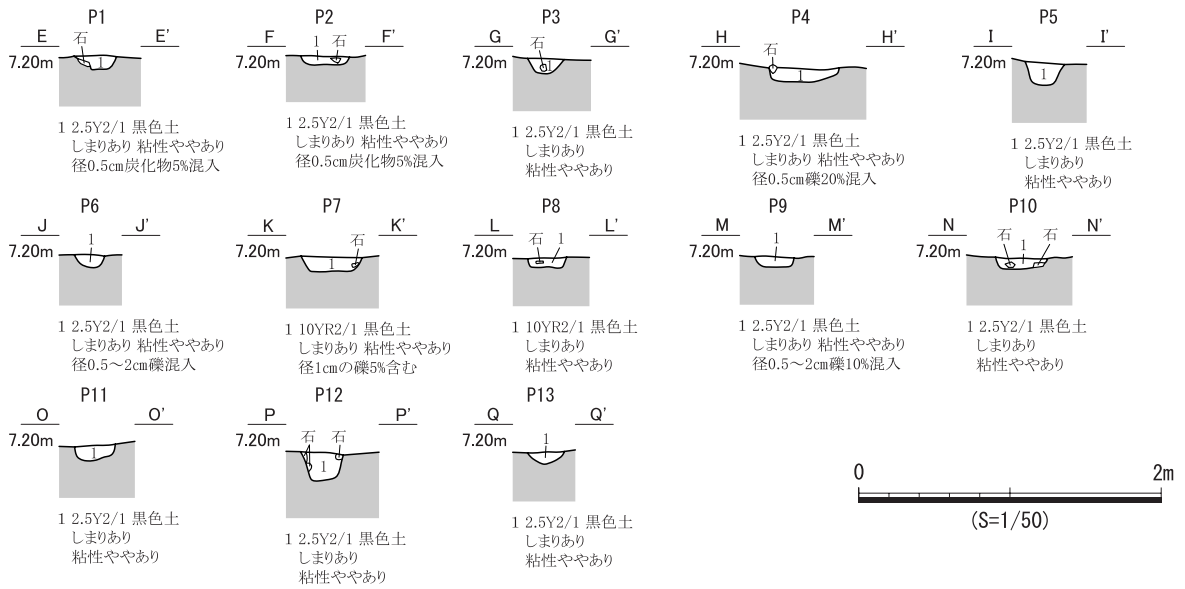


図 248 SB195 遺構図 (2)

SB196 (遺構：図 250・251、遺物：図 252)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北半分がSB193に切られ、南西隅ではSB195を切る。

形状 南北長約4.7m、東西長約3.7mで南北に長い長方形を呈する。壁面のすべてが残る東壁、南壁ともに不整形で歪みが目立つ。深さは0.1mに満たないほど浅い。

埋土 2層に分層した。炭化物や礫の混入が多いことや遺構の重複が著しいことから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上で小穴16基を検出した。直径に差があり、いずれも明瞭な柱痕跡は認められず、深さ約0.1mの浅いものが大半を占める。中央付近にあるP8は長軸0.88mの楕円形の小穴で、深さが0.25mと周囲の小穴とは大きさ、深さとも違いがみられる。また、P8の近くに位置するP7、P13～P15も周囲と小穴とは違って、やや深く底面が平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,443点、小穴から土器264点、壁溝から土器117点が出土した。多くがⅥ期～Ⅶ期にあたる。床面付近で遺存状況がよく、時期的がⅦ期後半にまとまりのある土器(818、820、822、825～831)が出土した。なかでも高坏(831)と器台(830)の遺存状況がよく半完成品である。その他は破片資料である。床面付近で出土した土器だが、原位置を維持した土器とは考えられず、構築時期を示すと土器と判断するのは難しい。構築時期に近い埋没時期を示す土器と考えられる。P7からはⅦ期後半の壺(819)が出土した。

出土遺物 818、819はⅦ期後半の壺A3類。818は口縁端部を上下に拡張して擬凹線を施し、内面には羽状文を施文する。頸部以下には直線文と山形文を施文する。赤彩が口縁部の内外面に認められる。819は口縁端部を欠損する。内面は段をもって口縁部が強く外反する。頸部には突帯が貼付され、円形刺突文が加えられる。820は壺胴部で上半に直線文と刺突文が認められる。Ⅶ期の壺胴部と考えられる。821、822はⅦ期の甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部が平坦である。内外面に粗いハケ目が認められる。823はⅥ期～Ⅶ期の甕C1類。口縁部が頸部から屈折して、わずかに内湾する。824はⅥ期甕D1b類。刺突文が認められ、S字甕A類にあたる。825、826はⅦ期の甕脚部。825には打ち欠きが認められる。826はわずかに脚部が内湾し、内外面にハケ目が認められる。827～829、831はⅦ期後半高坏D類。827、829は口縁端部の内傾面に多条沈線を施文する。828は多条沈線を3帯施文する。そのうち下段の2帯は少条でその上に山形文を施文する。文様最下段の段は認められないが、坏底部の段が顕著である。830はⅦ期後半器台B4類。口縁部が強く内湾し、端部下端を下方へ拡張する。脚部は付根から強く開く。口縁部には少条の多条沈線の中に羽状文を施文する。羽状文は連続するのではなく、部分的に空白域をもって施文している。また、打ち欠きが認められる。831は坏底部が平坦で小さく、わずかな段をもって口縁部が大きく開く。内面には多条沈線を施文する。文様最下段の段は認められない。脚部は付根から強く開き、透孔付近でさらに外反しながらわずかに内湾する。

時期 Ⅶ期前半のSB195を切り、Ⅶ期後半のSB193に切られるが、床面付近で出土した遺存状態のよい土器群の時期からⅦ期後半と考えられる。

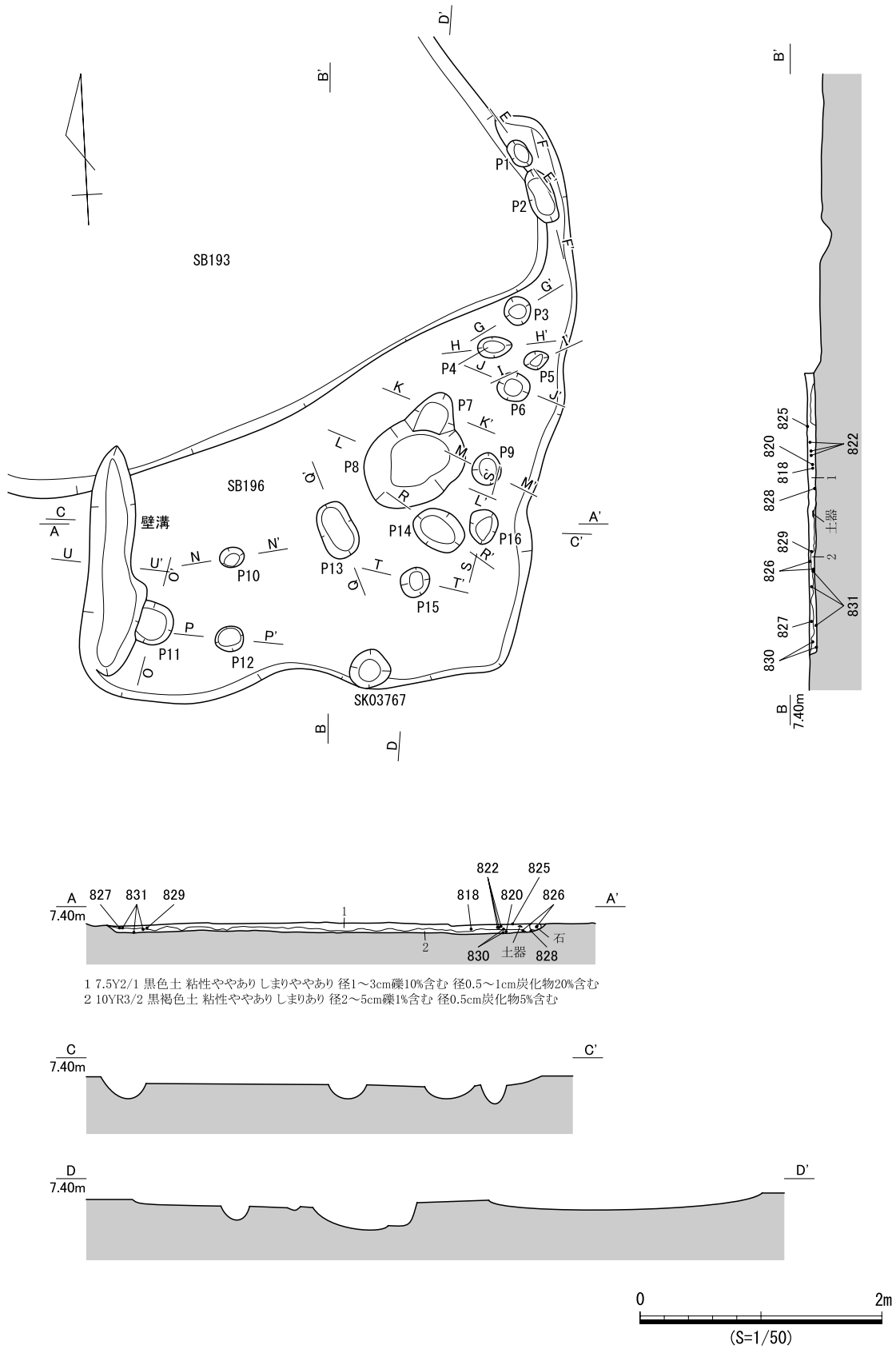


図 250 SB196 遺構図 (1)

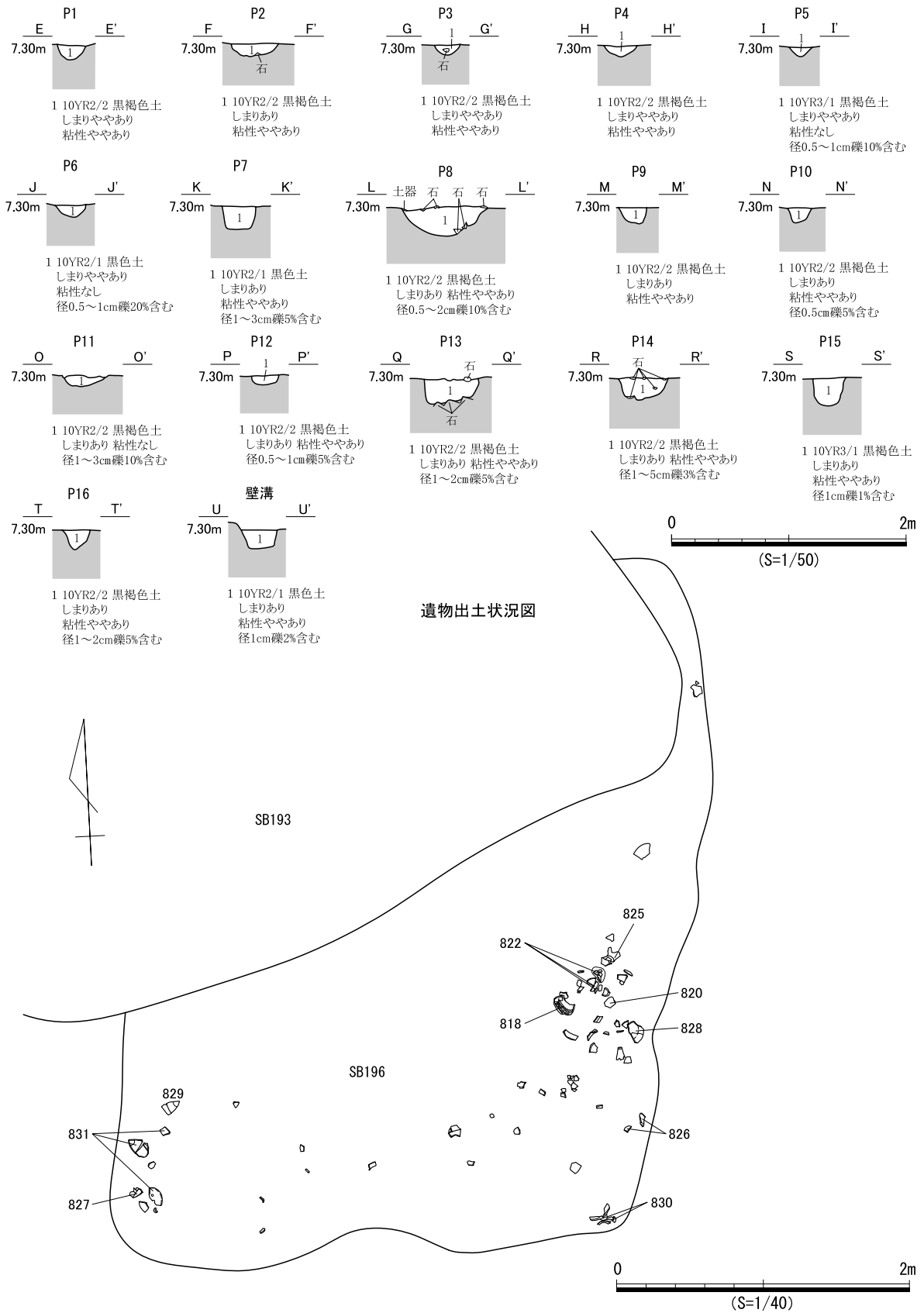


図 251 SB196 遺構図 (2)

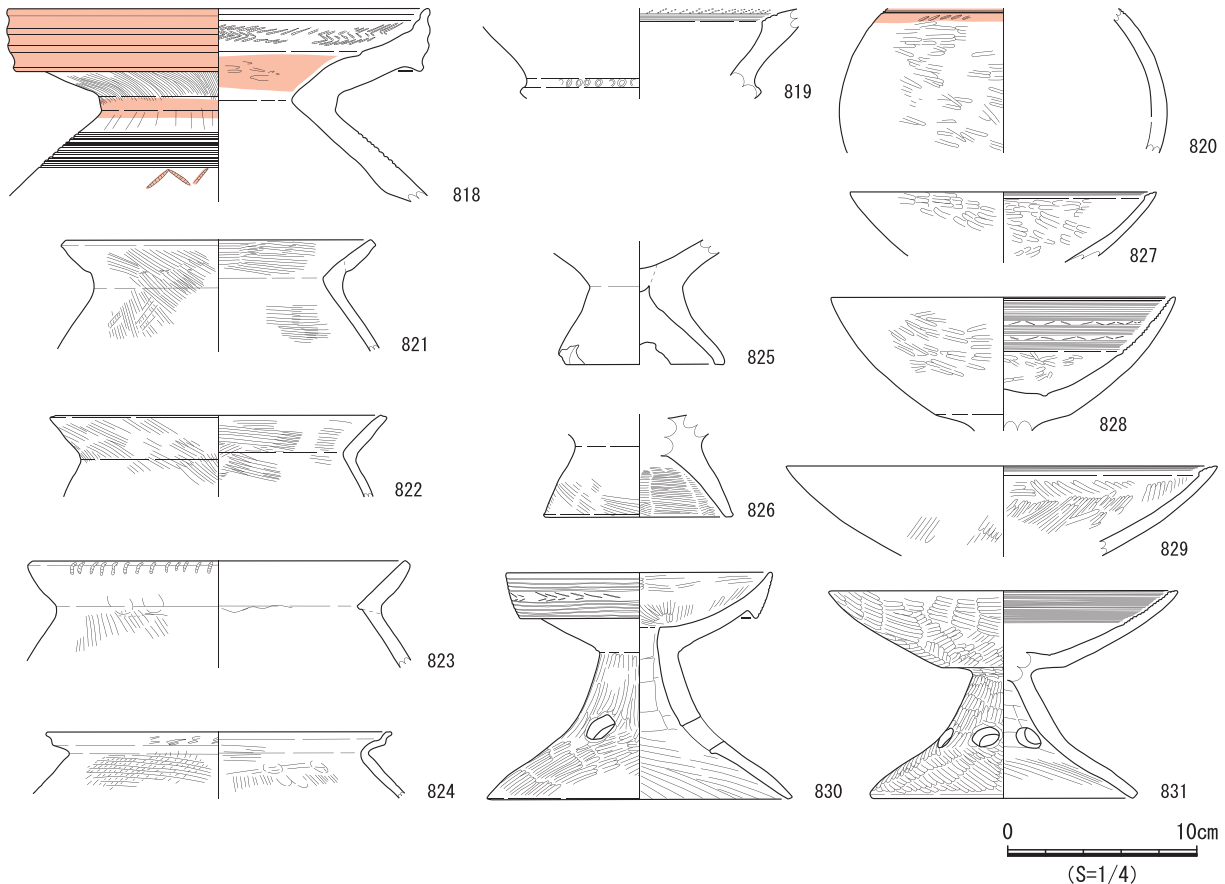


図 252 SB196 遺物実測図

SB197 (遺構：図 253・254、遺物：図 255)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB193とSB196に切られ、西半分の平面形を失っている。

形状 東壁、北東隅、南東隅が残存するのみで、その他の部位は削平され不明である。東西長約4.6mで、深さ0.1mに満たないほど浅い。残存する各壁とも不整形で残りが悪い。

埋土 2層に分層した。上層では炭化物、下層では礫が混入する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。北壁、東壁際の一部にのみ壁溝が認められた。その他に直径約0.1m～0.2mの小穴を14基検出した。規則的な配置や明瞭な柱痕跡は認められなかったが、P8とP13は直径約0.3mでやや他より大きく、深さも深く、底面も平坦であることから、柱穴の可能性が高い。両者の位置関係も柱穴に適当な位置にある。

遺物出土状況 埋土中から土器299点、小穴から土器53点、壁溝から土器24点が出土した。大半がⅦ期の土器片である。ほぼ床面直上からⅦ期後半の高坏(835)、壺(832)、甕(833)が出土した。

出土遺物 832はⅦ期前半の壺A1b類。頸部が直立して口縁部が外反する。頸部直下には直線文が認められる。833はⅦ期前半の甕C2類。口縁部が頸部で屈折するが、わずかに内湾する。端部は平坦で、胴部は強く膨らまず胴長である。834はⅥ期の甕D1b類。口縁部に刺突文が認められる。835はⅦ期前半高坏C4d類。口縁部が内湾しながら立ち上がり、内面2分の1程度に加飾が認められる。多条沈線を3帯施文するが、下段2帯は上段に比べると少条である。少条の多条沈線の上には山形文を施文する。文様帯最下段には顕著な段が認められる。

時期 出土遺物にⅦ期前半のまとまりがあり、Ⅶ期後半のSB193とSB196に切られることから、Ⅶ期前半と考えられる。

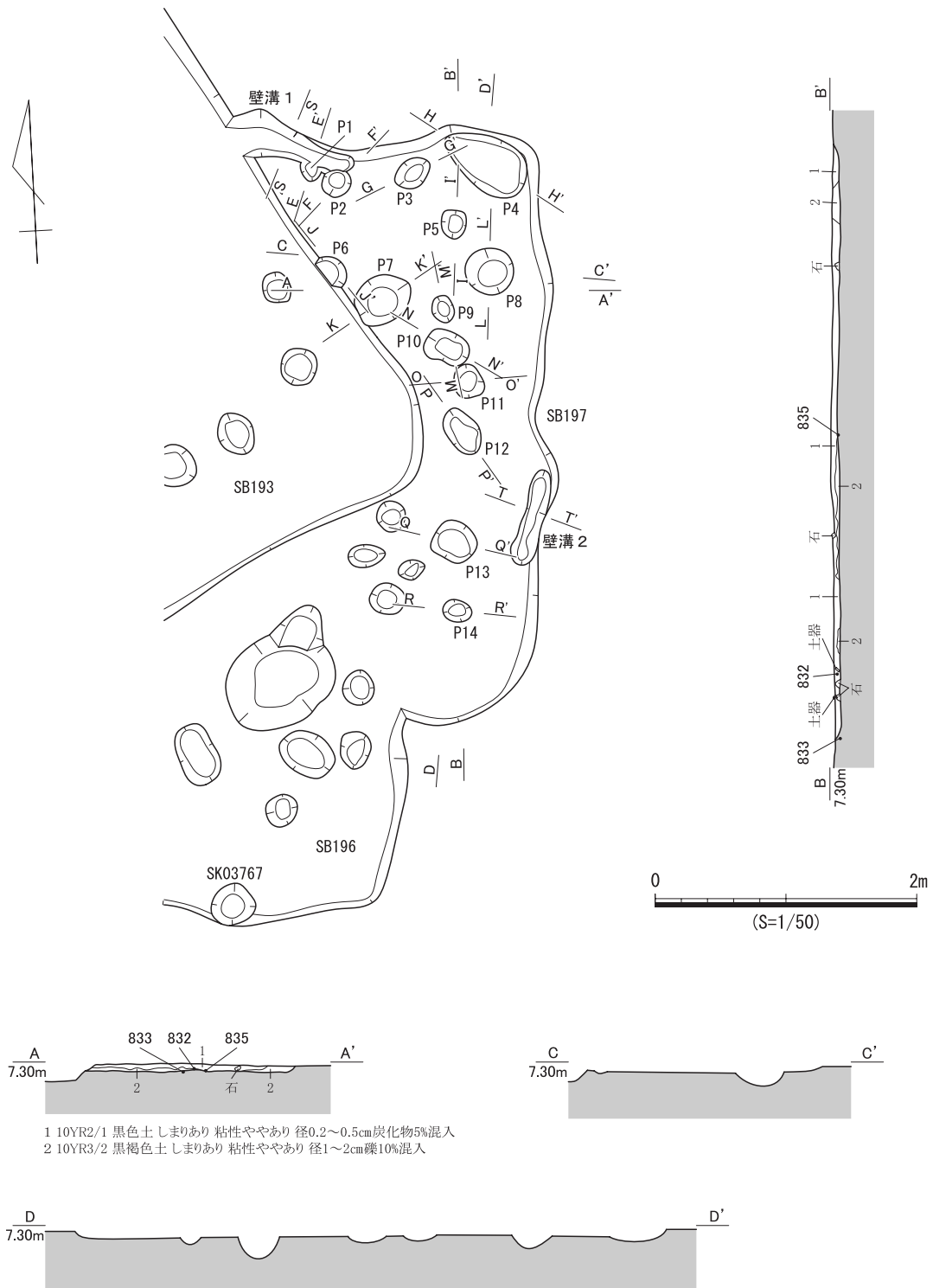


図 253 SB197 遺構図 (1)

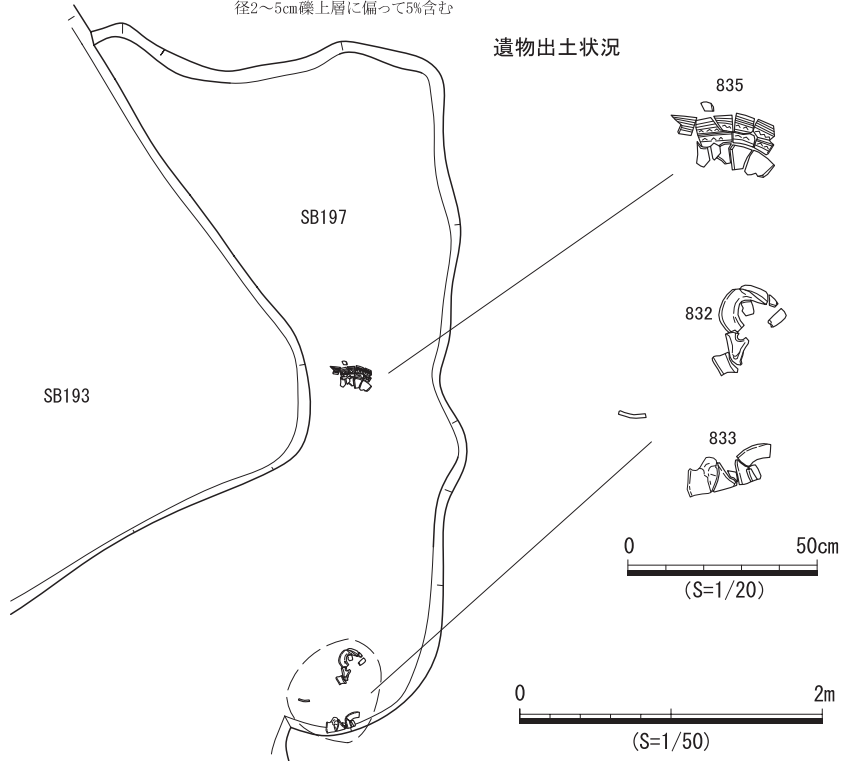
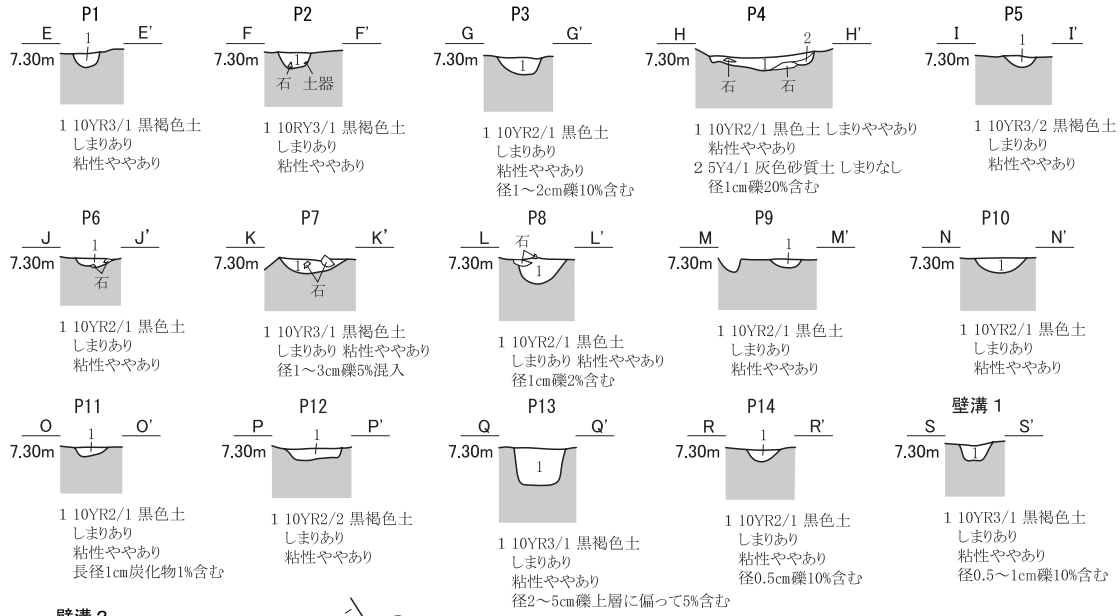


図 254 SB197 遺構図 (2)

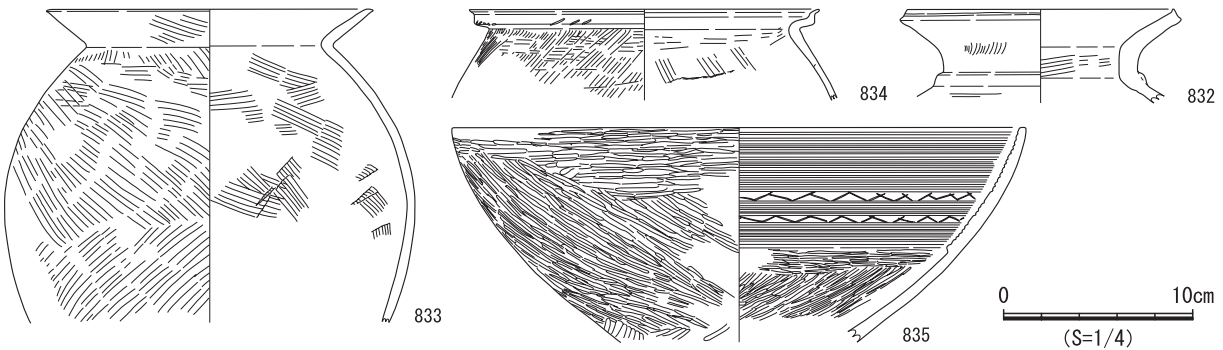


図 255 SB197 遺物実測図

SB198 (遺構：図 256・257、遺物：図 258)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北側から西側にかけて密集する多くの竪穴住居跡との重複が著しい。SB201、SB202を切り、周辺の竪穴住居跡のうち最も後出する竪穴住居跡である。

形状 南北長約4.5m、東西長約4.0mで南北に長い長方形である。東西の両辺は直線的だが、南北辺は内側に向かって弧状となり不整形である。深さは約0.1mで壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。礫の混入は目立つ。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。南西隅には壁溝の残存を確認し

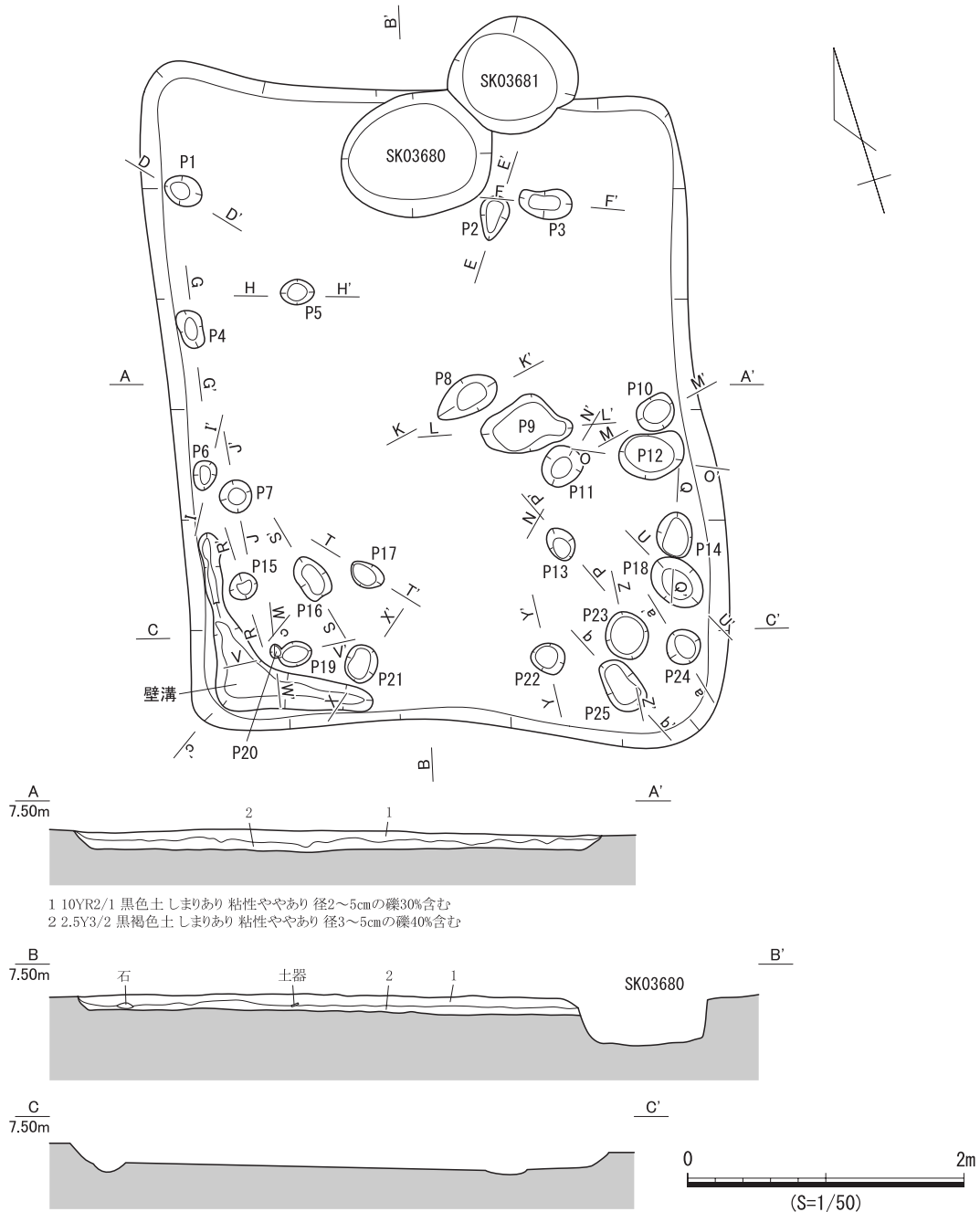


図 256 SB198 遺構図 (1)

た。床面上で直径約0.2mの数多くの小穴を25基確認した。いずれも深さ約0.1mと浅く、規則的な配置や明瞭な柱痕跡は認められなかった。P9は長軸0.66mで他の小穴より大きく、掘形の中央付近に位置する。P9の底面ほぼ中央で砥石(845)が出土した。焼土の堆積や被熱した部位は認められなかったが、砥石が出土したことから、何らかの作業に関わる施設の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,941点、小穴から土器35点、石器類1点、壁溝から土器30点が出土



図 257 SB198 遺構図 (2)

した。V期～VII期の土器片であるが、遺構の時期を決定するような特徴的な出土状況は認められなかった。P9出土の砥石は、底面に密着していたので原位置を保持していた可能性が高い。

出土遺物 836は突帯2条を貼付する壺K類。おそらく脚付壺の胴部と考えられる。突帯間にはやや大ぶりのスタンプ文が認められる。三重となる円形スタンプ文を右下がりの沈線をつなぎ、双頭渦文としている。上段の突帯上には複合鋸歯文が細い沈線で施文される。鋸歯文にわずかに黒色の顔料が付着するようにみえる。時期はV期前半で胎土が精緻で、在地の胎土とはまったく異なり搬入品である。畿内より西側の地域からの搬入品の可能性が高い。837はV期～VI期の壺A1b類。口縁部がゆるやかに外反し、平坦な端部に円形刺突文を施文する。838はV期～VI期の甕A2類。口縁部が強く屈曲して端部は平坦である。839はVII期の器台B4類。口縁端部下端を下方へ大きく拡張して、多条沈線、羽状文、斜格子文を施文する。破損部位が著しく、文様構成全体は不明である。840は壺の口縁にもみえるが、径が小さいことから器台と判断した。VII期末～VIII期の内面を加飾する器台と考えられる。口縁部が直線的に伸びるが、下方が鋭く屈曲する。端部は高坏D類と類似してやや拡張した平坦面を形成して、多条沈線を施文する。端部の他に多条沈線を2帯施文し、その上下に3帯の山形文を施文する。841はV期の高坏I2類。口縁部がわずかに直立して端部は平坦である。842～844はV期前半の高坏B類。842、844は口縁部が短く直立して、端部には強いナデによる凹面を形成する。843は口縁部が短くやや外反し、端部外側をわずかに外方に拡張する。外面上半には波状文、下半には直線文を施文する。845は砥石で、砥面周縁の一部に敲打面が認められる。

時期 出土遺物はV期～VII期のものが認められるが、VI期～VII期のSB201やSB202より後出することから、VI期～VII期と考えられる。

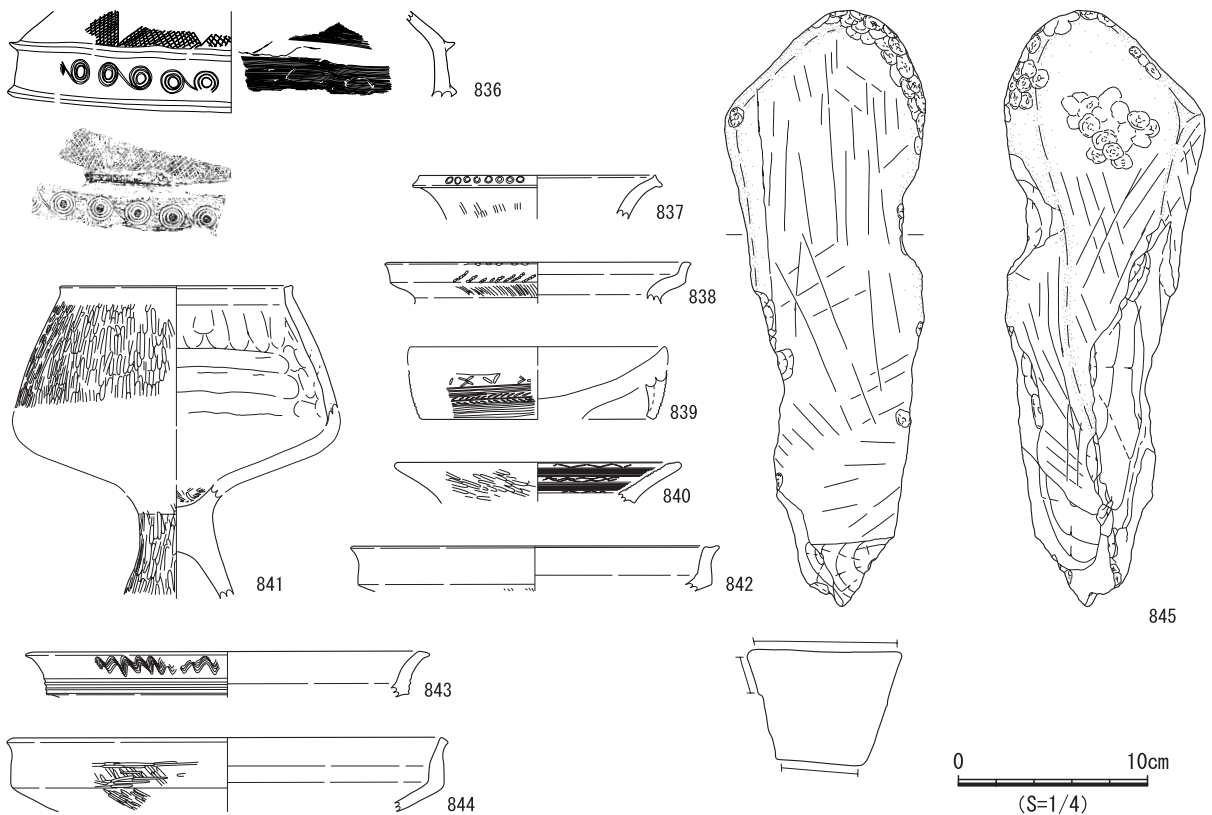


図 258 SB198 遺物実測図

SB199 (遺構：図 259、遺物：図 260)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北側の大半は調査区域外にあり、SB200に切られる。

形状 南西隅部付近のみが残存する。深さは約0.15mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 礫が混じる2層の水平堆積が認められた。上層には炭化物が混じる。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径0.2m程度の小穴を3基確認したが、いずれも明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器99点、小穴から土器4点が出土した。遺物はいずれも小片であるが、V期の土器片が目立つ。

出土遺物 846はV期の壺A1a類。口縁端部下端を大きく、やや下方外側に拡張する。内面には羽状文が認められる。847はV期高坏B類。脚裾部の外反が強く、端部に顕著な平坦面が認められる。

時期 出土遺物の時期とV-2~3期のSB200に先行することから、V期前半と考えられる。

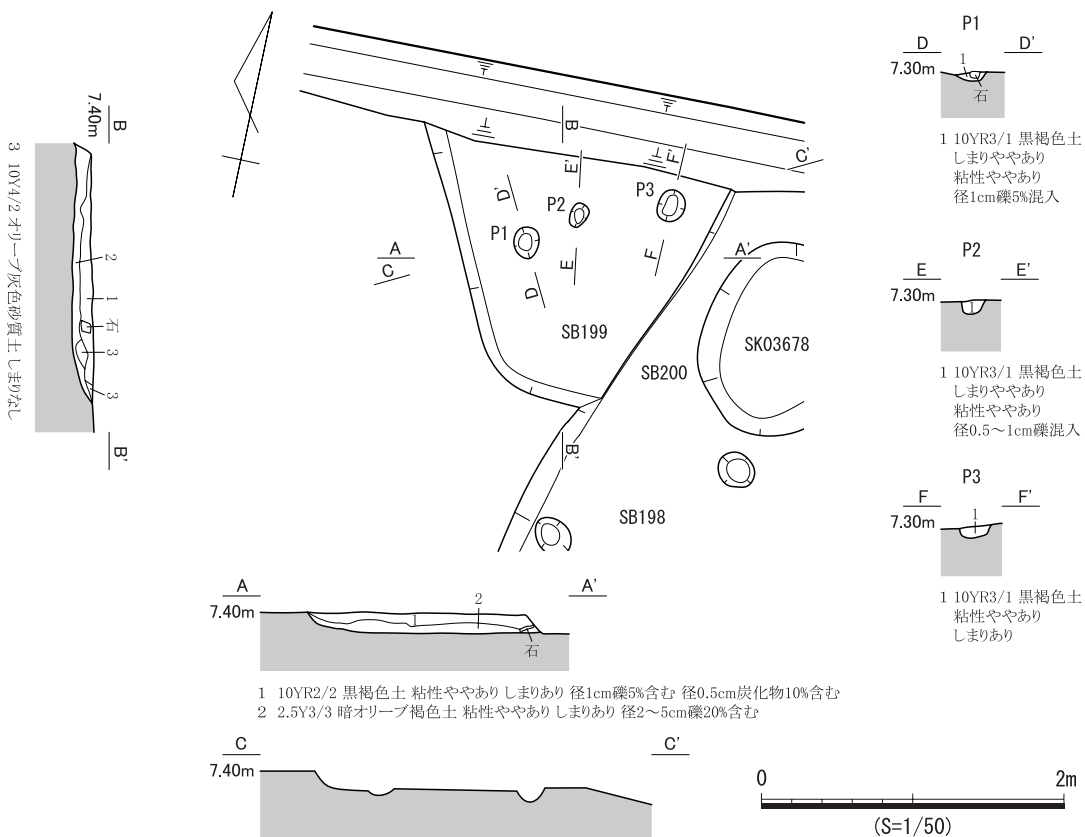


図 259 SB199 遺構図



図 260 SB199 遺物実測図

SB200 (遺構：図261・262、遺物：図263)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北半分は調査区域外にあり、南側をSB198に切られ、西側でSB199を切る。南壁はSB198によって失われているが、南東隅部から延長方向に位置する壁溝2によって、その平面形が推定可能である。

形状 東西長約4.2mで、東西両辺は直線的である。深さは約0.1mで壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。上層では礫、下層では炭化物の混入が認められ、ブロック土の混入や層界の凹凸などから、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を14基礎

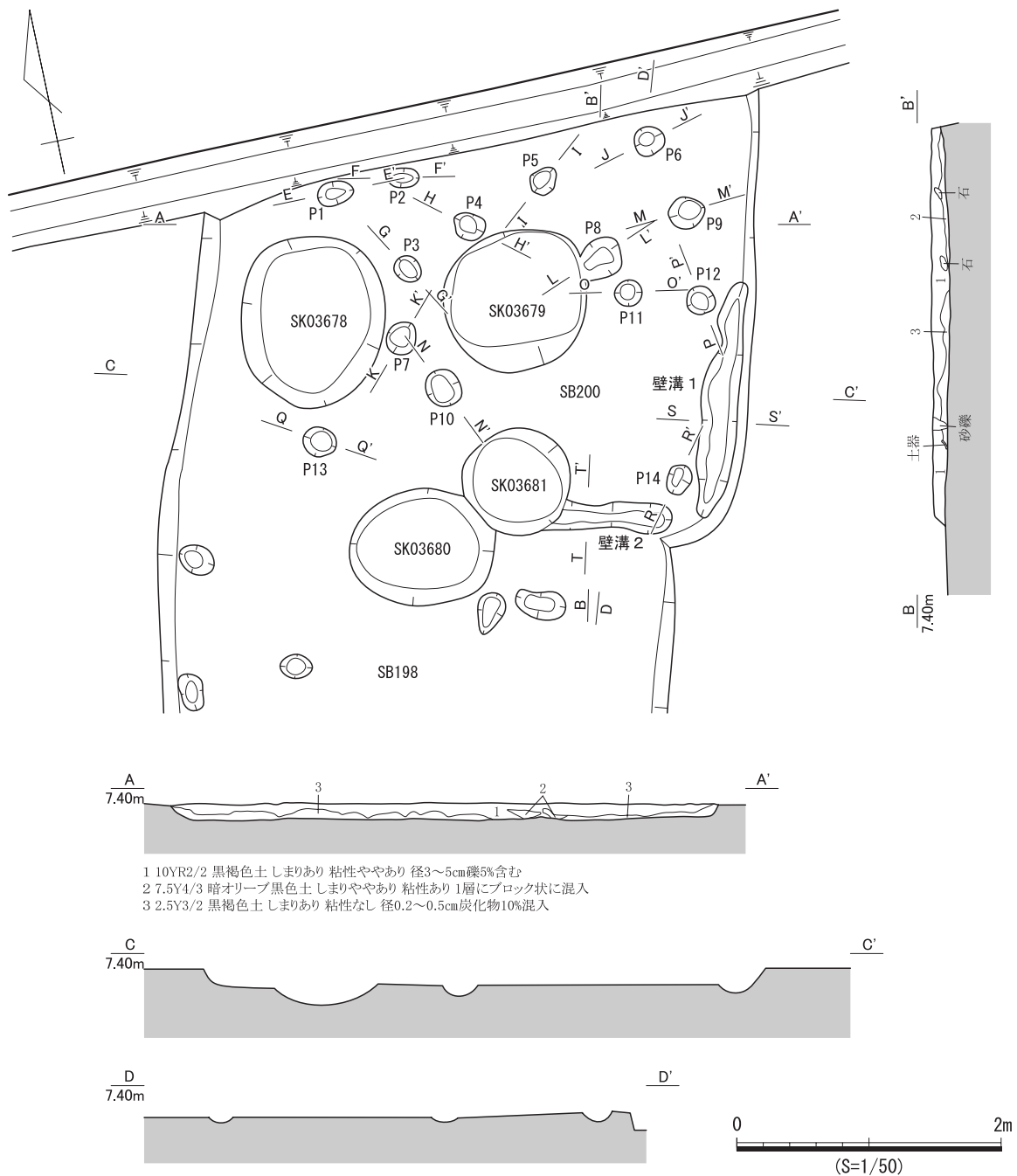


図261 SB200 遺構図(1)

認した。いずれも、底面が丸く深さが約0.1mの浅いものが大半で、明瞭な柱痕跡は認められなかった。なお、P10は底面が平坦で、土器片(849)が出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,348点、石器類1点、小穴から土器51点、壁溝から土器18点が出土した。土器片はV期～VII期にあたり、なかでもV期の土器が多く、およそV-2～3期の土器片の比率が高い。半完存品のV期蓋(848)が出土したが、他の土器片も含めて、遺構の時期を決定するような出土状況は認められなかった。IV期甕(849)はP10から出土し、本住居跡の時期を示す土器と考えるのが妥当だが、周囲の竪穴住居跡との重複関係と時期が矛盾する。本住居跡掘削に伴い、本遺構に切られるSZ123から混入した可能性が高い。

出土遺物 848はV期の蓋。壺F類とセットになる蓋であろう。口縁部ははやや外反して、端部は平坦面を形成する。2穿孔が認められ、天井部に赤彩を施す。849はIV期甕B2類。口縁部が強く屈曲して内傾する。端部には顕著な平坦面が認められ、外面には刺突文を施文する。頸部直下には直線文が認められる。850～852はV期高坏B類。850、851は口縁部が強く外反する。852は口縁部が短く外反する。853、854はV期高坏の脚部。853はB類、854はI類であろう。855は軽石製品で、砥面に線状痕が認められる。

時期 出土遺物の時期から、V-2～3期と考えられる。

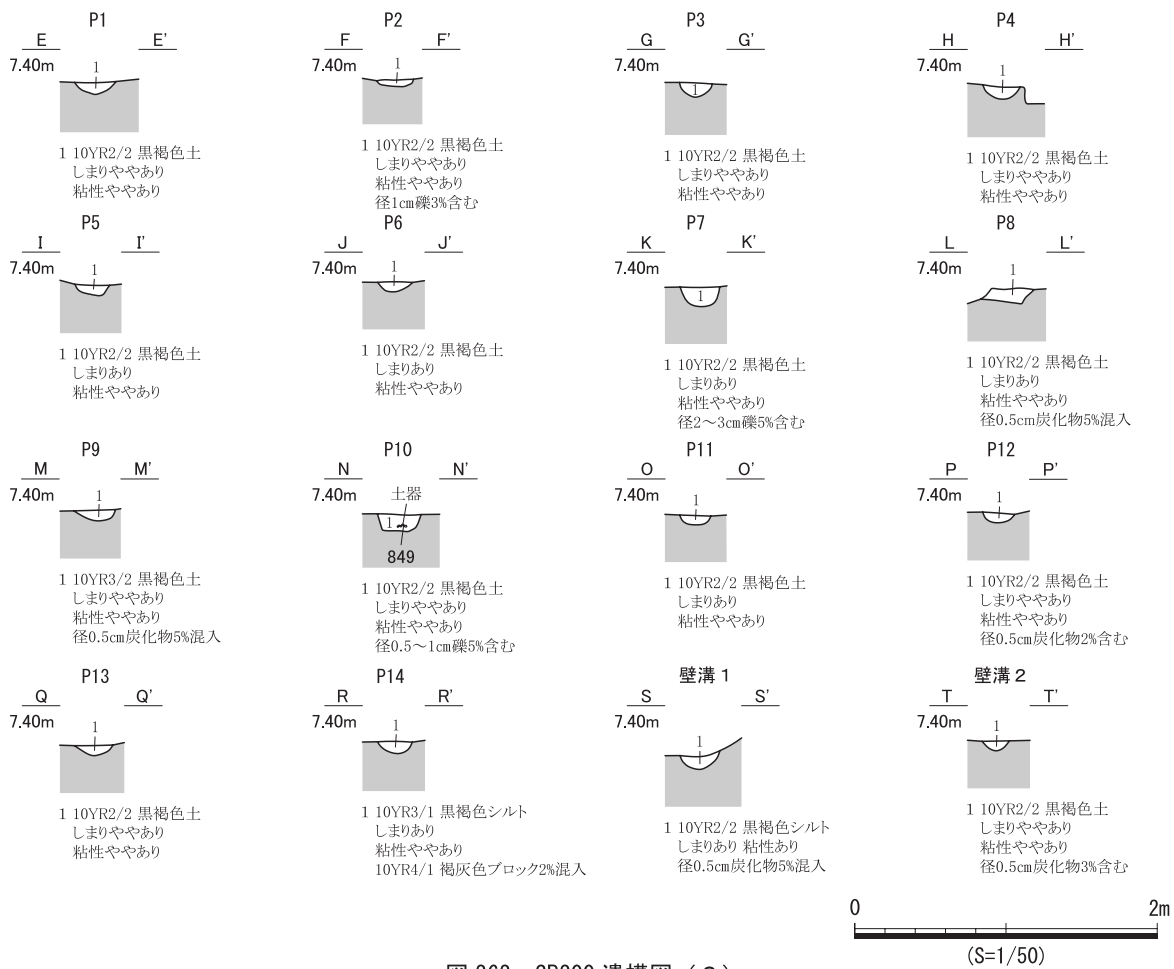


図 262 SB200 遺構図 (2)

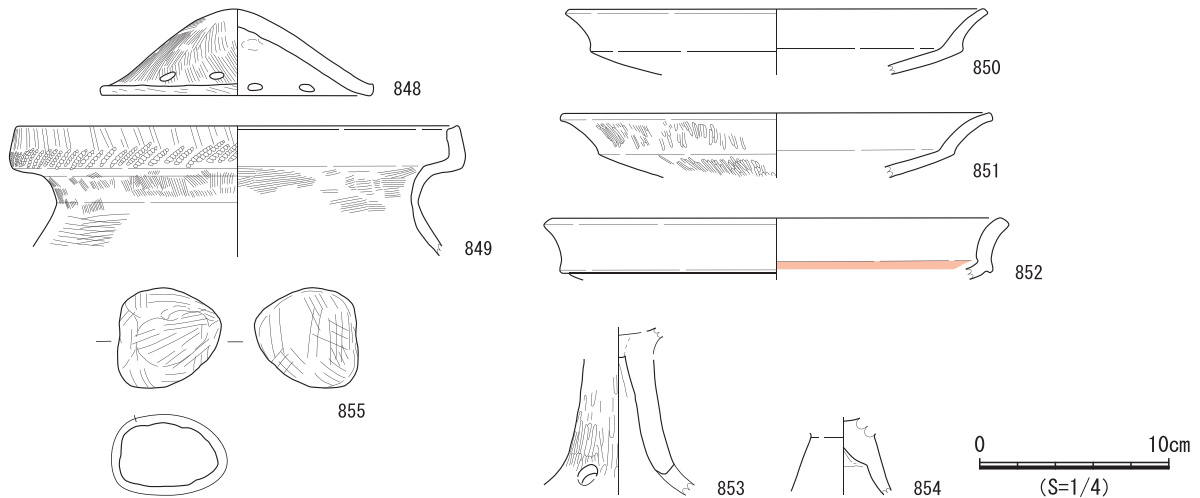


図 263 SB200 遺物実測図

SB201 (遺構：図 264・265、遺物：図 266)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。VI層上面で検出し、他の竪穴住居跡との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。その新旧関係はSB198>SB201>SB202>SB203である。また、SK03794を切る。

形状 南北長約3.9m、東西長約3.0mで南北に長い長方形を呈し、重複する竪穴住居跡と比べて小規模である。深さは約0.1mで壁面傾斜は緩やかである。北辺、西辺、南辺の3辺は直線的だが、東辺のみ不整形で南東隅部は外側へ突出する。

埋土 3層に分層した。壁面から埋没が進行したと考えられる。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。P14とP29を除いて、直径約0.1mの小穴を28基確認した。いずれも深さは約0.1mと浅くて底面も丸く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。P14は住居内のほぼ中央に位置し、直径0.52mと比較的大きな小穴で炉跡の可能性が考えられるが、焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。P29は北西隅にある不整形を呈する穴であるが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,541点、小穴から土器27点、石器類2点、壁溝から土器1点が出土した。大半がV期～VII期にあたるが、一部にI期(857)やIV期(856)の土器片が認められた。なお、埋土中から粘土塊が出土した。

出土遺物 856はIV期壺A1類。口縁部が屈曲して立ち上がり、2条の凹線が認められる。857はI期の遠賀川系壺胴部片。頸胴部境に削り出しの段があり、その両側に沈線を加える。858はV期前半の高坏B2a類。口縁部が短く直立し、端部上端を外方へ拡張して沈線を施文する。859はVI期の甕D1b類。口縁部が強く屈曲して、端部上端が外方へ引き出され、刺突文が認められる。860はVII期高坏C4d類。口縁部内面2/3程度に多条沈線、山形文、対向山形文で施文する。最上段以外の直線文は少条で、文様最下段には段差が認められる。

時期 VI期～VII期のSB202を切るが、出土遺物の時期はV期～VII期が多いことから、本遺構の時期はVI期～VII期と考えられる。

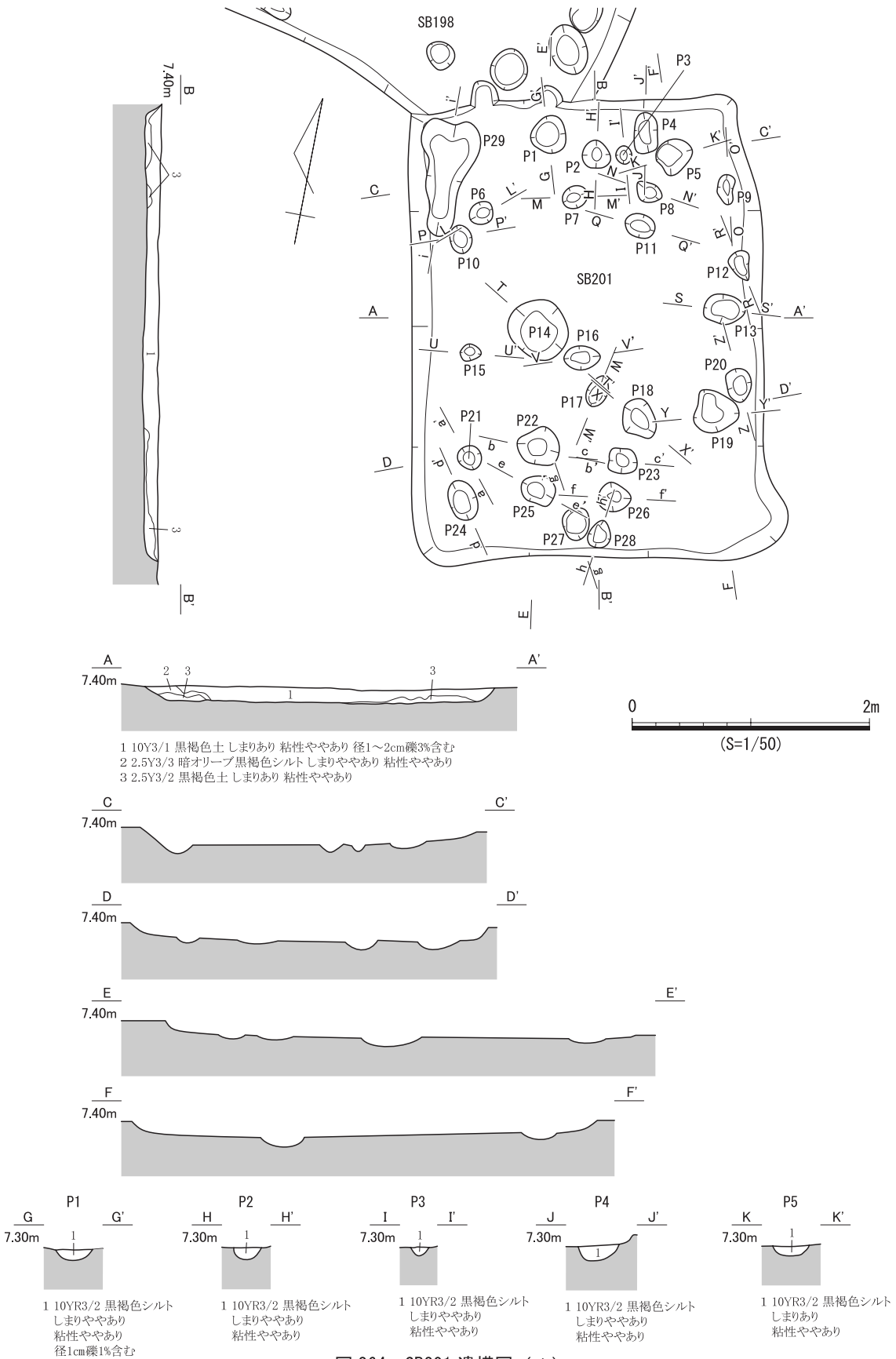


図 264 SB201 遺構図 (1)

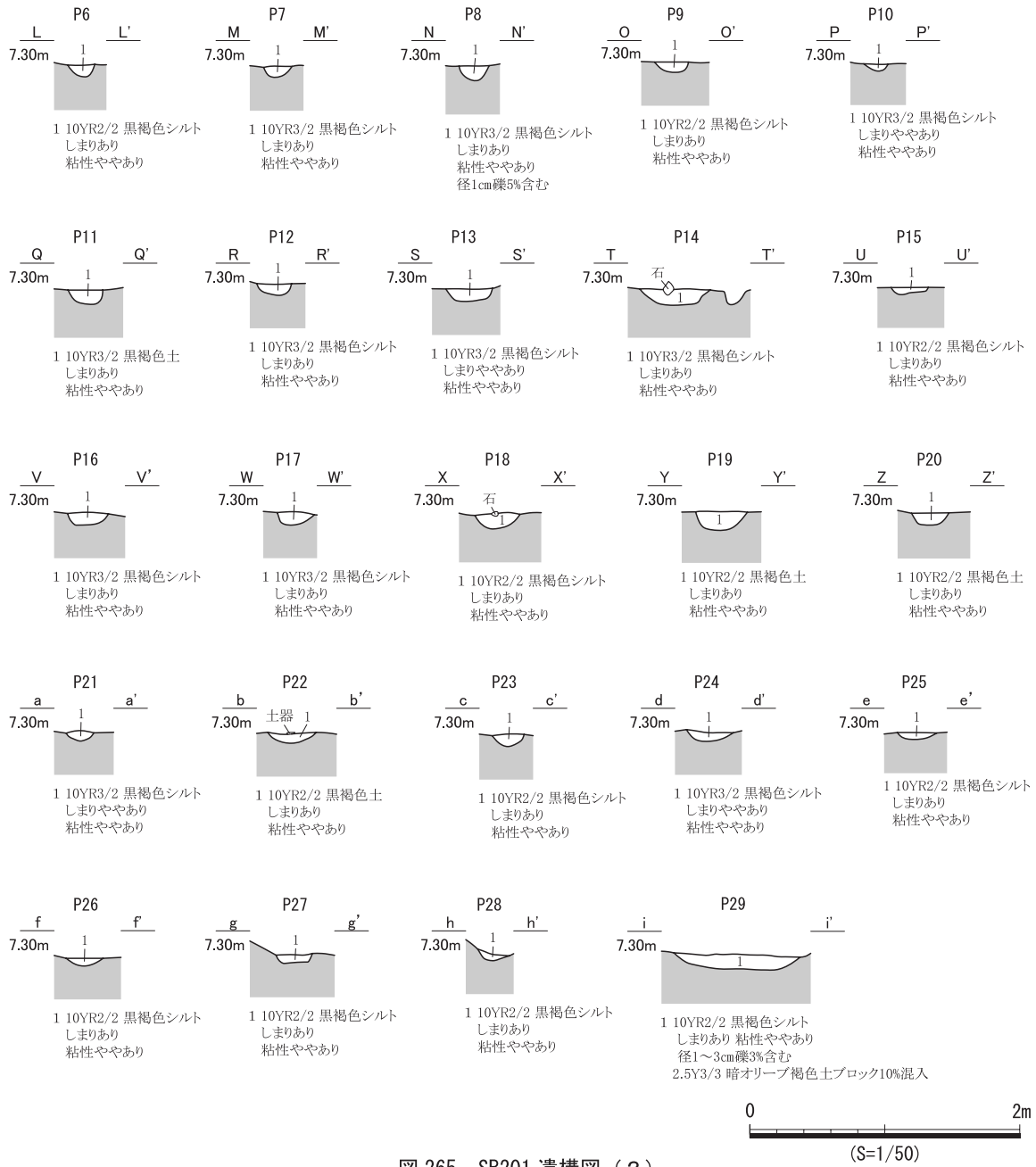


図 265 SB201 遺構図 (2)

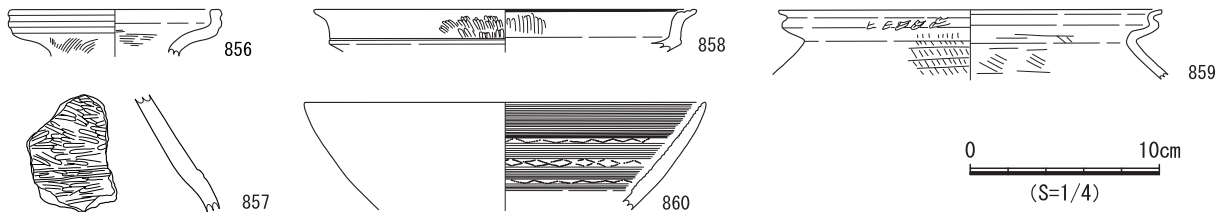


図 266 SB201 遺物実測図

SB202 (遺構：図268・269、遺物：図267)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西壁は後出するSB201によって失われているが、北東隅部、南東隅部が確認できた。SB201に切られ、SB203を切る。また、南西側はSK03794に切られている。

形状 南北長約3.1mで、東西長は不明である。深さは0.1mをやや上回り、周辺の竪穴住居跡と比べると深い。壁面傾斜は緩やかだが、北壁のみやや急である。

埋土 2層に分層した。上層には礫や炭化材の混入が認められる。下層の堆積は薄く、オリブ灰色土のブロックが混入するので、人為堆積の可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上で直径約0.2m～0.5mの小穴14基を確認した。深さは0.1mにも満たない浅いものも多く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。また、壁溝と考えられる溝2条も検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,066点、小穴から土器65点、壁溝から24点が出土した。VI期～VII期の土器片が多いものの、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 861はVII期の高坏D類の脚部。付根の径がやや小さく、外方へ大きく開く。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

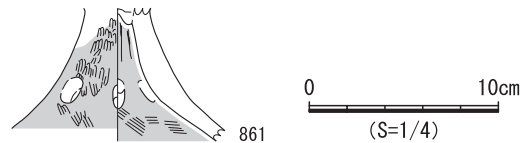


図267 SB202 遺物実測図

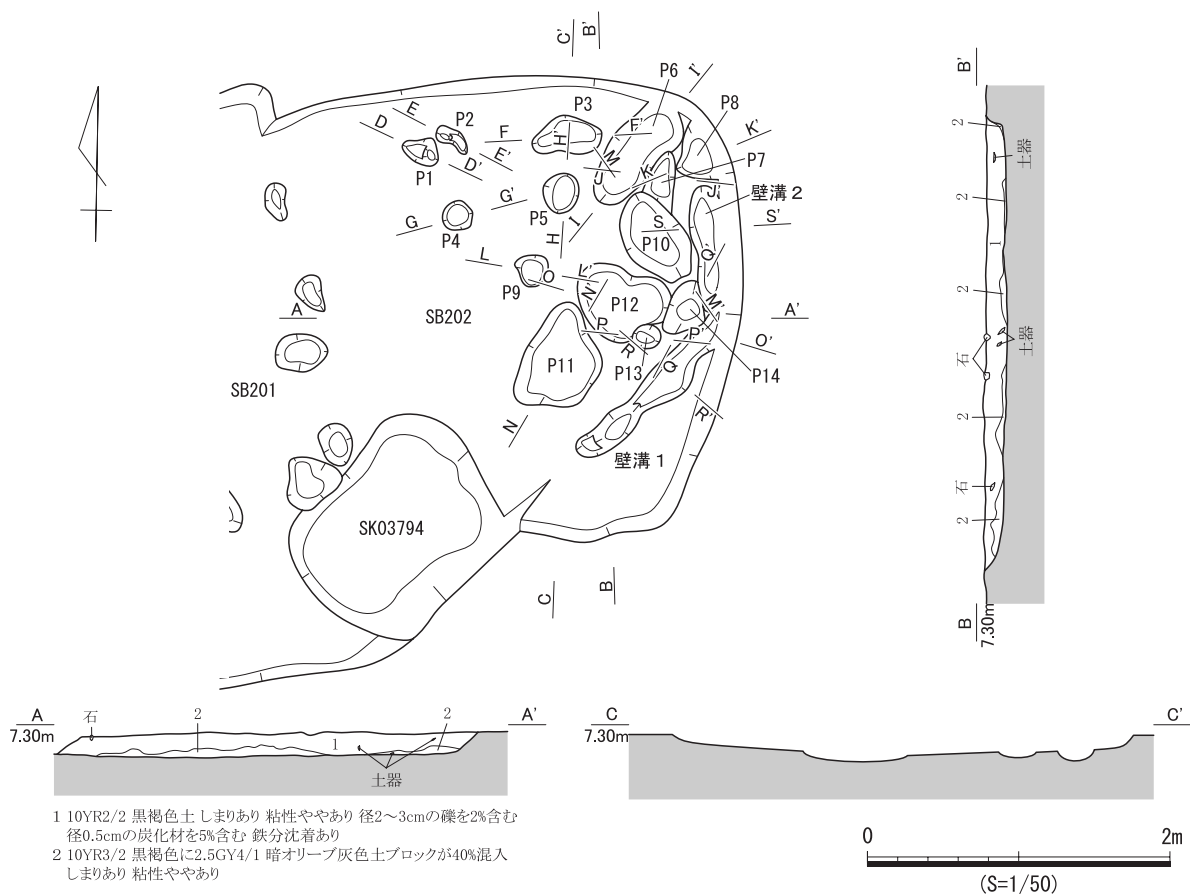


図268 SB202 遺構図(1)

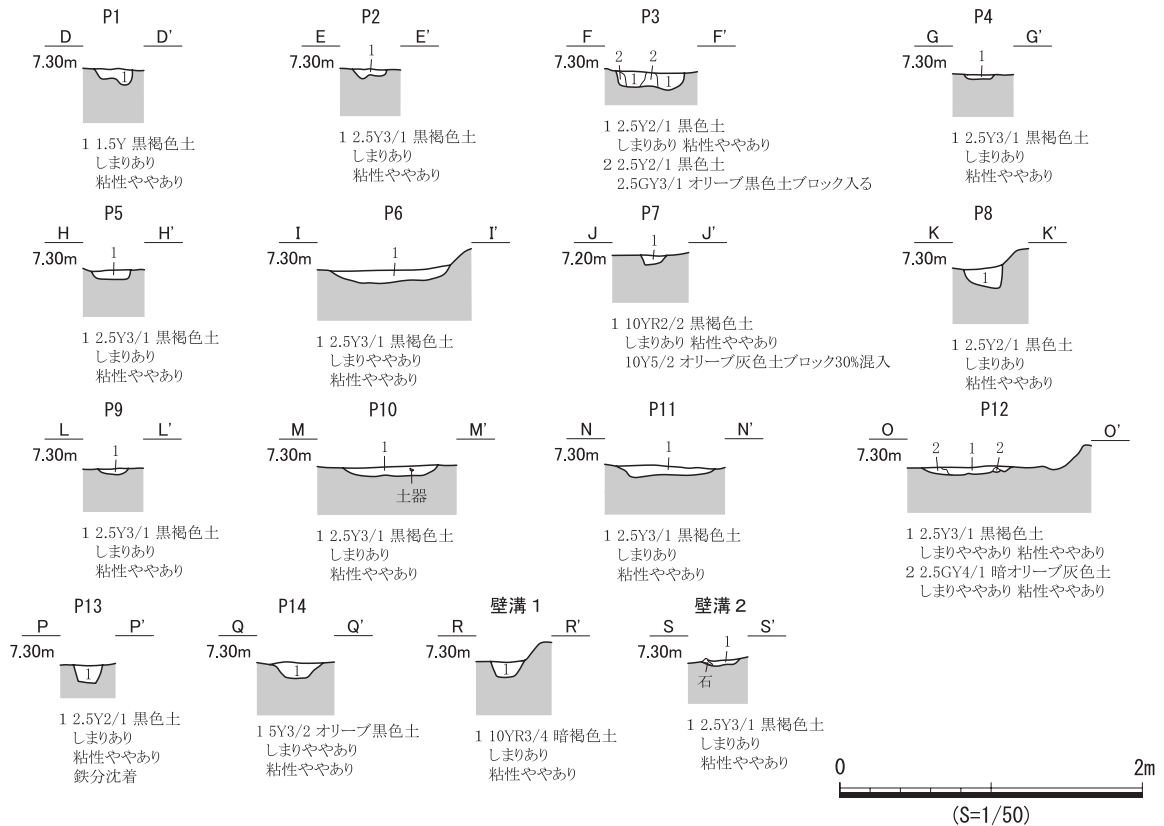


図 269 SB202 遺構図 (2)

SB203 (遺構：図 270・271、遺物：図 272)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。周辺の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB198、SB201、SB202に切られ、周辺の竪穴住居跡のなかでは最も先行する。

形状 周辺の竪穴住居跡との重複関係により、本来の形状は不明である。東西長約 4.5 m、南北長は不明である。北辺は失われ、東西両辺は不整形で外側へ大きく膨らみ、P25 を壁溝の一部とみなすことが可能であれば、五角形状を呈する。深さは約 0.1 m で、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。炭化物が混じる上層が厚く堆積し、下層は灰オリーブ色土のブロック土が混じり、薄く堆積する。埋土中にブロック土を含むことや、周辺の竪穴住居跡の中で最も古い遺構であることから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。西壁に沿って壁溝が認められ、そのほかに直径 0.1 m ～ 1.0 m 以上の小穴を 26 基確認した。小穴は南西隅部に偏在する傾向が認められる。深さ 0.1 m にも満たないものが大半を占め、明瞭な柱痕跡は認められない。P1、P4、P17 は断面形が柱痕に類似し、周囲の小穴より深いため、2 本柱建物の可能性もあるが断定はできない。P1 を除いて断面形や深さに違いがあり、柱穴と判断するには難しいが、P1、P2、P13、P20、P24、P26 が柱穴に適切な位置にある。

遺物出土状況 埋土中から土器 1,933 点、石器類 1 点、小穴から土器 169 点、壁溝から土器 81 点出土した。出土した土器片は V 期～VII 期にあたり、なかでも V 期の土器片が多く認められた。P26 から VI 期器台 (870) が出土したが、周囲の竪穴住居跡との重複関係により、混入した可能性がある。P21 から

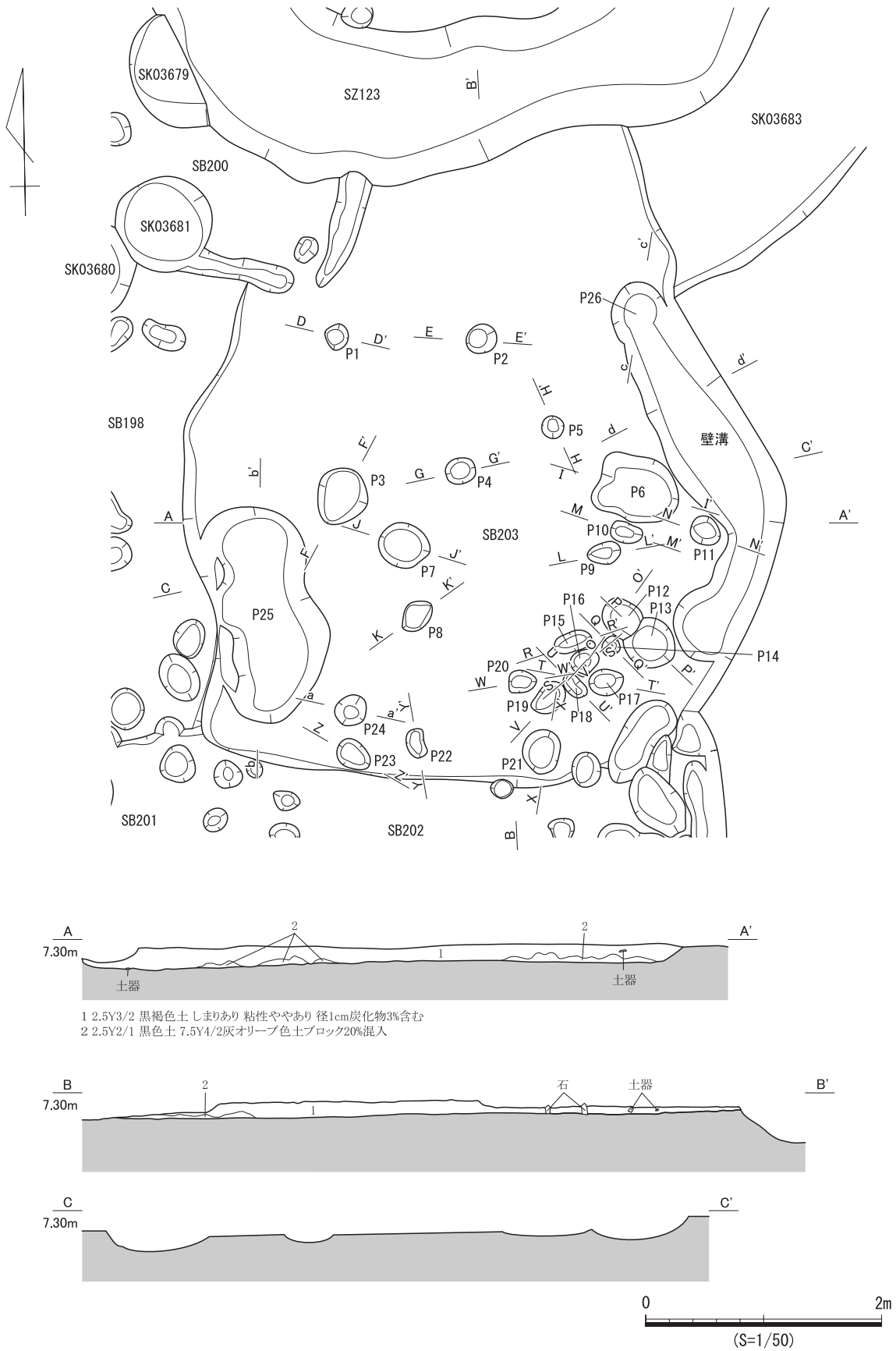


図 270 SB203 遺構図 (1)

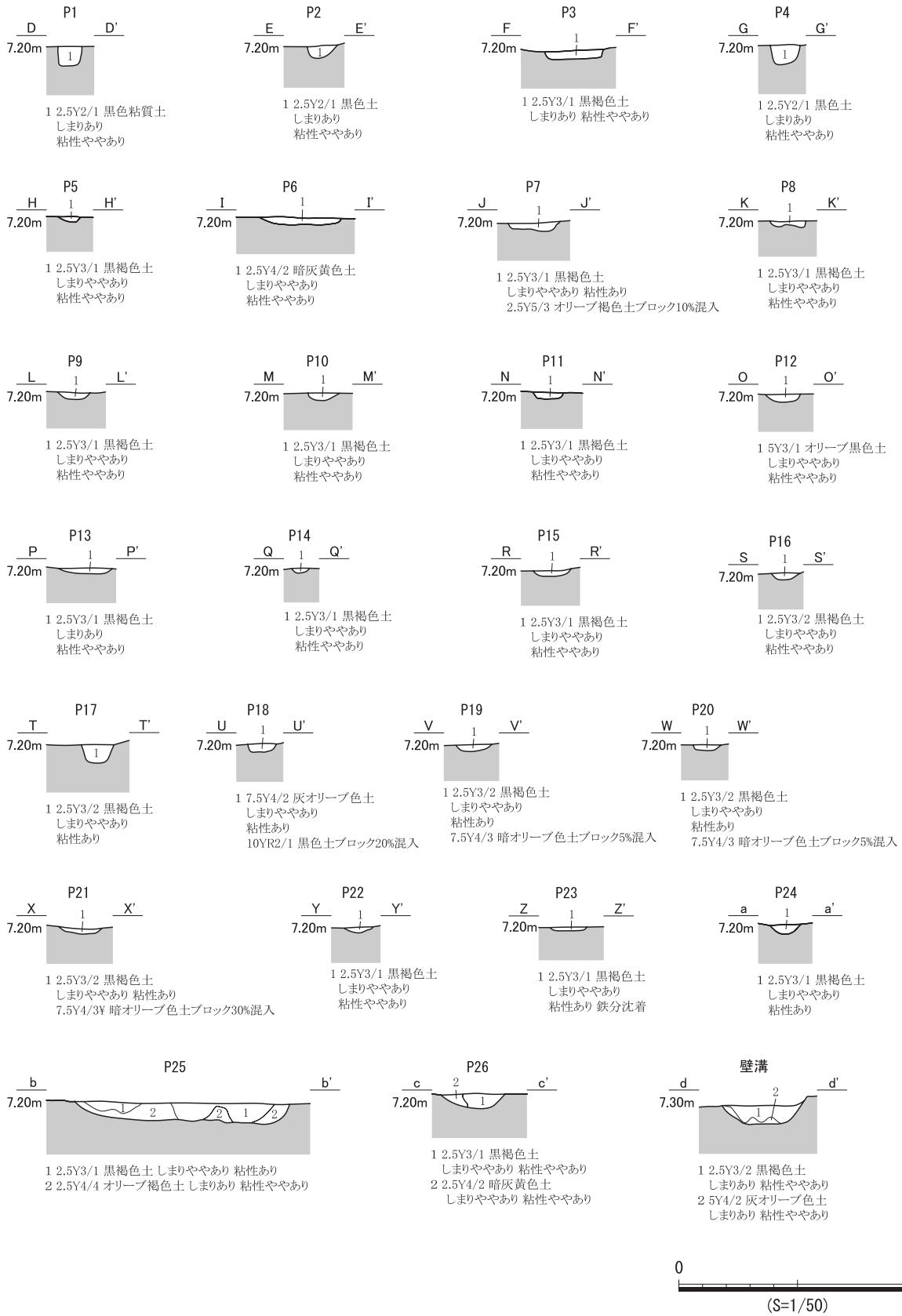


図 271 SB203 遺構図 (2)

砥石(871)が出土した。また、埋土上層から管玉1点(872)が出土した。

出土遺物 862はV期の甕B1b類。口縁部は短くくの字に屈折して、端部に刺突文を施文する。内面の頸部以下にはケズリ調整が認められる。863、864はともにV期甕E1類。小型の甕で、口縁部が短く屈折し、胴部はそれほど膨らまず最大径から直線的に底部に向かう。平底だが、口縁部から胴部の形状は甕B1類に類似する。865はVI期～VII期の甕E6類で口縁部が短く屈折する。866、868はV期前半の高坏A類。口縁部が短く直立する。866は端部が外傾する。868は端部が内傾して、上端をわずかに外方に拡張する。867はV期高坏I類の脚部。869はVII期高坏D3類。内面には多条沈線のみを施文する。内傾する端部にも多条沈線が認められる。870はVI期器台B類。付根から脚部はそれほど広がらず下方へ伸びる。871は砥石。左側面が使用により大きく窪む。872は管玉。緑色凝灰岩製で下端を欠損する。

時期 出土遺物はV期～VII期にものが認められ、V期の遺物が多い。また、VI期～VII期のSB202に先行することから、VI期～VII期の遺物は混入の可能性があり、本遺構の時期はV期と考える。

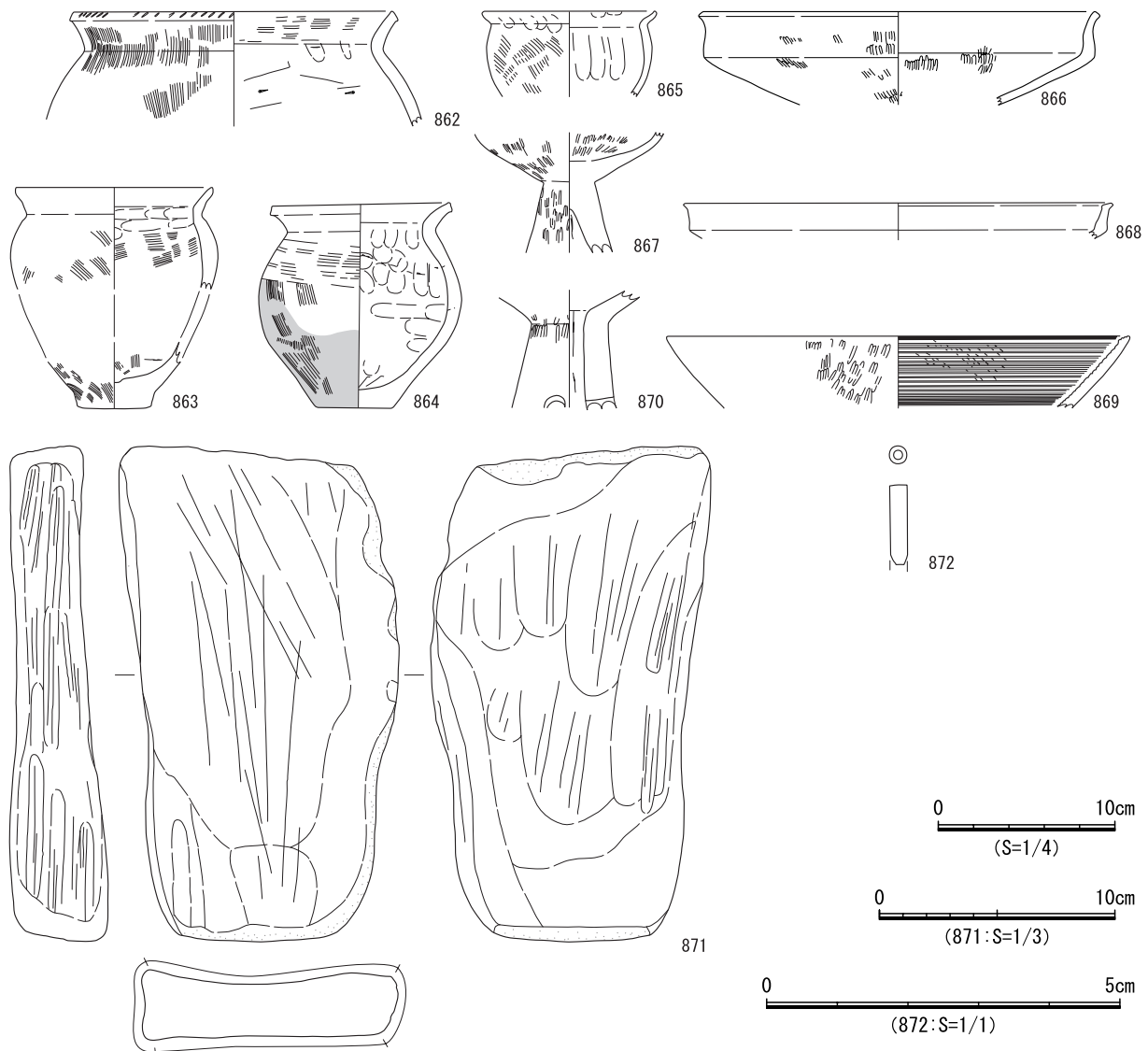


図 272 SB203 遺物実測図

SB204 (遺構：図 273・274、遺物：図 275)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、東側をSK03808に切られる。平面形は不明瞭であったが、SK03808における炭化物の分布によって判断した。

形状 南北長約3.8m、東西長約4.0mのほぼ方形を呈する。各辺とも不整形で、東西両辺は南側に向かって大きく開く。南北両辺は凹凸が著しい。深さは浅く、0.1mにも満たない。壁面は傾斜が緩やかで、壁面らしい立ち上がりを示すのは、北壁のみである。

埋土 2層に分層した。1層には礫や炭化物が混じり、2層との層界は凹凸が著しく、人為堆積の可能性はある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を17基確認した。いずれも明確な柱痕跡は認められないが、そのうち底面が平坦でその他の小穴と比べると深さのあるものにP3～P7、P11、P14、P16がある。そのうち、P3、P5、P11、P14は軸が揃う。P6もP3～P5の延長上にある。同様に、P11～P14の延長上を検討するとP16がある。南北方向がP6とやや揃わないが、これら6基がある程度規則的な配置が認められ、他の小穴との断面形の相違からみて、柱穴の可能性はある。なお、東西両壁に沿って、やや幅広い壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器255点、小穴から土器45点、壁溝1点が出土した。土器片の出土は他の竪穴住居跡と比べると少なく、小片が多い。なお、P4からⅧ期の甕D類が出土した。

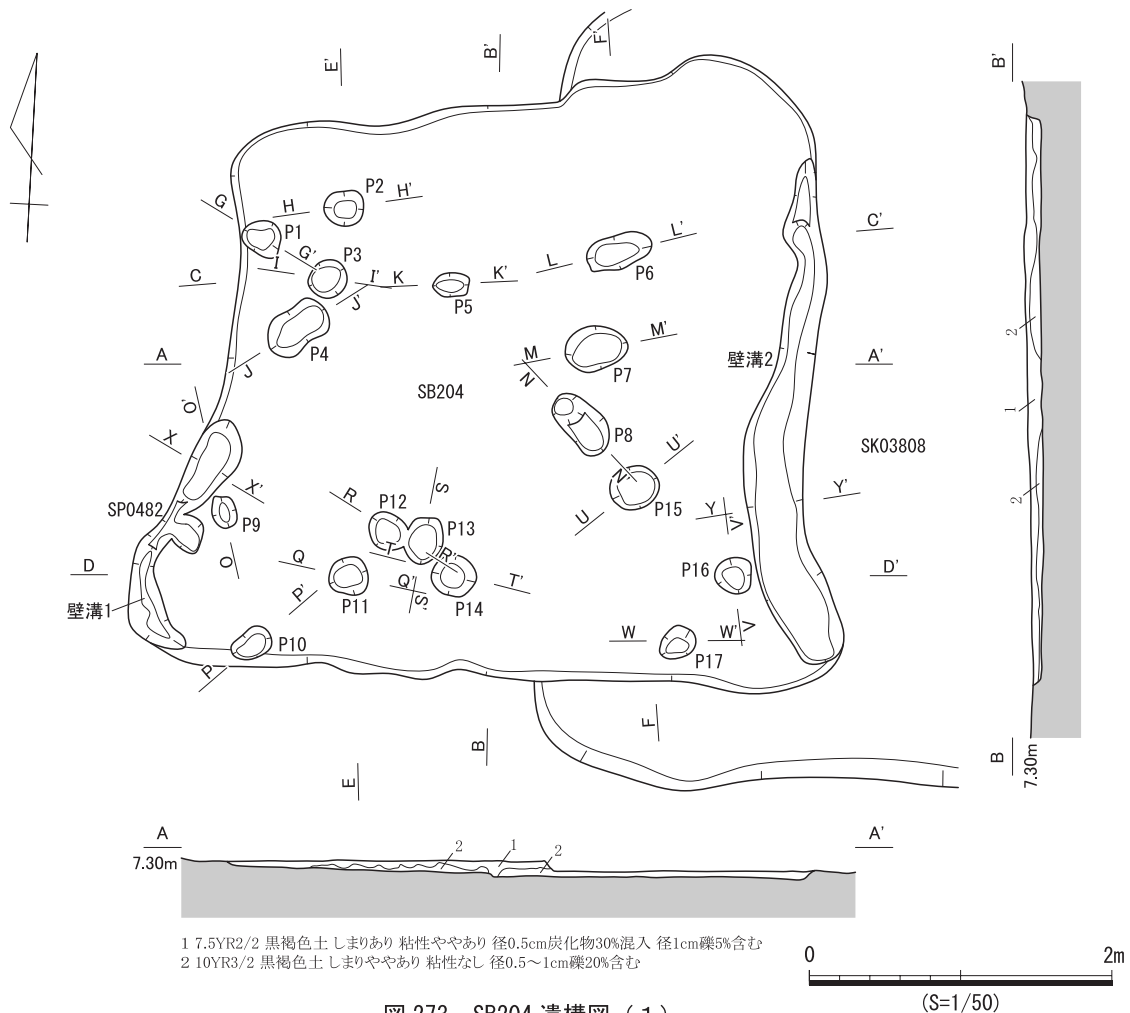


図 273 SB204 遺構図 (1)

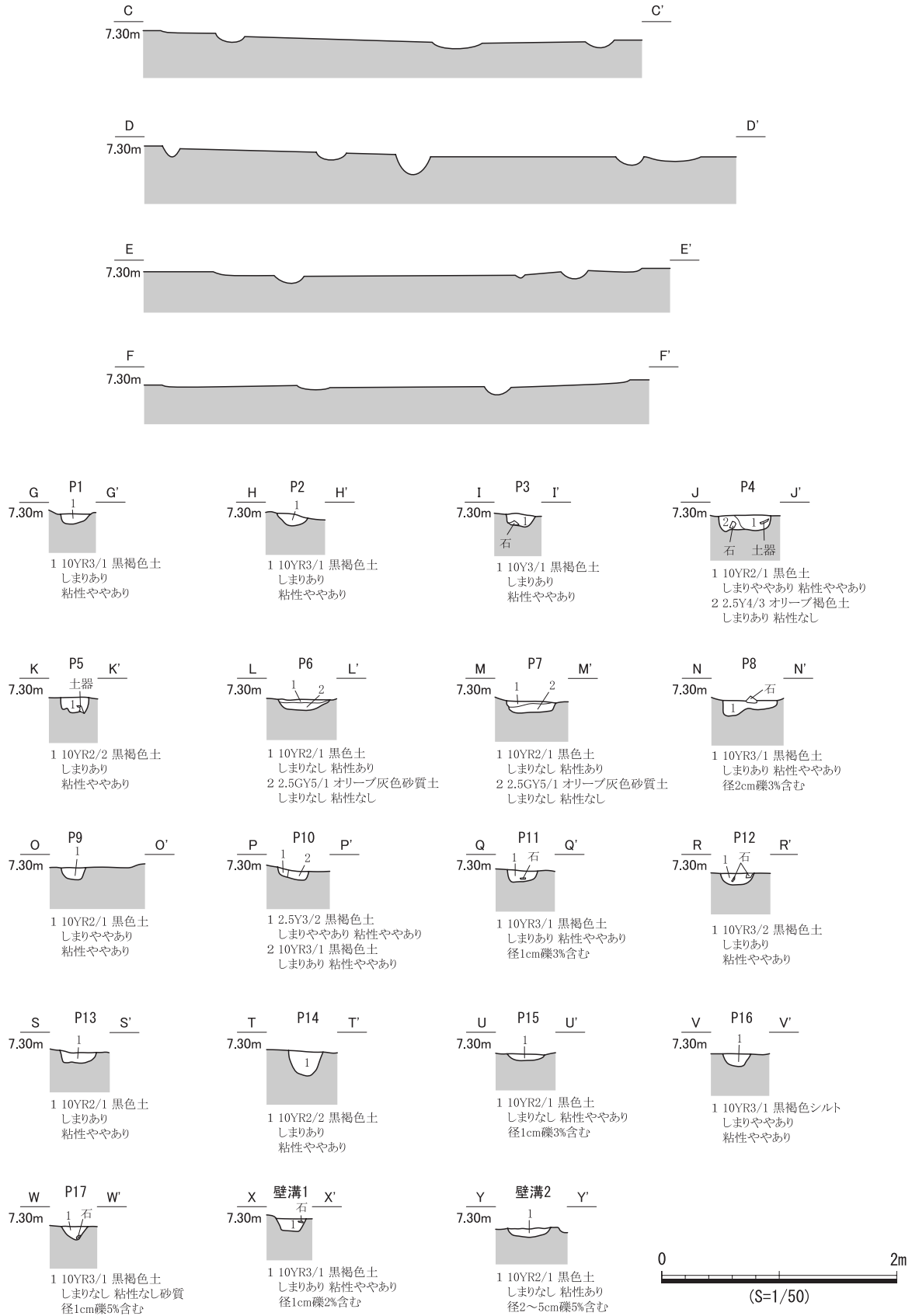


図 274 SB204 遺構図 (2)

出土遺物 873はIV期壺の胴部。直線文の間に扇形文が認められ、その下位には刺突文が認められる。874～876はVIII期の甕D3類。874は口縁端部がやや肥厚する。876は脚部で外面には煤が付着し、端部は欠損している。

時期 柱穴と断定できないが、P4が本住居跡に伴う可能性が高いと考え、その出土遺物の時期からVIII期と考えられる。



図 275 SB204 遺物実測図

SB205 (遺構：図 277、遺物：図 276)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域、SZ220の方台部内に位置する。西壁においてSK03685に切られ、SB206を切る。

形状 南北長約4.2m、東西長約4.3mのほぼ方形を呈する。各辺とも直線的だが、北辺のみやや北側へ向かう。壁面傾斜は緩やかで、深さは約0.1mである。

埋土 2層に分層した。1層は礫が混じり、2層は地山ブロックが混じる。埋土中に混入物が多いことや、層界の凹凸が著しいことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上で約0.1m～0.5m程度の小穴17基を確認した。これらの小穴は北西隅部を除いて各隅部に偏るが、いずれも深さ約0.1mで明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,047点、小穴から土器76点が出土した。その時期はVI期～VII期にあたり、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 877、878はVI期の甕D1b類で、口縁部が短く直立する。879はVI期後半～VII期の高坏G3b類。口縁部上半のみに多条沈線を施文する。880はVII期高坏G3類の脚部。少条の多条沈線を施文し、その下に山形文と刺突文を施文する。

時期 VI期～VII期のSB206を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

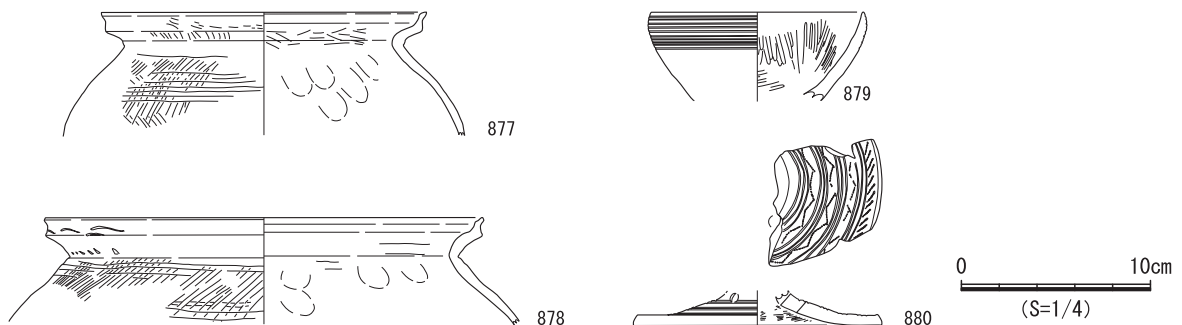


図 276 SB205 遺物実測図

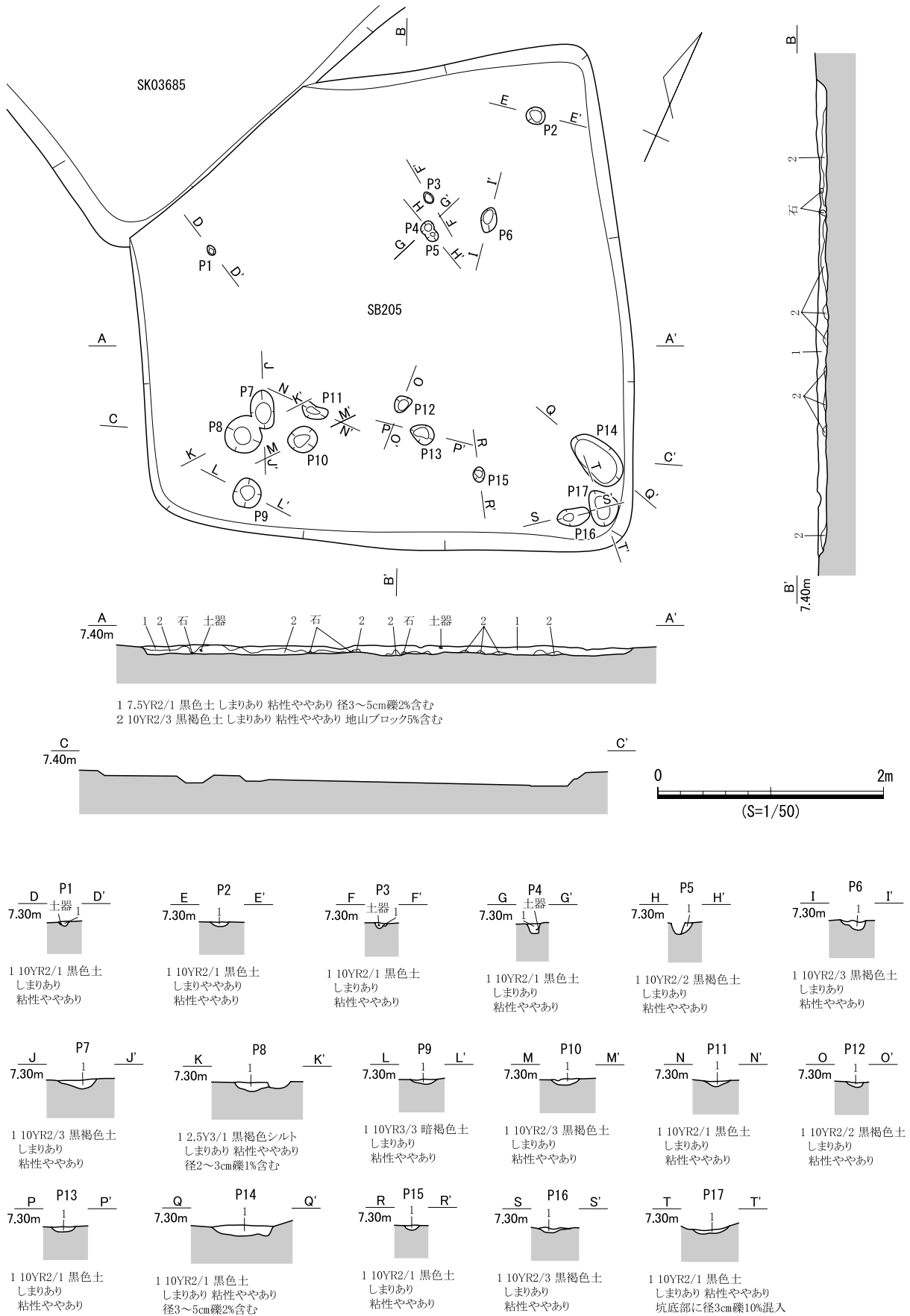


図 277 SB205 遺構図

SB206 (遺構：図278、遺物：図279)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域、SZ220の方台部及び周溝南東隅部に位置する。南壁においてSK03685、SB205に切られる。

形状 南北長は不明だが、東西長は約5.1mである。残存する北辺、東辺、西辺はいずれも直線的である。壁面傾斜は緩やかで、深さは約0.1mに満たないほど浅い。

埋土 礫混じりの黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上で直径、深さとも約0.1mの小穴を3基確認した。いずれも明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,781点、小穴から土器5点が出土した。多くがVI期～VII期にあたるが、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 881は頸部がわずかに直立してから口縁部が開くVI期～VII期の壺B2b類。882はVI～VII期の鉢F類。口縁部が内湾する。

時期 VIII期のSK03685に切られることと出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

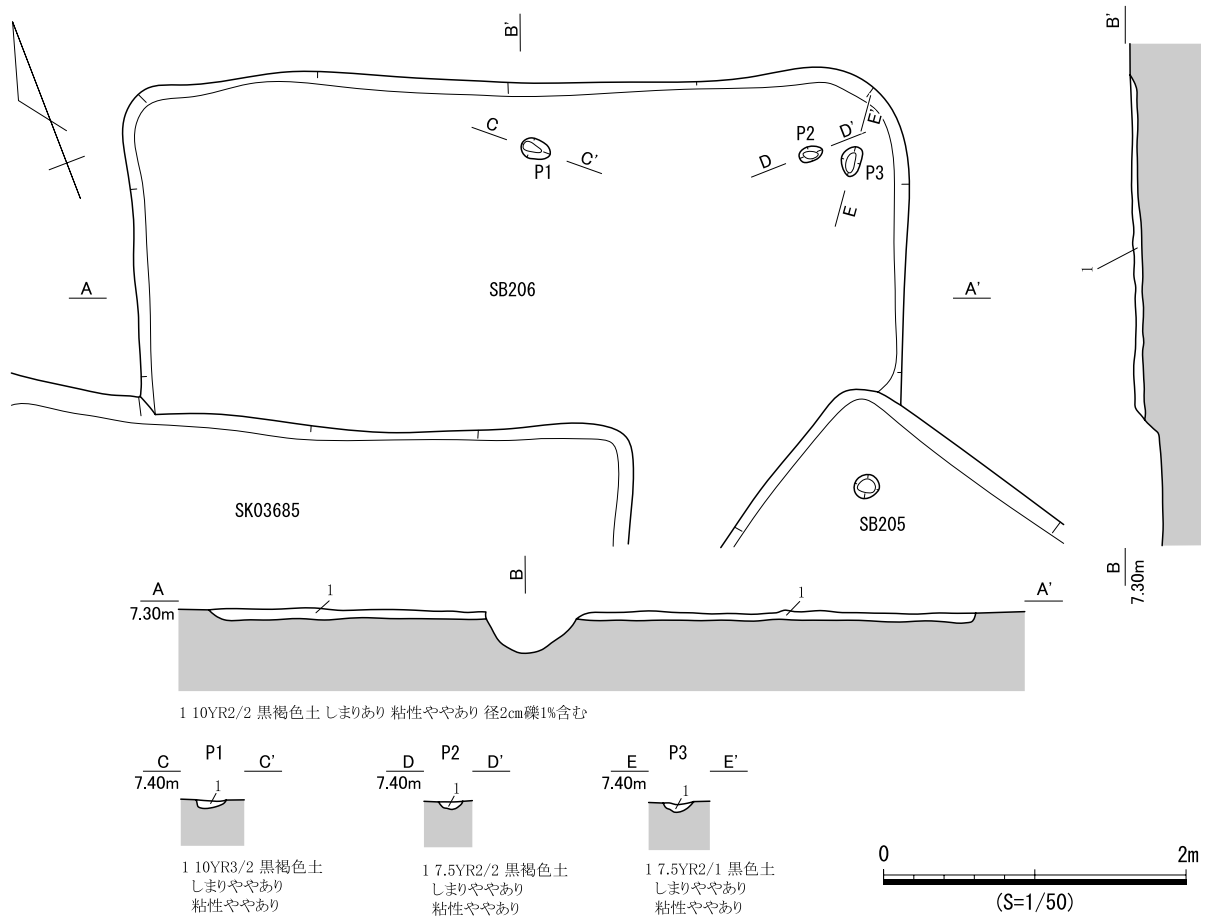


図278 SB206 遺構図

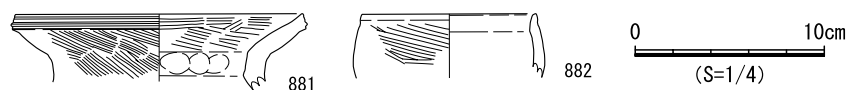


図279 SB206 遺物実測図

SB207 (遺構：図 281、遺物：図 280)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域、SZ220の方台部内に位置する。平面形の北東側が残存するのみで、大半はSB205とSB206に切られる。

形状 平面形の大半が滅失しているため、大きさや形状は不明である。残存している北壁と東壁の壁面傾斜は緩やかで、深さは0.1m程度に満たないほど浅い。

埋土 黒色土の単層である。埋土中に炭化物や礫が混入しており、竪穴住居跡の重複関係で最も古い段階の構築であることから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床は認められなかった。床面上で5基の小穴を確認した。壁面沿いにP1～P4が分布し、大きさが様々で明瞭な柱痕跡は認められなかった。P5は直径約0.5mとやや大きな小穴で、深さは0.22mで底面は丸い。検出面中央にて遺存状況の良い甕と、南側で長さ約0.1mの角礫を検出した。遺構の規模は長軸0.48m、深さ0.22mであり、埋土はしまりのある黒色土が単層で堆積する。底面は南東隅部が最も深く、北西壁面にて一段の平坦面を有する。調査中は地床炉の可能性を検討したが、焼土の堆積や被熱面は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器352点、小穴から土器157点、石器類2点が出土した。土器の多くはVI期～VII期にあたる。P5上面からは遺存状況のよいVI期のS字甕A類(883)と他に甕(884)が出土した。出土状況からみて883が本住居跡の時期を示す土器と考えられる。

出土遺物 883はVI期甕D1類。口縁部が強く屈曲して短く直立し、端部上端がわずかに外方へ引き出される。胴部には頸部直下からヨコハゲが認められる。脚部は裾端部が内傾するが、折り返しは認められない。884はVI期～VII期の甕B3類。口縁部が直線的に立ち上がり、端部は断続的なナデによる凹凸が認められる。885はVI期～VII期の甕脚部。低脚で裾端部が丸みをおびる。886はVII期高坏C類。坏底部に段差が認められる。887はVII期高坏D類の脚部。坏部底部が狭く、透孔が小ぶりである。888はVI期～VII期の手捏ね土器。口縁部を欠損する。外面は縦方向に丁寧に整形した痕跡が認められる。

時期 出土遺物にはVII期の土器が含まれるが、P5上面の出土土器(883)の時期と、VI期～VII期のSB205とSB206に切られることから、VI期と考えられる。

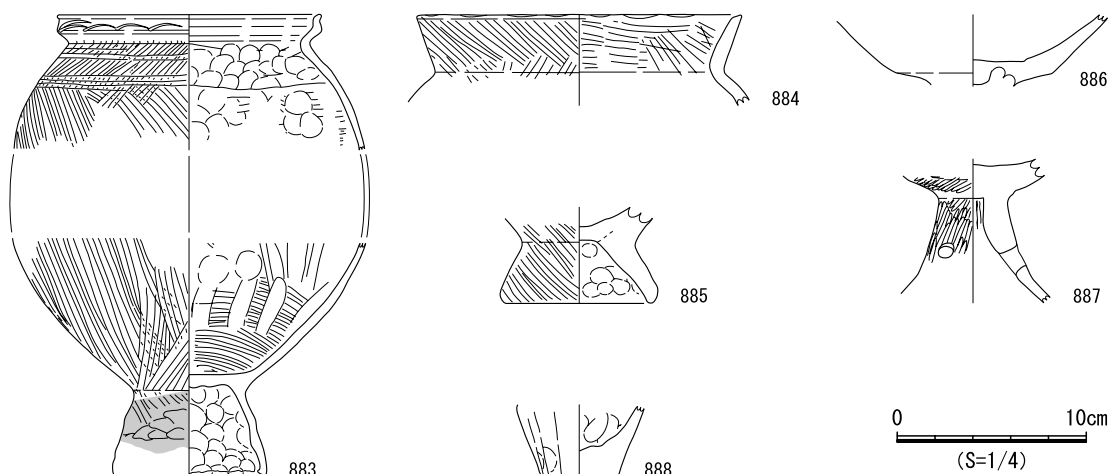


図 280 SB207 遺物実測図

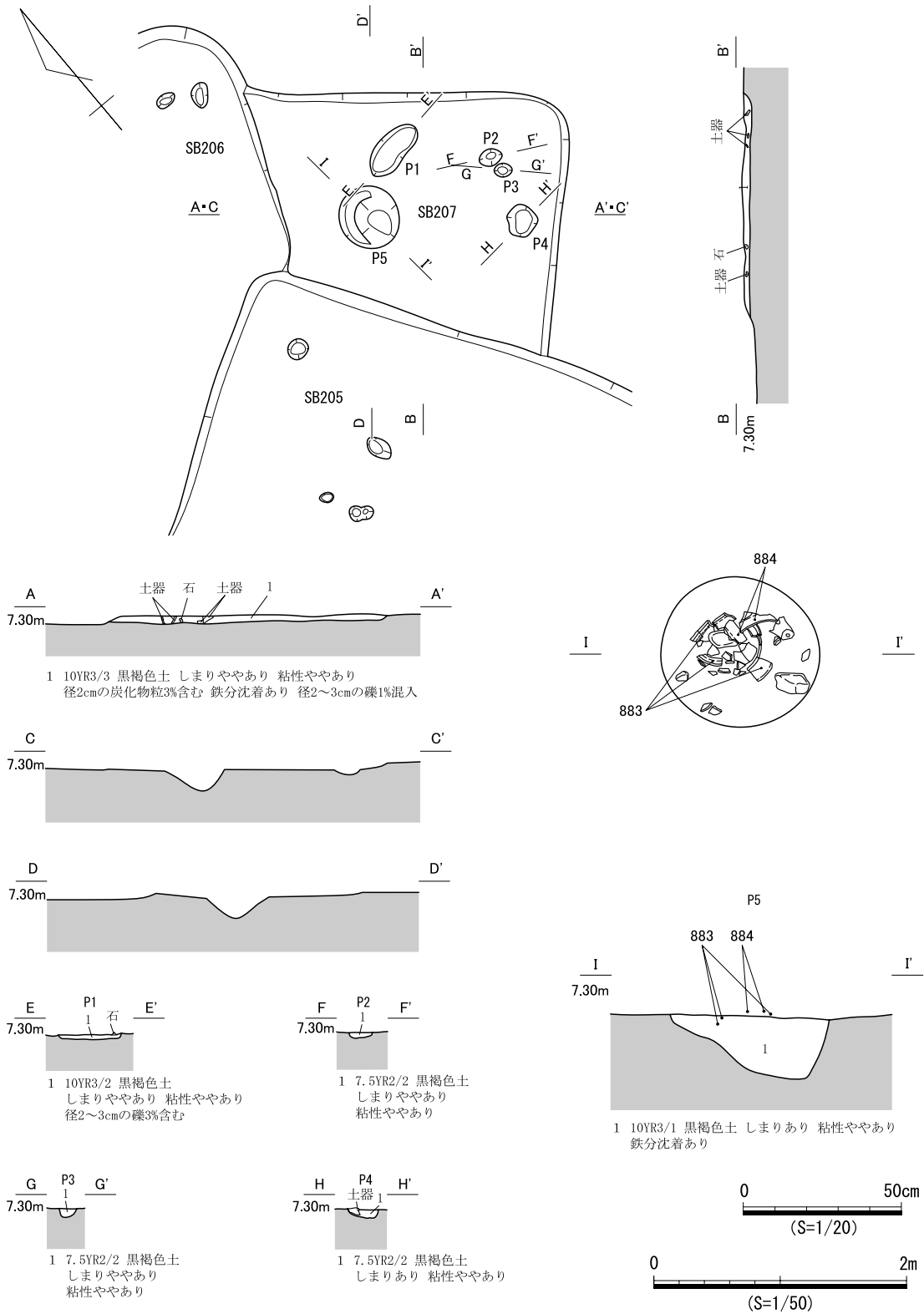


図 281 SB207 遺構図

SB208 (遺構：図 282・283、遺物：図 284)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域、SZ220の方台部内の北東隅部に位置する。南半分をSB206に切られ、全形は不明である。

形状 北半分が残存する。東西長は北東隅部、北西隅部間で約4.5mをはかるが、東辺が東側へ広がり、SZ220との重複部分付近で約4.9mとなる。北辺は弧状を呈し、不整形である。深さは0.1mに満たないほど浅く、壁面傾斜も緩やかである。

埋土 炭化物、礫、地山ブロックが混じる黒褐色土が単層で堆積する。地山ブロックが混じることから、床面形成土の可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面や貼床は認められなかった。床面上で直径約0.2mの小穴を13基確認した。いずれも深さ0.1mに満たない浅いものが多く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。P4、P13はそのなかで直径約0.4mと他より大きい小穴である。P4は深さ約0.1mで底面は丸い。P13は位置的に炉跡の可能性があるが、焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器992点、小穴から土器87点が出土した。その大半はVI期～VII期の土器片である。なお、P4からVII期壺(889)が出土した。

出土土器 889はVII期壺A類の胴部。頸部付近に突帯が貼付され、その下に直線文と山形文を施文する。890はV期～VI期の鉢B類。口縁部を欠損する。891はVII期高坏D5類。内面には3帯の少条の多条沈線を施文し、その間に連弧文を施文する。892はVII期高坏D類の脚部。

時期 出土遺物にはVI期のものが含まれるが、P4出土土器(889)がVII期にあたり、SB206との重複関係も矛盾しないことから、VII期と考えられる。

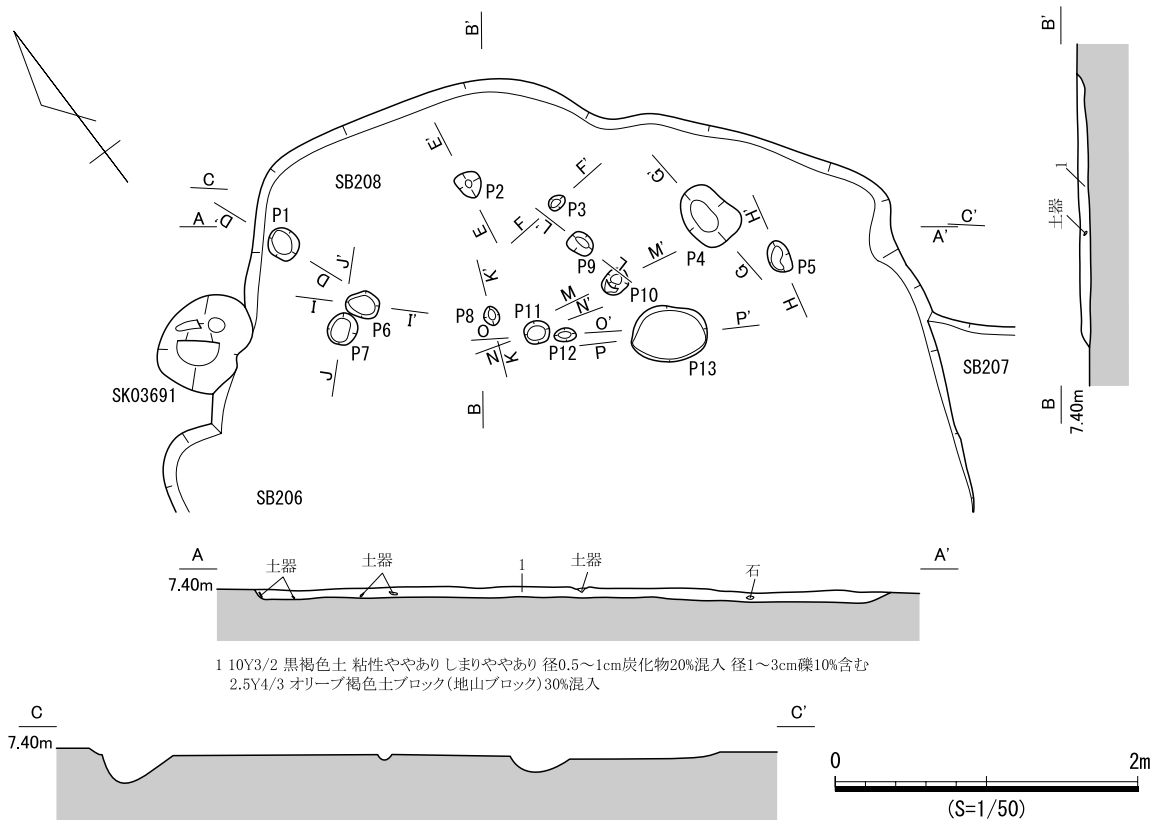


図 282 SB208 遺構図 (1)

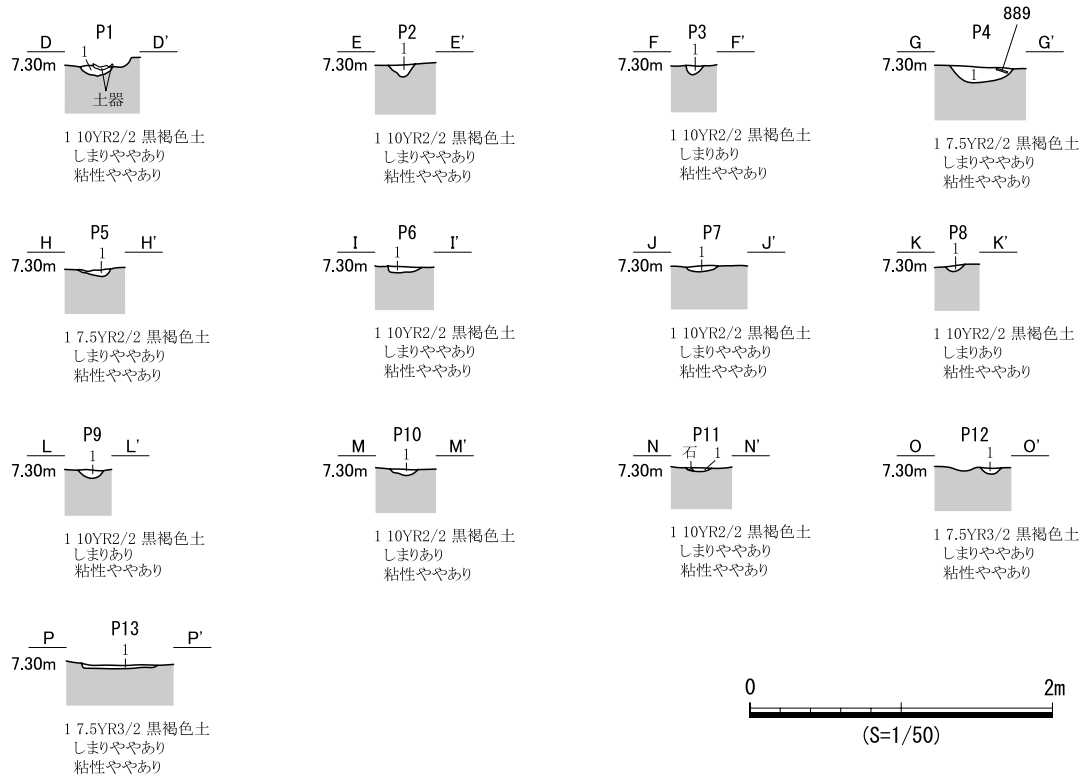


図 283 SB208 遺構図 (2)

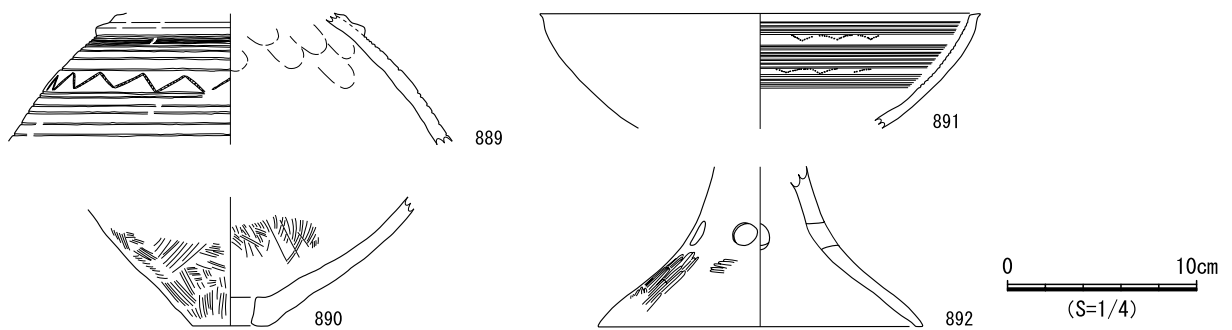


図 284 SB208 遺物実測図

SB209 (遺構：図 285・286、遺物：図 287)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域、SZ220 南溝の南側に隣接する。北壁を SB205 に切られるが、底面付近の壁面が一部残存するのが認められた。

形状 南北長約 5.0 m、東西長約 4.5 m で南北に長い長方形を呈するが、東西の両壁のそれぞれの隅部間は約 4.5 m である。壁面傾斜は緩やかで、深さは約 0.1 m である。

埋土 礫混じりの黒色土が堆積し、中央付近にのみ砂質土がブロック状に堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上から直径約 0.2 m の小穴を 23 基確認した。いずれも底面が丸く、深さは約 0.1 m と浅いものばかりで、明瞭な柱痕跡は認められなかった。P1 のみ直径 0.79 m と他より大きい小穴だが、特徴的な状況は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器 2,081 点、石器類 1 点、小穴から土器 117 点が出土した。その多くは VI 期～VII 期にあたる。P23 より V 期高坏 (895) が出土した。

出土遺物 893、894はⅤ期～Ⅶ期の壺A3類。893は3個1組の円形浮文が認められる。894は内面に段をもって口縁部が外方へ強く開き、端部を上下に拡張する。内外面に赤彩が認められる。895はⅤ期高坏Ⅰ類の脚部。直線文と刺突文を施文する。896は土製の紡錘車。胎土はⅤ期～Ⅶ期に類似する。

時期 出土遺物の時期はⅤ期～Ⅶ期であり、Ⅴ期～Ⅶ期のSB205に先行する。そのため、現段階では本遺構の時期をⅤ期～Ⅶ期と考える。

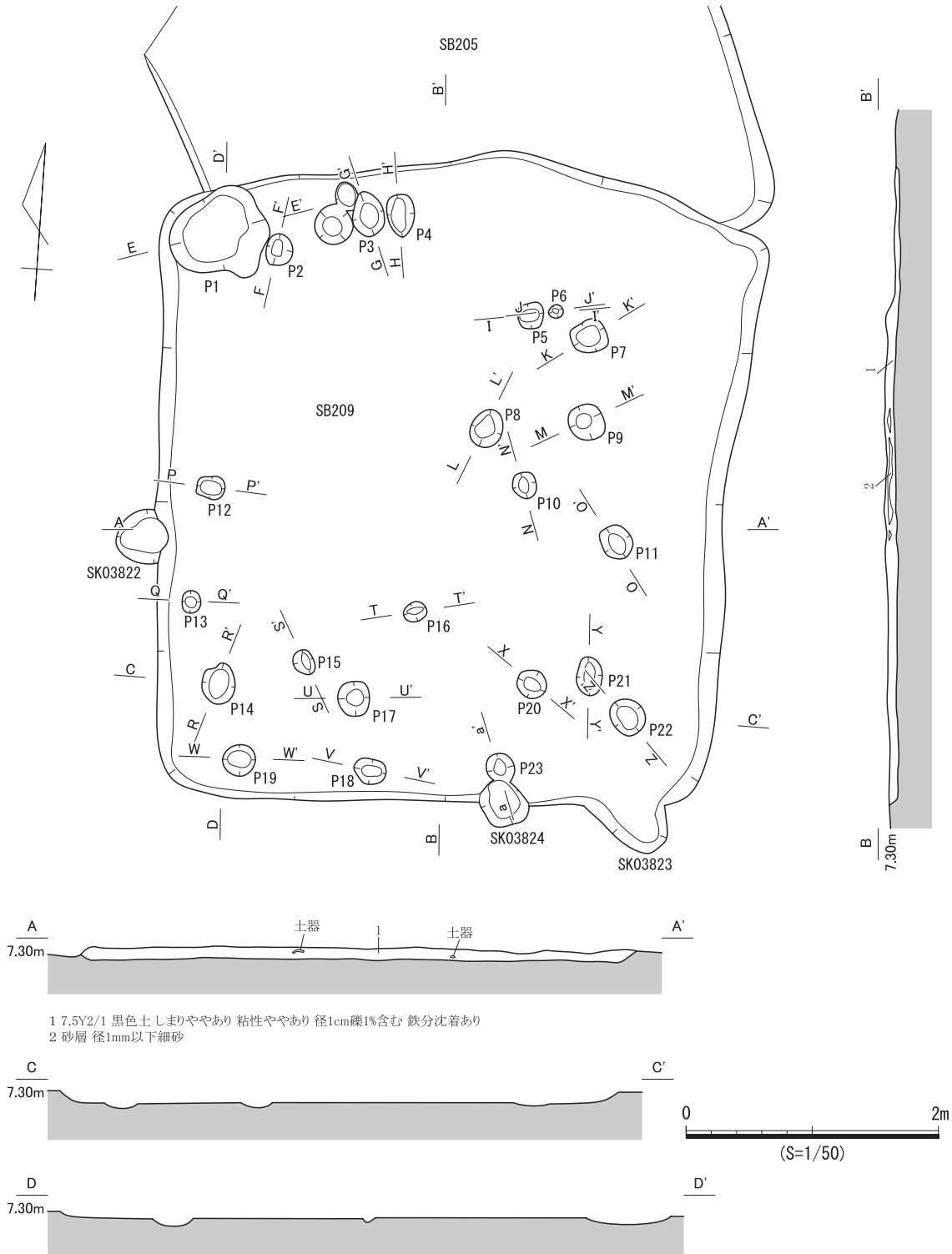


図 285 SB209 遺構図 (1)



図 286 SB209 遺構図 (2)

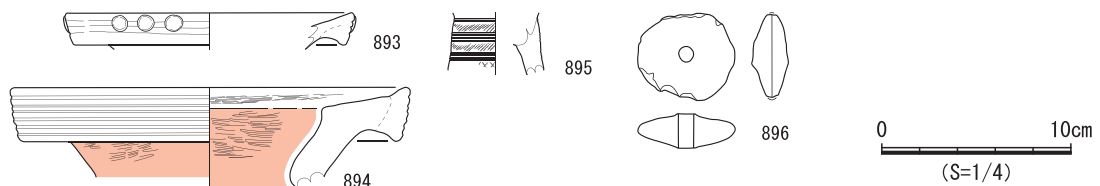


図 287 SB209 遺物実測図

SB210 (遺構：図 288・289、遺物：図 290)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。VI層上面で検出し、検出面に多数の礫が露出した状態であったため、平面形は不明瞭であった。なお、南側を攪乱によって破壊され、南側に位置するSB211、SB213、SB214との重複関係は不明である。

形状 残存する部分は全体の3分の1程度と考えられる。北西隅部と北東隅部が確認でき、東西長約5.3mを測る。西辺は直線的で、北西隅部はやや丸みをもつ。北辺は不整形である。深さは0.1mをやや上回り、周囲の竪穴住居跡と比べると深い。北壁面は急傾斜だが、西壁面は緩やかである。

埋土 3層に分層したが、大半が2層の黒色土である。礫混じりの3層黒褐色土が北壁側のみに堆積する。2層は層厚があることや、周辺の遺構と重複が想定できることから、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。西壁際で壁溝を確認した。床面上で直径0.1m～0.5mの小穴を16基確認した。その多くは深さが0.1mにも満たず、浅くて底面が丸い小穴である。そのうち、深さが0.1mをこえて底面が平坦な小穴としてP2、P11、P14、P16がある。P11は深さが0.2mと深く、P14は1層の堆積が柱痕跡と考えられ、平面的な位置関係も加味すると、P11とP14が柱穴と考えられる。壁溝は長さ約1.5mにわたって検出した。底面は平坦で、掘形はしっかりしているが、やや浅い。

遺物出土状況 埋土中から土器1,135点、小穴から土器19点、壁溝から土器1点が出土した。土器の多くはVI～VII期であり、検出面及び床面よりやや浮いた状態で遺存状況のよい土器片が出土した。上層出土は甕(897)であり、遺構の中央付近で内面を上にして垂円礫とともに出土した。床面付近出土は甕脚部(898)、高坏(900、902、903)であり、898は脚端部を北東に向けて、高坏片の多くは内面を上にして出土した。高坏はVII-2期にあたることから、VII-2期のまとまりある土器と考えられるので、本住居跡の時期を示すと考えられる。

出土遺物 897はVII期前半の甕C2類。口縁部がわずかに内湾し、端部は平坦面を形成するものの断続的なナデによる凹凸が認められる。898はVII期の甕脚部。低脚で裾部が内湾する。打ち欠きが認められる。899はV期～VI期の高坏H1類。口縁部が強く内湾する。900～904はVII-2期高坏C類。いずれも坏底径がVII-1期と比べるとやや縮小している。900は内面加飾のない資料。902は内面2分の1程度に多条沈線と山形文で施文する。下段2帯の直線文が上段に比べると2分の1程度の幅である。なお、SB216出土の高坏と接合した。901も902と類似するが、多条沈線が少条化して、その分文様帯が多段化して山形文、直線文が1帯多い。口縁端部にはわずかに内傾する面が認められる。904は多条沈線を2帯施文して、その間に山形文を施文する。905は902と文様構成が類似するが、口縁部の開きが強くVII期高坏D4類と考えられる。VII-3期と比べると坏部の形状がC類との中間形状である。以上のことから高坏C・D類についてはVII-2期の特徴を示す。

時期 V期～VI期の土器がわずかに含まれるが、上層出土遺物(897)、床面付近出土遺物(898、900、902、903)がVII-2期のまとまりある土器であることや、その他の出土土器も同時期であるものが多いことから、VII-2期と考えられる。

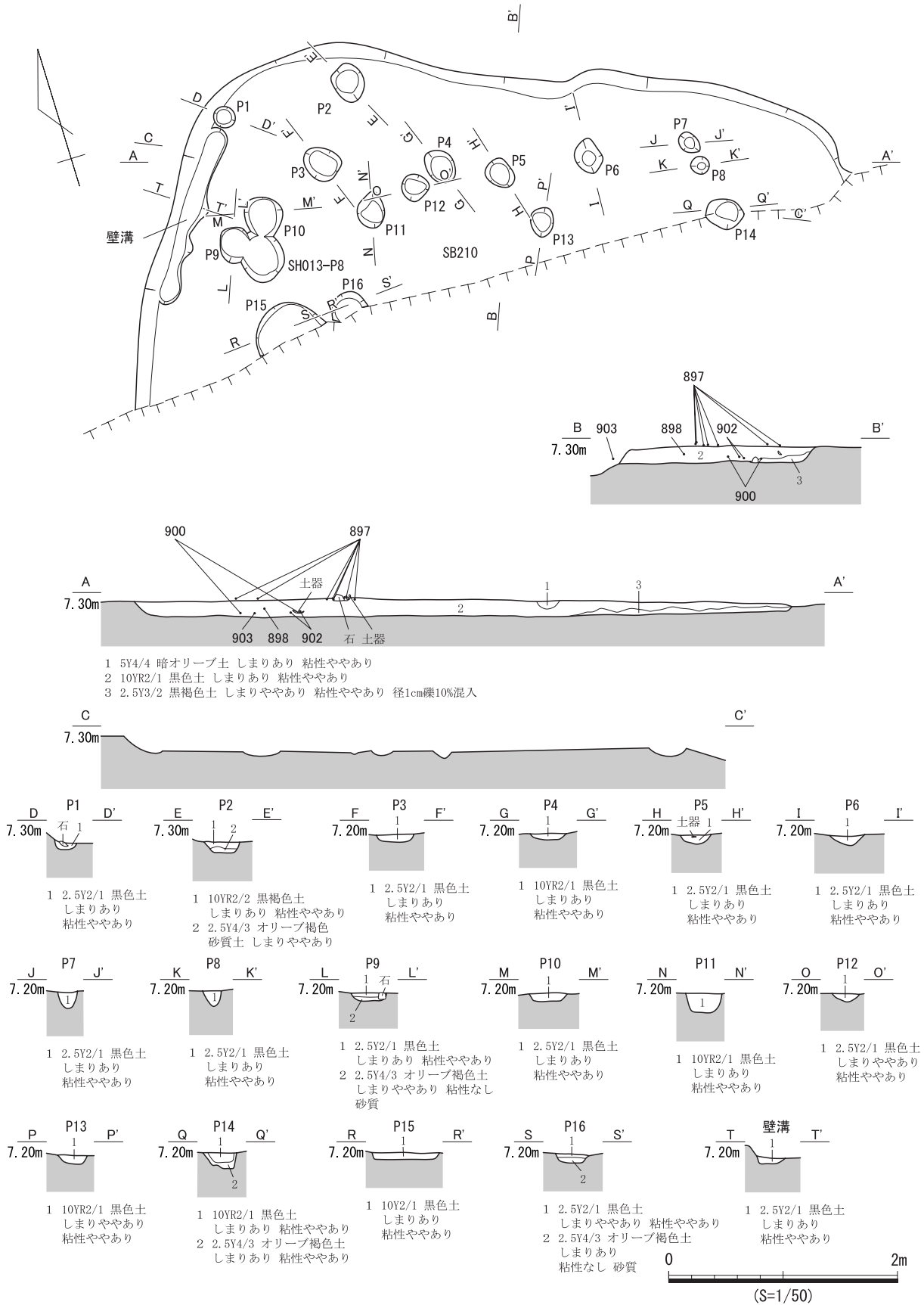


図 288 SB210 遺構図 (1)

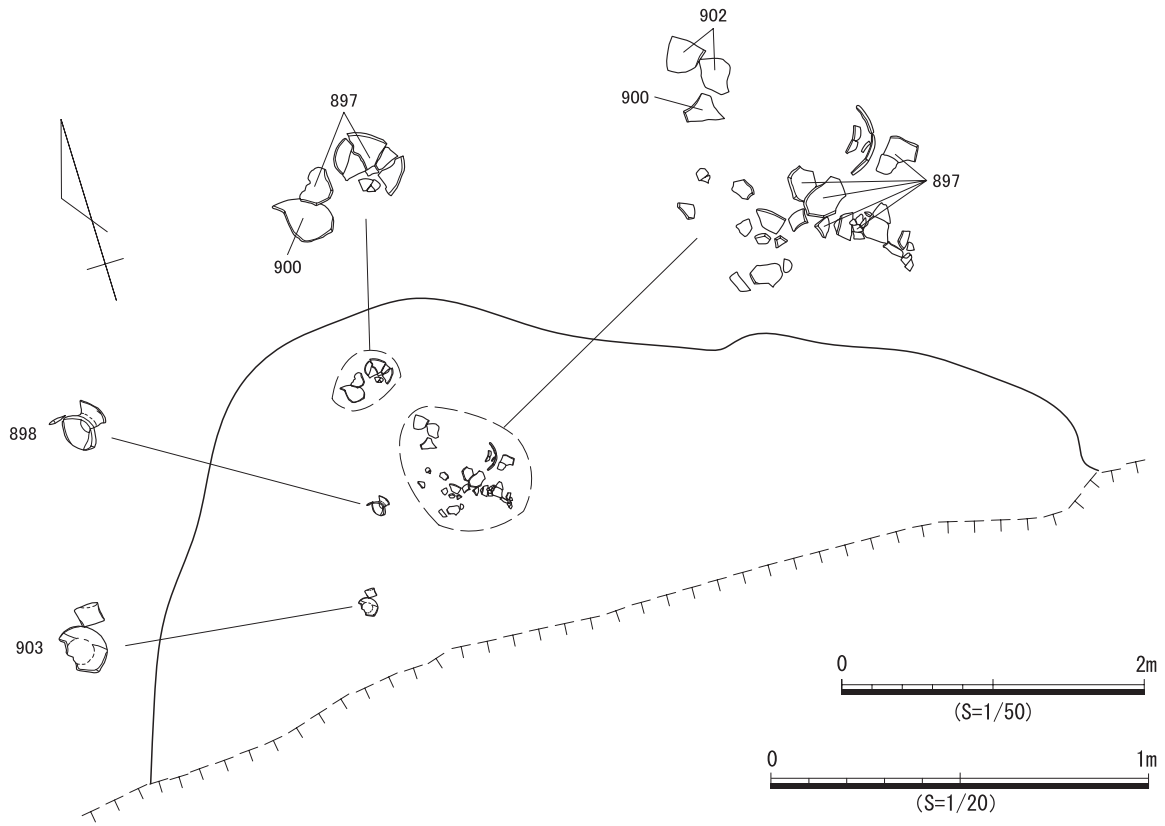


図 289 SB210 遺構図 (2)

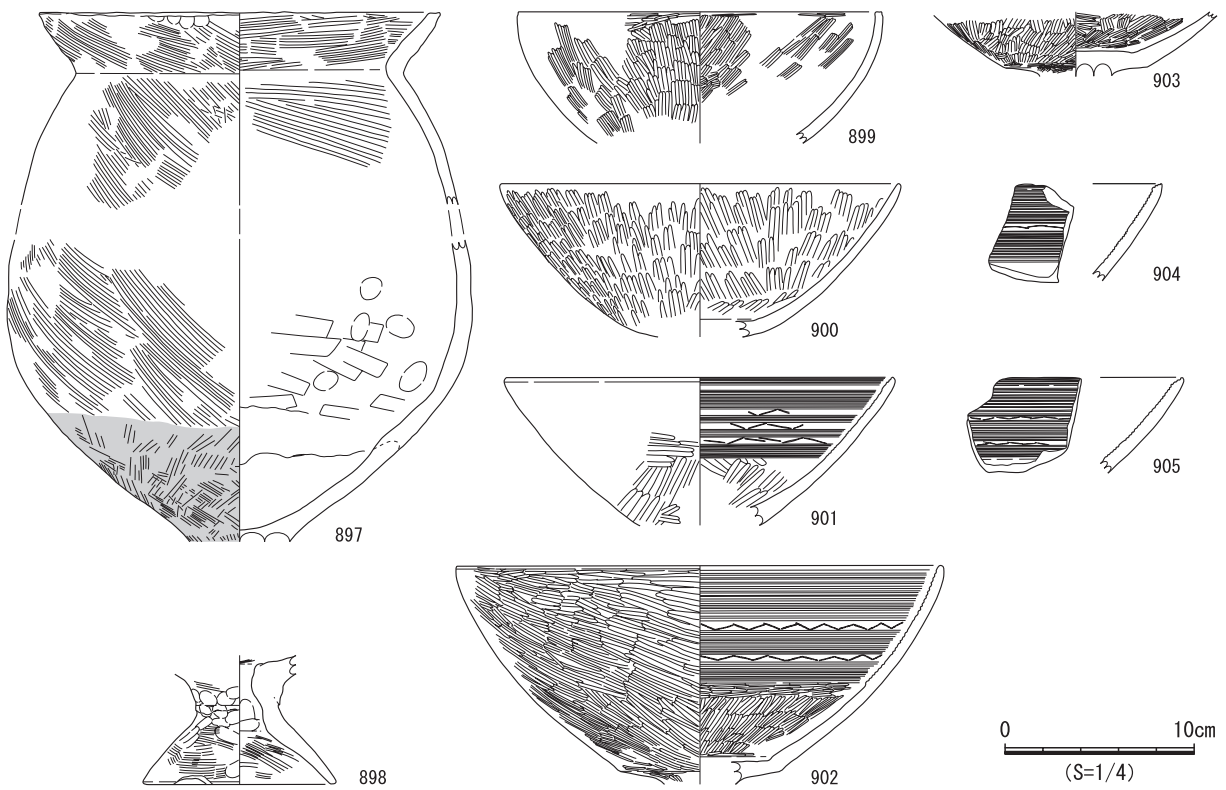


図 290 SB210 遺物実測図

SB211 (遺構：図 291)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北西側を攪乱によって破壊され、確認できた範囲は南東隅部付近のみであるが、平面形は明瞭であった。

形状 確認できた東辺、南辺ともに比較的直線的である。深さは0.1mに満たないほど浅い。

埋土 礫混じりの黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。南壁に沿う壁溝と直径約0.2mの小穴を8基確認したが、いずれも深さ約0.1mの浅いものばかりであった。一部に底面が比較的平坦な小穴も認められるが、明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器537点、小穴から土器5点が出土したが、いずれも摩耗したVI期～VII期小片ばかりであり、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 出土遺物の年代から、VI期～VII期と考えられる。

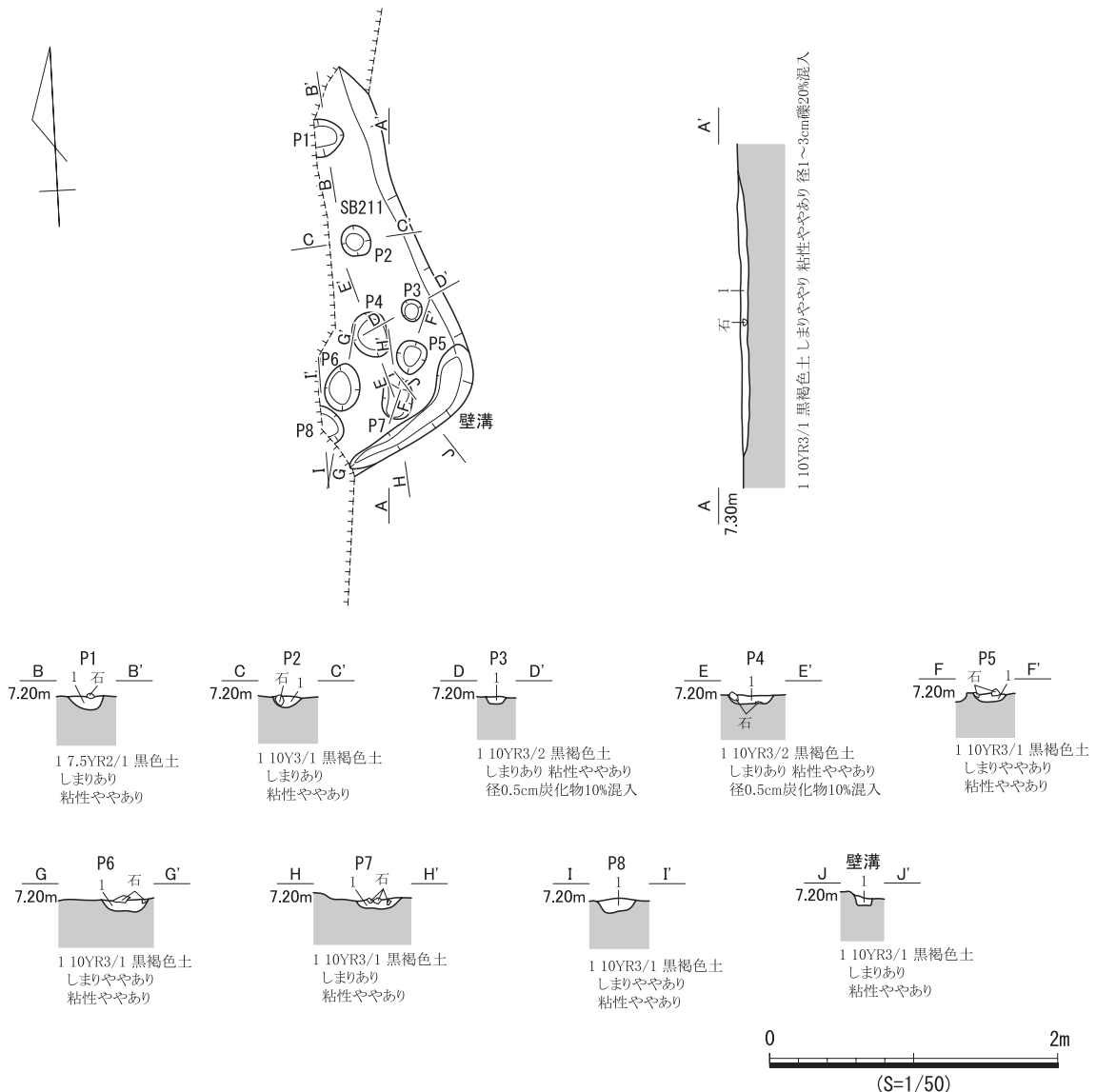


図 291 SB211 遺構図

SB212 (遺構：図292、遺物：図293)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側でSB213を切る。中央付近は埋土を攪乱により削平されているが、床面にまで削平が及んでおらず、床面はその全形を確認できた。

形状 南北長約5.1m、東西長約3.5mを測り、隅部がやや丸く南北に長い隅丸長方形を呈す。南辺は直線的で、東西両辺も南半分では直線的だが、北半分では内側へ向きをかえ、東西幅が狭くなる。北辺は弧状で不整形である。深さは北壁際で0.3mと周辺の竪穴住居跡のなかで最も深い。また、壁面傾斜も急である。

埋土 4層に分層した。壁面付近から埋没が進行し、礫混じり1層が厚く堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を8基確認した。平面的に規則性は認められず、北半分では小穴を確認できなかった。深さは0.1mに満たない浅い

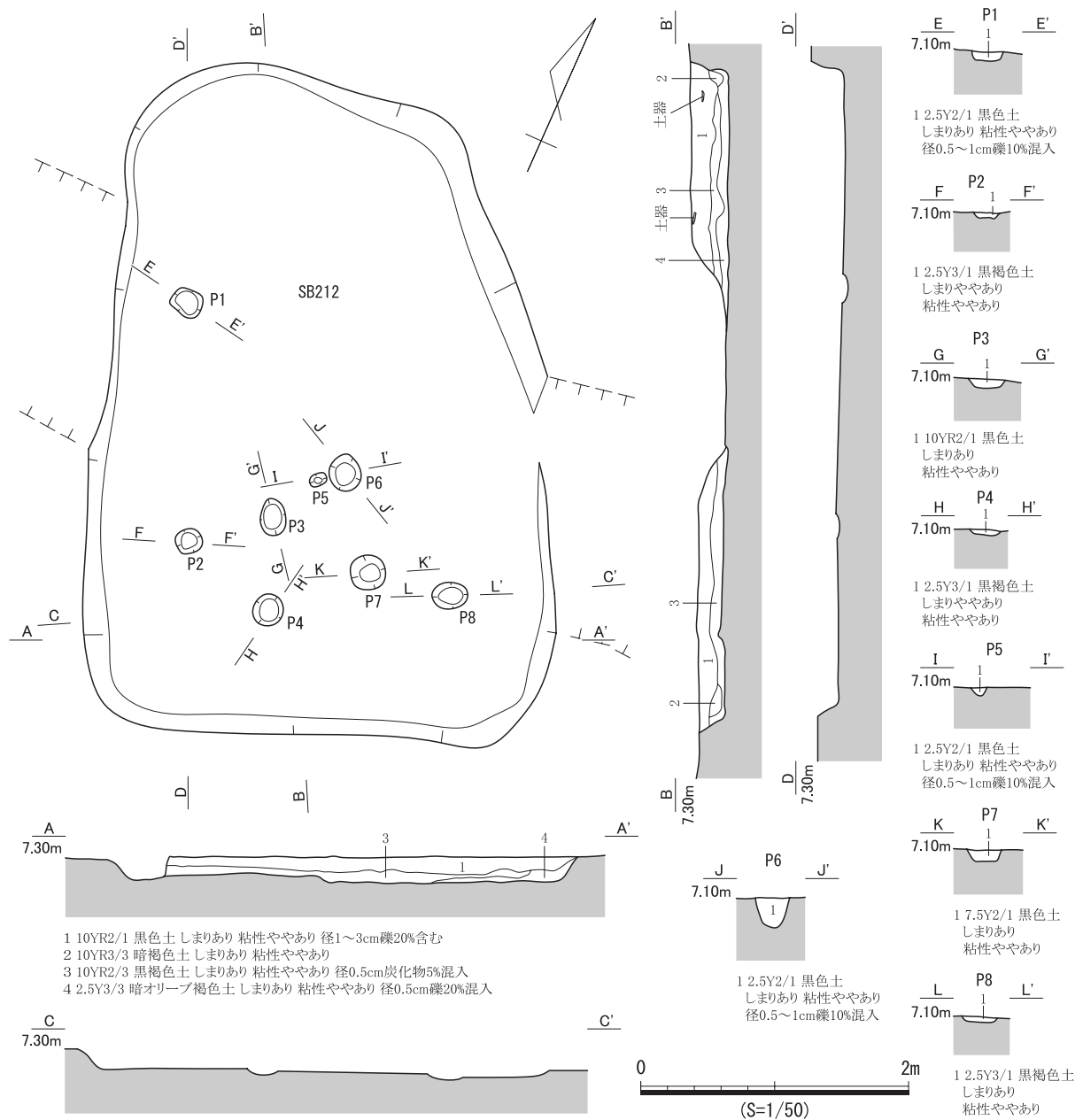


図292 SB212 遺構図

小穴ばかりが認められるなか、P6のみが深さ0.22mとやや深い小穴であった。P6と対応するような小穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,511点、小穴から土器10点が出土した。大半がVI期～VII期の土器であるが、VII期のものがやや多い。

出土遺物 906はVII期の壺H2b類。内湾する口縁部に多条沈線、山形文、刺突文で施文する。907はV期～VII期の壺胴部で外面に細い線による線刻が認められる。908は口縁部がわずかに直立して、沈線がめぐる。V期～VII期の甕A3類。909はVI期～VII期鉢A4b類。口縁部が外反し、片口状となる部位が認められる。910はVI期後半～VII期の高坏G類脚部。坏底部の段がわずかに認められる。

時期 VII期のSB213を切ることと、出土遺物のうちVII期の土器がやや多いことから、VII期と考えられる。

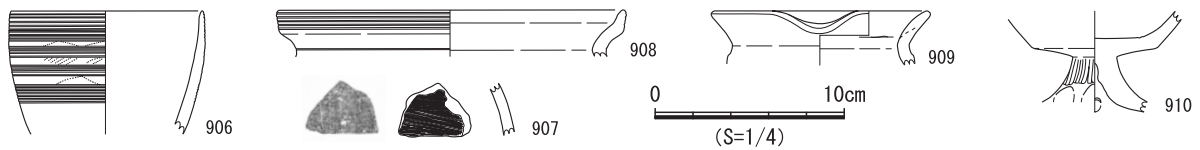


図 293 SB213 遺物実測図

SB213 (遺構：図 295、遺物：図 294)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB212に東側を切られ、南西側でSB214を切られる。北半分は攪乱によって失われ、検出範囲は南側が主である。床面上には壁溝と考えられるL字状の溝が認められ、新旧関係は壁溝3が最も新しく、壁溝1が最も古い。

形状 確認できた西辺、南辺とも直線的である。西壁はほとんど認められず、北壁の高さはわずか0.05m程度である。

埋土 2層に分層した。大半は炭化物の混じる黒褐色土で、一部に砂質土の堆積が認められた。

床面 床面は硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。壁溝が3条認められ、壁溝1・2は別の竪穴住居跡の壁溝の可能性が高い。壁溝3は本住居跡の掘形に沿っている。そのほか小穴を11基確認した。別の竪穴住居跡の小穴を含む可能性があるが、本住居跡の床面として同一面で検出したため、明確には分離できない。また、壁溝1・2と関連して規則性のある配置も認められない。小穴の大きさは直径約0.2m～0.4mで、深さも様々である。そのうち、深いもの(P3～P5、P8、P9、P11)については柱穴の可能性もあるかもしれないが、定かでない。

遺物出土状況 埋土中から土器231点、小穴から土器29点、壁溝から土器9点が出土した。多くはVI期にあたるが、一部にV期の土器(911)も認められた。P11からVI期後半高坏(912)が出土した。出土したV期の鉢(911)は、P11出土土器(912)より時期が先行し、重複するSB212、SB214との時期が合わないため、流入した土器と考えられる。

出土遺物 911はV期の鉢A1類。口縁部が強く屈曲して、端部は内傾する凹面を形成する。端部及び頸部直下の直線文の下に刺突文を施文する。底部はわずかな平底を呈

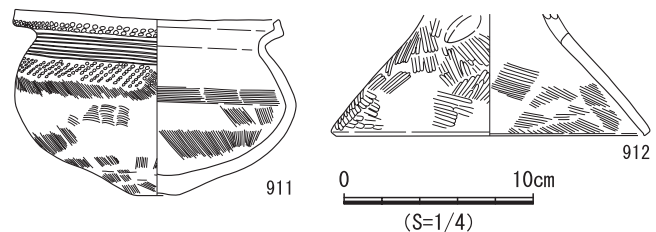


図 294 SB213 遺物実測図

する。912はVI期後半の高坏C類脚部。裾部がわずかに内湾する。

時期 VII期のSB212とVII期前半のSB214に切られることと出土遺物の時期から、VI期後半と考えられる。

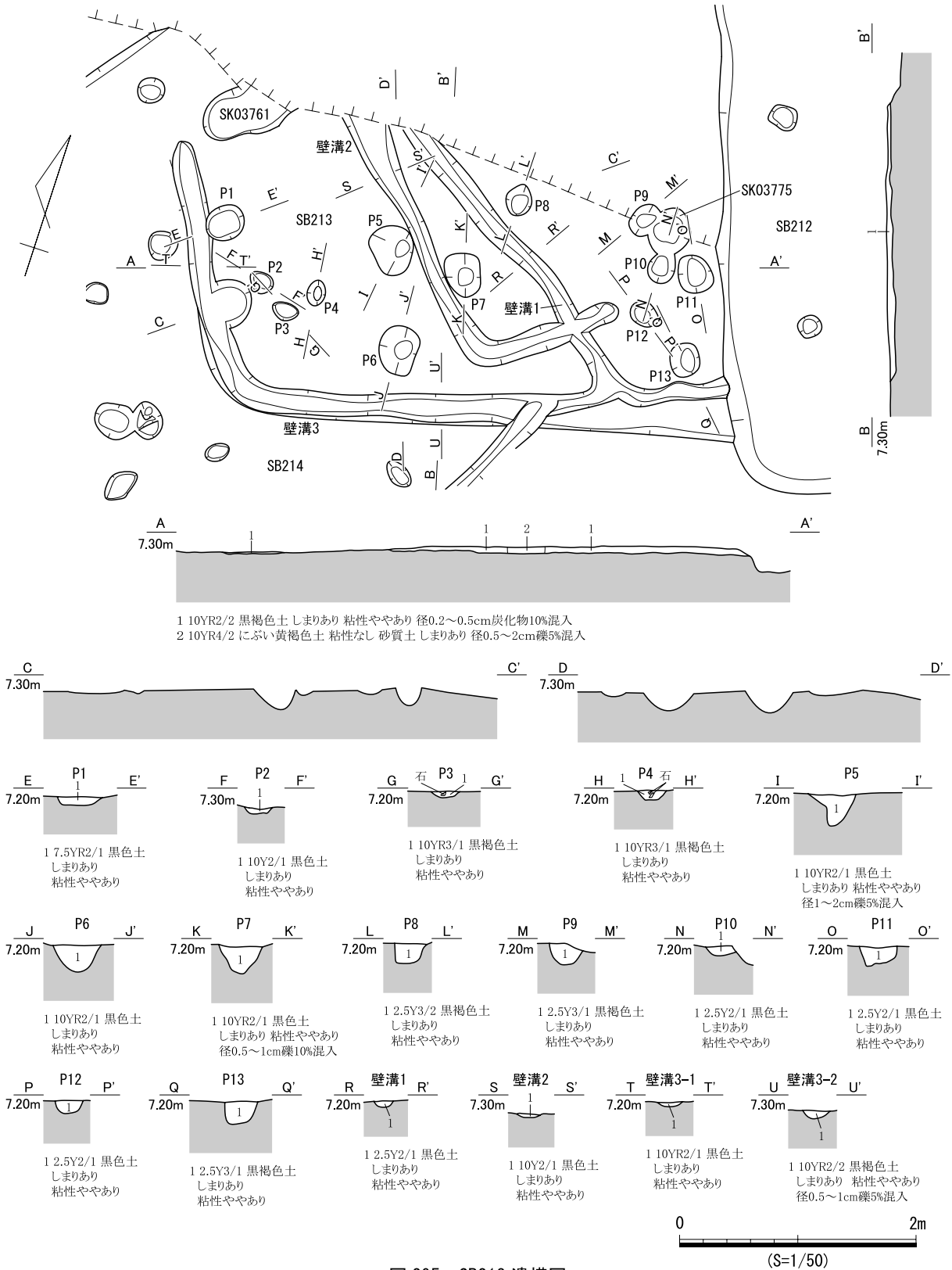


図 295 SB213 遺構図

SB214 (遺構：図 296・297、遺物：図 298)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、北東隅は攪乱により破壊され、北西隅でSB213を切る。

形状 南北長約4.6m、東西長約4.7mで、ほぼ正方形を呈す。壁面はほとんど認められず、北壁がわずかに残る程度である。

埋土 炭化物が混じる黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面は硬化面、貼床や炉跡は認められなかったが、床検出面が壁溝検出面より低いので、埋土は床面の整地土かもしれない。壁溝が西壁と東壁に沿って認められ(壁溝1・2)、壁溝2は南東隅部をまわって南壁にも伸びる。そのほか、直径0.2m~0.5mの小穴18基を確認した。いずれも、明瞭な柱痕跡は認められず、深さは約0.1mと浅い。そのうち、P2、P10、P16、P17の4基はやや深いが、

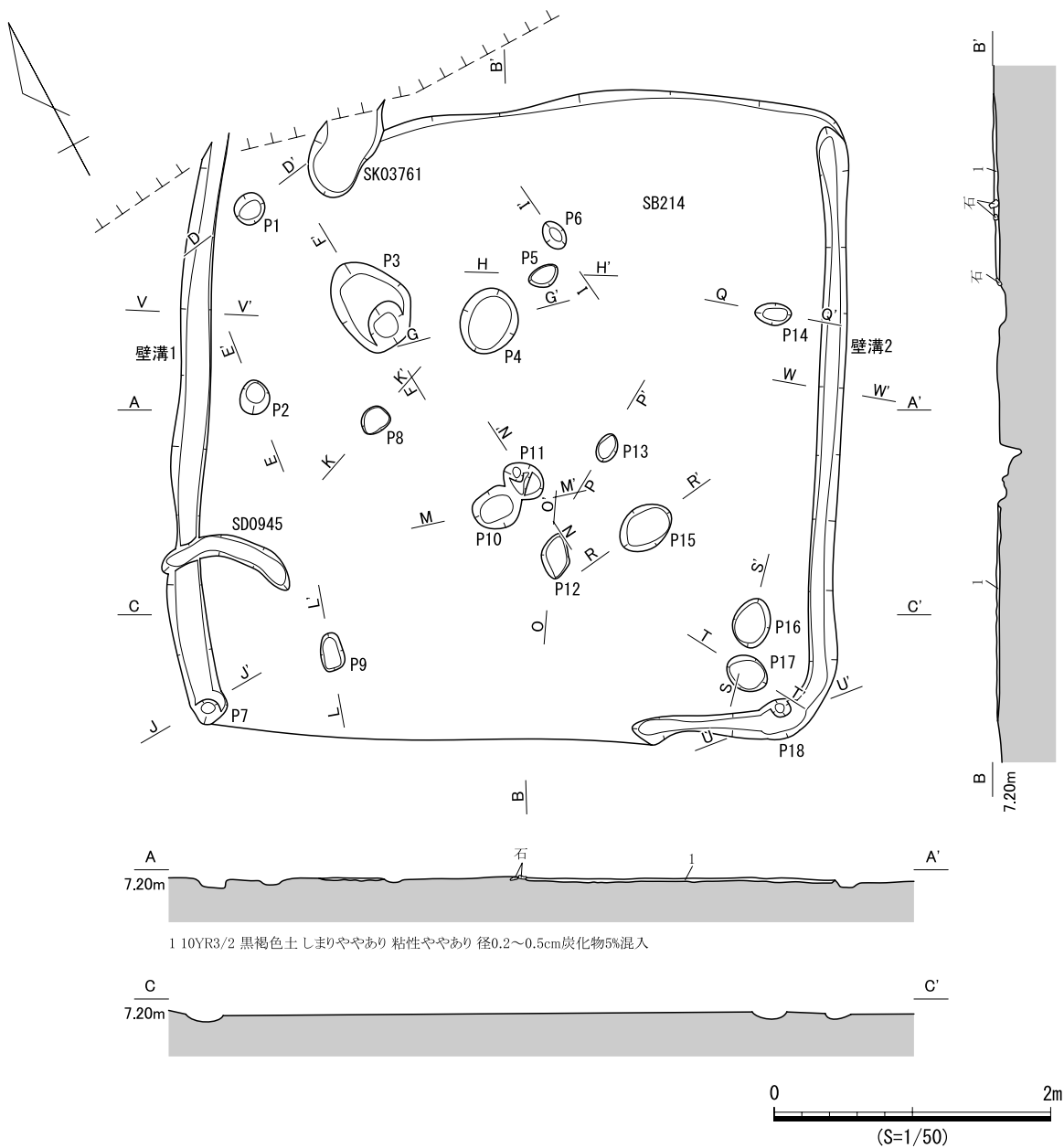


図 296 SB214 遺構図 (1)

規則的な配置は認められない。なお、壁溝1を切って緩やかに湾曲するSD0945を検出したが、本遺構との関係は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器162点、小穴から土器67点、壁溝から土器23点が出土した。その多くがVI期～VII期の土器である。P10からVII期前半の壺(913)が出土したが、その他に遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 913はVII期前半の壺B1類。口縁部が短く外反し、端部下端をやや拡張する。内面に刺突文が認められる。914はV期～VI期の鉢B類。底部下端にヨコ方向のケズリ調整が認められる。

時期 V期～VI期の土器が含まれるものの、VI期後半のSB213を切り、P10出土土器(913)がVII期前半であることから、VII期前半と考えられる。

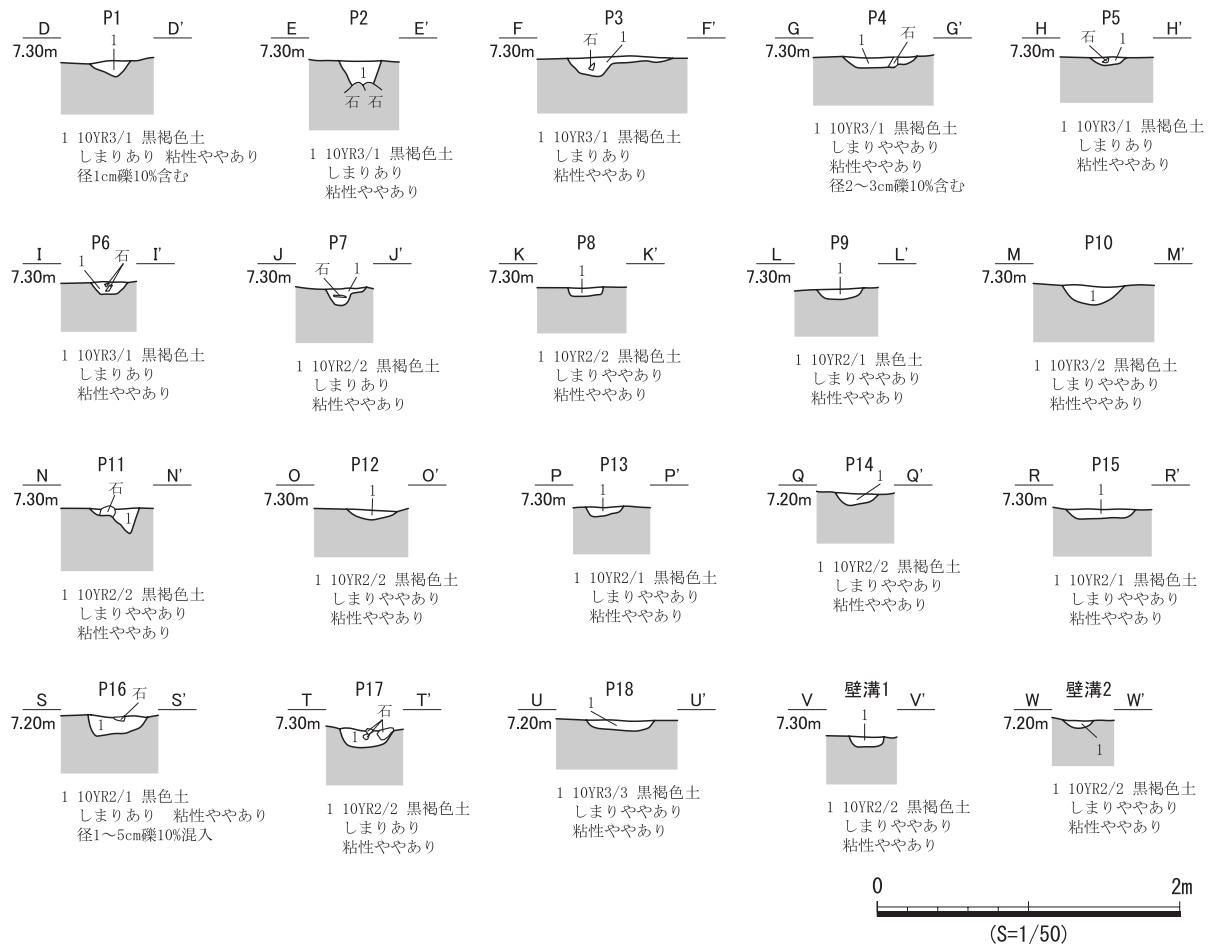


図 297 SB214 遺構図 (2)



図 298 SB214 遺物実測図

SB215 (遺構：図 299)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、他の竪穴住居跡と重複関係がない。南側の大半は攪乱によって失われ、北半分を確認した。

形状 東西長約2.9mで、周囲の竪穴住居跡より小規模である。北辺は直線的で、北西隅部はやや丸みをもつ。東西両壁辺も南側へ向かってわずかに広がるようである。深さは0.1mにも達しないほど浅く、壁面傾斜も緩やかである。

埋土 礫が混じる黒色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を9基確認したが、明瞭な柱痕跡はいずれも認められなかった。深さは約0.1mの浅い小穴が大半を占める。P5が0.2mとやや深いが、対応する小穴は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器78点、小穴から土器29点が出土したが、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。なお、出土した土器はⅥ期～Ⅶ期にあたる。

時期 出土土器や周辺遺構との重複関係から、時期を判断することが困難である。周囲に位置する竪穴住居跡とほぼ同時期と考え、Ⅵ期～Ⅶ期の可能性が高い。

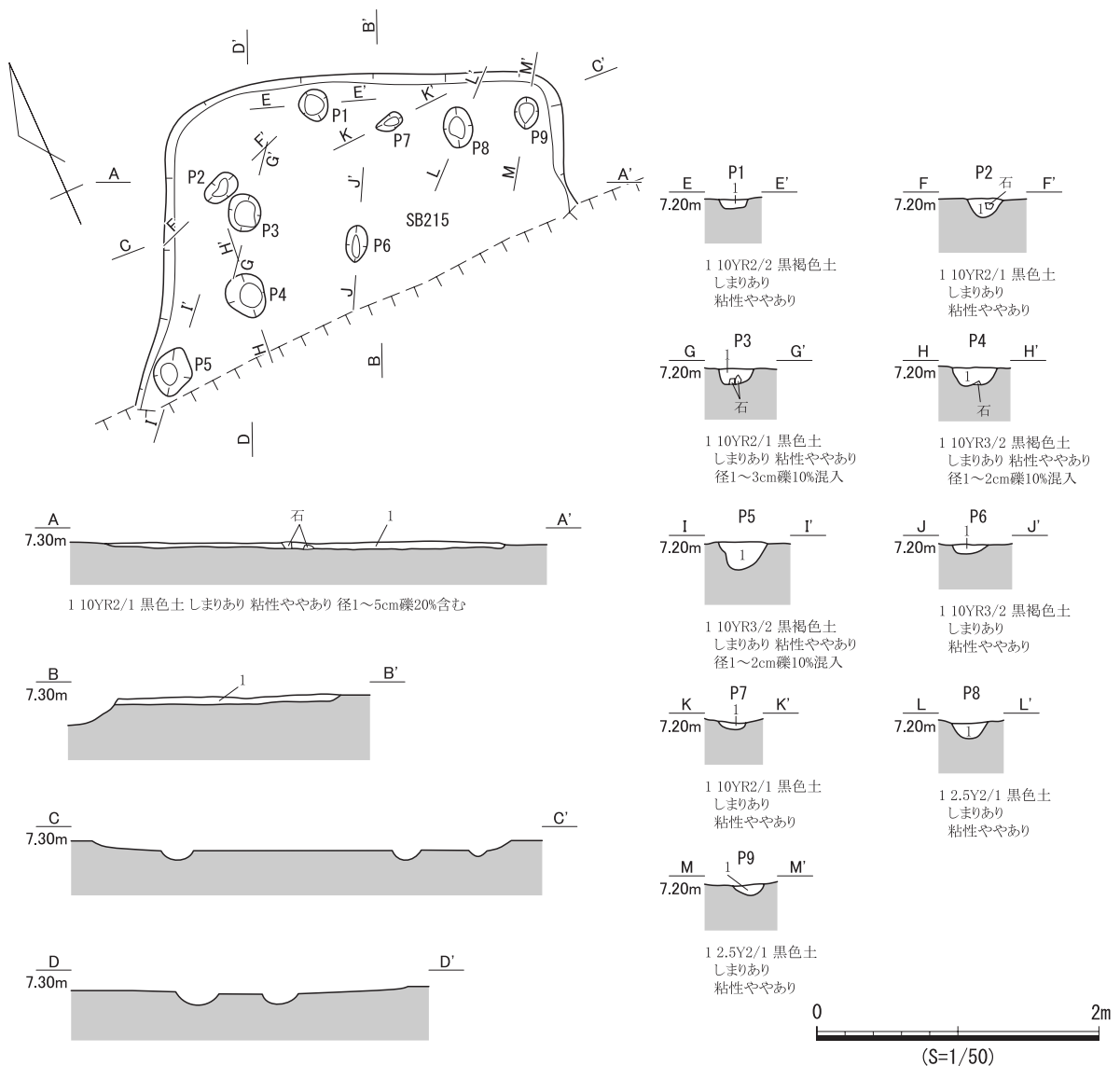


図 299 SB215 遺構図

SB216 (遺構：図300・301、遺物：図302)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、南西隅部を攪乱によって失われている。北東隅部を除いて、周囲に位置するSB217、SK03939、SK03786と重複関係があり、本住居跡は最も後出する竪穴住居跡であり、SD0433に切られる。

形状 南北長約4.4m、東西長約5.9mの東西に長い長方形を呈する。北辺と西辺は直線的だが、南辺と東辺はやや不整形である。深さは約0.2mで、周囲の竪穴住居跡のなかでは残存状況が良い。北壁から西壁にかけては壁面が急傾斜だが、西壁の壁面傾斜は緩やかである。

埋土 礫や炭化物の混じる黒色土が単層で堆積し、遺構の重複も著しいことから、人為堆積の可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2m～0.8mの小穴を12基確認した。その深さは、P7を除いて約0.1mの浅い小穴で、明瞭な柱痕跡は認められなかった。P7は明瞭な柱痕跡を土層断面で確認でき、その深さは0.34mで底面も平坦である。しかし、床面内で同様な状況を示す小穴は確認できなかった。なお、東壁に沿って、壁溝を2条検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器7,043点、小穴から土器20点、石器類5点、壁溝から土器29点が出土した。大半がVI期～VII期の土器で、わずかにIV期の土器(926)やV期の土器(928)が認められた。VI期～VII期の土器のうち、高坏に遺存状況のよいものが認められる(920、923)。それらはVII期前半のあまり時期差のない資料で、他にも同時期に土器(916、917、919、921、929、930)があるので、これらの土器が埋没時期を示す可能性が高いと考えられる。なお、高坏の坏部片がSB210出土の破片(902)と接合した。

出土遺物 915はV期～VI期の壺A1b類。口縁部が短く外反しながら立ち上がり、穿孔がある。916はVII期の壺B2a類。口縁部が短くくの字状に開く。917はVII期の壺H2a類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部には内傾面が認められる。918はVII期の高坏C4d類。内面は多条沈線間に山形文を配する。919はVII期前半高坏G3c類。外面の加飾が精緻で、スタンプ文が認められる。直線文を5帯施文し、その間を上から山形文、山形文、スタンプ文、対向山形文を施文する。最上段の直線文以外の直線文は少条である。2段目の直線文は1条しか確認できない。この1条の直線文をはさんで山形文が対向するよう施文されているので、直線文間にみられる文様は対向山形文、スタンプ文、対向山形文を意図した可能性がある。スタンプ文は双頭渦文である。920～923はVII期前半高坏C類。いずれも口縁部の内湾傾向が顕著である。920の口縁部には打ち欠きが認められる。923は坏底径も小さく、脚裾部も強く内湾する。920、922、923はC4a類で加飾が認められず、923は脚部で付根から内湾し、脚柱部は中実である。924はVI期～VII期の鉢A2類。加飾がなく、外面全体にハケ目が認められる。口縁部は内湾し、端部に顕著な平坦面を形成する。甕C類に類似する口縁部形状である。925はIII期の甕である。926はIV期の甕B2類。口縁部が強く屈曲して、端部が内傾する。927はVI期～VII期の甕B2類。口縁部が頸部で屈曲して、直線的に立ち上がる。端部は平坦面が認められる。928はV期の蓋である。2個1組の穿孔が認められ、端部が凹面を形成する。929は粗いハケ目が認められるVI期～VII期の甕脚部。端部はやや尖り気味である。930はVII期の手捏ね土器C類である。

時期 出土遺物の時期から埋没時期はVII期前半であり、VI期～VII期頃に構築されたと考えられる。

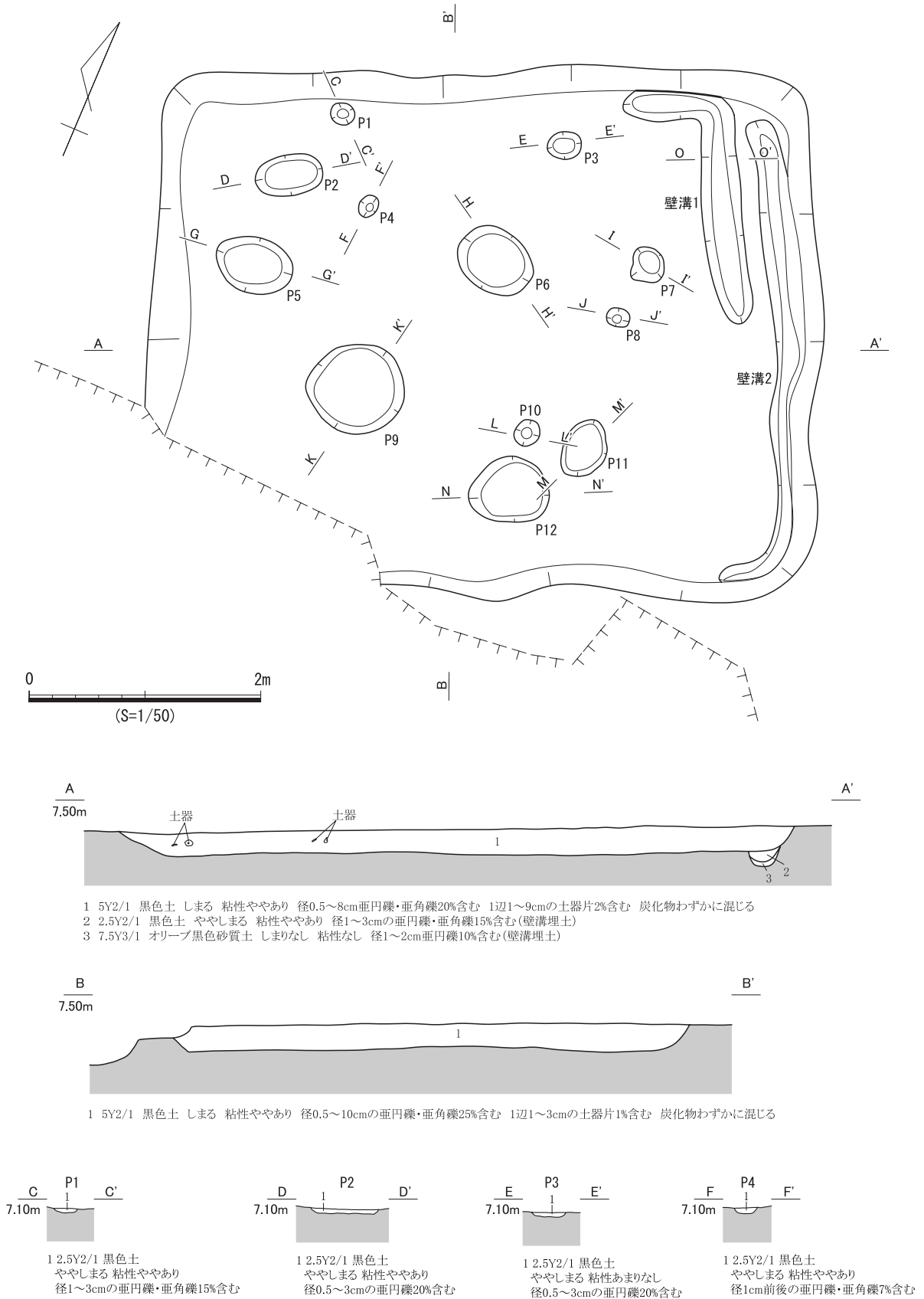


図 300 SB216 遺構図 (1)

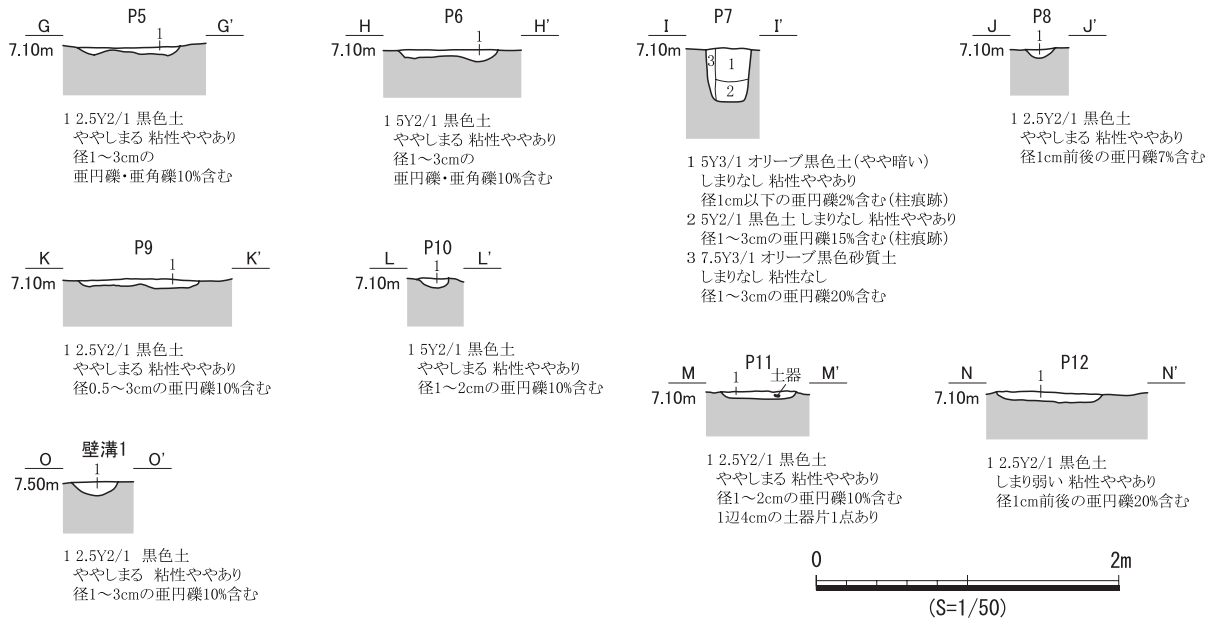


図301 SB216遺構図(2)

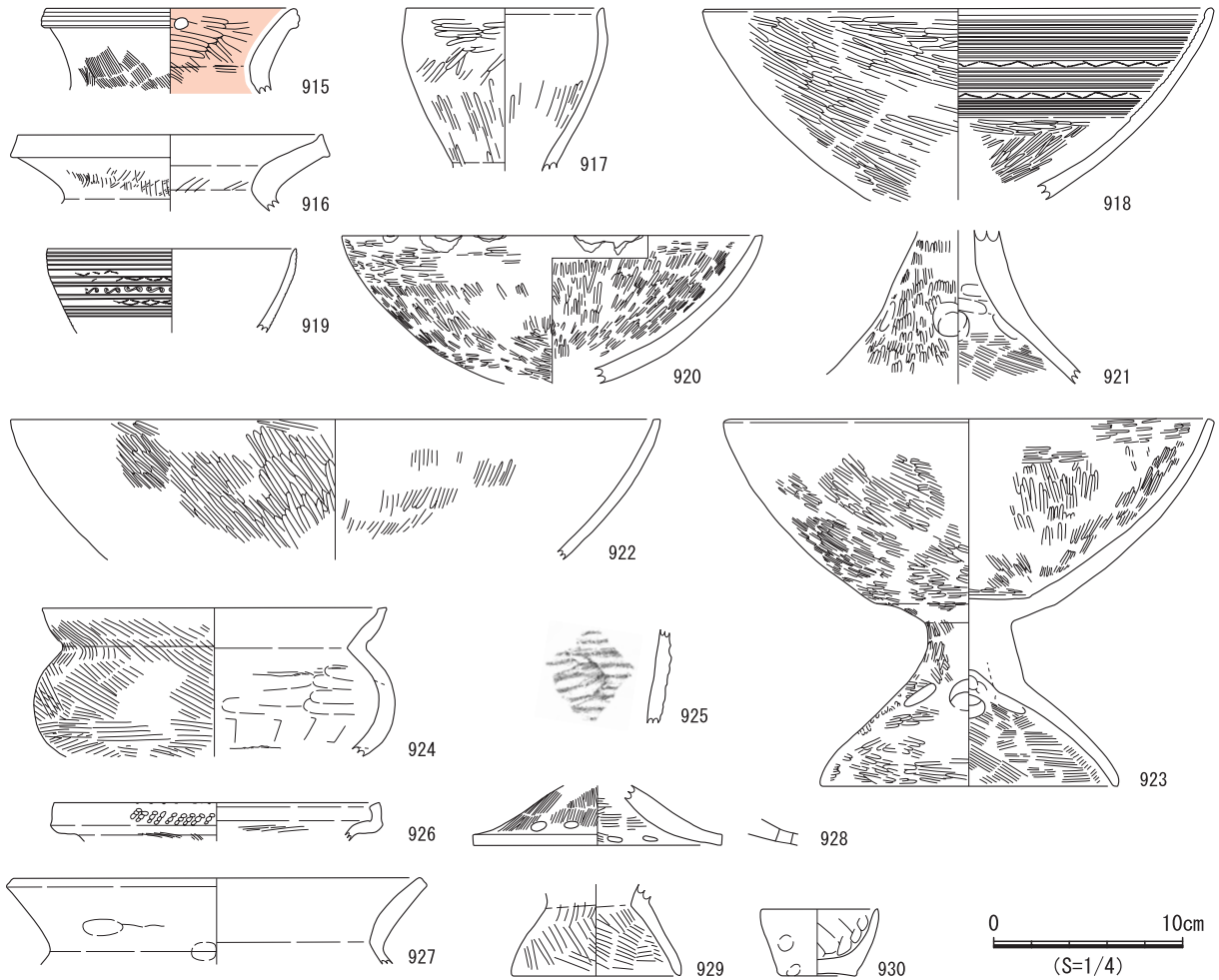


図302 SB216遺物実測図

SB217 (遺構：図303・305、遺物：図304)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡の密集域に位置する。南側は攪乱によって失われ、残る範囲は周囲の竪穴住居跡等と重複し、SB216に切られ、SB218とSK03786を切る。

形状 検出できたのは西壁と北壁の一部のみである。残る部分はSB216や攪乱によって削平され不明である。北辺は直線的だが、西辺は弧状を呈す。北壁、西壁とも深さが約0.2mあり、壁面も急傾斜である。

埋土 2層に分層した。埋土中の礫の混入が多く、遺構の重複も著しいことから、人為堆積の可能性はある。

床面 床面はやや凹凸があり、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径約0.2mの小穴を9基確認したが、いずれも浅く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。平面的な位置関係からすると、P2、P6、P7、P9が柱穴に適当な位置関係にある。

遺物出土状況 埋土中から土器3,382点が出土し、小穴からの出土はなかった。土器は主に埋土上層から出土し、VI期～VII期の土器が大半を占めるなか、一部にIV期やV期の土器も認められた。しかし、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 931は摩耗が著しいが、IV期の甕A類。932はIV期の壺胴部。振幅が一定しない波状文が認められる。933はVI期～VII期の器台B類。透孔付近から裾部が外反する。934はV期前半の高坏B2a類。口縁部が短く直立しながら外反して、端部が外側へ引き出される。935はVI期後半～VII期の高坏G3類脚部。透孔付近で強く屈曲して、裾部が大きく開く。936はVI期～VII期高坏J類で裾部が強く屈曲し、外面に一条の突帯を有する。

時期 出土遺物の時期とVII期前半のSB216に切られることから、VI期～VII期前半と考えられる。

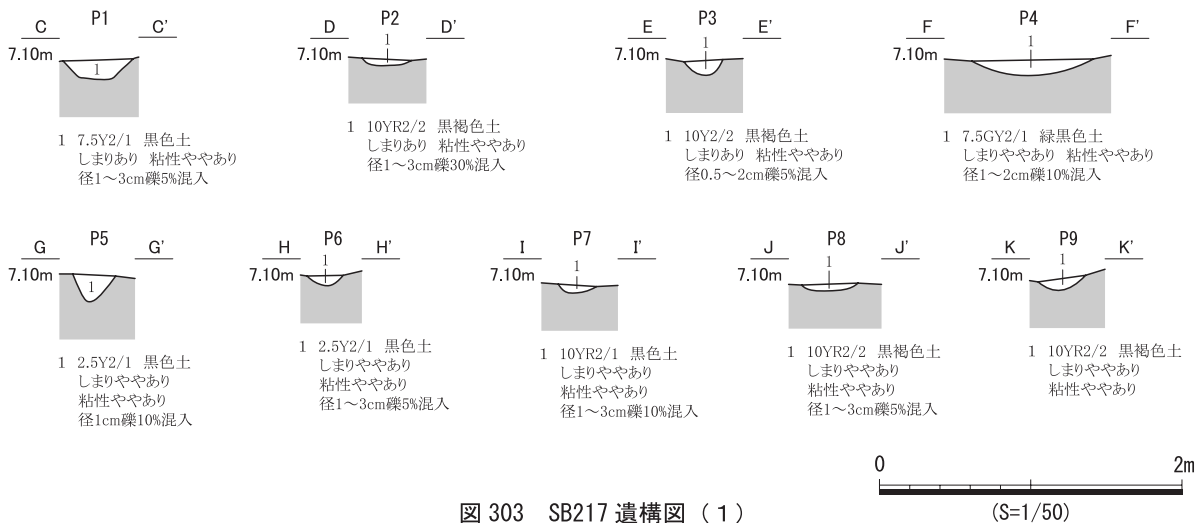


図303 SB217 遺構図(1)

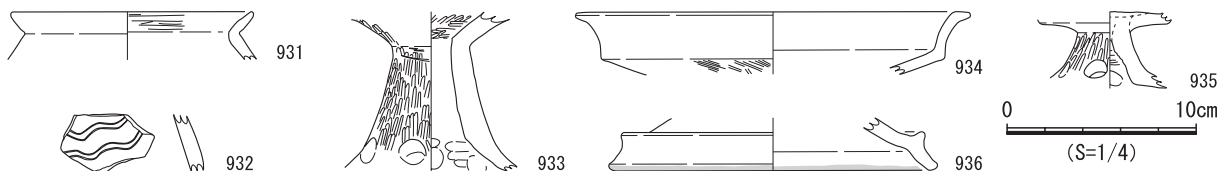


図304 SB217 遺物実測図

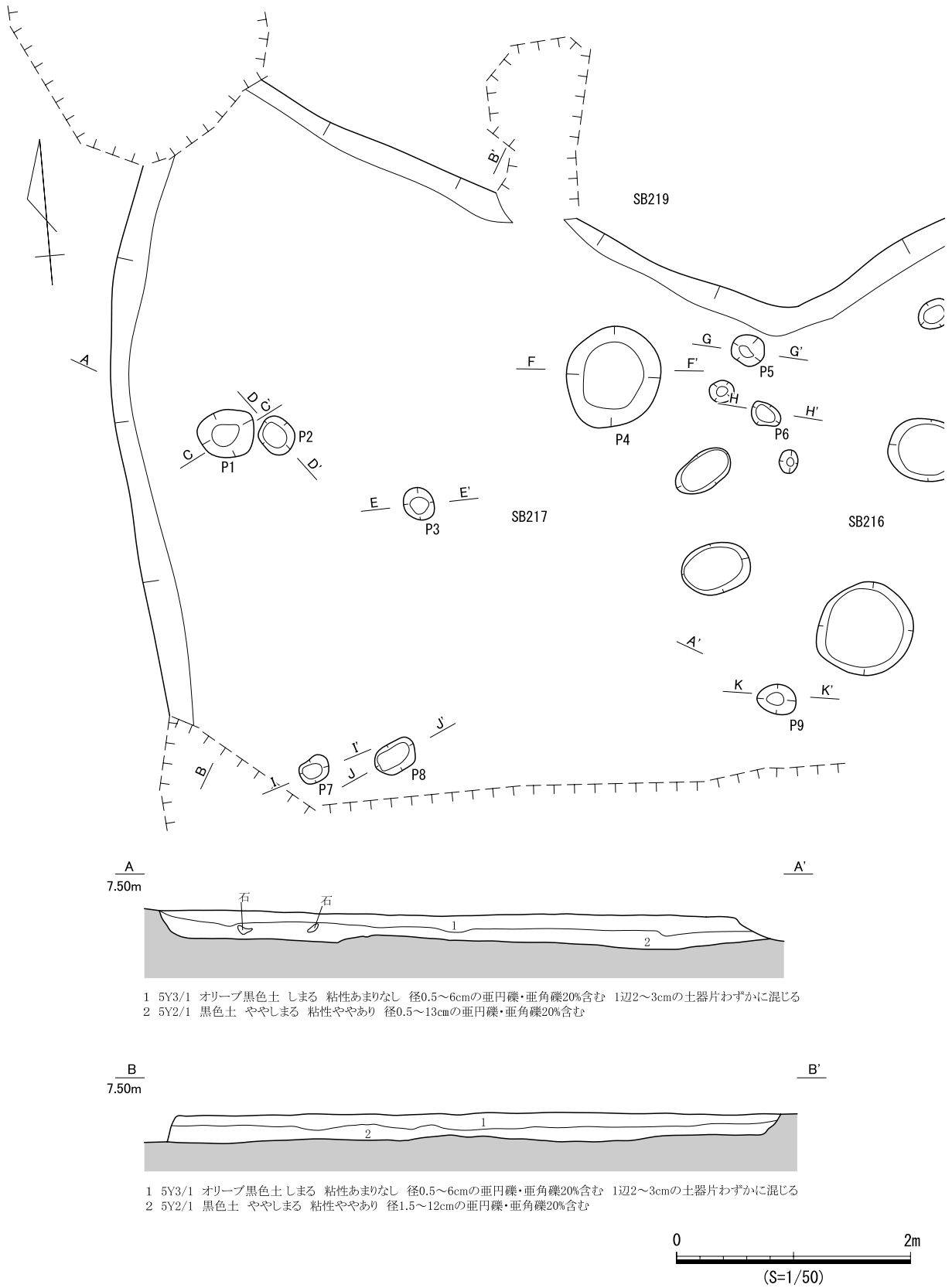


図 305 SB217 遺構図 (2)

SB218 (遺構：図306、遺物：図307)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡の密集域に位置する。北東隅部や南西隅部付近を攪乱によって失い、東壁はSB217に切られている。

形状 東西長は不明だが、南北長約5.1mを測る。各辺とも不整形で、北辺は大きく外側へ膨らむ。壁面は約0.2mの深さがあり、各壁面とも傾斜は急である。

埋土 3層に分層し、最下層(3層)は砂質土で北壁から埋没が進んだと考えられる。また、埋土中

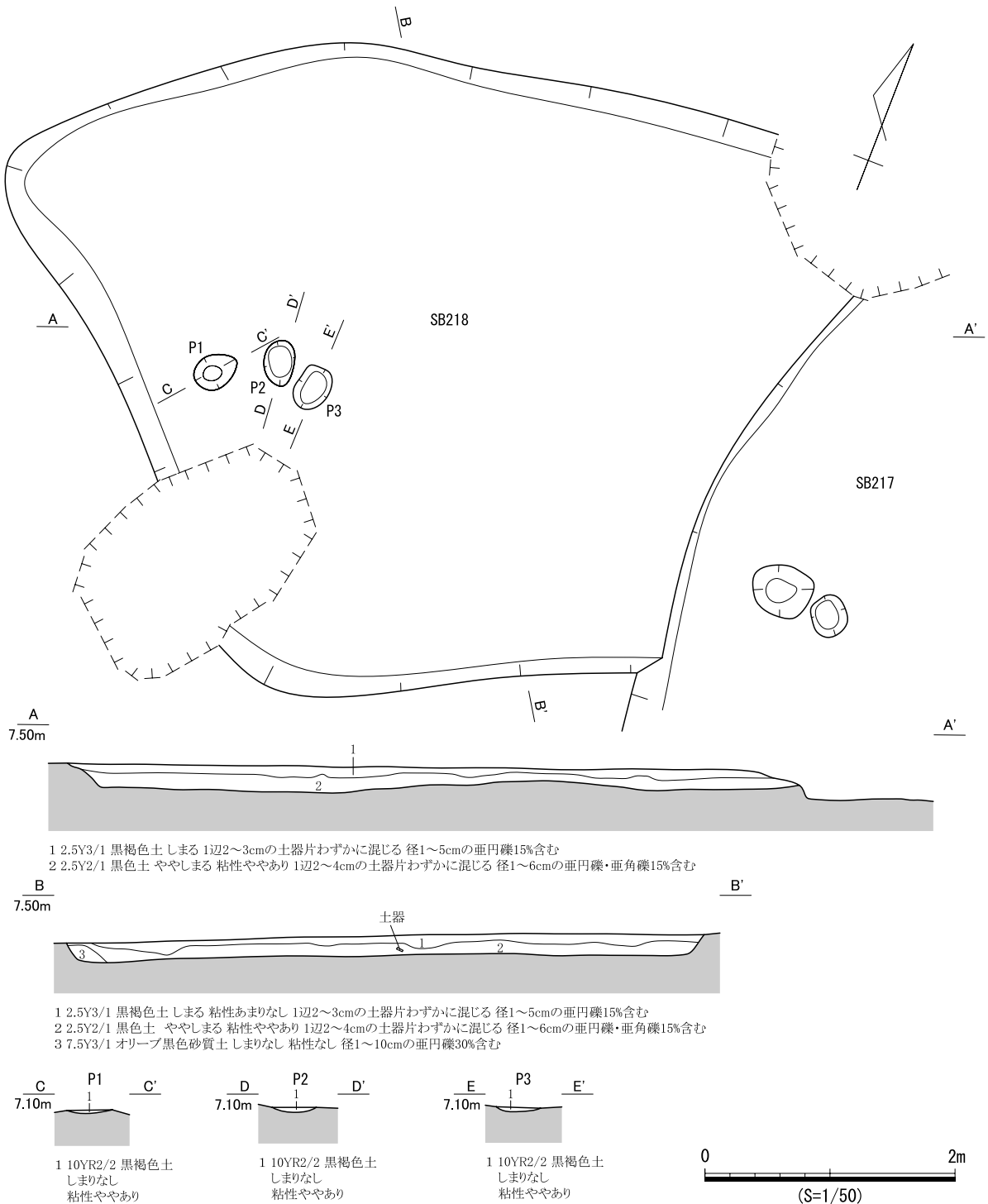


図306 SB218 遺構図

の礫の混入が多く、人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。直径0.3m程度の小穴を3基確認し、いずれも底面が丸く、深さが0.05m程度の浅いものである。

遺物出土状況 埋土中から土器2,253点が出土し、小穴からは出土しなかった。その時期はV期～VII期で、埋土上層から多く出土した。いずれの時期においても遺存状況のよい土器や大きな土器片が認められ、周囲から土器の流入が顕著であったと考えられる。なお、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 937はV期の壺A1a類。端部下端を外傾しながら拡張し、2個1組の円形浮文、擬凹線、赤彩が認められる。内面には羽状文、円形刺突文を施文する。938はVI期～VII期の壺H類胴部。胴部が扁平で底部がやや突出気味である。939、941はV期の甕A類。939は口縁部の屈曲が強く、頸部以下には直線文、波状文、直線文の順で文様が認められる。941の頸部直下には直線文が認められる。940も甕A類だが、939、941より口縁部の屈曲が弱いのでV期～VI期と考えられる。942はVI期甕B2類。口縁端部に平坦面があり、刺突文を施文する。頸部直下に直線文、刺突文を施文する。943はVI期鉢A3a類。口縁部が短く直立する。944は受部のみが遺存する。内湾しながら立ち上がり、VII期の器台B3類と考えられる。945はVII期高坏J類。脚部が屈曲して外反し、屈曲部と裾部を加飾する。加飾は共通しないが、形状が類似する例として荒尾南遺跡（大垣市教育委員会2008）SX06-996がある。坏部は同様の器形となる可能性が高い。透孔は2穿孔で、屈曲部、裾部に2条の沈線をめぐらせ、その上下に振幅の小さい山形文を施文する。裾部の沈線間には刺突文を充填するが、屈曲部には認められない。外面は煤が強く付着し、観察が困難である。そのため、屈曲部に刺突文が観察できなかった可能性がある。煤は内面にも裾部を環状に付着することから、何か別の用途で二次的に利用した可能性がある。946、947はVI期～VII期の手捏ね土器C類。いずれも指頭圧痕が顕著に認められる。

時期 出土遺物の時期とVI期～VII期前半のSB217に切られることから、V期～VII期前半と考えられる。

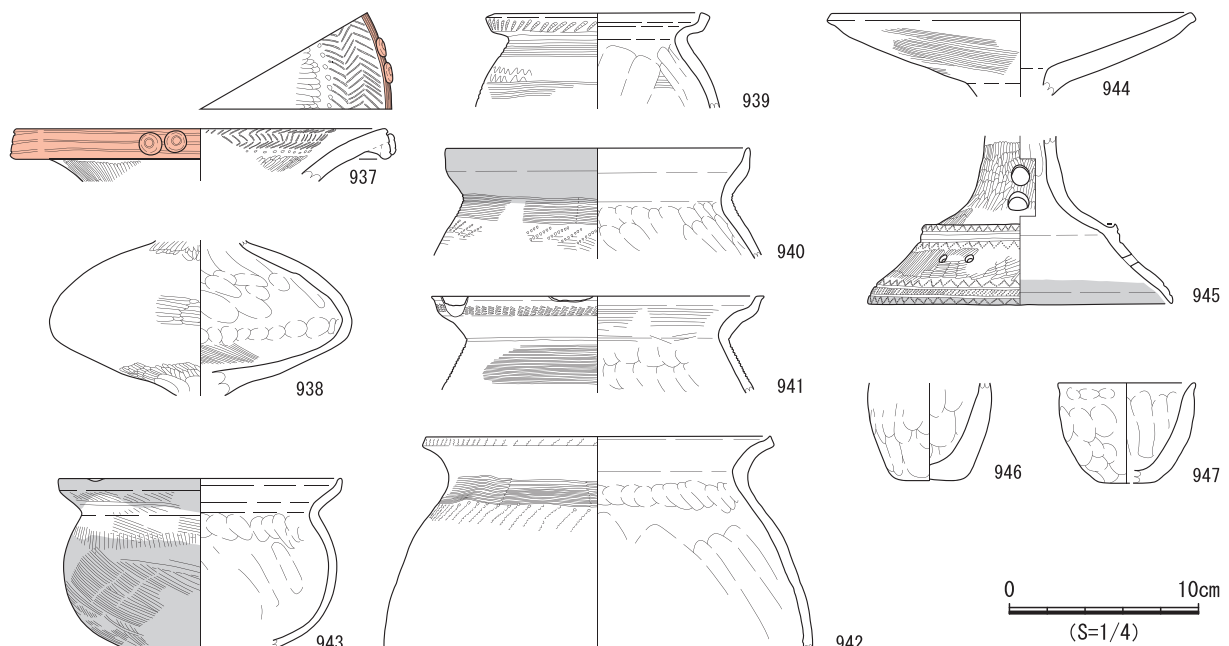


図 307 SB218 遺物実測図

SB219 (遺構：図308・310、遺物：図309)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SK03785、SB216～SB218完掘後、VI層上面で溝が円形にめぐむ状況を確認した。溝内部に6基の小穴を確認し、中央に位置するP6以外は円形に分布することから、壁溝と柱穴が残る円形の竪穴住居跡と考えられる。

形状 直径約6.0mの円形を呈する。壁面及び遺構埋土は重複する竪穴住居等の削平によりほとんど確認できなかった。

床面 礫層が露出する。床面は平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。直径0.5m程度と比較的大きく、不整形な小穴を6基確認した。そのうち、P1～P5が平面的な位置関係からみて柱穴の可能性が高い。P6は他の小穴より規模が大きく中心に位置することから、炉跡の可能性はあるが、焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。また、中心に位置する柱穴の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器534点、小穴から土器64点が出土したが、いずれも小片で摩耗が進行したものばかりであった。一部にIV期(949、952)の土器が出土した。多くはV期～VII期の土器片であり、P5底面でもVI期～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 948はV期の器台A1類。口縁端部に円形刺突文が認められる。949はIV期甕A2類。口縁部が短くくの字に屈曲する。外面にはタタキ痕が認められる。950はV期高坏B類の脚部。透孔まで脚部はわずかに開く。951は小型の高坏脚部。形状が柱状であることから、V期前半の高坏A類の可能性が高い。952はIV期の高坏A類脚部。脚部が短く外反し、端部には顕著な凹面が認められる。

時期 P5底面出土土器の時期や遺構の重複関係からVI期以前としかいえないが、当遺跡で検出した円形住居は中央土坑の存在や、その周辺に小穴を配することが共通し、いずれも縄文時代晩期の遺構であることから、本遺構の時期も当該期まで遡る可能性もある。

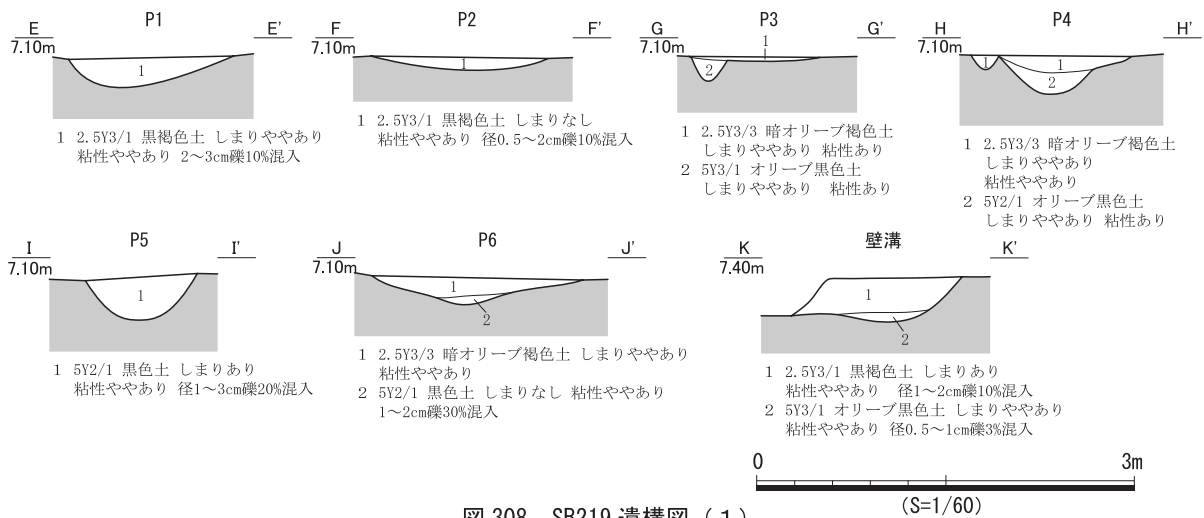


図308 SB219遺構図(1)

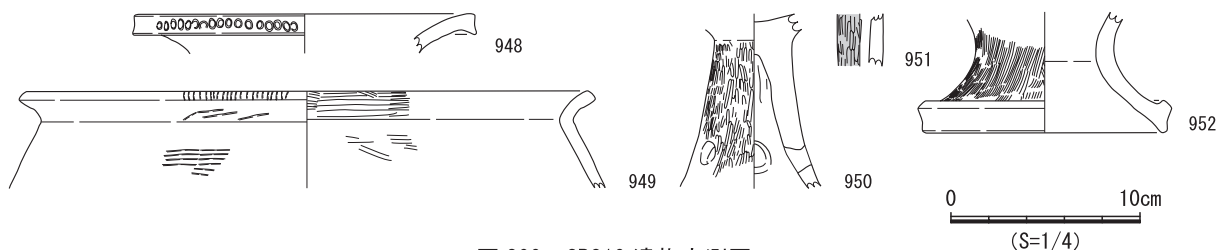


図309 SB219遺物実測図

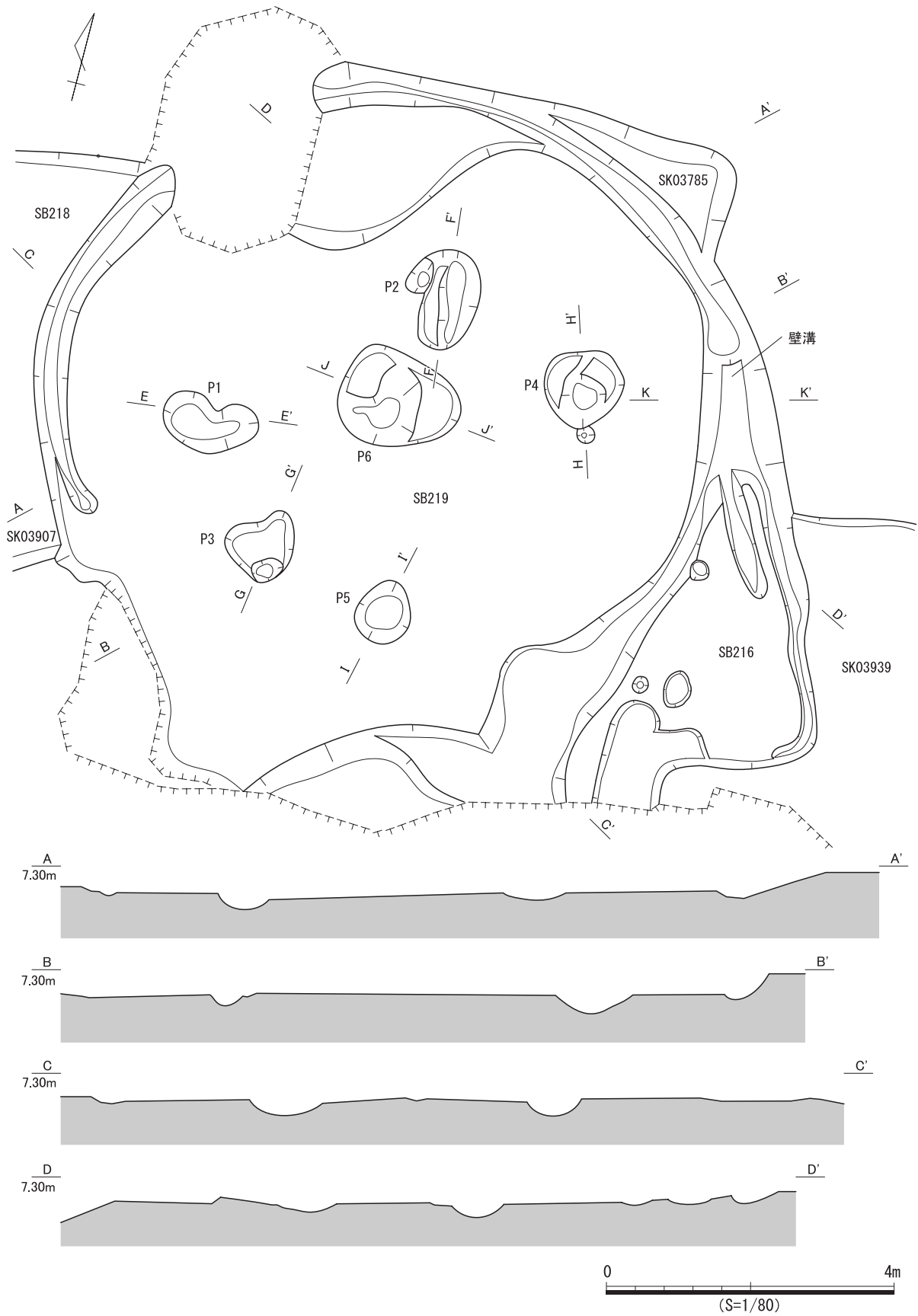


図 310 SB219 遺構図 (2)

SB220 (遺構：図311・312、遺物：図313)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡の密集域に位置する。検出面には礫層が表出し、黒色ブロック土が混在する土層が広がっており、平面形は不明瞭であった。北側は攪乱による削平を受けるが、攪乱北側に北西隅部を確認した。SK03845などの土坑や溝と重複するが、竪穴住居跡としては単独で存在する。

形状 東西長約6.5mで、南壁と東西壁の長さからみて南北に長い長方形を呈する可能性が高い。南辺と西辺は直線的だが、東辺は不整形で東側へやや開く。南壁と東壁の傾斜は急であるが、西壁は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、層界に凹凸が認められる。上下層ともに炭化物を含み、下層には礫が混入する。埋土中に硬化面を部分的に確認できたことから、完掘状況は掘形底面の可能性がある。

床面 硬化面を部分的に確認できたが、ある一定の広がる範囲として確認することはできなかった。なお、貼床、炉跡は確認できなかった。床面上から直径約0.2mの小穴を16基確認したが、明瞭な柱痕跡を確認できなかった。なかにはP8、P9、P14のように断面形からみて柱穴の可能性が高い小穴が認められるが、その性格は不明である。SD0947は本遺構の検出面にて確認した、緩やかに湾曲する溝である。検出面に黒色ブロック土が広がっていたため平面形は不明瞭であったが、南端は本遺構の南辺に接して収束している。本遺構の床面の把握が定かでなかったため、SD0947が本遺構に伴う溝か否かの判断は困難であるが、SD0947のように住居の中央周縁から住居壁面に向かって湾曲して延びる溝はSB214でも確認されており留意する必要がある。

遺物出土状況 埋土中から土器2,049点、石器類2点、小穴から土器49点が出土した。土器の多くはⅦ期のものであり、一部に縄文時代晩期末葉～弥生時代前期前半(960)やⅣ期(961)の土器片が認められた。北西隅部ではⅦ期の土器がまとまって出土した(954、958)。Ⅶ期の土器には比較的遺存状況のよい土器(955、957、959)が認められた。石錐(963)も出土したが、遺構の時期を決定するような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 953、954はⅦ期の壺B2a類。口縁部が頸部で屈折して短くやや外反する。外面でのハケ目調整が顕著である。955はⅦ期壺C類。口縁部が直立するものの、わずかに内湾する。口縁部内外面には粗いハケ目が認められる。956はⅦ期壺A類もしくはB類の底部。上げ底で、胴部は底部から内湾しながら大きく開く。下膨れの胴部となる可能性がある。957はⅦ期の壺胴部。やや下膨れの胴部で底部は突出気味である。958はⅦ期甕脚部。付根から短く脚部がハの字に開く。959は内湾する口縁部をもつ鉢E類。内外面に丁寧なミガキが認められる。Ⅶ期であろう。960は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期前半の甕。口縁部が外反し。口縁部からやや下がった位置に痕跡的な突帯をもつ。突帯上にユビによる押圧が認められ、一部器面にまで押圧が及ぶ。961はⅣ期壺H類。クシによる文様が認められ、古井式と考えられる。962は小型の砥石。表面の砥面は中央部分が大きく窪み、不定方向の線状痕が残る。963は石錐。サヌカイト製であり、側縁に細かい剥離を施し、刃部は鋭く尖らせている。

時期 遺存状況のよいⅦ期の土器がまとまって出土したことから、Ⅶ期と考えられる。

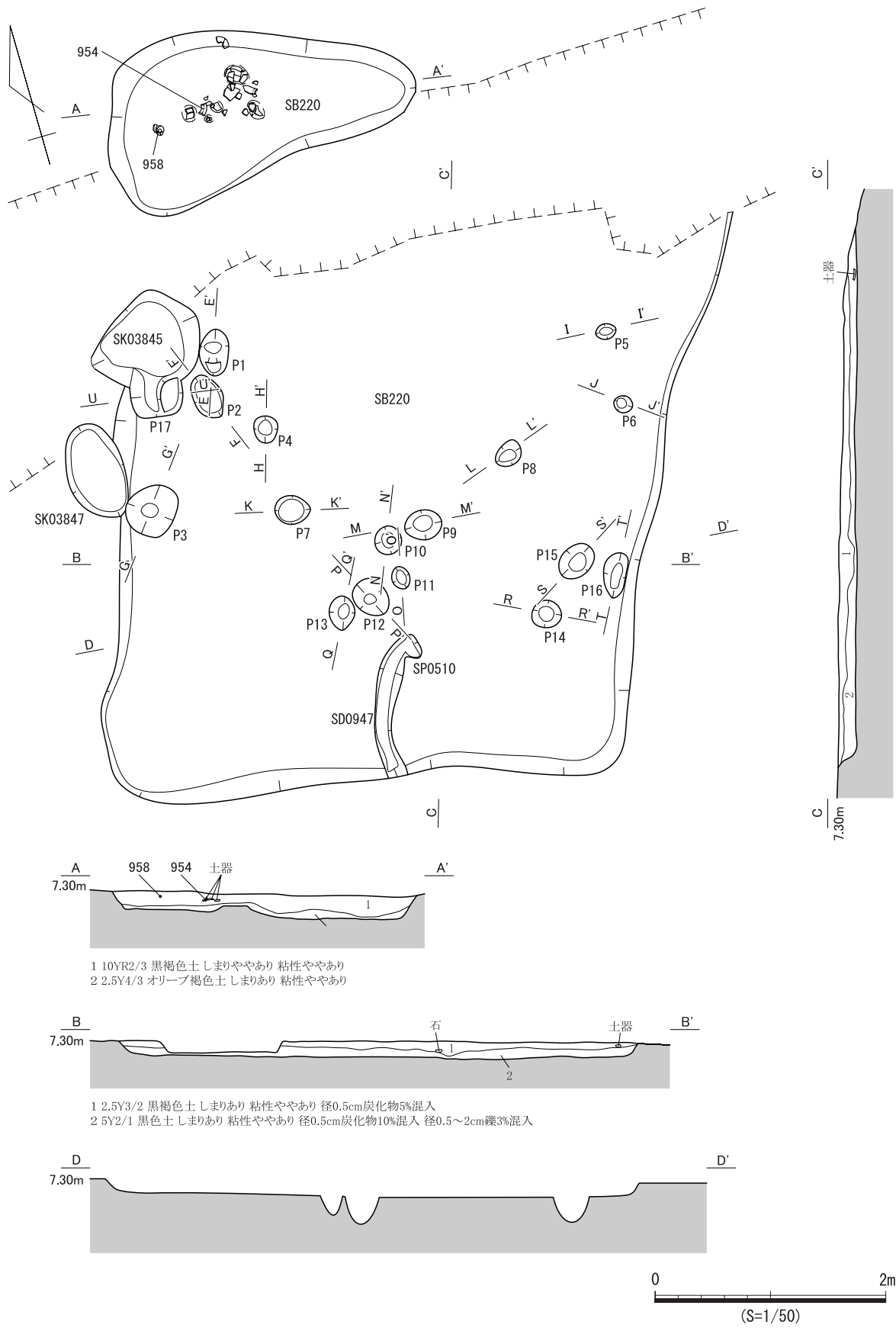


図 311 SB220 遺構図 (1)

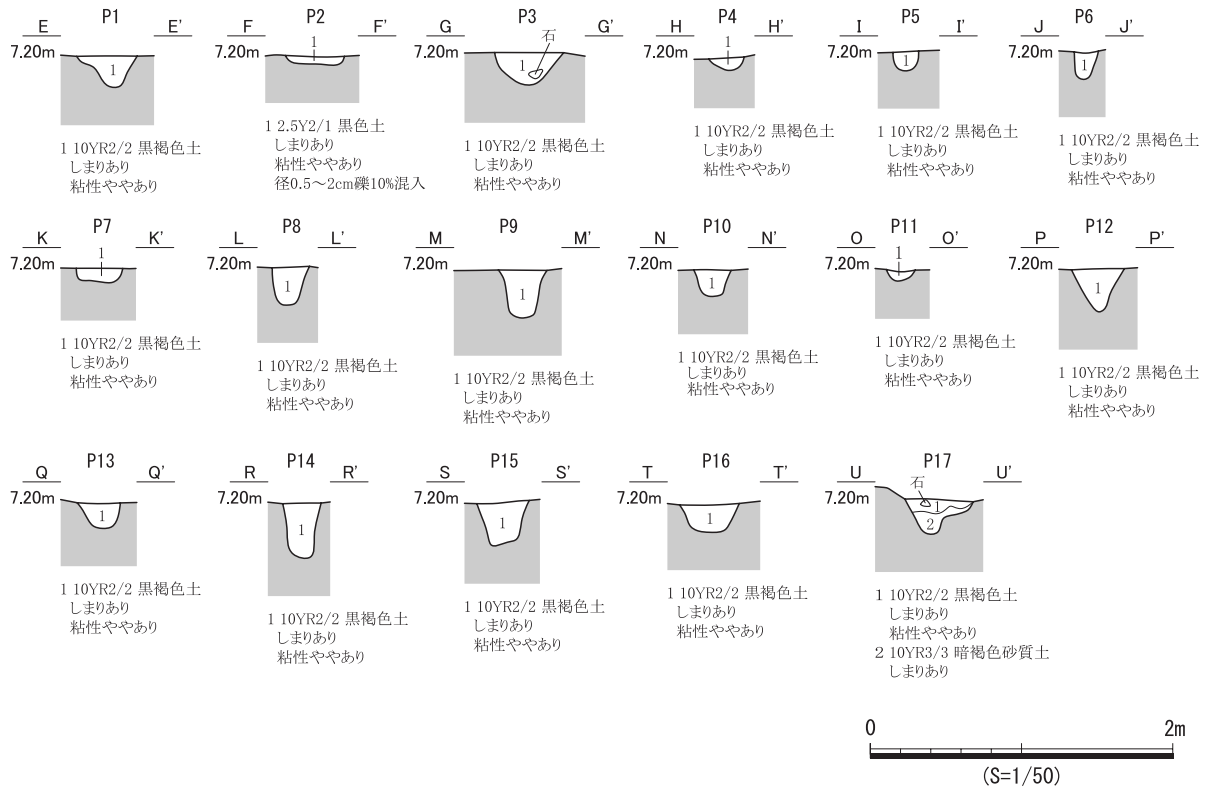


図 312 SB220 遺構図 (2)

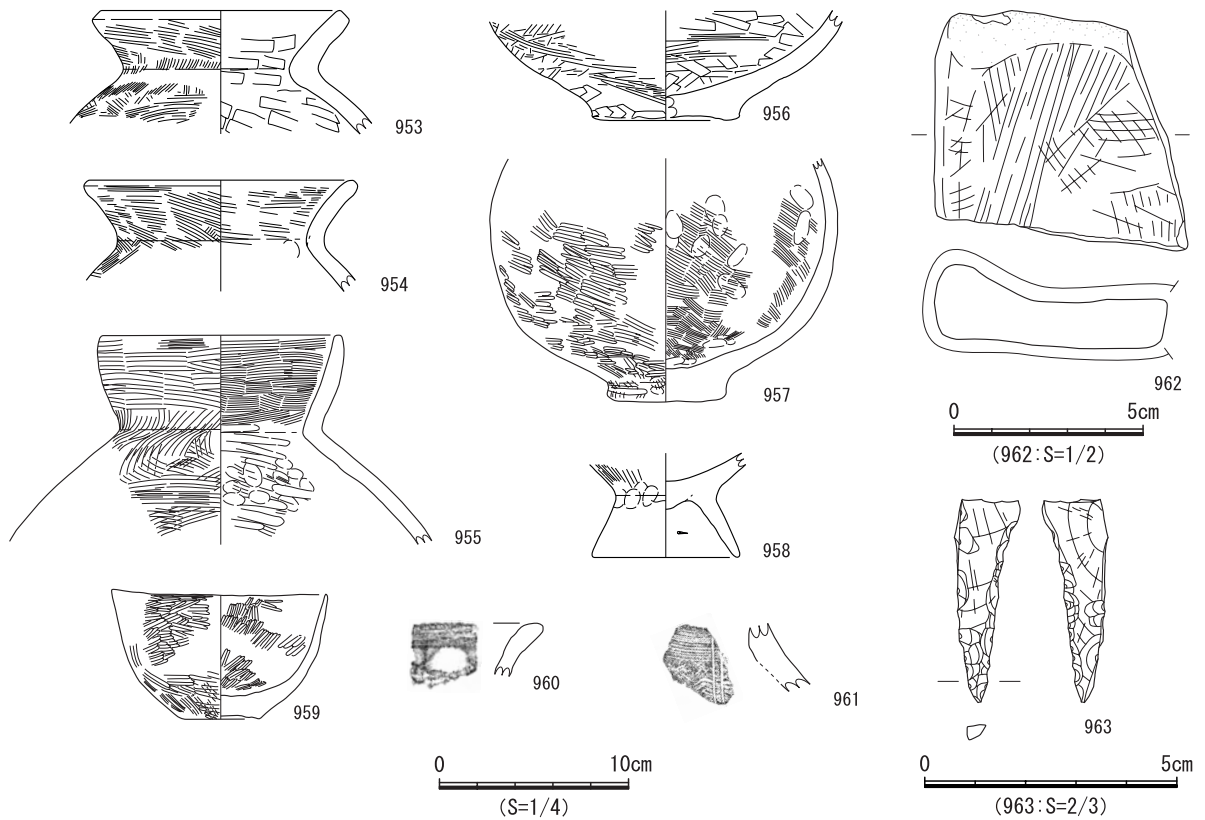


図 313 SB220 遺物実測図

SB221 (遺構：図314・315)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北側でSK03838とSK03840を切る。

形状 南北長約3.8m、東西長4.3mを測る。北西隅部付近を除く壁面が全体に不整形で、平面形は不整な円形にみえるが、壁溝がL字に北西隅部壁面に沿って認められることや柱穴の配置から、本来は方形ないしは長方形を呈すると考えられる。

埋土 炭化物、礫混じりの黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。北西隅部に壁面に沿って壁溝が認められた。直径約0.3mの小穴を11基確認した。いずれも深さ約0.1mの浅い小穴が多いが、P3、P5が深さ約0.3mとやや深く、断面形が方形状であるため柱穴の可能性はある。断面形状は類似しないが、対応する位置関係にあるものとしてP2、P4があるため、P2からP5で柱穴を構成する可能性がある。また、P1からP4の組み合わせでも柱穴として適当な位置にあるので、P1からP5の5基が柱穴の可能性のあるものと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器606点が出土し、小穴からの出土はなかった。いずれも摩耗の著しい小片であり、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 VII期のSK03840、SK03838より後出することから、VII期以降と考えられる。

SB222 (遺構：図316)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東半分は攪乱によって大きく失われ、SB223を切る。

形状 南北長は約4.4mを測る。北西隅部はやや丸みをもち、北壁と西壁の境界が不明瞭で、西壁は不整形である。深さは0.1mにも満たないほど浅く、壁面の傾斜も緩やかである。

埋土 3層に分層し、2層と3層に礫などの混入が認められた。

床面 硬化面、貼床や炉跡は認められなかった。床面上で直径約0.2m～0.5mの小穴を9基確認した。いずれも深さ0.2m未満と浅く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。

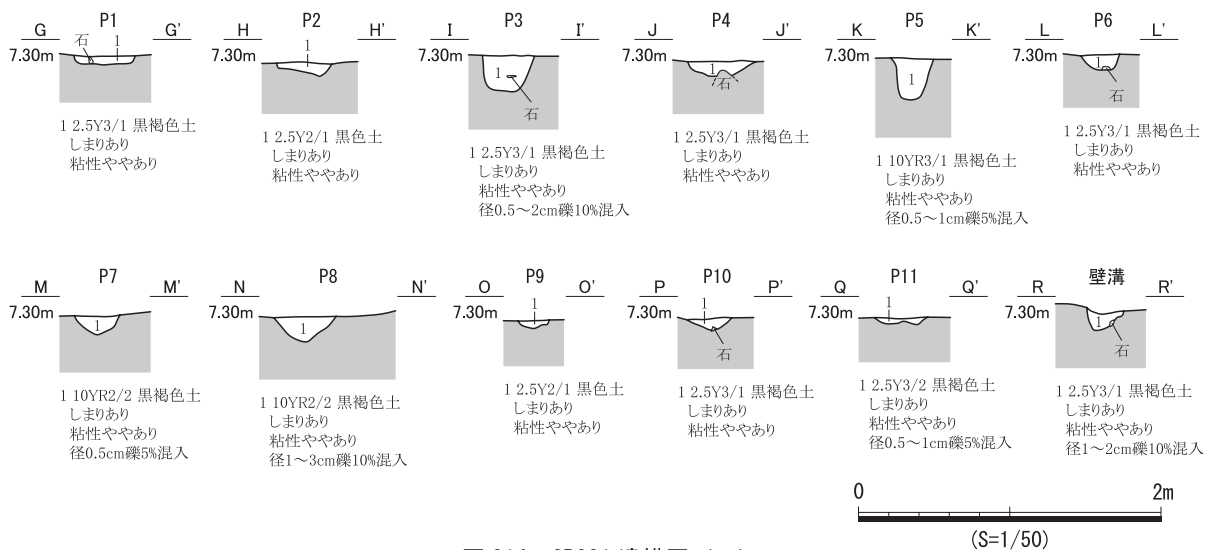


図314 SB221 遺構図 (1)

遺物出土状況 埋土中から土器111点、小穴から土器10点が出土した。大半が摩耗した土器片で、VI期～VII期と考えられる。遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 VI期～VII期のSB223を切るが、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

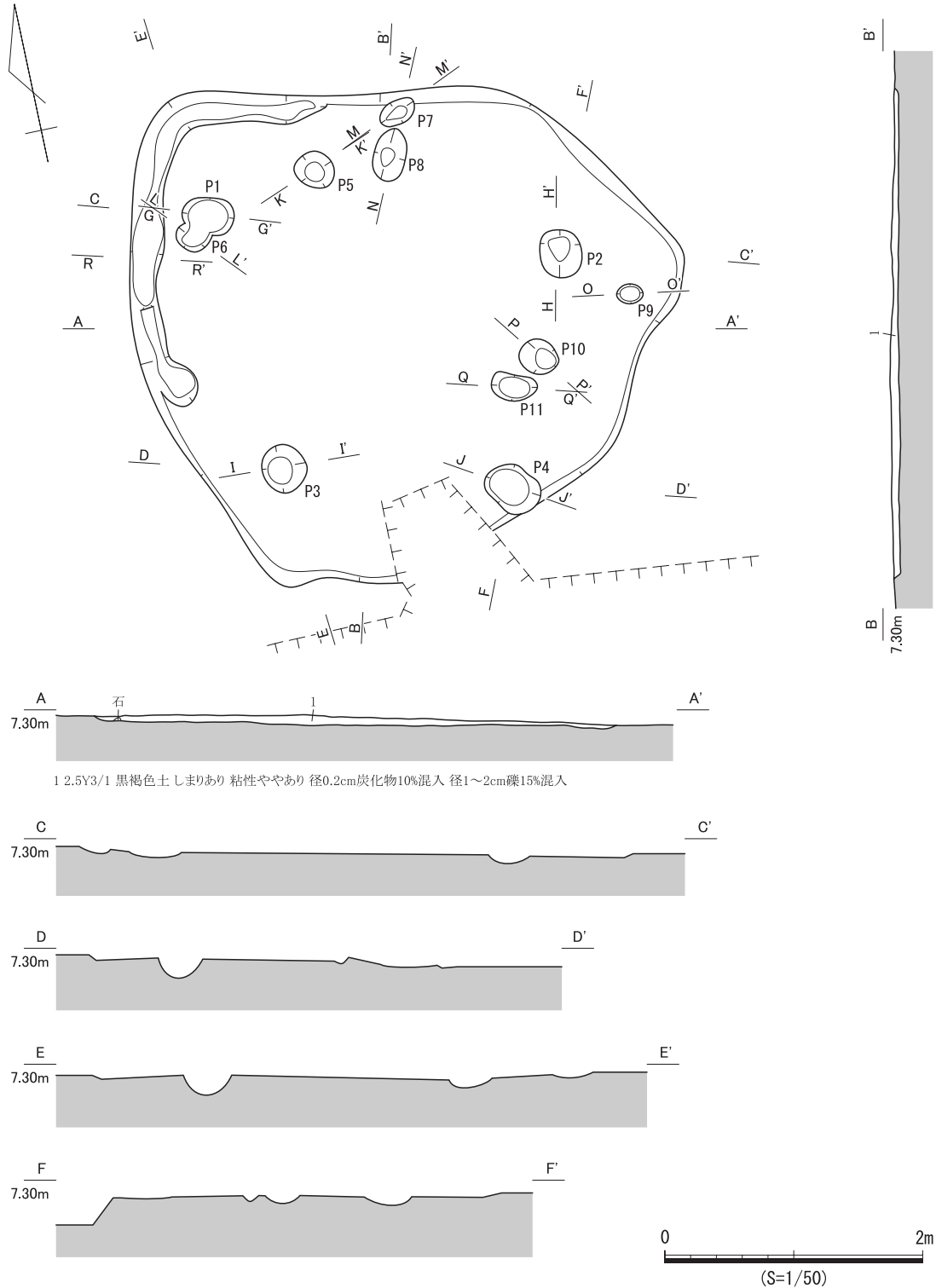


図 315 SB221 遺構図 (2)

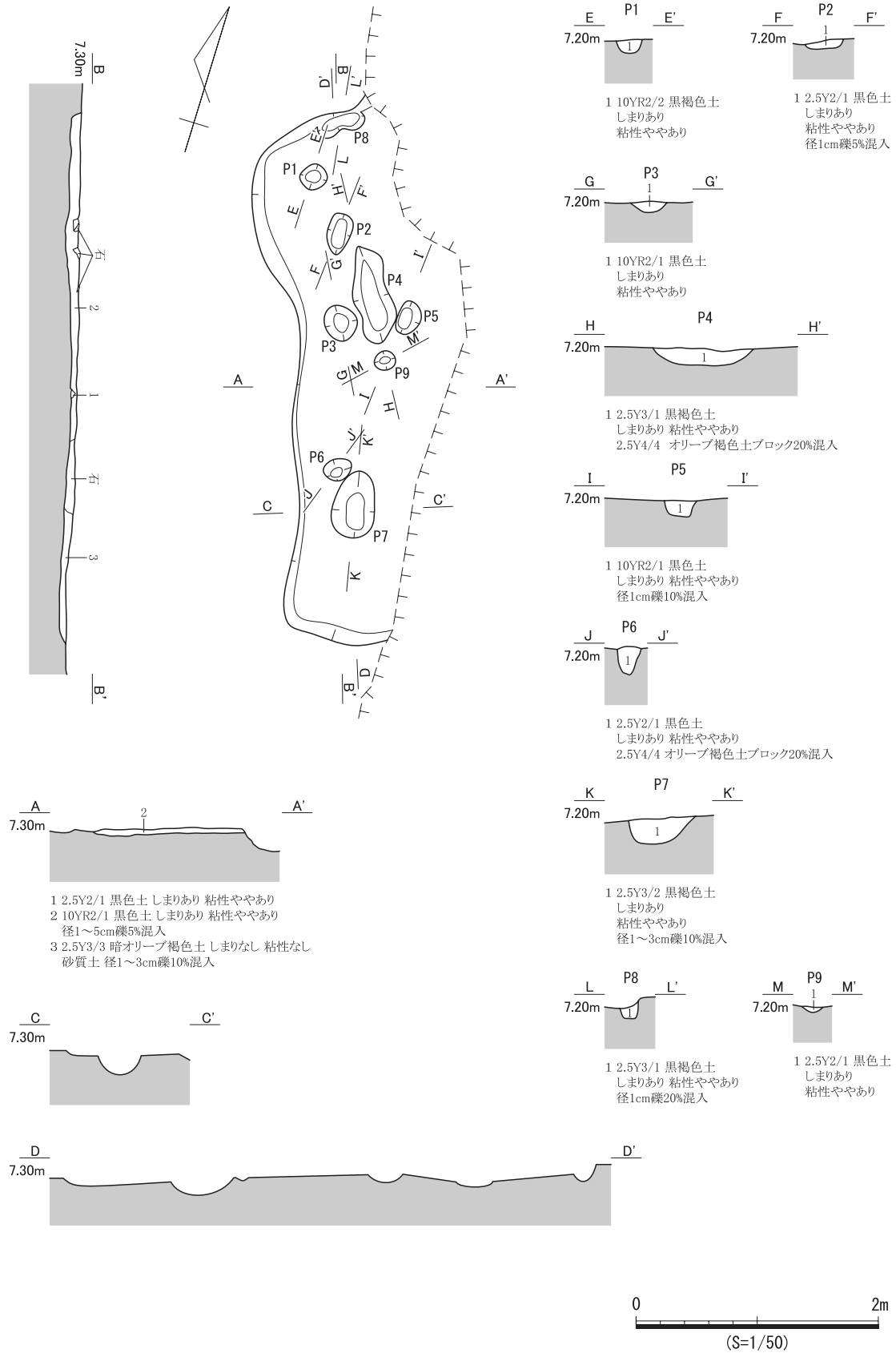


図 316 SB222 遺構図

SB223 (遺構：図317・319、遺物：図318)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡の密集域に位置する。東側は攪乱によって失われ、南側の一部はSB222に切られる。また、南側でSK03926を切る。

形状 南北長は約5.8mを測る。周辺の竪穴住居跡に比べて規模が大きく、南北に長い長方形の可能性はある。その西辺は直線的だが、南北両辺はやや外側が膨らむ弧状を呈す。そのため、北西隅部、南西隅部ともやや丸みをもつ。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

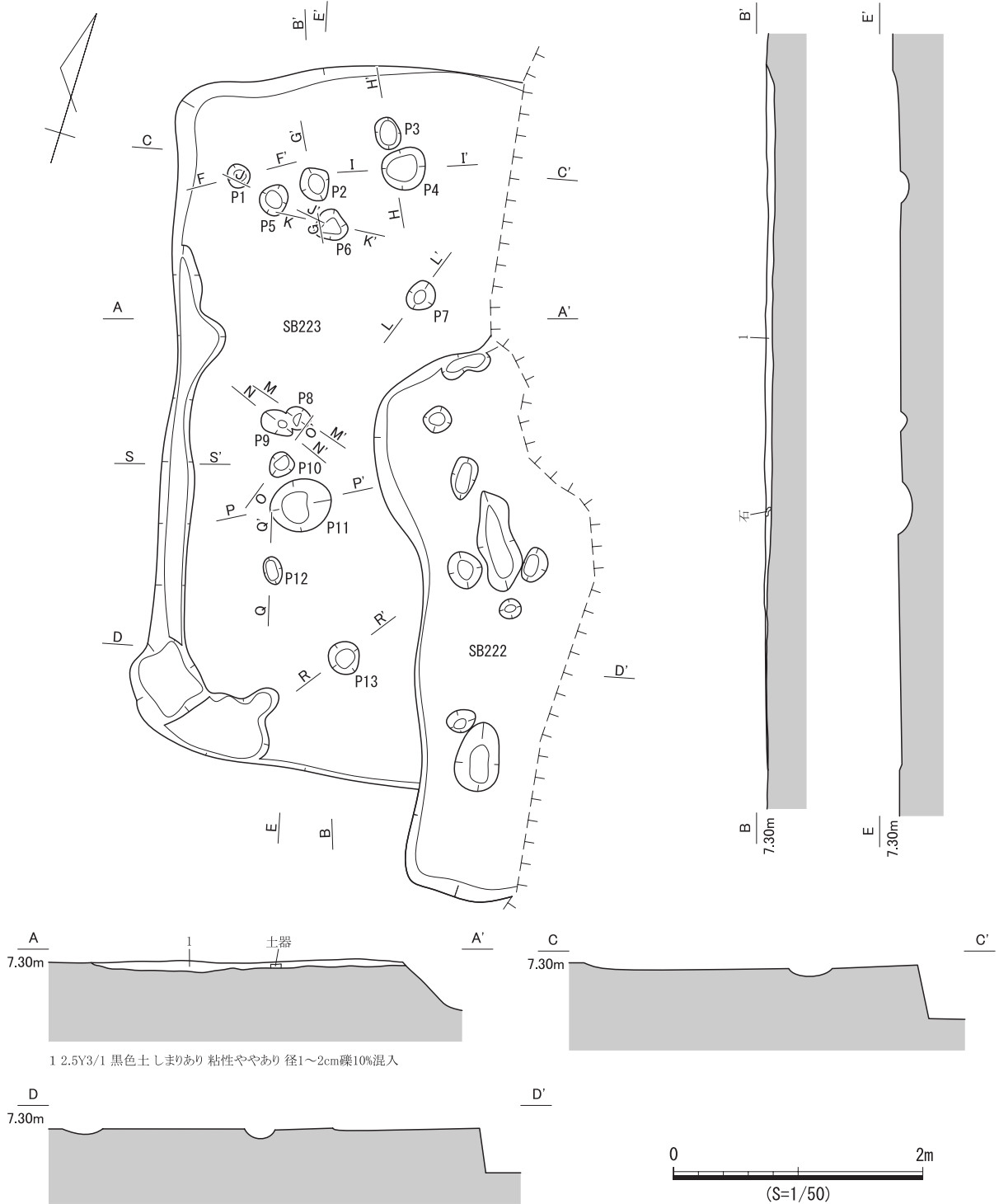


図317 SB223 遺構図(1)

埋土 礫混じりの黒色土が単層で推積する。

床面 床面はほぼ平坦で、硬化面や貼床、炉跡は確認できなかった。直径約0.2m～0.4mの小穴16基確認した。深さは約0.2mのものもあるが、明瞭な柱痕跡は認められなかった。位置関係からみるとP2とP13は西壁にほぼ平行するため柱穴の可能性はある。しかし、P2はやや浅いので、方向が西壁とやや揃わないが、P13と形状が類似するP4が柱穴として適当かもしれない。

遺物出土状況 埋土中から土器153点、石器類1点、小穴から土器22点、壁溝から6点が出土した。摩耗が著しく、多くはVI期～VII期で、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。埋土中の石器類1点は打製石斧(964)である。

出土遺物 964はホルンフェルス製の打製石斧で、下半を折損している。

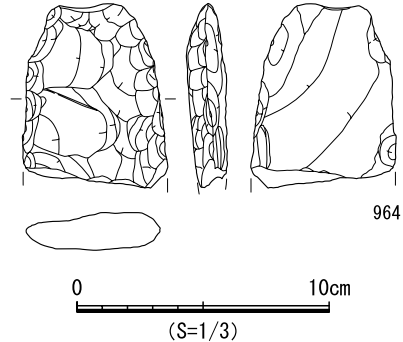


図 318 SB223 遺物実測図

時期 出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。

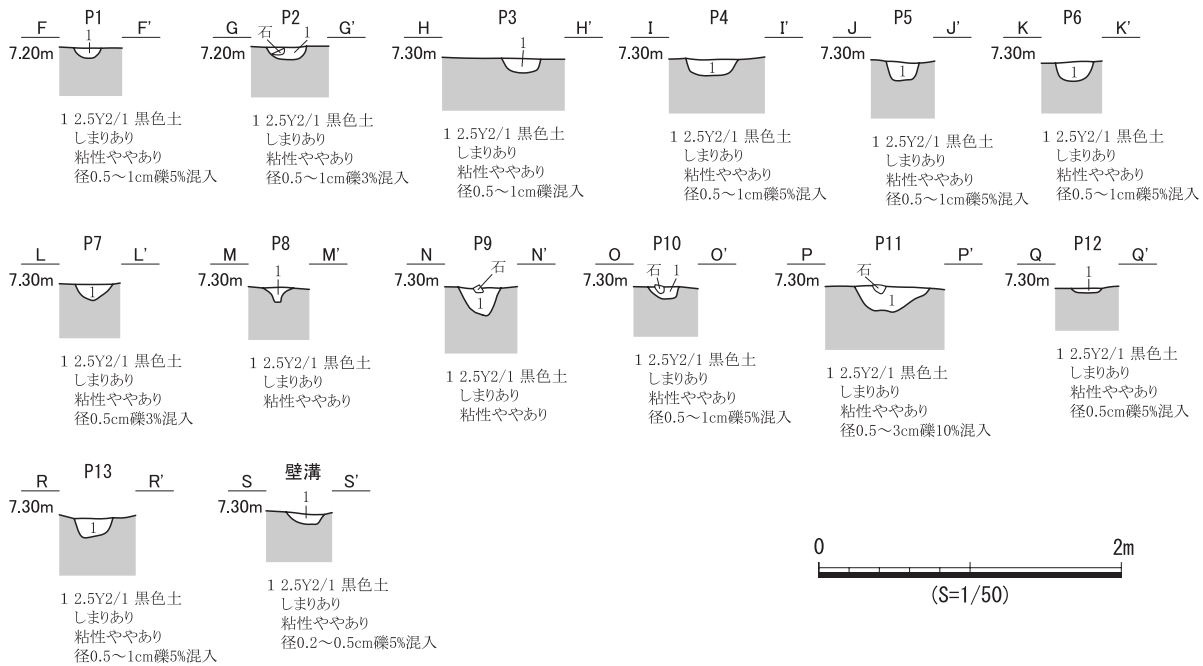


図 319 SB223 遺構図 (2)

SB224 (遺構：図 320)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。確認できたのは東壁付近のみで、西側の大半は攪乱によって失われている。周辺にある竪穴住居跡との重複関係がなく、単独で立地する。

形状 南北長は約4.9mを測る。東壁は中央がやや外側へ膨らみむ。北壁もやや外側へ膨らみ、北東隅部はやや丸みをもつ。東壁面の傾斜は緩やかで、深さは約0.1mと浅い。

埋土 炭化物の混じる黒褐色土が単層で堆積する。

床面 床面は平坦で、一部に硬化面が認められたが、一定の範囲として検出することはできなかった。貼床や炉跡は確認できなかった。直径約0.2mの小穴を13基確認した。いずれも明瞭な柱痕跡は認め

られなかった。深さが約0.1mの浅い小穴が認められる一方で、それらより深い小穴としてP1、P4、P8、P9、P10があげられる。このうち、P1とP10を結ぶ線は平面的に東壁とほぼ平行しているの、柱穴の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器18点、小穴から土器1点が出土した。いずれも摩耗した小片でVI期～VII期の土器にあたるが、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

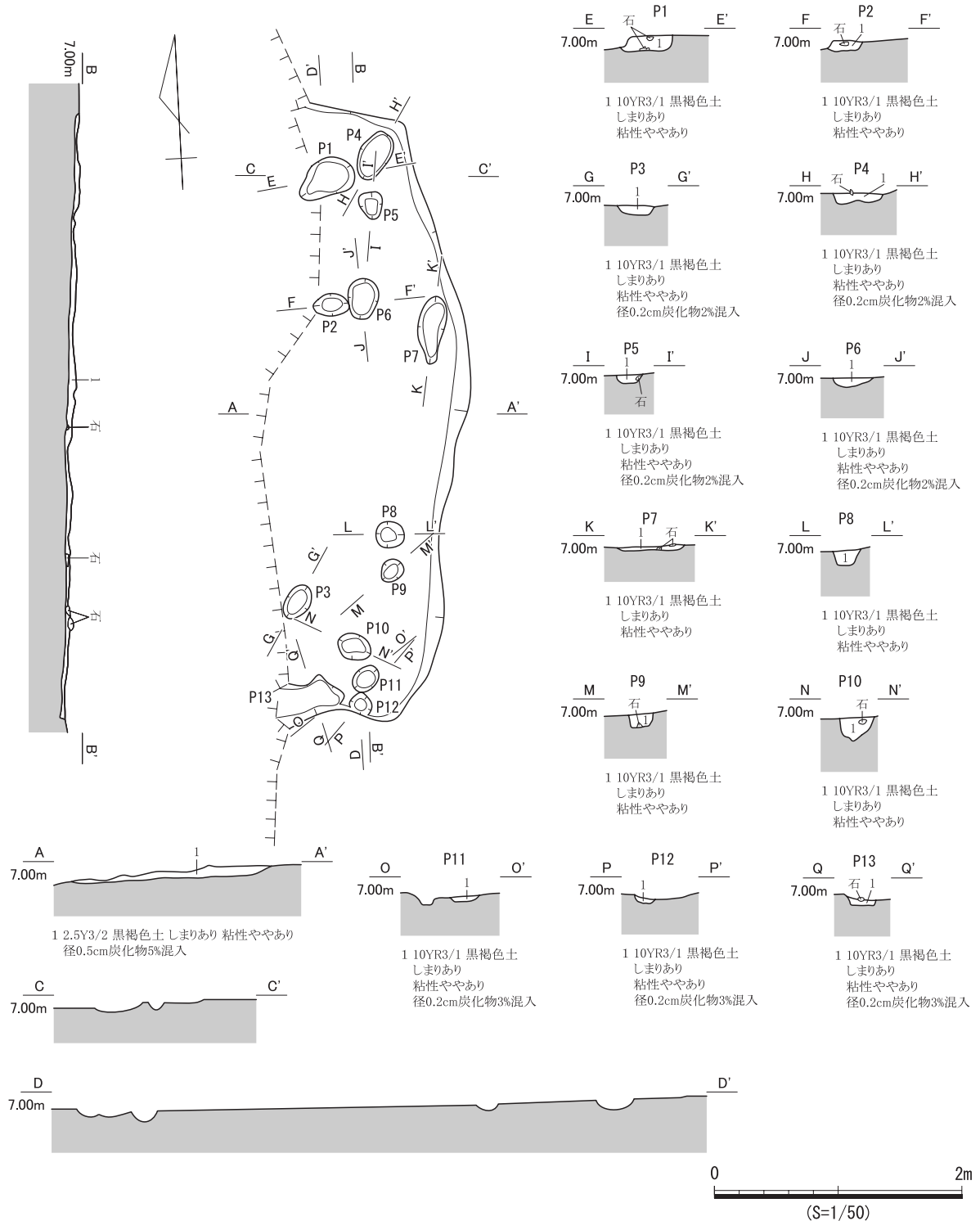


図 320 SB224 遺構図

SB225 (遺構：図321)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、南側でSB226を切る。

形状 南北長約3.5m、東西長約3.1mを測る。北西隅部付近に壁溝が一部認められ、壁溝残存部位で南北長は約3.1mを測るので、平面形はやや隅丸の方形と考えられる。深さは約0.05mと浅く、壁面の立ち上がりはほとんど確認できない。

埋土 礫混じりの黒褐色土が単層で堆積する。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。壁溝は北西隅部にのみ確認できた。床面上で直径約0.3mの小穴を15基確認したが、いずれも明瞭な柱痕跡は認められなかった。深さは約0.2mで底面が平坦なものが多く認められ、周辺の竪穴住居跡の小穴と比べてやや深い。平面的な位置関係からみるとP1、P2、P15、P16が柱穴の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器58点、小穴から土器15点が出土した。大半が摩耗した小片で、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 VI期前半のSB226を切ることから、VI期前半以降と考えられる。

SB226 (遺構：図322、遺物：図323)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、北側をSB225に切られる。

形状 南北長約3.7m、東西長約5.0mで、東西に長い長方形を呈する。東西両辺は直線的で、北辺がやや弧状を呈する。壁面の高さは約0.1mで、東壁以外は急傾斜である。

埋土 3層の埋土が認められた。3層とも礫混じりで、下層には一部砂質土の堆積が認められた。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。北壁に沿う壁溝を確認した。床面上で直径約0.5mの比較的大きな小穴を7基確認した。P1は柱痕跡のある小穴で、対応する小穴は位置関係からP3の可能性はあるが、住居全体との位置関係では全体的に西側へ偏っている。P5は中央付近に位置するため炉跡の可能性はあるが、焼土の堆積や被熱した部位は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,331点、石器類1点、小穴から土器27点、壁溝から1点が出土した。VI期の土器片が大半を占め、そのなかでVI期前半の遺存状況のよい土器片が多く認められた(966、969、970、972)。VI期前半に埋没した可能性を示す土器であろう。

出土遺物 965はVI期の壺H3類。口縁部が短く外反する。胴部には穿孔が認められる。966はVI期の脚付壺K類。脚部は短く外反し、刺突文が施文される。967はV期の鉢A1類。口縁部が強く屈曲して、端部が内傾する。端部、胴部に刺突文があり、頸部直下に直線文が認められる。968も鉢A1類。口縁部の屈曲が967よりもやや弱く、胴部の張りが強い。VI期前半と考えられる。969はVI期前半の高坏C2b類。口縁部が坏底部から直線的に伸びる。口縁部付近のミガキはヨコ方向となる。970はVI期の高坏I類脚部。透孔が裾部付近に位置し、そこから裾部が強く外反する。971、972はVI期前半の高坏B類脚部。長脚で透孔が脚部中位よりやや下がった位置につき、透孔付近から裾部が強く外反する。973はVI期前半の器台B1類脚部。透孔は2穿孔である。974、975は突帯上にキザミが認められ、V期～VI期の手焙り形土器と考えられる。

時期 出土遺物の時期から、VI期前半に埋没したと考えられる。

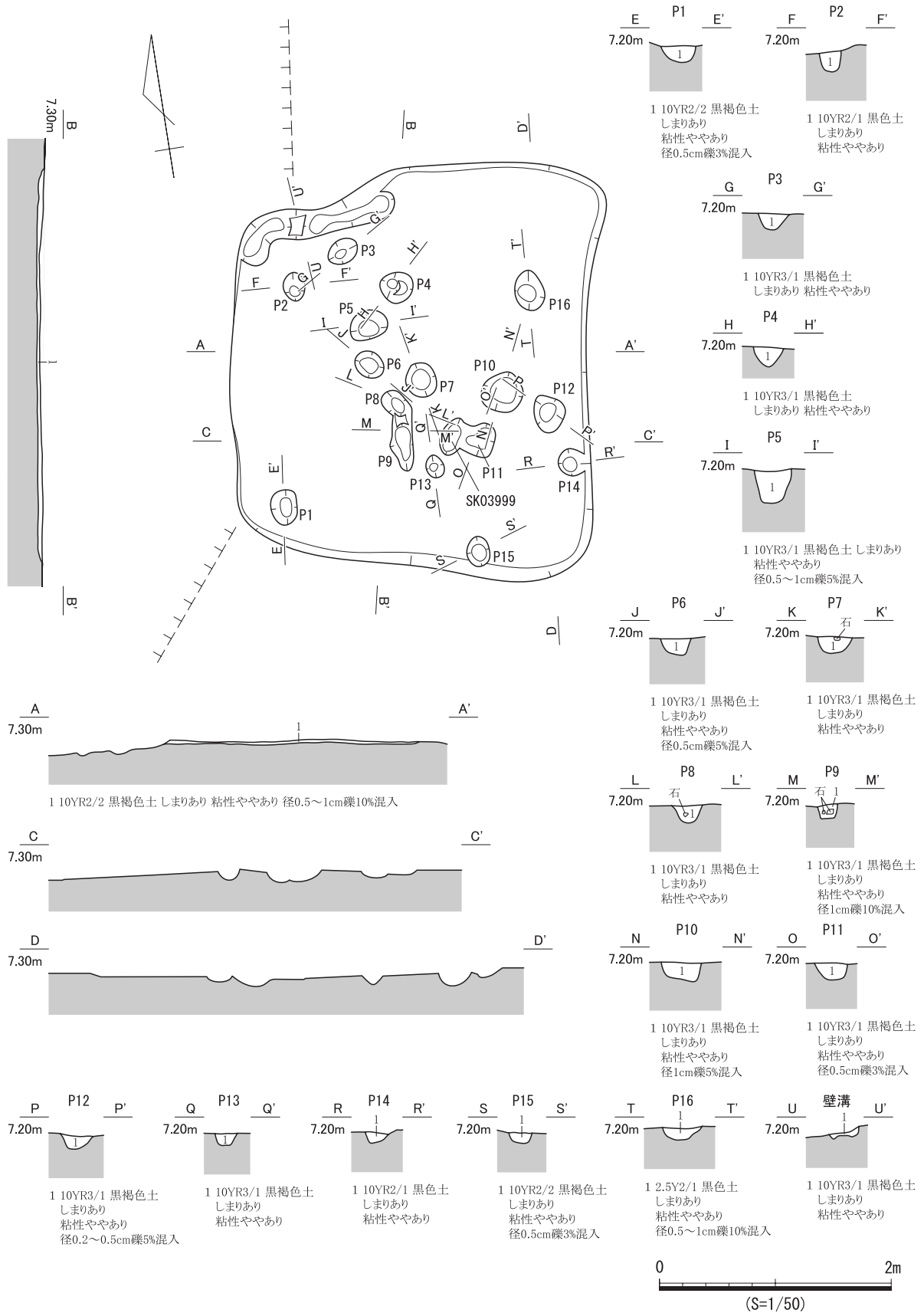


図 321 SB225 遺構図

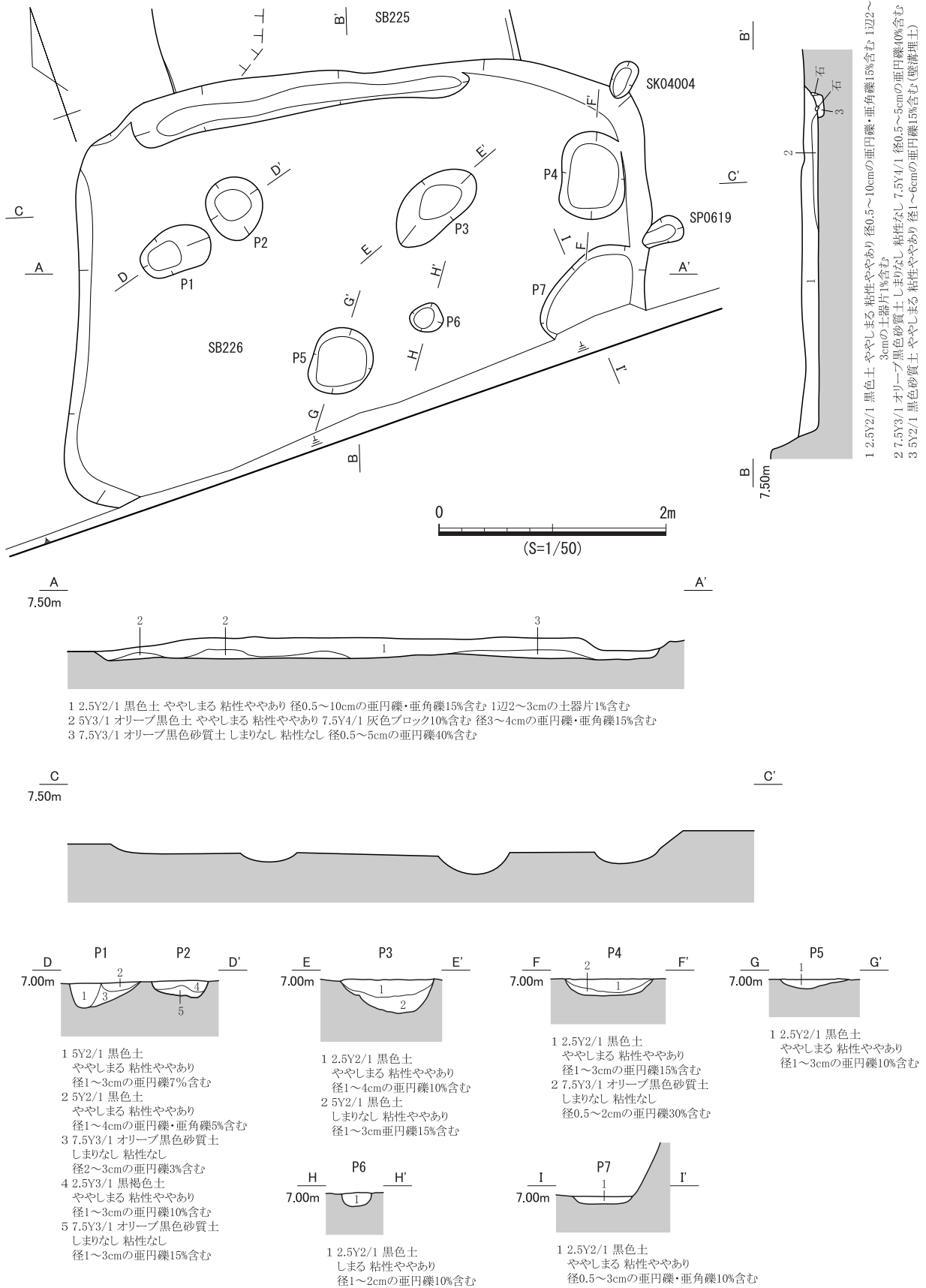


図 322 SB226 遺構図

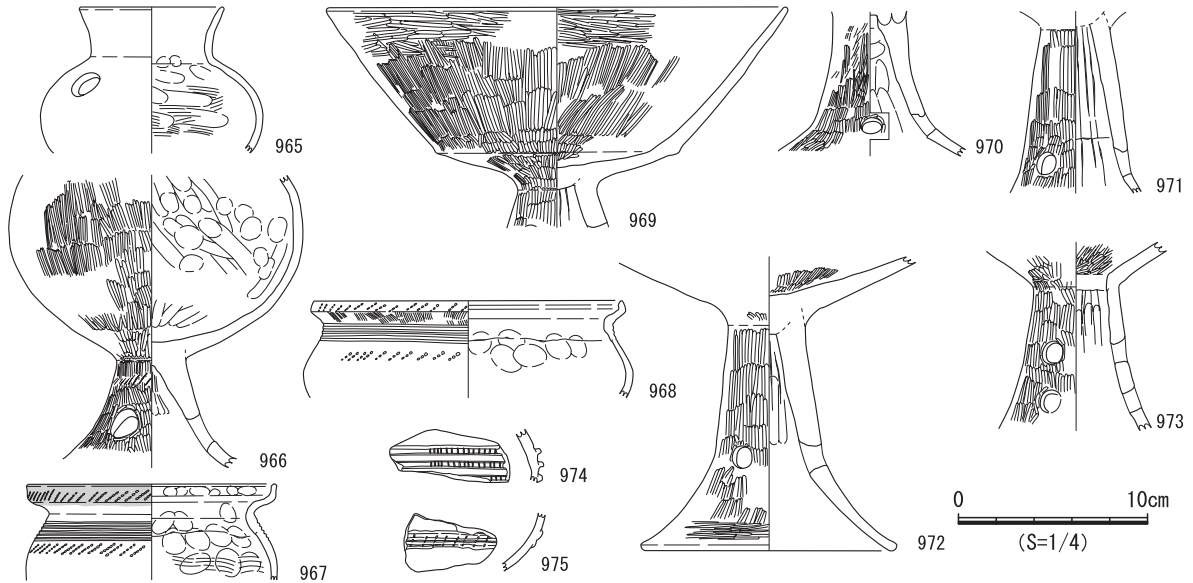


図 323 SB226 遺物実測図

SB227 (遺構：図 325、遺物：図 324)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。南西隅部でSK03960を切り、北半分は攪乱により失われ、全体に不整形である。

形状 平面形の凹凸が著しく、隅部も不明瞭のため、全形は不明である。壁面の高さは約0.2m認められるが、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。いずれも礫が混じり、砂質土の下層は床面直上の一部に堆積する。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。東壁の一部に沿って深さ約0.1mの壁溝が痕跡的に認められた。床面上では直径0.2m～0.4m程度の小穴を11基確認した。P5とP6は断面形状や堆積状況から柱穴と考えられ、P6がP5を切ることから、建て替えの可能性もある。平面位置から対応する可能性がある小穴としてP9、P10、P11があるものの、断面形状が異なる。

遺物出土状況 埋土中から土器791点、小穴から土器42点、壁溝から土器1点が出土した。大半は摩耗したVI期前後の土器片で、一部に縄文時代晩期後半の土器(979)やIV期の土器(976)が認められた。なお、P10からVI期後半の高坏(977)が出土した。P6の検出面でV期(978)が出土したが、出土状況からみて本住居跡の時期を示すとは考えにくい。周囲から流入したものであろう。

出土遺物 976はIV期の甕B2類。口縁部が強く屈曲して、端部は内傾する。977はVI期後半の高坏C2a類。口縁部が直線的に伸び、端部は平坦である。978はV期前半高坏A類の脚部。脚部は付根から直線的に開き、裾部で強く外反する。端部は凹面を形成する。979は縄文時代晩期後半の変容壺の胴部片。突帯上に押し引きが認められる。

時期 P10から出土した遺物の時期から、VI期後半と考えられる。

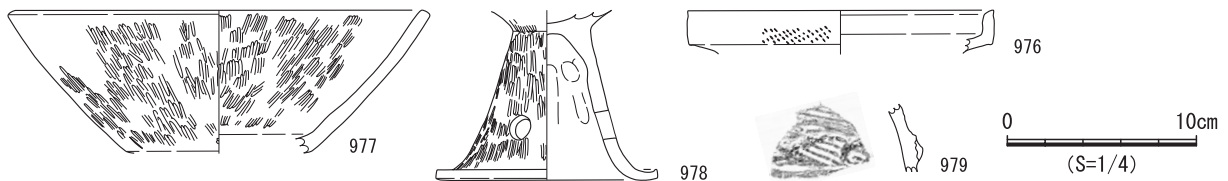


図 324 SB227 遺物実測図

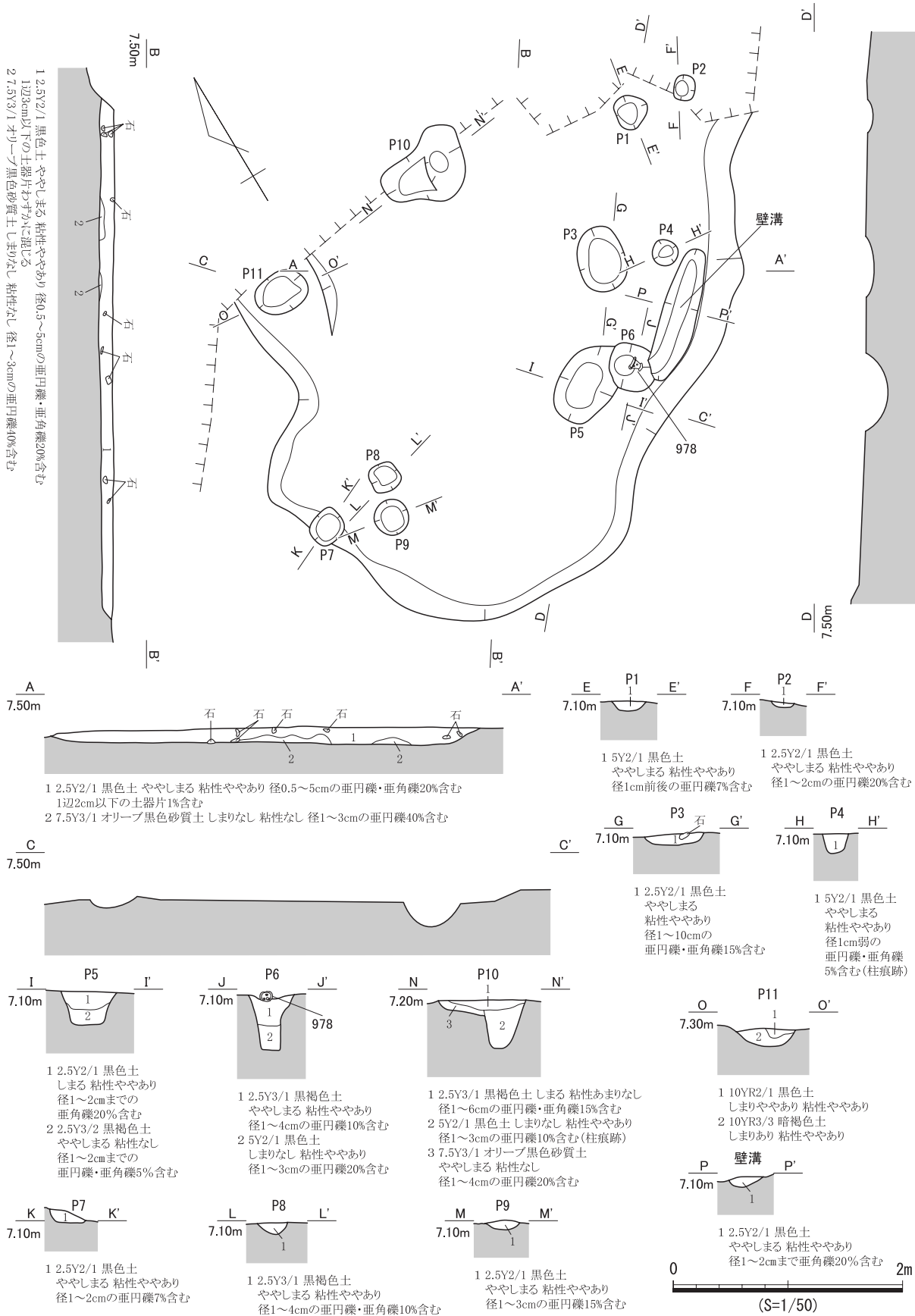


図 325 SB227 遺構図

SB228（遺構：図327・328、遺物：図326）

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北西側は攪乱によって大半が失われ、南東部でSB232を切る。

形状 攪乱によって多くを滅失しているが、南北長約6.8m、東西長約5.0mと考えられる。検出できた北東隅部、南東隅部、南西隅部はやや丸みを持ち、南壁はわずかに弧状となる。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。深さは約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。床面直上に一部砂質土が堆積するが、大半は礫が混じる黒色土が堆積する。

床面 ほぼ平坦で礫が露出し、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面上で小穴を15基確認した。小穴は攪乱によって全形が不明なものも含むが、直径0.3m～0.7m、深さ約0.1m～0.4mのものがある。P5とP6は柱穴状の掘形が認められるが、平面的に竪穴住居跡の中央に位置し、類似する小穴は他に認められなかったため、その性格は不明である。P1からP4は底面が丸いものの、底面付近に砂質土が堆積し、断面形が類似する小穴である。平面的な位置からみて柱穴の可能性が高いが、本住居跡の軸と少しずれる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,234点、石器類1点、小穴から土器65点が出土した。その多くはVI期で、遺存状況のよい土器（980、981）も含まれる。また、一部に縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半（984、985）、V期（982、983）の土器が認められた。これらの土器片は周辺から流入したか、もしくはこの時期の遺構を本住居跡が掘削したことによって流入したかもしれない。なお、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 980はVI期の壺H1b類。口頸部が直線的で、胴部が扁平である。最大径が胴部中央よりわずかに下がった位置にある。981はVI期後半の高坏C2b類。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、端部が内傾する。また、端部の一部に外側へ引き出された形状の部位があり、片口状を呈する。982、983ともにV期の高坏B類。口縁部が短く外反し、983は波状文と直線文が認められる。984は縄文時代晩期後半の深鉢。985は上半に刺突文と瘤状の突起が認められ、下半には貝による条痕が認められる。変容壺の可能性があり、縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半が考えられる。

時期 VI期のSB232を切るが、出土遺物のうち遺存状況のよい土器がVI期であるため、本遺構の時期もVI期と考えられる。

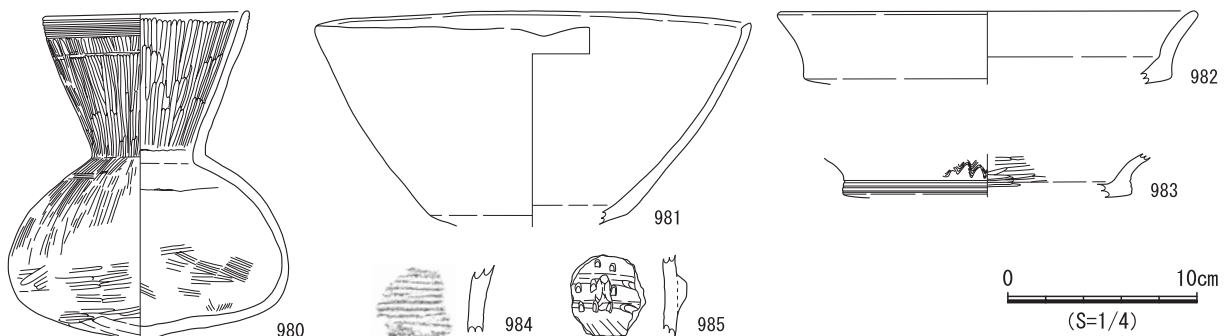


図326 SB228 遺物実測図

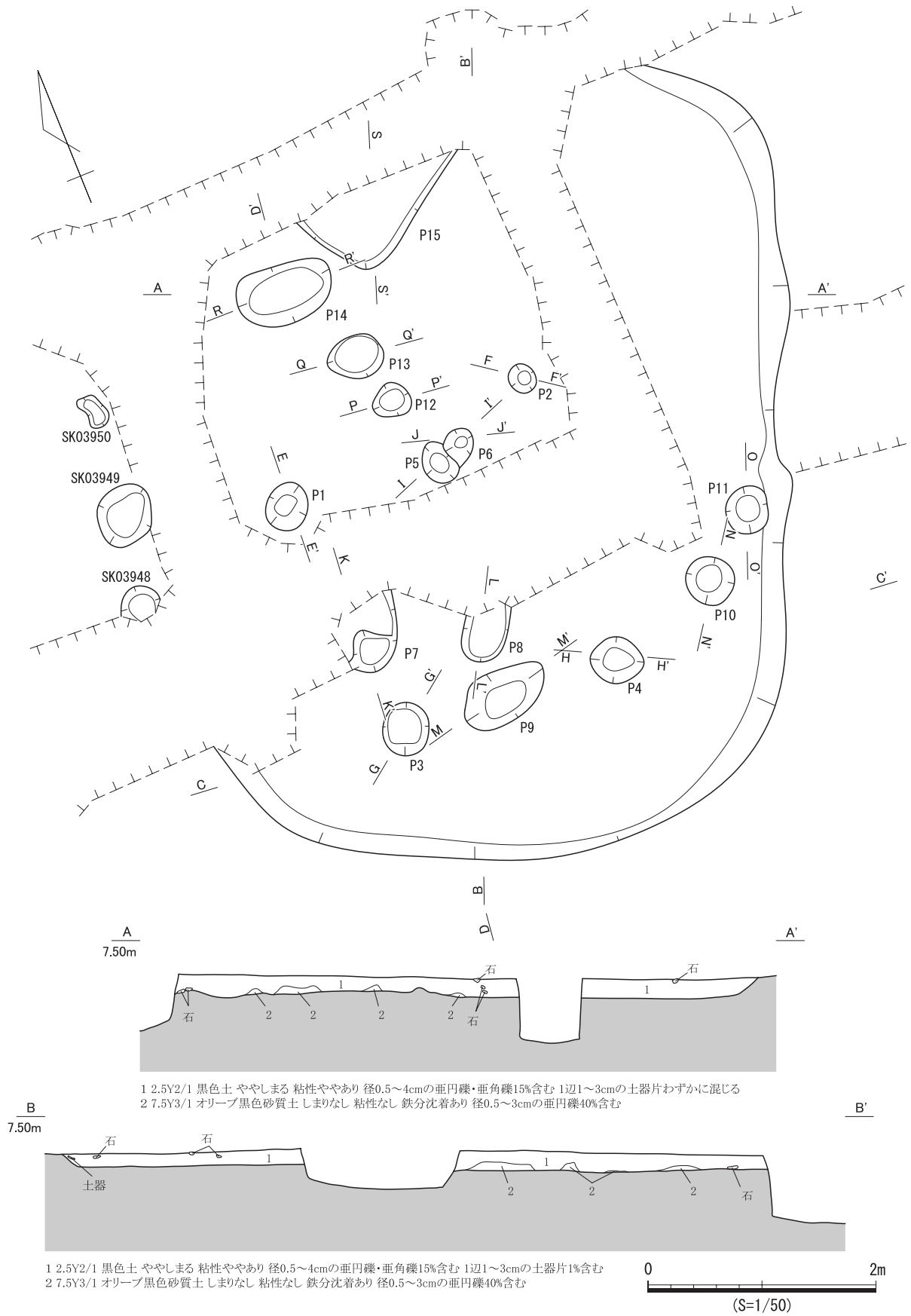


図 327 SB228 遺構図 (1)

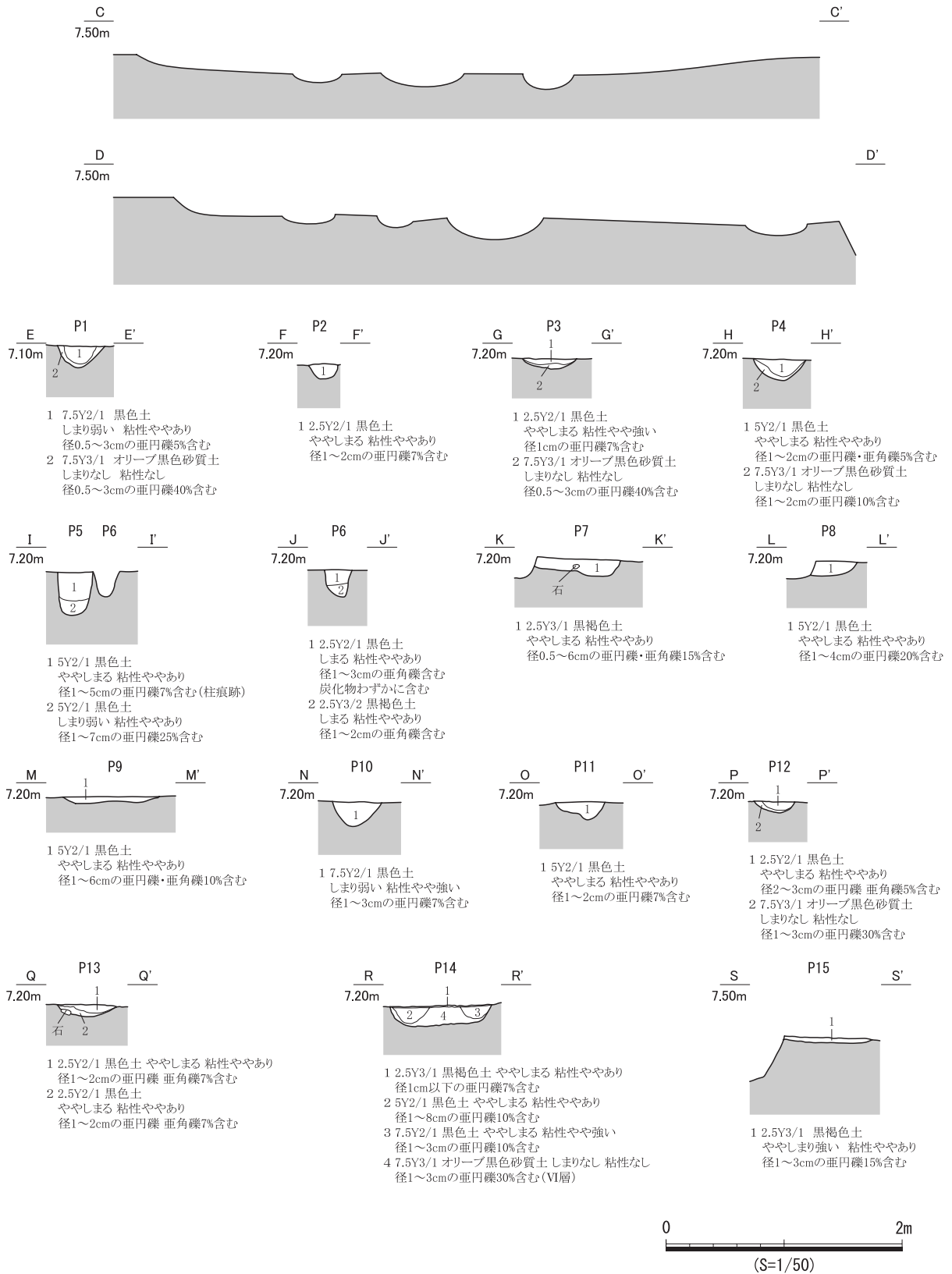


図 328 SB228 遺構図 (2)

SB229 (遺構：図330、遺物：図329)

検出状況 西部東側北寄りの北側の竪穴住居跡密集域に位置する。SB232とSK03966を切り、北西隅部は攪乱によって失われている。

形状 平面形は南東隅部、南西隅部が確認できるが、それぞれの壁面は歪みが大きく不整形である。南北長約4.3m、東西長約3.9mを測る。深さは約0.1mで壁面傾斜は緩やかである。

埋土 礫や炭化物が混じる黒色土が単層で堆積する。埋土中にブロック土などの混入物があることから、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面上で直径約0.3mの小穴を12基確認した。深さ約0.1m～0.2mで、なかにはP4、P11のように底面が平坦な小穴も認められるが、明瞭な柱痕跡は認められなかった。また、平面の位置関係に規則性のある小穴も認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,672点、石器類2点が出土し、小穴から土器39点が出土した。土器の大半はⅥ期～Ⅶ期であるが、Ⅴ期の土器(988)の土器もわずかに認められた。なお、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 986はⅥ期～Ⅶ期の壺B1類。口縁部が短く外反し、打ち欠きが認められる。987はⅥ期～Ⅶ期の壺胴部と考えられる破片に線刻のある資料。円弧状の意匠の外側にさらに別の意匠がつながる。988は口縁部が短く立ち上がるⅤ期の高坏B2a類。端部は外側へ拡張して、直線文を施文する。波状文も認められる。989はⅦ期の土製品。遺存する破片は一部のみだが、口縁部が残り長軸が復元可能である。復元した長軸は推定約9.3cmで、平面形が楕円形を呈すると考えられる。短軸はその最大長に相当する破片を欠損するが、上部に位置する沈線に短軸の最大長に相当する部位まで残存するのが認められるので、この部位の延長上で短軸長を推定すると約4.3cmとなる。断面形は傘形で天井部にわずかに平坦な部分が認められる。この部分に貝による羽状文が認められる。口縁部下半2分の1付近に細沈線を配し、その下位に精緻な文様を施文する。口縁部下半の沈線さらに下方に細沈線をめぐらせ、その上下に別の文様が認められる。上段はクシによる山形文を二重にして施文し、下段には沈線を挟んで羽状文を貝によって施文する。また、口縁部下半の沈線より上から天井部の平坦部まで赤彩を施す。989は狭い範囲内での文様の使い分け、天井部のわずかな部位への施文などに精緻なつくりが認められる資料である。平面形、断面形、さらには法量の点から石製合子との類似点が多いので、石製合子と類似する土製の蓋と考えられる。また、時期は先にもふれたが、施文された文様がⅦ期の高坏D類の文様に類似することから、それと同じ時期と考えられる。

時期 出土遺物の時期とⅥ期～Ⅶ期のSK03966とⅥ期のSB232を切ることから、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

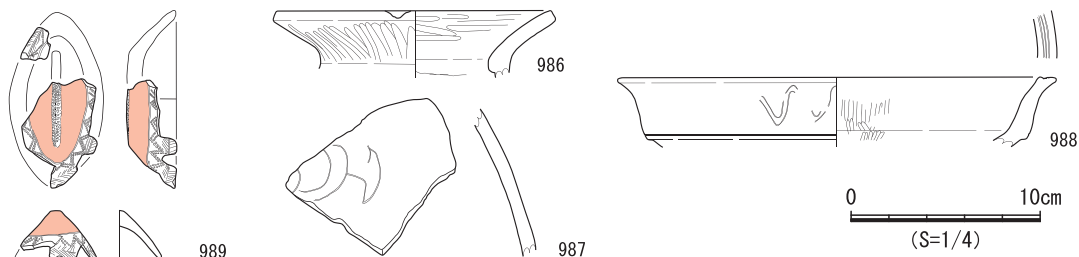


図 329 SB229 遺物実測図

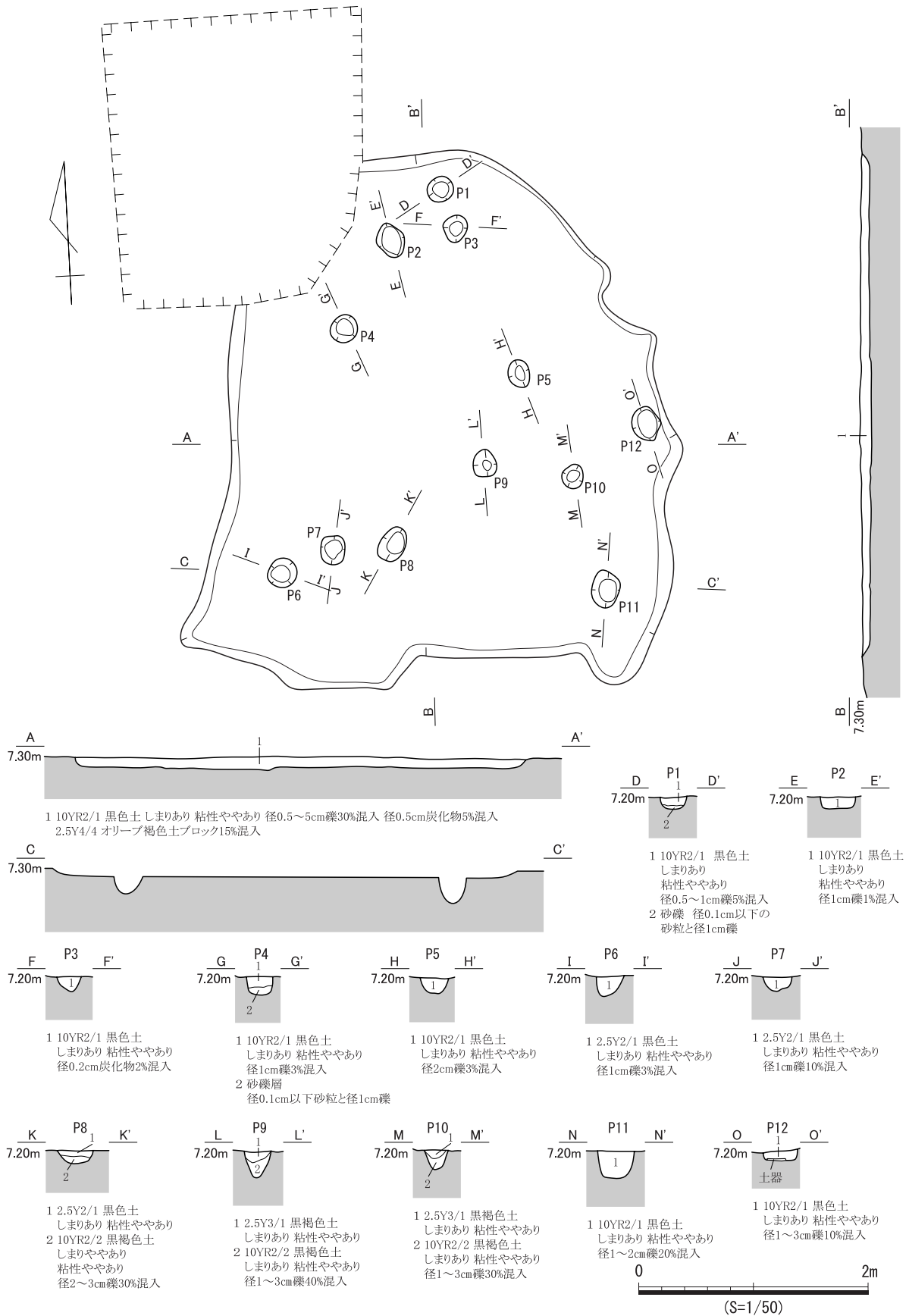


図 330 SB229 遺構図

SB230 (遺構：図 332・333、遺物：図 331)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。周辺の時期が前後する複数の竪穴住居と重複し、SB228とSB229に切られ、SB231とSB232を切る。北壁の一部を攪乱によって失われており、SB228によって東壁は削平されている。

形状 南北長は約5.8m、東西長は東側にある壁溝から推定すると約5.7mと考えられ、平面形は方形と考えられる。西辺は直線的だが、その他の壁面は不整形である。深さは約0.2mであり、壁面は急傾斜である。

埋土 2層に分層した。礫が混じる黒色土が厚く堆積し、砂質土が床面直上にわずかに堆積する。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。東側で南北方向に伸びる溝は、西壁と平行することからみて、滅失した東壁に沿う壁溝と考えられる。また、直径約0.3mの小穴を4基確認し、その位置は東壁付近に偏在する。深さは約0.1m～0.2mで明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器820点、小穴から土器9点、壁溝から土器5点と粘土塊が出土した。土器はいずれも摩耗した小片で、VI期～VII期に属する。なお、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 990はVII期の高坏D類。脚部が付根から外反する。991は低脚の甕脚部でVI期～VII期の甕E類の可能性が高い。

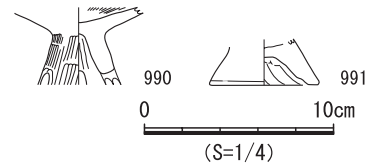


図 331 SB230 遺物実測図

時期 出土遺物の時期と重複する周辺の竪穴住居との関係から、VI期～VII期と考えられる。

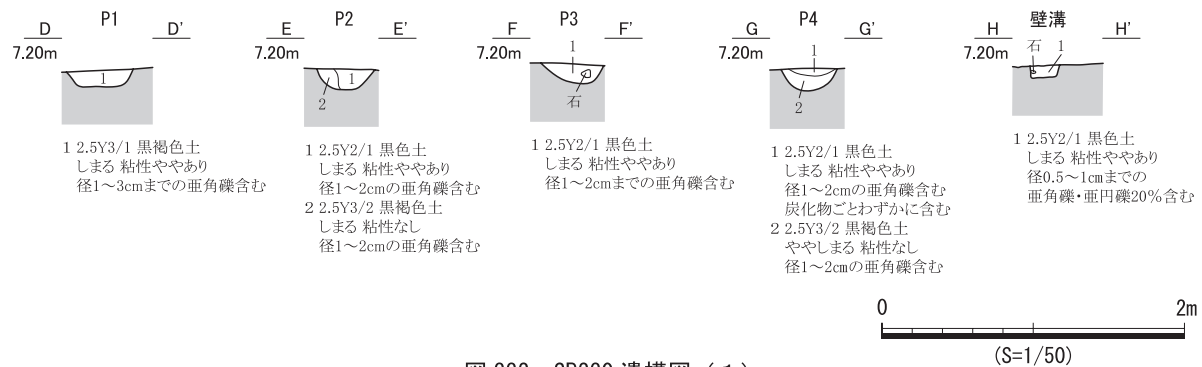


図 332 SB230 遺構図 (1)

SB231 (遺構：図 335、遺物：図 334)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東側の多くは、SB230とSK03966によって切られる。

形状 南北長は約5.0mを測る。西辺と南辺は直線的だが、北辺は不整形で外側に広がるように伸びる。深さは0.2m以下で、北壁と西壁の壁面傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。礫の混じる黒色土が厚く堆積し、壁面付近や中央部の床面直上に砂質土が堆積する。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。南西隅部付近に位置する小穴を3基確認した。いずれも0.1mにも満たない浅い小穴で、明瞭な柱痕跡は認められなかった。また、重複する遺構底面の小穴との位置関係も検討したが、柱穴の想定には至らなかった。

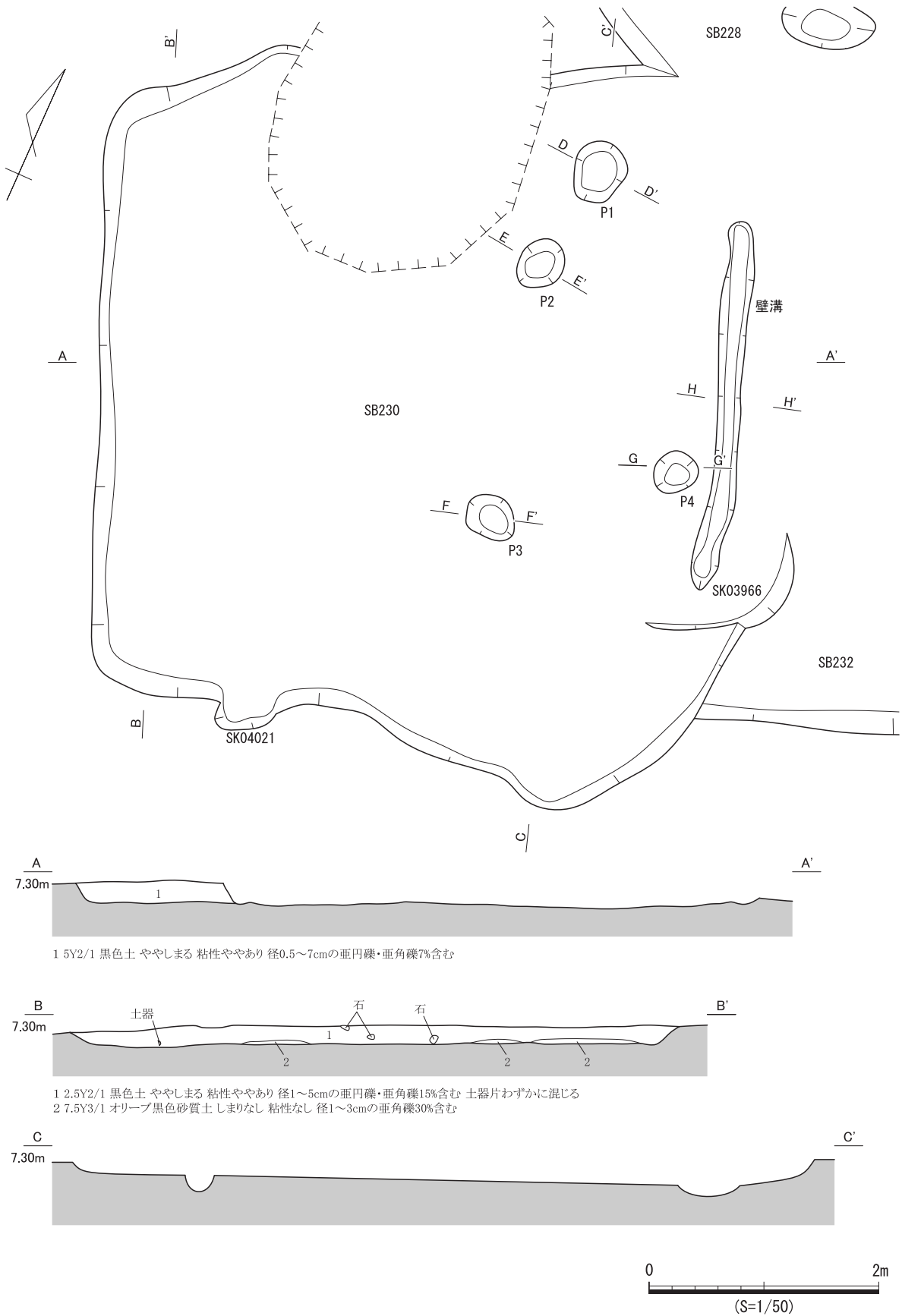


図 333 SB230 遺構図 (2)

遺物出土状況 埋土中から土器760点、小穴から土器119点が出土した。土器の多くはVI期～VII期の摩耗したもので、一部に縄文時代晩期後半の土器(994)が認められたが、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

出土遺物 992は内外面にハケ目が認められるVII期の壺C類。口縁部が短く直線的に立ち上がるが、やや外方へ開く。993は外面にハケ目が認められる壺B類底部。胴部が強く膨らむことから、下膨れの胴部をもつと考えられる。VII期の壺B類の可能性はある。994は縄文時代晩期後半の深鉢の胴部片。やや右下がりの条痕が認められる。

時期 後出するSB230はVI期～VII期であるものの、出土遺物の時期からVI期～VII期と考えられる。



図 334 SB231 遺物実測図

SB232 (遺構：図 336・337、遺物：図 338)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。北側でSB228、西側でSB229、SK03966に切られる。北壁、西壁とも後出するSB228・SB229によって失われている。

形状 南北長約5.5m、東西長約5.3mではほぼ方形である。南辺は直線的だが、東辺はわずかに弧状で南西隅部は丸みをもつ。深さは約0.1mで南壁、東壁ともに壁面傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。いずれも礫が混じり、床面直上に砂質土が堆積する。

床面 床面はほぼ平坦で礫層が露出し、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面上で小穴を8基確認した。直径約0.3mの小穴で、深さは約0.2mである。明瞭な柱痕跡は認められなかったが、P1～P3、P5の4基は埋土に炭化物が混じる。また、床面上で北西隅部を除き全周する、幅約1.0m、深さ約0.1mの溝を確認した。北壁中央付近が深くなり、掘形に伴う溝と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器990点、小穴から土器5点、掘形に伴う溝から土器202点が出土した。摩耗した土器小片が多く、主にVI期前後の土器が認められた。P1からV期末～VI期前半の高坏(997)が出土した。他にも同時期の土器(995、996)が認められる。掘形に伴う溝の土器はいずれもVI期前後の小片であり、縄文時代晩期後半の土器(1000、1002)も出土した。

出土遺物 995はV期末～VI期前半の甕A3類。口縁端部が弱く屈折し、沈線と刺突文が認められる。996はV期末～VI期前半の鉢A3b類。口縁部が強く屈折し、端部は肥厚気味である。端部、胴部に刺突文、頸部直下に直線文が認められる。997はV期末～VI期前半の高坏B3b類。口縁部が強く外反し、端部は尖り気味である。998は内外面に太い沈線のある縄文時代晩期後半の浅鉢。999はV期～VII期の壺胴部片。一部に線刻が認められる。1000は尖り気味の口縁端部の下に低い突帯を貼り付けし、押圧が認められる縄文時代晩期後半～I期初頭の壺。1001はわずかに外反する口縁部に半截竹管による短沈線が認められる。I期の資料で深鉢であろう。1002は口縁端部がやや外方へはみ出す縄文晩期後半の深鉢。外面には、右下がりの条痕がわずかに認められる。

時期 出土遺物の時期とVI期～VII期のSB228、SB229、SK03966に切られることから、V期末～VI期前半と考えられる。

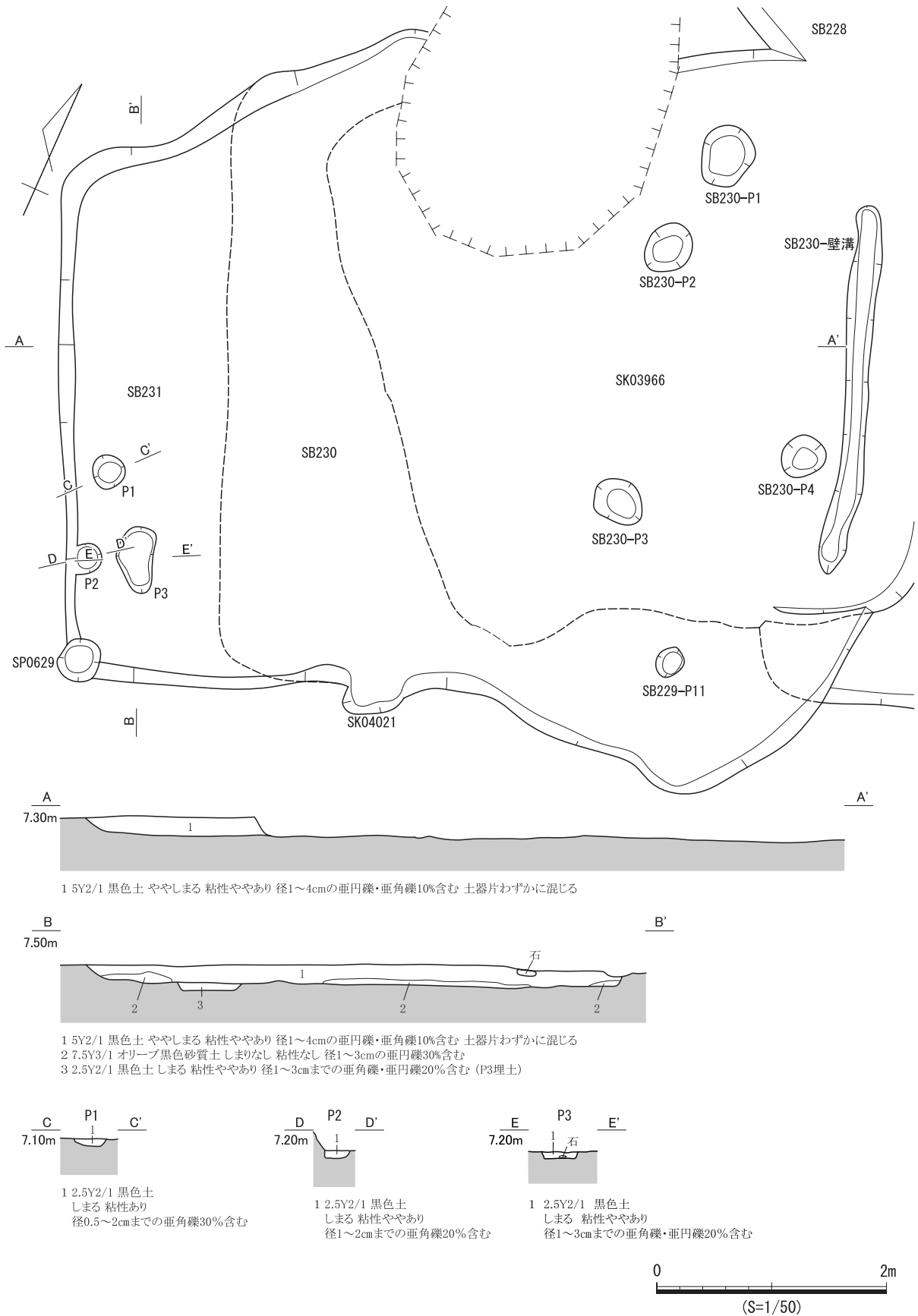


図 335 SB231 遺構図

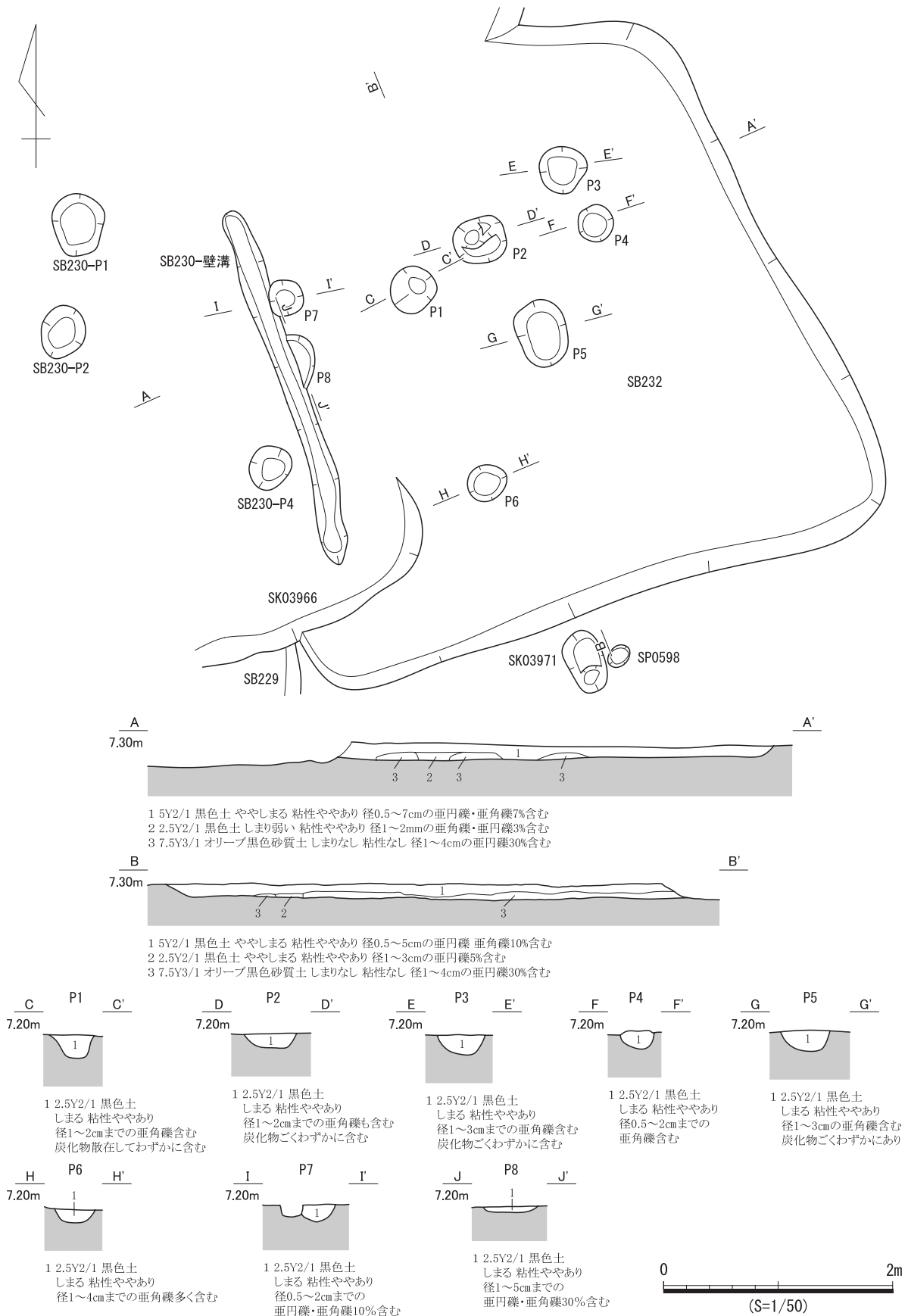


図 336 SB232 遺構図 (1)

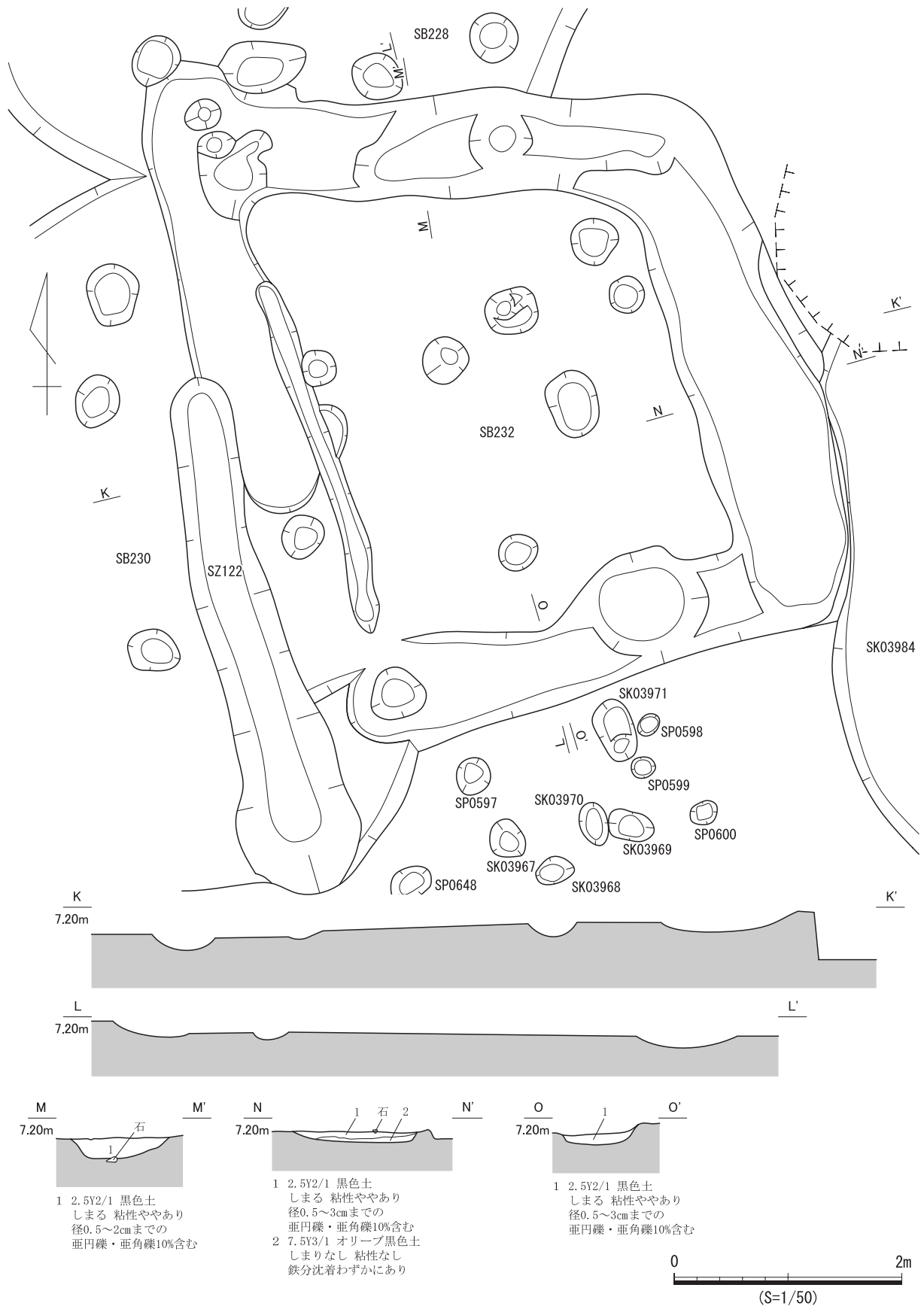


図 337 SB232 遺構図 (2)

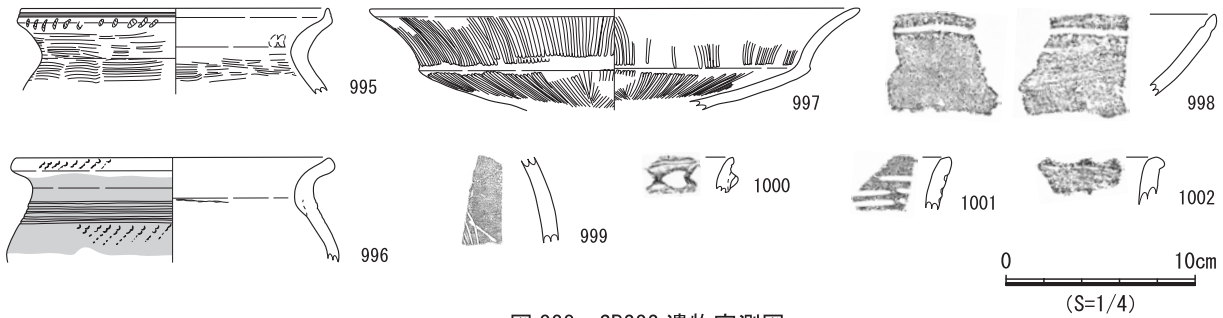


図 338 SB232 遺物実測図

SB233 (遺構：図 339、遺物：図 340)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側でSK03982を切り、SK03976に切られる。また、北東隅部と南壁の一部を攪乱によって失われている。

形状 南北長約4.5m、東西長約3.9mを測る。北辺と西辺は直線的だが、東辺と南辺は弧状となり不整形である。深さは約0.2mであり、北壁の壁面は急傾斜だが、その他の壁面は緩やかである。

埋土 4層に分層した。礫やブロック土の混入が顕著であり、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面上で直径約0.2mの小穴を3基確認した。いずれも東壁際に分布し、P1とP3は断面形から柱穴の可能性はあるが、対応する柱穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器9,707点、小穴から土器71点、石器類1点が出土した。Ⅴ期～Ⅸ期までの土器片が認められ、そのなかで大半を占めるのがⅦ期の土器である。P3からもⅦ期の土器(1023)が出土し、Ⅷ期の土器は重複するSK03976の土器が混入した可能性がある。

出土遺物 1003はⅥ期～Ⅶ期の壺A3類。内面に屈折する部位から、口縁端部まで羽状文を施文する。1004は口縁端部を上下に拡張するⅦ期の壺A5類。端部には2条の沈線が認められ、外面の端部と頸部以下、内面の口縁部に赤彩を施す。1005はⅦ期の壺C類。口縁部が短く直立するが、全体に器壁が厚く、つくりが雑である。1006～1008はⅧ期～Ⅸ期の小型丸底壺。口縁部が内湾しながら立ち上がり、偏平な胴部が認められる。いずれも精緻なミガキは認められない。1009はⅥ～Ⅶ期の壺底部。1010は下膨れを呈するⅧ期～Ⅸ期壺の胴部下半。胎土・調整からSK03976出土3048と同一個体の可能性がある。1011～1015はⅦ期～Ⅷ期の甕D類。1011、1012は甕D3類、1013は甕D2b類である。1014、1015は脚部。1014は小型品であろう。1016はⅦ期高坏G3c類。1017はⅦ期の高坏D2類。内湾する口縁部をもち、端部は下端をやや肥厚させて内傾面を形成する。1018はⅦ期高坏D4類。多条沈線を4帯施文し、その間に山形文と対向山形文を施文する。1019はⅦ期の高坏D類脚部。付根径が小さく、付根から脚部が外反する。坏底部の段はわずかに認められる。1016、1018は多条沈線が少条化していること、1019の坏底部が狭くなっていることから、Ⅶ-2期前後と考えられる。1020はⅦ期の高坏D類の脚部。側面に打ち欠きの痕跡が認められ、破損した断面に煤が付着する。1021は付根に直線文が認められる脚部。Ⅴ期の高坏I類の可能性はある。1022はⅦ期高坏D類の脚部。付根から脚部はわずかに内湾する。1023は小型の高坏脚部。強く外反することからⅦ期の高坏GもしくはH類と考えられる。

時期 出土遺物の時期及びP3出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

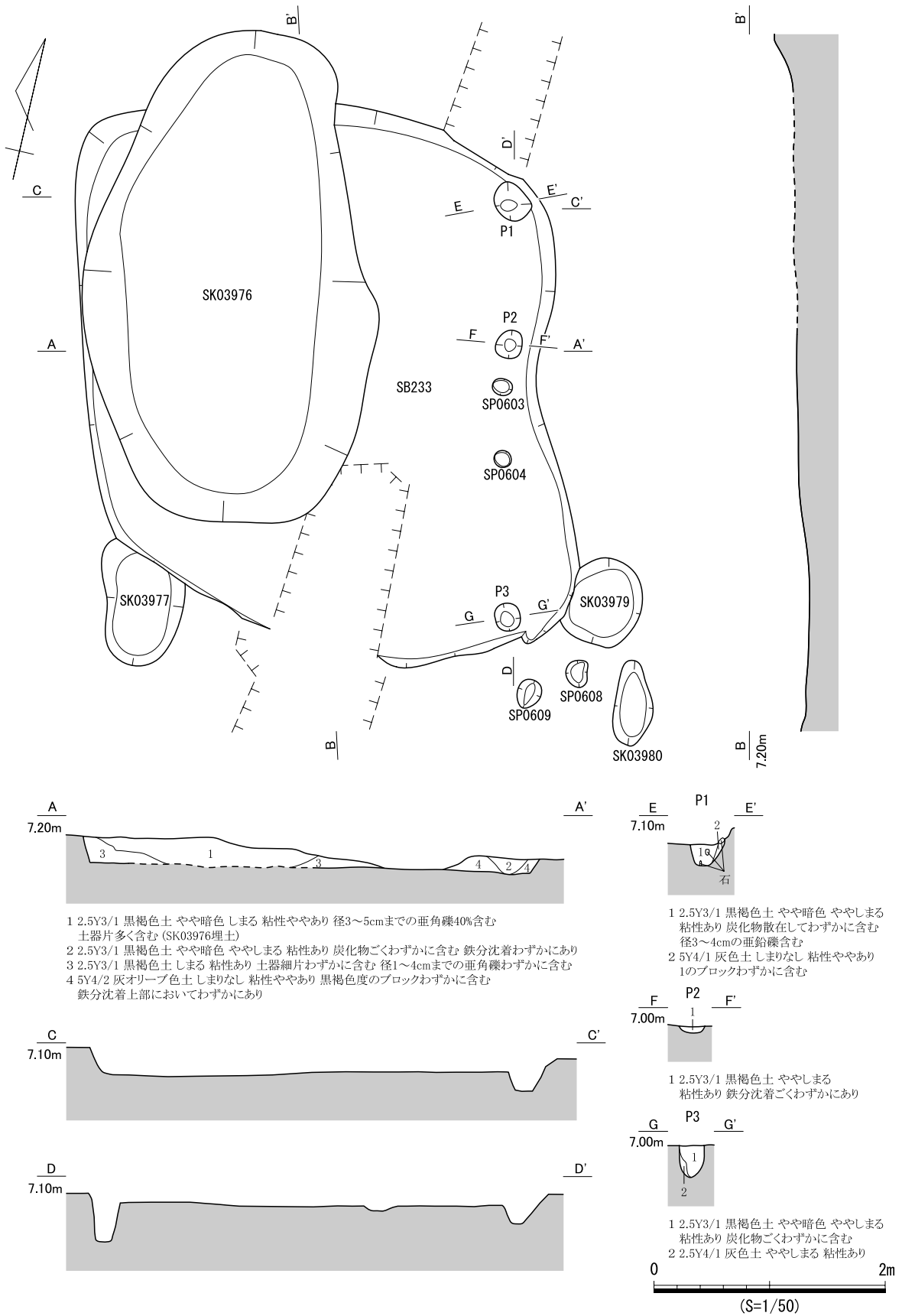


図 339 SB233 遺構図

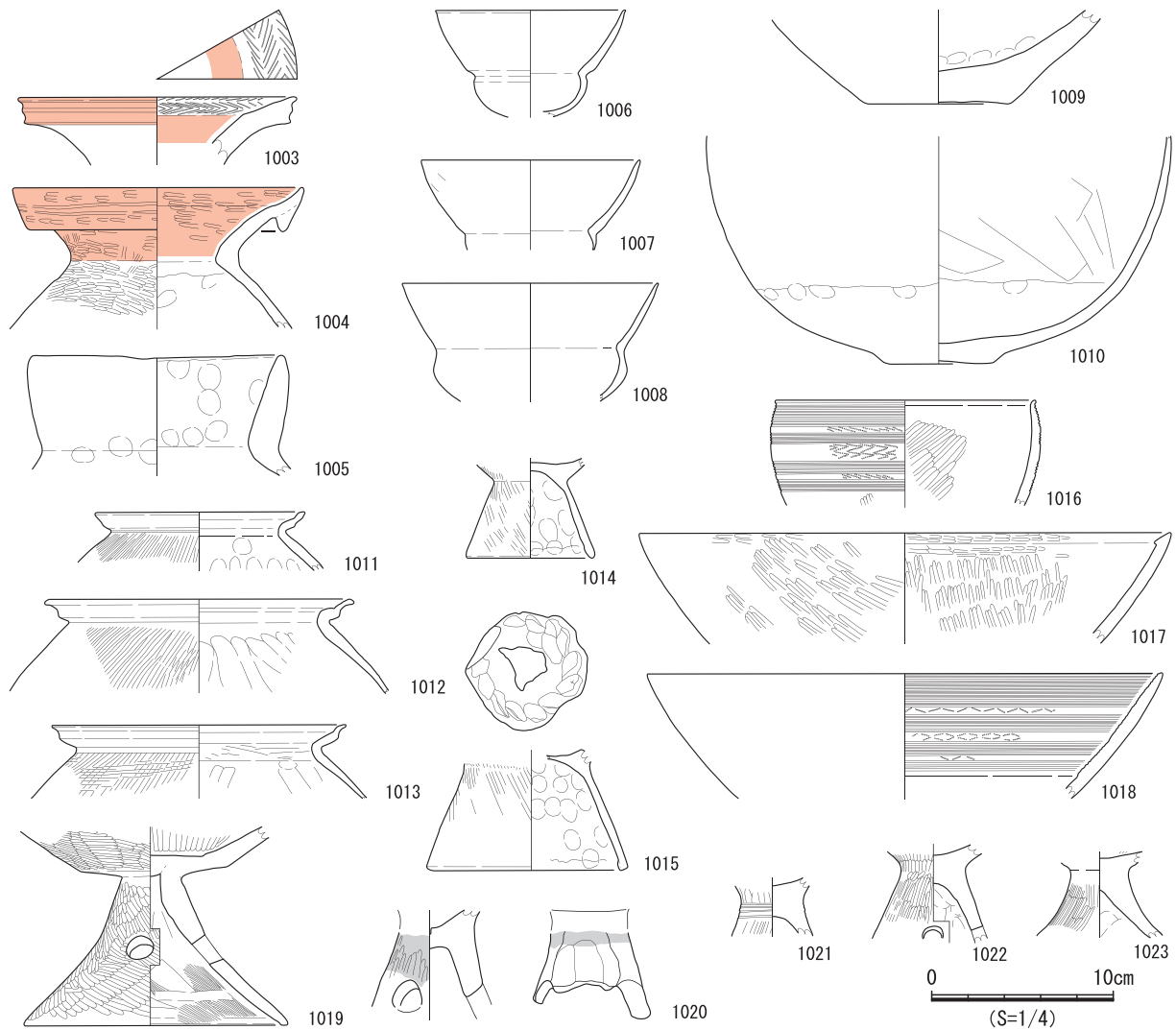


図 340 SB233 遺物実測図

SB234 (遺構：図 341、遺物：図 342)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、SB237 を切り、SK03985 に切られる。

形状 北西隅部、南西隅部はいずれも丸みを持ち、西辺は内側へ向かって弧状を呈する。南北長は約 6.8m で、北壁付近では深さ 0.1m にも満たないが、西壁付近では約 0.3m の深さがある。

埋土 3層に分層し、ほぼ水平堆積である。上層のみに礫が混じる。東側に位置する溝が壁溝であれば、A断面4層とB断面2層が掘形を埋めた土層と考えられる。

床面 ほぼ平坦で、硬化面や炉跡は確認できなかった。東側に幅約 0.1m の溝を確認した。北端が北との位置関係に合致しない点に課題があるが、西壁面にほぼ平行することや埋土の検討から、壁溝の可能性が高い。また、小穴を4基確認した。P2は柱痕跡を確認したが、その他は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器 2,144 点、石器類 1 点、小穴から土器 76 点、壁溝から土器 77 点が出土した。小片が出土した縄文時代晩期後半 (1034~1036) の土器やⅣ期 (1028、1029) の土器を除くと、残る大半はⅤ期後半~Ⅷ期の土器である。なかでも、Ⅶ期前半とⅧ期の土器の割合が高い。1031はほぼ完存品のⅤ-3期の高坏で、重複するⅤ-3期のSK03985より混入した可能性が高い。

出土遺物 1024はⅧ期の小型丸底壺。口縁内面に暗文風のミガキが認められる。1025はⅧ期の柳ヶ

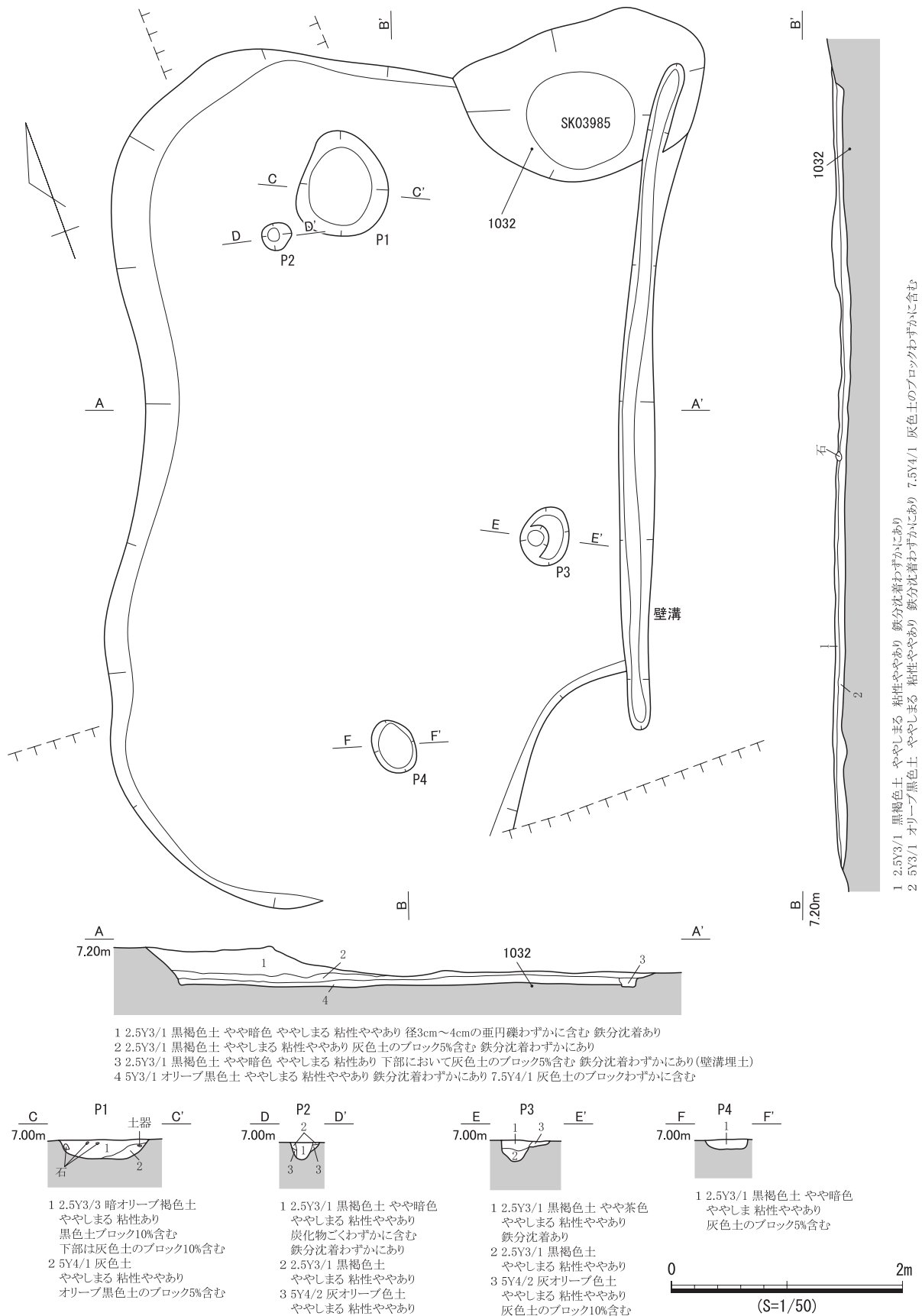


図 341 SB234 遺構図

坪型壺E類。口頸部が頸部から外方へ直線的に伸び、口縁部で屈折して再び立ち上がる。口縁部には打ち欠きが認められる。1026はV期の脚付壺K類の胴部と考えられる。突帯の間のスタンプ文は二重の円形で、それぞれを右下がりの沈線であらわす双頭渦文的にしている。1027はVII期の甕D2a類である。1028、1029はIV期の高坏A類。口縁部が内湾し、端部に平坦面を形成する。1030はVII期の高坏C4d類。多条沈線4帯の間に山形文を施文する。1031はV期高坏B3a類。口径が大きく、口縁部が強く外反する。脚部は付根から外反し、裾部でさらに外反を強める。1032はVII期の高坏D1類。坏底部が狭小で、わずかな内面の段をもって口縁部が立ち上がる。内面には羽状ミガキが認められる。1033はV期の器台A類。1034～1036は縄文時代晩期後半の資料。1034は口縁端部直下に押し引きのある突帯を貼付する深鉢。1035は口縁端部を外方へ折り曲げ、その直下に突帯を貼付する深鉢。1036はわず

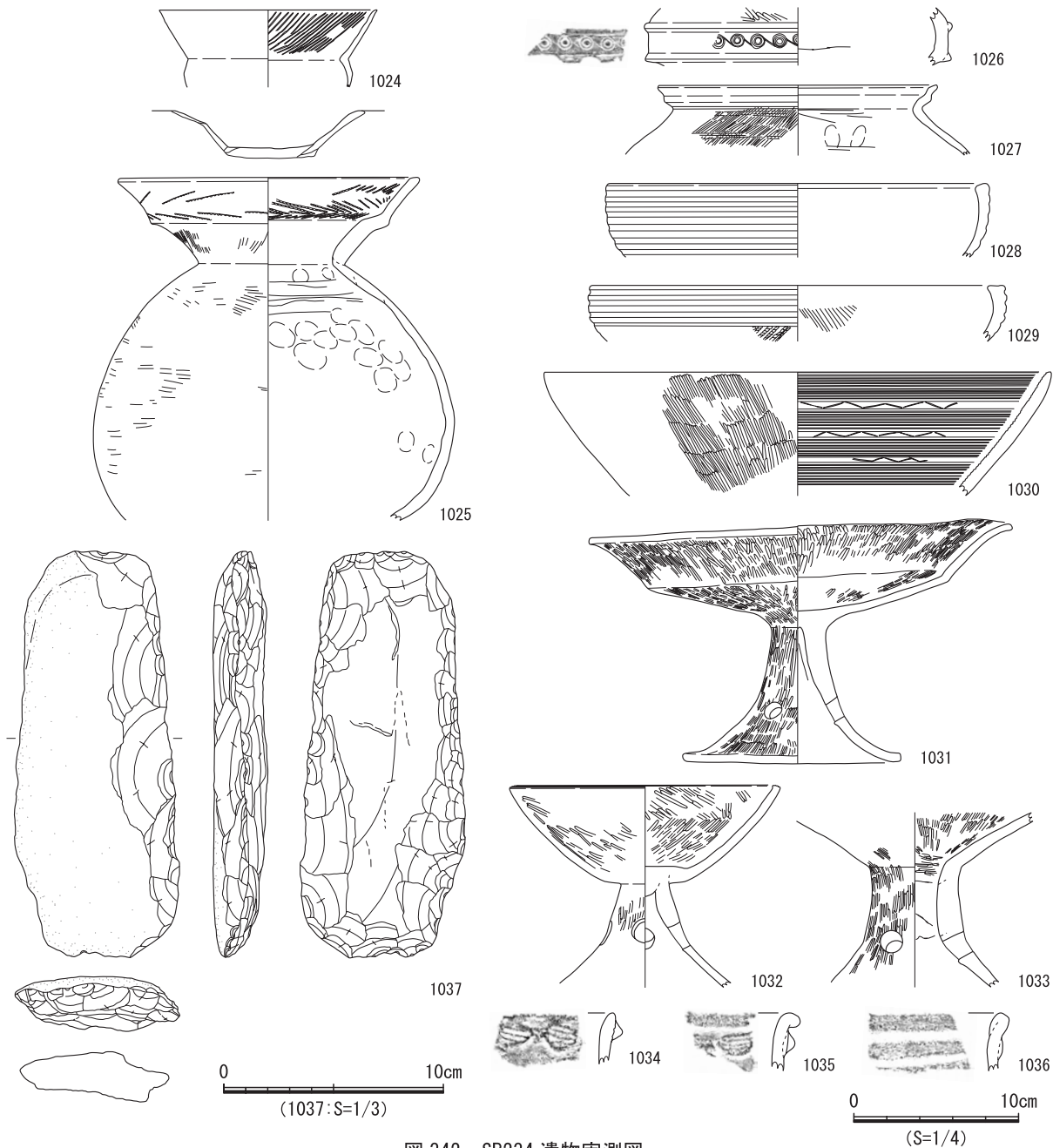


図 342 SB234 遺物実測図

かに外反する口縁部をもち、断面がつぶれた低い素文突帯を1条認められる。変容壺と考えられる。1037は打製石斧。表面に自然面を有する礫を使用し、縁辺部に調整を加えて形を整えている。

時期 他時期の遺物が出土しているものの、Ⅶ期のSB237より後出することからⅦ期～Ⅷ期と考えられる。

SB235 (遺構：図343)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東半分は未調査区域にあり、全形は不明である。北側はSK03988に切られる。

形状 西壁は直線的で、南西隅部は丸みをもつ。深さは0.1mに満たない。壁面はわずかに立ち上がり認められる程度で、その傾斜は緩やかである。

埋土 礫や炭化物の混じる黒褐色土が単層で堆積する。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。直径約0.3mの小穴を5基確認した。そのうち、P4は柱痕跡が認められるが、本遺構に伴う柱穴かどうかは定かでない。

遺物出土状況 埋土中から土器305点、小穴から土器47点が出土した。その多くは摩耗が進行したⅥ期～Ⅶ期の土器片であり、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

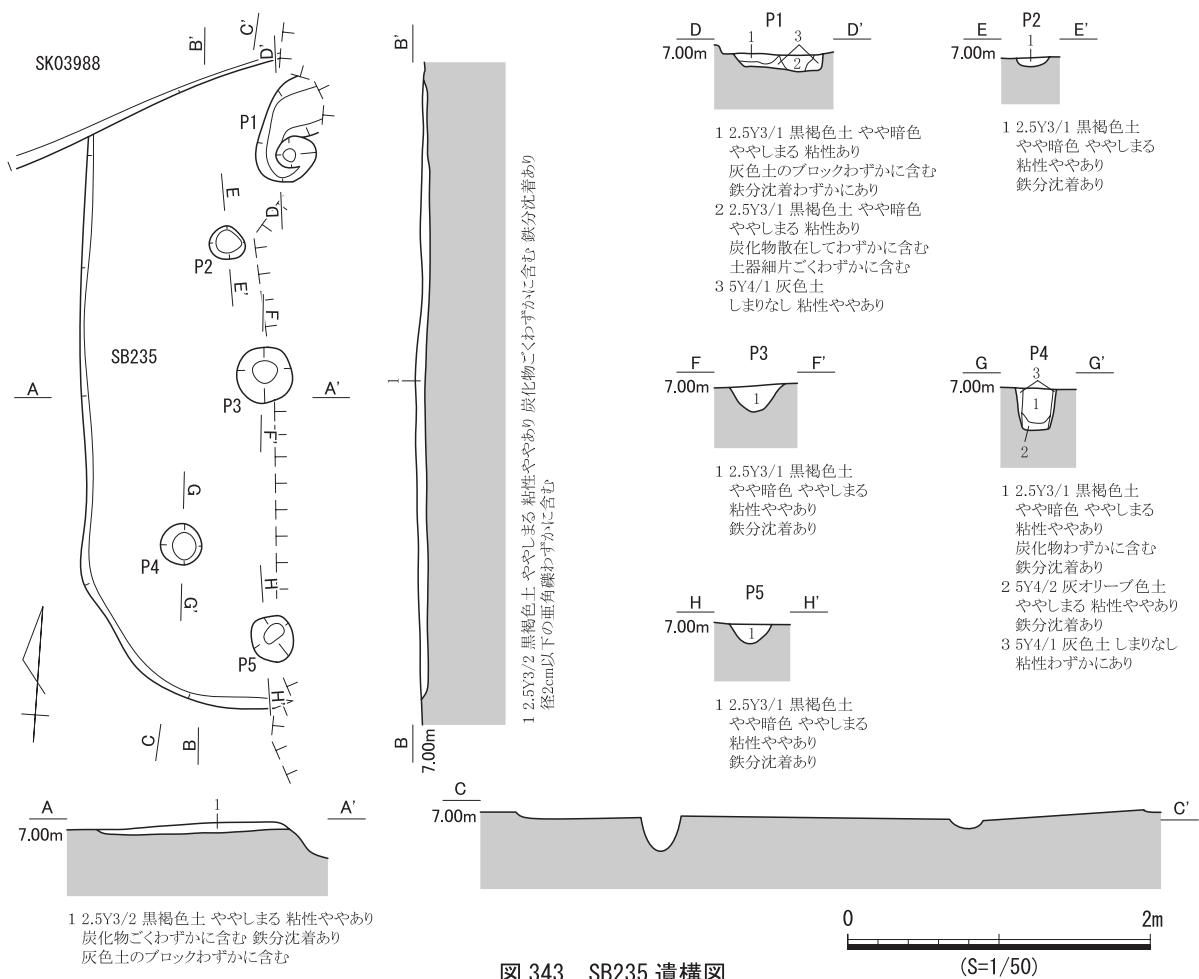


図343 SB235 遺構図

SB236 (遺構：図345、遺物：図344)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。南西隅部と床面の一部を攪乱によって失われている。西側でSB237を切り、北東隅部でSB238に切られる。

形状 南北長約4.5m、東西長約5.3mで東西に長い長方形と考えられる。深さは約0.2mで、各壁面とも傾斜は緩やかである。北辺と西辺は直線的だが、南辺は中央がやや内側へくぼむ。

埋土 3層に分層し、ほぼ水平堆積である。上層には礫混じりの黒褐色土が厚く堆積し、床面直上に炭化物の薄い層が広がる。

床面 北隅部に壁面に沿ってL字状に屈曲する壁溝の一部を確認した。中央には炭化物層が広がり、他の部分と比べると硬化していた。その他、炉跡や小穴は確認できなかった。

掘形 底面はほぼ平坦であり、底面で遺構は確認できなかった。掘形埋土は2層に分層でき、ブロック土の混入が目立つ。

遺物出土状況 埋土中から土器7,256点、石器類1点、小穴から土器37点が出土した。土器はいずれも摩耗した小片ばかりで、多くはⅦ期～Ⅷ期にあたる。

出土遺物 1038はⅧ期～Ⅸ期の甕。口縁部が頸部で屈折して、くの字となるがわずかに内湾する。端部は内面をわずかに肥厚させる。摩耗が著しいが、形状からみて布留型甕を模倣した可能性がある。1039はⅧ期の甕D3類。口縁端部がやや肥厚する。1040はⅦ期の甕D2a類。口縁部が屈曲して、端部が外方へ引き出される。1041、1042はⅥ～Ⅷ期の甕D類の脚部。裾端部に折り返しが認められる。1043、1044はⅥ期～Ⅶ期の壺A類。1043は内面で屈折して口縁部が立ち上がり、内面に刺突文が認められる。1044は円形浮文が認められる。1045はⅥ期～Ⅶ期の壺B2a類。口縁部が直線的に短く開き、端部に外傾する平坦面が認められる。1046はⅦ期の高坏D4類。多条沈線間に山形文を施文する。1047の意匠は不明だが、沈線による文様があり、赤彩された円文が認められる。Ⅴ期～Ⅵ期の壺胴部片と考えられる。1048はⅦ期の高坏G3類の脚部。直線文と山形文が認められる。1049は砥石。上部と裏面に煤が付着する。上下及び右側面は欠損する。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB237を切ることから、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

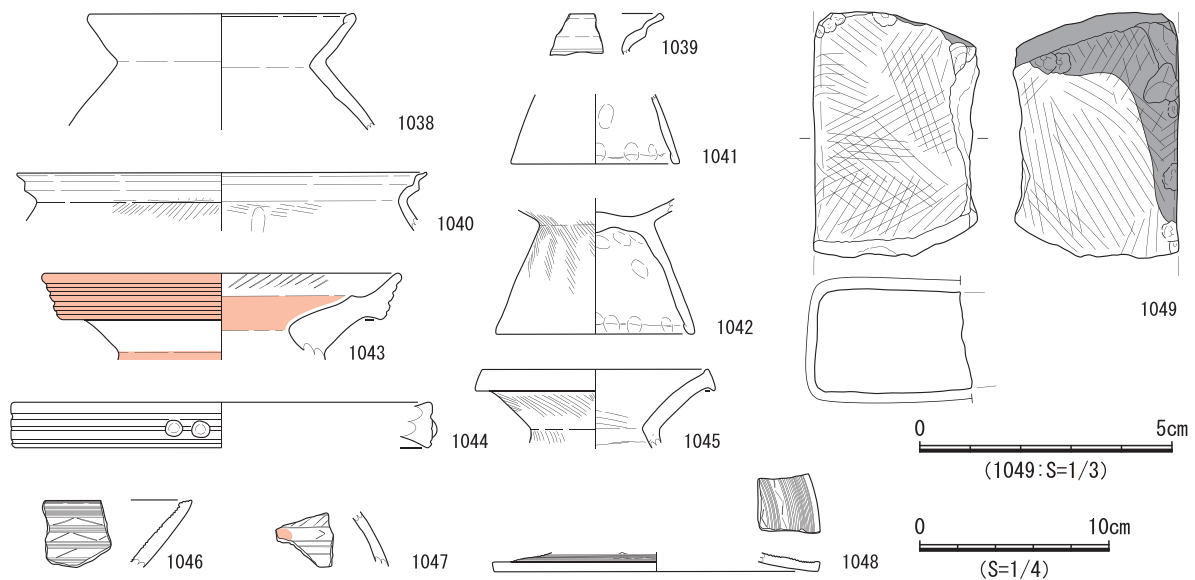


図344 SB236 遺物実測図

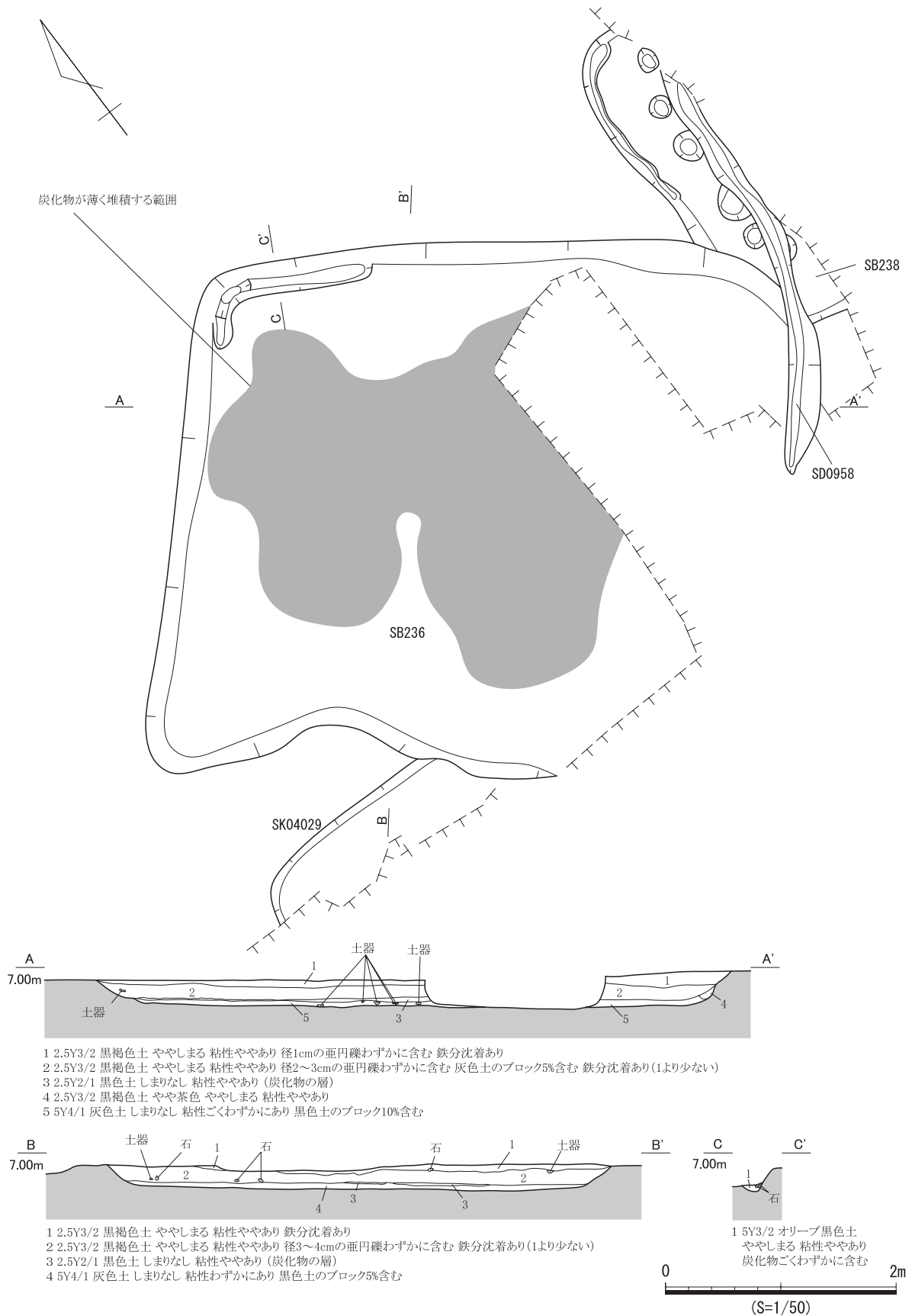


図 345 SB236 遺構図

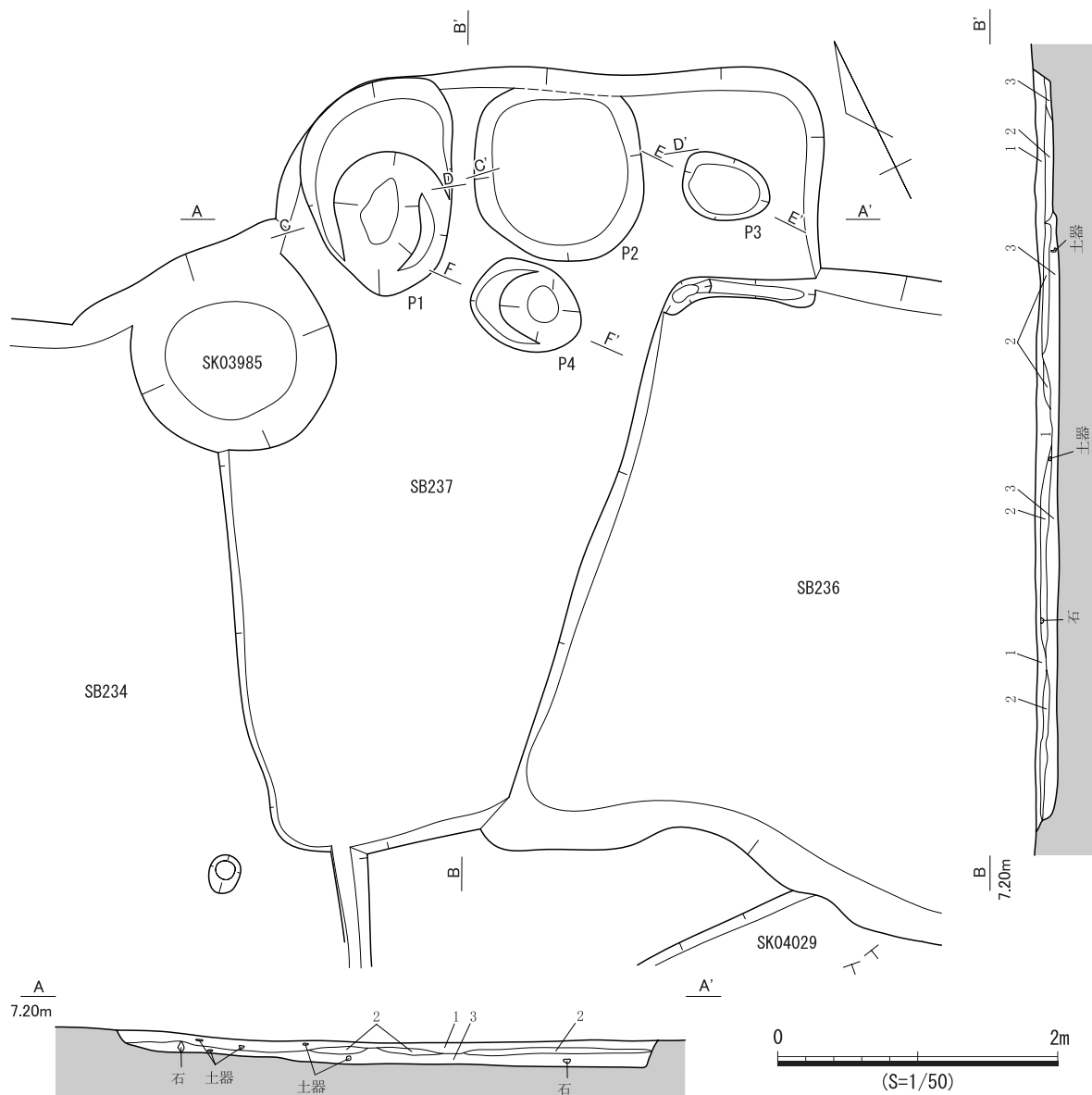
SB237 (遺構：図346・347、遺物：図348)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側をSB234に、東側をSB236にそれぞれ切れられ、南東隅部付近はSB236の削平を受け不明である。

形状 南北長約5.5m、東西長約4.2mで、南北に長い長方形を呈する。確認できた各辺とも直線的で、深さは約0.1mである。壁面の傾斜は北壁、東壁は急傾斜だが、西壁、南壁の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積するが、2層の灰オリブ色土がレンズ状に入り込む。

床面 ほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。床面において平面形・断面形ともに形状が様々な小穴を4基確認した。P1は長軸1.52mで楕円形を呈する。深さは0.46mで、最深部は中央より南側にある。底面は狭く、断面形はV字形に近い。埋土は5層の堆積が認められ、水平堆積で徐々に埋没が進行したと考えられる。なお、中層には炭化物が混じる。P4は直径0.80mの円形で、深さは



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性あり 土器細片散在して含む 炭化物散在して含む 鉄分沈着あり
- 2 7.5Y4/2 灰オリブ色土 しまりなし 粘性なし オリブ黒色土のブロック5%含む 土器細片わずかに含む 鉄分沈着あり
- 3 5Y3/1 オリブ黒色土 ややしまる 粘性あり 土器細片わずかに含む 鉄分沈着あり

図346 SB237 遺構図 (1)

0.42mである。断面形はV字形で4層に分層でき、2層が柱痕跡の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,968点、小穴から土器376点、木製品1点が出土した。土器の大半は摩耗したVI期からVII期の小片で、遺構の時期を示すような特徴的な出土状況は認められなかった。P1の出土土器は小片ながらVII期のものが大半である(1056、1060、1063)。また、4層からは木片が出土した。P4からは主に2・3層からVII期前後の土器小片が出土した(1061、1062)。

出土遺物 1050、1051はVII期の壺A類。1050は頸部から口縁部が強く外反し、端部を上下に拡張する。1052もVII期の高坏D4d類。直線文のほかに山形文と羽状文が認められる。1053、1054はVII期高坏C類。1053は坏底径が小さく、口縁部が内湾する。1055はVI期甕D1b類で、刺突文が認められる。1056～1058はVII期甕D2類。口縁部が屈曲して、端部をわずかに拡張する。1059は口縁部の屈曲が弱くVIII期の甕D3類である。1060はVI期～VII期の鉢A4a類。口縁部が頸部で弱く屈折して短く立ち上がる。文様は認められず、胴部外面にはケズリ調整が認められる。1061、1062ともにVI期～VII期甕D類脚部。1062は内面の指頭圧痕が著しく認められ、端部の折り返しが顕著である。1063はVII期甕D類脚部。脚部が直線的にハの字に開き、端部に折り返しが認められる。

時期 小穴出土遺物の時期とVII期のSB236に切られることから、VII期と考えられる。

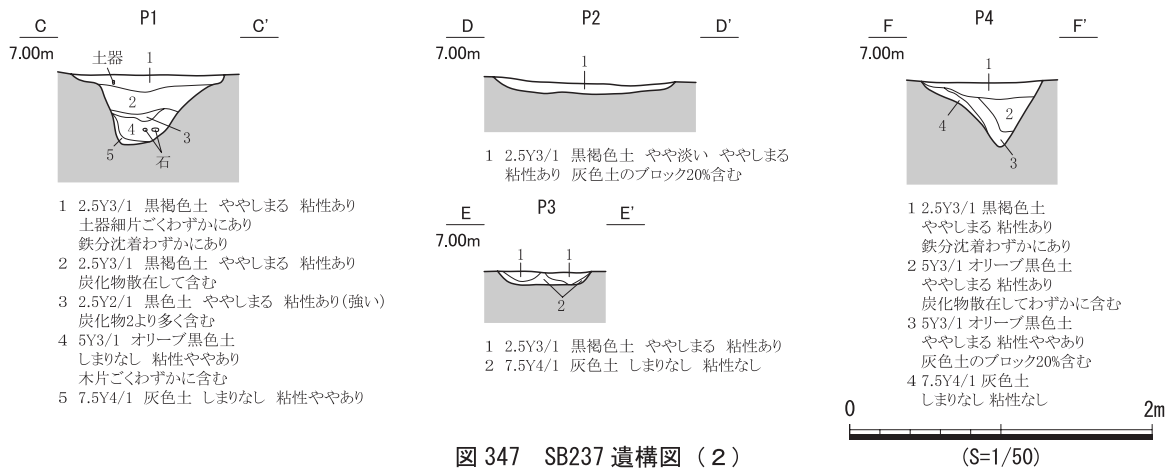


図 347 SB237 遺構図 (2)

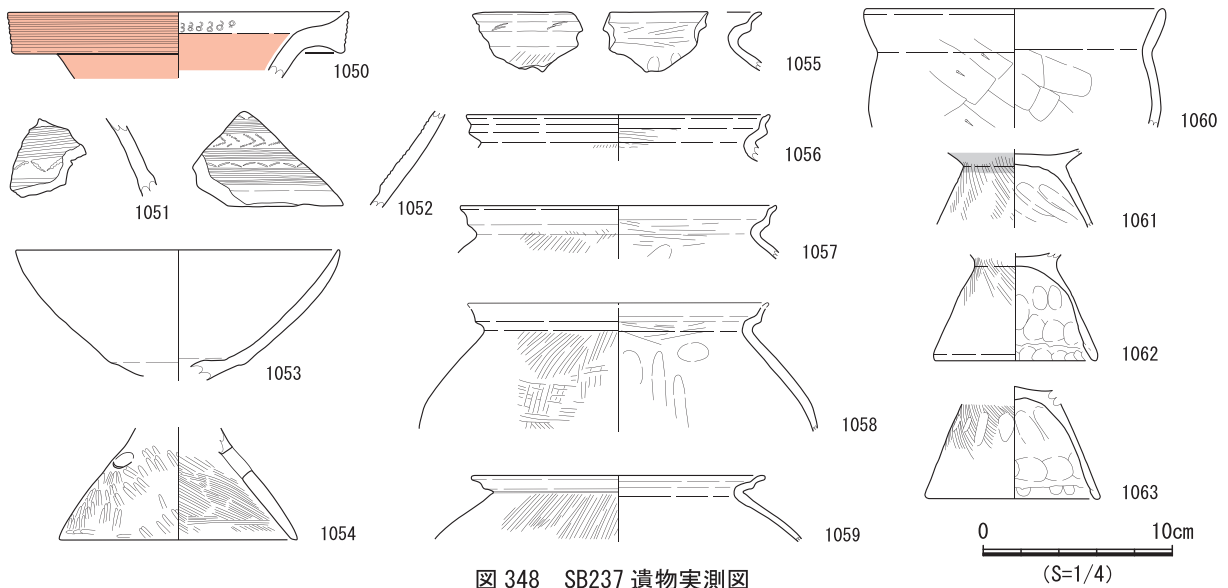


図 348 SB237 遺物実測図

SB238 (遺構：図349、遺物：図350)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。南西部でSB236を切り、東半分を大きく攪乱によって失われている。確認できたのは北西隅部から南西隅部にかけての範囲である。

形状 南北長約3.1mで、深さは0.1mに満たない。壁面の立ち上がりはわずかに確認したのみである。

埋土 4層に分層した。2層と4層には灰色土のブロックがわずかに混じり、人為堆積の可能性がある。

床面 東壁にそって幅約0.1mの壁溝を検出した。床面はほぼ平坦で、硬化面、貼床や炉跡は確認できなかった。直径約0.2mの小穴を6基確認し、いずれも浅く、明瞭な柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器250点、小穴から土器43点、壁溝から土器24点が出土した。いずれもVI期～VIII期のもので、P2から甕(1064)が出土した。

出土遺物 1064はV期～VI期の甕A3類。直立する頸部から口縁部が屈曲する。端部は凹面を形成する。

1065はVII期の高坏C4d類。多条沈線の間を振幅の小さい山形文、対向山形文を施文する。

時期 出土遺物の時期とVII期～VIII期のSB236に切られることから、VII期～VIII期と考えられる。

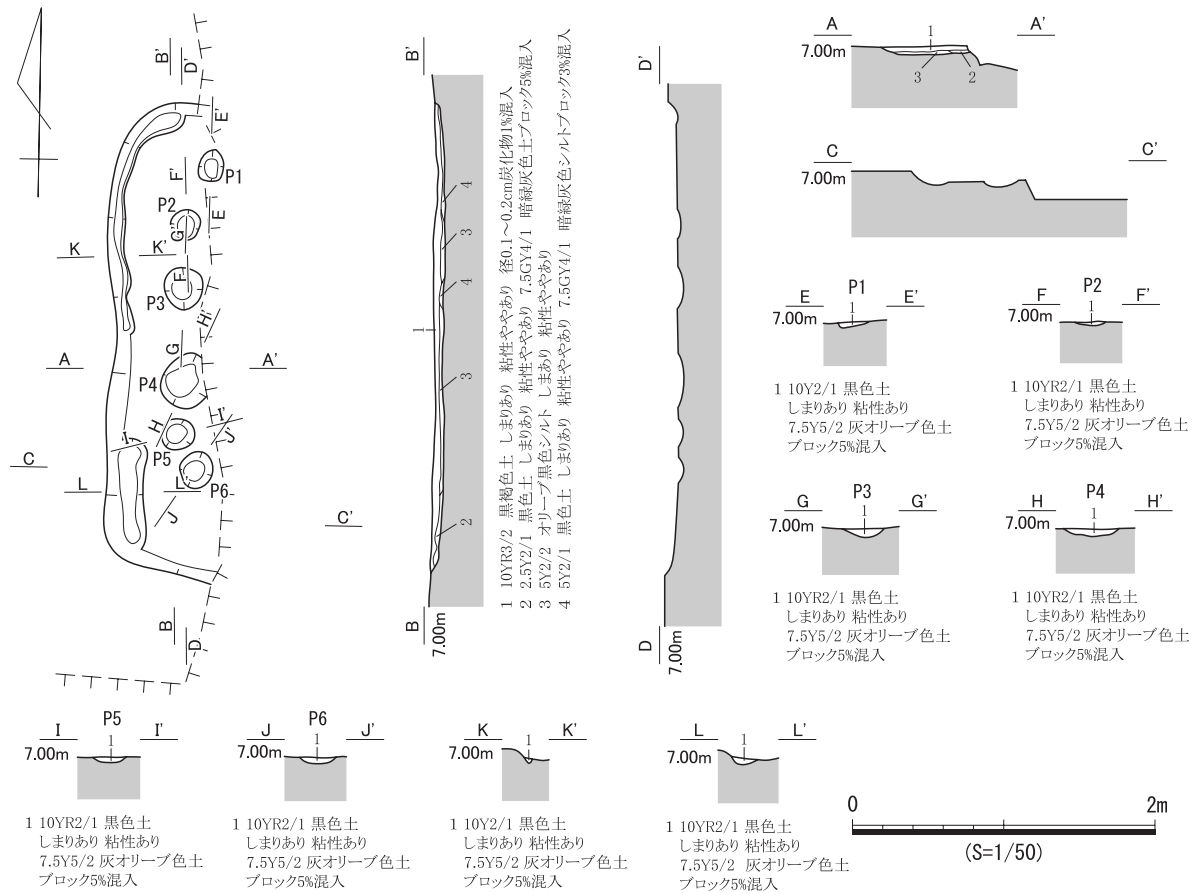


図349 SB238 遺構図

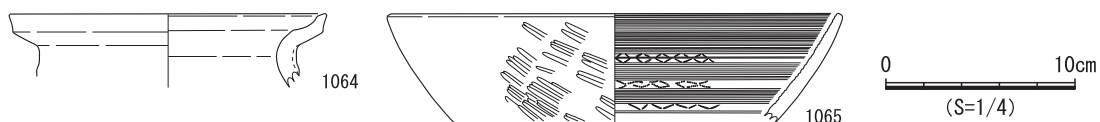


図350 SB238 遺物実測図

SB239 (遺構：図352～355、遺物：図351)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東辺の半分は攪乱により失われている。SB226、SB240、SK04036を切り、検出時に中央南側で土器がまとまって出土した。

形状 東西長約6.0m、南北長約5.2mで、東西に長い隅丸長方形を呈する。壁面傾斜は急である。

埋土 床面までは単層であり、礫の混入が多いものの、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上で小穴11基と壁溝を検出した。平面的な位置関係からP1（もしくはP5）～P4の4基を柱穴と考えたが、住居の平面形と比較して西に寄りすぎていることから、やや疑問も残る。壁溝は南壁沿いと東西壁沿いの南側にかけて検出した。東西側の幅がやや広く、南壁中央東寄りですて切れている。

掘形 掘形埋土は単層であり、礫やブロック土の混入が目立つ。その底面で小穴28基と溝5条を検出した。小穴の埋土は大半が単層であり、P23やP29のように深い穴も認められるが、その性格は不明である。また、溝はいずれも幅約0.2mで浅く、不定方向に延びている。そのうち、SD3はSB226東辺の延長ライン上にあることから、SB226との関連性が指摘できるかもしれない（図355）。

遺物出土状況 埋土中から土器1,830点、灰釉陶器1点、石器類2点、小穴から土器173点、壁溝から土器14点が出土した。遺物の大半はV期～VI期の土器片であり、P3、P4の間でVI期高坏坏部（1070）が潰れた状態で、そのすぐ東側でVI期鉢（1067）が正位で出土した。

出土土器 1066はV期壺A類。頸部に貼付突帯があり、その上下に円形刺突文が施文される。1067はVI期鉢A3a類。口縁部が短くくの字に伸び、端部がわずかにつまみ上げ気味となる。1068はV期高坏B2b類。口縁部が短く外反する。1069はV期～VI期高坏B4類。口縁部が弱く外反する。1070はVI期高坏C2類。口縁部が内湾しながら立ち上がる。入念なミガキが認められる。1071はVI期器台B1類脚部。1072は管玉で、長さ30.3mmとやや大きい。完形品であり、上下2方向から孔が穿たれている。1073は台石で、扁平な自然面を利用している。

時期 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

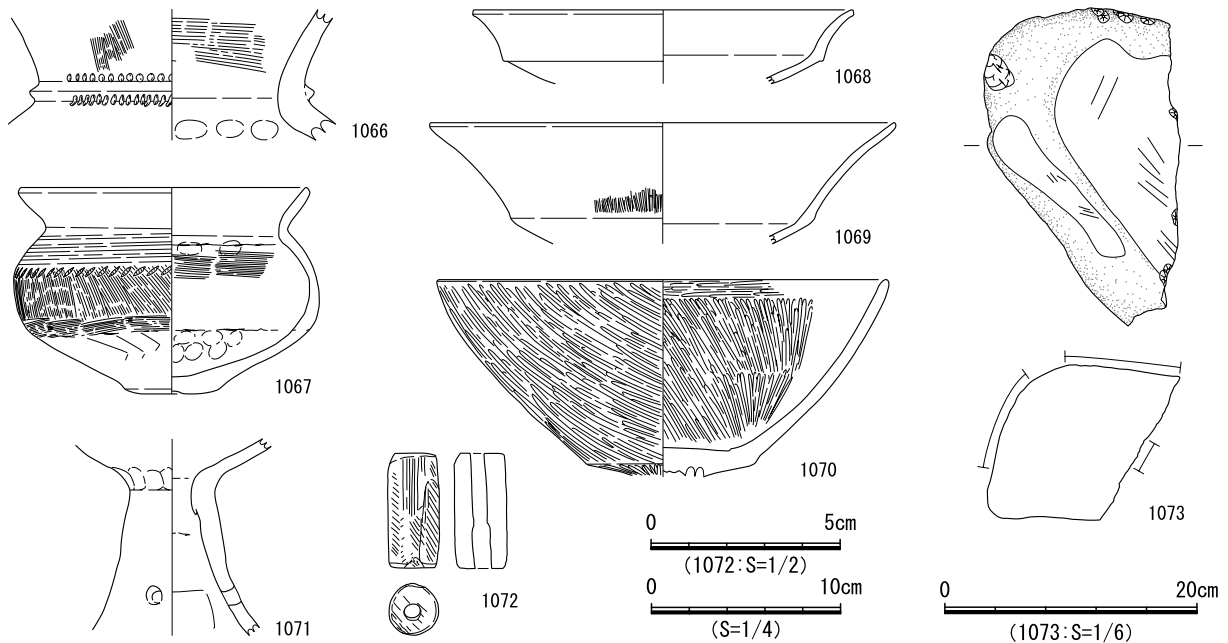


図351 SB239 遺物実測図

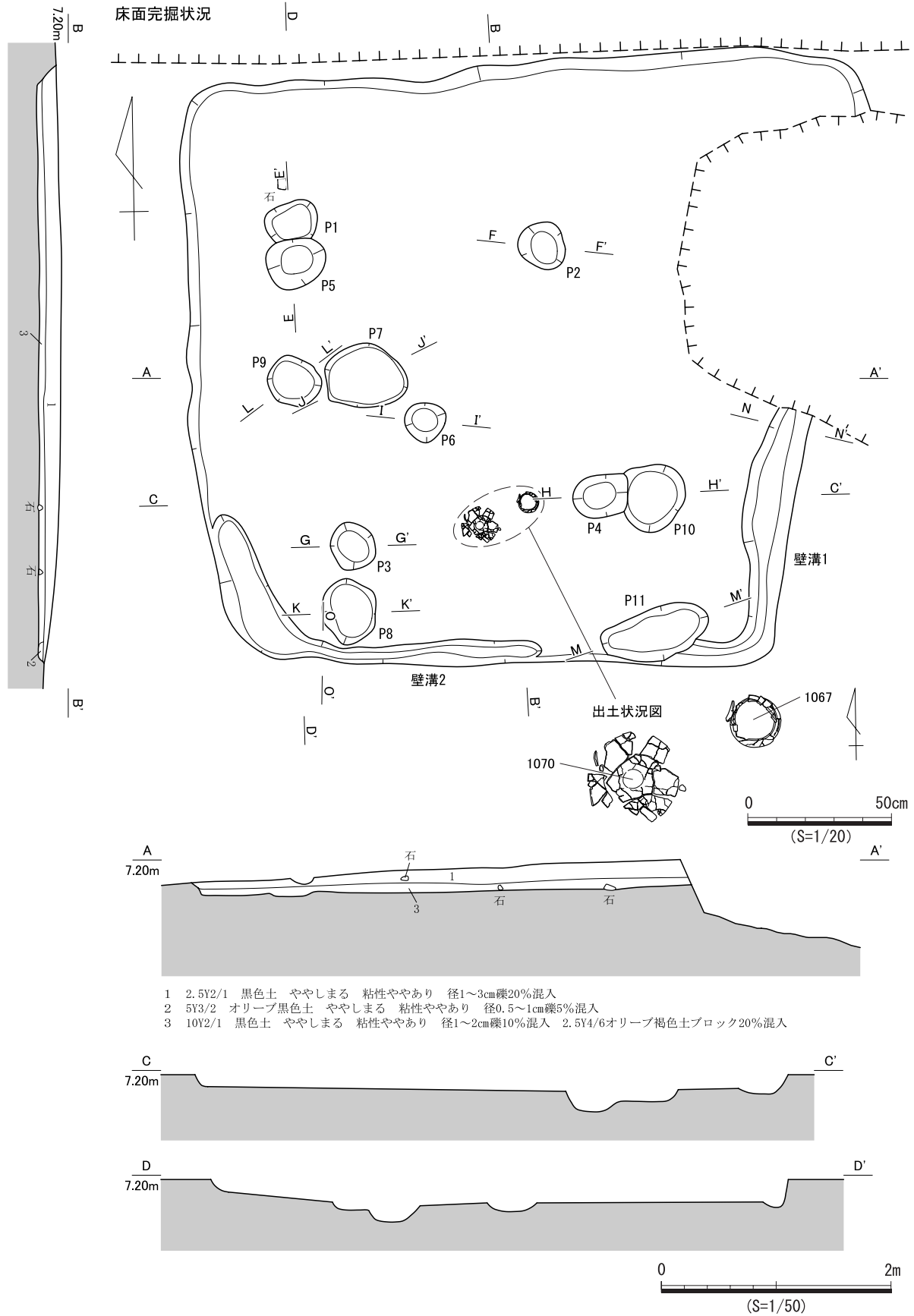


図 352 SB239 遺構図 (1)

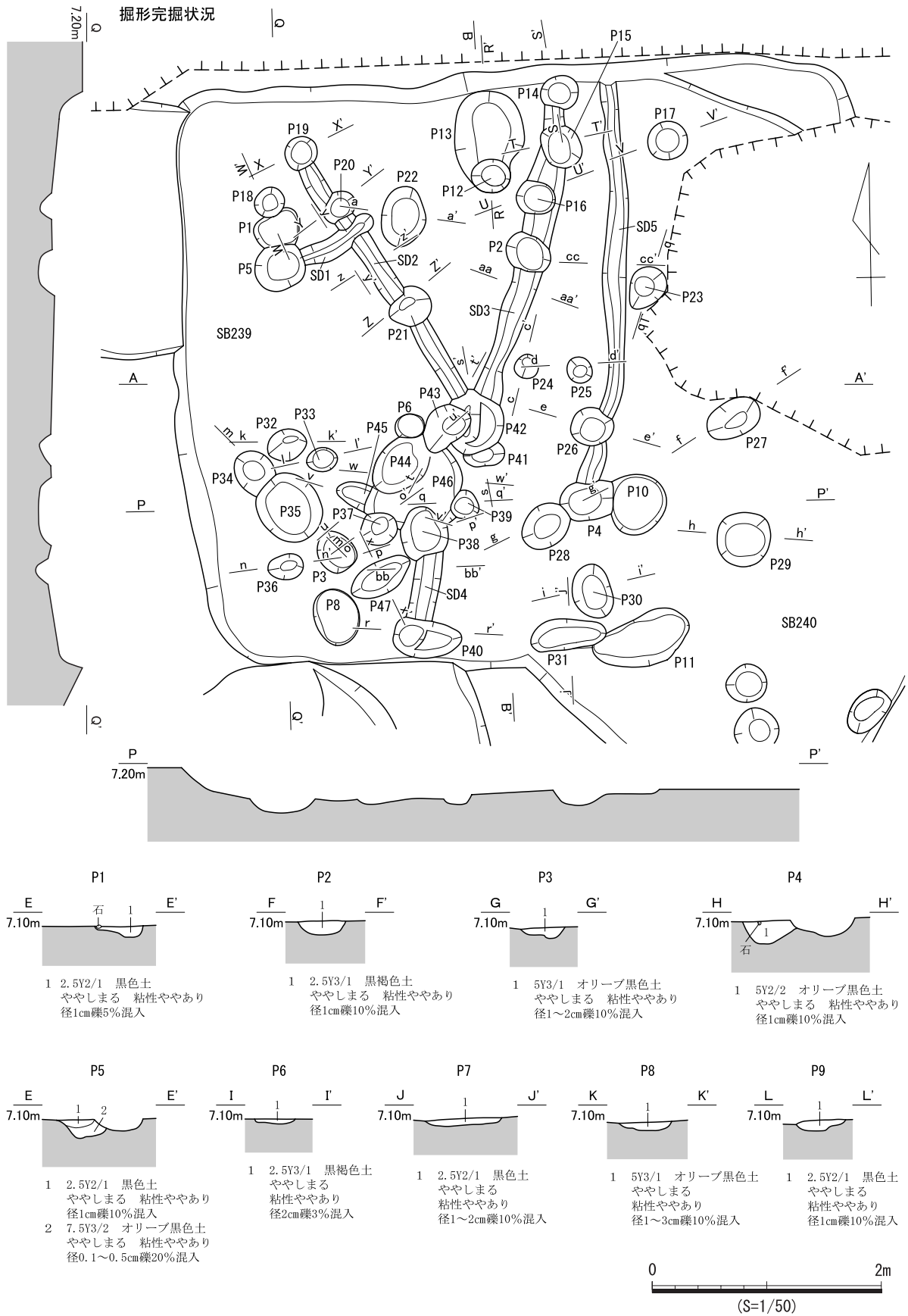


図 353 SB239 遺構図 (2)

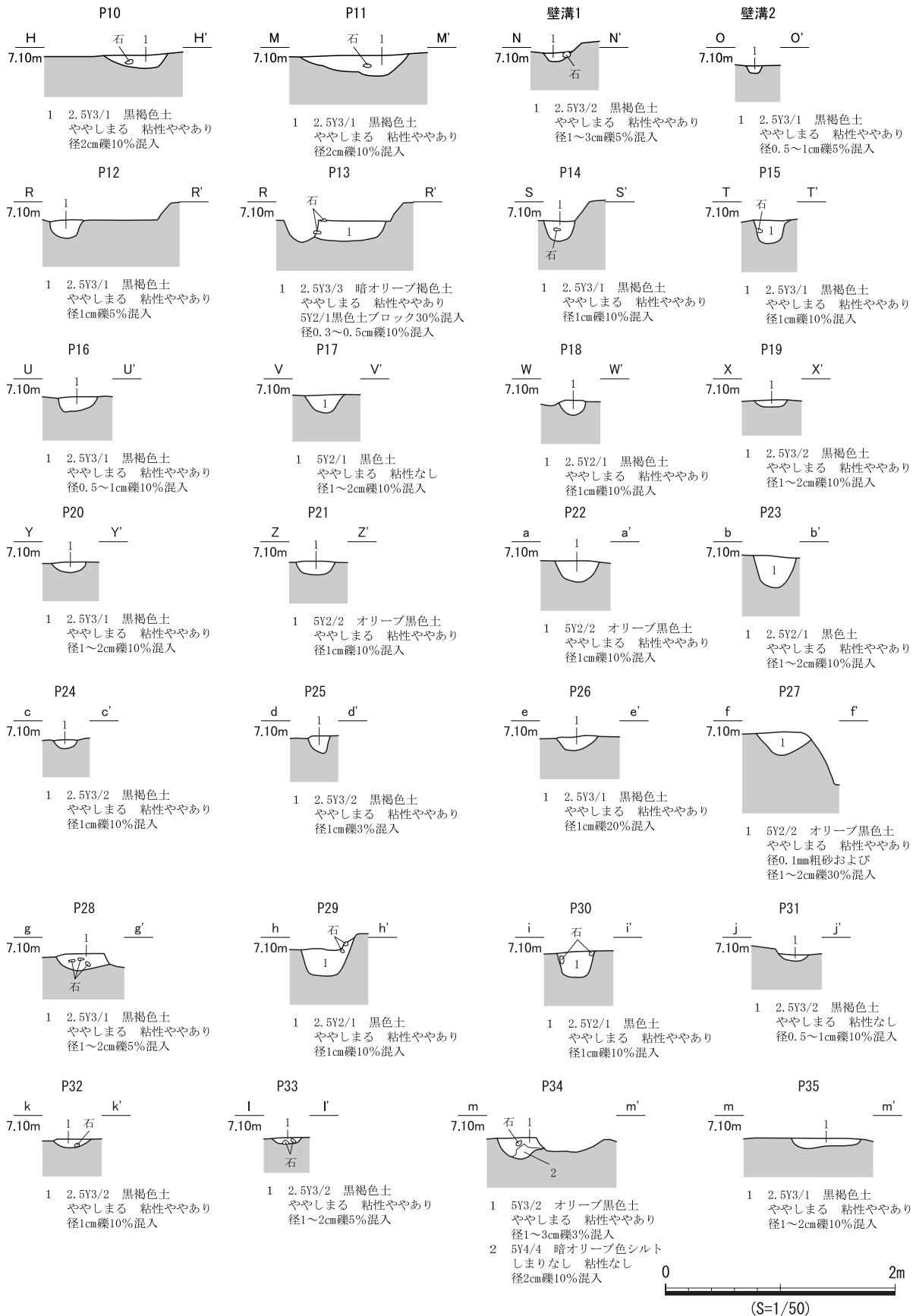
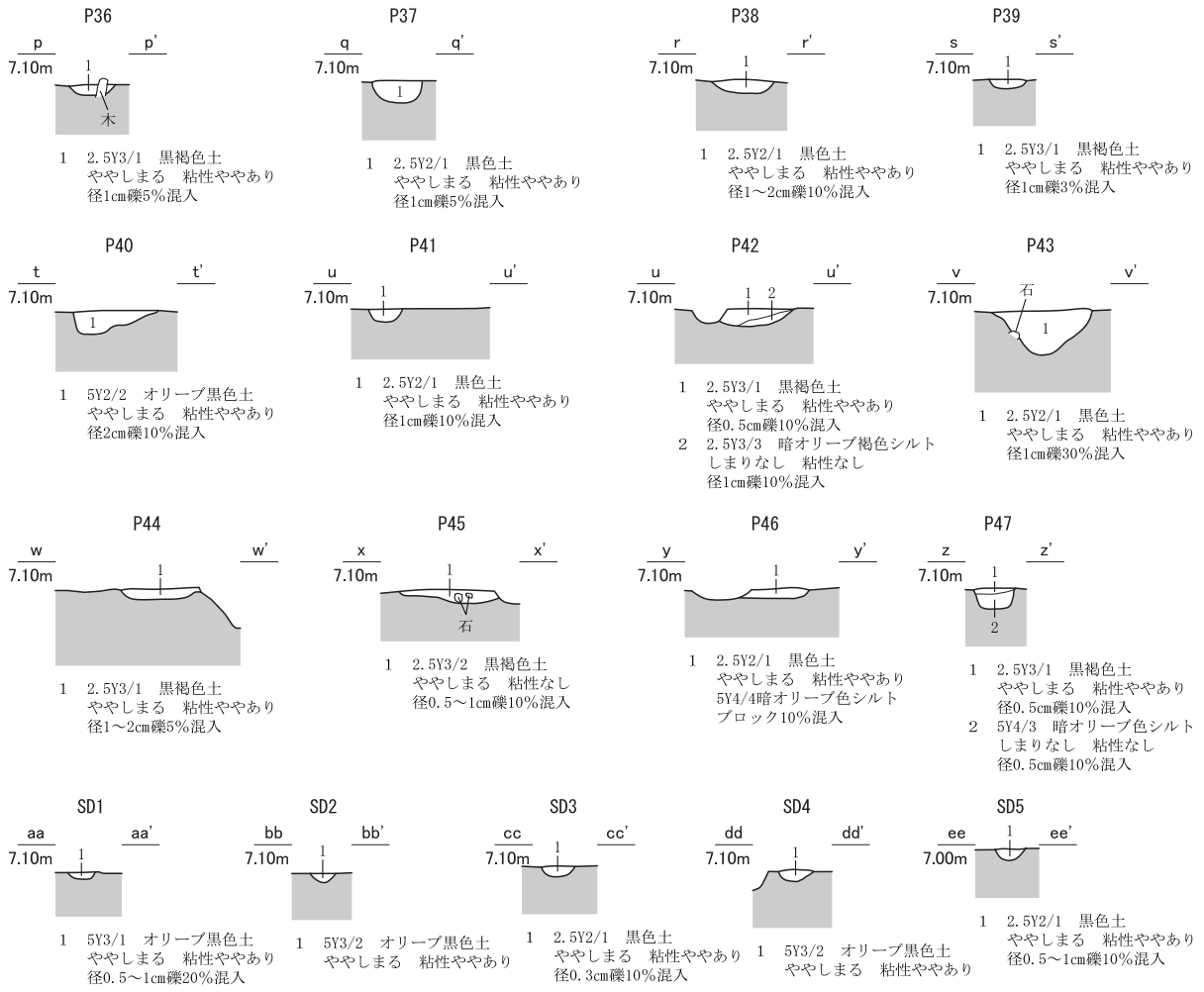


図 354 SB239 遺構図 (3)



SB226 との位置関係

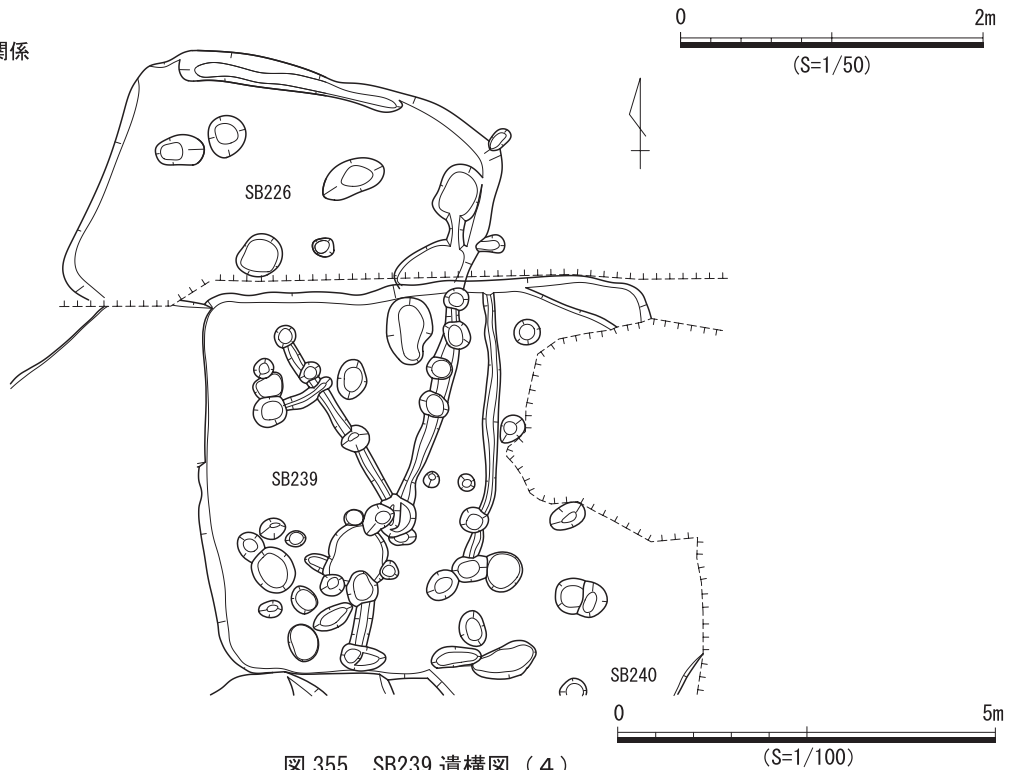


図 355 SB239 遺構図 (4)

SB240 (遺構：図356)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側を攪乱により失われ、南東側でSB241を切り、北西側をSB239に切られ、住居の北東辺はSB239掘形底面で検出した。

形状 遺構の大部分をSB239に切られるため全形は不明だが、北東-南西長は約5.1mで、隅丸方形を呈すると考えられる。

埋土 単層であり、礫の混入が多い。また、埋土中から粘土塊が出土した。重複するSB239と遺構の時期が近いいため、人為堆積の可能性がある。

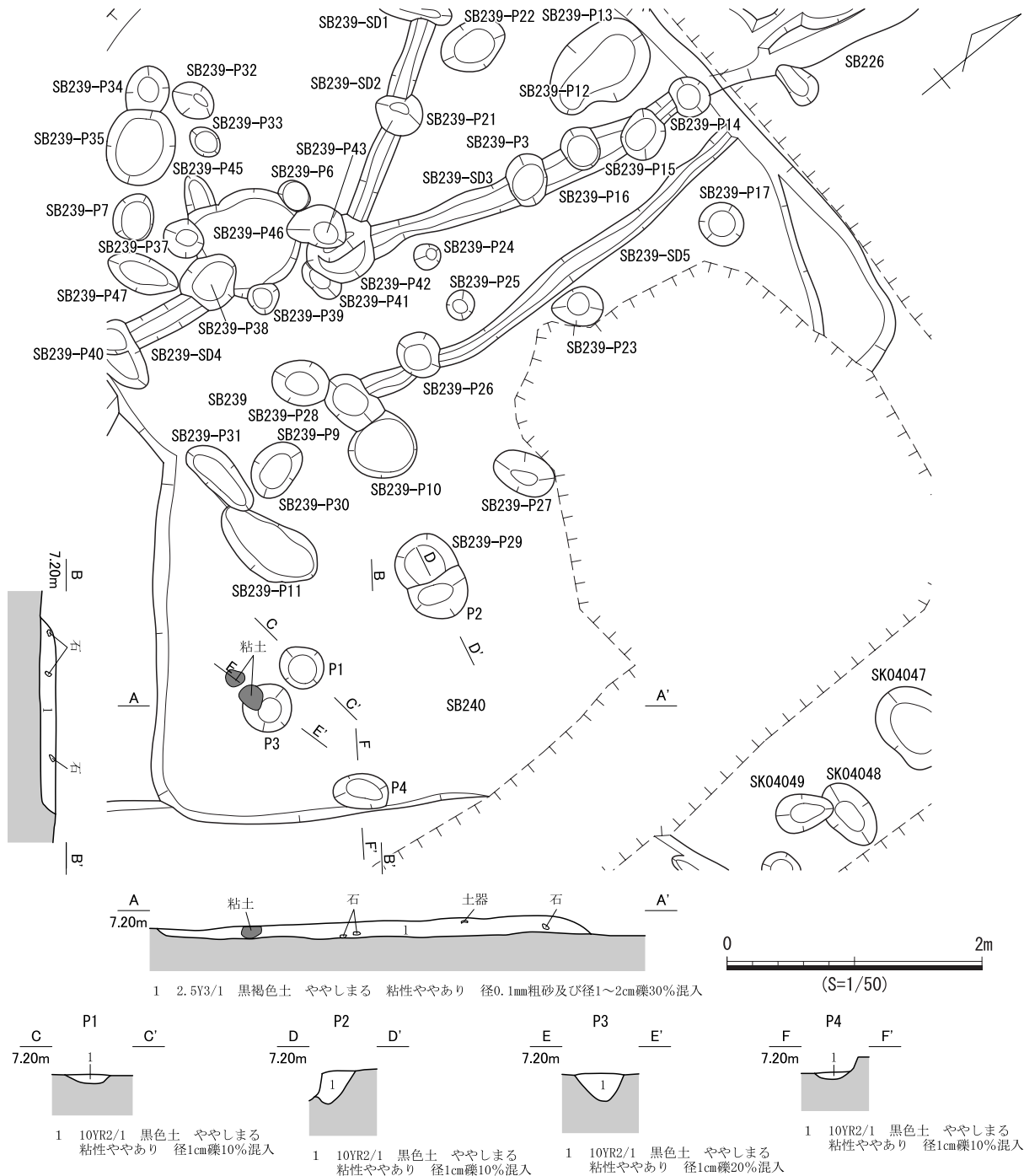


図356 SB240 遺構図

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて4基の小穴を検出した。いずれも柱痕跡は確認できなかったが、P2とP3の掘形が深い。位置的にP3は柱穴の可能性があり、それに対応する遺構として掘形の深いSB239-P43が挙げられるが、住居全体の平面形が不明であるため定かでない。

遺物出土状況 埋土中から土器320点、小穴から土器10点が出土した。いずれもVI期頃の薄片であり、図示しなかった。

時期 V期～VI期のSB239に切られることから、V期～VI期と考えられる。

SB241 (遺構：図357・358)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。大半を攪乱により失われ、北西側をSB240に切られる。

形状 全形は不明であるが、東西長は約6.5mで、隅丸方形を呈すると考えられる。

埋土 2層に分層し、上層は礫の混入が多い。重複するSB240と遺構の時期が近いいため、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて10基の小穴と壁溝などを検出した。小穴は単層もしくは2層に分層でき、底面は丸みを帯びているものが多い。そのうちP3のみ1層が2層を切るような堆積であり、柱抜き取り痕かもしれない。P3を柱穴とするならば、平面的な位置関係と掘形の深さからP6が西側の柱穴となり、他は攪乱により失われていることになる。壁溝は南西辺と北東辺沿いできずかに確認でき、SD1はその性格が不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器133点、小穴から土器20点が出土した。いずれもVI期頃の薄片であり、図示しなかった。

時期 VI期のSB240に切られるが、出土遺物の時期からVI期と考えられる。

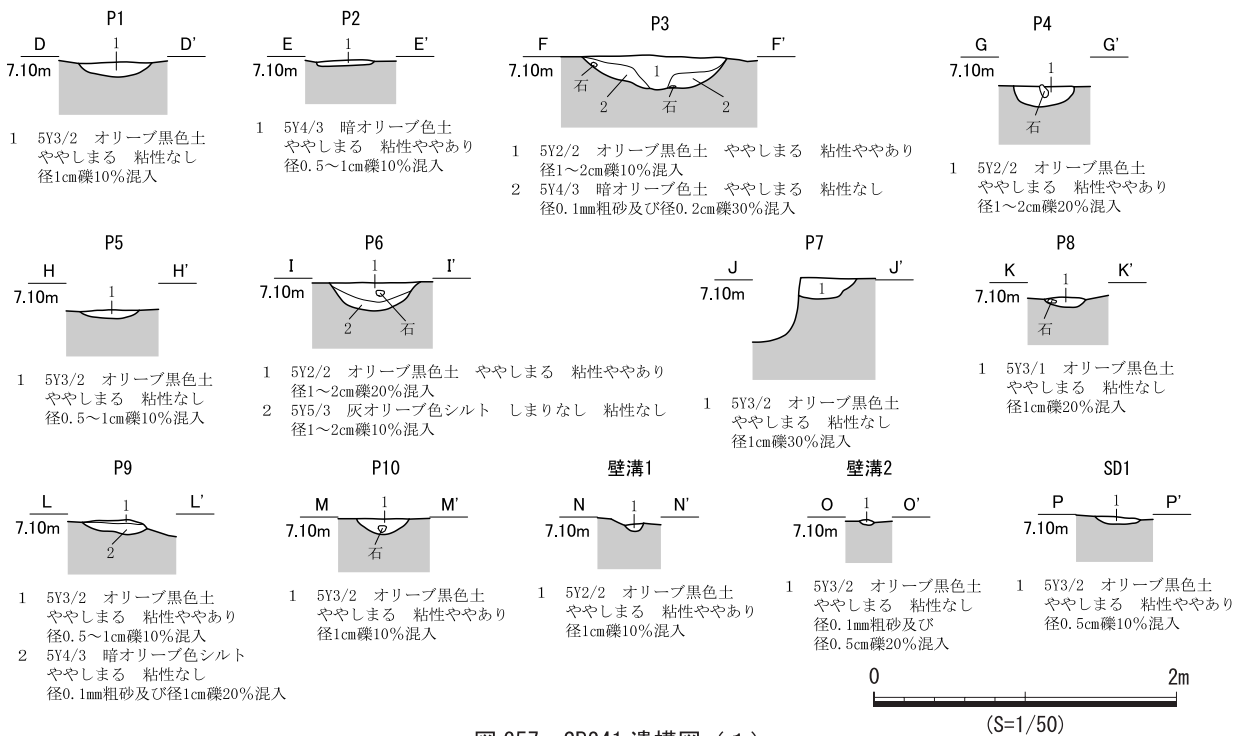


図357 SB241 遺構図(1)

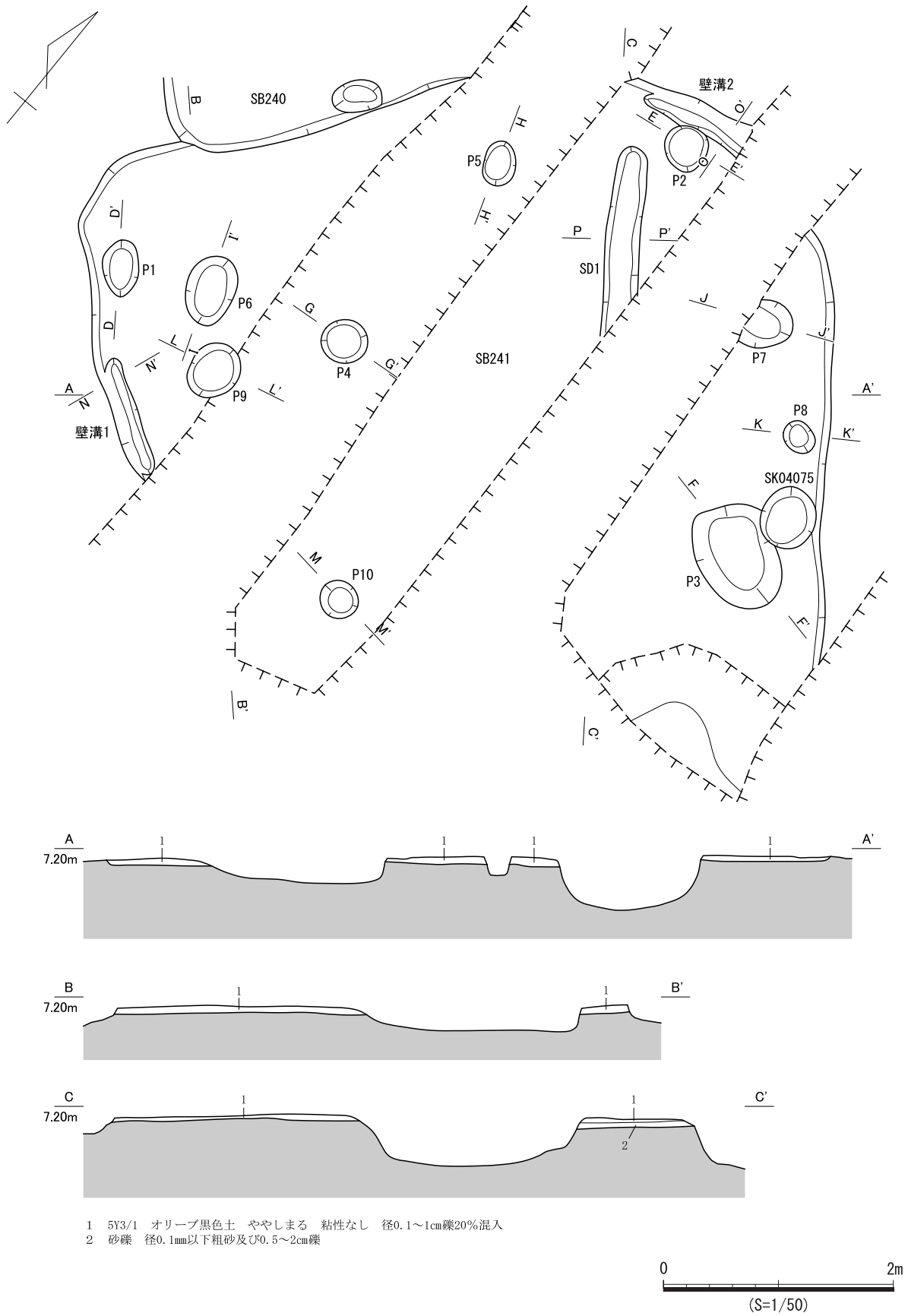


図 358 SB241 遺構図 (2)

SB242 (遺構：図 359)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側はSB241に近接し、北西側で縄文晩期の土坑であるSK04036を切る。

形状 平面形は北西部がやや張り出した不整形であり、南北長約4.1m、東西長約4.0mを測る。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 黒色土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

床面 南西側にわずかに傾斜しており、貼床は確認できず、床面にて7基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土はいずれも単層だが、P1のみ掘形が深く、壁面も垂直気味である。P2からP4はやや浅いものの、平面的な位置関係からP1からP4の4基を柱穴と考えた。P7は長さ0.82mの楕円形を呈し、検出面にて炭化物がまとまって出土した。炭化材のうち、大きなまとまりでは材の方向性も確認でき、その周辺に炭化粒が散在していた。しかし、床面では他に炭化物集中は確認できなかった。壁溝は幅約0.2mで、北東隅と南東隅の2箇所を確認できた。いずれも浅く、底面は平坦であり、礫がわずかに混入する。

遺物出土状況 埋土中から土器186点、小穴から土器11点が出土した。土器は縄文時代やIV期、VI期～VII期のものが出土したが、多くはVI期～VII期に属する。また、いずれも小片であり、図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

SB243 (遺構：図 360)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB244とSB245を切り、SD0962に切られる。重複する竪穴住居跡群の中では、最も新しい時期に構築された住居である。

形状 平面形は南東部がやや張り出した不整形であり、南北長約3.5m、東西長約3.9mを測る。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 2層に分層した。埋土の2層は暗オリーブ色シルトで、住居南側にてわずかに確認できたのみである。なお、埋土の成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて12基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土はいずれも単層であり、P6～P8の掘形が深い。他の掘形は浅いが、平面的な位置関係から、P1～P4の4基を柱穴と考えた。しかし、住居全体形と柱穴の主軸が一致しておらず、疑問も残る。壁溝は南壁沿いで検出し、幅約0.4mでやや広く、掘形もしっかりしている。そのため、壁溝というよりは小穴と認識すべきかもしれない。

遺物出土状況 埋土中から土器70点が出土した。土器の多くはVII期であり、わずかに縄文土器片が混じる。また、いずれも小片であり、図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB244を切ることから、VII期と考えられる。

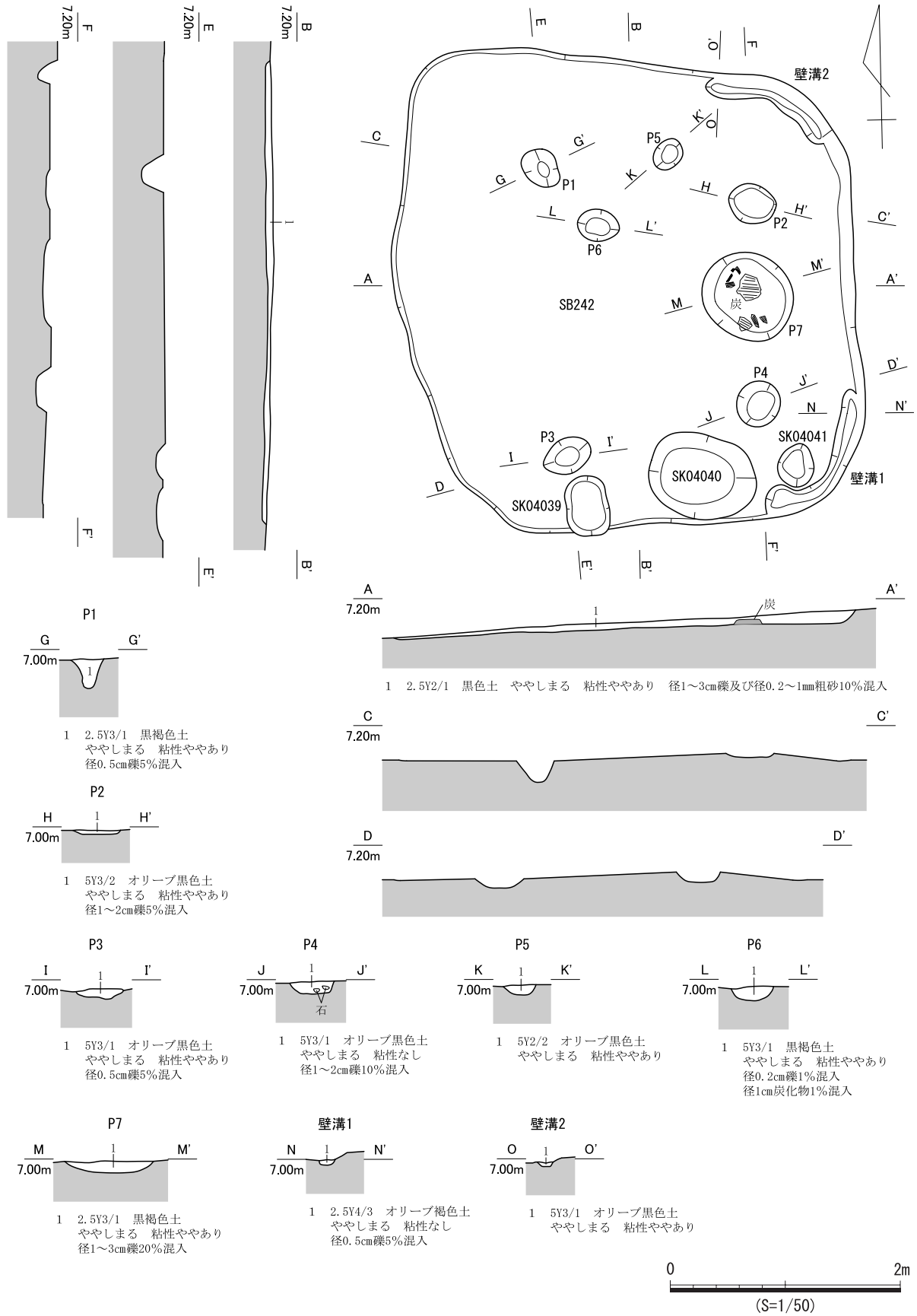


図 359 SB242 遺構図

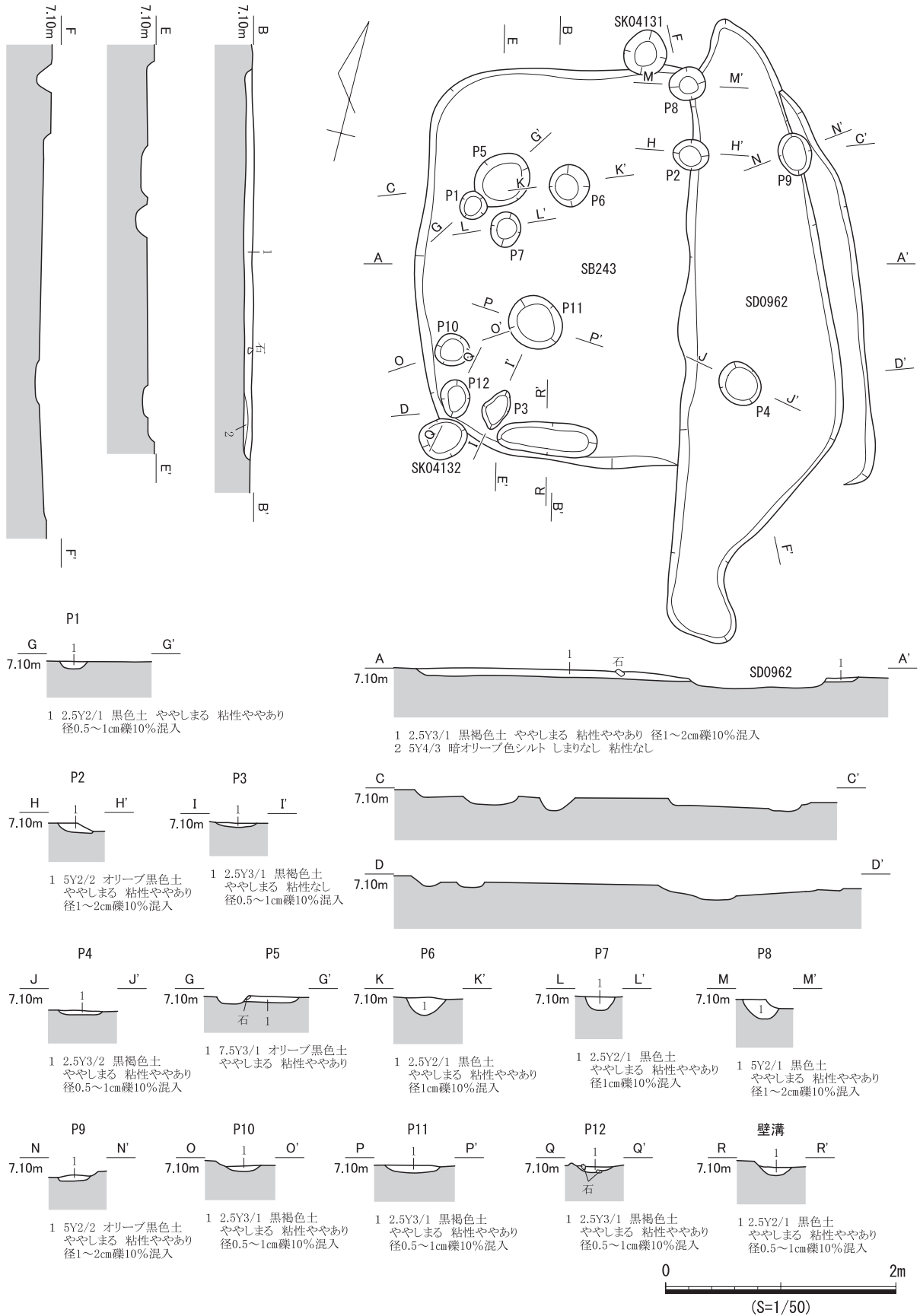


図 360 SB243 遺構図

SB244 (遺構：図 361・363、遺物：図 362)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域位置する。北辺を攪乱により失われ、南側をSB243とSB245、SD0962に切られ、西側でSB246を切る。平面形は不明瞭で、東辺と南辺の中央付近は検出できな

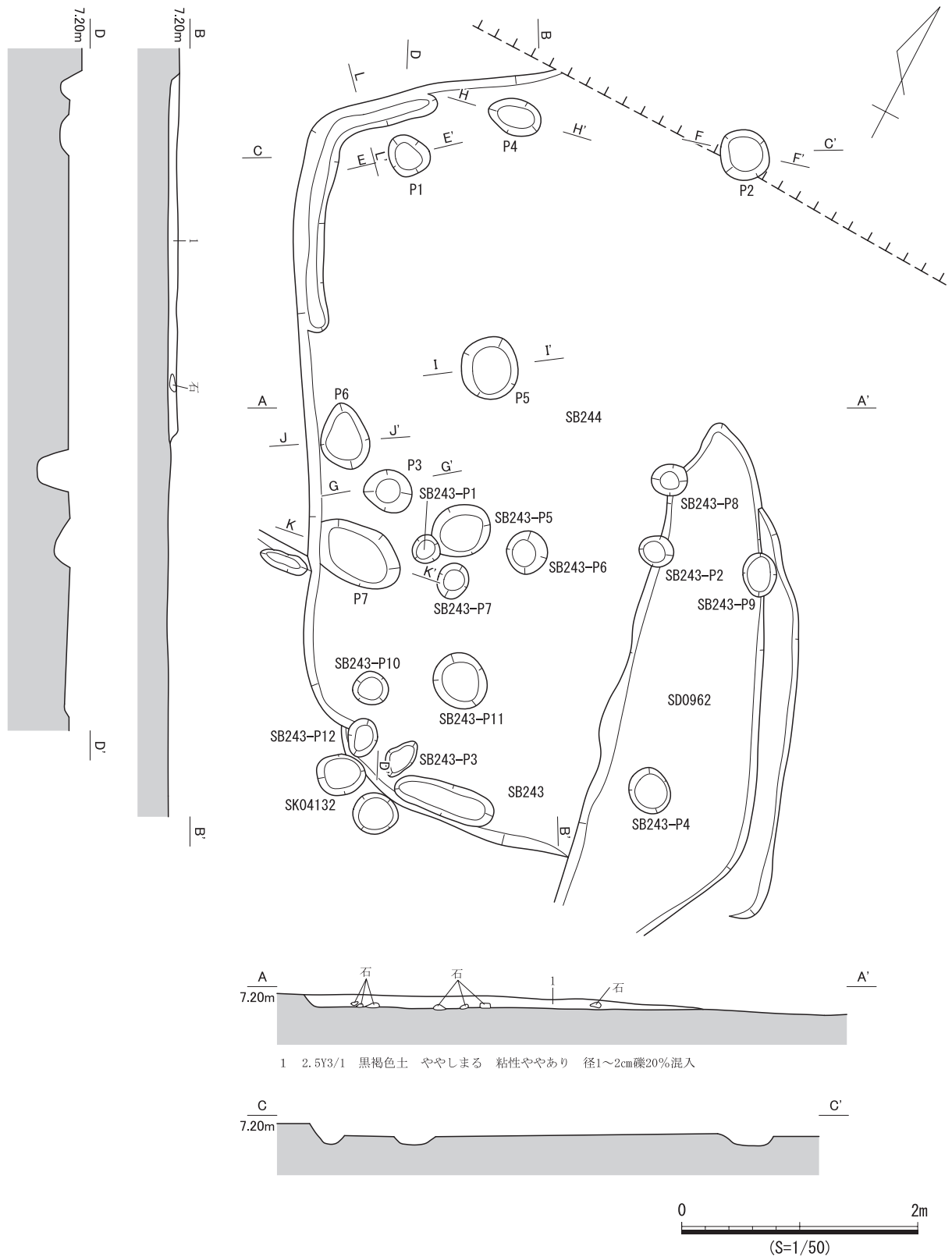


図 361 SB244 遺構図 (1)

かった。

形状 南北長約6.1mを測り、南北に長い不整形を呈する。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層であり、礫の混入が目立つ。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて7基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土はいずれも2層に分層でき、P1とP2の1層は2層を切るような堆積であり、柱抜き痕を示す可能性がある。また、P3では明瞭な柱痕跡を確認した。そのため、P1～P3の3基が柱穴と考えられるものの、全体的に住居中央北寄りに偏りすぎており、違和感がある。P1～P3ライン上にはSB243-P10があることから6本柱の建物か、あるいはP1、P2、SB243-P10を柱穴とすべきかもしれない。なお、壁溝は北西隅のみで検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器35点、石器類2点、小穴から土器3点が出土した。土器はいずれも小破片である。

出土遺物 1074はVI期～VII期の甕E類底部で、中央が大きく窪む。1075は砥石で、断面三角形の細長い大型石材の一面を、砥面として使用している。

時期 出土遺物(1074)の時期とVII期のSB243、SB245に切られ、VI期～VII期のSB246を切ることから、VII期と考えられる。

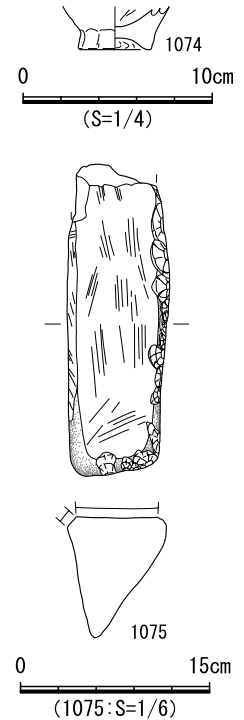


図 362 SB244 遺物実測図

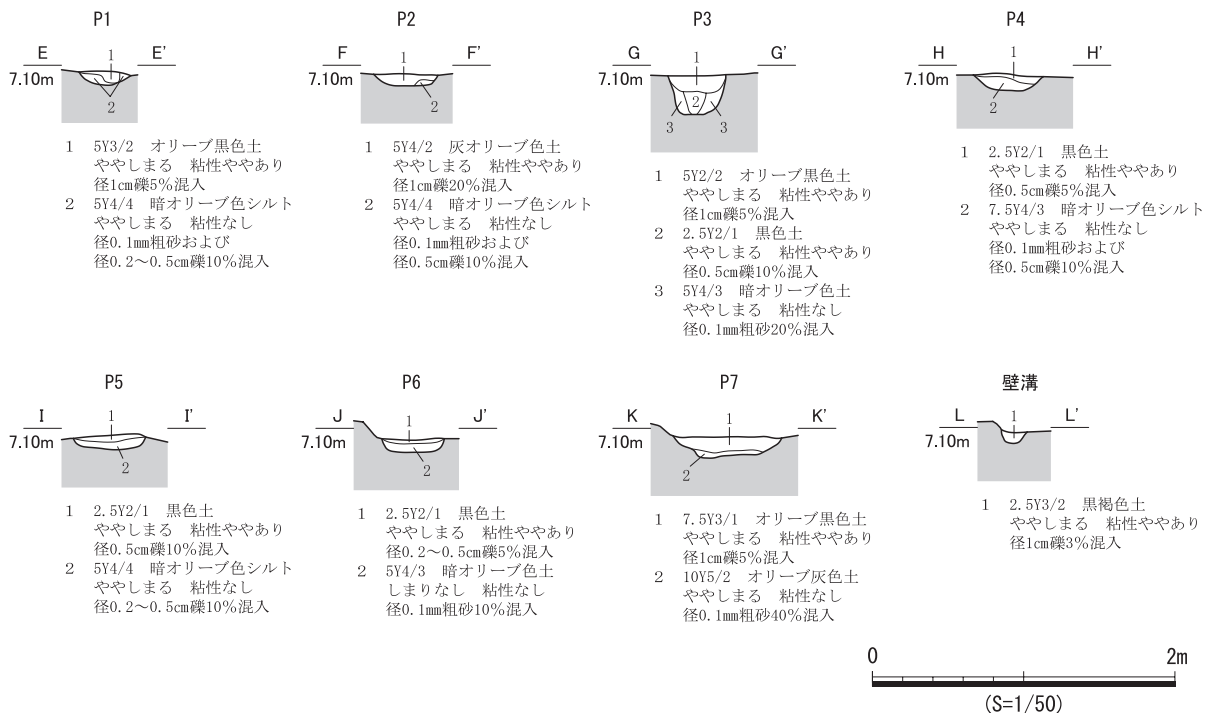


図 363 SB244 遺構図 (2)

SB245 (遺構：図365・366、遺物：図364)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南辺の大半を攪乱により失われ、北側でSB243に切られ、SB244とSB246、SB247を切る。

形状 南北長約5.6m、東西長約5.4mの方形を呈し、残存している隅部は丸みを帯びている。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層である。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて16基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層で、掘形は浅いが、P14のみ底面北側が一段窪む。柱穴の想定は難しいが、平面的な位置関係からP2とP3は柱穴の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器41点、小穴から土器2点が出土した。土器の多くはⅦ期に属し、出土数は少ないが、縄文土器の破片も出土した。

出土遺物 1076は縄文時代晩期末の変容壺。口縁部が外反し、断面三角形の素文突帯が貼付される。1077はⅠ期深鉢。横走る条痕が認められる。

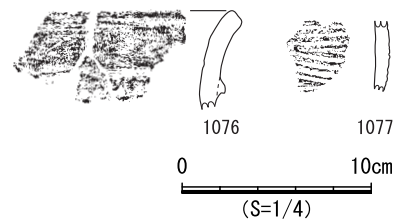


図364 SB245 遺物実測図

時期 Ⅶ期の出土遺物が多いこととⅦ期のSB243に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

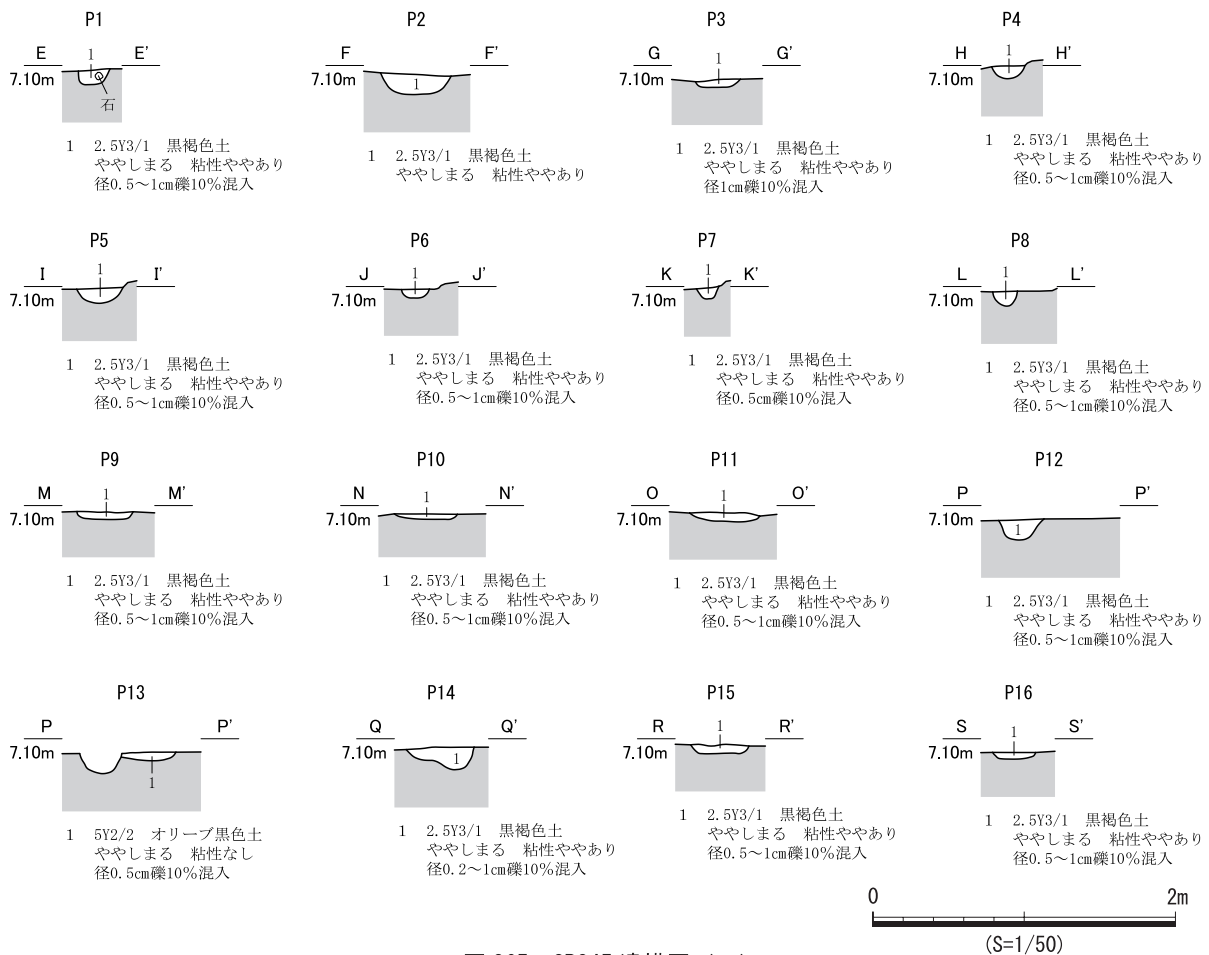


図365 SB245 遺構図 (1)



図 366 SB245 遺構図 (2)

SB246 (遺構：図367)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置し、東側をSB243～SB245に切られ、西側でSB247を切る。

形状 遺構の重複が著しく、全形は不明である。北辺と西辺は直線的であり、隅部は丸みを帯びている。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層である。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて4基の小穴を検出した。いずれも埋土は単層で、底面は平坦である。竪穴住居跡の全形が不明であるため柱穴の想定は困難だが、仮にP1とP4を柱穴とするならば、SB244床面で検出したSP0652と、SB243-P5が対応する位置にある。

遺物出土状況 埋土中から土器27点が出土した。土器の多くはVI期～VII期であるが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB243～SB245に切られ、VI期～VII期のSB247を切ることから、VI期～VII期と考えられる。

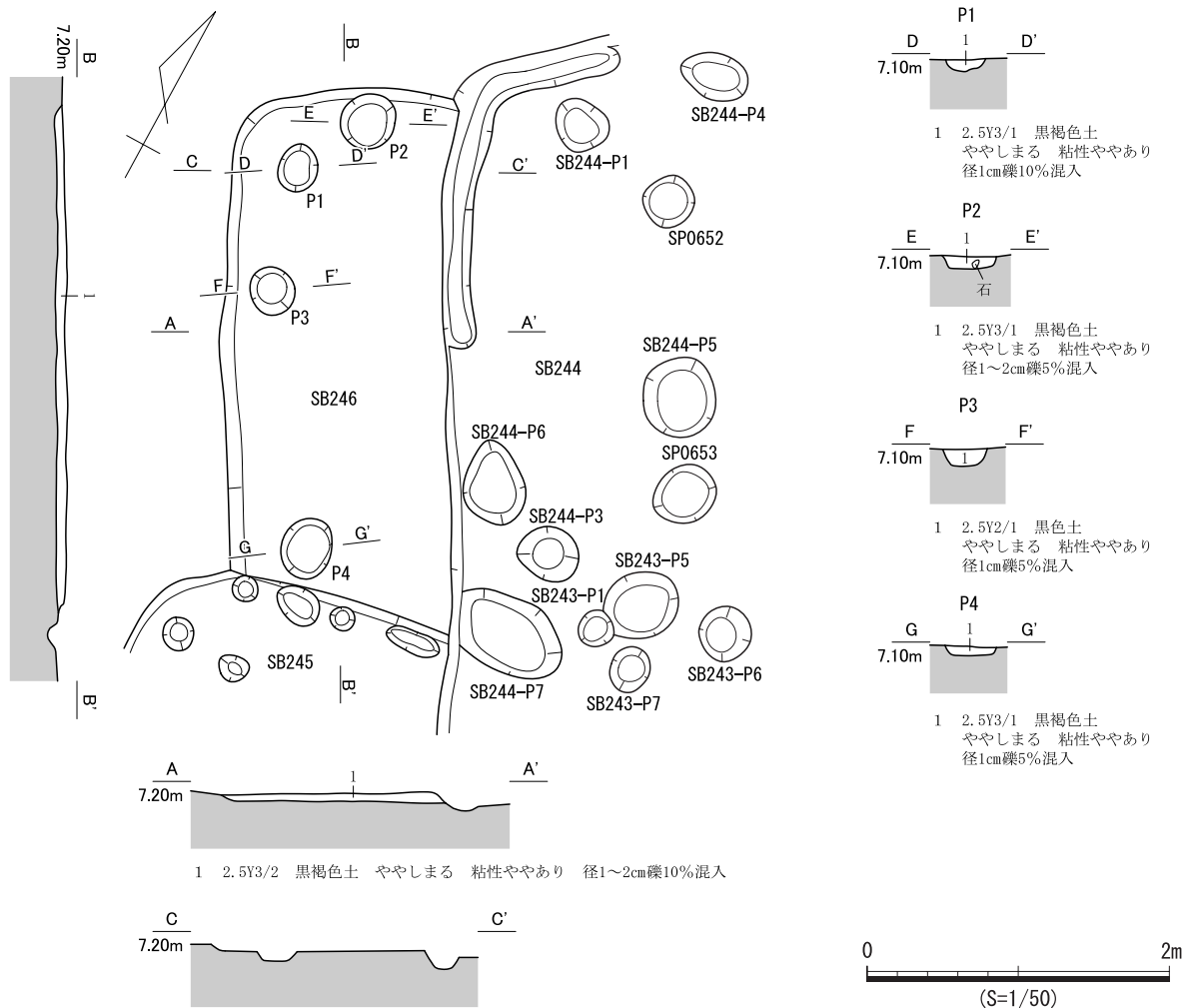


図 367 SB246 遺構図

SB247 (遺構：図368)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側でSB248を切り、東側でSB245とSB246に切られる。

形状 遺構の重複が著しく、全形は不明である。西辺は中央部分が東側に若干湾曲しており、南北長は約3.8mを測る。隅部は丸みを帯びており、壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層であり、礫の混入が目立つ。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて4基の小穴を検出した。埋土は単層であるものが多く、その掘形は浅い。SB244～SB246の床面で検出した小穴も含めて柱穴配置を検討したが、その推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から遺物は出土しなかった。

時期 遺構の重複関係から、VI期～VII期と考えられる。

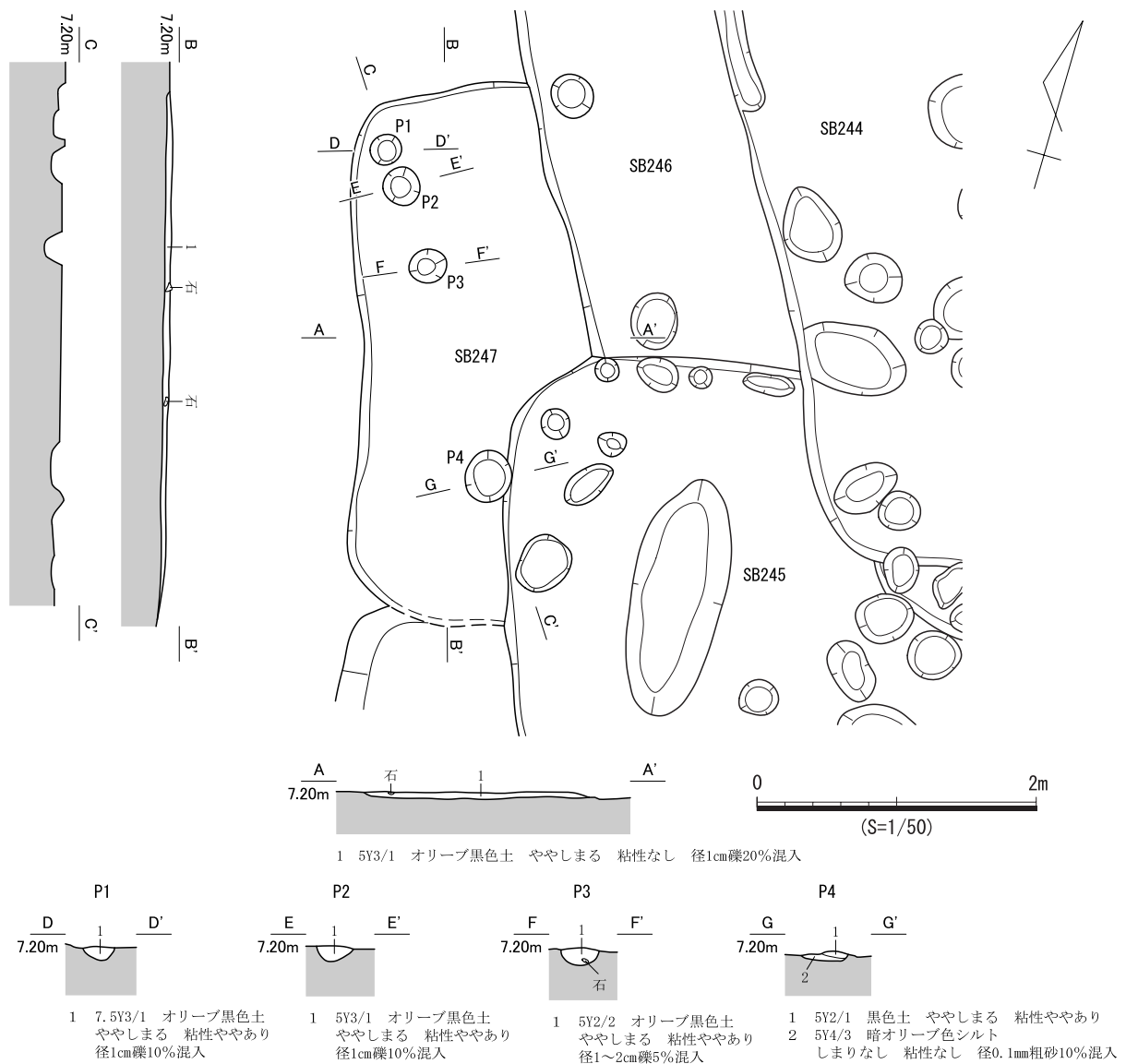


図368 SB247 遺構図

SB248 (遺構：図369)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域位置し、西側でSB249を切り、南東側でSB244、SB246、SB247に切られる。

形状 大部分を他の遺構に切られており、全形は不明である。南辺に対して西辺はやや開き気味であり、隅部は丸みを帯びている。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層である。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて2基の小穴を検出した。埋土はいずれも単層であるが、P1は掘形が深く、壁面も垂直に近いことから、柱穴の可能性もある。なお、その他の柱穴配置についてSB244とSB246の床面で検出した小穴も含めて検討したが、その推定は困難であった。

遺物出土状況 小穴から土器2点が出土し、そのうちP1からVI期～VII期の土器片が出土した。しかし、小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB244、SB246、SB247に切られ、同時期のSB249を切ることから、VI期～VII期と考えられる。

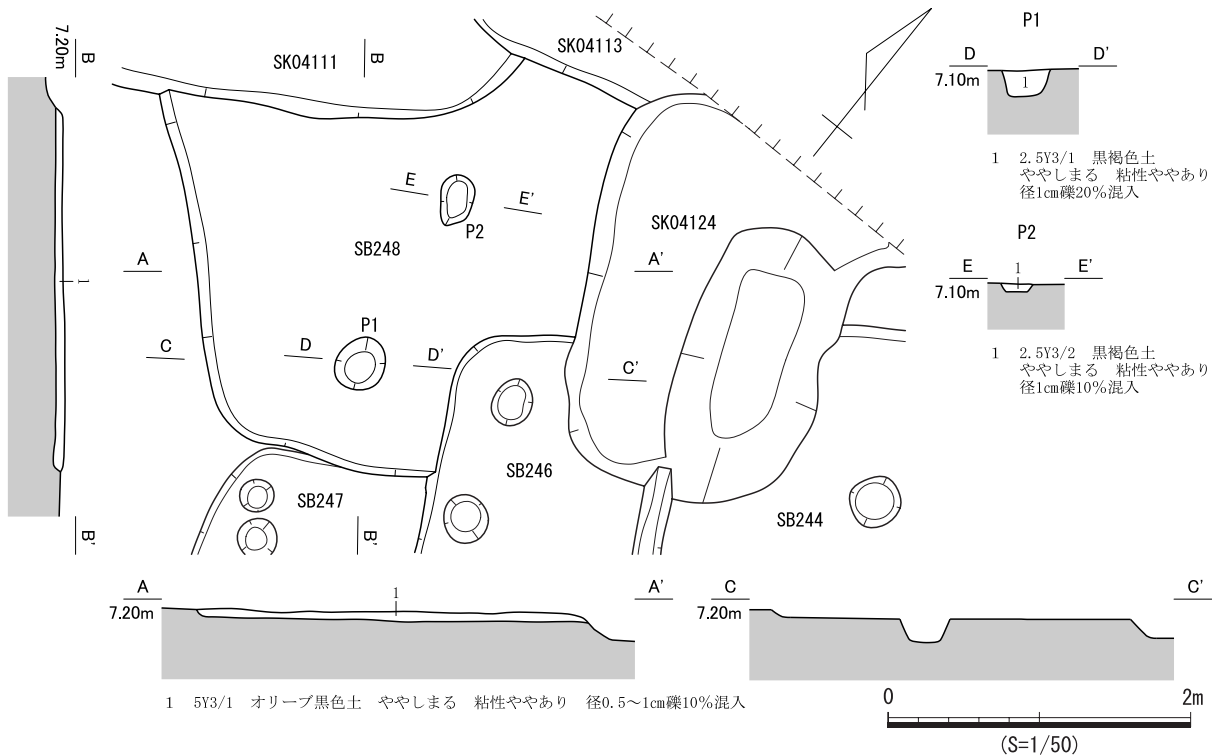


図369 SB248 遺構図

SB249 (遺構：図370)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、重複する竪穴住居跡の中では最も初期に構築されている。

形状 大部分を他の遺構に切られており、全形は不明である。西辺はやや外側に膨らんでおり、南西隅部は丸みを帯びている。壁面の傾斜は緩やかで、深さは0.1m未満と浅い。

埋土 単層であり、礫の混入が目立つ。遺構の重複が著しく、その時期が近似するため、人為堆積の可能性が高い。

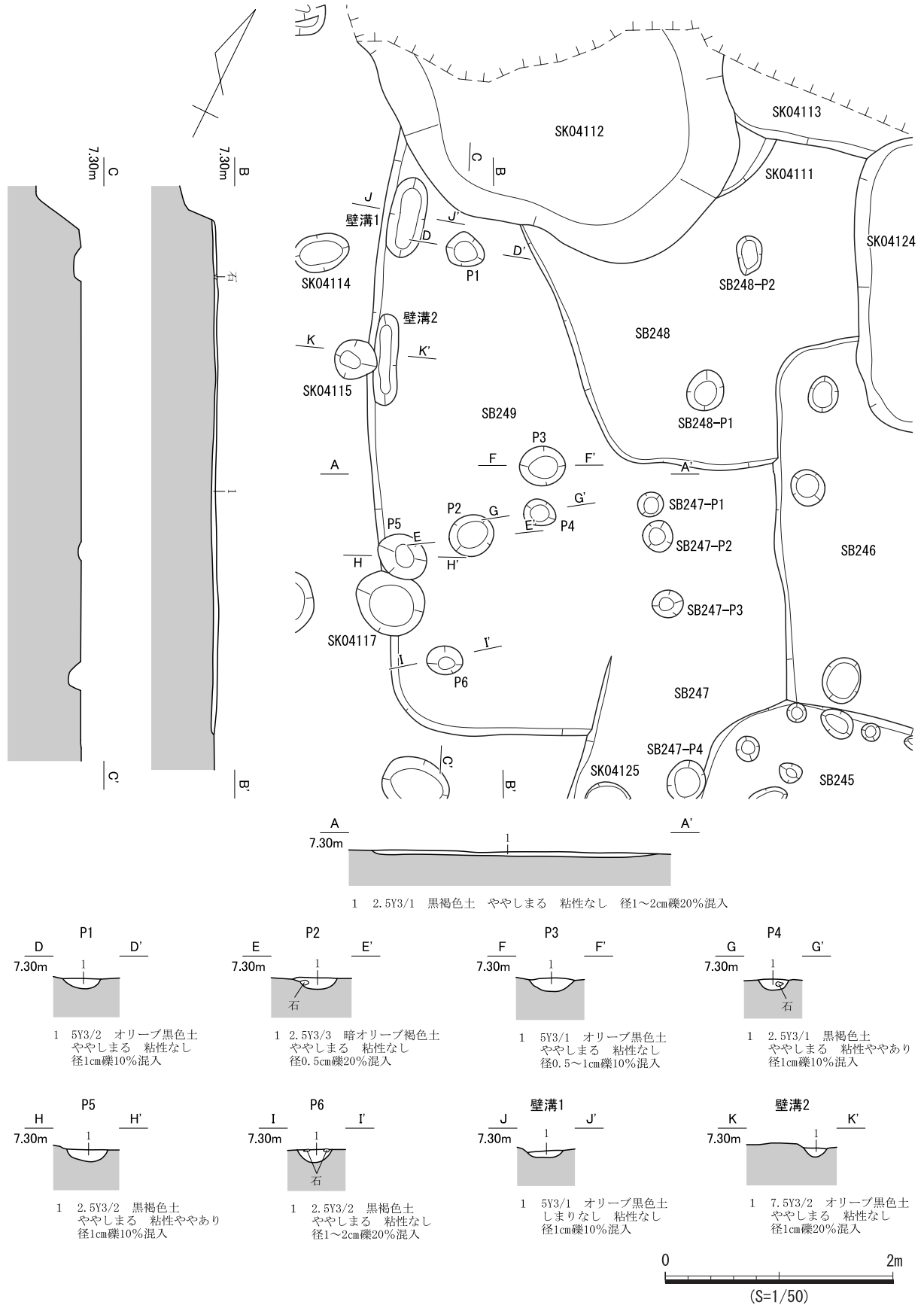


図 370 SB249 遺構図

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて6基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土はいずれも単層で、底面は丸みを帯びている。竪穴住居跡の全形が不明であるため柱穴の想定は困難だが、平面的な位置関係から、P1とP2、SB248-P2が柱穴に相当する位置にある。壁溝は西壁沿いで痕跡的に確認できた。

遺物出土状況 埋土中から土器22点、小穴から土器11点が出土した。土器の多くはVI期～VII期であるが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とVI期～VII期のSB247、SB248に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

SB250 (遺構：図371)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央を攪乱が縦走し、西辺は攪乱により失われ、南側でSB251を切る。

形状 東部と西部の一部が攪乱により削平されているが、南北長約5.3mの隅丸方形を呈する。壁面の傾斜は緩やかであるが、北辺の壁溝部分はほぼ垂直である。

埋土 黒色土が単層で堆積する。やや厚みのある堆積土の分層ができなかったことから、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて3基の小穴と壁溝を検出した。小穴のうち、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。P1の底面は西側が若干窪む。竪穴住居跡の全体形が不明であるため柱穴の想定は困難であるが、P1-P2間は約3.0mであり、その距離で住居東側を検討すると、北東側ではSK04056が対応し、南東側では対応位置は攪乱下となる。なお、壁溝は幅約0.2mで、北壁沿いのみで確認した。

遺物出土状況 埋土中から土器57点、小穴から土器1点が出土した。土器の多くはVII期であるが、IV期の甕Dと高坏、縄文土器の破片も数点出土した。なお、土器片はいずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

SB251 (遺構：図372・373)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側をSB250に、南側をSB253に切られ、西側でSB252を切り、北東側は攪乱により失われている。

形状 遺構の重複等により東側が不明であるものの、南北長約6.6mを測り、柱穴の位置関係から、南北に長い長方形を呈すると考えられる。壁面の傾斜は、確認できた範囲では緩やかであり、深さは約0.1mである。

埋土 3層に分層した。水平堆積であり、その成因は不明である。なお、住居南西の埋土中から褐色を呈する長さ約0.2mの粘土塊が出土した。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて8基の小穴を検出した。小穴のうちP3とP4は掘形が深く、底面は平坦であるため柱穴と考えられる。P1とP2はやや浅いが、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴の可能性はある。また、P6は1層が2層を切るような堆積であり、P6はP1-P2、P7はP1-P3、P8はP2-P4の柱筋上に位置する。そのため、P6～P8は上屋構造に関連する遺構か、あるいは

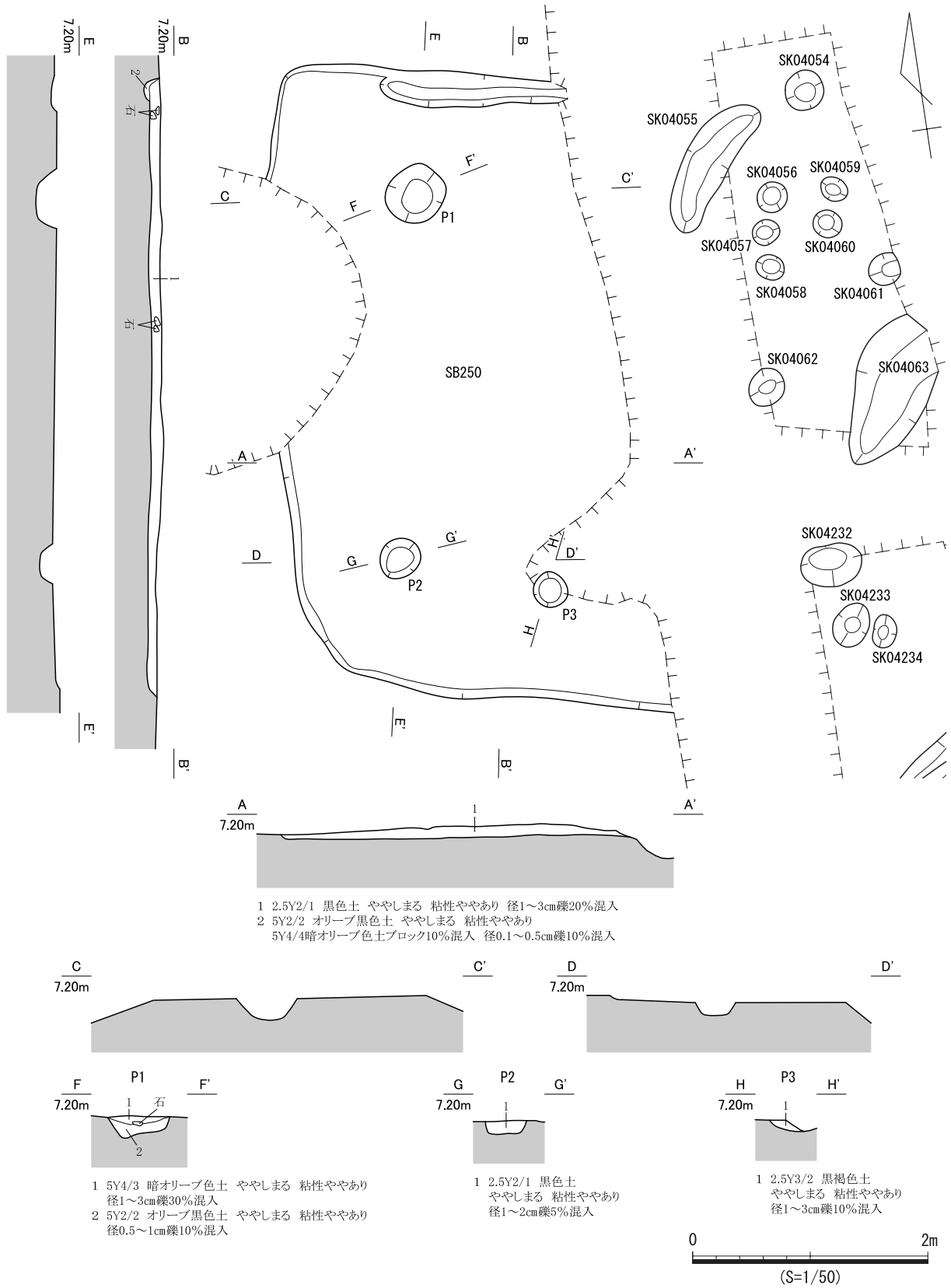


図 371 SB250 遺構図

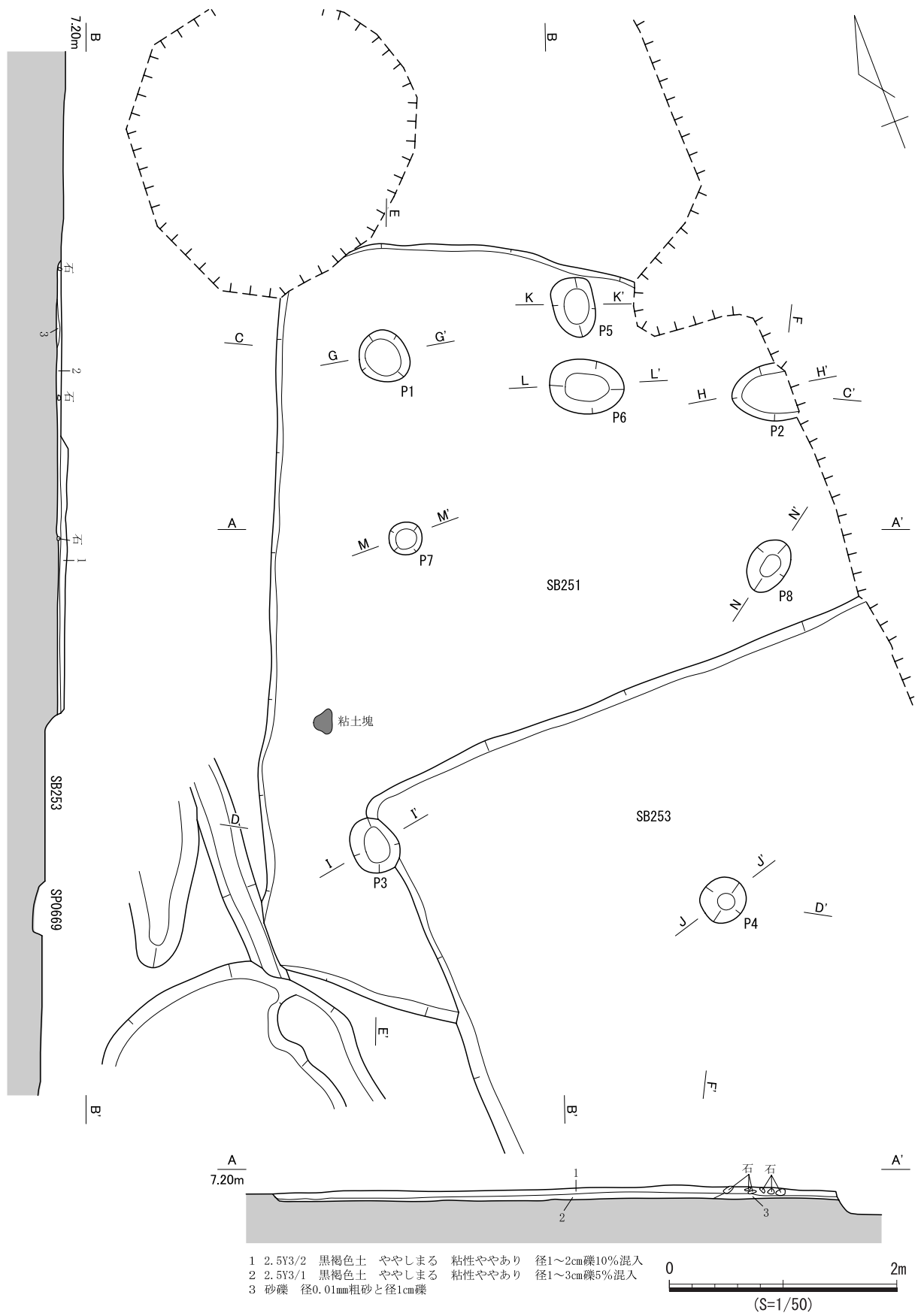


図 372 SB251 遺構図 (1)

本住居が建て替えを行っている可能性が指摘できる。

遺物出土状況 埋土中から土器 1,026 点、小穴から土器 190 点が出土した。土器の多くはVI期～VII期であり、特にVII期のものが多いと考えられる。なお、土器片はいずれも小片であり、図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB250に切られ、VI期～VII期のSB252を切ることから、VII期と考えられる。

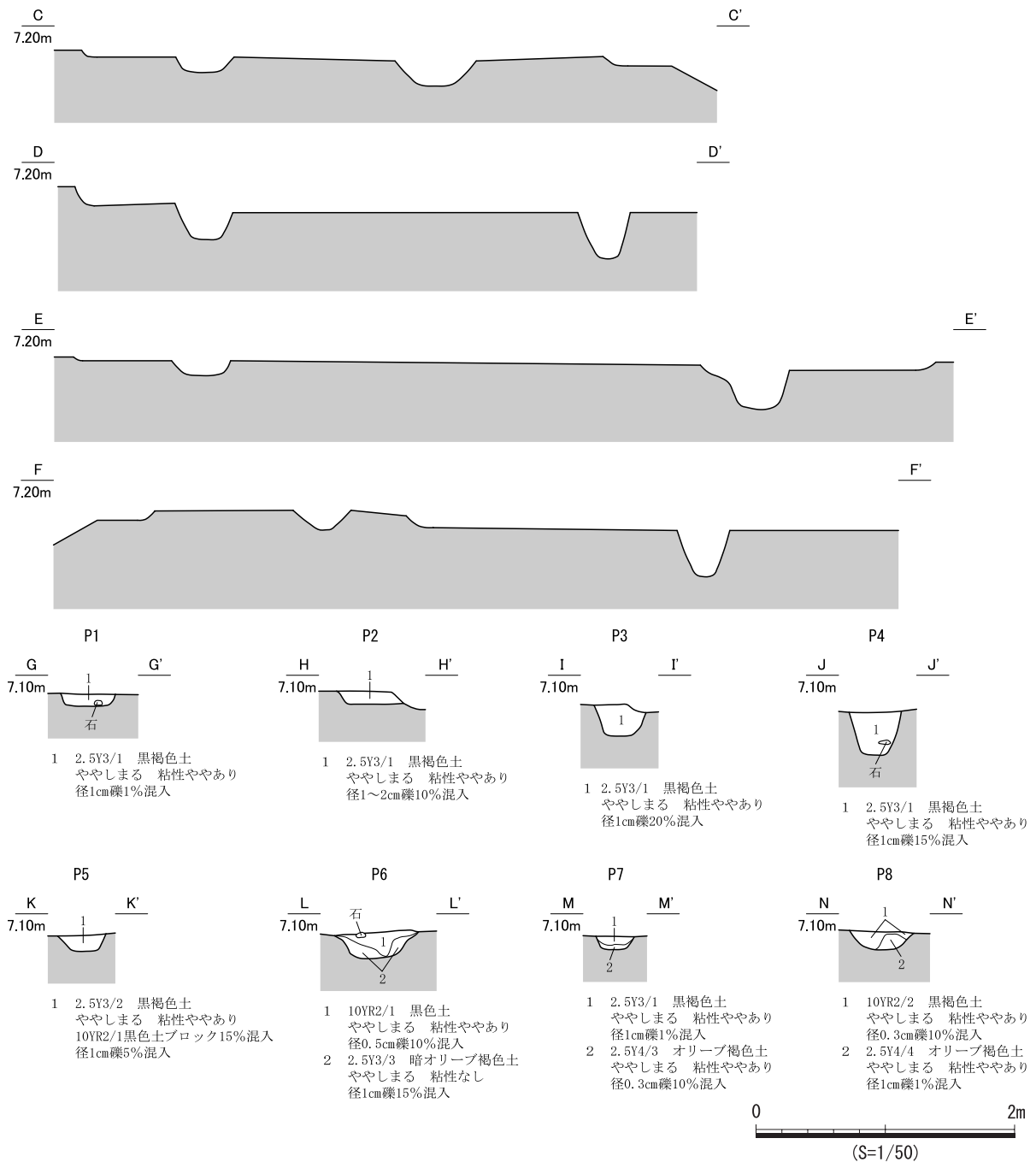


図 373 SB251 遺構図 (2)

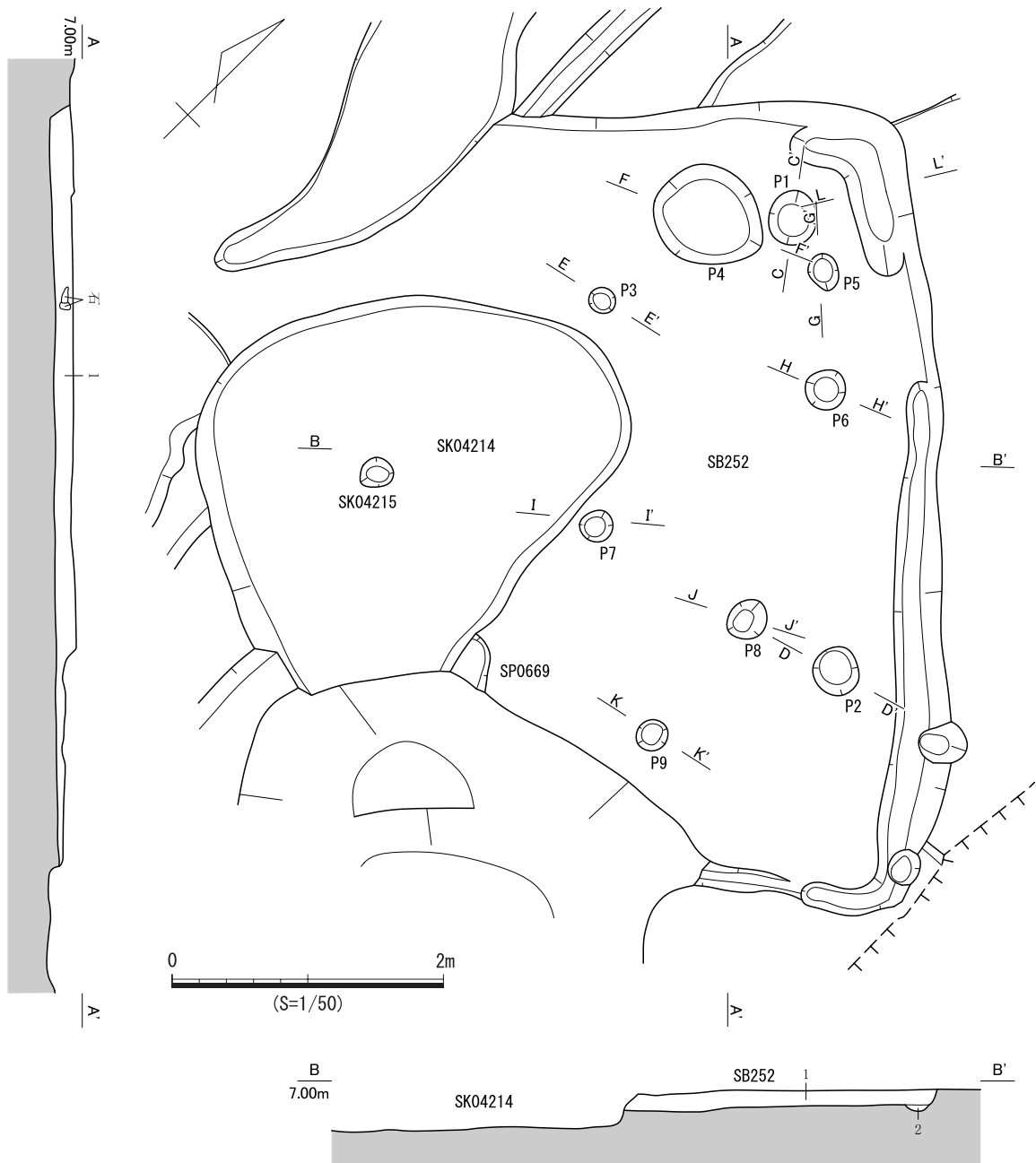
SB252 (遺構：図374・376、遺物：図375)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南東側をSB251に、南西側をSK04214に切られ、壁溝などはSB251床面で検出した。

形状 南側を複数の遺構によって切られているため全形は不明であるが、北西-南東軸長約5.8mを測る方を呈する。壁面傾斜は比較的急であり、深さは約0.1m~0.2mを測る。

埋土 単層であり、礫や炭化物の混入が目立つ。遺構の重複が多く、厚みのある堆積土の分層ができなかったことから、人為堆積の可能性がある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて9基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~2cm礫20%混入 径0.2~0.5cm炭化物10%混入
- 2 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm礫3%混入

図374 SB252 遺構図(1)

単層であり、深さは約0.1m～0.2mであるが、柱痕跡は確認できず、柱穴の想定は難しい。なお、壁溝は北東壁面沿いで検出し、幅約0.4mと幅広で、中央北西寄りわずかに途切れる。

遺物出土状況 埋土中から土器602点、小穴から土器23点が出土した。土器はV期～VII期のもので、V期のものが多いものの、P2、P6、壁溝からVI期～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 1078はV期高坏B2b類。口縁部が強く外反し、端部が平坦である。

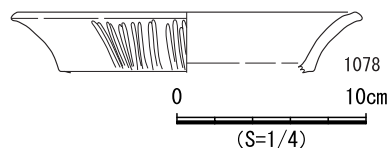


図 375 SB252 遺物実測図

時期 小穴や壁溝から出土した遺物の時期と、VII期のSB251に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

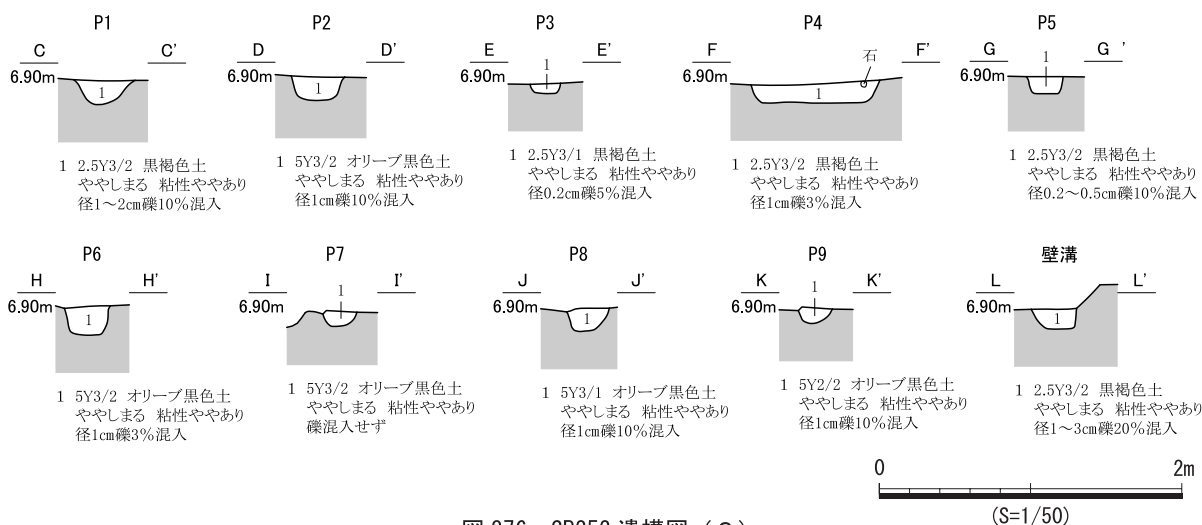


図 376 SB252 遺構図 (2)

SB253 (遺構: 図 377、遺物: 図 378)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撓乱により失われ、北側でSB251を、東側でSB254をそれぞれ切る。平面形は不明瞭であり、検出面で土器がまとまって出土した。

形状 南北長約4.8m、東西残存長約4.7mで、東西にやや長い隅丸長方形を呈すると考えられる。壁面傾斜は比較的急で、掘形底面までは0.14mを測る。

埋土 2層に分層し、上層は住居埋土、下層は掘形埋土である。埋土中には礫が混入し、土器も多く含まれるが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床(整地土)がある。柱穴と壁溝を検出した面を床面としたが、硬化面は確認できず、礫が多く表出する。床面にて5基の小穴と壁溝を検出した。小穴は単層もしくは2層に分層でき、P4以外は底面が平坦で、壁面傾斜は比較的急である。平面的な位置関係からP1～P4の4基が柱穴であり、柱穴間は南北間より東西間の方が広い。壁溝は確認した床面の範囲を全周している。幅0.15m～0.22m、深さ0.05mで、壁面の傾斜は緩やかである。

掘形 埋土は単層である。掘形底面にて焼土及び炭化物の広がりを確認したが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器4,354点、小穴から土器98点、壁溝から土器91点が出土した。遺物の多くはVI期～VIII期のものである。

出土遺物 1079はVI期～VII期の壺胴部。2本1組による弧状の線刻が認められる。1080はIV期壺C類。

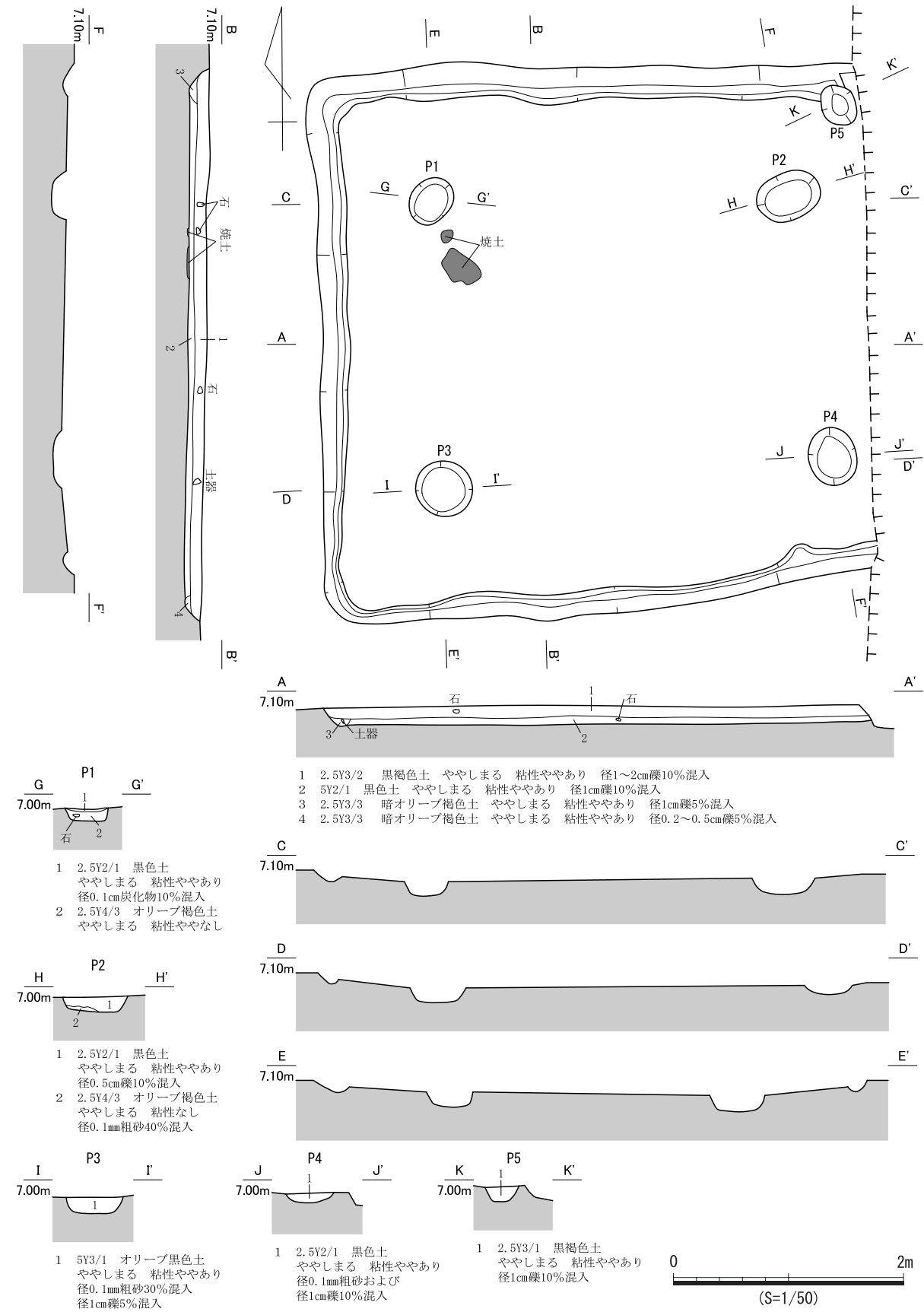


図 377 SB253 遺構図

口縁部が強く外反し、端部に廉状文、内面に扇形文が認められる。1081はⅦ期壺A1b類。口縁部が外反し、端部に羽状文、内面には刺突文が認められる。頸部には突帯を貼付し、外面は突帯以下に赤彩を施す。1082はⅥ期甕A3類。口縁端部がわずかに直立する。1083はⅧ期甕D3類。口縁部が外上方に屈曲し、肩部が強く張る。1084、1085はⅧ期甕D3類脚部。1084は裾部に打ち欠きが認められる。1086はⅦ期高坏C4d類。幅広の多条沈線間に山形文を施文する。1087はⅦ期高坏D類脚部。1088は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部が肥厚する。その下に、右下がりの押し引きが認められる貼付突帯が位置する。突帯以下には貝による条痕が認められる。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB254を切ることから、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

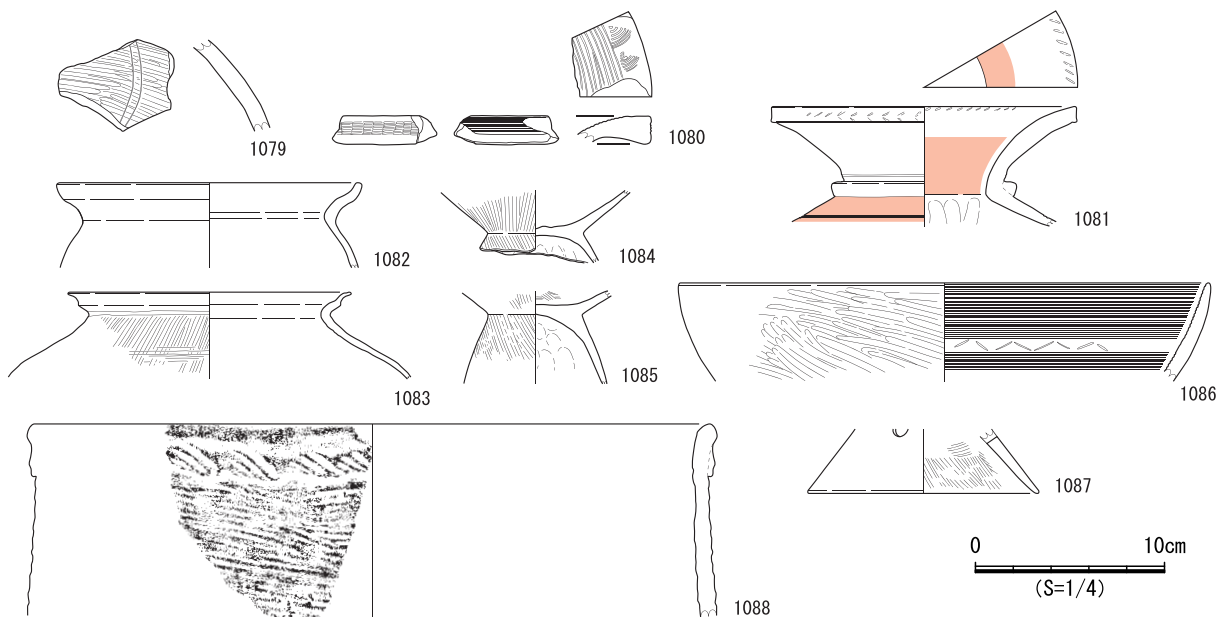


図 378 SB253 遺物実測図

SB254 (遺構：図 379～381、遺物：図 382)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央は南北に縦走する攪乱により失われ、西側でSB253に切られ、壁溝や小穴の一部はSB253掘形平面で検出した。

形状 南北長約4.2m、東西長約6.9mで、東西に長い隅丸長方形を呈する。壁面傾斜は比較的急で、掘形底面までは0.12mを測る。

埋土 3層に分層し、1層が住居埋土、2・3層が掘形埋土である。1層には礫や炭化物の混入が認められ、本遺構の時期が重複するSB253の時期と近似することから、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面では礫が表出し、小穴等の平面形は不明瞭であった。床面では小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土は単層のものが多く、P2とP4の掘形は深い。また、平面的な位置関係からP1～P4を柱穴と考えた。壁溝は床面上にて北西隅部を、掘形底面にて南東隅部を、それぞれ検出した。

掘形 埋土は2層に分層でき、ほぼ水平堆積である。底面は中央東寄りが若干凹み、小穴と壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器549点、小穴から土器10点が出土した。土器はⅦ期の破片が多い。

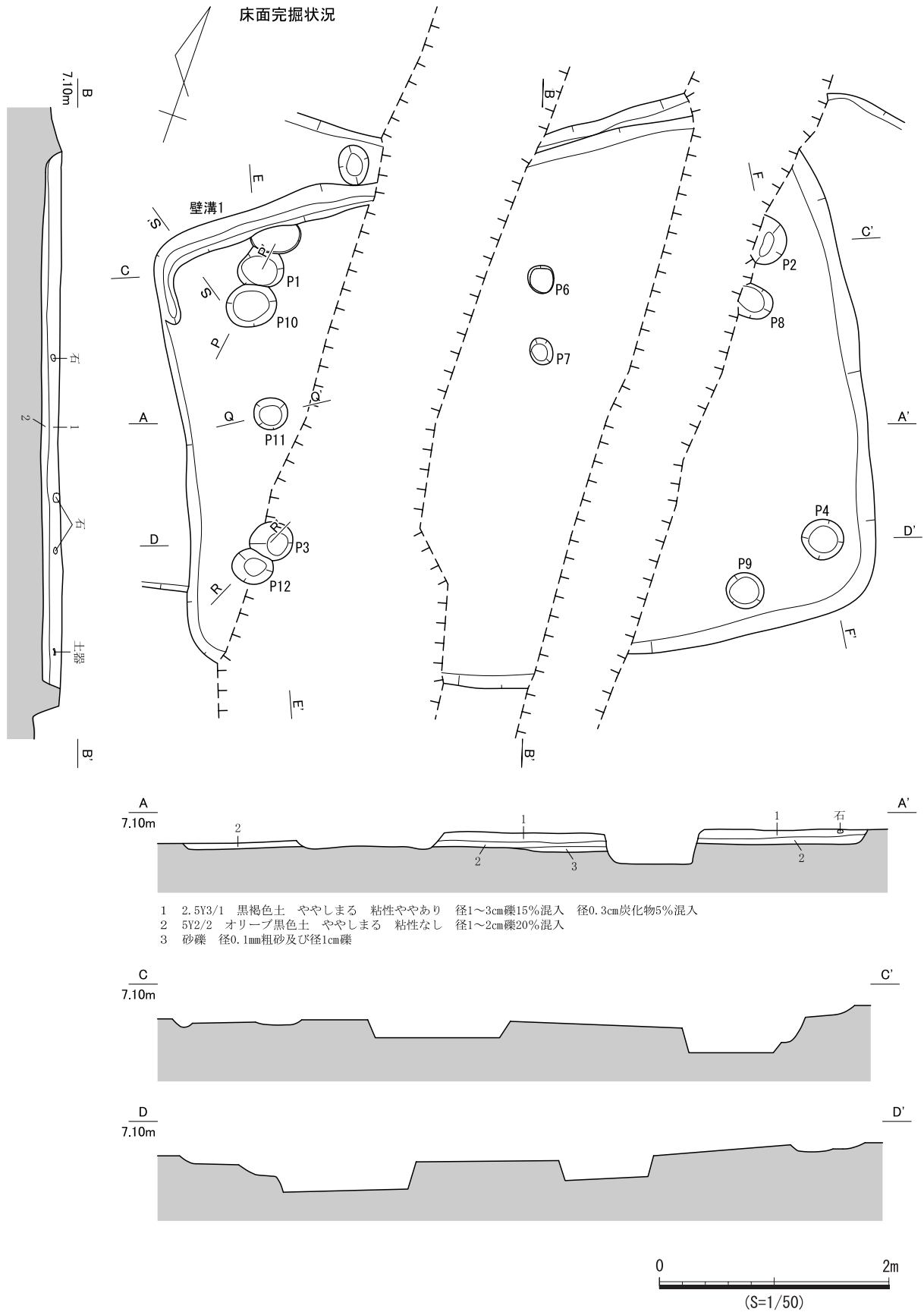


図 379 SB254 遺構図 (1)

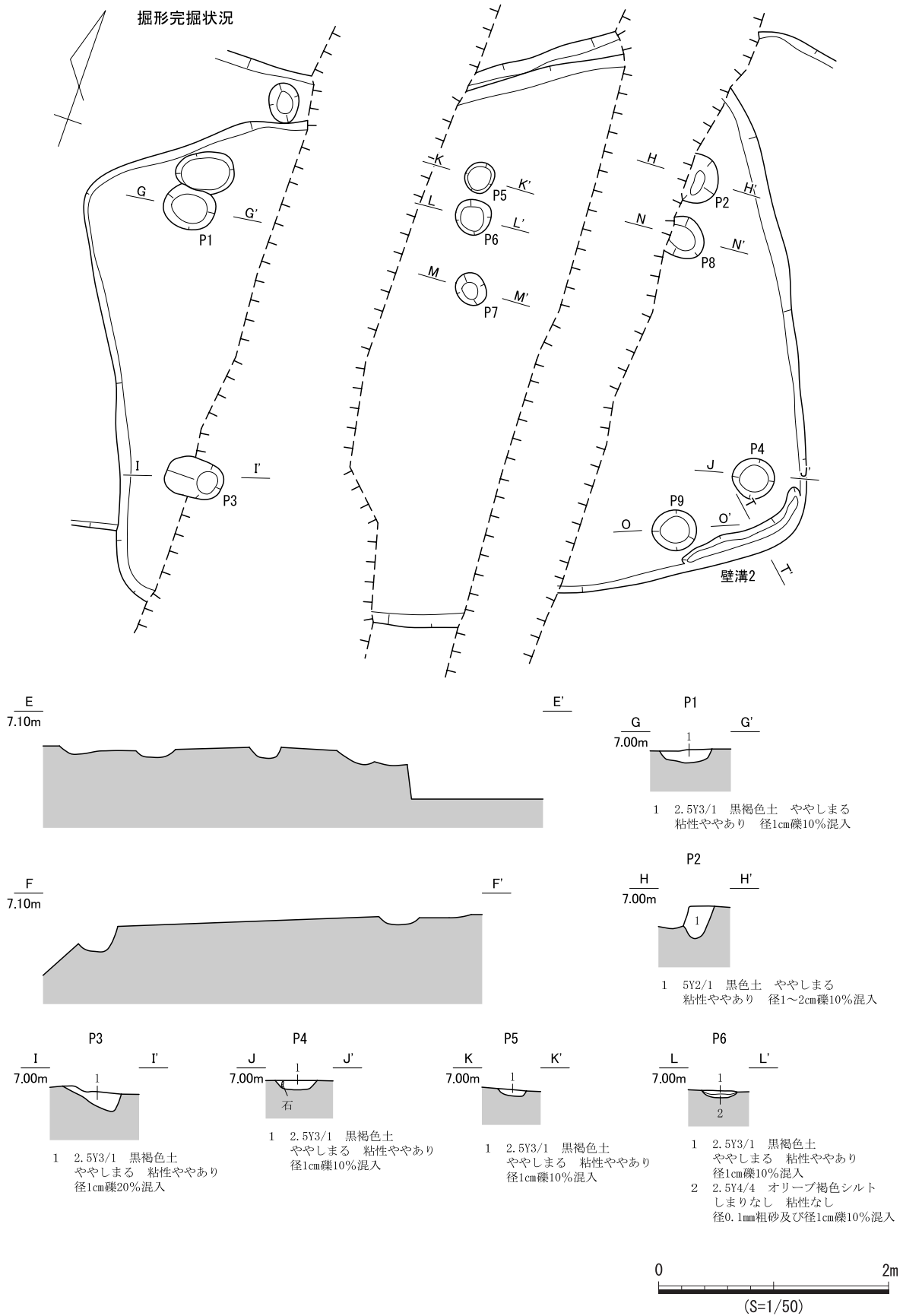


図 380 SB254 遺構図 (2)

出土遺物 1089はV期壺A1b類。端部に斜格子文、内面に羽状文が認められる。1090はVII期高坏D4類。多条沈線間の狭い間に、振幅の小さい山形文を施文する。

時期 出土遺物の時期と、VII期～VIII期のSB253に切られることから、VII期と考えられる。

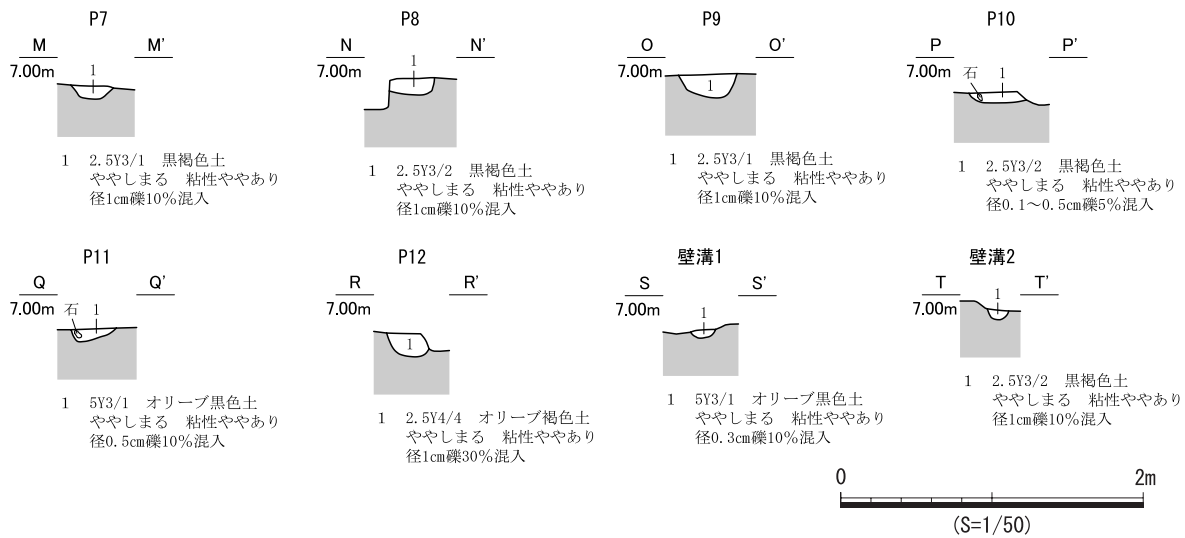


図 381 SB254 遺構図 (3)

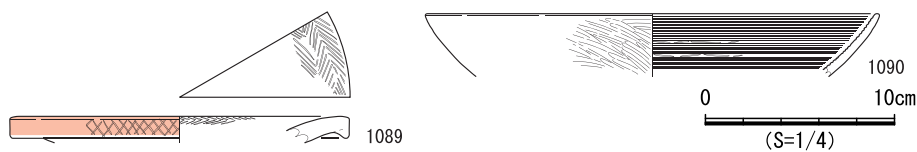


図 382 SB254 遺物実測図

SB255 (遺構：図 384、遺物：図 383)

検出状況 西部東側中央に位置する。SK4913底面で検出し、東側をSK04907に切られ、西側を南北に縦走する攪乱により失う。なお、本遺構と攪乱西側で検出したSB110の北辺ラインが直線上に位置し、両者は同一住居の可能性のあるものの、長軸長が8.0m以上となることから別遺構と判断した。

形状 東部をSK04907、南側・西側を攪乱に切られて全形は不明である。北辺と東辺は直線的でほぼ直角を呈することから、全体形は方形と考えられる。

埋土 単層であり、礫がわずかに混入するが、その成因は不明である。

床面 南西側に緩やかに傾斜する。貼床は確認できず、床面にて4基の小穴を検出した。小穴のうちP2とP4は規模が大きく、P4は柱痕跡の可能性のある土層が観察で

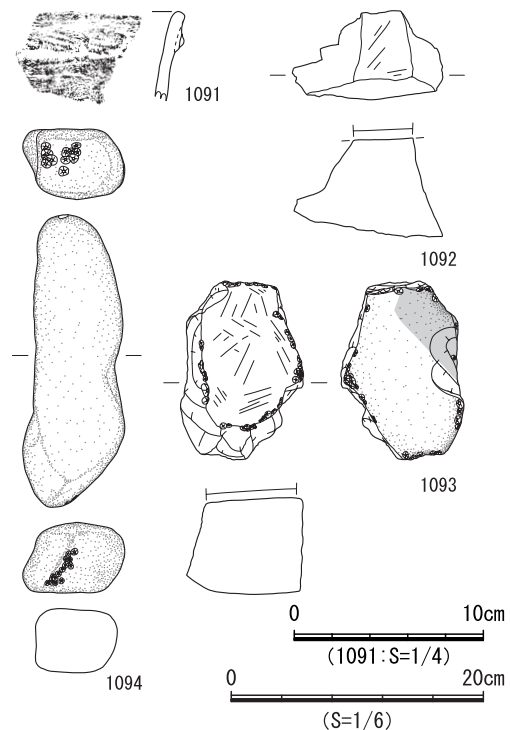


図 383 SB255 遺物実測図

きたことから、P2とP4を柱穴と考えた。また、P2とP4の間にて、焼土と炭化物の広がりをわずかに確認できた。

遺物出土状況 埋土中から土器410点、石器類2点、小穴から土器20点、石器類1点が出土した。土器の多くはVI期～VII期のもので、わずかに縄文土器が含まれている。また、P4から石器(1094)が出土した。

出土遺物 1091は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼付する。突帯上には〇字状の押圧が認められる。1092、1093は砥石で、いずれも裏面に煤が付着しており、砥面は一面のみ観察できる。1094は長楕円礫を素材とした叩石であり、上下端部に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

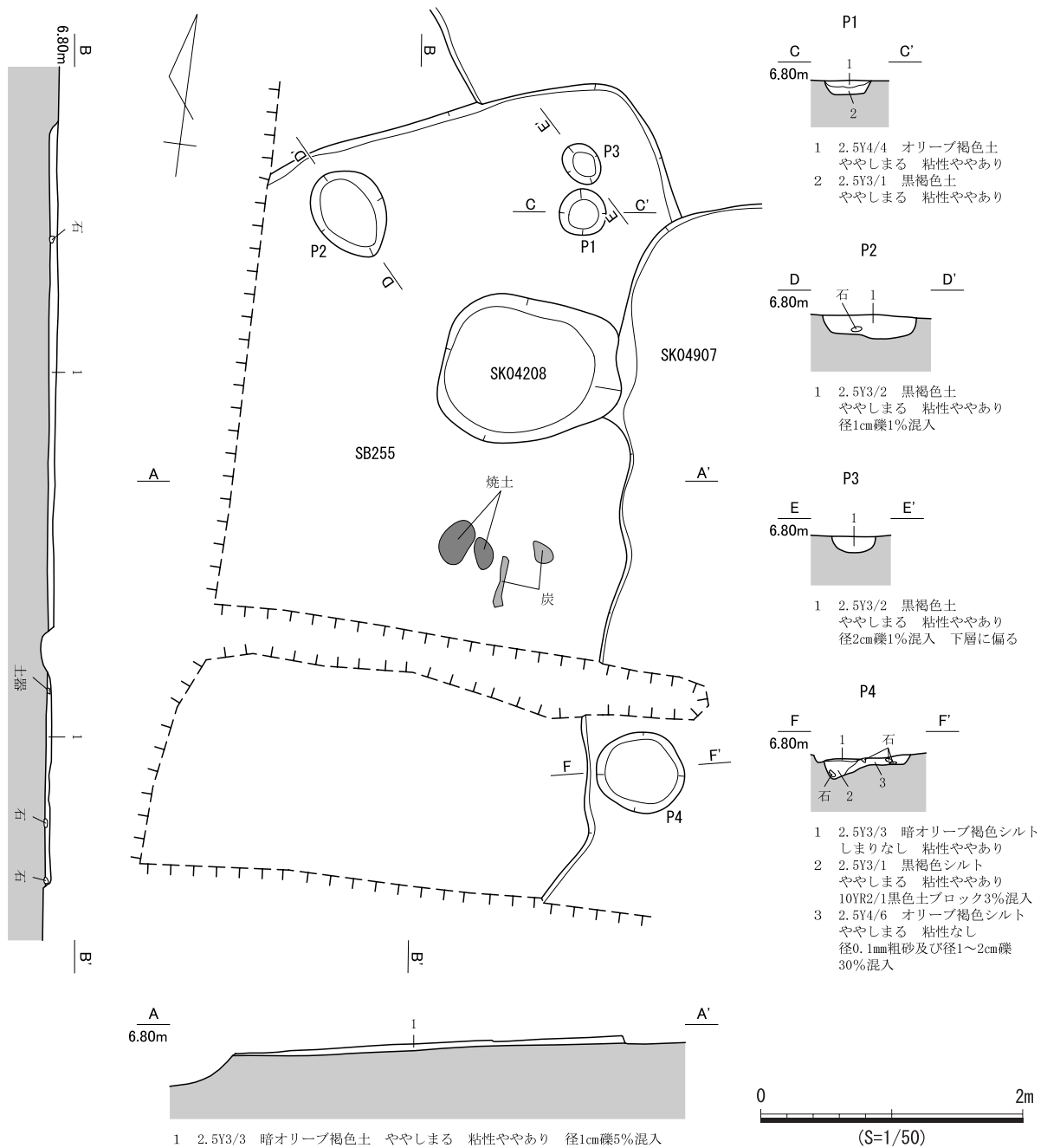


図 384 SB255 遺構図

SB256 (遺構：図 386、遺物：図 385)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は南北に縦走する攪乱により失われる。北側をSK4108、SK04123、西側をSK04264に切られ、北東側でSB257を切り、北壁溝などはSK04123完掘後に検出した。

形状 遺構の重複が著しいが、南北長約4.7mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、礫の混入が目立つ。遺構の重複が多く、厚みのある堆積土の分層ができなかったことから、人為堆積の可能性はある。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて9基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土は単層から3層に分層できたが、柱痕跡は確認できず、柱穴の想定は難しい。壁溝は南辺沿いと北東隅から北辺沿いにかけて検出し、幅約0.2m～0.3mで、底面は丸みを帯びている。

遺物出土状況 埋土中から土器1,084点、小穴から土器89点、壁溝から土器25点が出土した。土器の多くは小片である。

出土遺物 1095はIX期甕。頸部から口縁部までの器壁が厚い。1096はVII期壺B2a類。口縁部が外反し、端部がやや外傾する平坦面を形成する。

時期 出土遺物の時期とVI期以降のSB257を切ることから、VII期～IX期と考えられる。

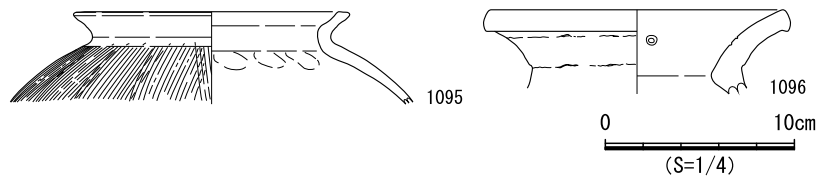


図 385 SB256 遺物実測図

SB257 (遺構：図 387)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北東側は攪乱により失われ、西側をSB256とSK04123に切られる。

形状 北西－南東長約4.4m、北東－南西長約4.2mの隅丸方形を呈する。深さは0.1m未満と浅く、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 単層であり、礫の混入が目立つが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床は確認できず、床面にて10基の小穴と壁溝を検出した。小穴の埋土はいずれも単層で柱痕跡は確認できず、深さは約0.1mのものが多い。平面的な位置関係からP1～P3の3基が柱穴の可能性はある。壁溝は北隅から北西辺沿いで検出でき、幅0.25mで底面は比較的平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器110点、小穴から土器2点が出土した。土器の多くはVI期以降の小片であり、図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とVII期～IX期以降のSB256に切られることから、VI期～VIII期と考えられる。

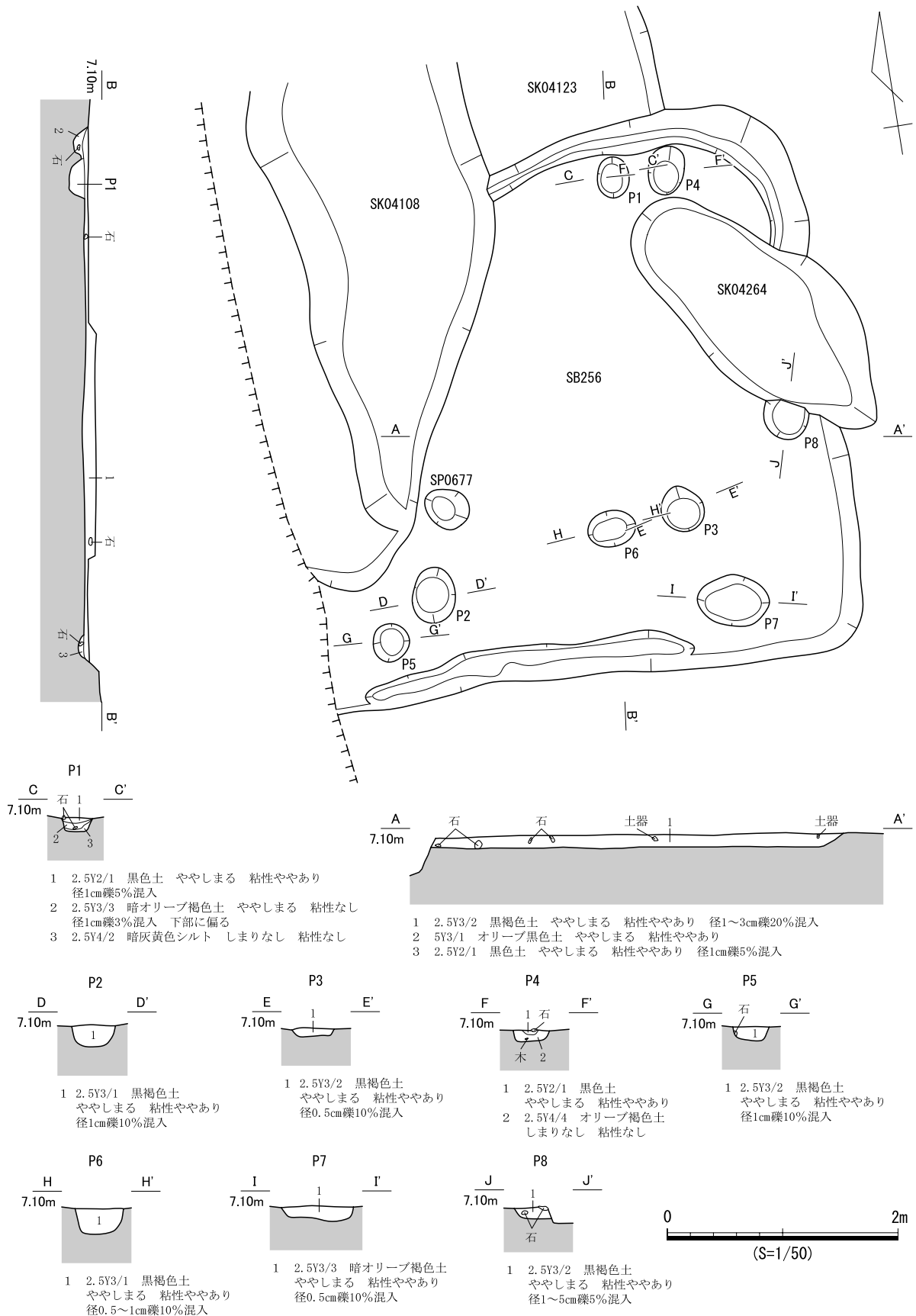


図 386 SB256 遺構図

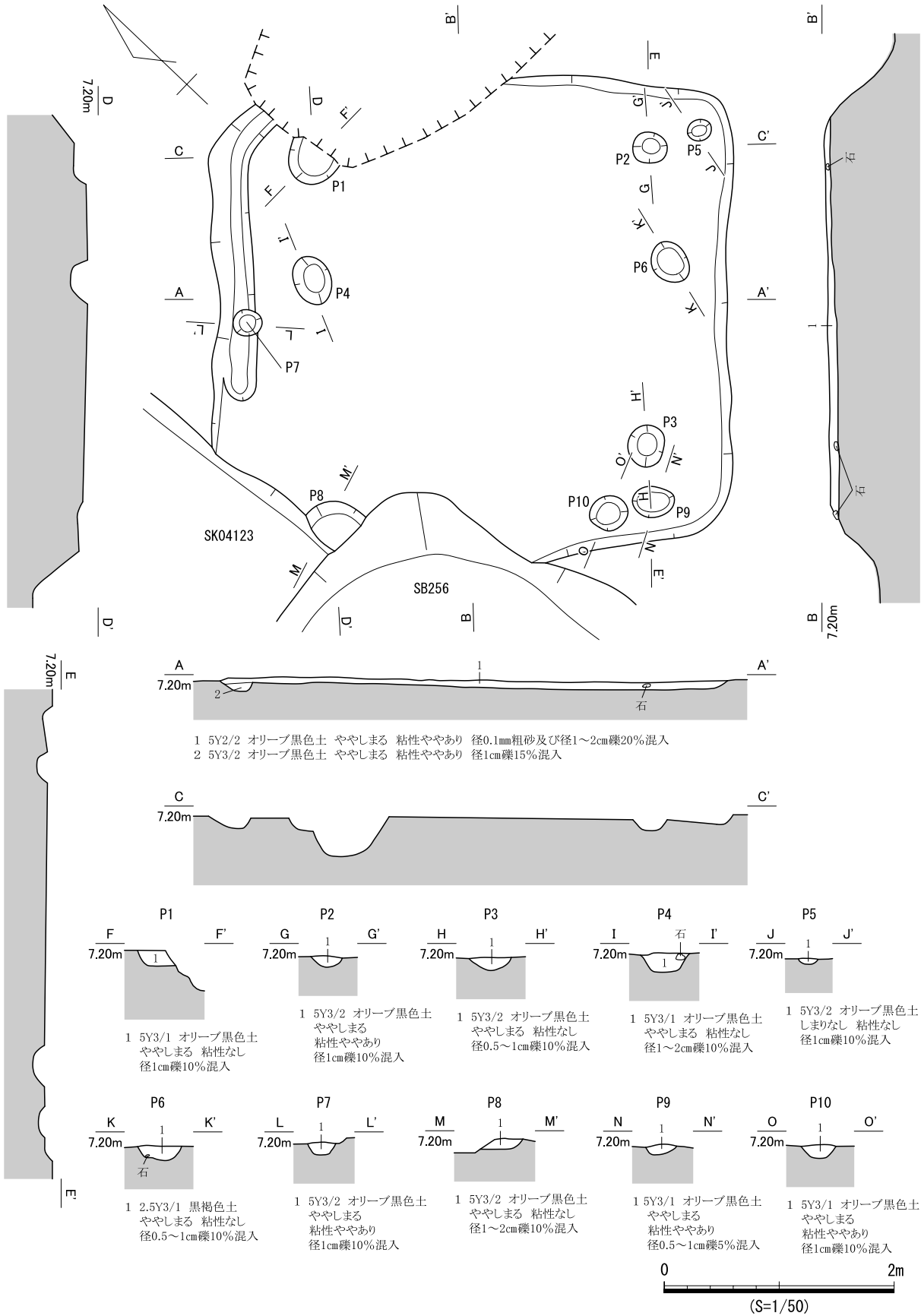


図 387 SB257 遺構図

報 告 書 抄 録

ふりがな	あらおみなみいせきBちく2							
書名	荒尾南遺跡B地区II							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第131集							
編著者名	小野木学、藤田英博、河瀬実浩、宗宮隆司、吉田靖、山本厚美							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550							
発行年月日	2015年3月13日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
あらおみなみいせき 荒尾南遺跡	ぎふけん 岐阜県 おおがさし 大垣市 あらおちよう 荒尾町 ひのきちよう 桧町	21202	08568	35° 22’ 13”	136° 35’ 04”	20060519～20070123 20080507～20081212 20090427～20100129 20100426～20101220 20110506～20111028	19,288.6	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
荒尾南遺跡	集落跡 その他 の墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡 377軒 方形周溝墓 110基 掘立柱建物跡 16棟 溝状遺構 384条 土坑 3729基 など	縄文土器、弥生土器 ・土師器、須恵器、 灰釉陶器、中世陶器 類、石器・石製品、 金属製品など		弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を確認		
要 約	<p>荒尾南遺跡B地区は、主に縄文時代晩期から古墳時代前期の遺構を確認した遺跡である。縄文時代晩期から弥生時代前期には竪穴住居が営まれ、木棺墓群が形成された。また、主に自然流路から多数の遠賀川系土器が出土した。弥生時代中期には遺跡を南北に貫く幅約10mの大溝が掘削され、その周辺に100基以上の方形周溝墓群が形成された。しかし、当該期の集落跡を確認することができず、今後の検討課題である。弥生時代後期から古墳時代前期には、自然流路の東側に位置する微高地上に400軒以上の建物が造営された。また、主に自然流路や大溝から、東海地方最古級の倭鏡や他地域との交流を示すスタンプ文が施された土器などが出土し、美濃地方西部における当該期の中心的な集落の一つである可能性が高まった。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区Ⅱ
(第1分冊)

2015年3月13日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 株式会社もとすいんさつ